瀬戸大橋建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告Ⅴ

大浦浜遺跡

本　文　編

1988・3

香川県教育委員会
本州四国連絡橋公団

(1)　櫃石島航空写真

(2)　大浦浜遠景

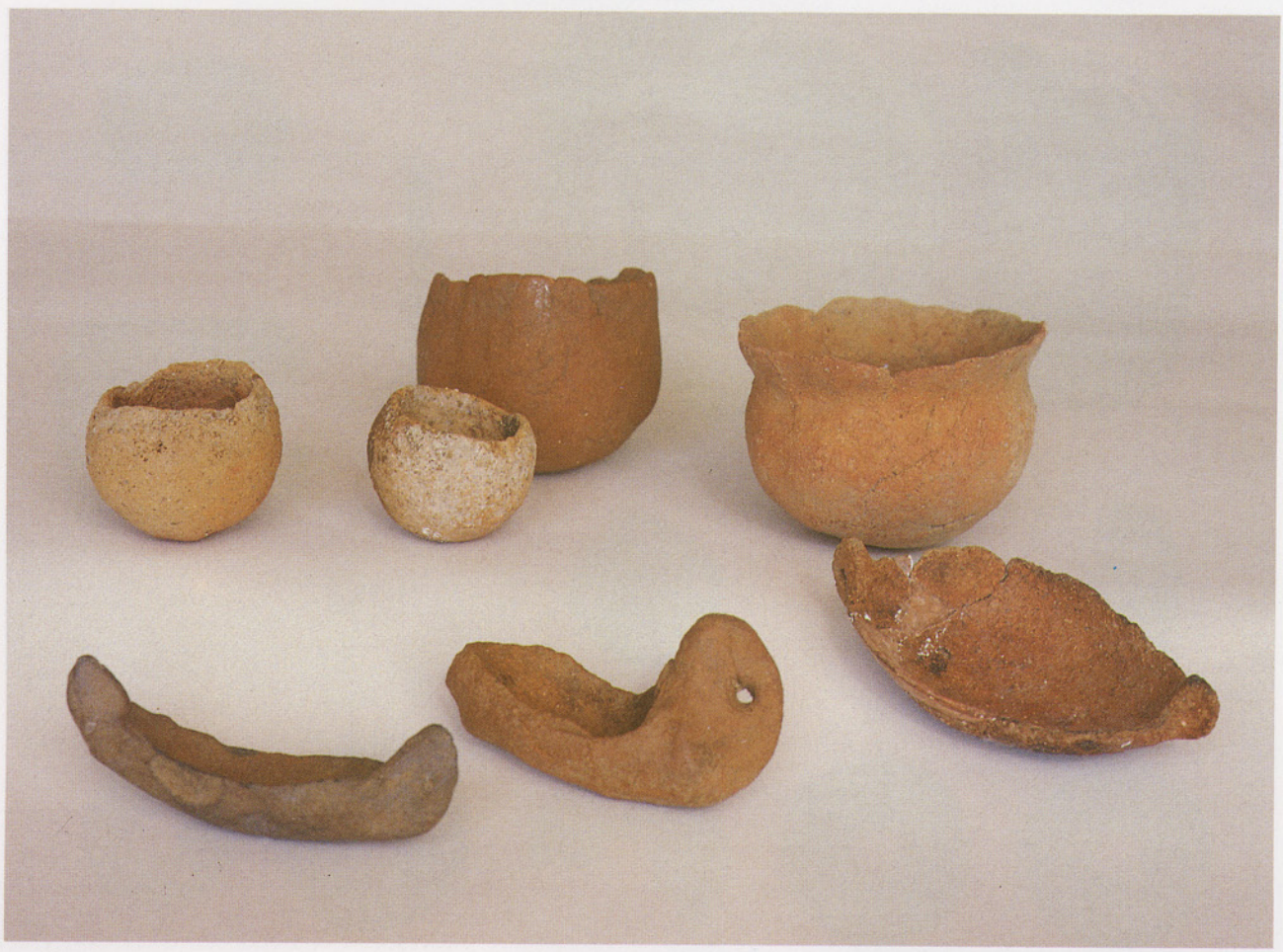
(1) 製 塩 炉

(2) 粘土遺構群

(1)　奈良二彩・銅製品

(2)　奈良三彩・銅製品

(1) 製塩土器



(2) ミニチュア土器

例　　言

1. 本書は，瀬戸大橋建設に伴って実施した坂出市櫃石島に所在する大浦浜遺跡の発掘調査報告書（本文編・実測図版編・写真図版編の３分冊）である。
2. 発掘調査は昭和55～57年度に実施し，出土遺物その他資料の本格的な整理業務は，昭和58～60・62年度に行った。
3. 発掘調査及び整理業務は，本州四国連絡橋公団より委託を受けて香川県教育委員会事務局文化行政課が実施した。

昭和62年度の調査組織は次のとおりである。

総括	課長	広瀬和孝			
	課長補佐	高木　尚			
	副主幹	小原克己			
庶務	係長	宮谷昌之			
	主任主事	近藤紀文			
	主事	水本久美子			
調査２係	所長	佐藤正義	技師		松原伸二
	文化財専門員	大山真充	〃		北山健一郎
	〃	藤田任亮	嘱託		田淵裕司
	〃	藤好史郎	〃		植田　広
	主任技師	中西　昇	〃		石田美和
	〃	西村尋文	〃		山元敏裕
	技師	植松邦浩	〃		山本英之
	〃	岩橋　孝	〃		徳永多佳子

なお，本遺跡の予備調査が始まった昭和51年度以降の調査組織は本文中に記している。

4. 本書の執筆は，次のとおりである。

第１・２・３章，第４章第５・６節，第６章第１・４節，第７章……大山真充

第４章第１・２・３・４節，第６章第１・２・３節……真鍋昌宏

本書の編集は，山西秀子，西桶右子，横田周子の協力を得て大山，真鍋が行った。

5. 調査の実施や整理・報告に際し，下記の方々から多大なご協力，ご教示を受けた。記して深く謝意を表したい。

櫃石島瀬戸大橋対策協議会・同自治会，与島瀬戸大橋対策協議会・同自治会，岩黒島瀬戸大橋対策協議会・同自治会，本島自治会，本四公団児島工事事務所，香川県瀬戸大橋対策事務所，石野博信，井藤暁子，家根祥多，上西美佐子，岡崎晋明，小嶋芳孝，近藤義郎，下沢公明，寺沢　薫，中井一夫，櫃本誠一，丹羽佑一，福田正継，藤田憲司，間壁忠彦，間壁葭子，水野正好，森　浩一，山本三郎

目　　次

第1章　遺跡の立地と環境…… 1
　第1節　立地と周辺の遺跡…… 1
　第2節　備讃瀬戸の製塩・製塩遺跡について…… 14
　　(1)　研究史…… 14
　　(2)　喜兵衛島以後の発掘調査…… 15
　　(3)　備讃瀬戸の製塩遺跡の分布と構造…… 16
　　(4)　今後の課題…… 26
第2章　調査に至る経緯と経過…… 29
　第1節　発掘作業の経過…… 29
　第2節　調査の方法…… 40
　第3節　整理作業の経過…… 43
第3章　層序と旧地形…… 45
　第1節　層序と遺物出土状況…… 45
　第2節　旧地形の復元…… 54
第4章　各時代の遺構と遺物…… 57
　第1節　縄文時代の遺構・遺物…… 57
　　(1)　遺　構…… 57
　　(2)　遺　物…… 62
　　(3)　小　結…… 79
　第2節　弥生時代の遺構・遺物…… 88
　　(1)　遺　構…… 88
　　(2)　遺　物…… 91
　　(3)　小　結…… 100
　第3節　古墳時代前期の遺構・遺物…… 102
　　(1)　遺　構…… 102
　　(2)　遺　物…… 110
　　(3)　小　結…… 127
　第4節　古墳時代後期の遺構・遺物…… 128
　　(1)　遺　構…… 128
　　(2)　遺　物…… 134
　　(3)　小　結…… 140
　第5節　奈良時代～平安時代前半の遺構・遺物…… 142
　　(1)　遺　構…… 143
　　(2)　遺　物…… 146
　　(3)　小　結…… 162

第６節　平安時代後半～鎌倉時代の遺構・遺物…… 163
(1)　浜中央部の遺構…… 163
(2)　南端地区の遺構…… 170
(3)　ヤケヤマ南・東麓の遺構…… 172
(4)　遺　物…… 174
(5)　小　結…… 179
第５章　遺構・遺物の自然科学分析…… 181
第１節　大浦浜遺跡採集標本と花粉分析結果…… 181
第２節　大浦浜遺跡粘土成分分析結果…… 187
第３節　大浦浜遺跡出土貝の鑑定と考察…… 189
第４節　師楽式土器の使用法に関する化学的考察…… 193
－瀬戸内海櫃石島出土のものをもとに－
第５節　大浦浜遺跡出土脊椎動物遺体分析結果…… 199
第６章　考察…… 205
第１節　大浦浜遺跡における製塩土器編年…… 205
第２節　大浦浜遺跡出土の所謂「古式土師器」について…… 236
第３節　弥生時代前期の土器について…… 255
第４節　粘土遺構について－中世製塩の検討－…… 270
第７章　おわりに…… 281

挿 図 目 次

第１図　櫃石島の遺跡…… 2
第２図　櫃石島の位置と周辺の遺跡……3-4
第３図　ガンド浜遺跡出土遺物実測図…… 6
第４図　たては１号墳石室写真…… 7
第５図　長崎古墳風景写真…… 7
第６図　歩渡島１号墳出土遺物写真…… 8
第７図　与島西方遺跡・羽佐島遺跡出土遺物 … 9
第８図　ガンド遺跡…… 10
第９図　塩浜遺跡…… 10
第10図　櫃石島地名…… 11
第11図　埋め立てが始まる大浦浜遺跡…… 13
第12図　大浦浜遺跡調査区域図…… 30
第13図　昭和56年度調査区画設定風景…… 32
第14図　草刈り風景…… 33
第15図　テレビ録画風景…… 34
第16図　出土遺物水洗い風景…… 35
第17図　ヤケヤマ東麓地区調査風景…… 36
第18図　石匙出土状態…… 37
第19図　中世椀出土状態…… 38
第20図　粘土遺構埋め戻し保存作業風景…… 39
第21図　第Ⅴ平面直角座標原点と
　大浦浜遺跡中心点模式図…… 40
第22図　大浦浜遺跡発掘区画図…… 41
第23図　土層図掲載位置図…… 45
第24図　大浦浜遺跡旧地形概念図…… 54
第25図　大浦浜旧地形推定図(1)…… 55
第26図　大浦浜旧地形推定図(2)…… 55
第27図　大浦浜旧地形推定図(3)…… 56
第28図　大浦浜旧地形推定図(4)…… 56
第29図　大浦浜旧地形推定図(5)…… 56
第30図　大浦浜旧地形推定図(6)…… 56
第31図　遺構配置図…… 57
第32図　ヤケヤマ東麓土層模式図…… 57
第33図　貝殻土坑01実測図…… 58
第34図　貝殻土坑02・03実測図…… 58
第35図　集石遺構実測図…… 59－60
第36図　貝殻土坑04実測図…… 61
第37図　たては北麓土層模式図…… 61
第38図　縄文土器類別分布図(1)…… 80
第39図　縄文土器類別分布図(2)…… 81
第40図　縄文土器類別分布図(3)…… 82
第41図　縄文土器類別分布図(4)…… 83
第42図　縄文土器類別分布図(5)…… 84
第43図　縄文土器類別分布図(6)…… 85
第44図　縄文土器類別分布図(7)…… 86
第45図　縄文土器類別分布図(8)…… 87
第46図　遺構配置図…… 88
第47図　前期弥生土器出土個数分布図
　（底部）…… 89
第48図　Ｅ－19区SK8001実測図 …… 89
第49図　Ｊ－11区SK01平面図及び
　出土遺物実測図…… 90
第50図　Ｇ－21区SK01土器出土状況図 …… 90
第51図　Ｇ－21区SK01実測図 …… 90
第52図　遺構配置図……103
第53図　予備調査調査区画実測図……104
第54図　土器棺平・断面図……104
第55図　第13土器群出土状態図……107－108
第56図　Ｅ－10区SK01実測図 ……110
第57図　壺形土器分類図……112
第58図　甕形土器分類図……114
第59図　高杯形土器分類図……116
第60図　小形丸底壺・鉢形土器分類図……117
第61図　土器棺構成土器実測図……119－120
第62図　遺構配置図……128
第63図　Ｊ－12区SK01実測図 ……129
第64図　Ｈ－14区SK01実測図 ……130
第65図　Ｇ－18区SK01実測図 ……131
第66図　Ｈ－18区SK01実測図 ……131
第67図　Ｇ－30区SX01実測図 ……132

第68図　製塩炉平・断面図……133
第69図　G・H－34区土器集中箇所実測図 ‥135－136
第70図　G－30区SX01出土遺物実測図 ……137
第71図　製塩炉出土遺物実測図……137
第72図　G・H－34区土器集中箇所
出土遺物実測図……138
第73図　祭祀関係遺物出土分布図……140
第74図　奈良～平安時代前半の
遺物包含層範囲図……142
第75図　第５層出土製塩土器タタキ目分類図147
第76図　第５層製塩土器出土量比率グラフ…148
第77図　Ⅴ類製塩土器尖底部・
穿孔土器分布図……150
第78図　三彩・緑釉陶器出土分布図……152
第79図　皇朝銭出土分布図……152
第80図　鉄製釣針実測図……153
第81図　管状土錘出土分布図…… 157－158
第82図　棒状土錘出土分布図…… 159－160
第83図　有溝土錘出土分布図…… 159－160
第84図　管状片溝土錘出土分布図…… 159－160
第85図　飯蛸壺出土分布図……161
第86図　中世粘土遺構出土遺物実測図……165
第87図　D－13区SK01実測図 ……170
第88図　C－12区SK01実測図 ……170
第89図　ヤケヤマ東麓地区A－０区
土師質土器出土状態図……173
第90図　土師質土器椀出土分布図……175
第91図　瓦器出土分布図……175
第92図　輸入陶磁器出土分布図……176
第93図　円板状土・石製品出土分布図……178
第94図　大川郡志度町天野遺跡
出土土器実測図……206
第95図　計測部位名称模式図……208
第96図　脚台付製塩土器分類試案……220
第97図　脚台付製塩土器の分布(1)……221
第98図　脚台付製塩土器の分布(2)……222
第99図　脚台付製塩土器の分布(3)……223
第100図　脚台付製塩土器の分布(4)……224
第101図　脚台付製塩土器の分布(5)……225
第102図　ヘラ削りⅡからタタキⅡまでの
系譜案……226
第103図　タタキ目分類模式図……230
第104図　Ⅲ類製塩土器タイプ図……230
第105図　７世紀代の製塩土器……233
第106図　加藤遺跡溝Ⅰ出土土器実測図……237
第107図　高屋遺跡出土土器実測図(1)……239
第108図　高屋遺跡出土土器実測図(2)……240
第109図　森広遺跡（Ⅲ）SH01
出土土器実測図(1)……241
第110図　森広遺跡（Ⅲ）SH01
出土土器実測図(2)……242
第111図　森広遺跡（Ⅲ）SH01
出土土器実測図(3)……243
第112図　石の経遺跡出土土器実測図……253
第113図　壺の文様（大浦浜遺跡）……258
第114図　森広遺跡（Ⅲ）出土土器実測図……260
第115図　三井遺跡出土土器実測図……261
第116図　光専寺山遺跡出土土器実測図……262
第117図　三井遺跡・光専寺山遺跡
出土土器実測図……263
第118図　下川津遺跡SH8601出土土器実測図…265
第119図　下川津遺跡SR05出土土器実測図 …266
第120図　樋ノ口遺跡出土土器実測図……267
第121図　堂山遺跡塩田実測図……270
第122図　沖須賀遺跡検出遺構実測図……271
第123図　粘土遺構K類
（大浦浜遺跡SX25）実測図……276
第124図　伊勢神宮塩田の沼井……276
第125図　石釜分布図……277
第126図　石釜模式図……277
第127図　粘土遺構H類
（大浦浜遺跡SX23）実測図……278
第128図　土器計測位置図(1) ……283
第129図　土器計測位置図(2) ……284

表 目 次

第１表　香川県製塩遺跡地名表…… 17－24
第２表　製塩炉跡一覧表…… 25
第３表　大浦浜遺跡整理作業進行表…… 44
第４表　石錘の重量分布表…… 77
第５表　対照表…… 79
第６表　皇朝銭一覧表……153
第７表　管状土錘長幅計測表……154
第８表　棒状土錘長幅計測表……154
第９表　棒状土錘重量計測表……154
第10表　有溝土錘重量計測表……155
第11表　小形・中形有溝土錘長幅計測表……156
第12表　大形有溝土錘長幅計測表……156
第13表　管状片溝土錘重量・長幅計測表……161
第14表　粘土遺構一覧表……169
第15表　中世製塩土器集計表……177
第16表　円板状土・石製品集計表……178
第17表　円板状土・石製品材料別比率
　　グラフ……178
第18表　銅銭一覧表……178
第19表　脚台付製塩土器脚径計測表……209－210
第20表　脚台付製塩土器脚高計測表……211－212
第21表　脚台付製塩土器脚端厚計測表…213－214
第22表　脚台付製塩土器立ち上がり計測表…215
第23表　分析資料一覧表(1)……216
第24表　分析資料一覧表(2)……217
第25表　タイプ別出土量……221
第26表　土坑を基準とする数量統計……231
第27表　壺の口頸部における段・沈線・凸帯
　　の構成比……257
第28表　甕の口縁形態の構成比……257
第29表　甕における段・無文・沈線
　　の構成比……257
第30表　甕の沈線条数の構成比……257
第31表　弥生前期土器分類表……268
第32表　粘土遺構分類表……274

巻頭図版目次

巻頭図版１　(1)　櫃石島航空写真
　　(2)　大浦浜遠景
巻頭図版２　(1)　製塩炉
　　(2)　粘土遺構群
巻頭図版３　(1)　三彩・銅製品
　　(2)　奈良三彩・銅製品
巻頭図版４　(1)　製塩土器
　　(2)　ミニチュア土器

付 図 目 次

付図１　製塩土器編年表
付図２　土器群全体図
付図３　香川県中部における弥生後期土器～
　　古式土師器の編年試案(Ⅰ)
付図４　香川県中部における弥生後期土器～
　　古式土師器の編年試案(Ⅱ)
付図５　大浦浜遺跡における弥生後期土器～
　　古式土師器の編年試案

観察表目次

第1表　縄文土器観察表……285
第2表　縄文時代石鏃観察表……318
第3表　縄文時代石槍・尖頭器観察表……324
第4表　縄文時代矢柄研磨器観察表……324
第5表　縄文時代スクレイパー観察表……325
第6表　縄文時代石匙観察表……328
第7表　縄文時代石錐観察表……330
第8表　縄文時代打製石斧観察表……330
第9表　縄文時代凹石・磨石観察表……331
第10表　縄文時代石錘観察表……331
第11表　縄文時代礫石器観察表……333
第12表　縄文時代磨製石斧観察表……333
第13表　縄文時代敲石観察表……334
第14表　不明・円盤観察表……334
第15表　弥生土器（前期）観察表……335
第16表　弥生土器（中期）観察表……359
第17表　弥生時代管状土錘計測表……360
第18表　弥生時代紡錘車観察表……360
第19表　弥生時代石鏃観察表……361
第20表　弥生時代磨製石斧観察表……362
第21表　弥生時代スクレイパー観察表……363
第22表　古式土師器観察表……365
第23表　師楽的土師器観察表……389
第24表　古墳時代須恵器観察表……391
第25表　脚台付製塩土器観察表……404
第26表　古墳時代後期製塩土器観察表……409
第27表　ミニチュア土器観察表……423
第28表　船形土製品観察表……424
第29表　祭祀遺物観察表……425
第30表　奈良・平安時代須恵器観察表……426
第31表　黒色土器観察表（奈良・平安時代）429
第32表　奈良・平安時代土師器
（皿・杯・椀）観察表……430
第33表　奈良・平安時代土師器
（甕等）観察表……431
第34表　奈良・平安時代遺構出土須恵器・
土師器観察表……432
第35表　奈良・平安時代製塩土器
（SM01出土）観察表 ……433
第36表　奈良・平安時代第3層製塩土器
観察表……434
第37表　三彩・緑釉陶器観察表……437
第38表　奈良・平安時代（SK11、SK13出土）
製塩土器観察表……438
第39表　奈良・平安時代第5層製塩土器
（タタキ目）観察表……439
第40表　奈良・平安時代第5層製塩土器
（無文）観察表……443
第41表　金銅製品観察表……445
第42表　飯蛸壺観察表……446
第43表　片溝管状土錘観察表……446
第44表　有溝土錘観察表……447
第45表　管状土錘観察表……449
第46表　棒状土錘観察表……451
第47表　土師質土器椀・杯観察表……452
第48表　土師質小皿観察表……456
第49表　瓦器小皿観察表……461
第50表　瓦器椀観察表……461
第51表　青磁観察表……464
第52表　白磁観察表……466
第53表　輸入陶器観察表……467
第54表　円板状土・石製品観察表……468
第55表　中世製塩土器観察表……471

第1章　遺跡の立地と環境

第1節　立地と周辺の遺跡

大浦浜遺跡は，香川県坂出市の市街地北方10kmに位置する櫃石島に所在する。櫃石島は，瀬戸内海の中央部よりやや東寄りの，岡山県と香川県とにはさまれた，いわゆる備讃瀬戸にある島で，経緯は東経133°50′，北緯34°35′付近である。

島の総面積は0.85k㎡，海岸線の総延長は5.4kmである。島の地形は低い山塊（最高所76.5m）と4つの浜からできている。

大浦浜は島の南東部にある浜で，南・北・西は山で仕切られ，東側が海岸線となっている。海岸線の長さは約400mで南北に弧状に延び，浜の奥行は250mある。汀線から西へ80mぐらいまでが砂地で，それより奥は湿地帯である。湿地部はかつては水田として利用されていた時期もあるが，近年は一部畑地となっている以外は，カヤなどが繁茂し，荒れるにまかせている。

一方，砂地のところは畑として利用されており，植えられた作物の間に赤茶色をした土器片が無数に散乱している。ここが大浦浜遺跡である。大浦浜は標高2m前後のほぼ平坦な地形をしているが，細かく観察すると汀線に平行して南北に細長い砂洲状の高まりが認められる。調査の結果，この砂洲を中心に遺跡が展開していることが明らかになった。ところで，この砂洲には「すか（洲架）」という古地名が残っている。また近くには「かりもし（刈藻干）」「かまや（窯屋）」等製塩に関連すると思われる古地名が残っているのは興味深い。島内の地名については，東山包雄氏が採録された資料があるが，これはあまり一般に流布されていないもので，島の様相が一変した現在，貴重な記録と考えられるので，ここに転載しておくことにする。

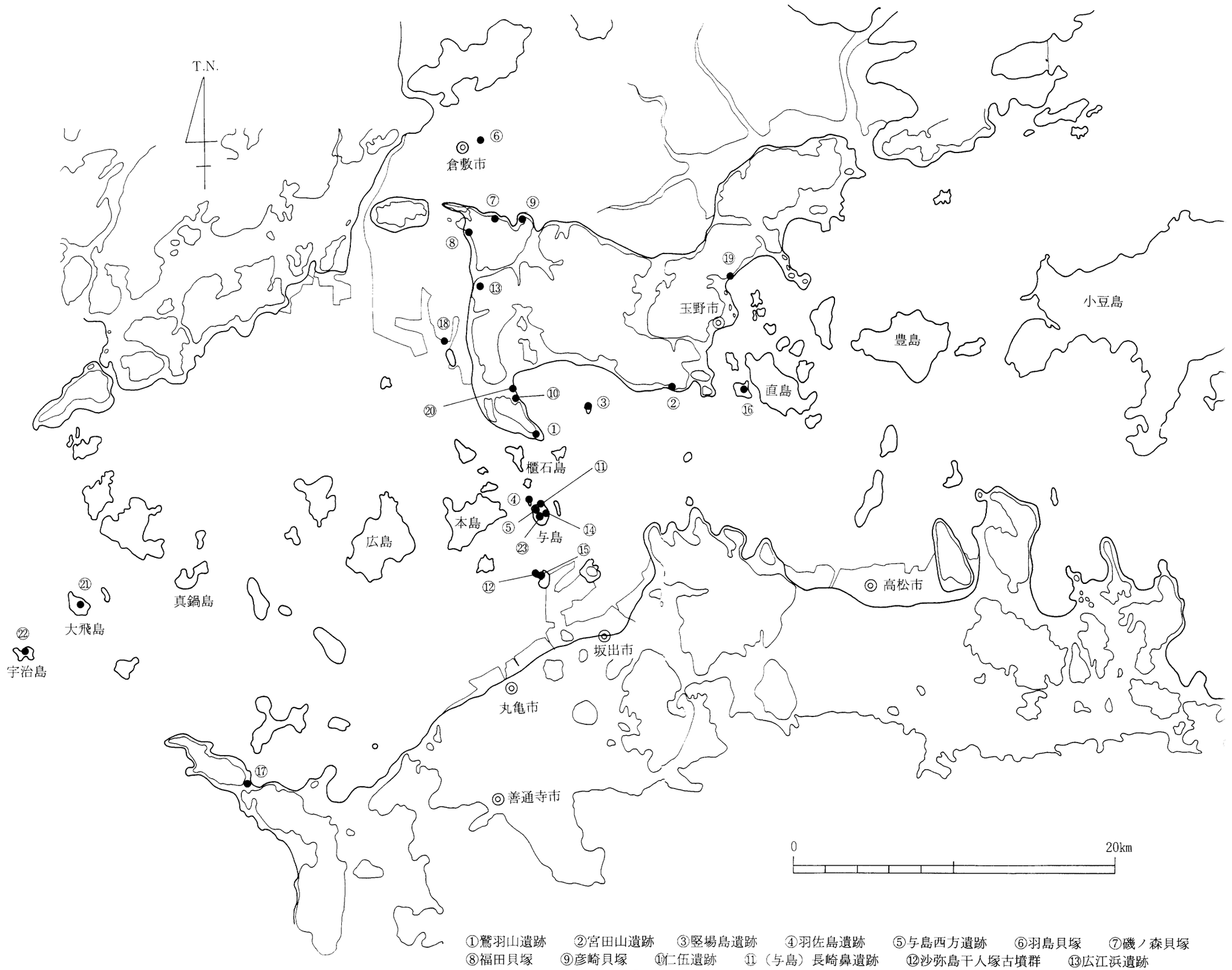
調査は昭和55年から3ヶ年を要したが，昭和56年頃から架橋工事が始まり，浜北東部の海は埋め立てられ，調査が終了した昭和57年度以降は浜の様子は大きく変貌し，何本もの橋脚が建ち並び，かっての浜の面影は現在まったくといっていい程残っていない。遺跡は浜北東部の元櫃石中学校敷地周辺約10,000㎡が未発掘で残り，これ以外は発掘調査後埋め戻した地区を除き，その大半は消滅した。

この遺跡について，先達の取り組みからみていこう。古い記録としては，昭和8年の快舟散史「考古行脚」[1]がある。快舟散史は水原岩太郎のペンネームで，この頃の踏査が『師楽式土器図録』[2]に結集されているようである。この図録には備讃瀬戸の34遺跡で採集された遺物のうち1,000点余りの製塩土器などの図が掲載されており，今では消滅した遺跡の出土品も含まれており貴重な資料集であり，また製塩研究の上では記念碑的労作と評価できるであろう。櫃石島の遺跡については以下のように記され，67点の製塩土器や土師器が図化されている。

下津井町ノ前ニアル香川県仲多度郡与島村ノ内，櫃石島ニモ師楽式土器ノ窯址ガ三ヶ所ニアル。字甲浦浜ノ窯址ハ規模モ廣ク土器ノ破片モ夥シクアル。此処ヨリハ高サ七寸アル瓶，略ボ完全ノモノガ発見セラレテイル（九二三図）。高本恭夫氏ノ所蔵デアル。マタ字「ガイド」

1.かいとく鼻遺跡　2.馬石・ぜにがみ石遺跡　3.ガンド遺跡　4.北浦遺跡　5.トビノス遺跡
6.ガンド浜遺跡　7.花見山遺跡（ホウロク石地区）　8.王子神社東遺跡　9.宮崎古墳
10.宮崎鼻遺跡　11.大浦遺跡　12.ヤケヤマ遺跡　13.大浦浜遺跡　14.大浦浜遺跡たては北麓地区
15.たては1号墳　16.たては2号墳　17.たては3号墳　18.長崎鼻遺跡
19.長崎古墳　20.須恵器出土地点　21.歩渡島1号墳　22.歩渡島2号墳　23.歩渡島3号墳
24.歩渡島4号墳　25.歩渡島遺跡　26.すくも塚　27.西浦遺跡

第1図　櫃石島の遺跡



①鷲羽山遺跡　②宮田山遺跡　③堅場島遺跡　④羽佐島遺跡　⑤与島西方遺跡　⑥羽島貝塚　⑦磯ノ森貝塚
⑧福田貝塚　⑨彦崎貝塚　⑩仁伍遺跡　⑪（与島）長崎鼻遺跡　⑫沙弥島干人塚古墳群　⑬広江浜遺跡
⑭（与島）大洲浜遺跡　⑮ナァンダ浜遺跡　⑯荒神島遺跡　⑰船越遺跡　⑱高島遺跡　⑲田井の浦遺跡
⑳走出遺跡　㉑大飛島遺跡　㉒宇治島遺跡　㉓（与島）塩浜遺跡

第２図　櫃石島の位置と周辺の遺跡

ノ窯址ニテハ弥生式土器ト甕トノ破片モ混在シテイル。マタ字西浦ノ窯址ニテモ弥生式土器ト土師土器トノ破片ガ混在シテ居ル。此ノ二ヶ所ノ窯址ハ共ニ現今デハ土器ノ破片モ少数アルノミデアル。

ここに述べられている「甲浦浜ノ窯址」は記述内容や地図の位置からみて大浦浜遺跡をさすものと思われ，「ガイドノ窯址」はガンド浜遺跡，「西浦ノ窯址」は西浦海岸の遺跡であろう。

その後いくつかの著作[3]に大浦浜遺跡の所在が紹介されたが，発掘調査は行なわれなかった。

昭和37年，坂出市教育委員会によって元櫃石中学校校庭の一部が発掘され[4]，製塩土器や中世土器が検出されたが，詳細については未報告である。

これ以後，本州四国連絡橋児島・坂出ルート（以下，瀬戸大橋，と記す）の建設が具体化するに及んで，分布調査がくり返し行なわれ今回の発掘調査となったのである。

さて次に，大浦浜遺跡をとりまく島内および周辺の遺跡を時代ごとにみていこう。旧石器時代の遺跡としては島内では花見山遺跡，大浦遺跡，ヤケヤマ遺跡，長崎通り遺跡，トビノス遺跡，王子神社東遺跡がある。前4者は今回の瀬戸大橋建設に伴って発掘調査が実施されたものである。

花見山遺跡[5]は島の中央部山塊から東～南東に派生する丘陵尾根上（標高45～55m）に立地する。昭和54・55年度に調査され，8,956㎡を発掘した結果，旧石器時代を中心に約3万点の石器類が出土した。特に注目できる点は細石核が200点余り出土したことで，これは本地域最大の出土量であり，その評価については昭和63年度の正式報告書が待たれる。

大浦遺跡[6]は，花見山遺跡の南西方向の低丘陵尾根上（標高25m）に営まれた遺跡で，昭和55年度に3,300㎡が発掘調査された。出土遺物は1万点で，その大半はナイフ形石器や細石器をはじめとする旧石器時代の遺物であるが，縄文時代早期の押型文土器もある。この遺跡の特徴は国府型ナイフ形石器は少なく，縦長剝片やこれを利用したナイフ形石器が目立つ点である。

ヤケヤマ遺跡[7]は，花見山遺跡の南東部，大浦遺跡の東部に位置する丘陵尾根（標高20m）上に所在する。昭和57年度に622㎡が発掘調査され，ナイフ形石器，縦長剝片，横長剝片や中世遺物などが出土した。

長崎通り遺跡[8]は，島南部の細長い丘陵尾根（標高25m）上に立地する。昭和57年度に5,800㎡が発掘され，旧石器時代の遺物が約2,300点出土した。

トビノス（鳶ノ巣）遺跡は，島北端の丘陵頂部（標高32m）に立地する。以前からサヌカイト製ナイフ形石器や剝片が採集されている。瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査では昭和51年度に本遺跡の北斜面の一部が試掘されたが[9]，剝片が2点出土したにとどまった。

王子神社東遺跡[10]は，花見山遺跡と鞍部をはさんだ東側の丘陵（標高35m）頂部に立地する。平坦地約10,000㎡にサヌカイトの散布がみられ，旧石器時代の遺跡とみてよいだろう。

以上のように櫃石島島内には旧石器時代の遺跡が数多く所在し，それぞれの遺跡が特徴をもって分布している。また島北側の岡山県域の隣接地には学史的に著名な鷲羽山遺跡，宮田山遺跡，竪場島遺跡などが所在し[11]，島南方には羽佐島遺跡[12]，与島西方遺跡[13]などがあり，この地域は旧石器時代の遺跡が濃密に分布しているところである。

縄文時代の遺跡としては，大浦浜遺跡以外に大浦遺跡，海床鼻遺跡，ガンド浜遺跡がある。

大浦遺跡[15]は前述したように旧石器時代が中心となる遺跡であるが，縄文時代早期に属する土器片が66点出土している。その内訳は山形文22点，撚糸文1点，楕円形6点，無文20点，その他

不明18点である。

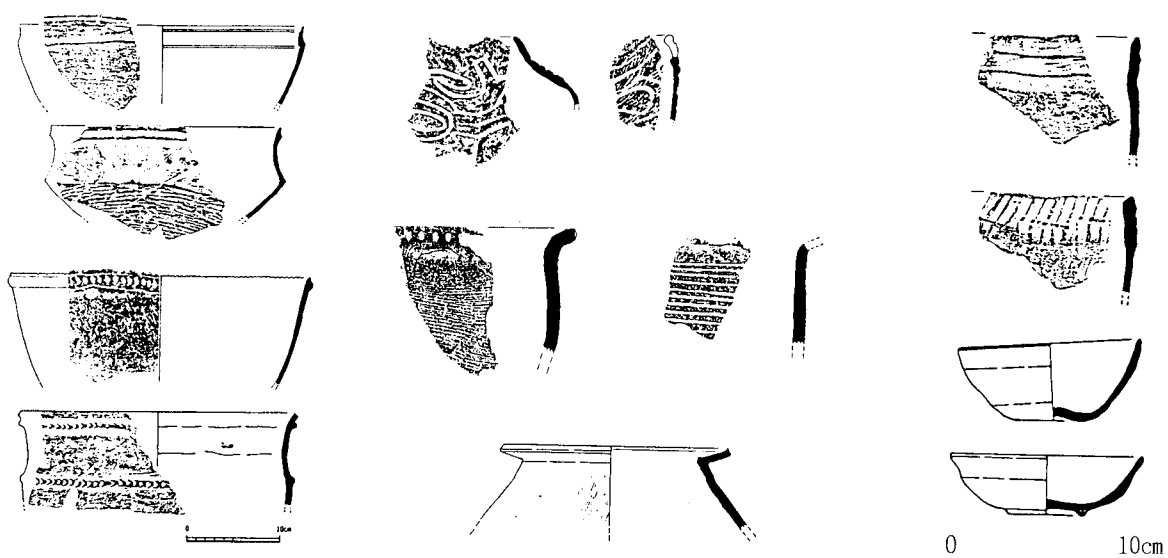
海床鼻遺跡[16]は，島北西端の低丘陵頂部（標高21m）に立地する。未調査ではあるが，以前から石鏃や押型文土器が採集されており，ヤマトシジミを主とする貝層もあるとのことで，櫃石島貝塚とも呼ばれている。

ガンド浜遺跡[17]は，島の北東部にある小さな海浜上に営まれた遺跡で，先述した『師楽式土器図録』には製塩土器の散布地として記録されている。昭和61年12月，県道櫃石島線建設に伴って，坂出市教育委員会によって浜中央部150㎡（6×25m）が発掘調査された。その結果，この遺跡は製塩遺跡のみならず縄文時代から鎌倉時代にかけての複合遺跡であることが確認され，縄文時代についても多くの知見がえられた。遺構は包含層中から炭化物を含んだ方形土坑が検出されたが，柱穴は検出できず住居址との断定には至らなかった。遺物は包含層から多量に出土したが，土器は後期の磨消縄文から晩期の突帯文土器まであるが，量的には後者のほうが多い。

縄文時代の遺跡は以上の3遺跡であるが，その立地をみてみると早期の遺跡は標高20～30mの低丘陵上に位置するのに対し，前期以降の遺跡は海浜に営まれるという差異がある。さらに後者の遺跡は時期により占地が異なっているようで，その原因は第3章第2節で述べる大浦浜の海浜地形（砂洲）の形成に関係があるものと思われる。

島外では，瀬戸内地域の縄文土器編年の標式遺跡となっている，羽島貝塚，磯ノ森貝塚，福田貝塚，彦崎貝塚[18]などは櫃石島の北方約15kmの範囲内に点在している。

弥生時代の遺跡は，島内では前述のガンド浜遺跡と大浦浜遺跡以外には確認されていない。ガンド浜遺跡では前期(新段階)の土器が数点ではあるが出土している。島外では倉敷市仁伍遺跡[19]，城遺跡[20]がある。この遺跡は櫃石島のすぐ北の岡山県倉敷市児島の丘陵上に位置し，中期の製塩土器を出土した遺跡である。櫃石島の南方では与島西方遺跡[21]があげられる。この遺跡は旧石器時代が中心となる遺跡であるが，A地区と呼ぶ丘陵先端部から，中期後半に位置づけられる土器が出土しており，高地性集落の一種ではないかと考えられている。概してこの地域では中期の遺跡は丘陵部に位置しているものが多く，海浜部には少ないのが特徴である。海浜部では弥生時代前期の遺物はまとまって出土するがそれ以降は極端に減少し，後期末頃になって再び量的に増加する傾向である。



第3図　ガンド浜遺跡出土遺物実測図

古墳時代の遺跡は，島内では海浜部の製塩遺跡としては，本遺跡とガンド浜遺跡，西浦遺跡が所在し，丘陵部には宮崎古墳，すくも塚，たては古墳群，長崎古墳，歩渡島古墳群などの古墳がある。

ガンド浜遺跡については前述した調査で前期と後期の製塩土器が出土している。出土量はさほど多くなく出土状況が調査区の南側で目立ったことから，この時期の製塩遺跡は浜中央部より南側（現在宅地化している）に展開していると推定されている。

西浦遺跡は島西側の海浜に所在する遺跡であるが，『師楽式土器図録』の一部を先に引用したとおり，昭和14年頃にすでに少量の散布しかないことが指摘され，今回の調査中において踏査したが，土器は採集できなかった。このため全長500mある海浜部のどの位置にどの程度の規模の遺跡が所在したものか不明である。

宮崎古墳[22]は島東端の丘陵上にある高塚で，規模は径７m，高さ３mあり，頂部は平坦である。かって須恵器や鉄刀が出土したと伝えられているが詳細については不明であり，今後古墳か否かの確認が必要であろう。

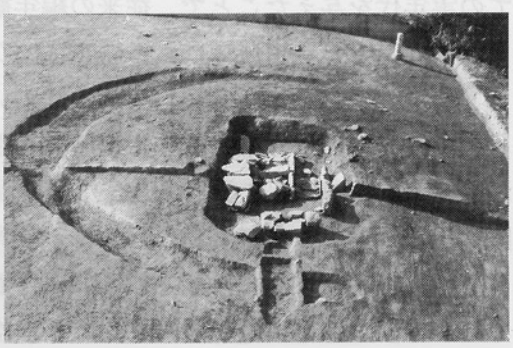
すくも塚[23]は島北西部の標高76mの丘陵頂部にある低い円墳状の高まりである。周辺で土器片を採集したという伝承もあるが，この遺跡についても確認が必要であろう。

たては古墳群[24]は島南部の丘陵（標高35m）上に所在する横穴式石室墳である。現在までに3基確認されているが未調査である。丘陵頂部北側にある１号墳は墳丘はほとんど残っていず横穴式石室が露出している。玄室長約３m，玄室幅0.9m，羨道長1.5mである。２号墳は現在所在が確認できない。３号墳は丘陵頂部南側にあり，採石により半壊状態で玄室が1.3m残存しているにすぎない。

第４図　たては１号墳石室写真

長崎古墳[25]は，瀬戸大橋建設に伴って昭和57年度に発掘調査されたものである。墳丘はすでに削平されて残っていなかったが，周溝から復原すると径８mの円墳となる。内部主体は横穴式石室で，玄室長約2.98m，羨道長1.04mで，玄室内に１棺以上の箱式石棺が検出された。出土遺物は石室内から鉄器，金環や玉類100点近くが出土し，周溝内からは土師器・須恵器が多く出土した。築造年代は６世紀中葉～後半と考えられている。

ところで，この長崎古墳の所在地付近からは大正４年に須恵器類が掘り出されており，島内在住の東山包雄氏によって保管され[26]，現在は坂出市中央公民館櫃石分館の展示室で一般公開されている。

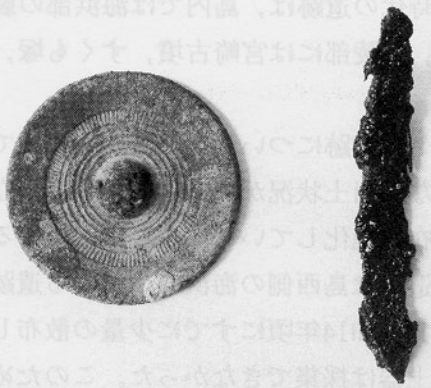


第５図　長崎古墳風景写真

歩渡島古墳群[27]は，櫃石島南東端に位置する歩渡島に所在する古墳群である。昭和48年坂出市教育委員会の川畑迪氏によって発掘調査され，箱式石棺３

基と横穴式石室1基とが確認され，1～4号墳と名づけられた。

1号墳は長さ8m，幅0.45mの箱式石棺で，小型重圏文鏡，鉄製刀子が各1点出土した。2号墳は横穴式石室で，長さ1.4m，幅60cmの片袖式で，石室北西隅から須恵器平瓶が1点出土した。3号墳は長さ1.1m，幅30cmの箱式石棺で，遺物は出土していない。4号墳は長さ1.1m，幅50～27cmの箱式石棺で，これも遺物は出土していない。



第6図　歩渡島1号墳出土遺物写真

以上が島内の古墳であるが，これらの古墳を時期別にみてみると，歩渡島1号墳が5世紀前半，長崎古墳が6世紀中葉，たては2号墳は石室構造からみて6世紀後半頃に推定でき，時期により古墳の築造場所が異なり，また内部主体の構造も箱式石棺から横穴式石室へと変化している。長崎古墳の横穴式石室内部には箱式石棺が築かれ，これは両者の中間形態を示すものとみてよいだろう。

歩渡島石棺群のように丘陵や岬の先端に箱式石棺が築かれる例は周辺の島々に多く，例えば，与島の東方丘陵の先端には長崎鼻古墳[28]があり，沙弥島の小タンボ岬先端には箱式石棺があり，平野部にみられるような竪穴式石室とは違った在り方を示している。これらの古墳は製塩活動とは直接関係しないのではなかろうかという考えもあったが，今回の調査結果をみると，箱式石棺が築かれた5世紀代には，浜で製塩活動や祭祀行為が行われており，浜の製塩・漁撈遺跡と関連させて考える方が自然であろう。

島外の遺跡としては，櫃石島北部の倉敷市児島地区に，製塩遺跡や後期古墳が密に分布しており，児島周辺が古代日本の屈指の塩生産地であったことを如実に物語っている。櫃石島北方約11kmの旧海浜部に立地する広江・浜遺跡[29]は，昭和41・53年倉敷考古館によって発掘調査されたものである。この遺跡は調査の結果，縄文時代から鎌倉時代までの長期の複合遺跡と確認されたが，古墳時代の遺構は，灰・炭・焼土の入った土坑，焼土面，据え置かれた須恵器甕・製塩土器の土器溜りなど，いずれも製塩作業に関係すると思われる遺構が検出されている。一方古墳時代の遺物は後期の製塩土器が多量に出土し，6世紀から8世紀初め頃までの製塩土器の編年が試みられている。編年案で注目できる点は，従来備讃瀬戸地域の古墳後期から奈良時代までの土器は3型式設定されていたのに対し，5型式に設定しそれぞれを須恵器の型式と対応させ，目安としての実年代を与えたことで，従来の編年観を修正発展させたものと評価できる。

櫃石島南方の香川県域には，この時代の製塩遺跡として，与島大洲浜遺跡（与島貝塚），沙弥ナカンダ浜遺跡などがあるが，これらについては次節で改めて述べることにする。

ここで製塩遺跡を離れて，古墳時代の祭祀遺跡[30]について簡単にふれておこう。島しょ部の海浜遺跡から祭祀関係の遺物を出土した遺跡は，香川県域では，荒神島遺跡，沙弥ナカンダ浜遺跡，大洲浜遺跡，船越遺跡などがあり，岡山県側では高島遺跡，田井の浦遺跡，走出遺跡，広江・浜遺跡などで，小型手ずくね土器，滑石製模造品，玉類，青銅製儀鏡，船形模造品などを出土している。これらの遺跡のほとんどが製塩遺跡と重なりあうもので，亀井正道氏が考察[31]したようにこれらの祭祀は製塩活動に伴うものと考えられるが，祭祀遺物の出土は生産の場である海浜

が多いが，荒神島遺跡や高島遺跡では島の山頂部や丘陵上からも出土しており，この差は祭祀の主体を考える上で注意しておく必要があろう。

次に奈良・平安時代の遺跡に移ろう。島内では先述のガンド浜遺跡で少量の製塩土器が検出された以外には，この時代の遺跡は知られていない。

櫃石島が律令時代の地方行政区画のどこに属していたかは，この時代の塩生産の実態や調の貢納方式を知る上で必要なことであろうが，直接これを示す木簡などの史料がないため，正確にはわからないのが現状である。

櫃石島の南方8㎞に位置する沙弥島は，『万葉集』巻2にある柿本人麿呂の歌の詞書にみえる「讃岐の狭岑(さみね)の島」と考えられ，この島は讃岐国に属していたことが推定できる。

櫃石島の東方20㎞の位置にある小豆島は，『続日本紀』延暦3年784年10月庚午条に「備前国児嶋郡小豆嶋」とみえる「小豆嶋」と考えてよく，平城宮出土木簡[32]には「備前国児嶋郡小豆郷」とみえ，この2つの史料から小豆島は古代において，備前国児島郡に属していたことは明らかで，島で1郷を構成していた可能性もある。

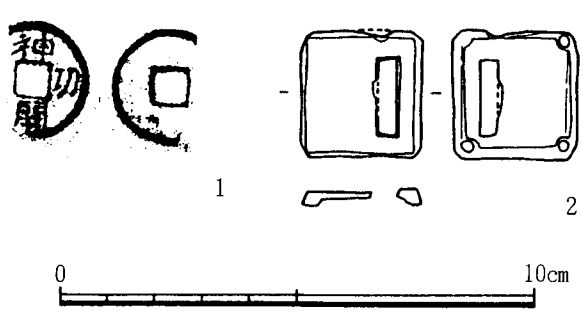
古代の行政区画がわかる島は以上の2つであるが，地理的な位置からみると櫃石島は備前国児島郡に極めて近く，遺跡から出土する土器類は岡山県地方のものとみなしてよく，これらのことから考えると，櫃石島の古代における行政区画は備前国児島郡と考えたほうがよかろう。

次に瀬戸内海の島しょ部のこの時代の祭祀遺跡について概観してみよう。

この地域で最も著名な遺跡は，大飛島(おおひしま)遺跡[33]である。この島は櫃石島より西方28㎞のところに位置し，昭和37・38年倉敷考古館によって島東部の浜が発掘調査された。山際の巨石の周囲や配石遺構などから，奈良三彩，緑釉陶器，ガラス器，皇朝銭，銅鏡，小鈴，帯金具，かまど形模造品，小型手づくね土器，須恵器，土師器類が検出された。時期は奈良～平安時代中頃である。

この大飛島の南西5㎞の位置に宇治島がある。遺跡は島の北の浜にあり，昭和58年以来，広島大学によって発掘調査[34]が進められている。浜全域に縄文～平安時代の遺跡が広がっている。祭祀関係としては石敷き遺構が検出され，この遺構近辺から奈良三彩，緑釉陶器，底部穿孔の広口壺，皇朝銭などが出土している。

以上の2遺跡が祭祀関係の遺構が検出されている遺跡であるが，これ以外にも祭祀関係の遺物が単独で出土している遺跡がいくつかある。櫃石島南方3㎞の羽佐島遺跡[35]からは緑釉陶器や帯金具（巡方）が出土し，羽佐島のすぐ南の与島西方遺跡[36]からは皇朝銭の神功開宝が1点出土している。また，櫃石島から15㎞東方の荒神島[37]では，浜から皇朝銭の和銅開珎が採集されている。



第7図　与島西方遺跡・羽佐島遺跡出土遺物

このように各島から多かれ少なかれ祭祀関係と思われる遺物が採集されているが，従来これらの祭祀は，遣唐使船などが往来に際し航海安全を祈願したものと解釈されていたが，祭祀遺物は浜の生産遺跡から出土しているものもあり，当時の漁業・製塩との関連についても検討[38]する必要があろう。

中世の遺跡としては島内にガンド遺跡とガンド浜遺跡がある。ガンド遺跡[39]は島北部にあり，島の最高所（標高76m）から東へ派生する低丘陵（標高20m前後）上に営まれた寺院・墓地跡である。瀬戸大橋建設に伴って，昭和54年度に発掘調査された。遺跡は低丘陵の先端付近を長さ約20m，幅6～16mにわたり削平し，約800㎡の平坦地をつくり出している。この平坦地上から礎石と思われる石や，長さ5mの石列を検出し，これらは建物の下部構造と推定できる。平坦地の上方は自然丘陵が続くが，この丘陵の南斜面に9基の墓が営まれていた。このうち6号墓はかなり攪乱を受けていたが石組み近くから備前焼壺が出土し，中には火葬骨が納められてあった。丘陵北斜面には道とも考えられる，幅約2mの溝状遺構があった。遺物は平坦地から土師質土器椀・皿類，溝状遺構からは亀山焼甕，常滑焼甕が出土した。土坑墓には備前焼鉢・壺の破片が利用されており，周囲からは五輪塔，石仏等が出土した。年代は鎌倉時代後期から南北朝時代の14世紀と考えられる。

第8図　ガンド遺跡

ガンド浜遺跡は，ガンド遺跡から東方向へ谷筋を250m下った海浜部の遺跡で，その概要について先述したとおりであるが，縄文土器や製塩土器の包含層上面で石列が検出され，付近からはガンド遺跡と同時期の土器が出土しており，ガンド遺跡に関連する遺構とみてよいだろう。

第9図　塩浜遺跡

島内の中世遺跡は上記の2遺跡であるが，島外では与島の塩浜（しおはま）遺跡[40]がある。この遺跡は瀬戸大橋建設に伴って，昭和55年度に発掘調査された。遺跡は与島の西方丘陵の東裾（標高10～13m）近くにあり，傾斜面を上下2段に削平し平坦地をつくりだしており，そこから6棟の掘立柱建物や4本の溝の他，多くの柱穴が検出された。出土遺物は土師質土器・瓦器・磁器をはじめ，有溝土錘・管状土錘などの漁具が多く出土し，鎌倉～室町時代の漁村集落の一部と考えられた。

さて，以上が大浦浜遺跡をとりまく周辺の遺跡であるが，室町時代以降の遺跡は島内では知られていない。遺跡とは確認できないが島内の見晴らしのよい尾根上数か所に城砦が在ったという伝承がある。その場所には「ボンノシロ」「マジロ」「マルノシタ」「ナカマル」などの地名が残っているが遺構は確認できない。

江戸時代の動向についても不明であるが，大浦浜の塩田計画を記したこの時代の文書があるとの教示[41]を得たが確認できなかった。

①…ぶと（歩渡）　②…ながさき（長崎）　③…たてば（煬場）　④…せきのうら（堰の浦）
⑤…すか（州架）　⑥…おおうら（大浦）　⑦…しんで（新田）　⑧…かりもし（刈藻干）
⑨…かまや（窯屋）　⑩…いけんと（隠見堂）　⑪…じろうばな（次郎鼻）
⑫…なかまる（中丸）　⑬…やまのおく（山の奥）　⑭…にしうら（西浦）
⑮…さいのかわら（賽の河原）　⑯…ほうろくいし（炮碌石）　⑰…ぼんのしろ（望の城）
⑱…むそう（夢想）　⑲…やしきしょうじ（屋敷小路）　⑳…にしのくち（西の口）
㉑…まえだ（前田）　㉒…まるのうえ（丸の上）　㉓…もうとやしき（毛人屋敷）
㉔…おんご（隠谷）　㉕…みやざき（宮崎）　㉖…てんのう（天王）　㉗…まるのした（丸の下）
㉘…がんど（伽藍堂）　㉙…こがんど（小伽藍堂）　㉚…とびのす（鳶の巣）
㉛…うしがくび（牛が首）　㉜…しやかのもと（釈迦の基）　㉝…どのうら（堂の浦）
㉞…おくのたに（奥の谷）　㉟…みよといわ（夫婦岩）　㊱…おおたに（大谷）
㊲…うまいし（馬石）　㊳…すくもずか（籾塚）　㊴…かいとく（海匿）　㊵…やぐらいし（櫓石）
㊶…ぜにがみいし（銭噛石）　㊷…しょうがっいし（正月石）　㊸…ほうろくいし（炮碌石）
㊹…たいごいし（鯛子石）　㊺…うぢがみいし（氏神石）　㊻…ひついわ（櫃岩）
㊼…わらじいし（草鞋石）　㊽…おやおいし（親負石）　㊾…みよといわ（夫婦岩）　㊿…たては

第10図　櫃石島地名

注

(1) 快舟散史「考古行脚」『吉備考古』 16・22号 1933・1934年

(2) 水原岩太郎『師楽式土器図録』 1939年

(3) 武田葭子「師楽式土器及びその文化について」『遺跡』22号 1955年6月

東山包雄「櫃石というところ」『岡山春秋』66号 1958年

（上記2つの文献は実見できなかったため，間壁葭子「香川県坂出市櫃石島採集の石器」『倉敷考古館研究集報』第4号から再引用した。）

多和和彦「児島半島における師楽式土器の分布」『古代吉備』第1集 1958年4月

(4) 調査担当の川畑迪氏のご教示による。

(5) 香川県教育委員会「花見山遺跡の調査」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報』（Ⅲ）1980年3月，（Ⅳ）1981年3月（以下このシリーズの概報は『概報』（Ⅲ）のように略する。）

(6) 香川県教育委員会「大浦遺跡の調査」『概報』（Ⅳ） 1981年3月

香川県教育委員会『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』Ⅱ・大浦遺跡 1984年3月（以下このシリーズの正式報告書は『報告』Ⅱのように略す。）

(7) 香川県教育委員会「櫃石島の調査・ヤケヤマ遺跡」『概報』（Ⅵ） 1983年3月

(8) 香川県教育委員会「櫃石島の調査・長崎通り遺跡」『概報』（Ⅵ） 1983年3月

(9) 香川県教育委員会「櫃石島第Ⅰ調査区」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財予備調査報告』（Ⅰ）（以下このシリーズの報告書は『予備調査報告』（Ⅰ）のように略す。） 1977年3月

(10) 間壁葭子「香川県坂出市櫃石島採集の石器」『倉敷考古館研究集報』第4集 1969年

(11) 鎌木義昌・高橋護「瀬戸内海地方の先土器時代」『日本の考古学』Ⅰ 1965年 河出書房

(12) 香川県教育委員会『報告』Ⅰ・羽佐島遺跡 1984年1月

(13) 香川県教育委員会『報告』Ⅳ・与島西方遺跡 1985年3月

(14) 香川県教育委員会「大浦遺跡の調査」『概報』（Ⅳ） 1981年3月

(15) 注(10)に同じ。

(16) 江坂輝弥「生活の舞台」『日本の考古学』Ⅱ 1965年 河出書房

(17) 「ガンド浜遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報 香川県教育委員会 昭和58～62年度』 1988年3月

(18) 鎌木義昌・高橋護「縄文文化の発展と地域性・瀬戸内」『日本の考古学』Ⅱ 1965年 河出書房

(19) 山本慶一「倉敷市仁伍遺跡」『倉敷考古館研究集報』第6集 1969年

(20) 岡山県教育委員会『倉敷市（児島）城遺跡発掘調査報告』 1977年

(21) 香川県教育委員会『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査報告（Ⅰ）・与島西方遺跡』 1979年

(22) 香川県教育委員会「島嶼部の遺跡」『予備調査報告』Ⅰ 1977年

香川県教育委員会「櫃石島古墳群」『新編香川叢書』考古編 1983年

(23) 注(22)に同じ。

(24) 注(22)に同じ。

(25) 香川県教育委員会「櫃石島の調査・長崎古墳」『概報』（Ⅳ） 1983年3月

(26) 香川県教育委員会「櫃石島の調査」『予備調査報告』（Ⅱ） 1978年3月

(27) 注(22)に同じ。

(28) 香川県教育委員会「与島西方遺跡の調査」『概報』（Ⅴ） 1982年3月

(29) 間壁忠彦・間壁葭子他「広江・浜遺跡」『倉敷考古館研究集報』第14号 1979年

(30) 祭祀遺跡については，次の文献を参考にした。

瀬戸内海歴史民俗資料館『瀬戸内海地方祭祀遺跡地名表』 1978年9月

(31) 亀井正道「祭祀遺跡－製塩に関連して－」『新版考古学講座』8 1979年9月 雄山閣

(32) 奈良国立文化財研究所『平城宮木簡二』 1975年1月

(33) 倉敷考古館『大飛島遺跡』 1964年

(34) 広島大学文学部「福山市宇治島北の浜遺跡の第一次発掘調査」「同・第二次発掘調査」『内海文化研究紀要』第12・13号

1984・85年
(35) 香川県教育委員会『報告』Ⅰ羽佐島遺跡（Ⅰ） 1984年1月
香川県教育委員会『報告』Ⅱ羽佐島遺跡（Ⅱ） 1984年9月
(36) 注(21)に同じ。
(37) 松本敏三他「瀬戸内海をめぐる祭祀遺跡」『瀬戸内の海上信仰調査報告』瀬戸内海歴史民俗資料館 1979年
(38) 大山真充「香川県大浦浜遺跡における国家的祭祀について」『同志社大学考古学シリーズ』Ⅰ 1982年
大山真充「古代讃岐と海の祭り」『歴史手帖』14巻5号 1986年
(39) 香川県教育委員会「がんど遺跡」『概報』（Ⅲ）1980年3月
(40) 香川県教育委員会「塩浜遺跡の調査」『概報』（Ⅳ）1981年3月
(41) 櫃石島の東山包雄氏のご教示による。

第11図 埋め立てが始まる大浦浜遺跡

第２節　備讃瀬戸の製塩・製塩遺跡について

(1)　研究史

岡山県と香川県とにはさまれた所謂備讃瀬戸には，現在までにおよそ130ヶ所の製塩遺跡（製塩土器出土地を含む）が知られている。これらの遺跡については60年余りの研究史をもっているが，昭和28年からの香川県直島町喜兵衛島の発掘調査を境にして，大きくその認識がかわる。

大浦浜遺跡発掘調査の位置づけを明らかにするために，まず最初に研究史を簡単にふりかえってみることにする。

備讃瀬戸の海浜部に多くの土器が散乱していることが意識されていたのはかなり古くからと想像できるが，これらの土器の中に縄文土器とも弥生土器とも違う土器が混っていると認識されはじめたのは，大正年間にさかのぼるようで，このことは次に述べる『師楽式土器図録』[1]の「解説」から推定できる。

昭和４年に水原岩太郎は岡山県邑久郡牛窓町字師楽の山本元三郎所有の畑を試掘し，「普通の弥生式土器とは趣を異にする」土器の「窯跡」を発見し，その土器に発見地の字名をとり「師楽式土器」と命名した。その後水原は備讃瀬戸地域の調査を進め，その成果を昭和14年『師楽式土器図録』として発刊した。

昭和18年春，東京大学理学部の山内清男によって岡山県笠岡市高島に所在する王泊遺跡と黒土遺跡とが発掘調査された。この調査はその後京都大学考古学研究室にひきつがれ，同年秋と翌19年春の二度にわって調査が進められた。昭和25年から出土遺物の整理が始まり，昭和31年『岡山県笠岡市高島遺跡調査報告』[2]として調査結果が公表された。この中で師楽式土器は土師器とは区別して取り扱われているものの，「王泊４・５層のそれは単に粗製の土師器ともいえる土器であるが，第３～１層のそれは土師器とは全く器形を異にしたコップ状の土器を主体とし，それも余り大型品を見ないものである」と述べられている。そして師楽式土器を出土する遺跡については，海浜にあり，後背地をもたず，砂質の不良の粘土を用いていることなどから，海浜に生活の本拠をもった人々によって営まれた遺跡と推定された。

昭和28年から近藤義郎・岡本明郎らによって喜兵衛島の発掘調査が開始された。調査はこの年の予備調査にはじまり，昭和32年の第５次調査まで続けられた。第１次調査では５基の古墳と南西浜の試掘が行われ，古墳の築造と浜の遺跡との時間的併行関係が確認され，その後の検討により，師楽式土器は製塩のある過程に使用されたという見通が提示された。これを踏まえて第２・３次調査が進められ，第４次調査では，師楽式土器堆積層が堅いタタキ面の周囲に広がることが確認され，タタキ面の中心に炉跡が検出された。第５次調査では，南東浜の調査が実施され，炉跡５基を検出した他，師楽式土器堆積層の具体的様相が確認された[3]。

以上の調査成果を吟味した上で，昭和33年，近藤義郎は「師楽式遺跡における塩生産の立証」[4]という論文を発表する。師楽式遺跡が，師楽式土器堆積層・タタキ面・炉・一般的な遺物包含層・居住地の５つの要素から構成されていることを明らかにし，それぞれの特徴を詳しく述べると同時に，炉やタタキ面から採集された「飴色膜状物質」の化学的分析結果を考察した上で，古代の塩生産を立証したものである。

この論文は，それまで文献にみえる「藻塩焼く」等の語句の解釈にとどまっていた古代塩生産について，これを科学的に解明したものとして画期的なものであった。

これ以後，備讃瀬戸の製塩遺跡では小規模ながら発掘調査が行なわれ，資料の蓄積が進められた。以下に，最近までの主な発掘調査について，その概要をみてみよう。

(2) 喜兵衛島以後の発掘調査

昭和36年，近藤義郎らによって香川郡直島町の直島南部の海浜に所在する倉浦遺跡が発掘調査された。報告書は未刊であるが，出土製塩土器は小型で尖底のもので，「倉浦式」として，7世紀から8世紀前半頃の年代が与えられている。また，当遺跡からは径約2m，深さ約1mの土坑が検出され，同時期の鹹水溜めの可能性が推定されている[5]。

昭和36年，坂出市与島の大洲浜遺跡（与島貝塚）が森井正らの香川県文化財専門委員会によって発掘調査された。本遺跡は備讃瀬戸中央部に浮かぶ小さな島の東側の狭い砂浜に営まれたもので，約15㎡が発掘された。遺構は検出されていないが，第3・6層に灰白色の「粘土凝固盤」と呼ばれる層位が検出されている。これは厚さ4～15cmあり少しもろく，中には木炭粒植物の茎葉が混入しているが焼けたものではない。類例は豊島の横引遺跡でも見つかっており，この種の遺跡ではよく見つかるとのことである。遺物は須恵器・土師器・製塩土器・石器・貝・魚骨・獣骨等が検出されており，本遺跡の時期はこれらの遺物から古墳時代前期と後期とみられる。

昭和40年代に入ると，それまでの考古学の成果を集大成した『日本の考古学』が発刊され，昭和41年，このシリーズの「v」に「生産の発達・製塩」[7]が項目立てされ，近藤によって，日本全国の状況がまとめられている。この中で備讃瀬戸の製塩土器は5型式設定され，古墳時代は3型式（脚台付・小型丸底・大型丸底鉢形）設定され，各型式の特徴が述べられている。ここに1つの編年案が提出されたわけであるが，これ以後，時代の標式となる土器編年が研究の中心となっていき，現在もその延長上にあるといってよいだろう。

昭和45年，香川県坂出市沙弥北通りにある沙弥島北側の浜に立地する沙弥ナカンダ浜遺跡が坂出市教育委員会川畑迪によって調査された。この遺跡は，縄文時代から中世に至る複合遺跡で，これ以後数回にわたり坂出市教育委員会や香川県教育委員会によって発掘調査され[8]，弥生時代の製塩炉，古墳時代の溝，ピット，土坑，製塩炉，製塩土器堆積層などが検出されている。この中でもっとも注目できるのは，昭和49年度調査で検出された弥生時代末の製塩炉である。それは東に口を開き，三方を灰白色粘土状土塊で壁を築いており，奥行1m，高さ60cm，幅60cmの大きさで，天井部はない。窯床には粘土や小石があり，内部には灰・粉炭が散布し，これに混ざって製塩土器脚部が十数点出土している。炉跡の周辺は赤く焼けていた。

この炉跡は近藤義郎によって再調査され，焼き塩用の窯跡ではないかと推定された[9]。この推定は，従来煎熬用と一元的にとらえられてきた製塩土器が固形塩製造にも利用されたことを示唆する注目できるものである。

昭和46年，岡山県倉敷市上東遺跡が岡山県教育委員会によって発掘調査された[10]。この遺跡は沖積平野の微高地上に営まれた，弥生時代後期を中心とした集落跡であるが，製塩に関する遺構・遺物も多く検出されている。なかでも注目できるものは弥生時代後期の製塩炉跡である。炉跡の大きさは東西150cm，南北95cm，深さ10cm以上の長方形の土坑で，南北の長辺の壁には高さ5～

10cm，厚さ4cmの黄褐色の粘土焼土塊が部分的に残っていた。床面には焼けた砂質土がほぼ全域に見られたが，焼け石などはない。遺物は床面から多少浮いた状態で，約70個体分の製塩土器片が出土した。この炉跡の周囲からはタタキ面や，飴色状物質などは検出されていない。

昭和53年には，岡山県倉敷市の広江・浜遺跡が間壁忠彦・間壁葭子ら倉敷考古館によって発掘調査された[11]。この遺跡の概要は第1章第1節で述べたとおりである。

昭和54年には香川県坂出市の高屋(たかや)遺跡が香川県教育委員会によって発掘調査された[12]。この遺跡は現在では海岸線から約2km離れた平野部に位置するが，標高は2.5mでかつては入江になっていた場所と復原できる地形である。土坑，溝，土器ブロック等が検出され，遺物は脚台付製塩土器をはじめ，壷，甕，鉢等が出土した。調査範囲が狭いこともあり，発掘地点や検出遺構の性格づけは難しいが，赤変した石や，焼土が検出されており，炉跡に近い場所が発掘されたものと推定できる。

この年から日本塩業大系編集委員会による『日本塩業大系』の発刊が始まり，先ず『資料編・考古』[13]が刊行され，全国の縄文時代から歴史時代の製塩土器や遺構が集大成された。続いて『原始・古代・中世（稿）』[14]が刊行され，『日本の考古学』以降の成果が盛り込まれ，現在までの土器製塩研究の一応の到達点となっている。

昭和55年には岡山県玉野市の沖須賀(おきすが)遺跡が玉野市教育委員会によって発掘調査された[15]。検出された遺構は，古墳時代の炉跡3基・土器溜り2箇所，平安～鎌倉時代の土坑3基・炉跡1基である。古墳時代の炉跡はいずれも素掘りの土坑で，中期後半の炉跡の底部には人頭大から拳大の角礫が配されていた。中世の土坑や炉跡の壁・底面には粘土が用いられており，焼け石が多いのが特徴である。遺物は須恵器，土師器，製塩土器，土錘などが出土している。

昭和56年にはいなだ浜遺跡が発掘調査された[16]。この遺跡は，丸亀市街地の北西10kmに浮かぶ広島の東部の浜に所在し，行政区画は丸亀市広島町立石浦である。昭和56・57年に石部正志を中心とする調査団によって発掘調査が実施された。調査結果の詳細については不明であるが，『発掘ニュース』等によると上層からは叩き目のない薄手尖底状の製塩土器が多量に出土し，下層からは古墳後期（7世紀）の石敷製塩炉や口縁部付近にタタキ目を残す製塩土器が出土している。

以上が備讃瀬戸地域で調査された製塩遺跡の主なものの概要であるが，これ以外にも香川県側では大浜遺跡[17]やガンド浜遺跡[18]が調査されているが遺構は検出されておらず，岡山県側では倉敷市阿津走出遺跡[19]が調査され，作業場や製塩土器堆積層が検出されている。

また香川県下の通常の集落遺跡である南草木(みなみくさき)遺跡[20]，大門(だいもん)遺跡[21]，稲木(いなぎ)遺跡[22]，下川津(しもかわつ)遺跡[23]等の発掘調査で住居址・土坑・包含層から製塩土器が検出されているが，ここでは詳しくは触れない。

(3) 備讃瀬戸の製塩遺跡の分布と構造

喜兵衛島遺跡調査以降これまでの調査は，資料の蓄積とそれに伴って近藤によって提示された遺跡の構造と年代観についての追試が進められた段階とみてよいであろう。現在までの研究段階をまとめるに当たって，まず，備讃瀬戸地域の製塩遺跡の分布状況から見ていくことにしよう。

備讃瀬戸地域での製塩遺跡は，いくつかの集中箇所が認められる。1つは岡山県邑久郡牛窓町周辺，2つは岡山県玉野市・香川県香川郡直島町周辺，3つは岡山県倉敷市児島・香川県坂出市

第１表　香川県製塩遺跡地名表（製塩土器出土地を含む）

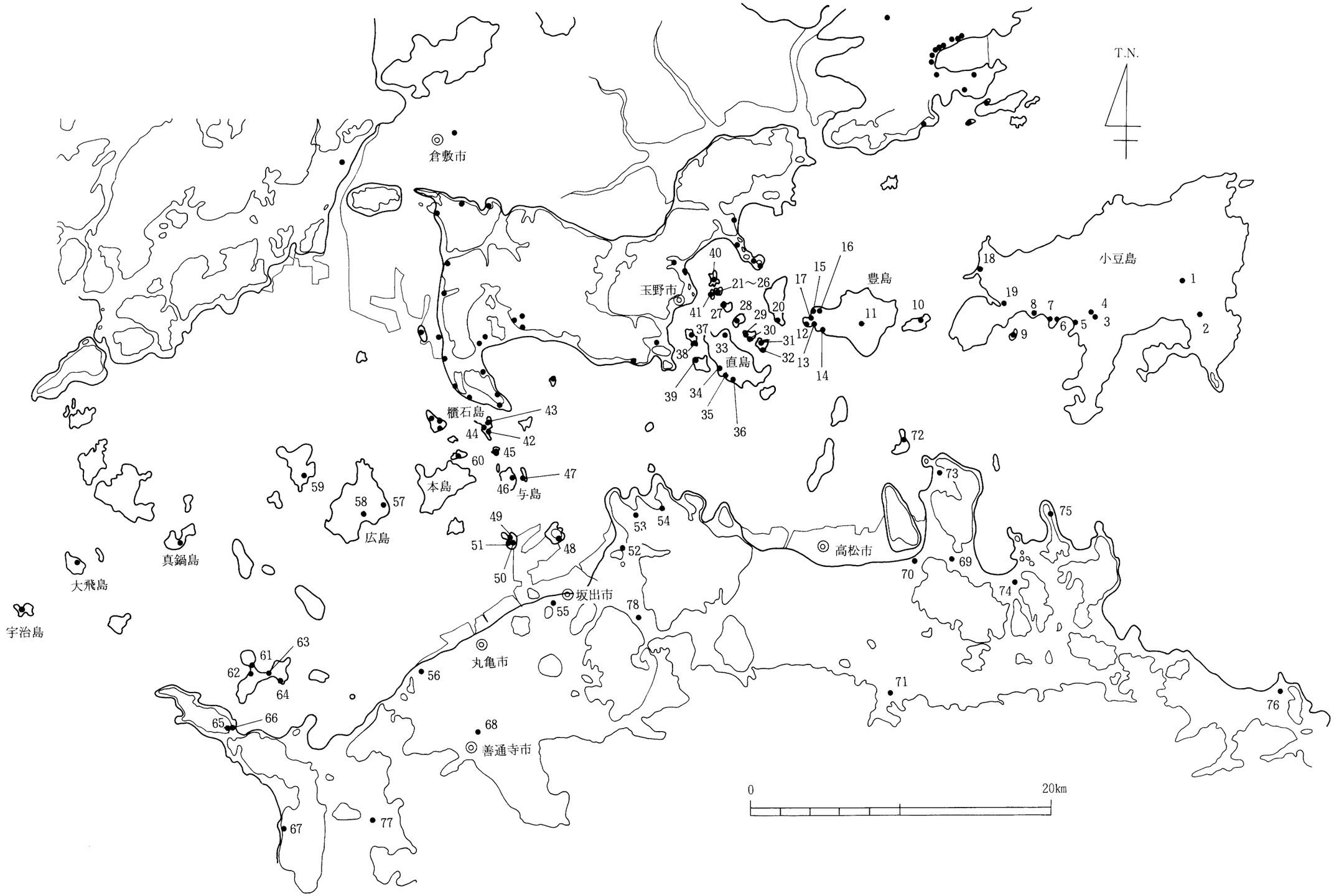
番号	遺跡名	所在地	製塩土器の種類（大浦浜遺跡編年による）										表採，共伴遺物他	文献
			Ⅰ1～5	Ⅰ6	Ⅰ7～9	Ⅰ10	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	不明		
1	釘ヶ谷遺跡	小豆郡内海町安田釘ヶ谷	○										管状土錘，弥生土器，須恵器，有溝石錘，石斧，槌石，石鏃	1
2	栗地遺跡	〃　内海町安田												2
3	信谷遺跡	〃　池田町池田信谷・土川										○	管状土錘，弥生土器とともに表採石錘	
4	山風呂遺跡	〃　〃　池田上地										○	管状土錘，弥生土器とともに表採	
5	浜条遺跡	〃　〃　池田浜条			○								弥生土器，須恵器	
6	西風呂遺跡	〃　〃　浦生西風呂										○	管状土錘，弥生土器	2
7	浦生遺跡	〃　〃　浦生角田										○	管状土錘，弥生土器	
8	入部遺跡	〃　〃　浦生入部			○								棒状土錘	2
9	白ヶ浦遺跡	〃　土庄町大余島白ヶ浦										○	棒状両孔土錘	
10	積遺跡	〃　〃　伊喜末小豊島入		○									土錘，縄文，弥生土器，石錘，石鏃，土師器	2
11	檀山遺跡	〃　〃　豊島檀山	○										弥生土器	
12	横引遺跡	〃　〃　豊島家浦后飛岬										○	蛸壺，弥生土器，石鏃，須恵器	
13	柚ヶ浜遺跡	〃　〃　〃　浦柚										○	弥生土器，須恵器，石器，古人骨	2
14	神子ヶ浜遺跡	〃　〃　〃　浦神子ヶ浜		○	○	○	○	○	○	○			縄文，弥生土器，石鏃，須恵器，鉄器	3
15	甲崎遺跡	〃　〃　〃　浦甲崎										○	弥生土器，石器	
16	中玉浜遺跡	〃　〃　〃　浦中玉浜										○	土錘，凹石，敲石，石錘，石鏃，宋銭	4
17	水ヶ浦遺跡	〃　〃　〃　浦水ヶ浦		○	○	○	○	○	○	○			管状土錘，有溝土錘，飯蛸壺，棒状両孔土錘，須恵器，土師器	2
18	伊喜末遺跡	〃　〃　伊喜末中島										○		5
19	要鉄遺跡	〃　〃　淵崎要鉄										○		6
20	鞍掛浜遺跡	香川郡直島町井手						○	○	○			蛸壺，土師器，須恵器	
21	喜兵衛島北西浜遺跡	〃　〃　喜兵衛島				○	○							6・7
22	〃　北東浜遺跡	〃　〃　〃										○		6・7
23	〃　南東浜遺跡	〃　〃　〃			○		○	○						6・7
24	〃　南西浜遺跡	〃　〃　〃										○		6・7
25	〃　第６号墳	〃　〃　〃							○					6
26	〃　第13号墳	〃　〃　〃				○							鉄製釣針	6
27	京の上藪遺跡	〃　〃　京の上藪										○		
28	局島南西浜遺跡	〃　〃　局島								○				
29	はしもと畑遺跡	〃　〃　家島										○		
30	家浦遺跡	〃　〃　家浦										○		

番号	遺跡名	所在地	製塩土器の種類（大浦浜遺跡編年による）									表採，共伴遺物他	文献
			$I_{1\sim5}$	I_6	$I_{7\sim9}$	I_{10}	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	不明	
31	大福浦遺跡	〃　〃 大福浦										○		
32	アババ遺跡	〃　〃 向島										○		
33	重石遺跡	〃　〃 木村重石										○	須恵器	
34	横防遺跡	〃　〃 横防										○	須恵器，焼石，灰	
35	外ヶ浜遺跡	〃　〃　〃										○		
36	倉浦遺跡	〃　〃 倉浦								○			弥生土器，須恵器	9
37	葛島東浜遺跡	〃　〃 葛島										○		10
38	葛島南浜遺跡	〃　〃 葛島										○		10
39	荒神島遺跡	〃　〃 荒神島									○		土師器，須恵器，石製模造品，皇朝銭	2・11
40	牛ヶ首島遺跡	〃　〃 牛ヶ首島										○		
41	屏風島遺跡	〃　〃 屏風島										○		
42	大浦浜遺跡	坂出市櫃石町大浦浜	○		○	○	○	○	○	○			管状土錘，棒状両孔土錘，有溝土錘，鉄製釣針，飯蛸壺	
43	がんど浜遺跡	〃　〃 がんど浜						○						
44	西浦遺跡	〃　〃 石浦						○						
45	岩黒島遺跡	〃						○					管状土錘，有溝土錘，飯蛸壺	
46	大州浜遺跡	〃　与島町東方			○			○					管状土錘，有溝土錘，弥生土器，棒状両孔土錘，飯蛸壺，須恵器，土師器	12
47	御宮島遺跡	〃　〃 小与島										○		
48	瀬居本浦遺跡	〃　瀬居町本浦										○		
49	沙弥ナカンダ浜遺跡	〃　沙弥北通り	○		○			○					管状土錘，有溝土錘，棒状両孔土錘，飯蛸壺	13
50	西浦遺跡	〃　〃 西浦						○						13②
51	白石古墳	〃　〃						○						13②④
52	高屋遺跡	〃　高屋町	○	○	○	○								14
53	小原遺跡	〃　王越町						○					管状土錘，飯蛸壺，棒状両孔土錘	15
54	蝶塚遺跡	〃　〃 木沢		○										2
55	下川津遺跡	〃　川津町下川津			○			○	○				管状土錘，飯蛸壺	16
56	南鴨遺跡	仲多度郡多度津町南鴨								○			管状土錘，有溝土錘，棒状両孔土錘，飯蛸壺	
57	立石いなだ浜遺跡	丸亀市広島町立石							○					17
58	江ノ浦遺跡	〃　〃 江ノ浦						○						
59	高州遺跡	〃　〃 手島高州								○				
60	向島遺跡	〃　本島町笠島向島							○				管状土錘，有溝土錘，飯蛸壺	2

番号	遺跡名	所在地	製塩土器の種類（大浦浜遺跡編年による）									表採，共伴遺物他	文献
			$I_{1\sim5}$	I_6	$I_{7\sim9}$	I_{10}	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	不明	
61	粟島東風浜遺跡	三豊郡詫間町粟島東風浜		○	○	○	○	○	○	○			管状土錘，有溝土錘，棒状両孔土錘，飯蛸壺，縄文，弥生土器，須恵器	18
62	粟島西浜遺跡	〃　〃　〃西浜										○	縄文，弥生土器，須恵器	19
63	馬城遺跡	〃　〃　〃馬城		○	○	○	○	○	○	○				2
64	不天ノ州遺跡	〃　〃　〃不天						○	○	○			土錘，蛸壺	
65	大浜遺跡	〃　〃　荘内大浜			○			○					管状土錘，有溝土錘，棒状両孔土錘	20
66	船越遺跡	〃　〃　〃		○	○	○	○	○					土錘，石錘	2
67	南草木遺跡	〃　仁尾町仁尾南草木		○				○						21
68	稲木遺跡	善通寺市稲木町			○								集石墓，包含層出土，模造品1点，飯蛸壺	22
69	大空遺跡	高松市高松町大空すべり山	○											2・23
70	南谷遺跡	〃　高松町南谷												
71	竹本遺跡	〃　植田町竹本												
72	大島遺跡	木田郡庵治町大島												2
73	高州浜遺跡	〃　〃　高州浜												2
74	天野遺跡	大川郡志度町鴨庄大串	○											24
75	大串長蛇ケ谷遺跡	〃　〃　〃			○					○			棒状両孔土錘，飯蛸壺	
76	松原遺跡	〃　白鳥町松原			○									25
77	大門遺跡	三豊郡高瀬町上勝間						○	○				溝出土	26
78	本鴨遺跡	坂出市加茂町												27

文　献

1　香川県教育委員会「釘が谷遺跡」『新編香川叢書』（以下『叢書』と略す。）S58・新編香川叢書刊行企画委員会
2　香川県『香川県史・第13巻資料編考古』（以下『県史』と略す）1987．3
3　香川県教育委員会「神子浜遺跡」『叢書』
4　香川県教育委員会「中玉浜遺跡」『叢書』
5　①香川県教育委員会「伊喜末遺跡」『叢書』
②鎌木義昌「小豆島伊喜末包含層調査報告」『吉備考古』第17号S24
6　①喜兵衛島発掘調査団「謎の師楽式」『歴史評論』72号・1956
②近藤義郎「師楽式遺跡における古代塩生産の立証」『歴史学研究』9・1958
③香川県教育委員会「喜兵衛島古墳群」『叢書』
7　水原岩太郎『師楽式土器図録』　1939．6
8　日本専売公社『日本塩業大系・史料編考古』
9　日本専売公社『日本塩業大系・原始古代中世（稿）』
10　香川県教育委員会『葛島』　1974
11　松本敏三他「瀬戸内海をめぐる祭祀遺跡」『瀬戸内の海上信仰調査報告』瀬戸内海歴史民俗資料館　1979
12　①森井正「坂出市師楽式与島貝塚」『香川県文化財調査報告』第7・S37
②香川県文化財保護協会坂出支部『大洲遺跡発掘調査概報』　1982．3
13　①近藤義郎「土器製塩と焼き塩」『考古学研究』87
②香川県教育委員会「沙弥ナカンダ浜遺跡」『叢書』
③坂出市教育委員会『沙弥ナカンダ浜遺跡現地説明会資料』1986．1．25
④香川県文化財保護協会坂出支部『沙弥島案内』S59
14　香川県教育委員会「高屋遺跡」『叢書』
15　牟礼良典「香川県高松市の小原遺跡について」『香川県自然科学館研究報告　第5巻』　1983
16　①香川県教育委員会「下川津遺跡の調査」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報（Ⅶ）』1986．3
②　〃　「　〃　」『　〃　（Ⅷ）』1987．3
17　①いなだ浜製塩遺跡発掘調査団『いなだ浜製塩遺跡発掘ニュース』No.1～3　1980．7
②　〃　『塩飽広島製塩遺跡調査ニュース』No.1～4　1980．8
③石部正志「原始・古代の土器製塩」『講座日本技術の社会史・第2巻塩業，漁業』日本評論社1985．8
18　香川県教育委員会「東風浜遺跡」『叢書』
19　香川県教育委員会「西浜遺跡」『叢書』
20　①香川県教育委員会『大浜遺跡発掘調査概報』
②香川県教育委員会「大浜遺跡」『叢書』
21　香川県教育委員会『仁尾町・南草木遺跡調査報告』　1980
22　香川県教育委員会「稲木遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』第六冊　1988．3
23　香川県教育委員会「すべり山遺跡」『叢書』
24　伊沢肇一・真鍋昌宏「志度町天野出土の弥生式土器について」『文化財協会報』昭和56年度特別号，香川県文化財保護協会1982
25　白鳥町『白鳥町史』1985
26　香川県教育委員会「大門遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』第二冊，1987．3
27　香川県教育委員会「本鴨遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報昭和58～62年度』1988．3


T.N.
倉敷市
玉野市
豊島
小豆島
直島
櫃石島
本島
与島
広島
真鍋島
大飛島
宇治島
坂出市
丸亀市
高松市
善通寺市
0
20km

香川県製塩遺跡分布図

の島しょ部で，この３ヶ所が主要な集中地帯とみてよく，これ以外には香川県小豆郡の南西海岸部と香川県三豊郡詫間町にいくつかまとまっている状況である。香川県の海岸部には製塩遺跡が極端に少ない点が注意されるが，これはどのような理由なのだろうか。この地域には元来製塩遺跡は営まれなかったものなのか，それとも後世に破壊されてしまったものか。備讃瀬戸の海岸線は多くの場合砂洲が形成されており，遺跡はこの砂洲の上に営まれている。坂出市街地を例にとると，旧国道11号線付近が地形的に高く，これより南の，旧国道より約120ｍの地点がもっとも低い地域になっている。坂出市街地も製塩遺跡が立地するのと同様な海浜地形だったと推定できるとともに，坂出港でかつて製塩土器が採集されており，製塩遺跡が所在する可能性がある。

また備讃瀬戸南岸には近世から近代にかけてたくさんの塩田が営まれており，塩田築造のために遺跡が破壊された可能性も考えられ，本来はたくさんの遺跡が所在したとこごでは考えておきたい。

次に遺跡の構造について見てみよう。先述したように製塩遺跡は５つの要素から構成されると推定されている。つまり，「製塩土器堆積層」「タタキ面」「炉」「一般的な包含層」「居住地」の５つである。

製塩土器堆積層と呼ばれるものは製塩土器の破片だけが厚く堆積し，層をなしているものを指す。古墳時代後期のものは喜兵衛島遺跡や沙弥ナカンダ浜遺跡で検出され，本遺跡では古墳時代後期～平安時代のものが検出されており，古墳時代後期以降の製塩遺跡には通有のものとみなしてよいと思われるが，弥生～古墳時代中期では層をなすまでの製塩土器の廃棄量はなかったものと考えられ，土坑から一括して出土する程度である。

製塩炉については最も古いものとして弥生時代後期の上東遺跡のものが知られている。これは先述したとおり長方形の土坑で，壁面に粘土が利用されている。古墳時代前期のものは沖須賀遺跡で検出されているがこれは素掘りの土坑で，中期後半のものには底に角礫が配されている。古墳時代後期になると石敷き炉が出現するようで，喜兵衛島遺跡，沙弥ナカンダ浜遺跡，いなだ浜遺跡や本遺跡で検出されている。古墳時代の代表的な炉跡を示したものが次表である。

遺　構　名	長さ（cm）	幅　（cm）	深さ（cm）	形　状	敷き石
喜兵衛島南東浜遺跡第１号炉	270	150	20	楕円形	底面・側面
喜兵衛島北西浜遺跡炉跡	径120		――	円　形 摺鉢状	石塊 ３～４個
沙弥ナカンダ浜遺跡	215	100	――	楕円形	底面
沖須賀遺跡２号炉第Ⅱ操業面	180	130	10	楕円形	底面　角礫
大浦浜遺跡	320	150	20～32	楕円形	底面　両端

第２表　製塩炉跡一覧表

これらの製塩炉は一般に煎熬用と考えられているが，沙弥ナカンダ浜遺跡では弥生時代後期～古墳時代前期の焼き塩炉と考えられる遺構が見つかっているのは先述したとおりで，今後類似遺構の検出が期待される。

タタキ面について近藤は次のような特徴を指摘している。

(1) 遺跡の中心部にある。

(2) 大きさは喜兵衛島南東浜遺跡で５×５ｍ，北西浜で20×7.5ｍである。

(3) １遺跡に１広がりを原則とするようである。

(4) 灰・炭の微粒を含んだ１㎝未満の薄層として識別でき，これが数十層重なった部分もある。

(5) 極度に固化した部分があり，炉の周辺近くにはピットがある。

(6) タタキ面には土器類が少ない。

(7) 土器ブロックに接続する。タタキ面が土器層１ブロックに移行する前後には，面間に炭層が伴うことが多い。

(8) タタキ面は炉の縁を構成する。

(9) タタキ面及び面間の土中から多量の炭酸カルシウムが検出される。

以上の特徴を持つ遺構の成因は，タタキ面が居出し場及び土器内から塩を取り出したり，スケールを掻き落とすなどの作業場として活用されたために形成されたものと推定されている。

類似遺構は坂出市大洲浜遺跡で「粘土凝固盤」という名称で報告されているが，最近の発掘調査での検出例は知られていない。大浦浜遺跡での発掘調査では奈良～平安時代の炭酸カルシウム層が凝固した状態で約400㎡の範囲に広がっているのが検出された。詳しくは第４章で報告するが，これもタタキ面の一種と見てよいだろう。

一般的な包含層は炉・タタキ面・製塩土器堆積層の周辺に広がる包含層で，製塩土器を主体にするが，場所によっては土師器，須恵器が多いこともあり，炭，貝がら，獣骨，魚骨なども含まれているものを指している。この種の包含層は多くの遺跡で検出されている。

居住地については今後の課題とされているが，喜兵衛島遺跡調査以後現在まで，備讃瀬戸地域の製塩遺跡発掘調査において住居址が報告された例は知られていない。住居址が浜堤上に営まれている場合は検出は難しいが，浜堤周辺の丘陵裾部に営まれていることも想定できるため，今後そのような場所についても発掘調査が必要であろう。

以上が製塩遺跡を構成する５つの要素であるが，これを別の言い方をすれば生活の場（集落），生産の場(炉)，土器の捨て場となり，さらにこれに埋葬の場(古墳)を含めることも可能である[24]。

どのような古墳を製塩集団の墳墓とするかは理論的に難しい点があるが，仮に製塩土器を副葬している点を一つの標識にすると，喜兵衛島６・13号墳[25]，白石古墳[26]，琴海１号墳[27]などが現在までに知られている。

(4) 今後の課題

古代の製塩は煎熬工程で土器を用いる，所謂「土器製塩」で，この方法は弥生時代中期に始まり，奈良時代には終焉を迎えると考えられていたが，本遺跡の発掘調査において製塩土器の大量破棄は平安時代に入るまで存続するようで，また，製塩土器そのものは鎌倉時代までなんらかのかたちで使用されていることが明らかになった。

今後各遺跡において「土器製塩」と「製塩土器」の終焉の時期を確認していく必要があろう。

土器製塩が終了した後の平安時代後期～鎌倉時代の製塩については，本遺跡や沖須賀遺跡において多数の遺構が検出され，研究が開始された段階である。これについては，第６章で詳しく考

察している。

土器製塩の工程は，海水を濃くする採鹹工程と，鹹水を煮詰める煎熬工程とに分けられる。現在までの発掘調査・研究によると，製塩土器・炉・タタキ面はいずれも煎熬工程に係わる遺構・遺物である。一方，住居地・一般的包含層・古墳は製塩に従事した集団に係わるもので，採鹹工程に係わる遺構・遺物については調査・研究が進んでいないのが現状である。

採鹹工程については，文献史料に散見する「藻塩焼く」等の語句解釈から，藻を焼きこれに海水を注ぐ方法や，簾の上に藻を並べ上から海水を注ぐ方法などが想定されているが，考古学的に実証されたものではない。

倉浦遺跡では鹹水溜めと推定される土坑が検出されており，広江・浜遺跡では須恵器大甕が据えられた状態で検出されており，採鹹工程にかかる遺構の可能性が考えられ，今後この点の追究が土器製塩研究の大きな課題の一つであろう。

次に，製塩土器については用語の定義・編年・用途などの問題がある。「製塩土器」という名称は，広義には塩づくりに使われた土器を意味するが，備讃瀬戸地域ではこれとは別に「師楽式土器」という名称がある。師楽式土器という名称は研究史の項で述べたように，普通の弥生式土器とは異なるという視点から認識された一群の土器を指している。その後研究が進むと，それまで師楽式土器と一般に呼ばれてきた土器は大きく２種類に分かれることが明らかになった。１つは一定の形をもち量的にも多い土器類で，これを現在では製塩土器と呼んでいる。もう１つは通常の土師器の器形に近似しているが，胎土に砂粒が多く手づくね的な作り方をしている土器類で，「師楽的土師器」という名称が与えられている。これは製塩土器を製作した人々によって作られ，通常の土師器，須恵器と共伴することから，古墳時代後期において専業的生産を可能にする社会的状況がすべてに出現していたことを意味すると考えられている[28]。

この師楽的土師器の器種として甕・高杯など通常の土師器と同じで，用途も同様とみてよいと思われる。本遺跡の調査によると時期は古墳時代後期に多く，それに前後する時代のものは認められず，この時期の特殊な現象とみることができそうで，その意味について今後の検討が必要である。

用語の定義は以上のように土器そのものの認識，ひいては土器製塩に関わる問題であろう。

編年については，先述のように近藤による全時代を通しての編年[29]に次いで，弥生時代中期から古墳時代前半までを細分した川入・上東遺跡編年[30]，古墳時代後期を細分した広江・浜遺跡編年[31]，古墳時代前半を細分した沖須賀遺跡編年[32]などがあり，各時期ごとに徐々に深化されつつあるといってよいだろう。

用途については，従来から製塩土器は煎熬用のものと一元的に捉えられてきたが，最近の発掘調査によると内陸部の遺跡から製塩土器が多く出土することや沙弥ナカンダ浜遺跡から焼塩炉と推定できる炉跡が検出されるなどから，製塩土器は焼塩処理にも用いられたと考えられるように至っている。しかしながらすでに指摘されているように[33]，生産地において煎熬用と焼塩用が識別されているのは北部九州を中心とする玄界灘式製塩土器だけで，焼塩については理論的・実証的考証が不十分の段階である。

本遺跡の調査においても，この点を念頭において遺物整理を試みたが，古墳時代後期の製塩土器群に容量の大小があり，器形にいくつかの差異を見い出した点や奈良～平安時代の製塩土器に数％の穿孔のあるものが存在するなどが確認できたが，これが焼塩の問題とどう関係するのかに

ついては結論を導き出すことはできなかった。

以上のように，製塩土器については，まだ未解決の問題が多いといえるだろう。

その他，製塩集団，燃料・製塩土器製作，流通等，古代製塩についてこれから研究していかなければならない課題は多く，中世以降の製塩についての考古学的研究は緒についたばかりと言え，今後の調査に多くを委ねている。

注

(1) 水原岩太郎『師楽式土器図録』1939年

(2) 坪井清足他『岡山県笠岡市高島遺跡調査報告』1956年

(3) 喜兵衛島発掘調査団「謎の師楽式」『歴史評論』72号　1956年

(4) 近藤義郎「師楽式遺跡における塩生産の立証」『歴史学研究』　第223号　1958年

(5) 近藤義郎『日本塩業大系　原始・古代・中世（稿)』1980年　日本専売公社

(6) 森井正「坂出市師楽式与島貝塚」『香川県文化財調査報告』第七　1962年　香川県教育委員会

(7) 近藤義郎「生産の発達・製塩」『日本の考古学』古墳時代下　1966年　河出書房

(8) 香川県教育委員会「沙弥ナカンダ遺跡」『新編香川叢書』考古編　1983年

(9) 近藤義郎「土器製塩と焼き塩」『考古学研究』　87

(10) 岡山県教育委員会「上東遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書第２集』1973年

(11) 間壁忠彦・間壁葭子「広江・浜遺跡」『倉敷考古館研究集報』第14号　　1979年

(12) 香川県教育委員会「高屋遺跡」『新編香川叢書』考古編　1983年

(13) 日本塩業大系編集委員会『日本塩業大系　資料編考古』1978年　日本専売公社

(14) 日本塩業大系編集委員会『日本塩業大系　原始・古代・中世（稿)』1980年　日本専売公社

(15) 玉野市教育委員会『沖須賀遺跡』1981年

(16) いなだ浜遺跡発掘調査団『発掘ニュース』『調査ニュース』1980・81年

(17) 詫間町教育委員会『大浜遺跡発掘調査概要』1981年

(18) 香川県教育委員会「ガンド浜遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報　昭和59～62年度』1988年

(19) 岡山県教育委員会「本州四国連絡橋陸上ルート建設に伴う調査」『岡山県埋蔵文化財報告』12～16　1982年３月～1986年３月

(20) 香川県教育委員会『仁尾町・南草木遺跡調査報告』1980年

(21) 香川県教育委員会「大門遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』第二冊　1987年

(22) 香川県教育委員会「稲木遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』第六冊　1989年刊行予定

(23) 香川県教育委員会「下川津遺跡の調査」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報』Ⅷ　1986年

(24) 文化庁『広域遺跡保存対策調査研究報告書』６　1985年

(25) 注(3)に同じ

(26) 注(8)に同じ

(27) 岡山県教育委員会「琴海１号墳」『本州四国連絡橋陸上ルート建設に伴う発掘調査Ⅰ』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告36　1980年

(28) 注(11)に同じ

(29) 注(7)に同じ

(30) 注(10)に同じ

(31) 注(11)に同じ

(32) 注(15)に同じ

(33) 白石太一郎「塩」『日本歴史考古学を考える』上　有斐閣

第２章　調査に至る経緯と経過

第１節　発掘作業の経過

本遺跡は第１章の「遺跡の立地と環境」で述べたとおり，古くからその所在は知られていたが，昭和37年坂出市教育委員会によって元櫃石中学校校庭の一部が発掘調査された以後はそのまま保存されていた。

昭和45年７月本州四国連絡橋公団（以下，本四公団と略す）が設立され，これ以後本州四国連絡橋児島・坂出ルート（以下，瀬戸大橋と記す）建設予定地内の埋蔵文化財の取り扱いについて協議が繰り返し行われ，本遺跡もその対象となった。この事前協議の動きについては『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ・羽佐島遺跡（Ⅰ）』に詳しく述べられているので，ここでは省略する。昭和51年度に至り，事前協議の結果建設予定地内で予備調査を実施することになり，同年６月本四公団第二建設局との間で海峡部埋蔵文化財予備調査委託契約（その１）を締結し，同年８月櫃石島第Ⅱ調査区より予備調査を開始した。

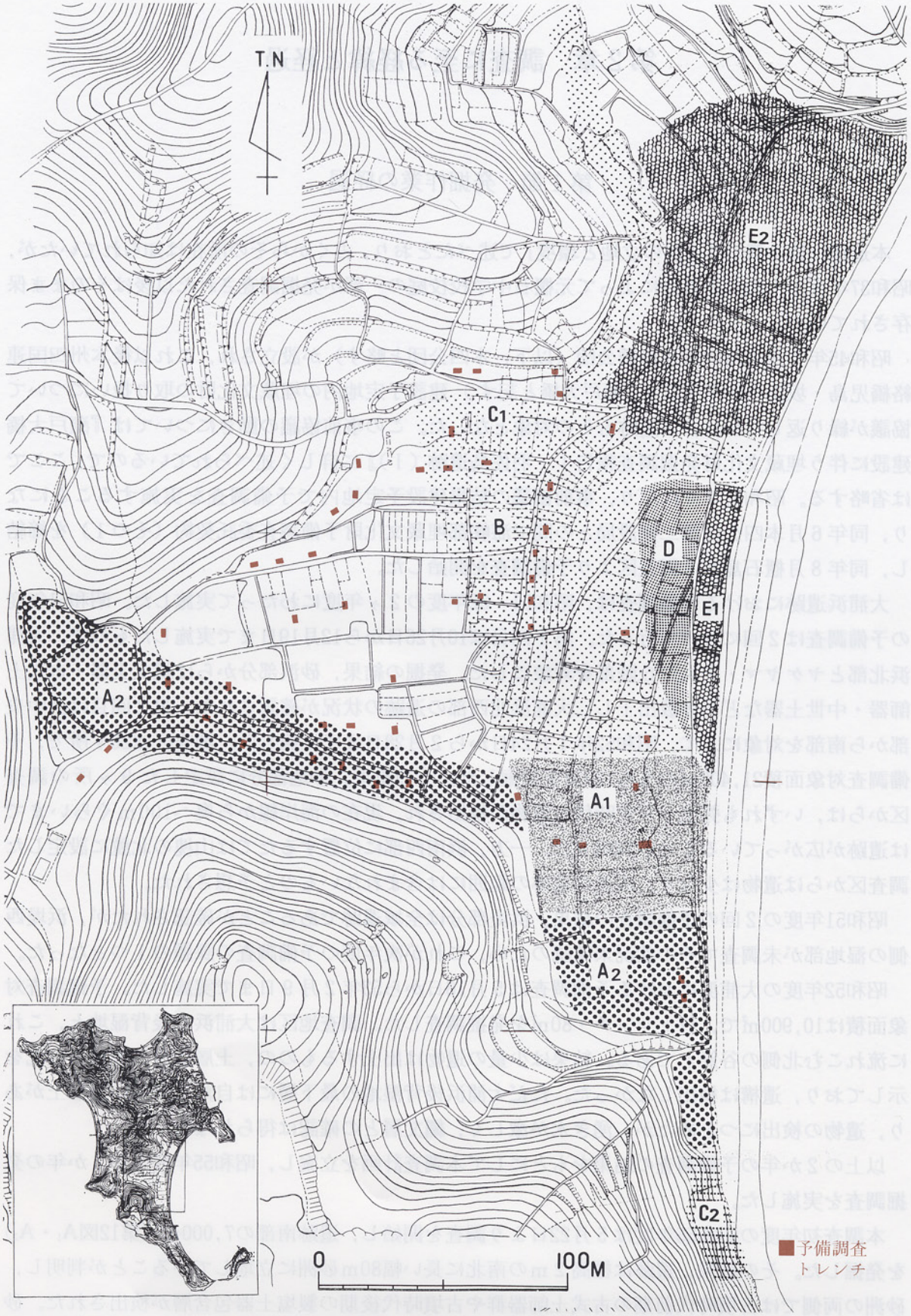
大浦浜遺跡における予備調査は，昭和51・52年度の２ヶ年度にわたって実施した。昭和51年度の予備調査は２回に分けて行った。第１回目は10月26日から12月19日まで実施したもので，大浦浜北部とヤケヤマ・中丸の丘陵部を対象にした。発掘の結果，砂浜部分からは縄文土器・古式土師器・中世土器などが多数出土し，大浦浜北西部の遺跡の状況が確認された。第２回目は浜中央部から南部を対象にして，昭和52年１月24日から２月28日まで実施した。調査区は20ヶ所で，予備調査対象面積21,400㎡のうち129㎡を発掘した。その結果，砂地部分に設定した９ヶ所の調査区からは，いずれも弥生～平安時代の遺物が検出され，現在の海岸線から奥へ100ｍぐらいまでは遺跡が広がっていることが判明した。一方，浜南西部に位置するたては山塊の北麓に設定した調査区からは遺物は少なく，広義の遺跡の範囲には含まれないものと予想された。

昭和51年度の２回の予備調査の結果，浜堤部分は全域遺跡であることが確認されたが，浜堤西側の湿地部が未調査でその状況未確認のため，これが次年度の予備調査の課題の１つとなった。

昭和52年度の大浦浜における予備調査は５月16日から53年２月９日まで実施した。予備調査対象面積は10,900㎡で，17トレンチ・80㎡を発掘調査した。調査地区は大浦浜の後背湿地と，これに流れこむ北側の谷筋とである。結果は少量の遺物は出土するものの，土層は自然堆積の状況を示しており，遺構は検出しなかった。ただ大浦浜後背湿地の最下層には自然木が多い腐植土があり，遺物の検出につとめたが，湧き水が激しく，縄文層との確認は得られなかった。

以上の２か年の予備調査の結果をもとにして本調査計画を立案し，昭和55年度から３か年の発掘調査を実施した。

本調査初年度の昭和55年度は５月22日より調査を開始し，遺跡南部の7,000㎡（第12図A_1・A_2）を発掘した。その結果，遺跡は標高２ｍの南北に長い幅80ｍ砂洲に立地していることが判明し，砂洲の両側では古墳時代前期の古式土師器群や古墳時代後期の製塩土器包含層が検出された。砂洲東側では最下層に弥生時代前期の包含層が検出され，その上層には奈良・平安時代の製塩土器



第12図　大浦浜遺跡調査区域図

包含層があり，さらにこの包含層を切り込んで鎌倉時代の製塩遺構と考えられる粘土遺構が多数検出された。各時代の製塩関係の遺構・遺物以外には古墳時代の船形土製品，手ずくね土器，奈良・平安時代の奈良三彩，帯金具，皇朝十二銭などの祭祀関係の遺物も多く出土した。

昭和56年度は4月6日より調査を再開し，遺跡中央部から北部（第12図B）にかけて，10,000㎡の発掘を行った。その結果，昨年度にひきつづき砂洲西側から古式土師器群や古墳時代後期の製塩土器堆積層が検出された。祭祀遺物も出土し，古墳時代後期のミニチュア土器や，奈良時代の奈良二彩，和銅開珎をはじめとする皇朝銭も出土した。本年度の最大の成果は縄文時代の遺構・遺物を多く検出したことである。縄文土器は前期から後期までのものがあるが，前期のものは，浜から奥まった地点から出土し，中・後期のものは浜北部から多量に出土した。この中・後期の縄文土器包含層は，前述した弥生時代以降の遺跡が立地する砂洲によっておおわれており，現在の海浜地形の形成についての知見が得られた。

最終年度である昭和57年度の調査は4月6日より再開した。前年度の調査を継続し遺跡北西端と南端地区（第12図C）の発掘をすすめ，同年9月17日終了した。調査面積は6,100㎡で，南端地区より鎌倉時代の石組遺構を3基検出できたのは大きな成果であった。これまでの調査で大浦浜遺跡の調査は一応完了したが，昭和57年1月，遺跡北西部の未発掘地（第12図D）が建設作業場所として造成されることになったため，事前調査を実施した。調査面積は1,300㎡で，昭和55年1月17日より同年3月23日まで行った。この調査では，古墳時代後期の製塩土器堆積層の北端を確認でき，縄文時代の土器包含層や古式土師器の包含層も検出できた。さらに，中世の粘土遺構を7基確認し，これについては埋め戻し保存措置を講ずることができた。

以上が3ヶ年度にわたる調査の経過であるが，本遺跡は全体で約35,000㎡の広がりをもつと推定できるが，このうち今回は24,400㎡を発掘調査した。未調査で残っているのは約10,000㎡となり，このうちの2,000㎡（第12図E_1）は遺跡の中央東端の部分でここは大正年間に砂取りが行われたところで，恐らく遺跡は破壊されてしまっているであろう。残り約8,000㎡（第12図E_2）は遺跡北部の元櫃石中学校の敷地で，ここは比較的残存状態は良好と思われ，縄文時代・古墳時代後期・奈良・平安時代の遺構・遺物があると思われる。この残された遺跡をいままでの調査成果を生かして，今後どのように保護していくかが，今回の調査に課された最後の課題と言えるであろう。

さて，以下に各年度の大浦浜遺跡の調査組織と日誌を抄録する。

昭和51年度予備調査

課長	沖吉和祐
課長補佐	藤本敏春
係長	松本豊胤
技師	松本敏三
	大山真充
嘱託	大砂古直生

昭和52年度予備調査

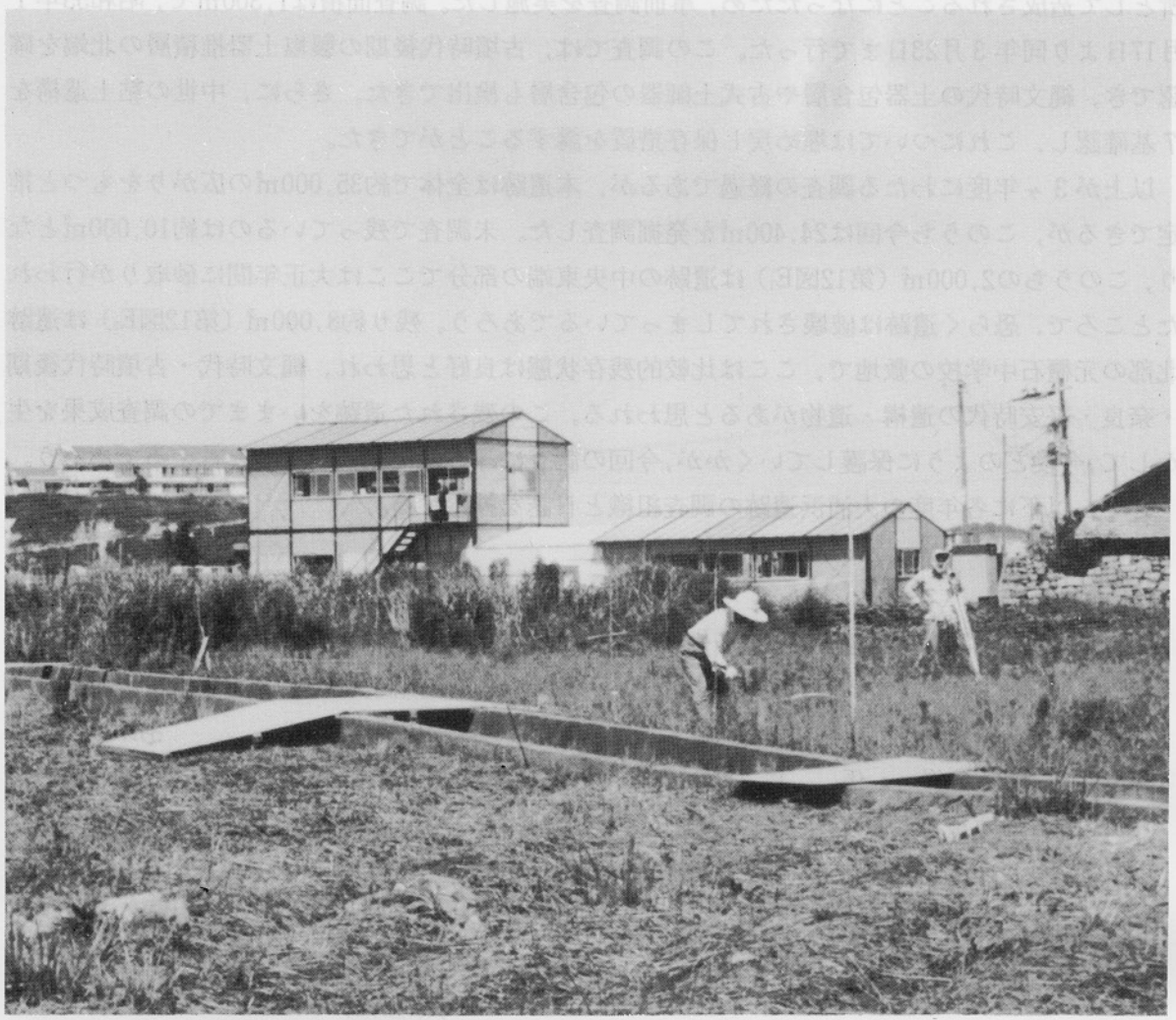
課長	沖吉和祐
課長補佐	斉藤嘉一
係長	松本豊胤
技師	広瀬常雄
	大山真充
	沢井静芳

昭和55年度本調査

課長	笹川高美
課長補佐	前田治衛
副主幹	松本豊胤
所長	増田正伯
係長	伊沢肇一
技師	大山真充
	安田和文
	真鍋昌宏
	林　正弘
嘱託	大砂古直生
	羽床正明
	玉城一枝
	西村尋文

昭和56年度調査		
	課長	笹川高美
	課長補佐	前田治衛
	副主幹	松本豊胤
	所長	増田正伯
	係長	秋山　忠
	技師	大山真充
		東原輝明
		森本義臣
		真鍋昌宏
	嘱託	坂口淳子
		白本　清
		町川義晃
		田村雅彦

昭和57年度調査		
	課長	笹川高美
	課長補佐	林　茂
	副主幹	松本豊胤
	所長	増田正伯
	係長	秋山　忠
	主任技師	広瀬常雄
	技師	林　正弘
		安田和文
		野中寛文
		真鍋昌宏
	嘱託	坂口淳子
		玉城一枝
		田村雅彦



第13図　昭和56年度調査区画設定風景

調査日誌抄

昭和55年度

昭和55年

5月22日　現場作業初日。調査員３名作業員19名，発掘区草刈開始。５×５ｍの調査区画決定。

5月26日　草刈り続行中。借地交渉のため，庶務係来島。地権者と土地範囲，立毛の確認。

5月28日　発掘開始。Ｃ～Ｆ－25・26区から着手する。

5月29日　事務所用プレハブ搬入日。７：30江尻桟橋より出発。９：30大浦浜到着，15：30荷上げ完了。

6月３日　Ｃ～Ｆ－22～24区調査進む。Ｆ側で須恵器出土目立つ。プレハブ建設開始。

6月５日　第２・３層除去。転磨した遺物多い。

6月９日　濃霧の為通船の出航１時間遅れる。電気工事終了。坂出より物品届く。与島より大浦浜遺跡発掘用具届く。

6月10日　Ｅ・Ｆ－25区写真撮影。

6月11日　Ｆ－23区で，モルタル状の巾５cm帯が円形に回る。SX8002と命名。Ｈ－26区で土器片集中。

6月13日　作業員賃金支給日。庶務係来島。Ｈ－26区，土器集中区25区に続く。Ｇ－25区第２層除去終わる。

6月17日　ベルコン・ビデー到着。借地契約作業続く。Ｃ～Ｅ－20区第２層発掘。

6月19日　ベルコン用電気工事始まる。

6月26日　遺物水洗いを行う。与島調査員，藤好・白本見学。

6月30日　Ｊ－15・16区調査開始。

7月４日　久しぶりの晴。ベルコン本日より使用。Ｋ～Ｍ－15・16区着手，遺物少ない。

7月８日　文化庁稲田孝司氏来島。

7月９日　３日連続雨が降る。借地契約の為庶務係来島。

7月14日　雨の降らない日なし。遺物の水洗いを行う。奈良三彩らしき破片２点出土。

7月15日　久しぶりの晴れの日である。湧水が激しい。SX8001～03精査進める。下層に石あり。Ｋ～Ｎ－15～20区発掘着手。

7月18日　Ｎ－18～20区第１層除去。

7月23日　花見山遺跡調査終了。

7月24日　Ｋ～Ｎ－15～20区第３層発掘着手。

7月29日　Ｉ・Ｊ列再開。浜の第２期埋め立て始まる。砂取り中地表下150cmで遺物包含層現れる。県庁及び市港湾課へ連絡。

第14図　草刈り風景

7月31日　香川大学歴史学研究会20名程見学。

8月１日　発掘をやめ実測をする。作業員花見山遺跡埋め戻し作業に行く。

8月４日　発掘をやめ出土遺物の水洗い。高松市教委主催親子歴史教室メンバー130名見学。13日から15日まで盆休み。坂出事務所にて整理。

8月18日　盆あけ，現場再開。津田高校，多田教諭他生徒４名発掘に参加。10時過ぎより雨が降る。

8月19日　久しぶりに作業員浜に集合。坂出高校，内藤教諭他生徒４名発掘参加。

8月28日　Ｆ－19区にて船形土製品出土。

9月１日　やっと青空。Ｋ～Ｎ－15～20区プールになる。

9月３日　Ｅ－13･14区で粘土土坑検出。新聞取材。

9月５日　Ｃ～Ｈ－21～26区全体写真撮影。倉敷考古館間壁葭子氏来島。

9月12日　台風一過，晴天ならず曇天。Ｋ列以西は出土遺物が少なく，かつ混在しており，旧河川だったようだ。

9月13日　本日やっとのことでＫ～Ｎ－15～20区土層図終了。雨に涙の日々でした。午後よりベルコン10台フル回転し，埋め戻しに入る。

9月18日　Ｆ－18・19区遺構実測。

9月25日　Ｃ列土層図作成にかかる。Ｃ－24区地表下80cm灰白色砂層より弥生時代中期の甕１個体出土。

9月26日　Ｋ－16区発掘に着手。Ｃ－16～20区調査再開。Ｉ・Ｊ－15・16区遺構検出にかかる。埋め戻し排土移動終了。

9月30日　県文化財保護審議会専門委員森井正氏

来島。遺構実測進む。

10月６日　Ｇ・Ｈ－18～20区遺構検出に着手。Ｇ－19・20区境界線上で粘土土坑検出。Ｎ－22～24区発掘着手。同志社大学森浩一，兵庫県教委櫃本誠一，山本三郎氏来島。

10月８日　秋祭りの為作業中止。三彩・船形土製品の写真撮影，遺構実測進める。

10月９日　Ｇ・Ｈ－19区実測終了。

10月15日　調査員真鍋，本日より大浦浜。Ｌ・Ｎ列発掘進む。

10月17日　文化財保護審議会専門委員桜井徳太郎，瀬戸内海歴史民俗資料館高橋克夫・中原耕男氏，民俗調査で来島，作業員（60才以上）６名から聞き取り。

10月20日　Ｇ・Ｈ－17・18区師楽土坑検出進む。Ｉ・Ｊ－20区にて土器消失，坂出事務所へ急ぎ連絡。

10月23日　SX8004埋土一部除去。午後松本副主幹来島。

10月27日　強風の為現場作業中止。坂出事務所にて土器分類作業中，Ｊ－19区第２層800819より船形土製品片を発見。

10月28日　花見山遺跡現場プレハブ解体。午後より作業員プレハブ撤去作業にかかる。

11月４日　Ｆ－９～12区，Ｃ－９区，Ｄ－13区発掘着手。Ｊ－15～20区実測続行。

11月７日　濃霧の為坂出からの通船欠航。調査員は大砂古１人。現場作業を中止し，土器水洗いを行う。作業員数現場始まって以来最高の62名。１人で東奔西走する。

11月13日　Ｃ～Ｆ－９～14区粘土土坑一部掘り始める。

11月14日　Ｊ－15区において土器集中区検出。SX8006･09掘り抜く。

11月17日　Ｊ－17～19区で土器が多数検出され始めた。最近，報道取材多い。少し煩わしくなる。

第15図　テレビ録画風景

11月18日　Ｊ－21区にて船形土製品出土。Ｊ－15～20区検出土器は土器群とすることに決定。

11月25日　本日より調査員安田，坂出事務所で担当分の整理に従事。四国電力海底ケーブル故障で停電，ベルコン・排水ポンプ動かず。

11月27日　SX8010掘り抜く。師楽含包層を切っている。SX8007掘り続ける。瓦器椀・土師器椀を検出。Ｊ－19区にて流木検出，焼けた木か炭が多い。

12月１日　本日より調査員林参加。Ｊ区土器群，遺物取り上げる。

12月３日　たては北麓地区草刈り終了。本日より調査員森本参加。Ｃ－６～８区発掘着手。

12月５日　Ｃ～Ｆ－９～14区遺構写真撮影。Ｃ・Ｄ－９・10区の遺構実測。

12月８日　Ｃ－４区で皇朝十二銭（万年通宝）検出。Ｊ－15～20区土器群取り上げ終了。SX8007実測着手。調査員西村本日より参加。

12月９日　岡山大学近藤義郎氏来島。たては北麓地区，本島の作業員で調査着手。

12月22日　Ｊ－18区第３層にて船形土製品検出。Ｊ－16区にて壺原位置移動。

12月23日　雨のため午後より土器水洗いを行う。Ｈ－13区より船形土製品発見。プレハブ横に作製中の物置き本日完成。

12月24日　Ｃ～Ｆ－９～14区遺構にシートを張り砂を置く。午後より現場の片付けをする。

12月25日　55年調査本日にて終了。午前中，現場・プレハブ内片付け清掃，ロープ張り等を行う。

昭和56年

１月８日　本日から現場作業再開。全調査区とも砂をかぶっている。

１月16日　Ｂ－８区で鯨骨下顎の一部を検出。（この時点では鯨骨とは認定されていない。）

１月26日　Ｂ－５区第３層下層除去作業中に神功開宝出土。

１月28日　Ｈ－14区SK1除去後に第11土器群を確認。Ｇ～Ｊ－８・９区終了する。Ｂ－

4区で長年大宝出土。

1月30日　B－8区ピット上面で鉸具出土。

2月5日　G～J－4～8区調査区設定。C・D－4～8区第4層上面写真撮影。

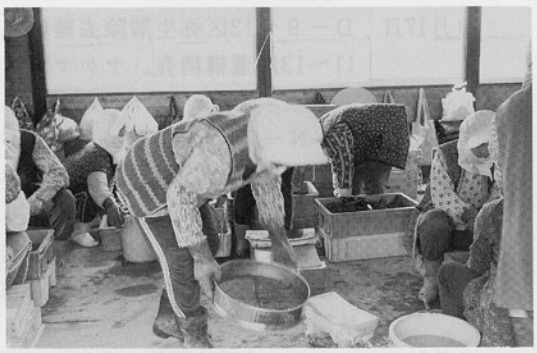
2月6日　G－6・8区の調査に着手。早くも古墳時代後期の製塩土器破片が多量に出土する。

2月9日　石川県立埋蔵文化財センターの小嶋芳孝氏来島。調査中の寺家遺跡について話を聞く。

2月18日　鯨骨の検出を終了し，写真撮影・出土状態図の作成を行う。

2月24日　G～J－4～8区第1層～3層の除去を始める。

2月26日　今冬一番の冷え込みで調査区が凍結したので水洗い作業に変更。歩渡島の箱式石棺の写真撮影を行う。



第16図　出土遺物水洗い風景

3月5日　B～D－1区（南端地区）の調査開始。

3月10日　大浦浜の南で水死体を発見。現場作業が一時混乱する。

3月16日　南端地区調査中に円板状土製品多数を検出。

3月17日　山陽放送の収録が行われる。櫃石中学校生徒見学。G－4～8区では製塩土器層の精査に入る。

3月25日　たては北麓地区の埋め戻し終了。本日で昭和55年度の現場作業を終了するため，現場・プレハブの片付けを行う。

昭和56年度

昭和56年

4月6日　昭和56年度大浦浜遺跡発掘調査開始。調査員7名。D～R－27～40区発掘前現状写真，草木伐採発掘地区設定。G－5・6区製塩土器集中箇所遺物採集。B～F－9～14区土坑実測。

4月10日　G～J－27～30区，耕作土排除続行中。J－12区，須恵器集中箇所実測。G・H－11区土器採集。B－0～03区新設。

4月13日　B－8・9区鯨骨のレベル記入，取上。

4月14日　G～J－27～30区耕作土排除完了。E－14区SX8005，平面実測。G～I－14区北壁土層実測，写真撮影。NHK「ここはお四国」で発掘現場録画。

4月20日　B～D－4～8区第4・5層上面遺構検出。プロカメラマン山内氏，「自然と生活」撮影のため，来島。

4月23日　B～D－4～8区第4・5層上面遺構全景写真撮影。C～D－1区円板状土製品集中出土。C－8区SM01実測。G－31～34区耕作土排除。

4月30日　H～J－5～8区柱穴群全面精査。B～F－7区南側，B～F－8区北側に土層確認トレンチ。C－11区SX8013断面実測。南端地区より緑釉片出土。共同企業体の野村・岩室両氏，発掘現場見学。

5月8日　C～F－10区第3層発掘開始。C－5区SX8024断面写真，B・C－0～03区第3層掘り下げ続行中。豊浜町文化財保護協会員37名現場見学。

5月13日　H～J－5～8区柱穴群平面実測，レベル記入。B～D－4～8区ピット群の断ち割り，写真，掘り抜き。A・B－8区北壁土層断面実測。作業員は3日間土器の水洗いに専念，成果230箱。ベルコン13台，排水ポンプ7台（200V・5台，100V・2台）搬入。

5月18日　F－5～6区炉跡の写真撮影，断ち割り。C～F－8区北壁土層断面実測。D～R－27～40区，J列以東の耕作土排除作業順調。船形土製品（F－30区）・滑石製紡錘車（F－33区）・提砥（F－29区）出土。

5月22日　D－12区SX8012精査続行。G～H－4～8区第4層除去。B－03区湧水溜遺構土層断面実測，写真撮影。

5月27日　G～J－8区北壁土層断面実測。K～Q－30区地表下150cmに炭化木・磨消縄文同一層。ミニチュア甑出土。

6月3日　K～Q－30区北壁土層断面実測。D～R－27～40区，J列以東の耕作土排除はあと2日で終了予定。鉄鏃出土（F－33区）。

6月11日　昨日，四国地方梅雨入り。G～H－34区土器集中箇所レベル記入。K－28区で曲物検出。K～R－34区掘り下げほぼ終了。K～L－34区より後期縄文土器約20片・石鏃1・石匙1・サヌカイト片数片出土。C－10区SK8001実測。B・C－0～03区第2遺構面完掘。昨日の刀装具（責金具）に続き，四耳壺出土（B－02区）。

6月17日　E－12区SX8006・SX09断ち割り。G・H－34区土器集中箇所遺物採集。B・C－0～03区第2遺構面平面実測。K～R－34区完掘，土層断面写真撮影。刀子出土（G－31区）。

6月23日　E－12区SX8006の¼断面実測。G－30区，SX8101断ち割り。L－28区で第14土器群検出。K～R－34区土層断面実測。

6月26日　公団の石田・金沢・大森各氏とヤケヤマ東麓地区の調査について協議。疲労蓄積のためか，今週から畳部屋で昼寝する調査員が増える。降雨のため作業員は終日土器の水洗い。

6月29日　ここ2・3日来の降雨のため，今年，昨年度調査区ともに満水。排水ポンプはフル回転すれども，調査員，排水に悪戦苦闘。皇朝十二銭（長年大宝）出土（B－0区）。

7月8日　南端発掘区全景写真撮影。湧水溜完掘全景写真。南端発掘区全区平面図作成。F～H－27～34区ピット群写真撮影。水路以北区の草刈り，杭打ち。

7月14日　F～H－24～30区第4層精査。I・J－27区南壁土層断面実測。M～R－38区発掘開始。G－5区東壁土層剝ぎ取り成功。

7月16日　F－13区SX8004断面実測。K－35～38区縄文層精査。中期の縄文土器出土（M－38区）。

7月23日　酷暑。本日より体力保持のため13：00～15：00は土器洗いを約1ヶ月間継続する予定。E－14区，SX8011実測。K－35～38区東北壁土層断面実測・写真撮影。

7月28日　F－13区SX8014埋土断面図作成。C－13区SX8015平面実測。E～H－30区深掘り終了。

8月6日　D～R－27～40区調査終了。C－12区SX8013平面実測。C～F－14区第3層除去。8月4日の坂出高校についで丸亀高校地歴部員6名，見学。

8月12日　引田中学校郷土クラブ7名，現場見学。B－03区湧水溜平面実測。明日13日より16日まで盆休み。

8月19日　K～N－45～48区縄文層精査。香川大学坂東教授，花粉分析・炭化木C^{14}分析依頼要請に応じ来訪。

8月24日　D－12区SX8012断ち割り。

8月31日　D－12区SX8012断面実測。E・F－11～12区第3層除去。ヤケヤマ東麓地区草刈り。

9月10日　全作業員，C～F－9～14区粘土遺構群下層精査。K～N－45～48区土層断面実測。

9月17日　D－9～13区弥生層除去継続。C－11～13区遺構精査。ヤケヤマ東麓地区，ユンボにより耕作土排除。

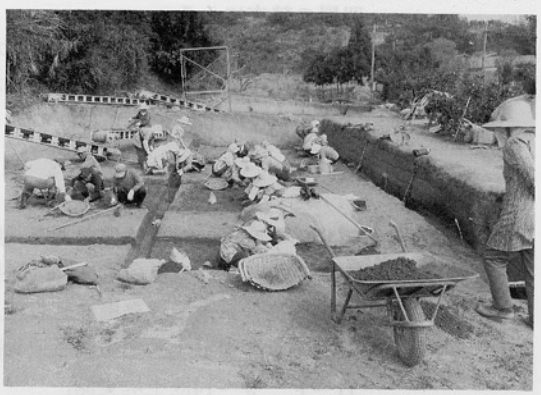
9月21日　K～N－45～48区にあった水道パイプが折れ漏水。月例担当者会であったが，急遽調査員，埋め戻しに来る。

9月25日　ヤケヤマ東麓地区，表土除去。発掘終了地区防災工事。C－10・11区粘土土坑精査。

9月30日　ヤケヤマ東麓地区第3層掘り下げ，焼土面検出（J－12区）北宋銭2枚出土。C－11区粘土土坑断面実測。

10月2日　C～F－9～14区土層断面実測図に土層名記入。これで用水路から南は全て終了。ヤケヤマ東麓地区第3層掘り下げ，皇朝十二銭「隆平永宝」出土（B－2区）。

10月6日　ヤケヤマ第3区画で遺構検出。焼土面



第17図　ヤケヤマ東麓地区調査風景

のほかピット20個・北宋銭「景祐元宝」（H－3区）・「開元通宝」（J－3区）出土。K－41～44区発掘開始。

10月14日　ヤケヤマ東麓地区，各区画とも第1遺構面精査。第3区画，平面実測。ヤケヤマ東麓地区谷筋の下草刈り。E～H－51区発掘開始。K－41～44区終了。

10月28日　ヤケヤマ東麓地区，焼土面断ち割り。谷筋3本のトレンチとも地表下約2.00m掘り下げ。B・C－51区で須恵器・土師器多数出土。G－4・5区土層剝ぎ取り，再度成功。

11月4日　ヤケヤマ東麓地区K～L－3区古式土師器層掘り下げ。E～H－51区北壁土層断面実測。M・N－39～44区耕作土排除。

11月12日　ヤケヤマ東麓地区第1遺構面写真撮影。粘土遺構平面実測。M・N－39～44区掘り下げ，N－39～42区で縄文時代中期の土器検出。

11月25日　ヤケヤマ東麓地区第2区画，第2遺構面写真撮影。谷筋埋め戻し終了。0～S－42区完掘。奈良二彩小壺の蓋出土（B－2区）。

11月30日　ヤケヤマ東麓地区第1区画で縄文土器片コンテナ2箱・磨製石斧・石匙・石錘など遺物多し。第3区画粘土遺構埋土除去，写真撮影。

第18図　石匙出土状態

12月4日　ヤケヤマ東麓地区第2区縄文包含層除去。第1区二彩出土付近から，皇朝十二銭「和同開珎」（C－2区）「神功開宝」（B－2区）出土。

12月11日　ヤケヤマ東麓地区第1区画古代末石組実測，レベル記入。第2区画古代末ピット実測。湿地部埋め戻し。

12月17日　ヤケヤマ東麓地区第1区画東壁土層断面実測。第2区画完掘寸前。集石遺構，断ち割り。炉址か？

12月24日　ヤケヤマ東麓地区第2区画土層断面実測。現場全体の環境整備。本日で年内の現場作業終了。

昭和57年

1月5日　57年調査初日。新年の挨拶の後，仕事開始。現場異常なし。シートを剝ぎ掘り始める。大浦浜北部の区画設定後，表土剝ぎを開始する。ヤケヤマ地区Ⅰ・J－3区ピット検出及び実測。

1月6日　ヤケヤマ地区K－3区包含層最終面から貝・獣歯・牙・骨出土。ここは石器多い。Ⅰ－2区より大きい石錘3点出土。

1月7日　J－52区にてSK01検出（白磁片その他小皿等）。中世の層は非常に良好で純粋なものである。

1月14日　ヤケヤマ地区Ⅰ－3区のSK01堆積土の除去終了。J－2区の土坑も堆積土断面写真撮影後，全部掘り始める。ダメ貝など多いが，カキ・二枚貝も少しみられる。小動物の顎骨2点出土。K－51区ピット1より瓦器小皿2点・白磁椀1点・土師皿数点出土。

1月20日　ヤケヤマ地区A－1区南壁とⅠ・J－3区東壁，K－3・2区，Ⅰ－2・3区の南壁土層断面実測。

1月22日　本日より調査員交替。J・K列畦畔より縄文土器片多数・スクレイパー・石匙・石鏃数点，及び脚台付製塩土器2個出土。

1月26日　K－49～52区，L・M－49～51区，N－49区掘り下げ，土層実測。

1月27日　ヤケヤマ東麓地区Ⅰ－3区畦畔より水晶塊出土。

1月29日　大浦浜K～N－49～52区埋め戻し完了。現場事務員の端さん，本日現場千秋楽となる。みなさんに挨拶！！作業員のおばさん達も，なごりおしそうだった。

2月4日　雨のため現場作業中止。調査員は坂出事務所にて整理。

2月8日　V－45区で縄文土器1点・不明銅製品（表面は錆で緑色）出土。S－46区で石鏃1点の他，遺物ほとんどなし。O・P－49区掘り下げ終了。土層線引き後，写真撮影。L～N－53・54区第3層上面まで掘り下げる。

2月10日　V－50区土層実測・写真撮影終了。本日より事務担当,中村真由美さん初登場。

2月15日　N－51区に青磁片3点・大型土錘3点出土。山際には中世の遺構の検出が期待される。概報締め切りまであと6日。

2月18日　排水ポンプの故障あいつぎ，現在使用可能なものは3台のみ。しかも，3台ともに吸引力弱し。修理しておかねば。

2月23日　O～Q－53・54区耕作土排除。O・P－39～41区耕作土排除。奈良県立橿原考古学研究所・中井氏来島。

2月24日　M－54区で，白磁・瓦器・土師器の高台付椀，セットで出土。周囲には磨製の石，花崗岩の石類，羽釜（？），須恵器の大甕などがみられ，土坑の可能性もある。明日，写真・実測予定。

第19図　中世椀出土状態

3月4日　K～N－51～54区精査・遺構検出につとめる。その結果，ピット数個検出

3月9日　O～T－51～54区の土層観察用トレンチ掘り。T－52区井戸平面実測(未完)。

3月11日　K～N－52～54区精査。ヤケヤマ東麓地区第2・3区畦畔第6層面で大型のスクレイパーを検出。O・P－39～41区埋め戻し終了。

3月12日　O～T－51～54区実測終了。南壁側から埋め戻しを始める。副主幹・係長来島。本四公団と南端地区調査の打ち合わせ。

3月18日　O～T－51～54区埋め戻し断続中。南端地区伐開後の清掃。

昭和57年度

昭和57年

4月6日　本日より調査開始。前年度残りの大浦浜遺跡調査区及び北端調査区に入る。南端調査区の区画設定終了。

4月13日　大浦浜北端調査区終了。特に遺構なし。まだ冷たい春の水の為に，全員疲労感が増してくる。南端調査区，調査開始。

4月16日　南端調査区石組遺構（SZ8201）検出。トレンチ拡張する。

4月22日　南端調査区さらに拡張。遺構は，ひとつではなさそうだ。

5月6日　南端調査区SZ8201平面実測。写真撮影終了。

5月10日　南端調査区，SZ8201平面実測終了。

5月12日　南端調査区さらにトレンチ拡張。「泥縄式」と調査員自己反省しきり。

5月14日　雨のために注記作業。

5月17日　南端調査区，写真撮影の為の清掃。

5月18日　本日より調査員真鍋参加。坂出商業高校の教諭見学。南端調査区，石組遺構，写真撮影のために，作業員は明日よりヤケヤマ地区に入る予定。本日も猛暑であったが，とにかく生きた。

5月25日　南端調査区，石組遺構精査。

6月2日　本日，雨のため作業中止。増田坂出事務所々長・調査員真鍋来島。

6月9日　南端調査区に掘削重機を導入して，調査区を拡張する。

6月14日　南端調査区にて，新たな石組遺構（SZ8203）を検出。SZ8201ほど残存は良くない模様。

6月17日　梅雨入り宣言されたものの，全く雨が降る様子なし。調査区が，事務所と離れているため，往復が大変。

6月22日　南端調査区，実測用杭打ち。

6月23日　久しぶりの雨。現場作業を中止し，現場事務所にて遺物の整理と，今後の調査計画の見通しを検討する。櫃岩周辺の調査計画完成。新たな決意が湧いてくる。

6月25日　南端調査区，石組遺構実測継続。多量の礫のため手間取る。

7月9日　南端調査区，さらに拡張することに決定する。

7月12日　南端調査区，掘削重機にて斜面を切り開く。

7月16日　雨の為，作業中止。梅雨明けも近いのか豪雨。現場安全確認の為，雨の中を見廻る。

7月19日　南端調査区，掘削重機による土砂の排土と精査開始。

7月22日　南端調査区，崩壊した土砂の排除。
7月26日　南端調査区，写真撮影。
8月2日　南端調査区，実測用杭打ち。
8月4日　南端調査区，実測開始する。
8月13日　お盆休みで現場作業中止。調査員は全員で高台地区の土層図，長崎古墳の周溝内の土器溜り実測。
8月18日　南端調査区，北側トレンチの精査開始。SZ8202の平面実測。
8月24日　南端調査区第4層精査。製塩土器・須恵器の出土目立つ。
8月27日　台風13号接近，島に渡れず。
8月30日　南端調査区，地山層まで検出する。土層線引き及び写真撮影。
9月3日　南端調査区終了。
9月17日　長崎古墳調査終了。道具類整理。坂出事務所に撤収する。櫃石島の調査終了する。

昭和58年

1月17日　借地区域調査初日。杭打ち，区画設定をする。区画は5×5mとする。
1月19日　本日より作業員が入り，発掘開始。F－33～35区に第3層と呼ばれる古墳時代後期の製塩土器包含層を検出。包含層は東へ広がっておらず，かなり西に偏っており，F－37・36区では検出していない。
1月24日　B～D－45・46区第1・2層除去後，粘土土坑3基を検出。南の区画では製塩土器包含層の上面検出を行う。G－40区，F－40・41区，E－35～37区第1・2層除去継続。
1月25日　SX8301の石の面まで検出。黄色汚粘土あり。SX8301は黄色粘土を崩して作られたのだろうか。
1月26日　D－35～37区を設定し広げる。
2月1日　現場もやっと，スムーズに回転を始めたようだ。E－38・39区の粘土土坑をSX8307と命名する。埋土を抜く。上層は攪乱を受けているが，下層は生きていると思われる。切り合いについては不明である。
2月3日　SX8301～06及び製塩土器包含層の全景写真撮影終了。午後から寒さが厳しくなる兆候がうかがえた。
2月7日　F列等，畦畔除去。包含層撮影のため清掃開始。C－43区にて船形土製品出土。先週とうって変わって風の強い現場である。
2月8日　大型カメラ故障の為，小型のみ。明日，撮り直し予定。午後より水洗いを行う。
2月10日　第3層古墳時代後期土器包含層除去開始。10～20cmの厚さをもって堆積。2×2mのメッシュを組んで，「ふるい」にかけ，遺物を検出。
2月16日　D・E－45・46区第3層の掘り下げ。特に土器の集中が著しい第3層土器集中は写真撮影の後，取り上げ。昨日，滑石製模造品出土。
2月18日　昼から風が激しくなる。14：00に現場作業中止。B～D－47区の埋め戻し作業を全員で行う。
2月23日　第4層上面ピット群の写真撮影・平板実測。
2月28日　SX8307及びSX8301・04の保存措置を行う。
3月1日　SX8303・05の保存措置をする。
3月3日　香川大学丹羽助教授・秋山係長来島。SX8302保存措置。
3月4日　SX8301～08の5箇所に発泡スチロールとコンパネを敷き，埋め戻しを行い，保存完了。

第20図　粘土遺構埋め戻し保存作業風景

3月8日　13：30～14：30　櫃石小学校にて調査報告説明会を行う（安田・林）。
15：20　すべての物品を撤収。
3月17日　櫃石島発掘調査報告説明会（松本・秋山・真鍋・林）を開く。話しとスライドによる説明。80数名が参集，盛会に終わる。

第２節　調査の方法

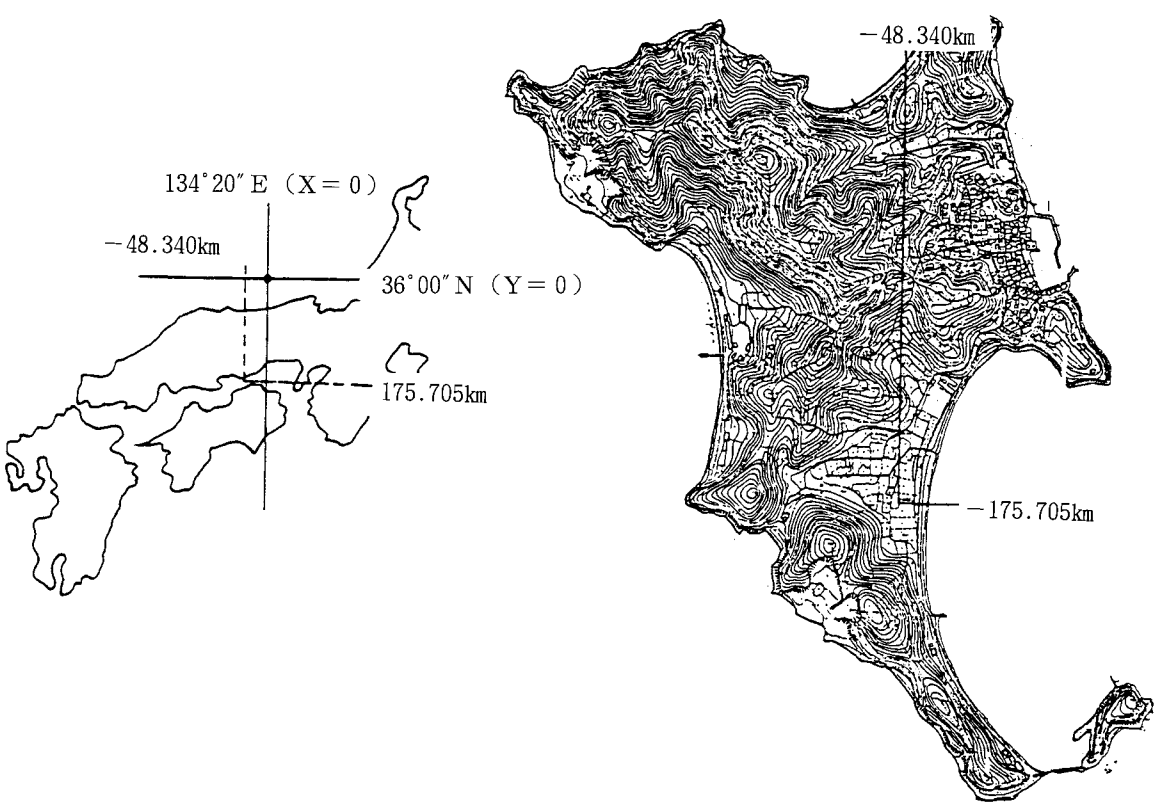
本遺跡の調査対象地は，標高２ｍ前後の砂浜で，ほぼ平坦な地形をしている。このため，調査区は調査対象地全域にわたって統一的な区画を設定することとし，国土座標系（第Ⅴ座標系）を用い，５ｍ四方の調査区画をもうけた。

区画表示は調査対象地域の南東隅を基点とし，東から西へ１区画ごとにＡ・Ｂ・Ｃ…，南から北へ向かっては１・２・３…と示し，この両者を組み合わせて，例えばＡ－８区のように区画番号を決定した。現場での区画番号表示は，区画の北西隅の調査杭に番号を記入し，混乱の生じないようにした。

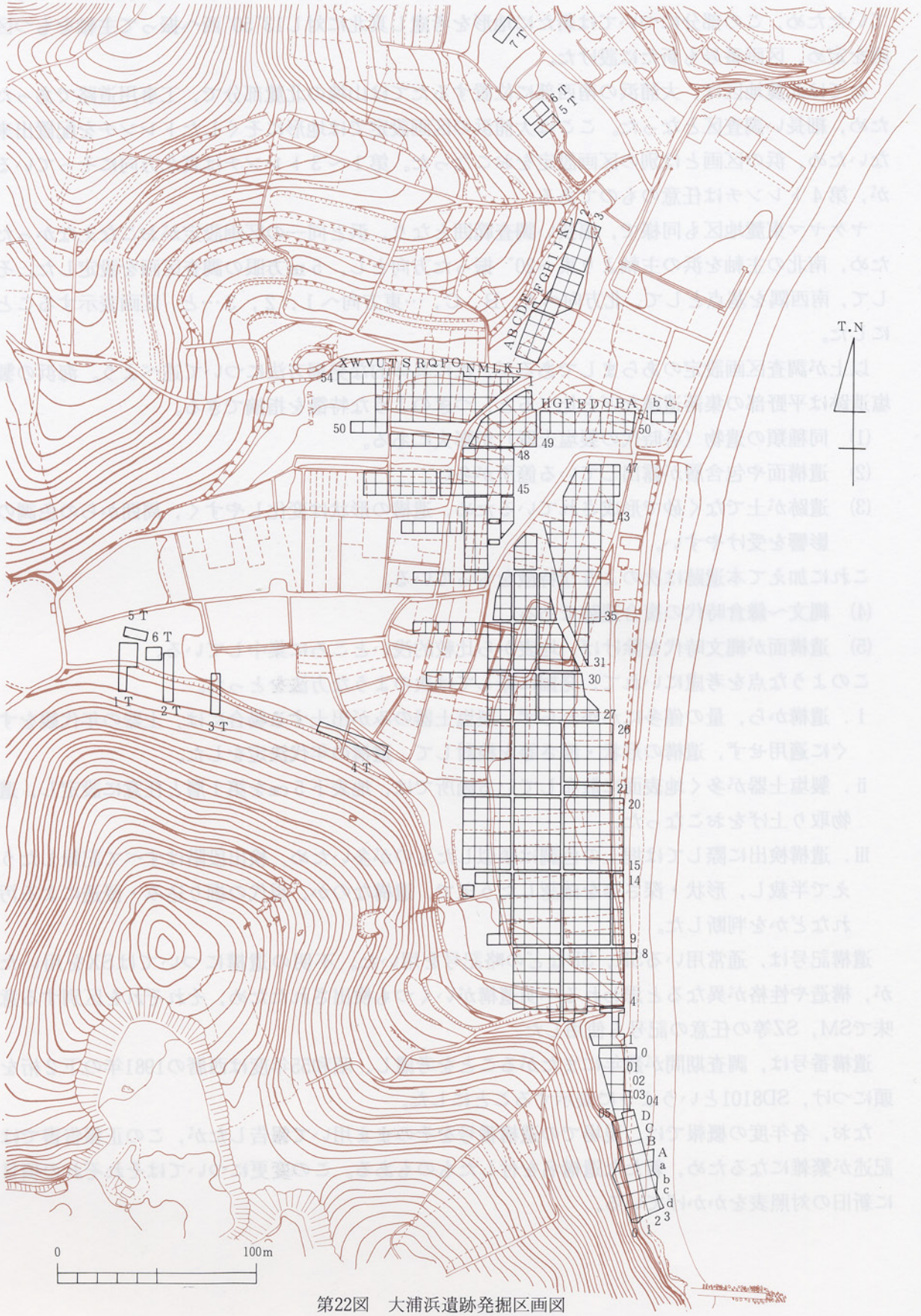
この５ｍ四方の区画が調査区画の最小単位で，遺物の取り上げや，遺構名称等はこの区画で完結させることを原則としたが，実際の発掘では，南北30ｍ，東西20ｍ（24区画）を１単位として作業を進めた。

調査対象地の大半の地区はこの区画方法で網羅することができたが，南端地区・たては北麓地区，ヤケヤマ東麓地区の３か所については，これとは別の区画設定・表示方法を用いた。

南端地区は大浦浜の最南部で，丘陵が海岸線まで迫っており，調査着手時には遺跡はここまで広がっていないと考えていたが，試掘の結果，狭い平坦地上に中世の遺構が展開していた。このため調査区画を広げ，区画名は東西のアルファベットはそのまま踏襲し，南北については０・01・02…という数字を用いることとした。昭和57年度調査においては，遺跡の南限はさらに南へ延



第21図　第Ⅴ平面直角座標原点と大浦浜遺跡中心点模式図



第22図　大浦浜遺跡発掘区画図

びることが判明し，当初の基準杭を延長する予定であったが，工事用排土が基準杭を埋めつくしていたため，この部分については新たに地形を考慮し真北に対し13°50′西へ振って主軸をもつ区画を定め，区画番号も新たに設けた。

たては北麓地区は，大浦浜の南西部に位置するたては山塊の北麓部分で，工事用道路であったため，細長い調査区となった。ここは大浦浜の区画設定では地形にそくしたトレンチを配置出来ないため，浜の区画とは別の区画設定をおこなった。第１～３トレンチは真北方向にそっているが，第４トレンチは任意のものである。

ヤケヤマ東麓地区も同様で，幅狭い調査範囲となり，浜と同一の区画設定がおこなえなかったため，南北の主軸を浜の主軸より東へ20°振った方向とし，５ｍ方眼の調査区画を設定した。そして，南西隅を基点として，北方向へＡ，Ｂ，Ｃ，…東方向へ１，２，３…と，区画表示することにした。

以上が調査区画設定のあらましであるが，次に具体的な発掘方法について述べよう。海浜の製塩遺跡は平野部の集落遺跡などと比べると，つぎのような特徴を指摘できる。

⑴ 同種類の遺物（各時代の製塩土器）が膨大にある。

⑵ 遺構面や包含層が露出している箇所が多い。

⑶ 遺跡が土でなく砂で形成されているため，遺構の形状は変化しやすく，周囲からの色調の影響を受けやすい。

これに加えて本遺跡は次のような特徴をもっている。

⑷ 縄文～鎌倉時代の複合遺跡である。

⑸ 遺構面が縄文時代を除けば，地表から比較的浅いところに集中している。

このような点を考慮にいれて，発掘に際しては次のような方法をとった。

ⅰ．遺構から，量の僅多にかかわらず，製塩土器のみが出土する場合には，土器の年代観をすぐに適用せず，遺構の形状・深さ等を検討して，遺構の年代決定をした。

ⅱ．製塩土器が多く地表面に散布している箇所では，地表下５㎝を第１層と任意に設定し，遺物取り上げをおこなった。

ⅲ．遺構検出に際しては埋土の色調は類似したものが多いため，検出段階はすべて記録したうえで半裁し，形状・深さ等を確認したうえで，遺構なのか，現代の掘り込み・浸透による汚れなどかを判断した。

遺構記号は，通常用いるSK，SDなどの略記号を用いた。不明の遺構についてはSXを用いたが，構造や性格が異なると思われる不明遺構がいくつも検出されたため，それぞれを区別する意味でSM，SZ等の任意の記号も使用した。

遺構番号は，調査期間が数年にまたがることを考慮し，昭和55年度は西暦の1981年の下２桁を頭につけ，SD8101というように表示することにした。

なお，各年度の概報では，現場での遺構番号をそのまま用いて報告したが，この正報告書では記述が繁雑になるため，新たな遺構名を付したものもある。この変更についてはそれぞれの項目に新旧の対照表をかかげている。

第3節　整理作業の経過

本遺跡の発掘調査にかかる整理作業は，現場での発掘作業と併行して昭和55年度より基礎整理を進めていった。

出土遺物は発掘現場事務所で水洗いがなされた後，チャータ船で櫃石島より坂出市内に設けられた連絡事務所に運ばれ，ここで作業を行った。まず遺物を調査地区・遺構・層位ごとに整理箱に収納替えを行い，次に復原可能な遺物が多く出土した地区から優先して分類作業を行い，その後，注記・復原を順次行った。

発掘期間中，調査員はローテーションを組み，2～4か月単位で発掘現場から連絡事務所に戻り，各自担当地区の図面や写真の整理を行う一方，整理作業員が行う収納・分類・復原作業を指導，監督した。

昭和55・56・57年度の各年度末には発掘状況や基礎整理の成果をまとめた概報を発刊した。概報は各年度の調査成果をまとめたものであるが，特に地区ごとの概要を記すことに重点を置き，本報告を作成する際の手引き書的役割をもたせることを意図した。これらの概報は本報告書作成の際大いに役立ち，当初の目的を果たしたが，一方概報収録と未収録との遺物が分散するようなことも生じ，概報での整理結果を追試する際に多少の混乱をまねくなどのマイナス面もあった。

正式報告書発刊にむけての本格的な整理作業は，昭和58年4月より開始した。整理・報告書作成は3ヶ年計画とし，1年目は縄文～古墳時代，2年目は奈良～鎌倉時代を対象にして遺構の検討，遺物の注記・復原・実測・分析・写真撮影を行い，最終の60年度に図版作成・原稿執筆を行い報告書を発刊すると言うものであった。

昭和58年度は，当初計画どおり，縄文・弥生・古墳時代の土器の整理を行い，縄文土器・弥生土器・古式土師器・須恵器・製塩土器などをそれぞれ200～1,000点実測することができた。

昭和59年度は，対象の時代を奈良～鎌倉時代に移し，遺物実測，各種計測値の統計処理などを行い，中世の土師器・瓦器・輸入磁器・円板状土製品，奈良・平安時代の土師器・須恵器・製塩土器・漁具などの実測をほぼ完了することができた。

昭和60年度は，遺構・遺物の実測図を再検討し，図版作成に着手したが半分ほど作業が進んだ段階で中断のやむなきに至った。というのも，瀬戸大橋陸上ルート内の発掘調査がこの年の4月から開始されたが，坂出インターチェンジ予定地内でみつかった下川津遺跡が当初予想した以上の広がりや内容をもつことが判明し，工事側との調整や発掘作業の応援に出る必要が生じたためである。このため，当年下半期から整理作業は中断した形になった。

昭和61年度は，調査担当者全員が下川津遺跡の発掘に従事したため，大浦浜遺跡の整理作業はまったく行えなかった。

昭和62年度は，下川津遺跡の発掘作業も一段落したため，4月より連絡事務所で報告書作成作業を再開した。本報告書の体裁は当初「本文編」と「写真図版編」の2分冊を予定していたが，作業が長期間にわたり，写真・トレース図の散逸，汚れ，破損のきざしがみえはじめたため，「本文編」を2冊に分け，遺構，遺物図を「実測図版編」として印刷を早めることにした。4～7月は写真図版編の完成を目指し，追加撮影の後，レイアウトを行い，7月後半，印刷発注となった。この作業と併行して，8月までは，すべての遺物実測図版を完成させるべく努力し，8月初旬，第

2分冊の「実測図版編」を印刷発注することができた。これ以後，12月末までは原稿執筆に着手し，追加の図・表を作成し，63年1月に第1分冊の「本文編」を発注することができた。昭和63年2・3月に校正を進め，ここに大浦浜遺跡の正式報告書を発刊することができた。

以下に昭和58年度以降の整理組織と整理進行表を掲げる。

昭和58年度		昭和59年度		昭和60年度	
課長	遠藤　啓	課長	遠藤　啓	課長	磯田文雄
課長補佐	林　茂	主幹	松本豊胤	主幹	松本豊胤
副主幹	松本豊胤	課長補佐	中村　仁	課長補佐	片山　堯
係長	秋山　忠	所長	松下　均	所長	松下　均
技師	真鍋昌宏	主任技師	大山真充	主任技師	大山真充
嘱託	安藤　一	（技師	真鍋昌宏）	（技師	真鍋昌宏）

整理作業員　米沢美枝子　南条チトエ　西岡加奈子（旧姓岡部）　田村加代子（旧姓松岡）　橋本真理　横田周子　坂口貴子（旧姓高木）　西村貴子（旧姓山地）　上野浩美　大矢紀子（旧姓三木）　山西秀子（旧姓徳井）　西桶右子　平田保代　芥　元栄　勝宮真由美（旧姓小野）　藤田尚子　山下登志子　穴吹潤子

作業／年度	注記・復元	実測	写真撮影	トレース	割付	原稿	校正
58	縄文 ～ 古墳						
59	奈良 ～ 鎌倉		縄文～古墳				
60			奈良～鎌倉	遺物図			
61	（中		断）				
62		追加分		遺構図			

第3表　大浦浜遺跡整理作業進行表

第３章　層序と旧地形

第１節　層序と遺物出土状況

本遺跡は縄文時代から鎌倉時代に至るまでの複合遺跡で，各時代の遺構が重複しているところが多く，層序は複雑な様相を示している。このため，遺跡の状況を良く示す13箇所を選び，その土層について説明しよう。

(1)　南端地区（「実」第２図）

まず最初に，遺跡南部の南端地区とその南側拡張区の土層から説明しよう。南側拡張区のＢ－１～３地区は満潮時の汀線から２～３ｍ山側の地点まで発掘した。最も海よりの地点での標高は1.3ｍで，ここより東側の山裾に向かって地表は傾斜しており，発掘区西端では標高3.1ｍで，約2.2ｍの深さを発掘した。ここの堆積土は大きく８層に区分できる。

第１層は厚さ約10cmあり，現代の腐植土層である。

第２層は厚さ約10cmの灰白色土で，遺物はほとんど含まれていない。この層までが斜面堆積で，これ以下の層はほぼ水平堆積の状況を示している。

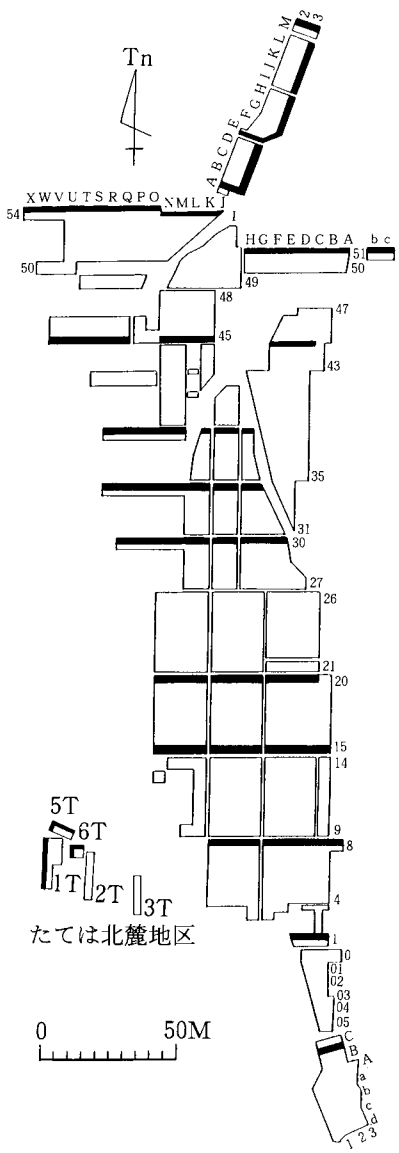
第３層は暗黄褐色土で，厚さは60cmほどある。近世の染付や中世の輸入磁器が出土した。

第４層は黄褐色に灰青色の斑点の入る粘質土層で，厚さは40cmある。この層の上面は，標高2.1ｍで水平となっており，この層位から掘り込まれた石組み遺構（S-Z１～３）が検出された。包含遺物は輸入磁器・瓦質土器・黒色土器などである。

第５層は暗褐色中砂層で，横しまの粘土層が混入し，この層からが砂層となる。厚さは20～40cmあり，出土遺物は黒色土器・瓦質土器・土師質小皿・輸入磁器・尖底製塩土器などである。

第６層は灰白色粗砂層で，50～60cmの厚さがあり，海側ほど厚く堆積している。出土遺物は上層と大差ないが，土師質土器の量が減り，須恵器片が増加する傾向にある。

第７層は灰白色粗砂層で，この層から湧水が激しくな



第23図　土層図掲載位置図

る。遺物量は少なく磨滅した尖底製塩土器が少量出土した。

第8層は鉄分沈着により固くなった中砂層である。中世の土器は出土せず，尖底製塩土器・須恵器が多く出土した。この層の下は，花崗岩の岩盤となっている。

次に，南端地区B～D－1区の土層を説明しよう。ここは拡張区に比べ山塊と海岸部の幅が広くなり，約500㎡の平坦地となっている。土層は多少の傾斜をもちながらも，ほぼ水平に堆積していて，大きく6層に区分できる。

第1層は腐植土層で，約10cmの厚さがあり，近・現代の遺物が包含されている。

第2層は明褐色砂質土層で，厚さは60～30cmあり，遺物は包含されていない。

第3層は茶褐色砂質土層で厚さは20～40cmある。出土遺物は，染付や円板状土製品が多く出土した。

第4層は黄灰色砂層で，厚さは約30cmある。この層の上面が古代末～中世の遺構面である。

第5層は黄灰色砂層で，拡張区の第6層にほぼ相当する。

第6層は黄白色砂層で，無遺物層である。

(2)　8区ライン（「実」第3図）

次は8区ラインの土層である。ここは幅広い浜の南部に位置し，海寄りのA区から山寄りのJ区まで幅100mを発掘した。現地形は西のJ区が最も高く標高2.7mで，海に近づくに従って徐々に低くなり，A区での標高は1.9mを計る。このラインの土層は，場所によってその様相が大きく異なっており，2つに区分できる。1つは，海寄りのA～D区で，主に奈良・平安時代の遺跡が営まれている。もう1つは浜中央部から西のE～J区で，ここには古墳時代前期と後期の遺物包含層が形成されていた。また。全域にわたって中世の遺物が出土した。

まずA～D区域の土層から説明しよう。海よりのA区の標高は1.9mで，地山までの深さは約1mある。D区の地表面の標高は2.4mで地山までの深さは1.0mで，旧地形は西から東へ傾斜していたことがわかる。大きく7層に区分できる。

第1層は淡茶褐色土の表土層で，地表面に多く遺物が散布していたため，耕作土の上部5cmを任意に第1層としたものである。

第2層は耕作土の第1層以外の残りの部分をさし，弥生時代～現代までの遺物が多く包含されていた。

第3層は黒色有機質砂質で，厚さは10～25cmある。この層は西方向に行くに従い薄くなり，D区中央付近で消失している。また，南北方向では4～14区に広がり，約600㎡の広がりをもつ包含層である。この包含層の遺物は奈良～平安時代の製塩土器が最も多く，次いで中世遺物が多く，古墳時代や弥生時代前期の遺物も少量ある。この層の上面から平安時代後期～鎌倉時代の粘土遺構などが掘り込まれており，攪乱をうけている箇所が多い。

第4層は厚さ20～30cmの堅く締った土で形成されており，炭酸カルシウム塊の散布が多く認められた。この層はA～C－4～8区にのみ広がる層位で製塩土器が包含されており，この層位の上面でいくつかの遺構が確認できた。

第5層も8区付近を境にして，南北で様相が違っている。9～14区の第5層は，黄褐色砂層で製塩土器が多く包含されていたが，8区以南の地区では安定した包含層は形成されておらず，層

位は乱れ，小河川がこの付近を流れていたものと推定される。

第６層は白黄色の砂層で，８区以南では第５層と同様に堆積状況が不安定で，古墳時代の磨滅した遺物をわずかに包含していた。８区以北ではほとんど遺物を含まない安定した堆積状況を示していた。

第７層は８区以北で認められた土層で，３層に細分できる。上層は淡茶色，中層は暗黄茶色，下層は茶褐色を呈する砂層で，いずれの層にも弥生時代前期の土器・石器を多く包含していた。

第８層は青灰色粗砂の地山である。

次に，E～J区であるが，第１～２層はA～D区と同様に表土層であるが，製塩土器包含層がこの地区まで及んでいないので，第１層は設定していない。

第３層は茶褐色砂質土層で，古墳時代後期の製塩土器を多く包含している。厚さは平均20cmあるがH区が最も厚い。この層はG～J区の範囲にのみ広がっており，E･F区では第２層の下に次に述べる第４層が，すぐに現れる。

第４層は暗褐色砂層で，厚さは，25cmあり上下２層に細分できる。上層は黒褐色細砂，下層は暗褐色中砂層で，上・下層とも古式土師器を包含しているが，上層の方が出土量が多い。

第５層は淡黄褐色砂層で，無遺物層である。

第６層は赤褐色砂層で，湧水が激しい。この層も無遺物層である。この下層にA～D区第８層の青灰色砂がある。

以上が各土層の概要であるが，このラインでの地形を見てみると，地表面の標高はＡ区が1.9m，Ｆ区が2.4m，Ｊ区が2.7mで山側のＪ区から海側のＡ区に向かって傾斜しているが，地山の標高を見ると，Ａ区が0.2m，Ｆ区が1.4m，Ｊ区が1.1mで，Ｆ区付近がピークとなる尾根状の旧地形だったことが解かる。

(3)　15区ライン（「実」第４図）

15区ラインはＣ区からＮ区まで60m発掘した。ここの土層も場所によって層位が異なっており，C～F区，G～J区，K～N区の３箇所に分けて説明しよう。

まずC～H区は大きく10層に区分できる。第１層は表土層で任意に設けた層位である。弥生時代～現代までの遺物が包含されているが，奈良～平安時代の製塩土器片が量的には多い。

第２層は耕作土で，この付近は発掘前までは畑地として利用されていたため，層厚が30cm以上におよぶ所がある。包含遺物は第１層と同じである。

第３～５層はC･D区のみに認められた土層である。第３層は薄茶色砂質土層で，奈良～平安時代の製塩土器を中心とする遺物包含層である。

第４層は黄色砂層で，奈良～平安時代の製塩土器を少量包含する。

第５層は第３層と同様に薄茶色砂質土層で，製塩土器の包含層である。

第６層は白黄色砂層で，無遺物である。

第７層は淡青灰色砂層で，弥生時代前期の遺物包含層である。８区ライン第７層の北端部分の層とみてよいだろう。

第８層は淡黒色砂質土層で，古墳時代後期の遺物を包含している。

第９層は淡焦茶色砂質土層である。第10層は青灰色砂層で，C～E区ではこれが地山層である

が，F･G区では青灰色砂層の上に黄白色砂層が堆積しており，これが地山となっている。

G～J区は７層に区分できる。第１層は表土層で，第２層は淡黄茶色砂層である。第３層は淡黒褐色砂層，第４層は淡白灰色砂層，第５層は淡灰色砂層でわずかに古墳時代後期以降の遺物が包含されている。

第６層は灰色砂層で，古式土師器が集中して出土した。これを「古式土師器群」と呼んでおり，この地区は第５群に該当する。

第７層は地山となる茶灰色砂層で，無遺物である。この地山層はＩ・Ｊ区では，確認できただけで，長さ約6.5mにわたり約20cm凹んでおり，この凹みに古式土師器が包含されていた。

K～L区の土層はほぼ水平堆積の状況を示し，大きく６層に区分できる。第１層は表土層，第２層は黄茶褐色土，第３層は暗茶褐色土，第４層は明茶褐色土，第５層は淡灰色砂層で，遺物は細片が少量含まれているのみである。

⑷　20区ライン（「実」第５図）

20区ラインの土層は10ｍごとでそれぞれ違ったあり方を示している。海寄りのC･D区は，地表下50～70cmの青灰色無遺物層まで大きく攪乱をうけていた。これは，大正年間にガラス製造のため砂取りが行われた跡とみられる。

E～H区は無遺物層まで薄く，４層に区分できる。第１層は，表土層で厚さは約５cmあるが，西へ行くと少し厚くなる。

第２層は焦茶色砂層で，厚さは10～15cmある。磨滅した製塩土器・須恵器・中世土器が出土した。

第３層は黄土色砂層で，第２層に比べ遺物量は減るが同様の遺物が出土した。

第４層は黄白色砂層で，無遺物層である．

第５層は青灰茶色中砂層で，これも無遺物層である。

Ｉ・Ｊ区は第１・２層まではE～H区と同様であるが，これ以下は６層に細分できる。第３層は淡灰色砂層で，厚さは20～30cmである。遺物はほとんど含まれていない。

第４層は淡褐色砂層で，厚さは約20cmあり，南北に続く古式土師器の包含層であるが，土器の出土量はここでは少ない。

第５層は淡灰色粗砂層，第６層は淡茶灰色砂層，第７層は淡褐色砂層である。

第８層は灰青色中砂で，E～H区の第５層と同一層である。

次にK～N区であるが，第１層は表土層で厚さは10～20cmある。

第２層は黄茶褐色土で厚さは20～30cmある。第３層は茶灰色砂で，場所により厚さはまちまちである。第４層は淡灰褐色砂層で，厚さは20～30cmありＩ・Ｊ区の第４層と同一層である。第５層は青灰色砂層で，G～J区の最大層と同一層である。

遺物出土状況は第１～２層に古墳時代～中世の遺物が僅かに出土する程度で，この地区は遺跡の中心部から外れた場所と思われる。このラインではＦ区がもっとも高く標高2.1ｍで，ここを境に地形は東西に低くなっている。そして，Ｉ・Ｊ区では地山が落ち窪み，たては丘陵と砂洲に挟まれて，自然の流路があったものと推定できる。

(5) 30区ライン（「実」第6図）

次に30区ラインでの土層の説明をしよう。ここは，調査区画ではE～Qの東西83mを発掘した。ここより南部では，海寄りのA～D区を発掘したが，ここでは発掘していないが，現地形からみて20ラインで説明したように，A～D区に該当するところは大正年間の砂取りが行われているとみてよいだろう。

E～J区とK～Q区とでは堆積状況が異なっているので，2つの地区に分けて説明しよう。まず，

E～J区とK～Q区とでは堆積状況が異なっているので，2つの地区に分けて説明しよう。まず，

E～J区では大きく9層に区分できる。第1・2層は現代の耕作土である，茶褐色砂層で厚さは10～20cmある。古墳時代から現代までの遺物を多く包含している。

第3層はG～J区にみられるもので，古墳時代後期の製塩土器を多量に包含した黒褐色中砂層で，中世の土師質土器・瓦器・輸入磁器等も出土した。厚さは20～30cmある。

第4層は灰黄褐色砂層で，20～30cmの厚さをもつ。遺物は少ないが製塩土器よりも須恵器を主体としており，3層とは区分できる。

第5層は，H～J区でみられる古式土師器の包含層である赤茶色砂層で厚さは10～20cmある。

第6層はE･F･G区でみられた淡黄灰色砂層で，厚さは80cmある。遺物は含まれていない。均一の厚い砂の堆積層である。

第7層は黄灰色系の砂層で2～4層にさらに細分できるが，遺物が出土しないことから自然堆積層と判断し，一括して取り扱った。厚さは20～60cmある。

第8層は黒紫灰色砂層で上下2層に細分できる。厚さは30～80cmあり，縄文時代後期の遺物包含層である。

第9層は灰緑青粗砂層で地山と思われる層である。H区より西は標高0.6mで平坦であるが，G区より東は海へ向かって急激に傾斜している。

次にK～Q区に移る。第1層は耕作土である。厚さは10～20cmである。

第2層は灰茶褐色砂層で，第3層は灰色砂層である。第4層は灰焦茶色土層である。2～4層は土質的には同一層とみてよく，色調等により区分した。第5層は灰黒色砂層で厚さは30cm平均である。

第6層は灰黒黄色砂層で，E～J区の第7層と同一層とみてよいものである。この層までは遺物の包含は認められない。

第7層はE～J区と同一層で淡紫灰色砂層で縄文時代後期の遺物包含層であるが，遺物の出土は西へ行くに従って希薄になる。

第8層は緑灰色の地山層でE～J区の第9層と同一である。

(6) 34区ライン（「実」第7図）

34区ラインはL区とM区の境目近くにある水路を境にして，土層が東西に大きく違っている。

まず，G～L区までの土層を説明しよう。ここは，地表から地山まで大きく8層に区分できる。

第1層は耕作土で，厚さ10cmあるが，I～L区では厚さ20～30cmとなっている。

第2層は茶褐色砂質土で厚さは20cmある。G～I区では製塩土器等を包含しているが，L区より

西へ行くに従って少なくなる。

第3層は濃茶褐色砂質土で，製塩土器を主体とする包含層である。

第4層は暗灰色中砂層で，地区によって厚さの違いはあるが，G地区が最も厚く60cmで無遺物層である。

第5層は暗褐色砂層で，G区は薄く10cm，I区では25cmぐらいである。

第6層は暗黒灰色砂層で30cmぐらいあり，東に行くに従い薄くなりG区では10cmぐらいである。

第7層は黒紫茶色砂で，縄文時代の遺物包含層である。厚さは10～30cmある。L区まで延びているが，これ以西はない。第8層は黒灰青色粗砂層で地山層である。

M～R区は大きく6層に区分できる。第1層は耕作土で，10～30cmの厚さをもつ。第2層はM·N区は茶褐色であるが，D区以西になると灰色の砂層となっている。

第3層は地区によって違いはあるが，茶褐色の砂及び砂質土によって形成されている。

第4層はN～R区にわたってみられた層で，暗灰黒色砂層である。20～40cmの厚さをもつ。

第5層は淡灰褐色砂層である。第6層は黒色砂層で，厚さは10～20cmある。層位からみて，G～L区の縄文包含層と同一土層と思われるが遺物は出土していない。

(7) 38区ライン（「実」第8図）

38区ラインはD区からR区まで発掘したが，H区が砂洲の西端にあたり，砂洲西側にそって形成されていた古墳時代後期の製塩土器包含層はこの区の中央付近までで，これより以西には続いていない。H～J区の土層は11層に区分でき，以下に説明する。

第1層は耕作土である。第2層は茶褐色砂層で，古墳時代から中世までの遺物が多少包含されている。

第3層はH区のみにある層位で，古墳時代後期の製塩土器包含層の西端である。第4層は茶褐色砂層で，第3層の影響を受けて変色した層で，製塩土器の細片がわずかに包含される程度である。

第5層は暗灰色中砂層で，砂洲の堆積層で遺物は包含されていない。第6層は褐色中砂層，第7層は暗灰白色砂層，第8層は暗灰色中砂層，第9層は暗黒灰色砂層，第10層は黒紫茶色中砂層，第11層は黒灰青色砂層である。

K区以西は第8図のとおりで，包含遺物や他地区との関係については確認できなかった。

(8) 44～45区ライン（「実」第9図）

次に44～45区ラインの土層であるが，C～F区は44区南壁土層で説明する。この区は南から北へ延びる細長い砂洲の先端近くに位置する。C区は，砂取りで破壊されていたが，D～F区は残存状態が良好で，大きく9層に区分できる。

第1層は耕作土で10～30mの厚さがある。第2層は淡茶色砂質土層である。第3層は黒褐色砂層で，無文製塩土器を包含する層である。広がりは東西幅3m程度のもので，厚さは20cmある。

第4層は茶灰褐色細砂層で，厚さは20～30cmある。古式土師器や須恵器類を包含している。

第5層は赤褐色中砂層で，厚さは約20cmあり，古式土師器を包含している層である。

第6層は灰青色中砂層で，厚さは10～30cmあり，無遺物層である。第7層はD･E区のみにみられる青色中砂層で，厚さは15cmで無遺物である。

第8層は青黒色粗砂層で，厚さは10～20cmあり，縄文土器を包含している。第9層は灰青色粗砂層で，木を含んでいるが，縄文土器は出土していない。

K～V－45区は7層に区分できる。第1層は耕作土で，約30cmの厚さがある。第2層は淡灰色砂層で，第1層と第3層の中間層である。第3層は淡灰色砂層で，この層までは遺物はほとんど包含されていない。

第4層は灰色砂層で，縄文土器が包含されている。第5層は淡紫色砂層，第6層は褐色砂層で，無遺物である。

第7層は灰青色砂層で，38区ラインの第11層と同一土層とみてよいだろう。

このラインでは縄文土器の包含レベルがかなり違っている。西のQ～V区は標高1.3m付近であるのに対して，M･N区では標高1.8mと高い位置にある。海寄りのC～F区では標高0.5m付近から出土しており注目される。

⑼ 51区ライン（「実」第10図）

51区ラインは，浜北部で海岸ぎわまで発掘できた唯一の地区である。A区とここより東の海寄りの部分（a･b－51区）は地表下約0.8mまで攪乱が及んでいた。

B～D区は大きく8層に区分できる。第1層は表土層である。第2層は褐色砂質土で，須恵器や製塩土器片を含んでいる。

第3層は赤褐色細砂層で，古式土師器が比較的多く包含されており，A－51区の攪乱土の下まで続いていることが確認された。この層は色調によりさらに4～6層に細分できる。

第4層は淡黄褐色砂層，第5層は濁灰色砂層，第6層は淡灰色砂層，第7層は淡黄褐色砂層で，何れの層にも遺物の包含はない。

第8層は青灰色粗砂層で，この層には縄文土器が含まれていた。

次に，E～H区に移るが，ここは大きく6層に区分できる。第1層は表土層で，第2層は灰色砂質土で，古墳時代～中世の遺物がわずかにに包含されていた。第3層は黒褐色砂層で，第4層はA～D区の第8層と同一土層で，縄文土器を多く包含している。

第5・6層はH区より以西にみえる層で，第5層は淡黄色砂層，第6層は淡黒灰砂層である。

⑽ 54区ライン（「実」第11図）

54区ラインは海浜堆積と丘陵堆積が交わる地点で，J区からX区までの約75mを発掘した。ここの土層は水平堆積の状況を示し，大きく9層に区分した。

第1層は耕作土で，第2層は茶褐色砂質土である。

第3層は暗灰白色砂質土，この層は中世の遺物包含層である。

第4層は明青灰色砂層で，次の第5層は暗青灰色粘質土となるが，第6層から第9層の青灰色砂層までは砂層の堆積となり，縄文～古墳時代の遺物は認められなかった。

(11) ヤケヤマ東麓地区（「実」第12図・第13図）

ヤケヤマ東麓地区は，いままで説明してきた海浜中央部の土層とは多少異なり，丘陵裾から海浜部に至る境目あたりの堆積状況を示している。この地区の層位は，堆積形成からみると丘陵の花崗岩の崩壊土壌の堆積と，海浜砂の堆積との２つがあると考えられる。

層位からみた遺跡の状況は，堆積上部は花崗岩のバイラン土の堆積で，遺物はほとんどなく，この下に古代末～中世，古墳時代前期，縄文時代中～後期の順で遺構・遺物が検出された。

以下に，第13図をもとにA,E,N区の３ヶ所の土層を詳しく説明する。

Ａ区は11層に区分できる。西寄りが薄く，地山の花崗岩盤が約１ｍの深さにある。東端は，厚く堆積しており，無遺物層までに約２ｍの厚さがある。

第１層は，耕作土で約40ｍの厚さがある。上下２層に細分でき下層は厚さ20ｍぐらいの旧耕作土である。

第２層は，黄白色土で厚さは約20㎝ある花崗岩のバイラン土壌である。遺物は古代末～中世のものが包含されている。

第３層は，暗茶灰色土で，第４層は淡焦茶色土である。

第５層は，淡焦茶色砂質土で，この層位までに古代末～中世の遺物が包含されている。

第６層は，暗焦茶色砂質土で，この層の上面が古代末～中世の時期の遺構面となっており，この層には，古式土師器が多く包含されている。

第７層は，黄白色の砂層で，縄文土器が多く包含されている。第８層は，明黄色砂層で，この層の上面が縄文時代の遺構面となり，集石遺構や土坑が検出された。

第９層は，暗黄白色砂層で，発掘区の東半分に堆積している層で，無遺物層である。

第10層は，黄白色砂層で，この層位も発掘区東半分に堆積しており無遺物層である。

第11層は，灰色の硬くしまった砂層で，ヤケヤマ東麓地区全域に共通する層位である。

次にＥ区に移る。第１層の耕作土，第２層の黄白色土は，A～M区に共通する層位である。

第３層は，第２層よりやや茶色味を帯びる黄白色土で，B～G区にかけてみられる層位で，上層と色調以外では，差がないものである。

第４層は，淡焦茶色砂質土で，第２層からこの層位までに古代末～中世の遺物が包含されている。

第５層は，黄土色砂質土で，この層位はE･F区にのみ見られる層位である。

第６層は，暗焦茶色砂質土で古式土師器の包含層である。これはA区の第６層と同じものである。

第７～９層は，黄白色の土および砂層で，縄文時代中・後期の土器・石器が多く包含されている。

第10層は，明黄色砂層で，土器片をわずかに包含する。

第11層は，淡黄白色砂，第12層は暗黄白色砂，第13層は黄白色砂層で，無遺物層である。A区の第９・10層に対応するとみてよい。

第14層は，灰色の硬い砂層で，A区の第11層と同一土層である。無遺物層である。

次にＮ区に移る。第１・２層は，A･E区に共通する層位である。

第３層は，暗茶灰色土でA･E区に共通する層位である。古代末～中世の遺物を包含している。

第４層は，黒灰色土で，古代末～中世の遺物包含層である。第５層は，黄土色土で，この層の東端から古式土師器の包含層がはじまっている。

第６層は，灰白色土で，花崗岩のバイラン土壌である。第７層は，暗灰色土で，無遺物層である。

第８層は，黒色土で，縄文時代の遺物包含層である。この層は、Ａ区の第７層，Ｅ区の７～９層に対応する。

第９層は，黄白色砂層で，無遺物層である。

第10層は，暗黄土色砂層で，花崗岩が崩壊して形成された土壌である。

⑿　たては北麓地区（「実」第１図）

最後は，たては北麓地区の土層について説明する。たては北麓地区には，６ヶ所にトレンチを設けて調査を行ったが，ここでは，縄文時代前期の土器が検出された１，５，６トレンチの土層を説明しよう。

前期の土器包含層までは，約２ｍの堆積があり，10層に区分できる。第１層は表土層で，20cmの厚さがある。第２層は黒褐色土で，この層も湿地部から丘陵部まで延びている。

第３層は灰青色粘質土で，この層からが低地部の堆積土になっている。第４層は黄褐色砂質土で，第５層は茶褐色砂質土である。

第６層は淡黄褐色砂質土で，この層位までに，サヌカイト製石器，須恵器杯，土錘、白磁、土師質土器などが少量ながら混在していた。

第７層は灰青色砂質土で，この層までがほぼ水平堆積の状況を示している。第８層は，暗黒褐色粘質土で，この層から斜面堆積の様相を示す。第７・８層からは，遺物は出土しないが，自然木が多量に検出された。

第９層は黒褐色砂質土，第10層は灰褐色粘質土で，この２層は縄文時代前期の遺物包含層で，土器・石器が多く出土した。

第11層は灰青褐色土，第12層は緑灰青色砂層で，ともに低地部の堆積層である。この層位からは遺物の出土はみられない。

第13～15層は丘陵から続く土層である。

第2節　旧地形の復元

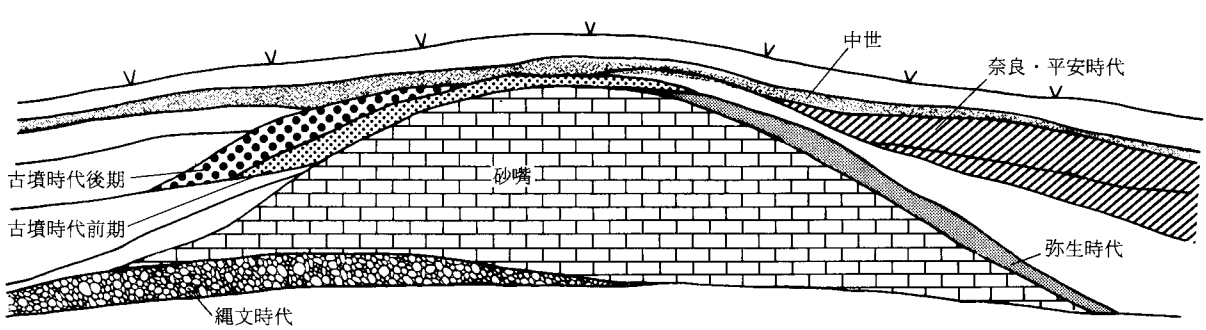
本遺跡西側の湿地中央部には東西方向の水路があり，この周辺が浜及びその後背湿地全体の中ではもっとも低く，標高は約1.9mである。水路の南北は丘陵となっているため，水路から南北方向に遠ざかるにしたがって徐々に安定した地形となっている。この水路は東の砂浜に近づくと北東方向に流れを変え，約65m流れた後再び東西方向に戻り海に注いでいる。

この流れの変化はわずかな地形の高低さに左右されているものと思われ，微地形を観察すると，水路が北東方向に流れを変える部分の東側にはわずかな地形の盛り上がりが認められる。地形の盛り上がりはこの部分だけではなく，浜の南端から海岸線に沿って北に細長く延びており，その先端は水路が再び東西方向に戻る部分まで達しており，細長い地形の高まりは砂嘴のなごりであろうと推察できる。

この砂嘴は発掘調査の結果，もっとも厚いところで約2mの無遺物の砂の堆積があることが確認され，この砂層の下には縄文時代中・後期の遺物包含層が存在した。標高は約0.5mで，この高さが縄文時代後期以前の生活面であったと思われる。

一方，砂洲の上には弥生時代以降の遺跡が営まれているが，時代によって遺跡の占地が異なっている。例えば，弥生時代前・中期の遺跡は砂洲中央部のある一定の範囲に集中し，古墳時代の土器包含層は砂洲西側の傾斜地に形成されており，砂洲東側には認められない。砂洲東側に遺跡が形成されるのは奈良時代以降のことで，このような差異は砂嘴の形成や各時代の海進・海退と密接に関係することは十分に考えられる。

このため，遺構・遺物の検出状況を手がかりにして旧地形の復元を試みてみた。もとより，遺構・遺物のあり方が地形に左右された結果であり，旧地形をそのまま反映しているとは単純には考えられず，当時の住居域や生産域などと密接に係わっているのは言うまでもないことである。しかし本遺跡は海と係わりが深く，海浜に営まれた遺跡であるため，海水面の変動やそれに伴う陸地範囲の変化に連動している割合も大きいと考えられるため，各時代ごとの推定図を作成した。縄文時代の遺物は浜北半部から出土している。前期・中期の遺物は，ヤケヤマ東麓地区・L～P－38～44区・たては北麓地区の3箇所から出土している。これに対し後期の遺物の出土範囲はL～P－38～44区よりさらに南東部に広がっており，ここまで安定した地形が広がったものと思



第24図　大浦浜遺跡旧地形概念図

われる。このように考えて，前・中期と後期との地形差を示したものが推定図(1)と(2)である。

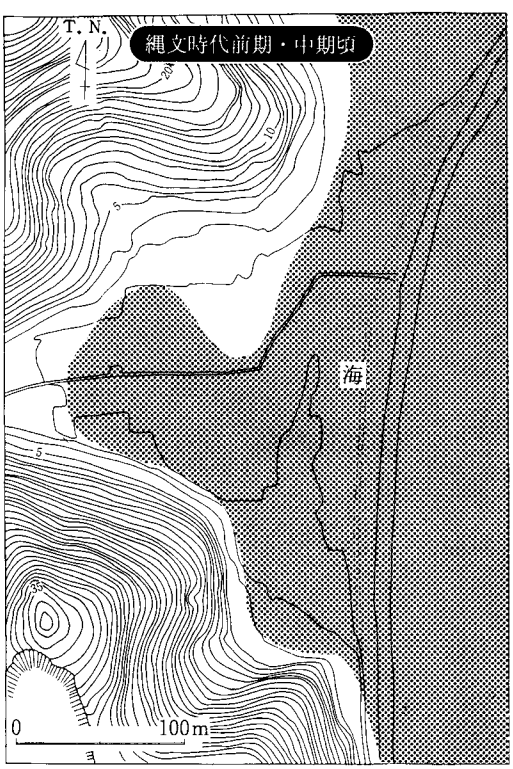
縄文時代後期の遺物は砂洲が広がる30～34区からも出土しているが，これは砂洲によって埋め尽くされた包含層からの出土である。このことからわかるように，砂洲の形成開始は縄文時代後期（福田ＫⅡ式）以降のことと推定される。この砂洲の形成は縄文時代晩期まで続いていたようで，この間の遺物は本遺跡からは出土していない。

砂洲上に遺跡が営まれているのは弥生時代前期になってからである。弥生時代前・中期の遺物は砂洲中央やや南のＡ～Ｉ－８～22区の限られた範囲に集中しており，この時代には砂洲は26区付近までしか発達していなかったのではないかと推定し，作成したのが推定図(3)である。

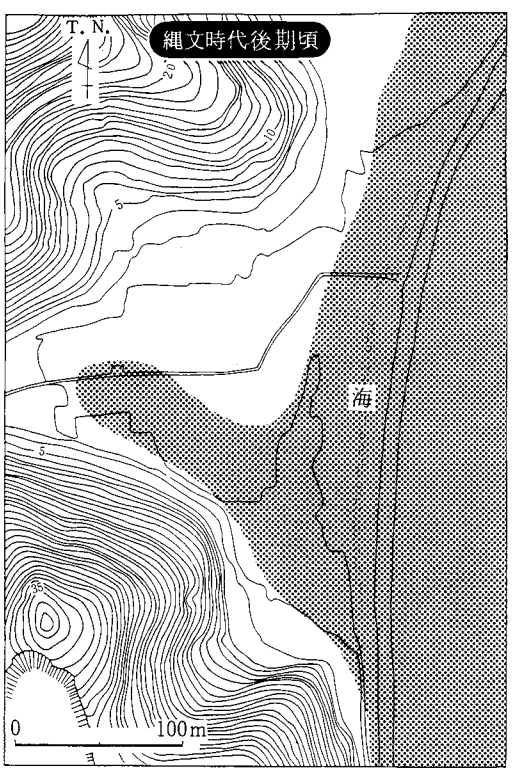
古墳時代の遺構・遺物は砂洲頂部のＥ区以西から検出されており，東側からは見つかっていない。これは当時の満潮時の海岸線が砂洲頂部まで達していたためと推定でき，この時代の地形は推定図(4)のようだったと思われる。

これに対し奈良時代以降は古墳時代とは逆に砂洲の東側に遺物包含層が形成されている。この現象は海の中に遺物を投棄したと考えるよりは，海岸線が後退し陸地が広がったと見做したほうが良かろう。このため古墳時代より海岸線を後退させたものが推定図(5)である。

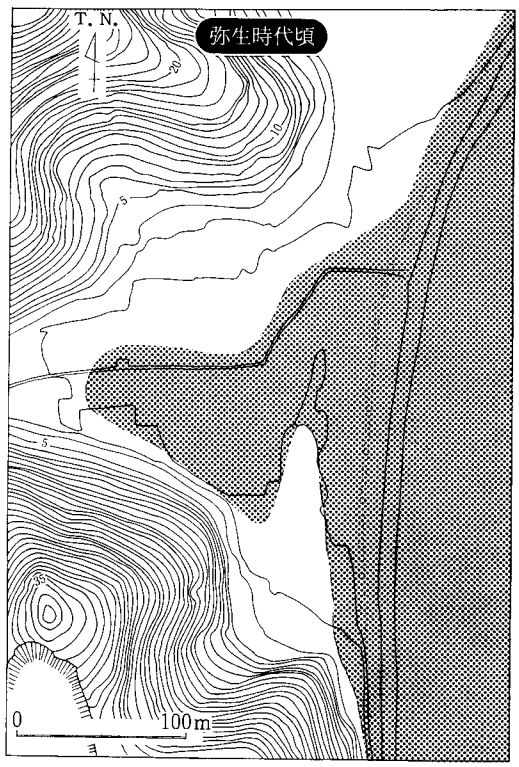
中世になると砂洲東側の海岸線は奈良時代とも現代ともほとんど変わり無かったものと推定できる。この時代には砂洲北西部の陸地化が進んだものとみえ，Ｋ－38区では曲物遺構が検出されている。しかしＳ－30区付近には放射状の地割りが認められ，これはこの付近が最後まで湖沼状に残ったものではないかと推定される。



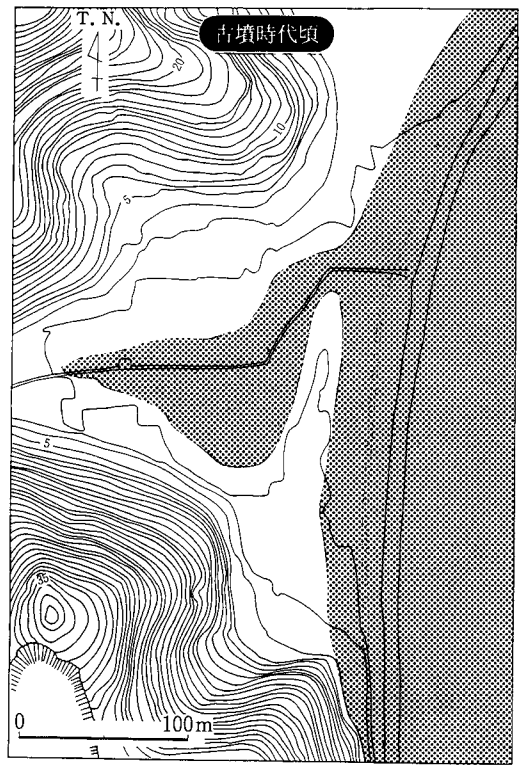
第25図　大浦浜旧地形推定図(1)



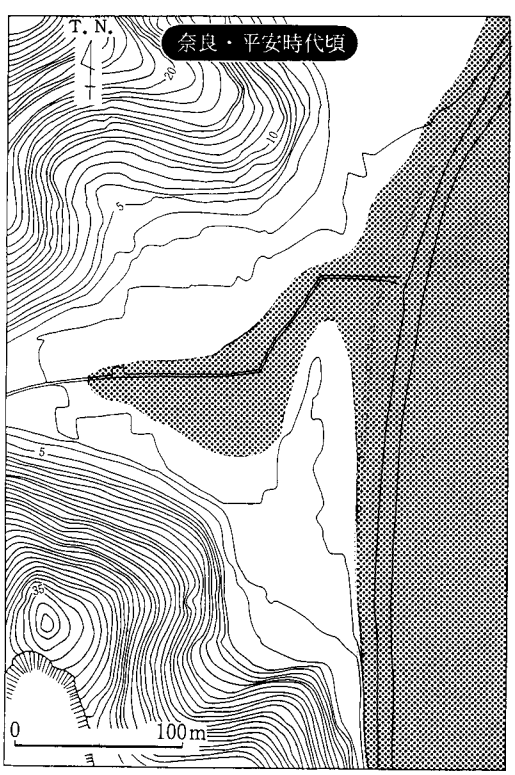
第26図　大浦浜旧地形推定図(2)



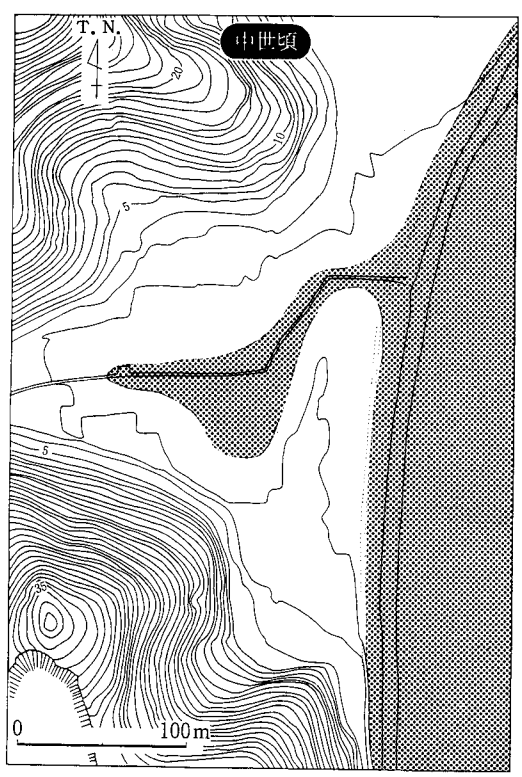
第27図　大浦浜旧地形推定図(3)



第28図　大浦浜旧地形推定図(4)



第29図　大浦浜旧地形推定図(5)



第30図　大浦浜旧地形推定図(6)

第４章　各時代の遺構と遺物

第１章　縄文時代の遺構・遺物

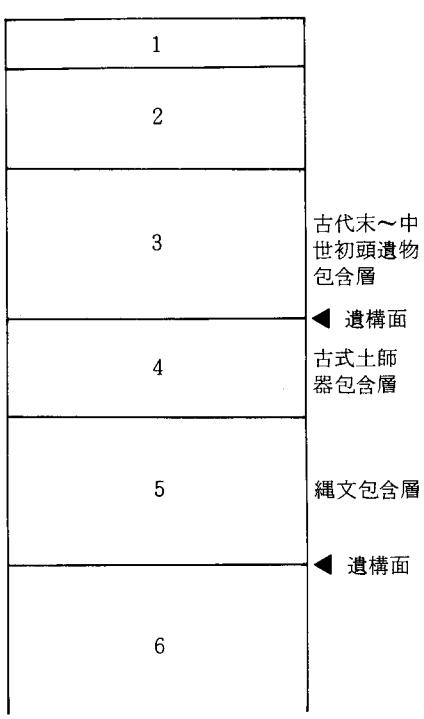
(1)　遺　構

縄文時代の遺構は，ヤケヤマ東麓地区の地山面で検出された集石遺構２ヶ所（SX01J － 02J）と貝殻土坑４ヶ所（SK01J － 04J）・土坑（SK05J － 06J）のみである。

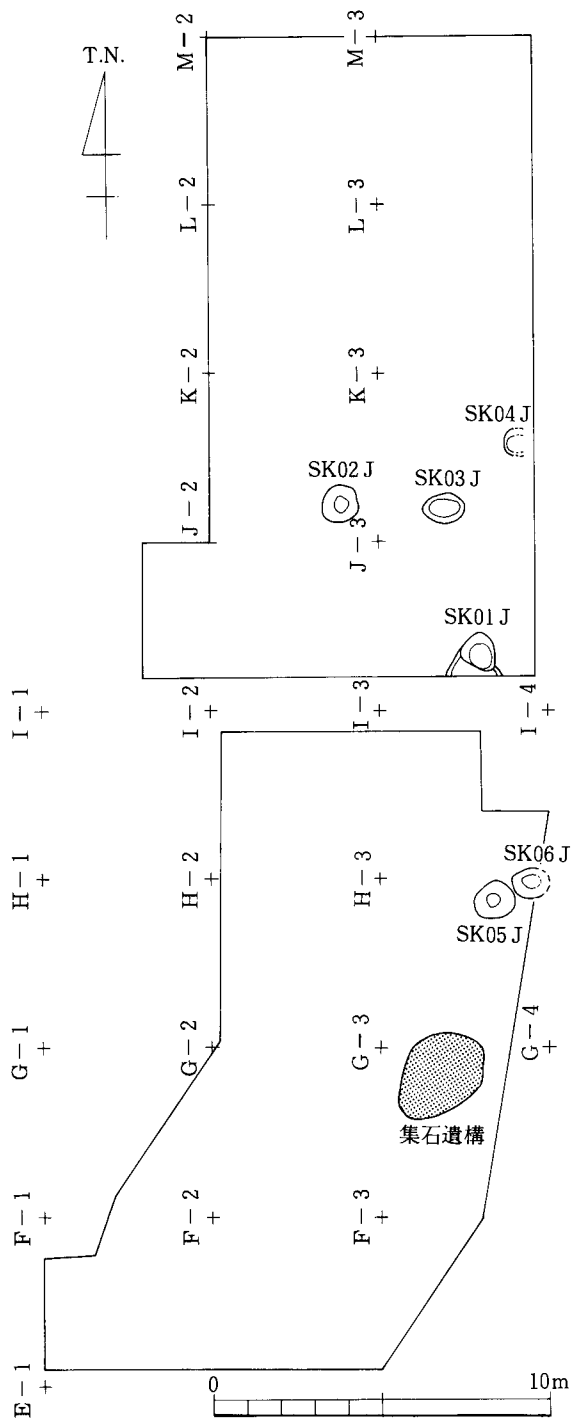
集石遺構は，G－３区で検出された。

SX01Jは，検出状況では台形状を呈するが，底面に相当する部分がみだれている。上幅約0.9m，下底幅1.4m，高さ1.1mを測り，面積1.27㎡を測る。これを構成する石材は，長さ30㎝，幅15㎝程度の人頭大のものも見られるが，多くは拳大の河原石からなっている。

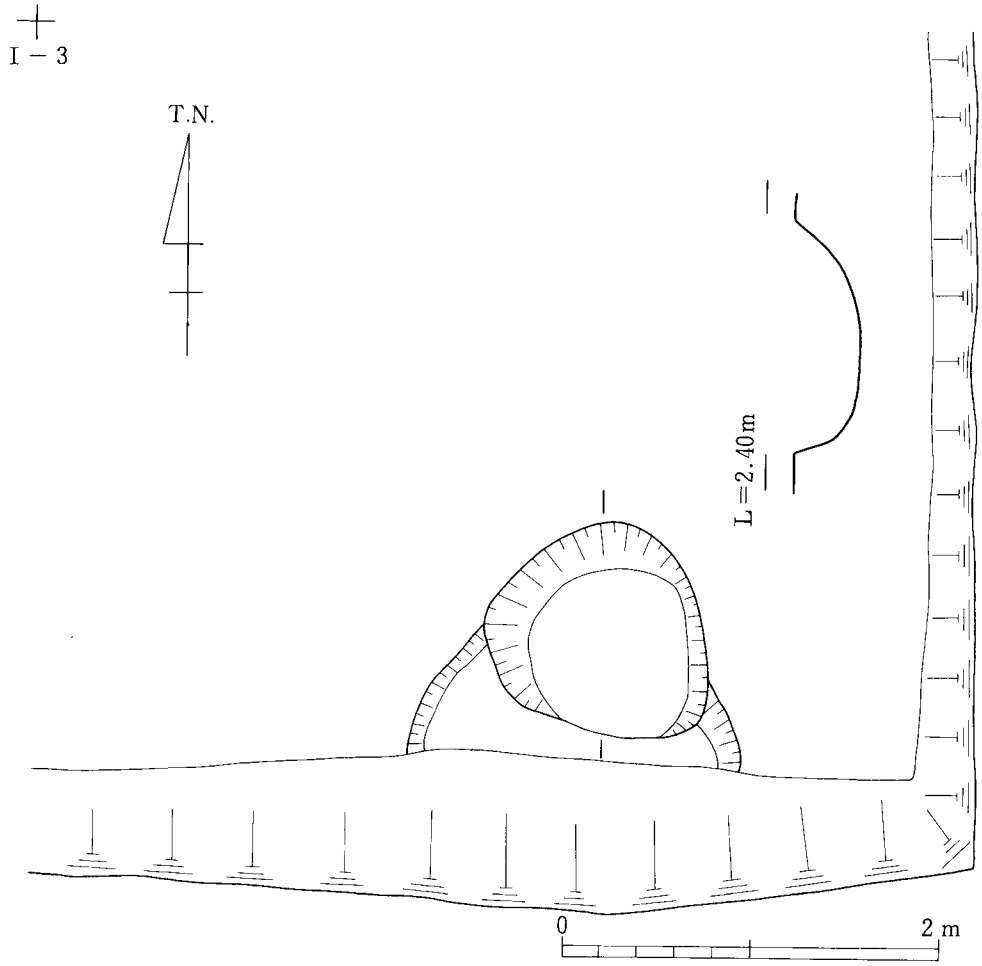
SX02Jは，長径0.8m，短径0.5mを測る小形のもので，周辺に石材の散乱が認められること



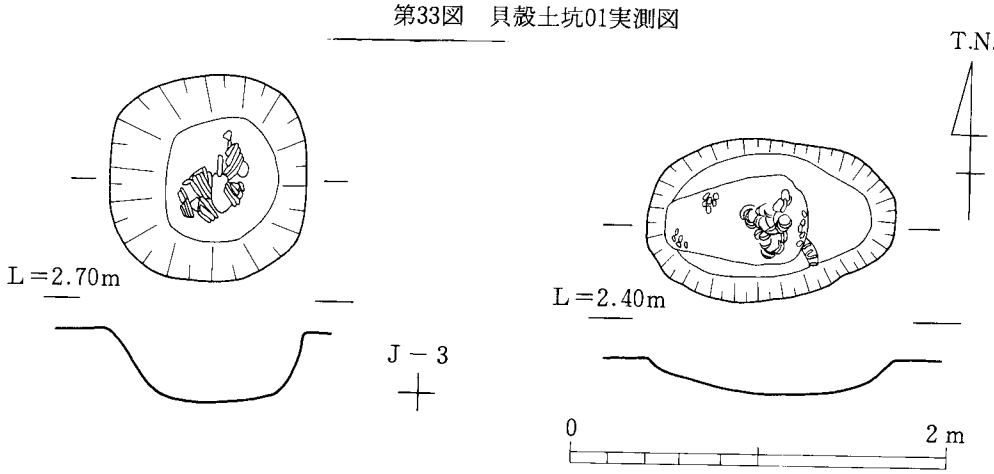
第32図　ヤケヤマ東麓土層模式図



第31図　遺構配置図



第33図　貝殻土坑01実測図



第34図　貝殻土坑02・03実測図

から，本来は，もう少し大形であった可能性も残している。

断面形は，SX01J・02Jともほぼ同一で，ベースの砂地上に敷く形で配石している。配石の方法に統一性はない。

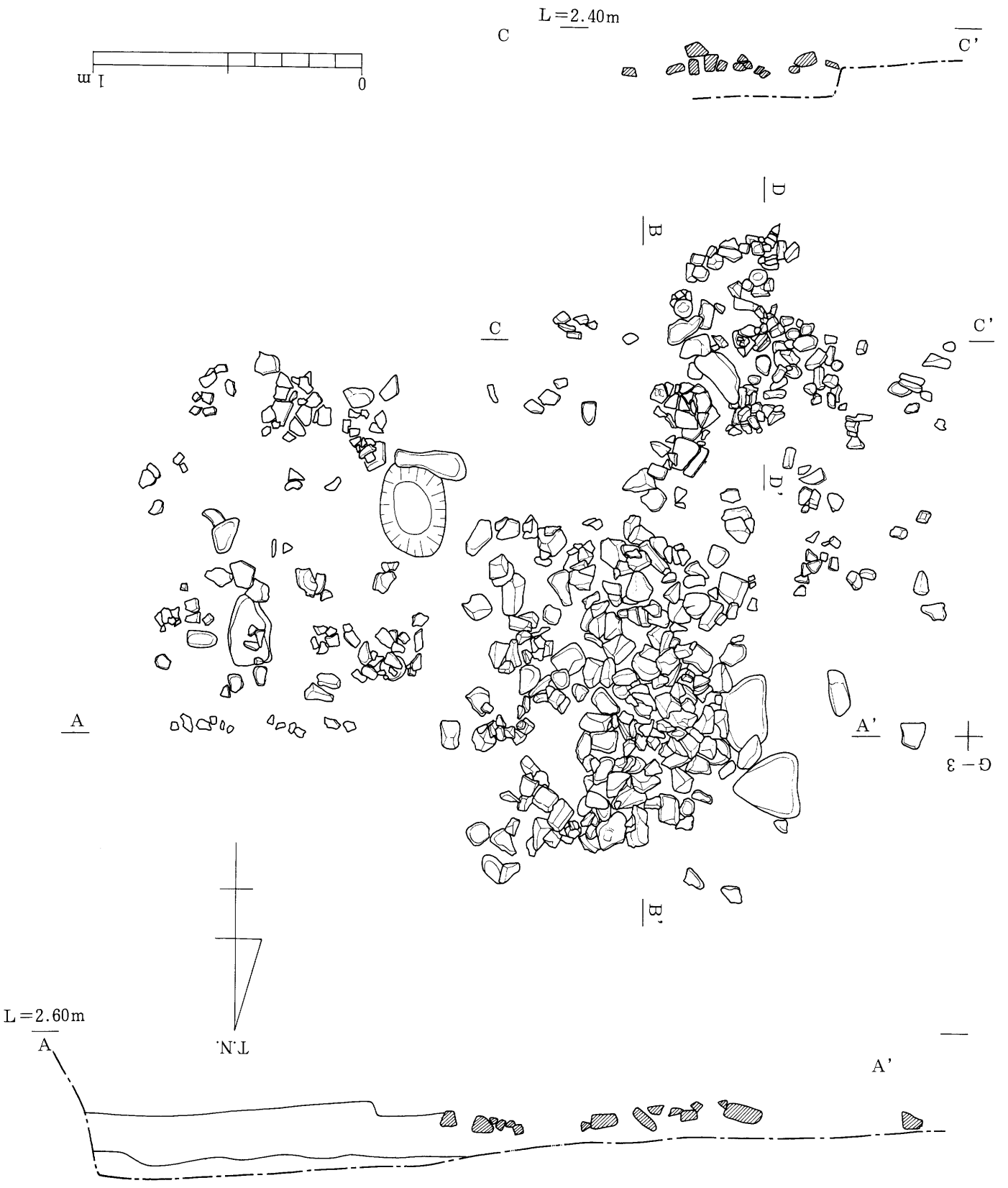
この集石遺構の性格は，使用石材が二次焼成を受けて赤変していること，断面形態でわかるように砂地上に配石していることから，石敷炉的な使用が考えられる。

次に，貝殻土坑についてである。SK01Jは，二段掘り土坑になっており，外側の土坑の大きさは南辺が未調査で把握できていない。短径は，1.76mを測る。内側の土坑は，外側の土坑の北辺を切るような形で作られており，径1.2m深さは約0.3mを測る不整形な円形を呈する。

SK02Jは，一辺約1m，深さ0.15mを測る隅丸方形を呈し，ウミニナ・スガイ(1)などの貝殻が検出されている。

SK03Jは，長辺約1.3m，短辺約0.86mを測る玉子形を呈し，巻貝・二枚貝が見られる。貝殻中には，磨消縄文土器片が含まれることが確認された。この土坑は，貝殻の包蔵状況が良好である

第35図　集石遺構実測図



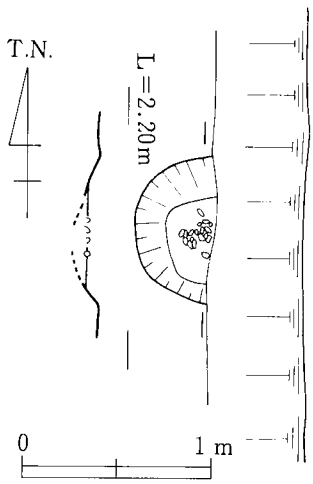
ことから土坑ごと切り取りを実施したため，その内容については明らかにできていない。

SK04Jは，短辺0.8m・深さ0.1mを測るが，長辺は東側調査区外に伸びるため不明である。形状はSK03と同様の玉子形を呈すると推測される。検出された貝殻は巻貝が多い。

SK05Jは，径約1.3m，深さ約0.3mを測り，すり鉢状の断面を呈する。埋土は暗褐色砂で，磨消縄文土器片やサヌカイト片の出土を見た。

SK06Jは，径約1.0m，深さ約0.3mを測り，すり鉢状の断面を呈する。埋土内容物はSK05Jと同様で同一時期の所産と考えられる。

これら以外に土坑2基が検出されている。



第36図　貝殻土坑04実測図

以上のように，縄文時代の遺構は，ヤケヤマ東麓の狭い範囲内でのみ検出され，後述する縄文土器包含層の年代からして縄文時代後期初頭頃に集中すると考えられる。今回検出された遺構は，集石遺構や貝殻土坑のように縄文時代の生活の一端を示す資料になったが，住居等の施設が検出されておらず，出土した土器形式の多様性と定住性の問題は今後にゆずらねばならない。

次に遺物包含層についてであるが，基本的には次の通りである。

ヤケヤマ東麓地区の土層は，「本」第32図土層模式図にみられるように，

第1層　表土層（耕作土層）

第2層　黄白色バイラン土層・暗茶灰色土層・淡焦茶色土層

第3層　淡焦茶色砂質土層（古代末～中世初頭遺物包含層）

第4層　暗焦茶色砂質土層（弥生時代末期～古式土師器の遺物包含層，西側山手では欠落する）

第5層　黄白色砂層（縄文土器包含層）

第6層　明黄色砂層（無遺物層）

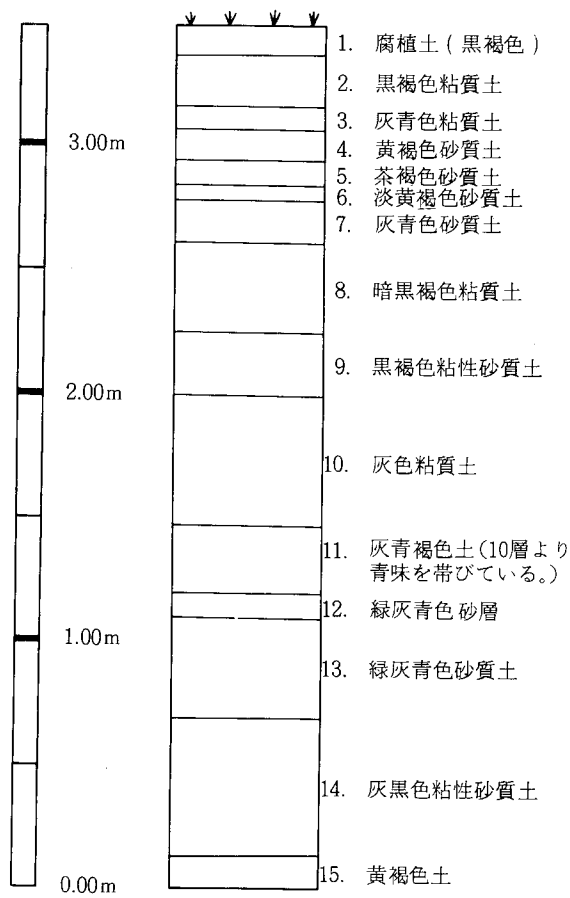
である。

この地区での縄文時代の遺構はすべて第6層上面で検出され，上部の第5層中には縄文前期～後期初頭までの土器片が包含されている。

縄文時代前期の単純層が検出されたたては北麓地区の土層は，「本」第37図土層模式図に見られるように，

第1層　腐植土層（黒褐色粘質土）

第2層　黒褐色粘質土



第37図　たては北麓土層模式図

第３層　灰青色粘質土
第４層　黄褐色砂質土
第５層　茶褐色砂質土
第６層　淡黄褐色砂質土
第７層　灰青色砂質土
第８層　暗黒褐色粘質土
第９層　黒褐色粘性砂質土
第10層　灰色粘質土
第11層　灰青色褐色土（10層より青味を帯びている）
第12層　緑灰青色砂質層
第13層　緑灰青色砂質土（12層より暗い）
第14層　灰黒色粘性砂質土
第15層　黄褐色土
である。
このうち，第９・10層から縄文土器が出土している。

(2)　遺　物

1)　縄文土器

①　前期の土器

「実」第14図～「実」第18図は前期の土器である。このうち，１～47，59～67，69～72，75～76，84～86は条痕を地文とし，49～58，74，78～83，87～90は縄文地である。これらの土器を主として，文様で分類すれば，次のようになる。

第Ⅰ類（「実」第14図１～41，「実」第15図42）

条痕地にD字形の刺突を基本的に平行に施すもので，２～３個で一単位を構成する。この中には，口唇部を刻むもの(1～5･8)とそうでないものが見られる。又，比較的単位間があき，明瞭なものと，やや連続的に構成されるものが見られる。

この中には49のように口縁部下に断面三角形の凸帯を持ち，突帯を挟んで刺突が見られるもの，51－58のようにやや大きな刺突を縦横に施すものも見られる。ただこれらに関しては，この時期には該当しないかもしれない。

第Ⅱ類（「実」第15図43～59）

59は，四角形の刺突を横位に巡らすものである。

第Ⅲ類（「実」第16図67～74）

沈線に挟まれた区画内を，C字爪形の連続文様を施すもので，交差する直線帯が見られる。口縁部68には刻目等見られない。

第Ⅳ類（「実」第16図75～77）

体部の形態は不明であるが，屈曲して明瞭な口縁部を有する。口縁端部は刻目が施される。口縁部の口頸部寄りに外面からの刺突が見られ，この結果として内面にこれに対応した瘤状のふくらみが見られる。77は，形態が異なりⅢ類に近いが，文様構成上類似点が見られるため，この類

としておく。

第Ⅴ類（「実」第17図60～62，66）

口唇部から少し下がった位置に貼り付け凸帯が見られ，凸帯を挟むようにD字爪形文が見られる。内外面は条痕地である。60・62には外面の爪形と同一の工具による刻目がある。凸帯下の爪形は一列のものから三列のものまで見られる。66は，凸帯が他の例のように突出せず，爪形も直線的な表現にかわっている。

第Ⅵ類（「実」第17図63）

63は，形態上第Ⅴ類に近似するが凸帯の位置が第Ⅴ類に比べて下位にあり，爪形にかわって四角形の刺突になる。又，刺突は口唇部と凸帯の間に限られる。

第Ⅶ類（「実」第17図64～65）

64・65は胎土・色調等の面から，同一個体と考えられ，全体で砲弾形を呈する尖底になる。

器面調整は条痕地であるが，64外面では上下方向の粗い条痕(?)が加えられる。

文様は口縁部にC字爪形が一列見られ，同一工具による口唇部刻目がある。

第Ⅷ類（「実」第18図78～88）

器形は第Ⅳ類の系列にあり，体部から外上方に開く口縁部を有する。文様は，細い隆帯を直線及び曲線によって描き，隆帯を挟むように隆帯上を爪形文で施文する。

この結果，隆帯の両側に沈線が入る。地文は縄文である。

84は山形に隆帯をめぐらし，同類とすることが可であるかどうか不明であるが，施文手法が同一のため同類としている。

第Ⅸ類（「実」第18図89～90）

89～90は，やや肩が張る体部から内湾ぎみに立ち上がる口縁部を有する。器面調整は外面が縄文地，内面は条痕地である。

施文は断面かまぼこ状を呈する隆帯上を爪形文で飾る。又，口唇部は同一工具により，内外側に相対する向きの二条の爪形が見られる。

口縁部内側には薄い粘土帯を貼付し，その上に縄文を施す。90は，口唇部上にC字爪形単体の刺突が認められる。

以上，前期土器をⅠ～Ⅸ類まで分類した。従前の編年[2]に従えば，Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶが羽島下層式，Ⅲが磯ノ森式，Ⅳが彦崎ＺⅠ式，Ⅷが里木Ⅰ式，Ⅸが前期末～中期初頭（鷹島？・大歳山式？）に比定される。

羽島下層式は，近年の研究によりⅠ類を羽島下層Ⅱ式として設定し，Ⅴ及びⅥ類をⅠ式の範疇で考える方向にある[3]。Ⅶ類は，こうした傾向の中では，爪形がC字に変化しており後出する要素が強い。Ⅴ・Ⅵ類は同一地点から出土しており，Ⅰ類とは別地点となるなど，今後さらに考える必要があろう。

② 中期の土器

「実」第19図～「実」第42図は，中期の土器である。分類は「里木貝塚」[4]に準拠した。

第Ⅰ類（「実」第19図91～104）

口縁部外面に段を持ち，段上に斜線状に見える縄文が見られる。段下及び体部に弧状の押し引き文，口縁部内面に縄文が施文されている。器形は口頸部でややくびれる深鉢形を呈する。口縁

端部は鋭く尖るもの（91～93）や丸く終わるもの及び平坦面を持つものなどが見られる。

第Ⅱ類（「実」第19図105～106）

器形は，105が頸部で鋭く屈曲するキャリパー形を呈し，屈曲部に貼り付け凸帯を巡らし，凸帯上にC字爪形を施すものである。体部には細い隆帯を曲線的にめぐらし，一部には円形も見られる。

106は，頸部が丸みをもってくびれるキャリパー形を呈し，縦の縄文地に押し引きを曲線的に施す例である。口縁部には二枚貝の圧痕を連続的に配している。

第Ⅲ類（「実」第20図107～124，「実」第21図125～153）

頸部が鋭く屈曲するキャリパー形を呈する。口縁部の形態は，107に見られるように外上方に直線的に延びたのち屈曲して上方に立ちあがるものと，108・109のように袋状を呈するものがある。109は，口縁部外面に把手が見られるものである。

口唇部は，平坦面を形成し，内面側，外面側にわかれて，互いに逆行する爪形文が見られる。

文様は，粒が比較的そろって明瞭な縄文地に，弧を描く貼り付け凸帯を配し，凸帯上に連続する爪形文が見られる。この凸帯上爪形文は，口縁部では，口縁部に平行して施文され，口縁部内側でも同様に見られる。

また，152や153では，焼成前の円孔が見られるが，その用途は不明である。

第Ⅳ類（「実」第23図154～169）

頸部でややくびれるキャリパー形を呈すると考えられる。口縁部は波状を呈するもの（154・155・169）も見られるが，多くは水平で内湾する口縁部を持つ。

地文は縦の縄文地で，外面は沈線，内面は幅広に肥厚させて縄文を施す。口唇部には明瞭な爪形を施し，えぐりは深いものが多い。

第Ⅴ類（「実」第23図170～174）

器形は，頸部がややくびれ，口縁部が袋状を呈するキャリパー形を呈する。

地文は，縄文で口縁部下に隆帯が見られる。文様は，押し引きあるいは連続する刺突文で口縁部内側に縄文帯を有する。

第Ⅵ類（「実」第22図175～183）

二枚貝の圧痕が見られるものを総称した。圧痕が施される位置は口唇部か口縁部外面に限られている。

器形的には広義のキャリパー形を呈するものが多いが，口縁部の形態は多様である。ほぼ直立する口縁部を有するもの（175・177），外上方に延びたのち湾曲するもの（179・183），外反するもの（180）などである。

口縁部内側にも，縄文帯を持つもの（175・180），幅広に肥厚させたのち縄文を施すもの（176・177），縄文が見られないもの（179・183）がある。

第Ⅶ類（「実」第24図184～205）

外面は縄文地でほとんどのものが無装飾，内面は肥厚させた上に縄文を施し，口唇部に爪形文が施されているものを一括している。

器形的には，口唇部が波状を呈するもの（184～187）や水平なもの，頸部の屈曲が大きいもの（190）やゆるやかにくびれるものなどが見られる。

中には187のように外面に刺突があるもの，189のように内面に縄文帯のないもの，205のよう

に内面肥厚帯にかえて沈線で区分しているものもある。

第Ⅷ類（「実」第25図206～221）

第Ⅶ類との相違点として，口唇部の爪形文が縄文におきかわったものを一括した。ただし，206・209・210・218・219のように，縄文を施していないものも見られるが，その他の要素が同一であるものは同一類として取り扱った。

内面の縄文帯は，粘土帯を貼り付けているものがいくつか観察される。

第Ⅸ類（「実」第26図222～228，「実」第28図229）

縄文地で頸部がかるくくびれるキャリパー形を呈する。器形は一定しておらず，222のようにくびれが明瞭なものも見られる。又，224のように外反する口縁部を有するもの，227～228のように浅鉢の可能性があるものなどが見られる。

222は，口縁端部を2本指でつまんで整形しており，内外面に指頭圧痕が連続して見られる。又，この結果，口縁部がやや尖りぎみになっている。

229は，ほぼ全体の器形が判明しているもので，口縁部は内湾ぎみに立ち上がり，体部は肩部に最大径が有り，内反ぎみに底部に至り，平底の底部を有するものと考えられる。

外面は縄文地，内面は肥厚した上に縄文が施され，口唇部は小さな波状を呈している。内面には指頭圧痕及び指ナデが顕著に認められる。

第Ⅹ類（「実」第28図230～247）

口唇部に刻目及び指頭圧痕を施す無文の土器を一括した。器形は，体部形態の判明している230では，頸部がわずかにくびれて口縁部は外反しているが，直立するものや内湾するもの（232・230）も見られ一様ではない。

口唇部の施文も，刻目のもの（230）などや円形の刺突を施すもの（238）もある。

外面調整も，条痕（230他）・縄文（231他）・ナデ（234他）と多様である。

第Ⅺ類（「実」第29図248～287）

第Ⅺ類の特徴は，基本的には縄文地のやや幅広の隆帯上を爪形状の刻目で施文するものである。

爪形文は，248のようにD字形になるもの，249のようにC字形になるもの，250のように細く連続するもの，270のように直線的になるもの，276のように隆帯そのものが細いもの，278のように間隔のひらくもの，284～287のように円形の刺突文もある。

口縁部内側には，通常外面同様の爪形文帯が多く見られるが，中には口唇部に刻目が認められるものや無文のものも見られる。

第Ⅻ類（「実」第30図288～311）

縄文地に直接，爪形・押し引き・連続刺突などが見られる。第Ⅺ類の隆帯が無いものである。

器形は，頸部がわずかにくびれるキャリパー形を呈する。中には296のように体部が直線的に延び，口縁部が短く直立するもの，299・300・302・311のように内湾する口縁部を持つものも見られる。

文様の基本的な構成は，口縁部外面に口縁と平行する爪形文帯を施し，内面にも同様の爪形文を施す。

爪形には連続的なものから，一単位が明瞭なものまで多様で，288では口縁部外面に三条の爪形文が施され，密から粗なものまで観察される。

296～302は，爪形文を押し引くタイプで，爪形の両側を引きずるため，爪自体よりも両側に刺突的な圧痕が明瞭に残る。288～295では口唇部が比較的尖りぎみとなり施文は施されていないが，296～302の中では，296・298・299・300の口唇部に刻目が施され，302では縄文帯が見られるなど，別類と考えうる材料かもしれない。

302～309は，米粒状の刺突を曲線的に配するもの，円形の刺突を施すものである。この中にも内外面いずれかに爪形が見られ，爪形文の衰退化の中で位置付けうる資料となろう。

310は口縁部内面に爪形を配し，311は外面に連続する爪形文が見られる。器壁は他よりも薄くなり器種の違いに起因するものかもしれない。

第Ⅻ類（「実」第27図312～316）

器形のわかるものはない。体部に渦巻状の隆帯を施文する例である。314は沈線による施文で，結果として隆帯的な視覚効果が得られるものであろう。

第ⅩⅣ類（「実」第27図317～325）

器形のわかるものはない。特徴は，体部に隆帯が見られ，隆帯を挟みこむように細い沈線が見られるものを一括した。沈線は，隆帯の基部をはじめ，隆帯上及び周辺にも一部見られる。

321は，かぎ形の隆帯の周縁に沈線が見られる例で，隆帯上・周辺には沈線が施されないため，この類の中では特異な例といえる。

第ⅩⅤ類（「実」第31図326～「実」第34図419）

縄文地に複数の沈線による直線及び弧文を施すものを一括した。

器形は，口縁部が内湾し頸部でゆるやかにくびれるキャリパー形を呈するものが一般的である。

文様構成は，口縁部では326に見られるように口縁端部に口縁と平行する沈線が見られ，これと直交する沈線を施し，この間を重弧文で充填している。頸部では，333に見られるようにくびれ部にも口縁と平行する沈線が入り，口縁部同様に重弧文が見られる。326・333から見れば，施文は縦線が先に入り，これに直交する横線，最後に弧文の順であろうと考えられる。

基本的にはⅩⅣ類の隆帯を省略した形でとらえられよう。

口唇部は基本的に無文のものが多いが，348・358のように刺突を施すものも若干ある。

358・359は，口縁端部に横線が見られず，重弧文も他とは逆に正位に見られるものである。

377は，体部下半の破片であるが，これから見ても外面にはほぼ全面に文様が施される可能性が高い。

378～380は，口縁端部に横線が見られず，端部のつまみによる指頭圧痕が顕著に認められる例である。この結果，口縁端部はやや尖りぎみになる。

397・380は，口縁端部に横線が見られず，重弧文が小さくなる例である。中には，401・404のように体部に横線が入り，これを基に重弧を施す例や，399・403のように，縦横の沈線がまったく見られない例もある。

398は，口唇部にも縄文が施されていること，縦横の沈線が見られず，連弧が正・逆で組み合わさって施文される例である。

413は，縦線に添った重弧が見られず，器形も口縁部のふくらみが小さく，結果としてくびれが浅い。

419は，縦横の直線文のみで構成され重弧文が見られない例である。沈線も他と比べて比較的

太く，時期を異にする可能性も残している。

第XVI類（「実」第34図420～438）

器面調整は，内外面とも二枚貝条痕と考えられ，口縁部は僅かに内湾する器形を呈する。

口縁部における基本的な施文は，口縁端部から数cm下がった位置で横位の沈線を入れ，口縁との間を縦線で充填するものである。中には430のように横線を越える例も見られる。

429の例からして，横線より下半は比較的雑な線描になると考えられ，431～438まで同類とした。ただ，431や433のように，隆帯や段を伴う例があり，全体的な器形の中でこれらのものも同類として考えうるかどうかは今後の課題といえる。

第XVI類の特徴の一つとして，口唇部の刺突文が上げられる。刺突文を持たない例（424・426）もあるが，持つものがポピュラーであると考えられる。

第XVII類（「実」第35図439～454）

縄文地に太い沈線及び刺突で施文するものを一括した。

口縁部は内湾する例が多く，中には直立ぎみのもの（451・452・454）も見られる。448は，小形の浅鉢になるものと考えられる。

この類で顕著な施文としては，439～442があげられ，直線及び曲線の沈線と，米粒形の刺突を組み合わせている。444は，地文が不鮮明であること，446・447には波状文が見られることから，439～442とは若干異なる。448は，くびれ部に横線，これから下半にはやや細めの不整な平行線が底部に向かって施されている。449～451は，太い沈線のみで構成されるもの，453は，米粒状の刺突のみが見られる。452・454は，XVI類に属する可能性もある。

第XVIII類（「実」第36図455～495）

無文地に太い沈線が施される例である。全体の器形は不明であるが，口縁部には，455のように内湾するもの，465・466のように直立ぎみのものなどがある。490は，小形の深鉢と考えられる。

施文は，口縁部では455のような米粒状刺突や456のような紡錘形に向かって横位のU字沈線を施すものが多いが，中心的な文様を欠いたままのU字状沈線のみの例（460）や，沈線と刺突の組み合せで構成されるもの（461～468）も見られる。

469～471は，縦位の沈線と円形刺突を組み合せている。沈線が自由な曲線を描く例も多く，474・484のような「わらびて文」や475・477の波状文，479～481のように円形を表現するものなど一定のパターンが見られない。

490～495は，横線から単純に垂下したり，三角形を暗示したりする沈線で構成され，上記の多様性と一定のパターンとの関係も注目される。

第XIX類（「実」第37図496～507）

広義の波状口縁で，口縁に平行する形で太く深い沈線や八字状沈線を持つ例である。

口縁部はすべて内湾傾向にあるが，全体の器形は不明である。

第XX類（「実」第37図508～514）

基本的な文様構成はXVIII類の一部に見られるように沈線と米粒状の刺突の組み合せであるが，沈線等がXVIII類よりも細い傾向にあり，口縁部内側に刺突文を施すもの が多い。横位の沈線が多いが，弧文を描くもの(509)，縦線の見られるもの(512)，八字形を呈するもの(513) などもある。

第XXI 類（「実」第37図515～529）

外反あるいは直立する口縁部を有するが，全体の器形は不明である。条痕地の口縁端部を上方

に拡張し，拡張面に縦位の沈線を施す例である。沈線の長さは拡張面に対応する。

第XXⅡ類（「実」第38図530～547）

器形・調整・施文パターンなどXXI類とほぼ同一内容を持つ。ただ，沈線が細い傾向にあり，施文パターンも多様化している。

530～543が，XXI類と同一パターンを示すが，この内530～532，536～537は口唇部に刺突及び刻目を有する。沈線の太さでは，530～535，536～543に分けることもできる。又，533は口縁部内側にも僅かに縦位の沈線が施されている。

544は，口唇部に刻目を施し，体部に逆三角形やU字状の沈線が見られる。この544～547は別類と考えた方がいい資料かもしれない。

第XXⅢ類（「実」第38図548～554）

条痕地に太い沈線を施すものであるが，XⅧ～XXⅡ類までにあてはまらないものを一括した。

553～554は円形刺突文が認められる。

第XXⅣ類（「実」第39図555～562）

555～562は，同一個体と考えられるが，接合はできなかった。器形は，555から頸部がゆるやかにくびれ，口縁部が短く外反するもので，体部最大径がほぼ中位にある長胴形態を呈する。

文様は，縦位の無節縄文地に口縁部と肩部とに二条の隆帯をめぐらし，その前後に波状沈線文を施文している。二条の隆帯間には各々二条のブリッジがかかっているが，箇所数は不明である。

波状文は，一条ごとに山と谷部が入れかわる形をとっている。肩部以下には施文は認められない。

第XXV類（「実」第39図563～564）

563・564ともに口縁部の破片で，全体の形状は不明である。563は肩部に，564は口縁部に各々太い沈線で曲線が描かれている。又，564は肩部に円形刺突文を施す。

第XXⅥ類（「実」第40図565～「実」第42図616）

中期土器の範疇で考えられるが，所属が明らかでないものを一括した。

565～567は，口縁部と頸部の境に段などが認められ，この境に刺突文を施すものである。口縁部外面は縄文を施すが，刺突文帯より下は無文である。565には口唇部に刻目も認められ，566・567（同一個体か？）と若干の違いが見られる。口縁部形態も，565が外反ぎみに外上方に伸びるのとは異なり，566・567では内湾ぎみとなる。

568～570は，内湾ぎみの口縁部外面の縄文地に，波状文及びこれの変形文様が見られる。

571は，566・567に類似する資料で，口縁屈曲部に指頭圧痕が見られる。口縁部外面は縄文地である。

572は，口縁屈曲部に段もしくは小さな隆帯状突起が見られ，体部外面に弧を描く連続刺突文が施文されている。573も同様の連続刺突文である。

574は，半球状の体部に外反する口縁部を持ち，体部に細い沈線による上下方向の施文が見られる。口唇部は斜下方に拡張している。

575～582は，縄文地に円形押圧文を施す例で，口縁部は内湾し（576），頸部の屈曲は比較的明瞭なもの（575・577）である。

583～588は，縄文地に小さな円形の連続刺突文を配する例である。縄文には多様性があり，同一時期とは考え難い。

589～590は，浅鉢の口縁部と考えられ，半球状の体部に短く外反する口縁部を有する。図の拓本は各々左右を逆配置しているが，頸部外面には爪形状の圧痕が見られ，口唇部から口縁部内側にかけて縄文が施文されている。

591～603は，内湾もしくは直立する口縁部を有するが，体部の形態は不明である。施文は無文地に三角形状の刺突を，口縁部に平行して施しており，その下部に同一工具による刺突波状文が認められる。

604～609は，591～603と基本的には同一パターンと考えられ，三角形状の工具のかわりに円形刺突を用いている。ただ，下位の刺突波状文は認められない。

610～612は，ほぼ直立する口縁部を有し，無文地に直線・曲線の沈線を描いている。口唇部の形態はまちまちで三者三様といえる。

613～616は，条痕地に隆帯をめぐらし，隆帯周縁に沈線を明瞭に施し，隆帯をうき上がらせている。隆帯上には大きな刻目が認められるのが特徴である。体部破片のみで，器形は不明である。

「実」第42図617～623は多孔底と呼ばれるものである。多孔底には一定のパターンはなく孔数も多様ではあるが，617・619では中央の穿孔が大きく，多孔にすること自体に目的があったものと考えられる。

③　後期の土器

第Ⅰ類（「実」第43図624～「実」第52図854）

第Ⅰ類は，所謂「磨消縄文」を一括した。ただ施文には多種多様な様相が認められるため，適宜説明を加える。

624～629は，口縁部から少し下がった所に横位の沈線を施し，口縁部との間を縄文で充填する例である。

630～646は，平行な沈線文を施し，その間を交互に縄文で施文するものである。

647～722は，沈線が四角もしくは曲線で描かれるもので，中には磨消部に円形刺突文を配したり，口唇部に沈線が見られるもの，口唇部に刻目・刺突を施すものなどバリエーションが見られる。又，波状口縁の比率も高くなり，頂部が比較的尖頭化しているものが多い。

723～724は，体部から屈曲する口縁部の，口縁部下位の沈線と屈曲部の間に縄文を施す例で，同一器形と考えられる。

725～741は，口縁部に四角窓が見られる所謂「工字文」を呈するものである。四角窓の形状も隅丸のものから角形のものまで多様である。縄文が施される部位も，四角窓の内側であったり，周辺部であったり一定しない。文様形態については全体の形状が明らかではないので詳細は不明である。器形は，口縁部が725・730のように強く内湾するものと，726のように直立するものとで違いが認められる。739は，縄文帯が細く複数平行に並び，時期的にも後出する可能性がある。

742～746は，浅鉢と考えられる一群で，体部全面に曲線的な文様が見られるものである。742は比較的ポピュラーな文様で，縄文帯が直線と曲線とで組み合わされている。743は，二重の円形刺突文的な状況を呈し，後出する要素と考えられる。744は，左右対称に近い状況にはあるが，曲線を主体とした構成になっており，縄文部は不明瞭である。

747～759は，所謂「人形文」のグループで，波状口縁の頂部に文様の主体を置いていることがわかる。中には直線的に構成されるものの他，曲線的なものも見られる。又，「人形文」の部分に縄文を充填したもの（749・751・752他）や，この部分を磨消しているもの（748・754他）があ

る。755・757・758には「釣手状」部分も見られる。

760～776は,「釣手状」の施文が認められるもので，施文部位は口縁部のものが多いが，体部下半にも（763）認められる。このグループ内には,「釣手状文」というよりも,「うず巻文」のもの（765・771・772）も見られる。766は内外面に同一施文が見られ，浅鉢の可能性が高い。773は，釣手状文が左右対称に見られ，774は省略された形での施文である。

777は，二重の四角窓に刺突文をめぐらせている。778は，二重の円の中に二点の刺突が見られ，口唇部に刺突が行われている。781は，沈線による左右対称の釣手状文を口縁部に描いている。782・783は，細い縄文帯を平行に配する単純な施文である。785は，三角形を基調とした磨消縄文で，口縁端部を刻んでいる。795・796は，波状口縁の頂部を中心とした施文を行っているが，縄文帯は見られない。

797～812は，口縁部の拡張面にのみ文様を施すもので，時間的には後出する可能性が高い。802～804はうず巻文である。多くはこの拡張面のみに縄文を残す。ただ，813・814から見れば，体部にも施文されている可能性は否定できない。

815～827は浅鉢である。浅鉢の施文は，817・819・822・824・825・826のように内面のみ施されるものも多いが，この場合，比較的単純なものが多い。文様は，二本の口縁部に平行する沈線に囲まれた範囲のみ細く縄文を施すものである。815は，大形の浅鉢で，文様構成も上部のうず巻文と考えられるもの，下半の釣手状施文を組み合わせ，通常深鉢と何らかわかることのない施文と考えられる。

828～854は，波状口縁の頂部破片である。828～830は，頂部からの傾斜面を凹めて，その縁辺部に刺突を施すもので，830の頂部は輪になっている。

844～854は，深鉢の波状口縁頂部で，残存率の高いものである。頂部の形状は多様で，釣手状になるものが多い。ただ，波状口縁部のすべてが同一形状を示すものであるかどうかは不明である。頂部の文様は，体部からの延長として沈線を用いた磨消縄文のものもあるが，刺突文的な様相も多く見られ，飾る意識が強い。

第Ⅱ類（「実」第53図855～869）

磨消縄文の中で，三本の沈線を基調として文様を構成しているものである。

口縁部の形状は，外反するもの（855），短く外傾するもの（856～858），直立するもの（859），内湾するもの（860～862・866）がある。

855は，口縁端部に口縁と平行する施文があり，これを基本として三角形状に施文が行われている。856は，波状口縁の頂部で，口縁部に平行する左右の沈線（二本沈線で施文）が，頂部下でぶつかった点に釣手状をなし，この部分から下方に三本沈線が認められる。858・861は，855と同様の施文であろう。862は，四角窓を呈する。864～867は曲線を主体とするもので，全体の文様構成は不明である。いずれも縄文帯の幅は狭く，全体的にⅠ類に比べて単純化していることが伺われる。

第Ⅲ類（「実」第54図870～「実」第57図931）

第Ⅲ類は，沈線による文様構成ではⅠ類に類似するものが多いが，条痕地に施文し，縄文等による区画内充填が見られない点に違いが見られる。

870～877は，同一個体もしくは同一施文の例で，870の文様構成を基に各破片をあてはめたものである。870・873から見て，波状口縁頂部の口唇部に見られる二本の沈線を基に文様が始ま

り，曲線的な部分と直線的な部分が組み合わさっているが，文様としての一定の規格性があるとは現状では考えられない。

878は，口唇部に刻目を持ち，大きな重弧文もしくは八の字に広がる沈線に円文を加えたもので，左右対称となる可能性が高い。881も，左右対称となる可能性が高い。885は，体部の破片であるが，「八の字」状に広がる沈線の間を同心円状に沈線を加えている。「釣手状」文の変形であろう。

897～901は，「釣手状」文が上下に反転して波状の表現となっている。897・898は同一個体であろう。これは，波状口縁の頂部に円を描き，これから口縁に平行して沈線が見られる。この下に波状の表現が見られる。907は，頂部を中心に下半は不明であるが二本の沈線で施文している。919～927は，比較的細かい文様構成で全体を推定することは困難である。922・924は，文様中に刺突文も見られる。928は，うず巻文で，929・930は「釣手状」文である。

第Ⅳ類（「実」第58図932～「実」第63図978）

第Ⅳ類は，条痕地で文様のないものを一括した。

932～948は，口縁部が外上方に延びるタイプである。942は浅いくびれ部を持ち，口縁端部に近い方でやや内湾する口縁を持つ小形の深鉢か浅鉢である。949は口唇部に刻目を持つ。950～951は口縁部が直線的に内上方に延びる。952～956は浅鉢である。957・958は波状口縁，959は袋状口縁，960は口縁端部に拡張が認められる。961～962は口縁部が外湾し，壺形土器の形態を持つ。963～977は，口縁端部か口唇部に刻目を持つ例で細かい刻目（971）を持つものがあるが，相対的には粗い。978は浅鉢で，体部中位に二ヶ所穿孔が見られる。

第64図979～982はその他の土製品である。

979は，二辺で折損しており，波状口縁の飾りの可能性が無くもないが，土版と考えておく。両面ともに小さな刺突文を持ち，縁辺部は細くなっている。

980は，土器の把手とも考えられるが，確証はない。輪状にカーブしており沈線や刺突も見られるが，比較的シンプルな構成である。

981は，口縁部片で，沈線によるうず巻きを表現している。通常の土器片と比べて薄く仕上げている。

982は，楕円形の土錘と考えられる。中央に円孔が見られ短辺部に切り込みがある。一短辺は欠損しており切り込みの有無はわからないが，中央に円孔があることで切り込みも一ヶ所で当初の目的は達成されている。

2) 石　器

縄文時代の石器は，主としてヤケヤマ東麓地区の縄文土器包含層から出土しており，その他，海浜部からも確認された。土器の項でも述べたが，ヤケヤマ東麓の縄文土器は前期～後期が同一土層中で混在して出土しており，石器も時期区分することができなかった。ここでは各器種ごとに分類して，その概要を述べるにとどめたい。

① 石　鏃

石鏃は基部の形状から，従来より1)平基式，2)凹基式，凸基式の三つに大きく分類している。ここでもこれを基準にグルーピングをする。素材はすべてサヌカイトである。

平基式（「実」第65図１～「実」第66図61）

平基式には，形態が正三角形を呈するもの（１～11）と二等辺三角形を呈するもの（12～47）基部が斜辺となるもの（48～61）とが見られる。この中にも縁辺が直線的なもの，外側にふくらむもの，内側にえぐれるものなどがあり，細別は可能であるが，本質的な変化とは考え難い。

１は小形に属するものである。４・５が比較的整った形状であるが，表裏平坦面に剝片時の剝離面を残し，周縁の調整を主としている。12のように片面のみであるが全面に調整が及ぶ例を見てみると，素材剝片が厚いものに全面調整が行われるものと考えられる。

11～22は，所謂「ロケット型」の不明瞭なものである。「ロケット型」は，主として二等辺三角形の二長辺が直線的に伸びず，基部に近い側で一度屈曲し，五角形を呈するものを総称している。

調整を見る限り，意図的に行っていることは明白であるが，その理由は不明である。柄の装着に起因する可能性が高い。

48～61は，基部が斜めになっており，単純に折られたものと考えることも可能である。しかし，49・56・60のように，この部分にも調整が見られ，折損後の再調整を考えなければ，これも一つの形式として成り立つ。ただ，50・52・55のように，基部調整の一部が残存しているものについては折損を考えるべきかもしれない。

凹基式（「実」第67図62～「実」第70図185）

凹基式にも平基式同様にいくつかの形態差がある。まず，正三角形を呈するもの（62～69），二等辺三角形を呈するもの（70～103），二側縁がまるみをもつもので正三角形に近い形を呈するもの（104～116），同様に二等辺三角形を呈するもの（117～142），所謂「ロケット型」を呈し正三角形に近い形のもの（143～154），同様に二等辺三角形を呈するもの（155～173），その他（174～182），大形鏃になるもの（183～185）である。

64は，裏面に調整が見られず，片面調整を呈するものである。基本的には形態が整っており製品と考えていい。

凹基鏃では，調整を施し抉り部を造り出しているものが多いが，84・87・92のように，一撃の剝離か，素材剝片時の形状かは判断できないが，細かな調整を施さないものもある。

104・105・108・110は，幅よりも長さが若干短いものである。これらは，刺突力の点で他に劣るが，傷口が広くなる点で，用途上の差があるのかもしれない。

140は比較的大形の鏃であるが，両面ともに素材剝片時の剝離面を残し，周辺加工のみ施している。これに類したものとして179・181がある。182は，素材剝片ともいうべきものであろう。

183～185は大形鏃である。その平面形態から見て全体的に薄い。このため，両面に素材剝片時の剝離面を残しており，周縁加工のみになっている。３点とも打点側が本来部厚くなっているため，比較的大きな剝離を加えたのち細かな調整で形態を仕上げている。185は，一側縁にまったく調整を加えず，石鏃かどうかも不明確であるが，素材剝片を有意義に利用している可能性が高い。

凸基式（「実」第71図186～201）

凸基式には大きく二つのグループがある。一つは細長い楕円形を呈するものと，有舌尖頭器様に舌の付くものである。186～197は前者であり，198～201が後者に属する。前者の内でも，186～188は比較的不明瞭なものである。凸基部の形状も189・190・194のように尖るものと，193・195

のように折損状態のものとがある。193では基部調整も認められ，本来こうした形で製作されたことは疑いない。

有舌尖頭器様の石鏃にも多様性がある。198が典型的な形態であるが，舌と側縁の屈曲部が比較的張り，舌部分にも細かな調整が認められる。199は，鏃身そのものが198に比べて細身のため，屈曲部に角があまりない。ただ調整は細かい。200は，舌の長さが短いものの調整は施されている。201は，平基鏃の角部が欠損したのみで，単に形態的にそう見えるだけかもしれない。これは未調整であることからそう考えうる。

② 石槍・尖頭器（「実」第72図１～３）

１は，サヌカイト製の石槍である。基部側がやや丸みを持つものの流線形を呈する。両面とも大きな剝離痕を残しており，周縁部のみ細かな調整を加えていることがわかる。こうしたことから，素材剝片を未製品状態にする工程と，製品化する工程とに分けることができる。素材剝片に対する形態調整は，大形の剝離痕を残しながらも，全面的に及んでおり，この段階で現在の形態になったことは疑いない。この後の細かな調整は，刃部を整える目的でなされていると考えられる。

２・３はサヌカイト製の尖頭器である。石鏃と尖頭器との区別は明確ではない。２については通常の石鏃より長いこと，３は舌の左右の抉りが石鏃198に比べてシャープである点で一応分離した。

２は基部を欠損しているものと考えられ，本来はあと５㎜程度は長かったと考えられる。側縁調整が非常に細かく，中でも先端は丁寧な調整を施している。

３は側縁と舌との屈曲部が明瞭で，全体的に細かな調整を施している。

③ 矢柄研磨器（「実」第73図1･2）

１は，砂岩製で片面に樋状の凹みが見られる。２も同様に，砂岩製で明瞭ではないが樋状の凹みが見られる。一応矢柄研磨器と呼んでいるが確証はない。又，出土位置的には縄文時代に特定することも困難である。その用途及び年代については類例をまって検討したい。ここでは一応紹介程度にとどめる。

④ スクレイパー（「実」第74図１～「実」第85図97）

ここで言うスクレイパーとは，剝片に二次調整が見られるものの総称である。剝片自体に一定の規格が見られないことから調整部位で分けている。又，全体の出土量は188点で，図化したものはこのうちの残りが良いものだけである。石器全体の中でのスクレイパーの占める割合が高いことは注目に値する。このことは，その用途が広範囲に及んでいたと考えるべきであり，生活上の利器として不定形でも使用しえたと言うことがいえる。

１～10は素材剝片の一辺にのみ調整を加えるものである。

１は，主要剝離面（以下腹面という）の縁辺に調整が加えられている。他の縁辺に見られる剝離痕は形態調整と考えられる。また背面にも左右両側からの剝離が見られるが，剝出された剝片が小さくこれも形態調整と考えられる。又，腹面の加撃は，自然面と剝離面の境付近で行われている。

２は，自然面を打面とする剝片の，背面側にあまり密でない調整が加えられている。

４は，主として背面側に調整が加えられているが，未調整部分では腹面側に調整を加え補完する形をとる。

5の腹面に見られる調整は整然として細かい。

6は，背面側の縁辺に細かな調整が並び，腹面にもその一部に対応する背面よりも大きな剝離が見られる。

11～21は，素材剝片の一辺に両面から調整が加えられているものである。

11はほぼ全辺に調整が加えられており，主刃部は不明である。

13は，両側縁に粗い調整が加えられている。腹面側には，調整剝離の上に使用時にできたと思われる小さな剝離が多く見られる。

14は，湾曲する刃部に両面とも整った調整が見られる。

15は，三角形状の二側縁の両面に調整が認められるが，下辺の調整がより整然としているため，この辺を主要刃部と考える。他の一辺の腹面側には，小さな剝離がいくつか見られ，使用時の痕跡とも考えられる。

16は，ほぼ全周する調整剝離が認められる。

22～36は，比較的大形の素材剝片の片面に調整を加えるものである。

22は背面側に多くの調整が見られる。加撃面とは逆位置のエッジが鋭く，刃潰しの調整である可能性も高い。

24は，背面の一辺に細かな調整，対辺の両面に大きな調整が加えられている。下辺が主要刃部であり，大形の剝離は形態調整を意図したものであろうと考える。この調整から，スクレイパー使用時の器具を想定する場合，挟み込みに適した状況を示すものであろうと考えられる。

29～31は，調整痕が比較的細かく整然と並んでいる。

37～61は，不安定ながら両面調整が行われている例である。

47では背腹で互いに補う形でほぼ全側縁に細かな調整が見られる。

51は，素材剝片の最も尖った部位にのみ調整が加えられており，スクレイパー機能よりも別の機能を想定した方が良いかもしれない。

56～61は，背腹全面に調整が加えられている。このことは，背腹面が素材剝片時の剝離面を残す物の使用法が，主として形態より刃部にあったのに比べて，明らかに形態をも重視していることがわかる。

62～64は，打製石庖丁様石器である。出土位置・層位から縄文時代後期以前の所産であることは疑いない。

62は，打面の対辺の両側面に調整を加え，短辺両側に抉りが見られる。抉りは，両側面ともに加撃を加える形で造られている。63は，長方形を呈し両長辺に二側面とも調整が入る。形態を整えるため両面ともに調整が加えられている。短辺の抉りも丁寧に仕上げられている。二長辺ともに丁寧な調整が見られるため，主な刃部がどちらかは判断できないが，断面形から見れば，刃部角が鋭角である上辺と考えられる。64は，上辺に自然面を残し，対辺の片側に若干の調整を加えたものである。両短辺の抉りは比較的丁寧に行っており，これを除けば素材剝片をそのまま使用したものと考えられる。

65は，上辺に自然面を有し，内湾する対辺の両側面に調整が見られる。二長辺には，腹面側からの剝離が認められ，器具装着のための形態調整と考えられる。

75～97は，一辺に両側面調整を施すものである。形態差・調整差が見られ，素材剝片の形態に左右されていることがわかる。

⑤　石匙（「実」第86図１～「実」第90図50）

石匙は，破片も含めて全点図化した。基本的な形態は，つまみ部の対辺を刃部とし，横形になるもの（１～30）と，つまみ部の対辺を刃部としない縦形のもの（31～50）とに分けることができる。その用途については，スクレイパー同様と考えられるが，丁寧につまみ部を形造っている点からして，装着等で違いがあり，ひいては用途そのものも異なると考えるのが妥当である。

１は，三角形を呈し，頂部につまみを有する。調整は，下辺が背面側からの加撃により施され，これが刃部調整と考えられるが，即断はできない。

２は，三角形を呈し，頂部につまみを有する。調整は三辺ともに両面に調整が見られるが，刃部と考えられる下辺の調整が最も丁寧で，同一面の剝離痕は比較的そろっている。

３は，台形状を呈し，上辺につまみを有する。刃部調整は両面から行われており，丁寧である。つまみ部は，両面ともに整形調整が見られるが剝離が大きく粗い。１～３とも刃部は直線的である。

４は，楕円形を呈し，一長辺の片面に刃部調整が見られる。つまみを有さない二側縁には刃部調整とは逆の面に整形調整が見られる。

８は，本体に比べてつまみの形状が大きいこと，刃部調整が両面に見られるもののまばらであることで，石匙と考えうるかどうか疑問も残るが，抉り部の調整が丁寧に施されていることから，つまみを意図していることは明白である。

９は，小形の石匙で，折損している。つまみ部は全周する形で片面のみ調整が加えられている。

10は，長方体を呈する資料で，一長辺の中央につまみを有する。刃部は両面に調整が見られるものの，片面は整っていない。つまみ部を有する長辺の整形調整は，比較的粗い剝離が残されている。

15は，背腹両面とも一面で形成されており，調整も両面全周に残されている。刃部調整は，他の側縁の調整に比べて細かく剝離痕がそろっている。

19は，つまみ部周辺のみ両面に調整が見られ，刃部付近には調整がない。石錐の可能性もある。

20～30は，つまみの位置が片側に寄り，刃部を水平に置いた場合，ほぼ対角の位置にくるようやや斜めに造り出すものである。

20の刃部調整は両面に見られるものの，整然と調整が施されていない。

24は，背面に自然面を有し，ほぼ全周するように両面に調整が施されている。この場合刃部調整は細かい。

26は，つまみに接する二辺の両面に調整が加えられており，刃部に相当する部分は未調整である。これは，エッジが鋭く剝離したため，このままの状態で使用したものと考えられる。刃部に見られる不整形な剝離は，刃こぼれであろう。27も同様の例である。

30は，四角形の二角にそれぞれつまみを有する珍しい例である。つまみを有する長辺には，背腹両面から整形調整が施され，対辺の刃部には腹面からの調整が見られる。背腹両面に残る剝離痕は，すべて刃部側から加撃している。

31～50は，縦形の石匙である。

31は，石匙の中では大形のもので，形態は刃が切先状を呈する「包丁形」で，刃部は両側面から調整を加えている。背面には自然面を残し，刃部調整前に大きな整形調整が行なわれている。いずれも刃部側からの調整である。

32は，刃部先端のみ両面から調整が加えられており，先端部の使用を考えうる資料である。

36は，一部を除き，ほぼ全周する位置で調整が確認される。ただ，これらの調整は整形調整の可能性が強く，無調整部分が刃部になる可能性がある。

38は，石匙の未製品である可能性が高い。両面ともに自然面を残し，つまみ側縁の一辺と先端部にわずかに調整痕が観察されるが，刃部を形成するには至っていない。

39は，つまみの幅が本体の幅を越える形態を有し，体部両面にわたって調整が見られる。先端部は欠損しているが小形の石匙と考えうる。

42は，素材剥片を有効に利用しており，つまみ部形成のために若干の調整を施している例である。刃部の剥離は，刃部調整か刃こぼれかは判断できない。43も同様の例である。

50も，素材剥片にほとんど手を加えておらず，つまみと刃部に若干手を加えている例であり，その用途に対する目的性だけが追求され，制作技術にあまりとらわれない状況が伺われる。

⑥　石錐（「実」第91図１～17）

石錐は，体部の形態により，1)体部の両側面が抉られ刃部を形成するもの（１～6），2)体部の一側面が抉られ，他の一側面の延長とで刃部が形成されるもの（７～12），3)体部が徐々に細くなって刃部となるもの（13～17）の三つに分類することができる。

こうした区分は，刃部の形態に影響を与えず，体部の変化でのみ表現されることであるから，装着具との関係で考える方に妥当性があろう。しかし，こうした区分が，時期差であるか用途差であるかは判然とせず，今後の課題の一つである。

１は，刃部両側縁とも両面から調整を加えており，体部の二辺は片面のみの調整で形態を整えている。

２は，刃部のみ片面の調整が見られ，先端は欠損している。体部にはほとんど調整が認められない。

５は，刃部のみ両面の調整が見られ，その範囲は狭い。背面には自然面が残り，腹面側からの整形調整が比較的大形の剥離痕として見られる。

７は，上下両方に刃部らしき突出部が見られ，それぞれ欠損している。下方は両面調整で，上方は片面調整で細かい。現状ではどちらが刃部かは判断できない。

９～11は，片面では両側縁に調整が加えられており，逆の面では片側縁のみ調整が見られる。

12は，片側両面に調整が見られ，このうち片側の両面に細かな剥離痕が連続する。

14は，片側両面に調整が見られ，その形態から石錐の刃部と推定される。

15～17は，刃部を欠損している。

⑦　打製石斧（「実」第92図１～４）

１は，長方体を呈し，６面のうち２面は断ち割られている。また，両面ともに整形と見られる剥離痕がある。この整形調整は，四方から加撃が加えられている。

これ以外に，表裏の大きな平坦面の長側縁に小さな剥離が数多く見られ，角をおとす目的であろうと考えられる。刃部は片面からの加撃によって斜めにおとされ，鋭角をなす平坦な面には刃部面からの加撃が見られる。刃部の調整は，他の面に比べて決して丁寧な造りとはなっていない。

２は，刃部方向にゆるやかに広がる長方体で，側面から見ればすこし湾曲している。背面は，刃部からの整形調整が２面確認される。長辺の４面はいずれも単一もしくはこれに順ずる剥離で

形成され，若干の微調整が見られる。刃部は，背面からの加撃で，背面側に複数の調整痕が見られる。体部の湾曲は，この石斧の用途を考える上で重要な意味を持つものであろう。

3は，石斧の基部で，整形調整と若干の基部調整が認められる。

4は，三角形状を呈するもので，底辺が刃部となるものと推定される。刃部は背面側からの単一剝離によって斜辺を形成し，この面から背面側に微調整を加えている。

以上のように，打製石斧については，その形状が一定しておらず，多様な形態が観察される。刃部についても1，4のような簡単な調整であることに疑問も残るが，単なる折損部とした場合の，この面からの加撃をどう理解するかが問題となる。

⑧　凹石・磨石（「実」第93図1～「実」第94図14）

ここで凹石に分類したものは，二種類ある。1つは，1に見られるように比較的大形の扁平な石材の中央部分がゆるやかに凹んでいるもので，石皿と考えられるものである。もう1つは，2～7に見られる，やや小形で中央に凹みが見られるものの，上からの加撃に伴う凹みで，なめらかな凹みにならないものである。1類は，その凹みの表面が研磨状態を示すことから，堅果類を粉にする際に使用したものであろうと考えられている。2類には叩石状のものを伴うことが想定されるが出土しておらず，同一類の凹石を利用した場合も考えられる。1～2類とも，ほとんどのものが両面に凹みを有している。

8～14は所謂「磨石」である。8は，小口面に研磨痕が残っている。10は円形を呈するが，使用面は限られていたらしい。14は，表裏の面を使用していたと推定される。11～13は，その形状から磨石としたが，「投弾」の可能性も残している。

以上のように，スクレイパー等の出土に比べて，凹石・磨石の出土率は小さく，このことが単純には植物（堅果類）にあまり依存しない食生活を想定させるのである。

⑨　石錘（「実」第95図1～「実」第97図33）

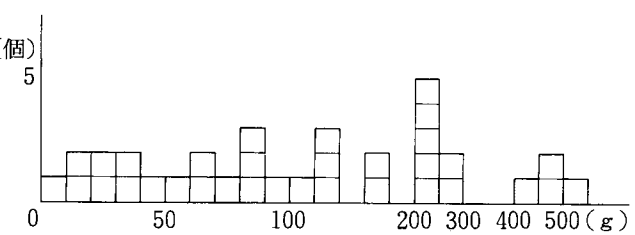
石錘は，自然の河原石の両端を打ち欠いたもので，素材の形状に左右されるため，分類には適さない。形態としては比較的円形に近いものが多く，まれに4のような棒状のものも見られる。重量的には最も重いものが500ｇ，最も軽いもので7.4ｇと差がある。「本」第4表は度数分布表である。0～140ｇまでは比較的コンスタントに出土し，後は，160～180ｇ，200～300ｇと400～500ｇとに分かれる。

この0～140ｇを小形，160～300ｇを大形としておく。おもりの重量差は装着する網等の差に起因するであろうことは推測できるが，実際的には補完的に使用する場合もあり即断はできない。

また，その打ち欠きの範囲は，大きさによって異なることから，使用しうる縄の太さにも大小あったことは推定できるが，通常の石器調整からすれば，一種の刃部調整であり，縄の損傷も大であったと考えられる。

⑩　礫石器（「実」第98図1～「実」第99図11）

ここで示した礫石器というのは，素材に二次調整を加えるものの，その大きさや調整からスクレイパーとは考えにくいものを一括している。この結果，その用途は不明で，製品として取り扱うことも確定的ではない。



第4表　石錘の重量分布表

1は，いびつな五角形を呈し，そのうち4辺の両面に調整が加えられている。

2は，湾曲する一辺の両面に調整が見られ，縁辺部の厚みも刃部状に薄くなることから，スクレイパーとしての用途も考えうる。

3は，ほぼ2側縁の両面に調整が加えられているが，刃部は形成されていない。

4は，一面は折損しており，他の3側縁の両側に微調整が見られる。

5は，背面の2側縁に丁寧な調整を加え，腹面には粗い整形調整と思われる剝離を加えた後，3側縁に丁寧な調整が認められるものである。

6は，一面が折損しており，他の3側面には両面に調整が認められる。断面でも示したように刃部は認められない。

7は，自然の扁平な河原石の周縁に調整を加えている。

8は，頂部にのみ両面に調整が認められる。

9は，両面とも整形調整が見られ，このうち2側縁に刃部調整と考えられる小さな剝離が見られる。スクレイパーに属するものかもしれない。

10は，縦長剝片で，背面に上下に貫通する剝離と，頂部に複数の樋状剝離が認められる。腹面側では2側縁に背面側からの剝離が認められるが，意図を持った調整とは考え難い。

11は，腹面の2側縁に調整が見られ，これが刃部と推定される。スクレイパーとも考えられる。

⑪　磨製石斧（「実」第100図1～「実」第101図10）

出土した磨製石斧は，すべて蛤刃石斧である。

1は，刃部を大きく欠損しているが，直刃で両面ともに半月形の刃部調整研磨が見られる。

2は，基部を欠損し，刃部と体部に境がなく，曲刃の刃部周辺に研磨痕を残すものである。

3は，自然石に若干の研磨を加えたもので，形態は整っていない。また，刃部の研磨も雑である。

4は，半面が欠損している。刃部は一定幅で研磨が認められるがやや雑である。

5は，折損が著しく全体の1/4程度の残存である。刃部は丁寧な横方向の研磨が認められる。

6は，全体に自然面が残っているが，曲刃を丁寧に造り出している。

7～10は，磨製石斧の基部と考えられるが，すべて折損している。

7では，基部縁辺の両面に剝離が認められるが意味は不明である。10にも基部に同様の調整が認められると同時に，折損面からの加撃が認められる。

以上の状況を見ると，明らかに使用に伴って折損したものが多いと考えられる。

⑫　敲石（「実」第102図1～9）

敲石には円形もしくは楕円形を呈するもの（1･3･4）と，棒状を呈するもの（2･5･7～9）がある。

1は球状を呈し，一面に敲打痕が残る。2は棒状を呈し，両端面に敲打による剝落が認められる。3は扁平な円形を呈し，両端面に敲打痕及び剝落が見られる。5は，棒状を呈し一端面に敲打による剝落，もう一方に敲打痕が残る。6は水晶製の敲石で，体部は六角柱，先端に向かって徐々に細くなる。敲打面は一面で，これに伴う剝落及び亀裂が観察される。7～9は棒状を呈し，両端面に各々敲打による剝落が見られる。

以上のように，敲打痕を残すものと，剝落が見られるものとがあり，これは岩質及び使用上の差であると考えられる。

⑬　不明円盤実測図（「実」第103図１～９）

１～８は，用途不明の平盤な風化石と考えられる円盤状製品である。一部に折損や剝落が認められる。

９は，楕円形を呈し，内側に凹んですすり状を呈するものである。ただ縁辺は全周せず，半周でとどまるものと考えられる。１～８同様，用途は不明である。

以上１～９は，出土位置・層位から考えて縄文時代に属さない可能性が高い。

(3)　小　結

縄文時代の大浦浜遺跡では，「(1)遺構」で触れたような炉跡と考えられる集石遺構，貝殻・獣骨・魚骨[5]等を含んだ土坑等の遺構が検出され，この遺跡で生活していた縄文人の主として食生活の一端を知ることができた。しかし竪穴住居跡が検出されず，集落の在り方等については県内の他の遺跡同様，今後の課題として残った。

また海浜部に所在するにもかかわらず，あえて土坑内に貝殻等を廃棄することに特別の意味があるのかどうかなど，類例を検討していかなければならないが，縄文時代の遺構がほとんど検出されていない県下の状況のなかでは，問題を後へ残さねばならない。次に，縄文時代の地形について考える。

大浦浜は，通称「ヤケヤマ」・「たては」と呼ばれる二つの小丘陵と海に囲まれた三角地で形成されている。時代別の縄文土器の分布を見てみると，前期には丘陵裾に接する位置で出土しているものが，第38図から第45図までに示した中期から後期に属する土器の類別出土状況を見てみると，中・後期には40列付近まで土器の分布範囲が広がっていることが理解できる。このことは，縄文時代中期に至って海側に自然堤防状の砂洲が発達していき，この上面にも生活の痕跡が残された結果と解釈することができる。ただ土層上では，調査に於ても注意深く観察がなされたが，この状況を示す明瞭な分層はできていない。また，出土している土器について詳細に検討すれば，Ⅰ・Ⅱ類，Ⅷ・Ⅸ・Ⅹ類，ⅩⅤ・ⅩⅥ類，ⅩⅨ・後期Ⅰ・後期Ⅱ・後期Ⅲ・後期Ⅳ類の出土のみ認められ，ある時期以降砂洲が恒常的に発達するといった単純な状況理解では解決できないことが伺われる。これを時代変遷として位置付けるために，本書の中期土器の分類及び年代観の基本としている「里木貝塚」との対比関係を第５表に掲げておく。

大浦浜遺跡	里木貝塚
大浦浜Ⅰ類	船元Ⅰ式A類
大浦浜Ⅱ類	
大浦浜Ⅲ類	船元Ⅰ式B類
大浦浜Ⅳ類	―――
大浦浜Ⅴ類	船元Ⅰ式C類
大浦浜Ⅵ類	船元Ⅰ式D類
大浦浜Ⅶ類	船元Ⅰ式E類
大浦浜Ⅷ類	船元Ⅰ式F類
大浦浜Ⅸ類	船元Ⅰ式G類
大浦浜Ⅹ類	船元Ⅰ式H類？
大浦浜Ⅺ類	船元Ⅱ式A類
大浦浜Ⅻ類	船元Ⅱ式B類
大浦浜ⅩⅢ類	船元Ⅱ式C類
大浦浜ⅩⅣ類	船元Ⅲ式A類
大浦浜ⅩⅤ類	船元Ⅲ式B類
大浦浜ⅩⅥ類	船元Ⅲ式C類
大浦浜ⅩⅦ類	船元Ⅲ式D類
大浦浜ⅩⅧ類	船元Ⅲ式E類
大浦浜ⅩⅨ類	
大浦浜ⅩⅩ類	
大浦浜ⅩⅩⅠ類	
大浦浜ⅩⅩⅡ類	
大浦浜ⅩⅩⅢ類	
大浦浜ⅩⅩⅣ類	船元Ⅳ式
大浦浜ⅩⅩⅤ類	里木Ⅲ式
大浦浜ⅩⅩⅥ類	―――

第５表　対照表

この結果，縄文時代の地形は当初入り浜的な状況であったものが，中期に至り浜堤が伸縮する形で徐々に形成され，後期段階でほぼ完成したものと考えられる。しかしこの段階では南端までは至らない。

また里木の各土器型式については，田中良之の批判があるが(6)，これについて考え得る資料が不足しており，一括性の高い資料の出土を待って再度理解を深めたい。

注

(1) 第5章第3節参照

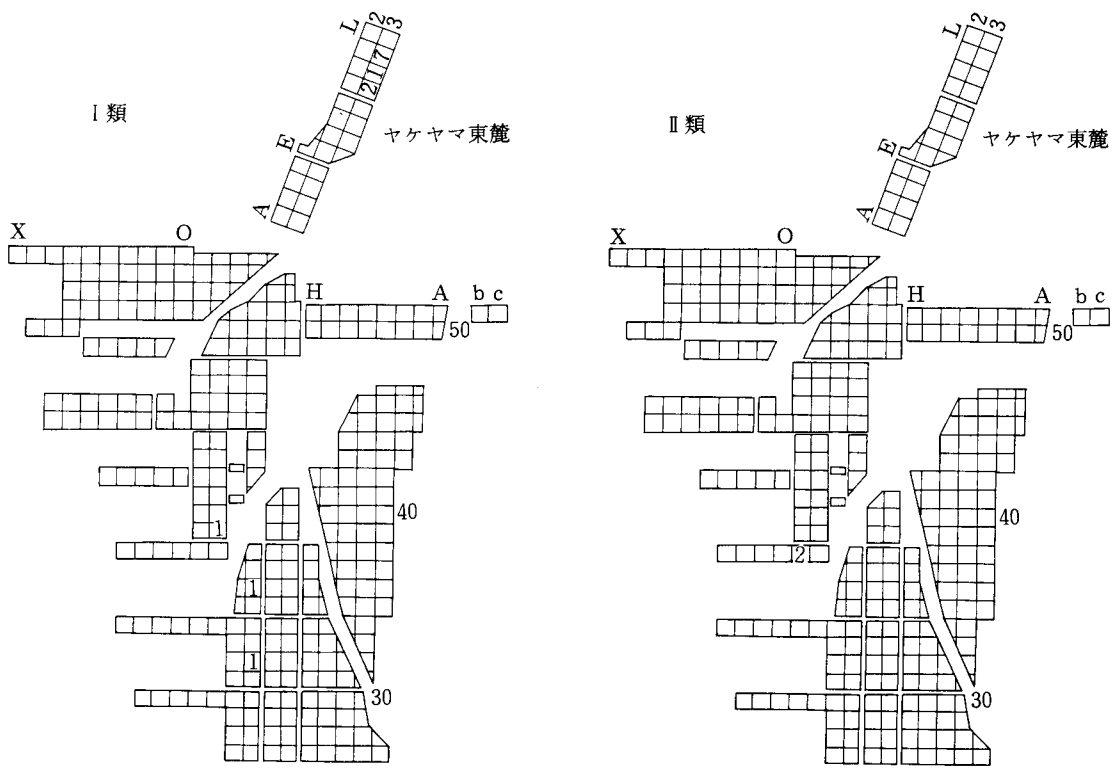
(2) 間壁忠彦・間壁葭子「里木貝塚」『倉敷考古館研究集報』第7号1971　倉敷考古館以下「里木貝塚」の記述は本書による。

(3) 網谷克彦「鳥浜貝塚出土縄文時代前期土器の研究(1)」『鳥浜貝塚1980年度調査概報』1981　福井県教育委員会

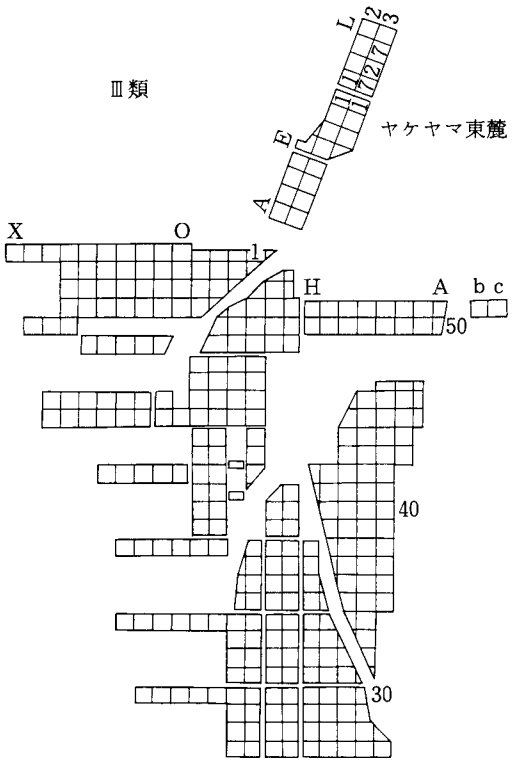
(4) 注(2)と同じ

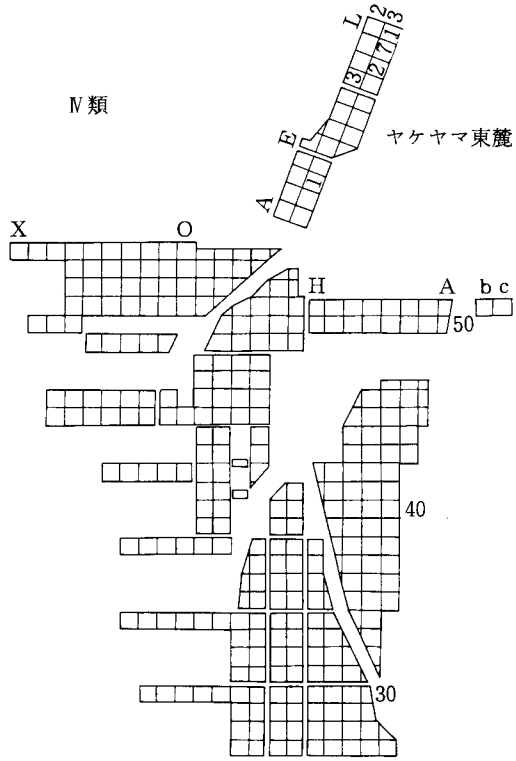
(5) 第5章第5節参照

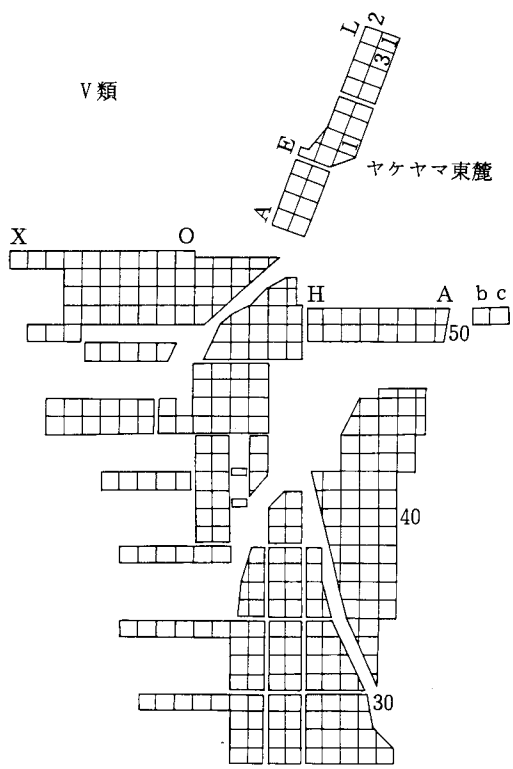
(6) 田中良之「新延貝塚の所属年代と地域相」『新延貝塚』1980　鞍手町埋蔵文化財調査会

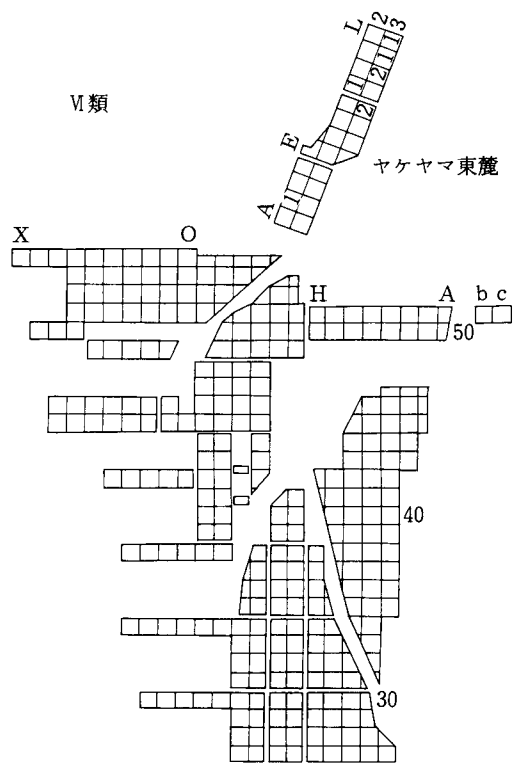


第38図　縄文土器類別分布図(1)

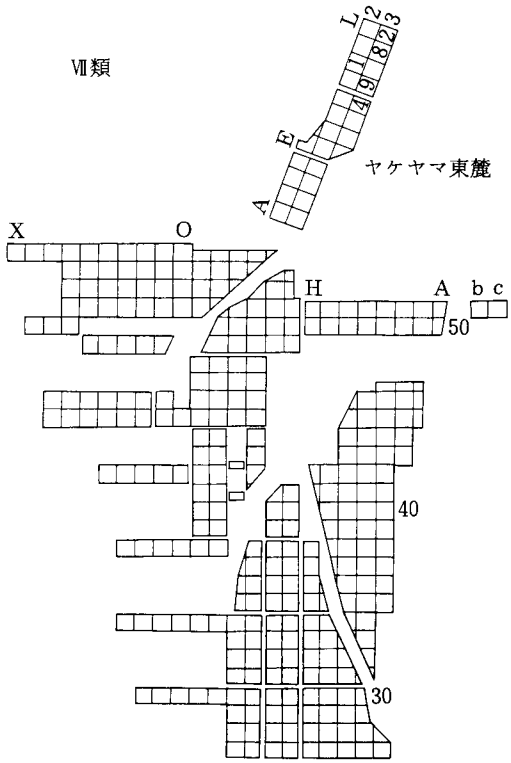


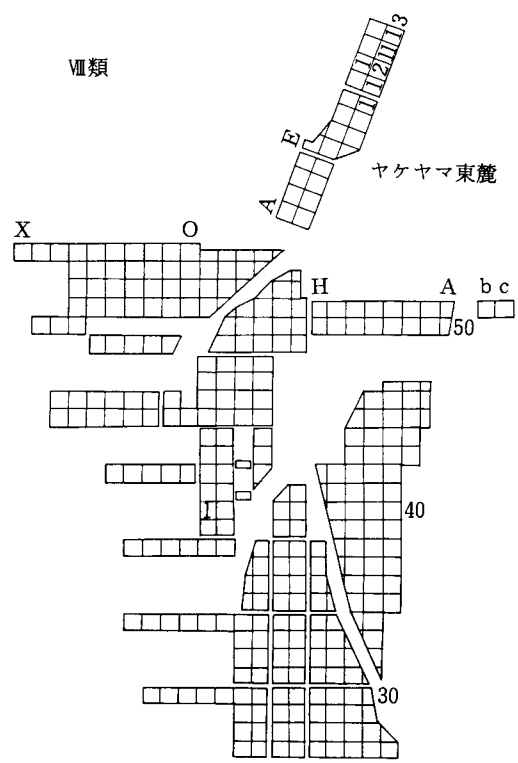


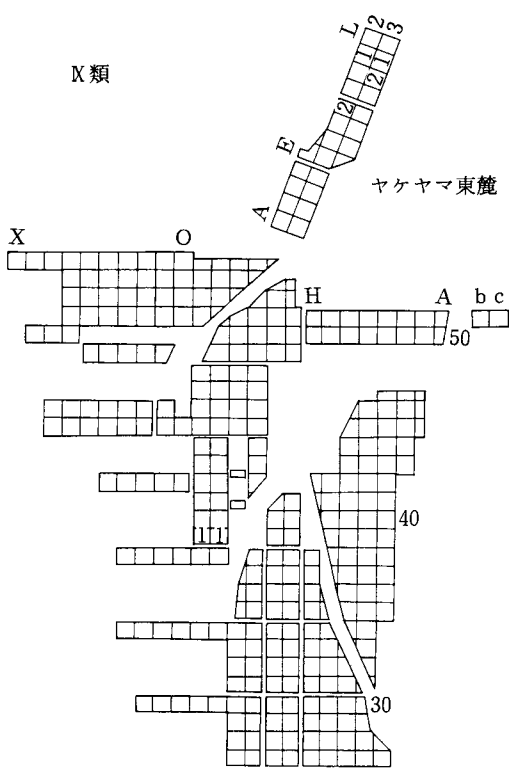


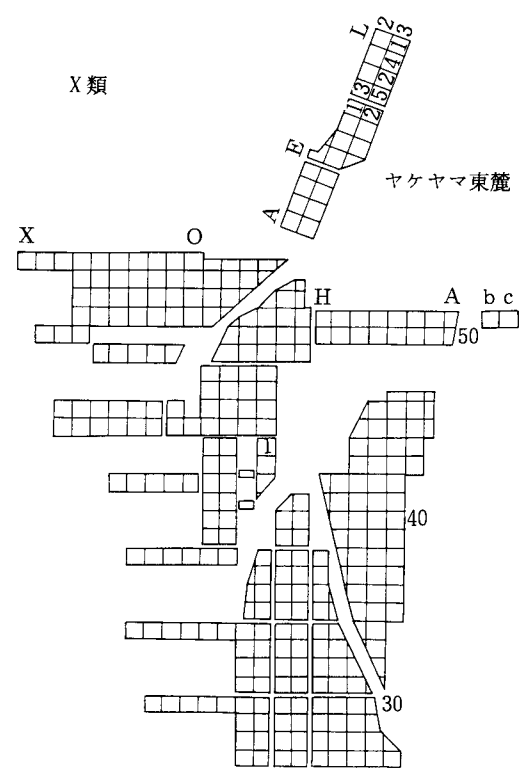


第39図　縄文土器類別分布図(2)

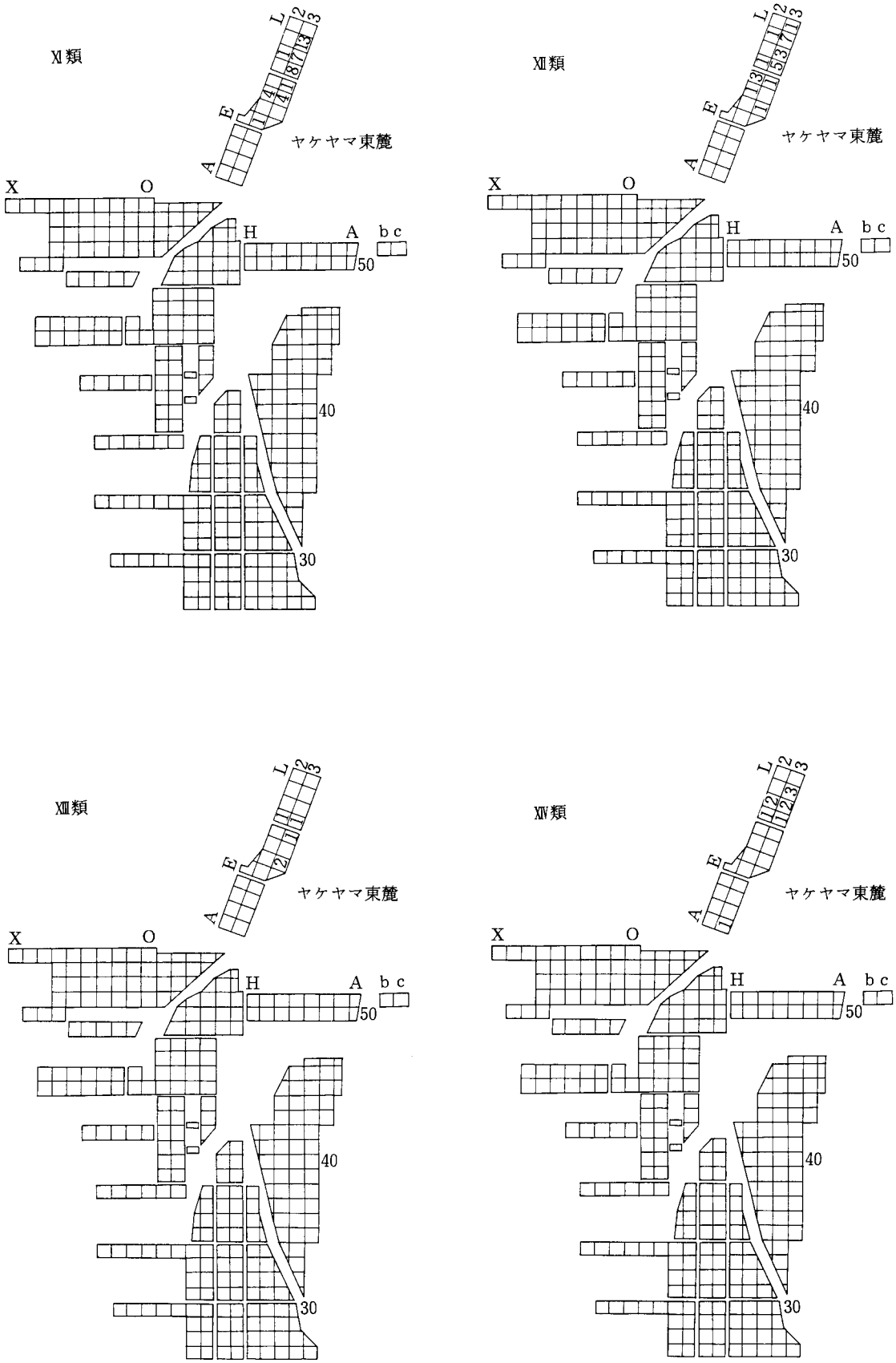




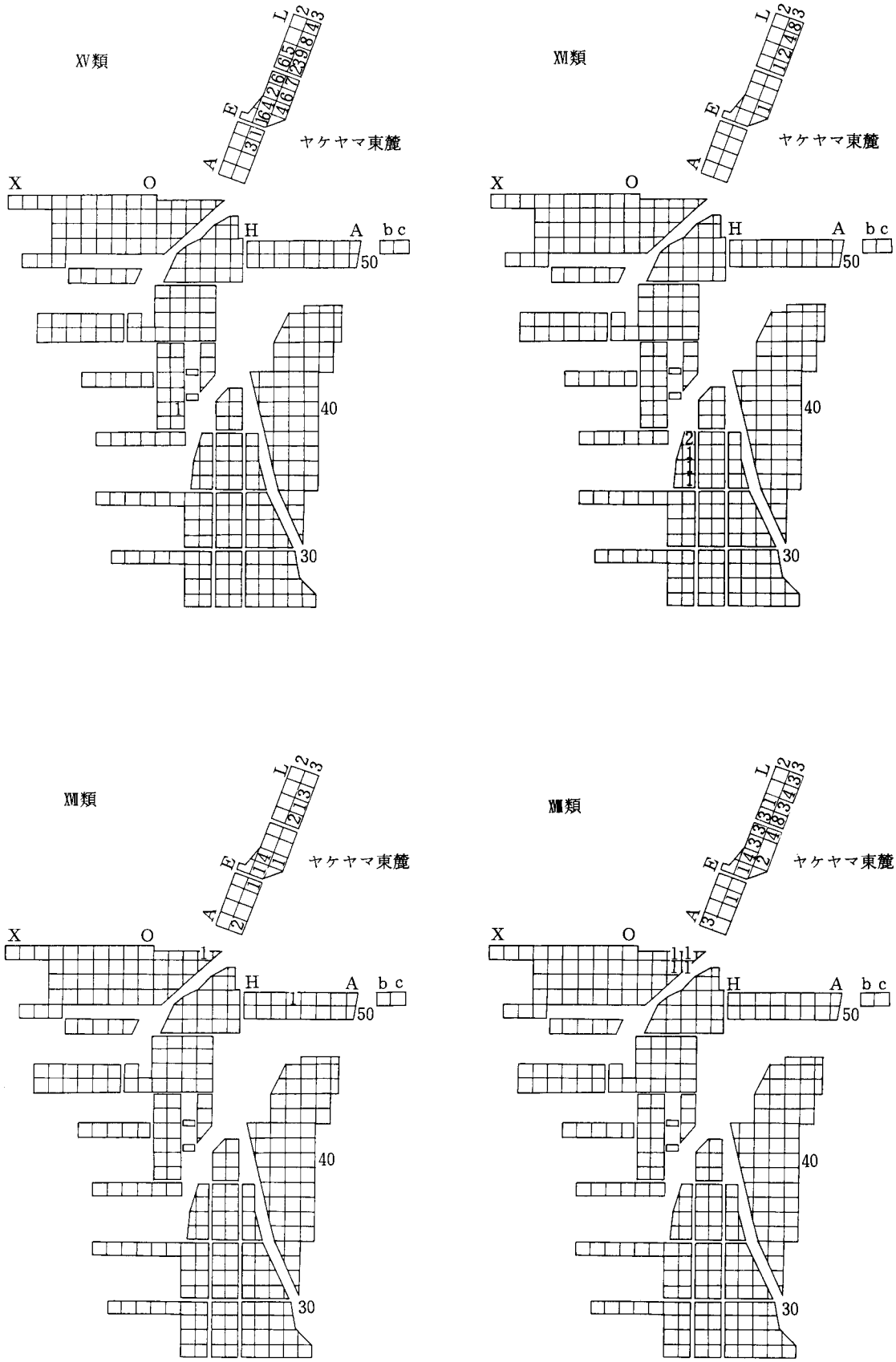




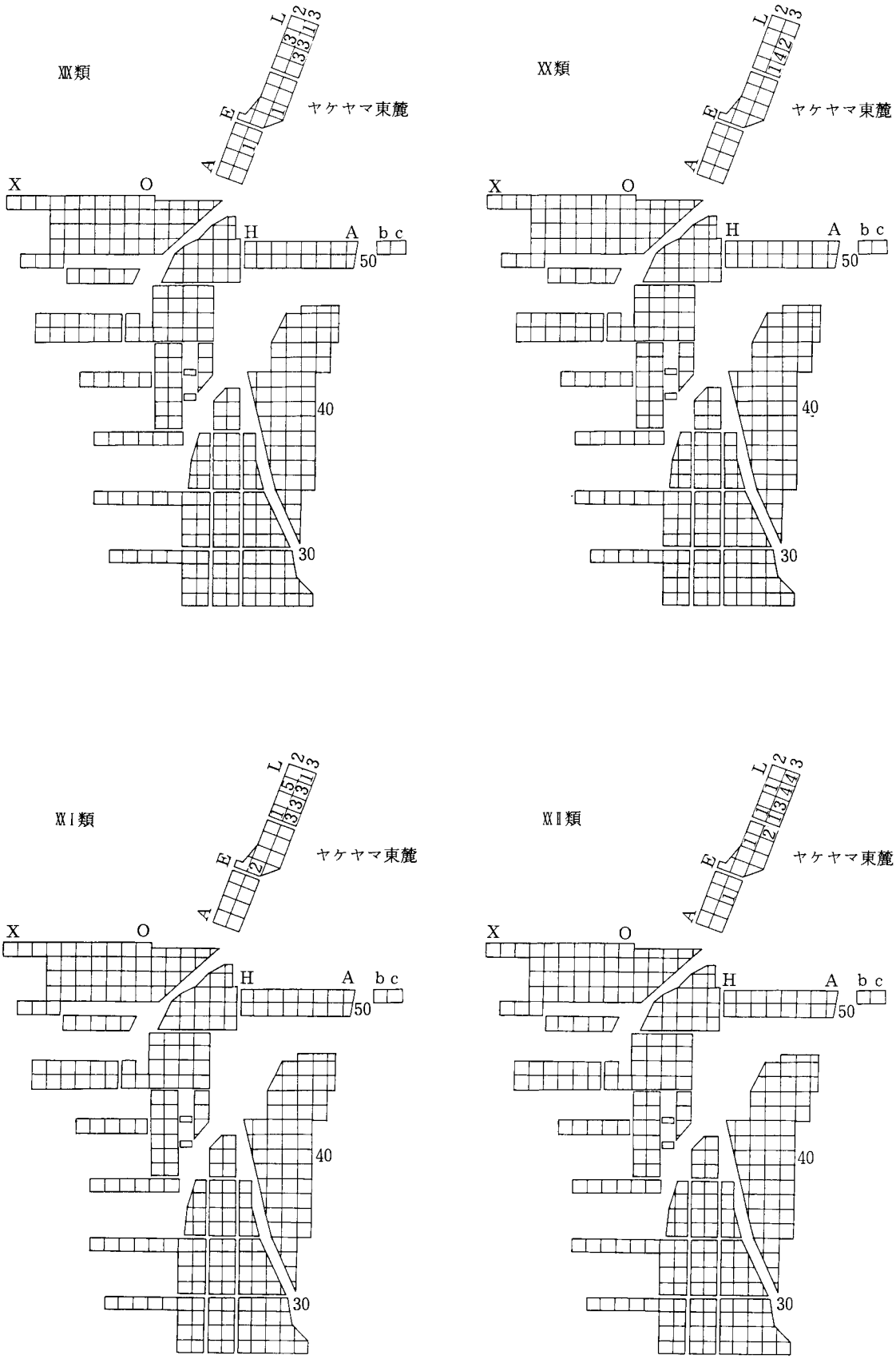
第40図　縄文土器類別分布図(3)



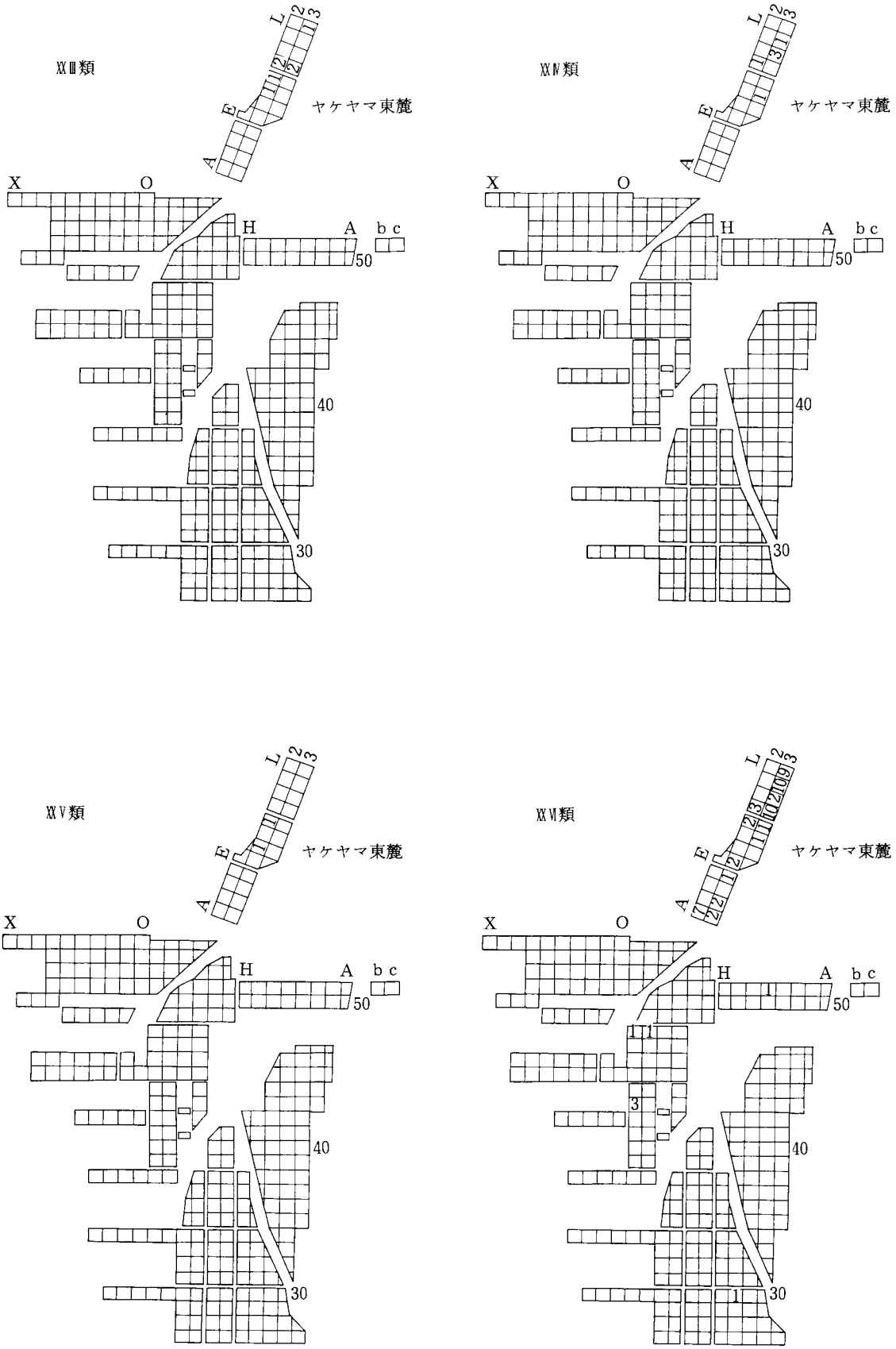
第41図　縄文土器類別分布図(4)



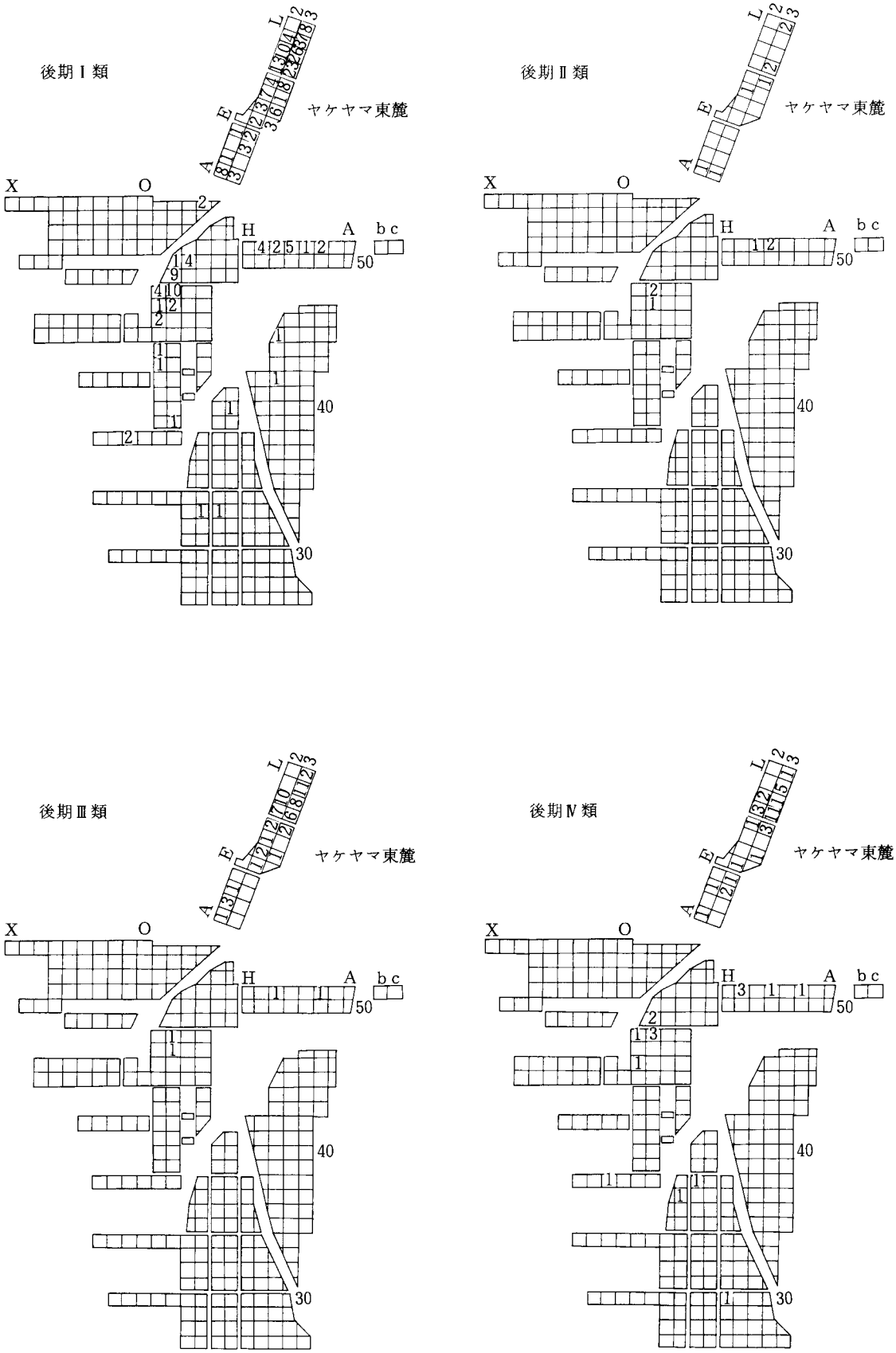
第42図　縄文土器類別分布図(5)



第43図　縄文土器類別分布図(6)



第44図　縄文土器類別分布図(7)

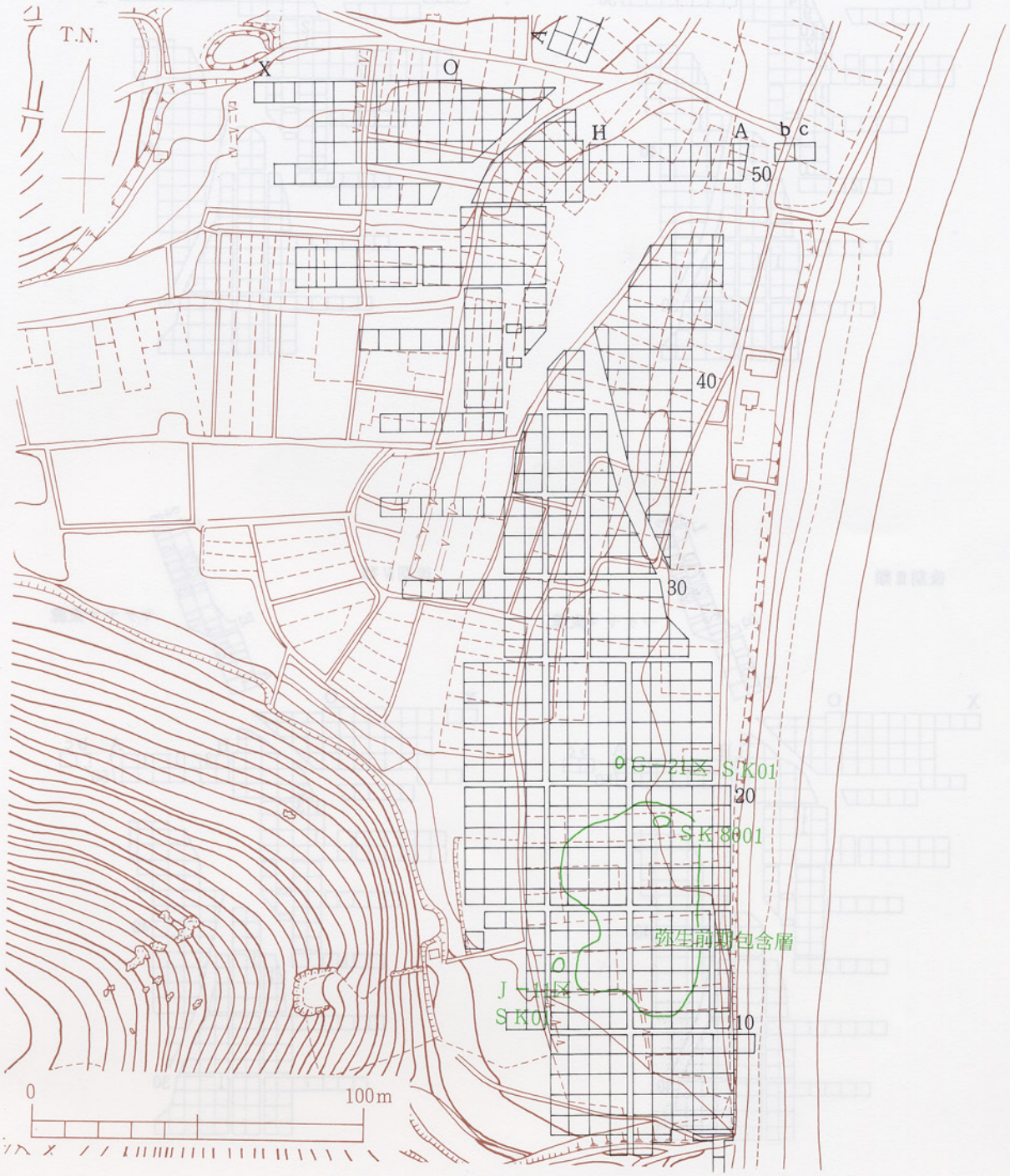


第45図　縄文土器類別分布図(8)

第２節　弥生時代の遺構・遺物

(1)　遺　構

弥生時代の遺構は，調査区の南部（西・南を丘陵に囲まれた９列～22列の中心部）で検出されている。ここでは，弥生時代の後期後半から末に位置付けられる遺構については次節に譲り，前期・中期の遺構を中心に記述する。

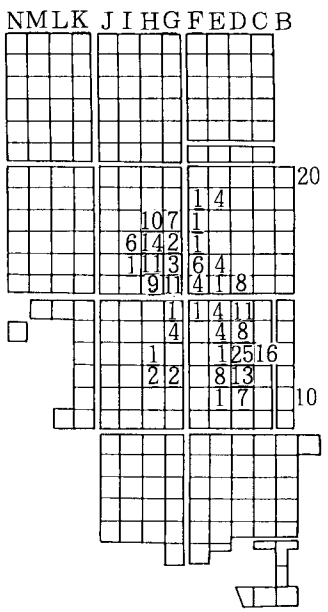


第46図　遺構配置図

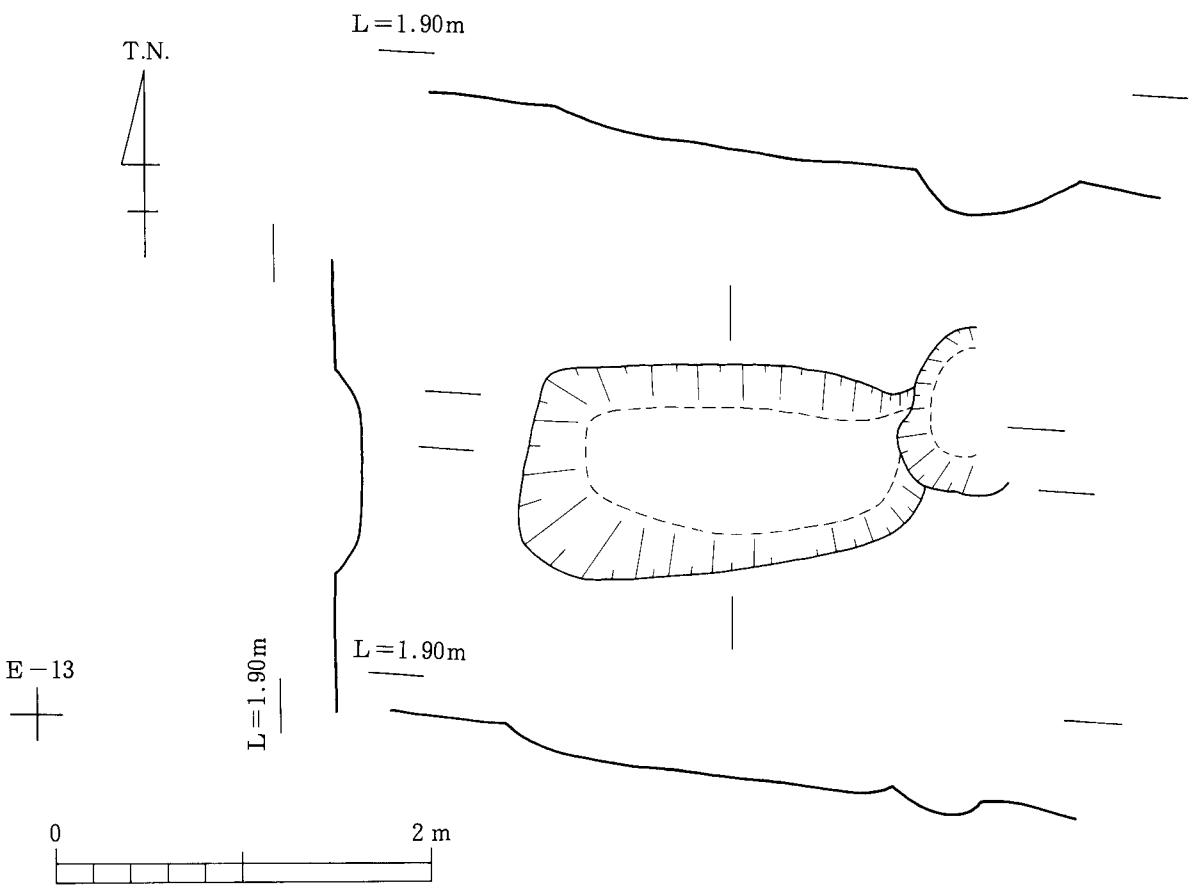
① 前期の遺構

弥生時代前期に位置付けられる遺構としては，E－19区で検出されたSK8001が見られるだけである。SK8001は，長辺約2.2m，短辺約1.1m，深さ約0.26mを測る隅丸方形状を呈する。土坑埋土は淡茶褐色砂層で，埋土中に弥生前期土器片を含む。土坑底からも弥生土器底部が検出されている。土坑の性格は，良好な遺物を含んでいないこと，埋土に特徴が見られないことから不明である。

前期の遺構は以上であるが，この周辺では良好な包含層が検出されており，これについても述べておく。包含層はC～I－8～20区の範囲に見られ，3層に区分して遺物の取り上げを実施した。但し，上記の範囲内でこの3層が検出されているのは，F列以西だけである。またC列については，近年の砂取りによって包含層も同時に壊滅している可能性が高く，本来の範囲はより広いものと考えられるが不明である。この包含層出土の遺物については後述するが，基本的には層位は年代を反映していないと考えられ，包含層形成の状況を再検討する必要がある。



第47図　前期弥生土器出土個数分布図（底部）

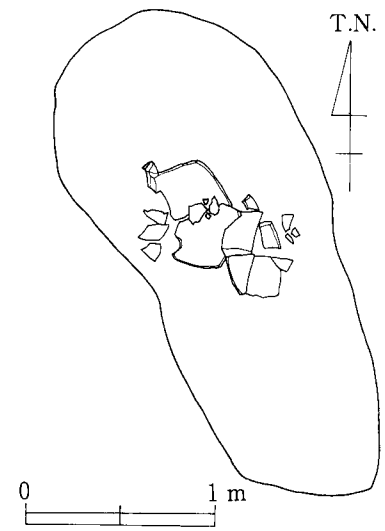


第48図　E－19区SK8001実測図

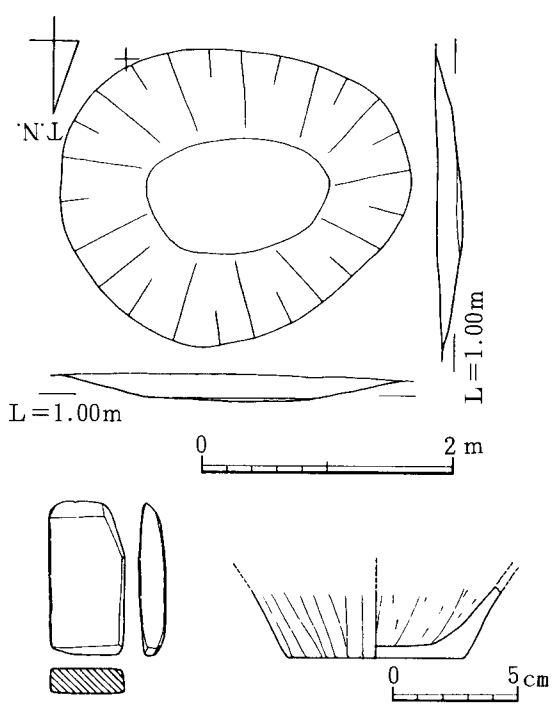
② 中期の遺構

弥生時代中期の遺構として，Ｊ－11区SK01及びＧ－21区SK01の２箇所が見られる。Ｊ－11区SK01は，長径1.4m，短径1.2m，深さ0.13mを測る楕円形の土坑である。土坑は砂地をベースにしており，埋土がやや黒色傾向の砂であったため検出されたが，その形状は非常に不安定であった。出土遺物は，埋土中から出土した土器底部１点と扁平片刃石斧１点のみである。周辺からは，この時期の遺物は出土していない。土器底部の形状から見て中期後半から末に位置付けられる。

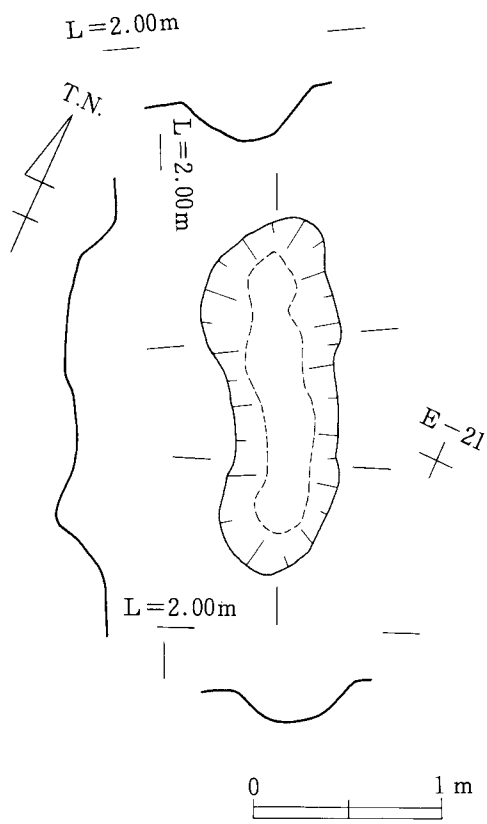
Ｇ－21区SK01は，長径1.4m，短径0.63m，深さ0.13mを測る長楕円形の土坑である。埋土は黒褐色の砂で，土坑中に弥生土器２個体分が横倒しの状態で検出された。出土の状況は，上部が取り除かれており下部のみが検出された。出土遺物は弥生土器甕のみで，中期後半に位置付けられる。土坑の性格は，土器の出土状況からみて廃棄とは考えがたく，何らかの意味を見いだせるのではないだろうか。類例を待ちたい。



第50図　Ｇ－21区SK01土器出土状況図



第49図　Ｊ－11区SK01平面図及び
出土遺物実測図



第51図　Ｇ－21区SK01実測図

(2) 遺　物

1) 弥生土器

「実」第104図1～「実」第140図467,「実」第141図1～11,「実」第142図1～8,「実」第143図1～8が出土した弥生時代の土器・土製品である。このうち最も量の多いのは弥生時代前期（「実」第104図1～「実」第140図467）の土器である。

① 前期の土器

弥生前期土器には，壺・甕・高杯・鉢・蓋の各器種が見られる。量的には，壺・甕が圧倒的に多い。又，縄文晩期もしくは晩期系の土器が出土しており，縄文土器の項で説明すべきではあるが，出土層位が弥生前期土器と同じであり，共伴する可能性も含めてこの項で説明する。

壺

1～12は，口縁部・頸部に加飾性が見られない無文の壺である。器形には，1～3のように口頸部に稜線が見られ，屈曲しているものもあるが，基本的には5～12のように頸部がくびれ，口縁部と体部がゆるやかに弧を描いている。調整は，観察できるものすべて横方向のヘラ磨きが施されている。

12は小壺で，口唇部には沈線が一条見られる。器形は，頸部でくびれ，外下方に直線的に延び屈曲して底部に至る。底部は突出した平底で，上部は縦方向の指ナデ調整が施される。

13～26は，口頸部に段を持つ無文の壺である。口頸部の段は，17に見られるように，口縁部外面に粘土帯を貼る方法，24のように横方向のヘラ磨き時に粘土を掻き取る方法と21・22のように粘土の接合によるものとがあるが，手法上の差が何を表しているかは明確ではない。段は口縁部から頸部に向かって一段下る形が通常である。口縁部の形態にはいろいろあり，13のように短く外上方に延びるもの，17のように外湾するもの，19のように外反するもの，21・22のように上方へ延びたのち外上方へ屈曲するものなどが見られる。

29～31は，段に刻目が見られるものである。刻目は，29・30のように比較的縦長のものが多く見られるが，31はやや丸みを持った米粒状に斜めに付けられている。

32～36は，段の上か下に沈線を施す例である。

32は，器壁削り込みによる段の上部に沈線を施す。34は，段上口縁部外面に三条の沈線を施し，段下に一条の沈線が見られる。口縁部外面の多条沈線はこの一例のみである。

35は，段下に一条の沈線が施される。

37は，口唇部に一条の沈線，口頸部に段，頸部に三条の縦沈線を施す。

38は，口頸部と頸胴部に段を有する。口頸部の段は，通常の形態と異なり，口縁部の方から頸部に向かって上る「逆段」になる。器形は，口縁部が頸部から短く斜上方に立ちあがり，屈曲して外上方に受け口状に短く伸びる。頸部は，外下方に直線的に広がり，胴部は丸みを持って内湾する傾向にある。施文は，口頸部の段下に一条，頸胴部の段下に二条の沈線が見られ，この間，頸部に三条を一単位とした沈線が施される。調整は，縦方向のヘラ磨きを基調としている。

39は，口縁部が外湾するタイプで，口頸部に段，頸胴部と最大径部上位に各々三条の沈線を施す。頸部には，四条を一単位とする斜線の末端が頸胴部の沈線に重なって施されている。この文

様については全体形状が不明である。

40は，口頸部に段を持つタイプである。胴部とは直接接合はしないが，色調・胎土から同一個体と判断した胴部に，沈線で区画された木葉文が見られる。頸部の長さは推定で，もう少し長くなる可能性がある。頸・胴部の文様は，頸胴部の境に三条の沈線，頸部に二条の沈線を入れた横位の文様帯を二本の沈線によって方形に区画し，この中に木葉文を配し，全体的には「八」の字形に配置している。木葉文は三本沈線で描かれる。

41・42は，頸胴部に段が見られるタイプで無文である。口縁部の屈曲は41がやや水平に近くなる。

43・44は，頸胴部に段があり，段上に刻目を施す例である。甕にも若干の例があるが，基本的には縄文土器の影響が考えられる施文である。

45～51は，頸胴部段下に多条の沈線を施す例である。段は比較的弱い表現となる。47は，頸部にも多条沈線が見られること，頸部が直立ぎみに長く延びることから，後出する器形と考えられるが，段自体が残っていくという点で興味深い資料である。48は，胴部最大径の部分にも三条の沈線が認められ，通常頸胴部沈線との間が文様となるが，この例では認められない。51は，同一個体と考えられる破片を推定復元したが，器形的には他に例を見ない。

52～58は，連弧文を基調とする例である。

52は，口縁部が欠損するものの，この時期通有の器形を呈する。頸胴部の境には段が見られ，段下に三条の沈線を施す。連弧文は，頸部の最もくびれた位置に，二条沈線に加えて下向きに施されているが，表面剝落のため，その痕跡がかろうじて残されているのみである。段下の沈線に接するように三条沈線による下向きの連弧文も施されている。

53は，弱い頸胴部の段と最大径部の間に，二条沈線による上向きの連弧文が見られる。この例では区画沈線は見られない。

54は，頸胴部に段を有し，段下に沈線が一条見られる。施文は頸部にあるが，区画の沈線は認められない。文様は，二条沈線による上向きの連弧文であるが，部分的には下向きの連弧文が重なるらしく，瞳状を呈する部分もある。

55は，頸胴部の段下に二条の沈線を施し，最大径上部の二条沈線を区画線として，この間に二条沈線による上向きの連弧文を施す。

56は，頸胴部の段下に二条の沈線を施し，胴部最大径との間を文様帯とし，観察されうる限り五条の沈線による上向きの連弧文が見られる。

57は，段下に三条の沈線を施し，これに接して三条沈線による下向きの連弧文が見られる。

58は，上部に区画の沈線が認められ，これに接して二条沈線による小形の下向き連弧文が見られる。

59～63は，刺突・刻目が施される例である。59は，段下に二列の連続刺突文が見られる。60は，段下に一条の沈線を施し，その間に刻目が認められる。61は円形刺突文の例である。62は，口縁部・底部を欠損しているが，器形全体が想定されるものである。外面のヘラ磨きは，胴部最大径部分より上部は横方向，下半は縦方向を基調とする。施文は，段部分に一条の沈線を施し，段下に二条の沈線，胴部最大径上部に三条の沈線が見られる。上部・下部の沈線間に刻目が施されるが連続せず，上下が対応するように刻目の施されない部分がある。

63は，頸胴部に段，胴部最大径あたりに二本沈線が施され，この沈線間に刻目が施される。

64～66は，木葉文である。64は，頸胴部境の段を基軸として，この上下に木葉文を配置する。段上・段下にそれぞれ二条の沈線を施し横軸とし，これに直交する三本沈線を縦軸として，各々木葉文を配し，弧線で区画内を充塡しているため，木葉文構成の沈線数は不統一である。同一個体片の全てが接合せず，段を挟んで4区画帯が考えられるか否かは定かでない。

66は，頸胴部の段を横軸として下位に施文されている。段に直交するよう二本沈線による縦線が見られる。縦線より左側の文様はやや弧を描くが，右側のそれは直線的に描かれるため，木葉文でない可能性もある。

67～71は，山形文および羽状文を一括した。67は，頸胴部下に一条の沈線を施し，胴部最大径上位にも一条の沈線を施して，この間を文様帯とする。文様は，二条の沈線による山形文である。68は，段上に二条の沈線，段下に三条の沈線を施す。胴部最大径部に現状では一条の沈線を施しこの間を文様帯とする。文様は，五条の沈線による山形文である。69は，段下に四条以上の斜線が見られ，山形文かどうかは判別できない。段上にも縦軸二本沈線が見られ，施文はこれより下位に施される。文様は，破片全体による推定ではあるが，胴部最大径部に一本，これより下位に二本の沈線を施し，この間上段に10本前後の沈線を施し，この下位に斜格子状の沈線が認められるが，本来斜格子であるのか，他の文様を交差させた時にできる重なりであるかは判断できない。

72～96は，沈線を施文の主体とする一群である。

72～76・78は，口頸部の境付近に一～二条の沈線を施す。73は口縁部内側にも三本の沈線が認められる。

77は，頸部に五条の沈線を施し，口縁部がラッパ状に広がることから，後出的な器形と考えられる。

79は，口頸部の境に二条の沈線を施し，頸部に三本の沈線を基本とする縦線文様が見られる。

80～82は，口頸部の境に二条の沈線を施し，沈線間に刺突文を施す例である。81は，口縁部が大きく外反することから後出的である。82は，口縁部内側にも二条の沈線を施す。

83～85は，頸胴部の境に沈線を施す例である。

86は，頸部の最もくびれた部分に二条の沈線，頸胴部の境に三条の沈線を施す小形の壺である。口縁部は欠損しているが，77のようにやや開きぎみの口縁部になるものと考えられる。

87～90は，頸胴部の境付近を施文の中軸線として，上位・下位に各々三本の沈線を施し文様帯を構成する。文様は，先の中軸線と，三本沈線間を縦に区分する一本沈線による方角区分内に5本の沈線で木葉文を描く。木葉文は4葉を基本とする。木葉文は所謂「無軸」木葉文である。

92は，頸胴部の境に三本の沈線を施し，上部に斜格子文，下部に三条の沈線による下向きの連弧文を描く小形の壺である。

93は，頸胴部の境に二本の沈線を施し，その間に刻目を施すものである。

94は，頸胴部の境に二本の沈線を施し，この沈線に直交して下部に延びる4本以上の沈線を描き，これに接するように五条の沈線で横向きの重弧文を配置する。文様の全体は不明であるが，この縦線を挟んで，左右対称の文様を連続して描いているものと考えられる。

95は頸胴部の境と胴部最大径部に各々二条の沈線を配し，この間に三本を一単位とする縦線を施す。又，三本沈線以外に1本沈線も見られるが，1本沈線が全体に配置されているかどうかは不明である。本来的には，文様区画に用いられる手法であるが，この区画内には施文が見られない。

96は，胴部最大径部上に一条の沈線を施し，これと直角になる三条縦線が上部に見られ，縦線を基準とする「八」の字状の片側が二本沈線で描かれる。文様の全体は不明であるが，「八」の字状文であるか木葉文のどちらかの可能性が高い。

97～113は，削り出し凸帯が見られるものである。

97～99は口縁部片で，最もくびれた部分に断面「かまぼこ」状の削り出し凸帯が見られる。口縁部の形態としては，直立した後外反するもの（97），外上方に延びるもの（98），外反するもの（99）が見られ，各々口縁部長は長い。100は，口縁部が直立ぎみに外反し，くびれ部直下に断面三角形状の凸帯を有し，凸帯上に刻目が施される。101は，短く外上方に延びる口縁部のくびれに凸帯を有し，口唇部下端に刻目を施す。

102～103は，頸部中央に凸帯を配し，凸帯上に刻目が見られる。

104は，同一個体として復元した例で，くびれ部と頸胴部の境に各々二条の凸帯を配する。頸部凸帯の方が幅広である。105は，くびれ部に一条の凸帯を配す大形の壺である。

106は，口縁部が短く外上方に延びたのち外反し，頸部は直線的に「八」の字形に延びる。口頸部の境に凸帯を配し，頸胴部の境に二条の沈線を施す。文様は，頸部に5本の沈線を縦に配置する通常のものである。

107は，106とほぼ同様の器形である。凸帯は口頸部に位置し，幅広である。凸帯上に三条の沈線を加え，部分的に縦長の刻目を施す。削り出し凸帯の中では後出的要素と考えられる。

108は，頸胴部の境に凸帯を配し，上部に4本の沈線を一単位とする縦線，下部に「十」字を基本とする連続有軸木葉文を配している。木葉文の横方向は，互いに共有関係を有している。

109は，逆段状であるが，頸胴部の境という位置関係から凸帯と考えている。これに直交する形で一条沈線が縦に描かれ，縦線を基軸とする三条以上の沈線による連弧文が見られる。

110は，低い凸帯の上部に一条の沈線を施し，凸帯に接するように二～三条の沈線を用いた下向きの連弧文が見られる。

111は，頸胴部の境付近に凸帯を配し，凸帯上に刻目が見られる。

112は，同一個体と考えられる破片の組み合わせで考える。頸胴部の境には段が見られ，胴部最大径部の上位に刻目を持つ削り出し凸帯を持ち，この間を文様帯としている。文様は，この文様帯を2本の沈線で区画し，方形区画内に4本を単位とする斜線を描き，全体的には山形文的な構成をしている。113は111同様である。

114～121は貼り付け凸帯が見られる一群である。

114は口頸部の境に一条の凸帯を貼り付け，凸帯上に刻目が見られるものである。口縁部の形態は，直立ぎみに延びた後外反し口唇部に内傾する平坦な面を持つ。口縁部の形態では後出的な要素が認められる。

115も口頸部の境に一条の断面三角形を呈する貼り付け凸帯が見られ，凸帯上に刻目を施している。口縁部は短く外反し，頸部は直線的に「八」の字形に延びる。あまり例のない器形となろう。

116は，口頸部の境と考えられる位置に二条の貼り付け凸帯を施し，凸帯上に刻目が見られる。

117は，頸胴部の境で，断面四角形の凸出した凸帯を持つ。凸帯の貼り付けに際しては，事前に凹線状のくぼみをつけている。118は，117と同様である。

119は，頸胴部の境に一条の凸帯を配し，その上部に二条の沈線，これと直角をなす二条の縦の

沈線が認められる。

120は，頸胴部の境に一条の突出した凸帯が見られ，これより下側には，七条の縦の沈線と三条の重弧文の一部が見えるが，全体の文様構成は不明である。

121は，凸帯と沈線の組み合わせである。

122～231は，沈線及び文様部分の破片である。

122～130は，沈線間に刺突文が見られる例である。二本沈線のものが多いが，三本沈線のものも見られる。部位は頸胴部の境が多く，一部口頸部にも認められる。甕に多く見られる文様であり，相互の影響が考えられる。

131は，沈線間に縦の線を加えている。

132・134～144は，沈線とその下部に山形文を構成すると考えられる斜線が見られる例である。

145～151は，文様の幅や直線・曲線の違いはあるが羽状を呈する文様である。

152～154は，斜格子文である。

155～171は，縦の沈線が見られ，すだれ状を呈する文様である。163のように沈線を挟んで上下に見られるものもある。171は，区画を構成する縦の沈線である可能性が高い。

172～188は木葉文である。

172は，頸胴部と胴部最大径部に二条の沈線を配し，この間を一条の沈線で区画したのち，区画内を対角に区切る有軸木葉文である。無軸木葉文が，最も内側の沈線で木葉を描き，その外面に同心円状に沈線を加える手法を用いるのに対して，有軸木葉文では，最も外側の沈線で木葉を描き，内側に沈線を加える手法をとっている。この手法差についても今後の検討が必要であろう。

173～178は有軸木葉文である。175は172のミニチュアと言える。176は，縦横一条沈線による上下二段の有軸木葉文帯を構成する。

179は，頸胴部の境に三条の沈線を加え，頸部に有軸木葉文を配している。各区画の底辺には，三条の沈線による弧線を加え，文様帯をより複雑化させている。

180～186は有軸木葉文である。

187～188は無軸木葉文である。

189～190は文様区画内での内向き重弧文で，189・190とも連続していくものと考えられる。

191は羽状，192は斜弧線，193は山形文，194はすだれ状の文様である。

195～231は重弧もしくは連弧文である。

重弧もしくは連弧文には上向きのものや下向きのもの，223・224に見られるように向い合わせになるもの，他の文様と組み合わせになるもの（227）がある。文様区画線のないものも見られ，単純な文様ではあるが，その組み合わせは複雑になる。

232～237は大形壺である。

232は，短く外反する口縁部を有し口唇部は垂直の平坦面を持つ。口唇部には一条の沈線が見られ，口頸部の境には段がある。

233は頸胴部の境に，沈線が見られる。

234は頸胴部の境に段を有し，段直下に二条の沈線が加えられる。

235は接合はしないが同一個体と考えられるものである。口縁部は短く直立したのち外反する。口頸部の境には段が見られ，直下に二条の沈線が施されている。頸部は垂直ぎみに下り，

徐々に末広がりになると考えられる。口縁部内側には，二本の沈線に区画された文様帯があり，上下向き合わせの連弧文で飾られている。

237は，236と同様の器形である。口頸部・頸胴部の境に各々凹帯ぎみの段を有している。ヘラ磨きは，最大径部下半のみ縦方向で，残りは横方向になる。

238は，口頸部と頸胴部の境に沈線が見られる。

甕

239～244は，無文の甕である。口縁部は短く外反する所謂「如意状」を呈する。外面調整は，241・244のようにヘラ磨きも見られる。

245～278は，口唇部に刻目を持つ例である。器形は，247のように肩部に最大径があるもの，250のように底部に向かって徐々に径が小さくなるものがある。

口唇部の刻目は，口唇部下端を斜めに刻むものが多いが，口唇部全体を刻む例もある。外面調整は，250のように板ナデのもの，270のように条痕を持つもの，274のように粗い刷毛目を施すもの等がある。

278は，逆Ｌ字状口縁を持つが，これは如意状口縁よりも後出する要素と言える。

279～312は，肩部に段もしくはそれに類するものを持つ例である。

279は，肩部に幅広の凹線を持つもので，もう少し強いナデを施すと280のような明瞭な段になるものと考えられる。279・282は無文である。

283は段の直上に一条の沈線を加える。

284～300は，口唇部に刻目を持つ有段の甕である。

291は，段の位置が最大径部の下位まで下り，古相の甕と考えられる。293～294は，段の下半に条痕もしくは刷毛目調整が認められる。297～300の例では，段とは無関係に外面全体に調整が加えられている。

301～312は，段もしくは段の直上・直下に装飾を加える例である。口唇部には刻目が認められる。

301は，段直上に沈線を加え，段との間に刻目を加える例である。307・308が同一手法である。

302・304～306・309は段に刻目を加える例である。302は特に刻目が細かい。

310は刻目を有する段の下に二条の沈線を加える。311・312は段上に沈線を加えるが刻目が認められない例である。

313～329は，肩部に一条の沈線を施す例で，段の変化形と考えられる。口唇部には刻目が見られるものが多い。形態は，肩部に張りが見られないものが多く，頸部からやや丸みを持って底部に移行する。313・319などは古手の様相を呈するものと理解される。325のように，有段甕の一部と同様に，頸部からやや下がった位置に沈線を加える例も見られる。330～352は，頸部及び頸部直下の沈線が多条化するものである。

330～341・343は二条の沈線が見られ，施文位置も一条のものに比べてより頸部に近く施文されるようである。342・344～346は三条沈線である。346は小形の甕であろう。

347～349は，四条沈線である。350は，頸部に三条，少し下がって一条沈線が見られる。351は六条，352は十条の沈線が見られる。沈線の多条化は新しい傾向としてとらえられるが，形態的な差異はあまり見られない。

353～378は有文の甕を一括している。

353～364は二条沈線の間に刺突文が見られる。364では三条沈線の斜線が見られるが，文様構成は不明である。

365～372は，三条沈線間に二列の刺突文が見られる。

373～378は，刺突文に変わって刻目的な縦線になる例である。373では三条沈線のうち上の列のみ縦線が加えられる。374～377は沈線・文様列数は不明である。378は三本沈線間に縦線が認められる。

379～421は，縄文晩期土器もしくは晩期系と考えられる土器を一括した。

379は，口縁端部の直下に断面三角形の凸帯を貼り付け，凸帯上に刻目を施すものである。380は口縁部が外上方に広がり，凸帯上は連続指頭圧痕を施すものである。384は，口縁部が外上方に短く延び，くびれ部に貼り付け凸帯を施す。393は，刻目凸帯文以外に口唇部に刻目，口縁部内面に一条沈線が認められる。

394～399は，胴部凸帯片であろうと推定される。394は連続指頭圧痕を施す。

400は外上方に直線的に広がる体部から屈曲して内上方に延びる口縁部を有する。口縁部外面には三条の凹線文が見られ，最上位の凹線上には刻目が認められる。

401～420が，晩期系土器である。器形は弥生前期甕の如意状口縁に近いが，401等に見られるように口唇部下端に貼り付け凸帯を施すなど，通常の如意状口縁甕と晩期甕の折衷的な形態を呈する。

401は，貼り付け凸帯によって口唇部が凹線状に見える。外面には刷毛目もしくは条痕が施される。410は口縁部が短く，内側で受口状を呈する。内外面ともに条痕調整である。411も器形的にはこれと同様である。418は，やや内湾ぎみの口縁部を有し，口縁端部に二条の沈線と，体部に二条沈線の斜線が認められる。419は胴部凸帯で，口縁部との間に二条の縦沈線が認められる。420は，頸部に凸帯を持ち，口縁部は大きく外反する。口唇部下端と凸帯上に刻目が認められる。

421は，晩期の二段に刻目凸帯を有する甕の胴部片である。凸帯上には連続指頭圧痕文が施される。これより上部に二本の沈線で区画される文様帯があり，有軸木葉文が「八」字形に連続して浮彫りされている。この施文は，器形全体が不明ではあるが，晩期土器の系統の中でとらえられるものか，前期木葉文との関係でとらえられるかは判然としない。ただ有軸木葉文の表現をとっていることに注目しておく。

その他の器形

422は無頸壺である。胴部最大径は中位下半にあり，やや下ぶくれになり，口縁部は内湾して終る。口縁端部直下に縦の貼り付けがあり，その上端左右に円孔が見られ，あたかも顔の表現のようである。内外面とも丁寧なヘラ磨きを施す。

427～429は，甕の蓋である。

430～431は，高杯と考えられる。共に杯部屈曲部に刻目を有する。

底部

432～467は壺・甕の底部である。432～455は外面にヘラ磨きが認められるため壺の底部と考えられる。456～467は甕の底部であろう。441は底部に穿孔が認められる。多くは平底であるが，446～452・455は上げ底になる。452は「⊕」のヘラ書きが見られ，453・454は胴部下半に沈線が認められる。

土錘

「実」第141図１～11は土錘である。大きさ・重さに大小が見られるが，基本的にはやや太めの円柱状を呈する管状土錘であり長軸にそって中央部に穿孔が認められる。５の側面には溝が見られ，有溝土錘的な要素も認められる。７では細かなヘラ磨きが施される。

重量分布には，三つの山が観察される。このうち，30～50ｇが量的に最も多く，通常の作業に適したものと考えうる。

土製紡錘車

「実」第143図１～８は土製紡錘車である。平面形は正円で中央に穿孔が見られる。断面は，６・７のようにほぼ平らなものもあるが，多くは中央が厚くなる紡錘形を呈する。

７は上・下両面とも丁寧なヘラ磨きを施している。８はやや小形で不整形である。土錘の可能性も高い。

②　中期の土器

「実」第142図１～８は弥生時代中期の土器で，１～３が壺，４～６は甕，７～８は高杯である。１・２は頸部が直立もしくはやや外湾ぎみに上方に延び，水平に短く屈曲したのち内上方に屈曲する。内上方に延びて形成された坦面には凹線が見られる。頸部外面には縦方向の刷毛目調整がある。

４の甕は，口縁部が「く」の字に屈曲し，端面は上下に拡張する。口唇部には凹線文が見られる。胴部最大径は中位よりやや上にあり，外面には貝殻腹縁による圧痕文が見られる。調整は，内外面とも最大径より下で，外面はヘラ磨き，内面はヘラ削りが見られる。上半部はナデである。

５の甕も，口縁部が「く」の字に屈曲し，端面は上下，特に上部に大きく拡張する。口唇部には凹線文と棒状浮文が見られる。胴部は肩部が張る。外面調整は，肩部より上が刷毛目，下がヘラ磨きである。肩部には刷毛目原体による圧痕が見られる。

６の甕は，「く」の字に短く外反し，端部が上に拡張して凹線文が施される。内面にはヘラ削りが見られる。

７・８は高杯で，体部は外上方に直線的に延びたのち屈曲して垂直に延び，口唇部は真中で凹む。７では体部内外面ともにヘラ削りが見られる。

2)　石　器

弥生時代の石器は，出土区画・層位から弥生時代の所産と推定しうるもので，一部縄文時代に属する石器が混入している可能性もある。

①　石鏃

「実」第144図１～第145図50は石鏃である。縄文時代の石器同様，平基式・凹基式・凸基式に区分することができる。

１～19は平基式である。１は底辺が長く，他の二側縁は外側にふくらむ。４は正三角形で三側縁の両面に調整が認められる。14は二等辺三角形を呈し，両面とも丁寧な調整が認められる。16は所謂「ロケット形」を呈するが，片面の調整が不十分である。５～19の石鏃は，相対的に形状が整わずいびつな形状のものが多い。

20～47は凹基式である。20は正三角形に近く小形である。21～34は二等辺三角形を呈し，底辺

を抉って凹基式とするが，コーナーが二長側縁の延長上にあるものである。21・24・28・30が二長側縁の調整が細かく整美である。31・33・34は抉りがU字形を呈し深い。35～47は，かえり部が突出した形を呈する。この中には「ロケット形」も含まれる。35は先端部が五角形を呈し，36～41は三角形を呈する。42～44はロケット形で，42は長側縁の中央にくいこみが見られる。45・46は比較的大形で長い。

48～50は凸基式である。48・50は基部調整が不十分である。49は，尖頭器状の形態を持ち，両面とも四側縁のすべてに調整が加えられる。

② スクレイパー（「実」第146図1～「実」第151図45）

1は両面ともに腹面が見られず，形態調整の大形剝離とも考えられるが，石核転用の可能性もある。刃部は両面からまばらな調整を加えて形成されている。

2は腹面一側縁・背面三側縁に調整が認められるが，あまり整った刃部調整ではない。

3は刃部背面に細かな調整が認められるものの，背面には形態調整痕が見られるだけで，刃部調整はほとんど認められない。

4は形態調整痕が多く見られるが，刃部は無調整であり二次調整のある剝片とした方が良いかもしれない。

5は背腹両面とも刃部に丁寧な調整が認められる。

6は背腹両面とも刃部には粗い調整しか見られない。

7は背腹に自然面が見られるファーストフレイクを利用している。両面の刃部には丁寧な調整が加えられている。腹面には他の一側縁にも背面側からの丁寧な調整が見られ，二側縁の使用も考えられる。

8は，背面に自然面と剝片剝離痕が見られるセカンドフレイクと考えられる。腹面刃部側の調整は丁寧であるが背面側は粗い。

9は腹面の二側縁に調整が見られる。

10は腹面に粗いが整った刃部調整が見られ，背面は粗い調整のみ加えられている。

11は背腹両面とも刃部に比較的整った調整が加えられている。

12は一側縁が折断されて四角形を呈し，主要剝離面の加撃部側と刃部の二側縁の両面に調整が見られる。加撃部側は形態調整で粗く，刃部側は細かい。

13はラウンドスクレイパー状を呈し，片面の全周に刃部調整と考えられる細かな剝離が見られ，裏面にも一部を除いて同様の調整がある。

15～16は側縁両面調整である。

17は両面とも一部を除いて調整が見られ，ラウンドスクレイパー状を呈する。

18は背面に自然面を残すファーストフレイクで，一部を除いては両面に調整が見られる。剝離は背面が細かく，腹面は粗い。

19～20も一部を除いて両面調整が見られる。

21は，ナイフ形を呈する剝片で，刃部・基部の調整に明瞭な差が認められる。刃部は片面調整で，剝離は細かく整然と並んでいる。基部は剝離が粗く形態調整と考えられる。上部にも片面調整が認められるが，これは鋭いエッジを除去するための潰し調整と考えられる。

22～24は片面調整で，剝片のエッジ部分を刃部とする。

25は，打面側に片面調整が認められるが，エッジ側は無調整である。刃部と考えられる打面側

調整は潰し調整とも考えられる。二次調整のある剝片とした方が良いかもしれない。

26も打面側に片面調整が見られるが，エッジ部分が階段状を呈するため，刃部位置を変えている可能性もある。

27は一側縁のみ刃部調整を加えている。

28は縦長剝片の先端一側縁に調整が加えられており，逆の面は自然面を残す。

29～30は片面一側面に刃部調整が見られる。

31は，両面一側縁調整が見られる。

32は片面一側縁調整で，調整は細かい。

33は両面二側縁に調整が加えられており，背面の一部に自然面が残るものの，両面とも形態調整と考えられる剝離痕がほぼ全面に見られる。

34は片面一側縁に調整が加えられており，調整は細かい。

35は片面一側縁調整，36は両面一側縁調整である。

37は腹面側一側縁調整で，剝離痕は細かく丁寧な仕上げである。

38は背面側一側縁調整で，剝離痕は細かく丁寧な仕上げである。

39～45は，片面一側縁調整で，素材剝片のエッジを有効に利用しているものと，形態調整を施し部厚く仕上げるものとがある。44は，素材剝片をそのまま用いた例と考えられる。

③　磨製石斧　（「実」第152図１～６）

１～４は蛤刃石斧である。1･2･4は外面を研磨している。２の基部には剝離痕が多く残り，装着に関係する調整か，使用時の剝落であろうと考えられる。３は，刃部片である。両面とも丁寧な研磨痕が見られる。

５～６は柱状片刃石斧である。

５は基部の一側面に調整が加えられており，装着を意図したものと考えられる。６は全面研磨されている。

(3)　小　結

弥生時代の遺構については(1)でも述べたよに，少数の土坑が認められたにすぎなく，これらの土坑の性格は，弥生人の生活のどの部分を担っていたかすら明らかにできていない。しかし(2)でも述べたように，前期の単純な包含層から出土した多量の遺物のうち，土器に限ればその内容の多様性には目をみはるものがある。

大浦浜遺跡で出土した前期土器は，近畿地方で所謂「古段階」に位置付けられる，段を主たる特徴とするものがその多くを占めている。しかし同時に「中段階・新段階」に位置付けられている「削り出し凸帯・貼り付け凸帯」を持つ土器も少数ながら出土している。現段階での研究による形式分類上は，明らかに複数の時期の土器が検出されていることになるが，出土状況からは明確に分離・分層することはできない。

文様構成に於いても，木葉文・連弧文などの組み合わせについて多くの知見を得た。文様構成の多様性が，この地域において時間的に新しい様相としてとらえうるかどうか，今後の課題となる。県内の資料に，比較するだけの資料は出土していないが，下川津遺跡・森広遺跡等の状況を見るかぎり，最古段階ではシンプルな資料が多いことが予想はされる(1)。県内では室本遺跡出土土

器が，大浦浜遺跡の土器に比較的近い状況を示す。しかし小形の壺のみを出土することから，墓に伴う供献土器の可能性も高く，日常土器との比較が成り立つかどうかも検討の余地がある。

次に，弥生前期土器と同一の包含層から出土している縄文晩期の凸帯文土器及び「縄文晩期系土器」と呼んでいる土器についてである。

凸帯文土器については一例を除いて口唇部に刻み目が認められず，凸帯自体がやや形骸化していることから，「前池式」(2)よりも一段階ないし二段階後出する資料と考えられる。一段階後出すると考えられる（379）は出土地点が異なるため，前期土器と供伴するのは残りの一群であろうと考えられる。なお，凸帯上の刻み目は，通常の形状を呈するもののほか指頭圧痕状の指押さえを施したものも多く見られ，一つの特徴としてとらえられる。

特筆すべき資料として，「木葉文」を浮き彫りにした土器（421）が確認されている。文様は，二段凸帯の間に施され，確認されるかぎり上下とも二条の沈線に挟まれて木葉文を山形に配置している。年代的な繋がりは別にして畿内の「橿原式」の影響を受け，「木葉文」の祖形となるものか，弥生前期土器の「木葉文」の影響下に成立したものか，など今後問題としなければならない資料と言える。

次に「縄文晩期系土器」についてである。ベースとなる器形は弥生前期甕形土器であるが，このなかに凸帯文土器の影響を見いだすことのできるものを一括した。これは如意状口縁の口唇部の形状が通常の物と異なり，口唇部外面に貼りつけ凸帯を施したような形状を取るものが多く見られる。縄文晩期系土器の位置付けについては，県内の同時期の遺跡において同様の土器があまり確認されておらず不明としておくが，弥生前期土器を使用したものと，縄文晩期凸帯文土器を使用したものの，互いの影響下で成立したことは疑いなく，弥生時代の成立を物語る資料と言える。

大浦浜遺跡の発掘調査以後，県下でも前期土器の出土例が徐々に増えており，これらとの比較検討は別稿でその責を果たしたい。

注

(1) これらの資料の分析の一部については第6章第3節で述べている。

(2) 南方前池遺跡調査団「岡山県山陽町南方前池遺跡」『私たちの考古学』7　1956　考古学研究会

第3節　古墳時代前期の遺構・遺物

(1) 遺　構

古墳時代前期に位置付けられる遺構としては，15ヵ所を数える「土器群」・土器溜り・土坑及び土器棺などがある。なお前説で述べたように，この節で扱う遺構は所謂「庄内併行期」と呼んでいる時期から，初期須恵器を伴出する遺構までとする。これは第6章第2節で触れる弥生時代後期末から古墳時代前期の土器の年代観とは異なるものであるが，便宜的な区分として理解されたい。

① 土器棺（第54図）

今回の本調査地区には含まれていないが，昭和51年度に実施した予備調査[1]において検出している。本調査において検出した遺構ではないが，大浦浜遺跡を理解するうえで興味深い事例であるため，予備調査報告の要旨を再録しておく。なお「土器棺」を検出した予備調査トレンチは，今回の調査区割りではH－52・53区に相当する。今回の調査対象地からは除外されているため周辺の状況は不明である。以下概要を述べる。

1. 調査区は，西から東に突出した標高20m前後の小丘陵状尾根の先端裾部の緩傾斜地と大浦浜浜堤部の接する地点に設定した。

2. 基本層序は，第1層耕作土・第2層明茶褐色砂質土・第3層白色砂層・第4層白色砂層（黄褐色土が混入）である。

3. 土器棺は壺1点，甕2点，鉢2点で構成され，第2層中で検出された。第3・4層は無遺物層である。

4. 土器棺を埋置するための顕著な掘り方は検出されなかったが，第3層を僅かに掘り窪めた状態で土器を設置したことが判明している。このことから遺構面は，第2層上面であったと想定される。

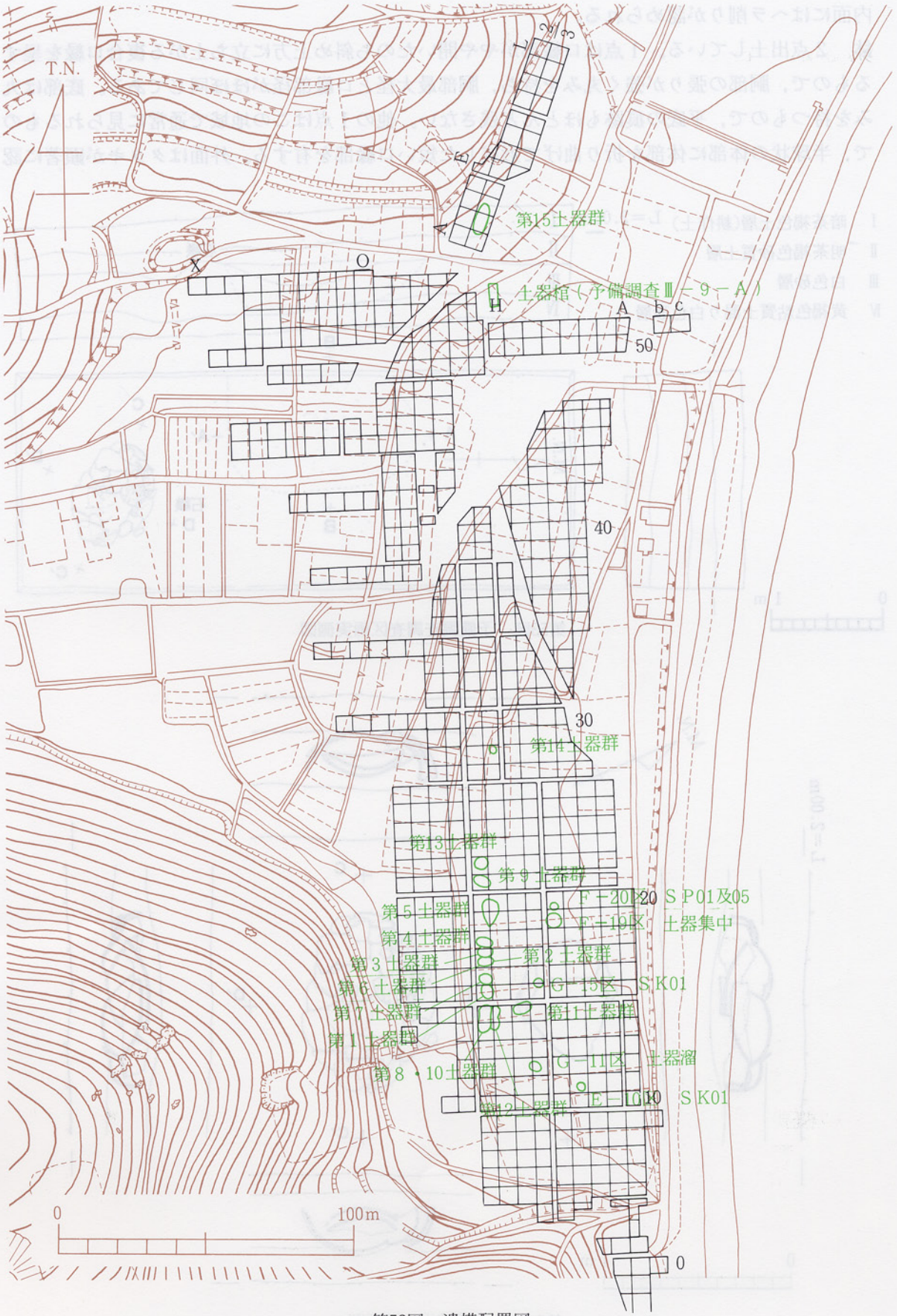
5. 検出状態は，土圧によって棺の天井部が落ち込んでいる状況であり，これ以外まったく損傷が認められなかった。

6. 土器棺の構造は，土師器大形壺を大まかな破片に割り取り，体胴部にあたる四つの破片の内側を上に向ける形で長さ65cm，幅50cm程度の底面を形づくるのに用い，その上部に今度は体胴部から頸部にかけての四半球状の破片を内側を下に向けて4枚相重ね合わせながら長さ85cm，幅60cm程の卵形を呈するように覆いかぶせている。他の甕や鉢は破片の状況で外護目的で使用されている。

7. 使用されていた土器の概要は次の通りである。

壺　口縁部が欠損している。頸部は胴部と明瞭なくびれによって区分されており，その接点には幅広の浅い凹線を巡らせている。頸部内外面はヨコナデ調整である。胴部は球形を呈し，内外面とも刷毛目調整を施す。底部は，内面にヘラケズリを施し，外面にはヘラミガキが認められる。

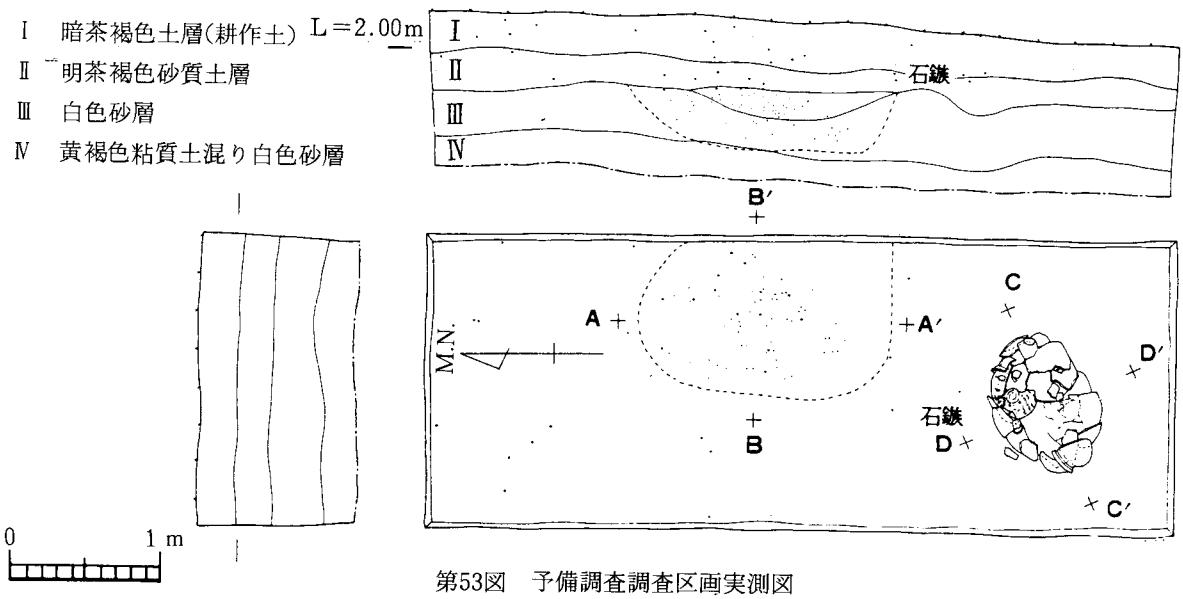
甕　2点出土している。2点ともに口縁部を欠損している。1点は明瞭な平底を呈し，壺の可能性もある。他の1点はやや丸みを持った平底の底部を持ち，外面をタタキのち刷毛目調整，


T.N.
第15土器群
土器棺（予備調査Ⅲ－9－A）
X
O
H
A
b
c
50
40
30
第14土器群
第13土器群
第9土器群
第5土器群
第4土器群
第3土器群
第6土器群
第7土器群
第1土器群
第8・10土器群
第12土器群
第2土器群
第11土器群
F－20区
SP01及05
F－19区
土器集中
G－15区
SK01
G－11区
土器溜
E－10区
SK01
0
100m

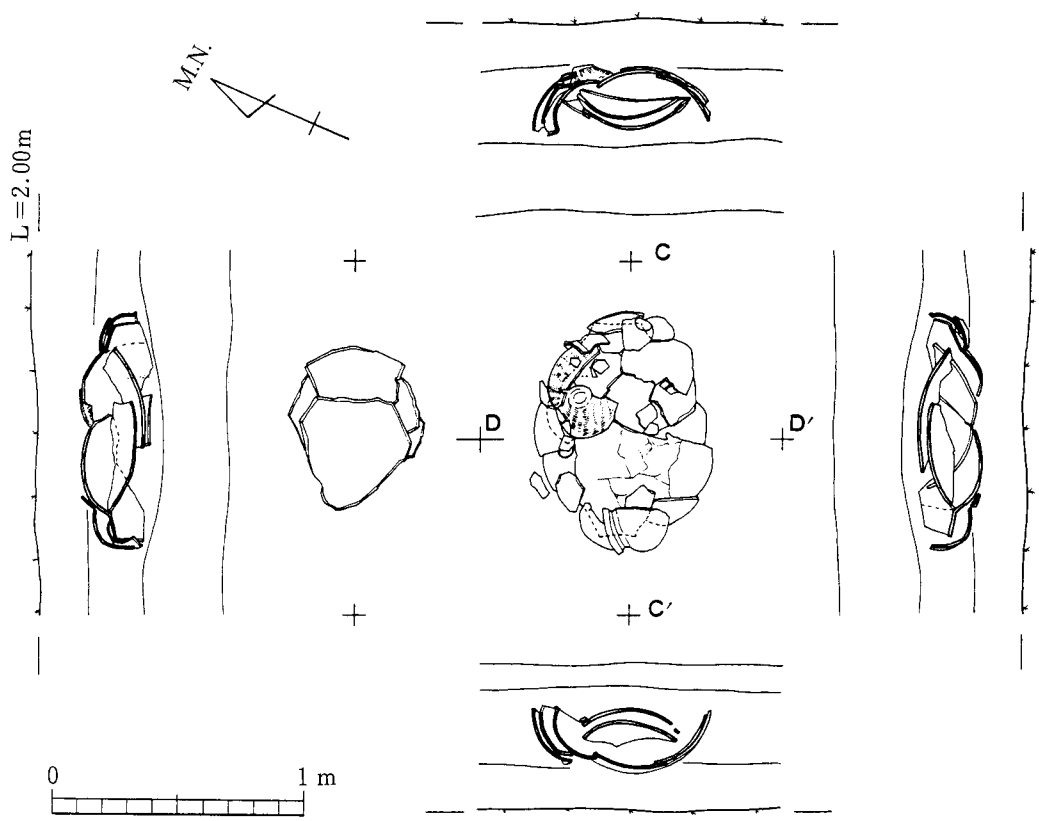
第52図　遺構配置図

内面にはヘラ削りが認められる。

鉢　２点出土している。１点は口縁部がやや開いたのち斜め上方に立ち上がる複合口縁を呈するもので，胴部の張りが強く丸みを持ち，胴部最大径と口縁部径がほぼ同じである。底部は丸みを持つもので，平底の痕跡もほとんど残さない。他の１点はこの地域で通常に見られるもので，半球状の体部に体部を折り曲げて形成した短い口縁部を有する。外面はタタキが顕著に認



第53図　予備調査調査区画実測図



第54図　土器棺平・断面図

められ，胴部の下半にはヘラ削りが施されている。

8. 土器棺の年代は予備調査担当者により「上東・才ノ元ピット（下田所式）」に平行すると考えられている。

以上簡単にその概要を述べたが，本調査ではこの資料以外にこの当時の生活の痕跡を明らかにすることができておらず，貴重な資料と言える。この資料の位置付け及び年代観については後述する。

② 土器群

土器群は計15ヵ所で検出されている。すべてが同一時期に形成されたものではなく，検出状況にも差が認められる。検出面は，第1群から第13群（第11群は除く）までは第4層上下の2面にわけられるが，同一地点で上下に重なって検出されたものは8群と10群だけである。ただ，検出状況から見て8群と10群のどちらかの大部分は，もともと近接する第12群に含まれるものと考えられるが，調査時には明らかにできなかった。しかし土器の年代的な比較から見て，8群が12群と強い関係にあることが想定される。

次に検出位置であるが，第1群から第10群・第12群及び第13群は，大浦浜の中心を南北に延びる浜堤部から西側に傾斜する斜面で検出した。また第15群もヤケヤマ東麓の傾斜地での検出である。

第11群・第14群及びG－11区土器溜り，予備調査で検出したF－19区土器集中[2]は，浜堤部中央での検出であり前者とはやや性格の差が感じられる。

また各土器群のグルーピングは，調査時の認識によるところが大きく，今回の報告では一応これを踏襲するが，新たに考えられるまとまりについては各土器群の説明のなかで触れることにする。なお土器群の番号は検出順にしており，混乱をさけるためあえて旧番号のまま記述する。

次に各土器群の検出概況を述べる。

第1土器群（「実」第153図）

図化し得た土器として（以下同様）壺・甕・小形丸底壺・鉢・高杯・製塩土器等で構成される。この中で，1·4·6を含むグループは，他の土器との時間差を考えると第7群としてとらえうる可能性が高い。

出土の状況は，ほぼ南北に2列をなしており，微地形によるものと考えられるが，列を形成することに意味を見いだせる可能性も残されている。土器群は，石及び土器片が多く混在した状況を呈しており，廃棄状態の一端を示すものと理解される。また視覚的には，第7群として除外したもののほか，西列で2群，東列で2群の小群に分離できる可能性が残される。

第2土器群（「実」第154図）

甕・鉢等で構成される。鉢は残存状態が良く，底部を上に向けて2点重ねた状態で検出された。近接して第6群が検出されているが，検出面は第2群のほうが下の面であり，同一群には位置付けられない。

第3土器群（「実」第154図）

壺・高杯脚部等で構成されている。破片が多く，散在状況を呈する。破片の出土範囲には，一定のまとまりが見られる。

第4土器群（「実」第154図）

甕及び高杯等で構成されている。このうち，4点の高杯については折り重なる状況で検出され

ており，意図した廃棄状況を示すものと理解される。他の土器はやや離れた位置で検出されているが，同一群として把握することができる。

第５土器群（「実」第155図）

出土範囲が広く，また多くの土器で構成されている。まとまりは，南東の一群が最も良好である。複数の土器群が重なっている可能性もなくはないが，出土遺物から見て時間幅は大きくないものと考えられる。全体的には高杯が多く認められる。視覚的には第１群同様東西に２列が認められ，西の小群は高杯以外は小形器種で構成されるのが特徴である。

第６土器群（「実」第154図）

第２群の西側に隣接する形で検出した。まとまりが良く，甕・高杯のみで構成されている。この内いくつかの器種は重なった状況で出土しており，第２群同様，一括性が高いと考えられる。

第７土器群（「実」第153図）

現在では高杯脚部のみ検出されているが，第１群の項でも触れたように，第１群中の一部がこれに加わる可能性が高い。後者は少数ながらまとまりが見られるが，他は破片が散在するのみである。

第８土器群（「実」第156図）

破片での検出が多いが比較的まとまりが見られる。器種構成として，高杯を除いては小形のものが多い。ただ93の甕は１点のみやや離れて検出されており，調査区外西側に広がる可能性もある。また先に第12群との関係について触れたが，第12群のほうが土器量が多いことから考えて，93の甕を除けば第12群が本来の位置を留め，一部転落したものが第８群に相当するものではないかとも考えられる。

第９土器群（「実」第160図）

甕・鉢・高杯で構成される一群とミニチュア土器とで構成される。双方の距離は約1.5ｍ程離れているが，同一時期・群と考えられる。

第10土器群

破片が散在的に検出され，まとまりが見られなかった。また図化できた遺物の出土もない。

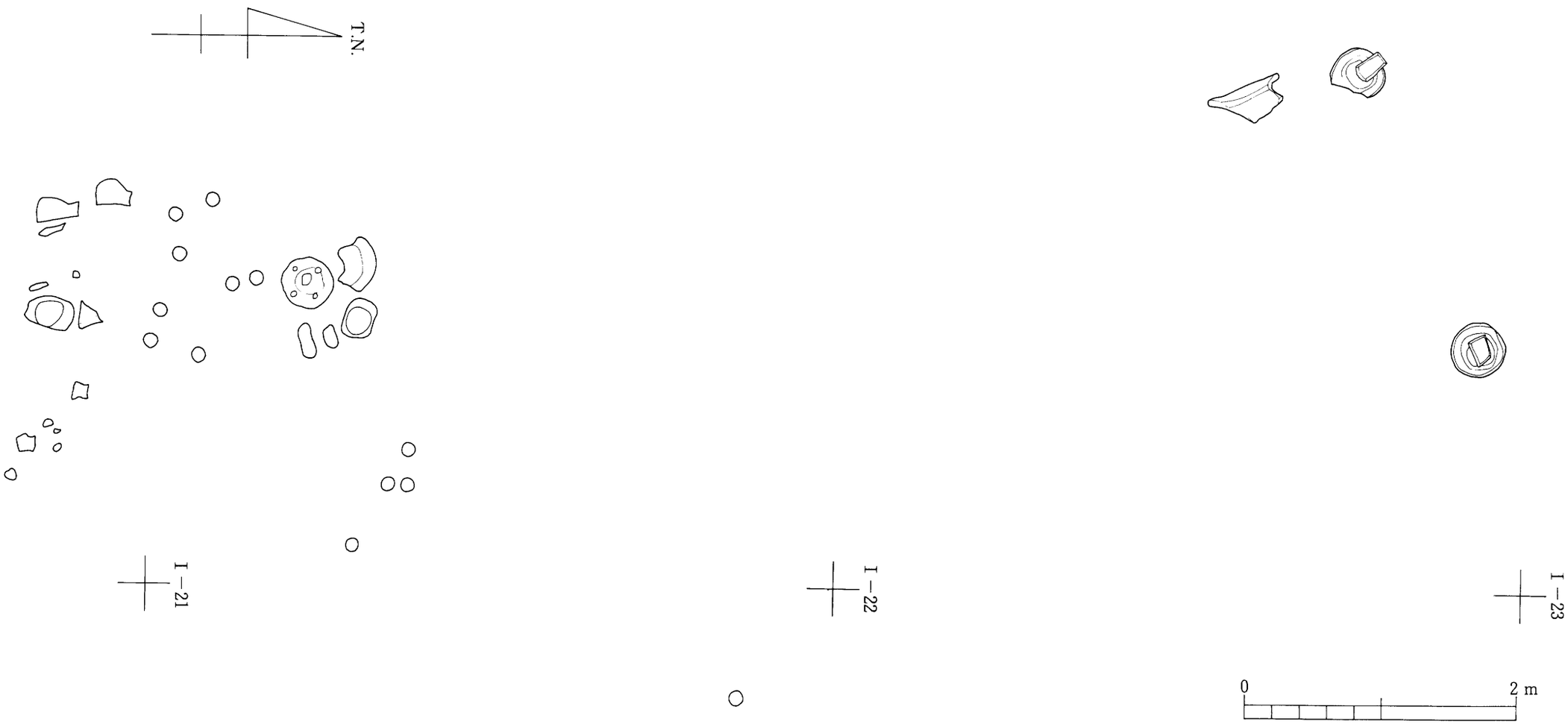
第11土器群（「実」第157図）

Ｈ－14区を中心に一部を除いては散在的な状況で検出した。これは，第11土器群の上部に後述するＨ－14区SK01が重複することから，土坑掘削時に土器群が破壊された結果によるものと推定される。このことは，土坑重複部分での土器の出土が散漫であり，縁辺部に土器が比較的多く見られることからも理解し得る。また，北西隅で検出された一群は比較的まとまりが良く，時間的な重複関係も想定される。しかしこれは層位的に分離できておらず，遺物の検出レベルの差と，土器の様相に差があると考えられることによる。

第12土器群（「実」第156図）

南北に細長く検出された。この出土状況が，旧地形を忠実に再現している可能性もある。

出土遺物については，図化できる程度に残存状況が良かったものは，南北にかたまる傾向が見られる。また，第１群同様の視覚的な観点では，五つの小群から構成される可能性がある。小群を北側から数えて第１小群には壺・甕・鉢・高杯が見られる。第２小群は破片のみで図化できたものはない。第３小群は壺・製塩土器で構成される。第４小群は甕・高杯が検出されている。第５小群は甕・小形丸底壺で構成される。このことに特別の意味が見いだしうるかどうかは今後の



第55図　第13土器群出土状態図

課題である。

第13土器群（第55図）

甕・鉢・高杯・小形丸底壺等で構成されている。検出状況は南北に細長く，南北２群にまとめることができる。残存状態は不良である。

第14土器群（「実」第161図）

甕・高杯・ミニチュア土器で構成される。南北二つの小群に分離することができるが，近接距離であり，内容構成が同一であるため同一群に位置付けた。

ミニチュア土器は，無頸壺・鉢の形態をとるものが多い。

第15土器群（「実」第158図）

甕・高杯・鉢で構成される。これも南北に細長く検出されている。ヤケヤマ東麓地区では，この調査区より北で，この土器群の検出面の上層に古式土師器の包含層が形成されているが，この地区では上層が古代の包含層となるため混入の可能性はなく，単一時期と考えうる。一部に東への転落と思える資料もあるが，ほぼ原位置を保つものと考えている。

大きくは南北２群に分離することができる。

③　土器溜り

G・H－11区土器溜り（「実」第159図）

検出した土器溜りは東西二か所に分けられるが，ここでは同一時期とみなして一括して扱う。砂地上での検出であり，土坑等は検出できなかった。しかし，東西ともにまとまりが見られるため一括廃棄と考え得る。出土した土器のほとんどは破片化していたが，大形の破片が多く原形に復元できたものが多い。また，出土の状況として，破片が積み重ねられていたことから，廃棄時にはその多くが故意に破壊されていたことが考えられる。

なお復元・図化することができなかったが，細片化した薄手のコップ状を呈する製塩土器が検出されている。

東西各々の群ともに，壺・甕・高杯・小形丸底壺が出土している。

F－19区土器集中（「実」第162図）

この土器集中は，予備調査において検出したもので，本調査に際して周辺部分を調査したが，何ら検出されていない。なお，予備調査時のグリッド名はⅢ－10－E・X・Y区である。

この調査区の概要も予備調査報告から抜粋して再録しておく。

1. グリッドは３×５ｍの規模で浜堤部中央に設定した。
2. 土層は，第１層表土層・第２淡茶褐色砂層・第３層灰褐色砂層である。
3. 遺物は第１・２層で検出された。第３層以下は無遺物層である。
4. 第１層からは製塩土器・土師器・須恵器が出土したが，量的には少ない。
5. 第２層からは製塩土器・古式土師器高杯の完形品が出土している。
6. 第２層中の遺物の年代は，布留式土器の新しい段階に位置付けられる。（第162図に表現している土器のうち222は第１層の出土である。）

出土状況から見て製塩土器と高杯を一括して廃棄しており，祭祀的な様相が強いものと判断される。

④　土坑

E－10区SK01（第56図）

長径１ｍ前後の不正円形の土坑で，底面に棒状の石が集積されていた。断面形は摺り鉢状を呈する。

土坑内からは，古式土師器甕・製塩土器が出土した。235は土坑内からの出土ではないが，この土坑に伴う可能性が高い資料である。

Ｇ－15区SK01

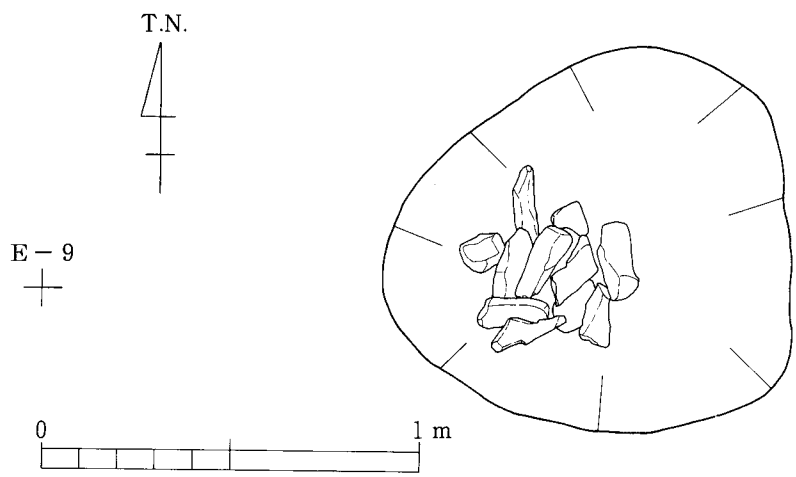
第２層中から掘り込まれたもので，長径160cm・短径145cm・深さ12～14cmを測る楕円形を呈する土坑である。埋土は黒色砂の単一層であった。

土坑内からは，古式土師器甕・鉢・製塩土器が出土している。遺物の残存状況は良好である。

Ｆ－20区SP01

Ｆ－19区土器集中に隣接する距離で検出した。ピットの形状はもろい砂地のため正確には計測できていないが，長径約40cm・短径約30cm・深さ約15cm程度の隅丸方形を呈する。

土器の出土状況として，図化している古式土師器甕の破片のほかは薄手コップ状の製塩土器片が砂と混在する形で多量に検出されているが，図化にたえる資料は僅か１点であった。しかも，他の破片資料のうち図化したものと同一器形を呈する口縁部は１点あるのみで，その他の資料はＦ－19区土器集中で検出したような器形を呈するものと推定される。このことから，図化した資料の位置付けについては今後の資料の増加を待つ必要がある。



第56図　Ｅ－10区SK01実測図

(2)　遺　　物

1)　古式土師器の分類

出土した古式土師器には，壺・甕・高杯・小形丸底壺・鉢の各器種が見られる。ここではこれらの器種について，第６章第２節との関わりを考えて分類を行う。ただここでの分類は，時間的な変遷を考慮しておらず，形式的に分類したにすぎない。

壺

Ａ　胴部が長胴化するもので，口縁部は外上方に延びる。

A_1　胴部最大径は中位にあり，口縁部が外反する。底部は丸底を呈する。口唇部は上方に拡張され，垂直な平坦面を持つ。

A_2　胴部最大径は中位にあり，口縁部が外上方に直線的に延びる。底部は丸底を呈する。

B　胴部が球形化するもので，口縁部は外上方もしくは上方に延びる。

B_1　胴部最大径は中位にあり，口縁部がやや内湾気味に延びる。底部は丸底を呈する。口唇部は丸く肥厚しておわる。

B_2　胴部最大径は中位にあり，口縁部が外上方に直線的に延びる。

B_3　やや長胴気味であるが，胴部最大径は中位にあり，口縁部が上方に立ち上がる。

B_4　胴部最大径は中位にあり，口縁部は上方に立ち上がる。

B_5　胴部最大径が肩部にあり，口縁部は「く」の字に大きく外反する。

B_6　体部形態はB_5とほぼ同様であるが，口縁部が短く内湾気味に外上方に延びる。

B_7　胴部はやや長胴気味で，口縁部は外上方に直線的に延びる。

C　甕形土器に近い形態を取るが，口縁部が長く他の甕とは異なることからここに分類した。

C_1　球形気味の体部に，直線的に外上方に延びる口縁部を有する。口縁端部は内面に三角形状に肥厚する。

C_2　球形気味の体部に，上方に外反気味に延びる口縁部を有し，口縁端部は面を持っておわる。

D　口縁部・頸部・体部が明瞭に分かれる。体部は，上部から1／4に位置する肩部に最大径があり，不明瞭になりつつある平底を有する。頸部は，体部から直線的に内上方に延び，ほぼ90°屈曲して直線的に外上方に延び，口縁端部が上方に拡張されておわる。所謂「鶴尾型」の壺である。

E　胴部最大径は中位にあるが，やや尖底気味の底部を有し，直線的に外上方に長く延びる口縁部を有する。

F　胴部最大径は中位にあるが，やや扁平な（卵を横に倒したような）体部を有する。口縁部は短く外上方に延びる。

G　所謂「二重口縁」を有する壺を一括した。

G_1　屈曲部が上方に延び，口縁端部内面が肥厚する。屈曲部の接点が外側に拡張する。

G_2　屈曲部が外反し，屈曲部の接点が外側に拡張する。

G_3　屈曲部が外反し，屈曲部の接点が外側に拡張する。G_2との差は，頸部が長く延びるかどうかにある。

G_4　特徴は，G_3とほぼ同様である。「山陰系」の土器である。

G_5　頸部・体部は壺D同様である。口縁部は受け口状になる。

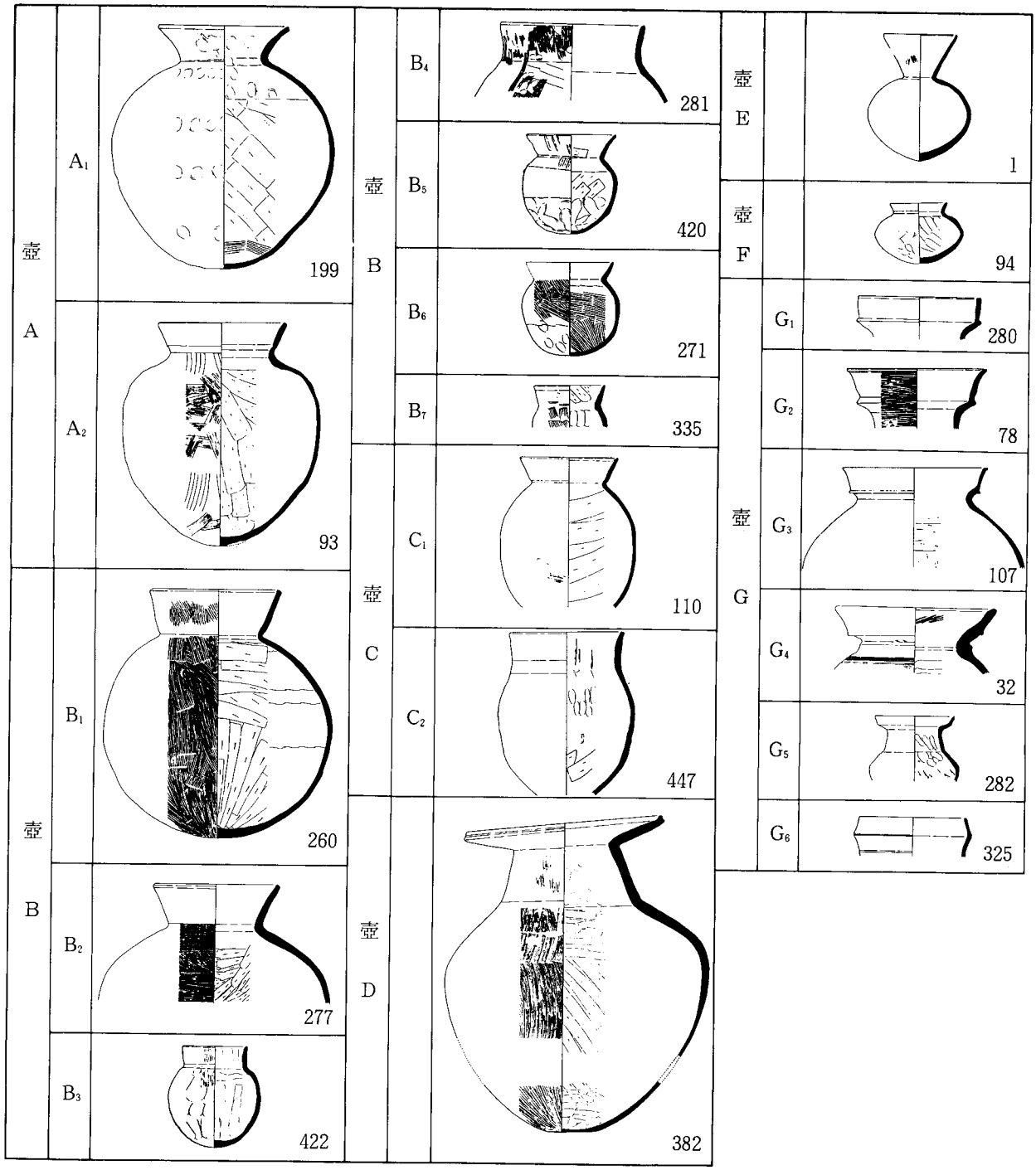
G_6　「く」の字に内湾する口縁部を有する。

甕

A　口縁部が「く」の字に外反し，体部外面の調整がタタキ目を有するものを一括した。底部の形状は平底もしくは尖底である。

A_1　胴部最大径は肩部にあるが，体部が球形化しており，底部は丸みを持った平底を呈する。

A_2　胴部最大径が肩部にあり，卵形を呈する胴部に折り曲げ口縁を有する。底部は尖底で



第57図　壺形土器分類図

ある。

A_3　胴部最大径が肩部にあり，やや長胴の卵形を呈する体部を有する。口縁部は口唇部に平坦面を持ち，丸みを持つ平底を呈する。

A_4　肩部が著しく張り，底部は平底を呈する。口唇部で内上方に拡張する口縁部を有する。

A_5　胴部最大径は肩部にあり，体部はやや扁平で，口唇部を拡張した口縁部を有する。

B　口縁部が「く」の字に外反し，体部が球形化するものを一括した。底部は丸底もしくは尖底である。外面調整は，刷毛目を基調にする。

B_1　体部はやや扁平な球形を呈し，口唇部に平坦な面を持つ口縁部を有する。

B_2　体部は肩がやや張る形態を留め，口唇部が上方に拡張する内湾気味の口縁部を有する。

B_3　体部はB_1に近いが，やや卵形を呈し，口唇部が外面で拡張する口縁部を有する。

B_4　体部はB_1に近く，外上方に短く延びる口縁部を有する。

B_5　体部の形態は不明であるが，肩が張る器形である。内湾気味に立ち上がる。やや長めの口縁部を有する。

B_6　胴部最大径は中位よりやや上方にあり，底部は尖り気味になる。口縁部は単純で，口唇部は丸く終わる。

C　頸部の径が，胴部最大径に対して大きいものを一括した。鉢に分類すべき可能性もある。

C_1　口径が胴部最大径に近く，最大径が肩部にある扁平な体部を有する。口縁部は内湾気味に立ち上がり，口唇部は平坦に仕上げられている。

C_2　胴部最大径は肩部にあり，短く外反する口縁部を有する。

D　所謂「複合口縁」を持つものを一括した。胴部の形状は不明であるが，球形の体部を有するものと考えられる。口縁部は内上方に延び，先端は丸く終わる。

E　胴部最大径が肩部にあり，著しく張りがある。口縁部は短く「く」の字に外反し，口唇部は上方に「つまみ上げ」られている。底部は丸みを持った平底を呈する。内面頸部下に顕著な指頭圧痕が見られる。

F　胴部最大径が肩部にあり，扁平な体部に尖底を有する。口縁部は大きく外反する。

G　所謂「吉備系」甕を一括した。上方に拡張した口唇部に櫛目文が見られるのが特徴である。

H　小形の半球状の体部に，垂直に上方に延びる口縁部を有する。底部は平底である。

I　小形で，口縁部径が胴部最大径と同じか大きいものを一括した。

I_1　口縁部が大きく内湾気味に外上方に延び，突出する平底を呈する。

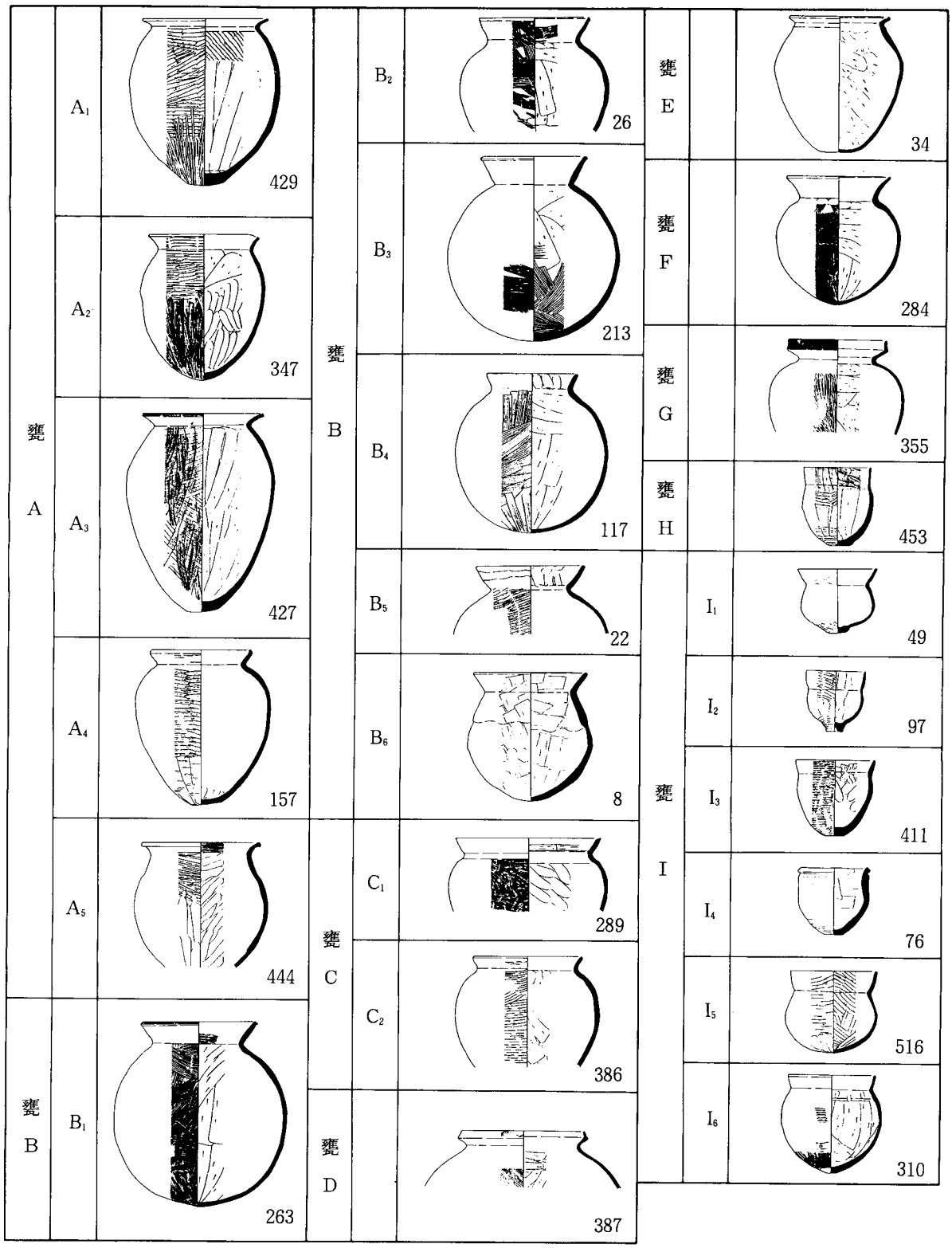
I_2　口縁部が内湾気味に上方に延び，突出する平底を呈する。

I_3　胴部最大径は肩部から頸部にあり，外上方に延びる短い口縁部を有する。底部は丸みを持った平底である。

I_4　口頸部の区分が不明瞭で，口縁端部直下に一条の沈線が見られる。

I_5　口径と胴部最大径がほぼ同一で，内湾する口縁部と丸底の底部が見られる。

I_6　胴部最大径は肩部にあり，短く内湾気味に立ち上がる口縁部に尖底気味の小さな平底が見られる。



第58図　甕形土器分類図

高杯

A　杯部の形状が椀形のものである。

A_1　杯部は浅く直線的に延びる椀形を呈し，筒状で屈曲して低く広がる脚部を有する。

A_2　小形の杯部に，「ハ」の字に低く広がる脚部を有する。

A_3　深い半球状の杯部に，内湾気味の「ハ」の字を呈する脚部を有する。

B　脚部との接合点から低く外上方に延び，屈曲して外上方に延びる杯部を有するものを一括した。脚部は脚B_1タイプのものが多い。

B_1　ほぼ直線的に延びる杯部を有する。

B_2　内湾気味に延びた後，先端部が外反する杯部を有する。

B_3　屈曲部の稜線が明瞭に認められ，やや厚みのある杯部を有する。

B_4　外反気味に延びる杯部を有する。

C　屈曲部の位置に，段もしくは沈線の見られるものを一括した。

C_1　屈曲部に段を持ち，外上方に直線的に延びる口縁的を有する。

C_2　屈曲部に段を持ち，緩やかに内湾し外上方に延びたのち口縁端部で外反する口縁部を有する。

C_{3a}　屈曲部に段を持ち，内湾気味に外上方に延び口縁端部で外反する口縁部を有する。杯部は深い。

C_{3b}　屈曲部に段を持ち，内湾気味に外上方に延び口縁端部で外反する口縁部を有する。また，杯部は脚部との接合点から水平に延びず，外上方に延びるため杯部は深い。

C_{4a}　屈曲部に段を持ち，やや外反気味に延びる口縁部を有する。

C_{4b}　屈曲部に段を持ち，やや外反気味に延び端部で外傾する口縁部を有する。

C_{4c}　屈曲部に沈線を持ち，外反する口縁を有する。杯部は脚部との接合点から水平に延びず，外上方に延びるため杯部は深い。

C_{4d}　屈曲部に段を持ち，外反する口縁部を有する。杯部は脚部との接合点から水平方向に延びる。

D　屈曲部の位置に段は見られず，明瞭な稜を持つ。また，杯部は脚部との接点から外上方に延びるため深い。

D_1　杯部下半が直線的で，上半が大きく外反する。

D_2　杯部下半が直線的で，上半が直線的に外上方に延びる。

D_3　杯部下半が内湾気味に延び，上半が外反する。「吉備系」であろう。

E　杯部下半が不明であるが，上半が短く大きく外反する。

高杯については，杯部と脚部が離れて出土しているものが多く，脚部の分類についても触れておく。

脚A　杯部との接合点から「ハ」の字形に広がるものを一括した。

A_1　低脚で，端部が丸く終わる。

A_2　脚部が長く，端部は細くなって終わる。

A_3　杯部との接点が太く，端部は爪先上がりになる。

脚B　最も一般的な脚部で，杯部との接合点から広がりながら垂下し，屈曲しながら低く広がるものを一括した。

B_1　杯部との接合点から広がりながら垂下し，屈曲しながら低く広がる。

B_2　B_1よりもより低く終わる。

B_3　B_1同様であるが，屈曲部から丸みを持って終わる。

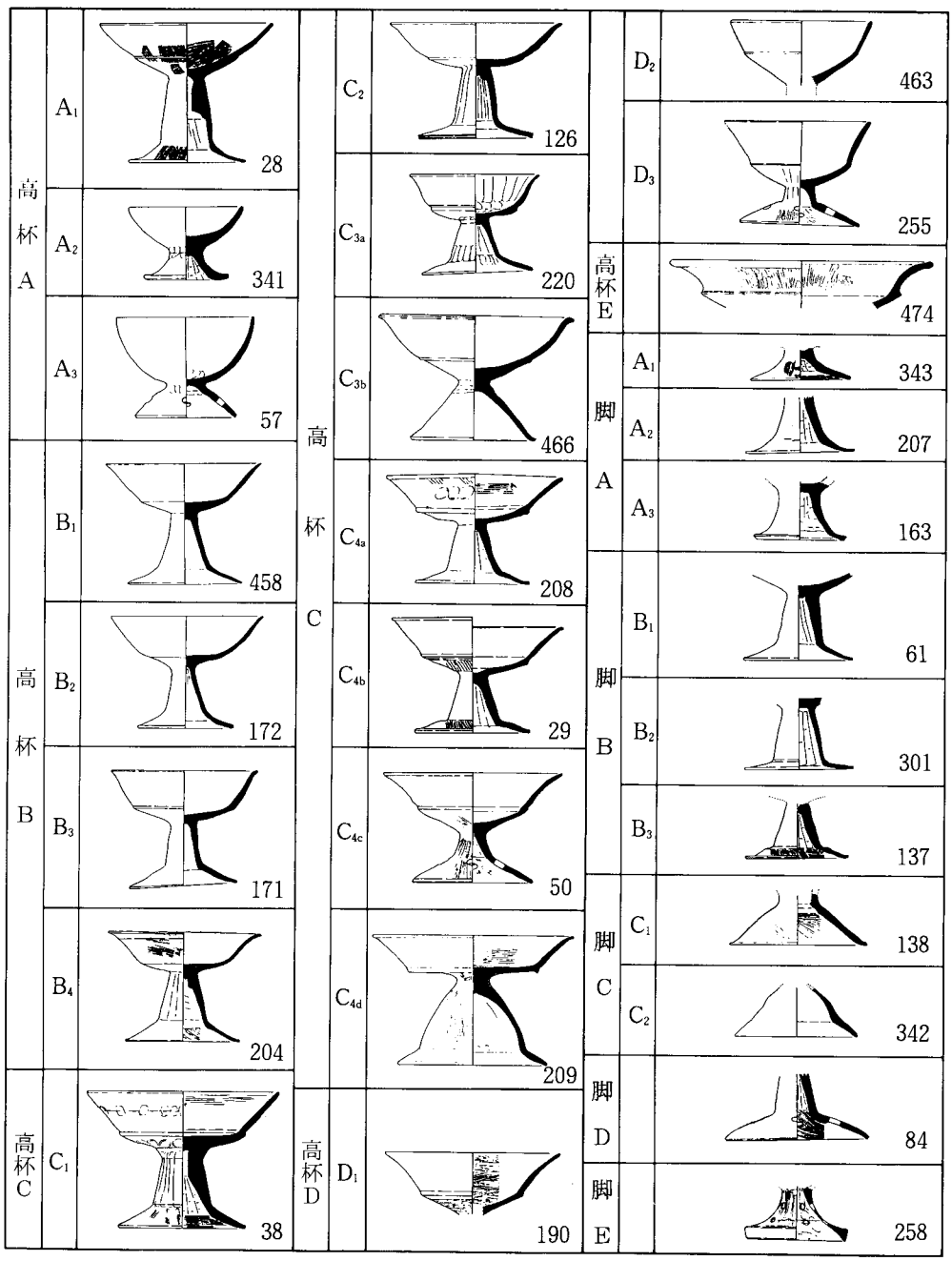
脚C　杯部との接点から若干下がったところから大きく「ハ」の字に広がる。

C_1　逆ロート状を呈し，端部は丸く終わる。

C_2　杯部との接合点から脹らみながら垂下し，一端屈曲して再度脹らんで端部に至る。

脚D　杯部との接合点から太くなりながら垂下し，大きく脹らみをもって端部に至る。

脚E　杯部との接合点から「ハ」の字形に外反しながら垂下し，爪先上がりの端部を有する。



第59図　高杯形土器分類図

小形丸底壺

A　体部は半球状を呈し，体部に対して大きく広がる口縁部を有する。

B　体部は半球状を呈し，口縁部は短く広がる。

B_1　口縁部が内湾する。

B_2　口縁部が外反する。

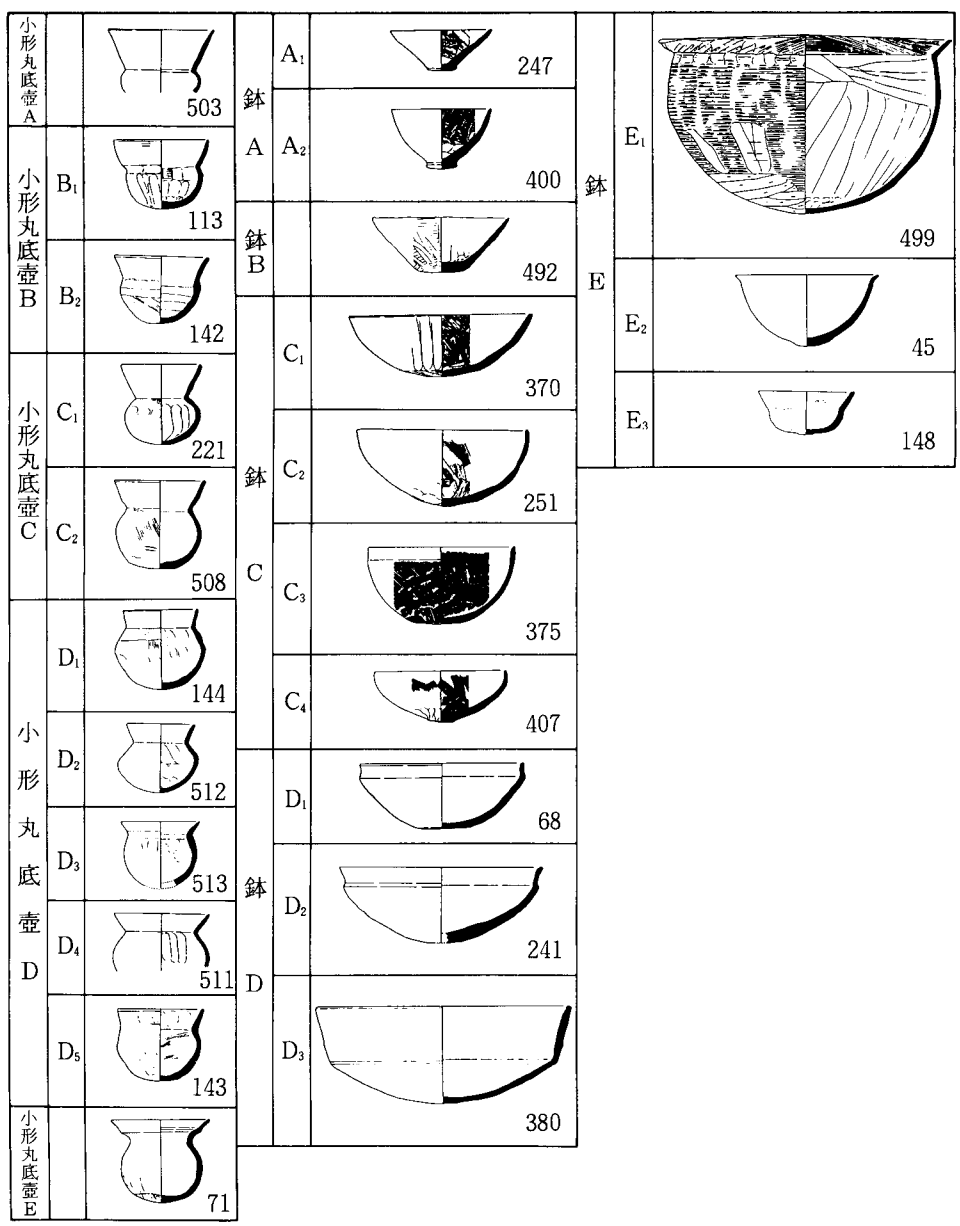
C　体部は球形を呈し，体部に対して大きく広がる口縁部を有する。

C_1　胴部最大径よりも大きい口径を有し，体部高とほぼ同様の長さの口縁部を有する。

C_2　胴部最大径よりも大きい口径を有し，やや短めの口縁部を有する。

D　体部は球形を呈し，短い口縁部を有するものを一括した。

D_1　ほぼ直立する口縁部を有する。



第60図　小形丸底壺・鉢形土器分類図

D_2　外反する口縁部を有する。

D_3　やや長めの体部に，胴部最大径をこえる外反する口縁部を有する。

D_4　胴部最大径をこえる外反する口縁部を有する。

D_5　胴部最大径をこえる外上方に延びる口縁部を有する。

E　二重口縁を有する。

鉢

A　突出する底部を持つ小形の鉢を一括した。

A_1　底部から外上方に直線的に延びる体部を有する。

A_2　底部から内湾気味に外上方に延びる体部を有する。

B　平底の底部から直線的に外上方に延びる体部を有する。

C　半球状の体部を有するものを一括した。

C_1　体部は浅く，緩やかに内湾しながら外上方に延びる。

C_2　体部は深く，内湾しながら外上方に延び，端部は上方を向く。

C_3　底部から丸みを持って立ち上がり，端部は上方を向く。体部は深い。

C_4　内湾気味に外上方に延び，端部で内湾する。

D　口縁部上方でいったん体部が屈曲するものを一括した。

D_1　口縁部が内湾気味に立ち上がる。

D_2　口縁部が外反する。

D_3　口縁部が屈曲部から外上方に直線的に延びる。

E　体部と口縁部の区分が明瞭なものを一括した。

E_1　半球状の体部から屈曲して外傾する口縁部を有する。

E_2　底部から内湾気味に外上方に延び，屈曲して外傾する口縁部を有する。

E_3　小さい体部に大きく広がる口縁部を有する。

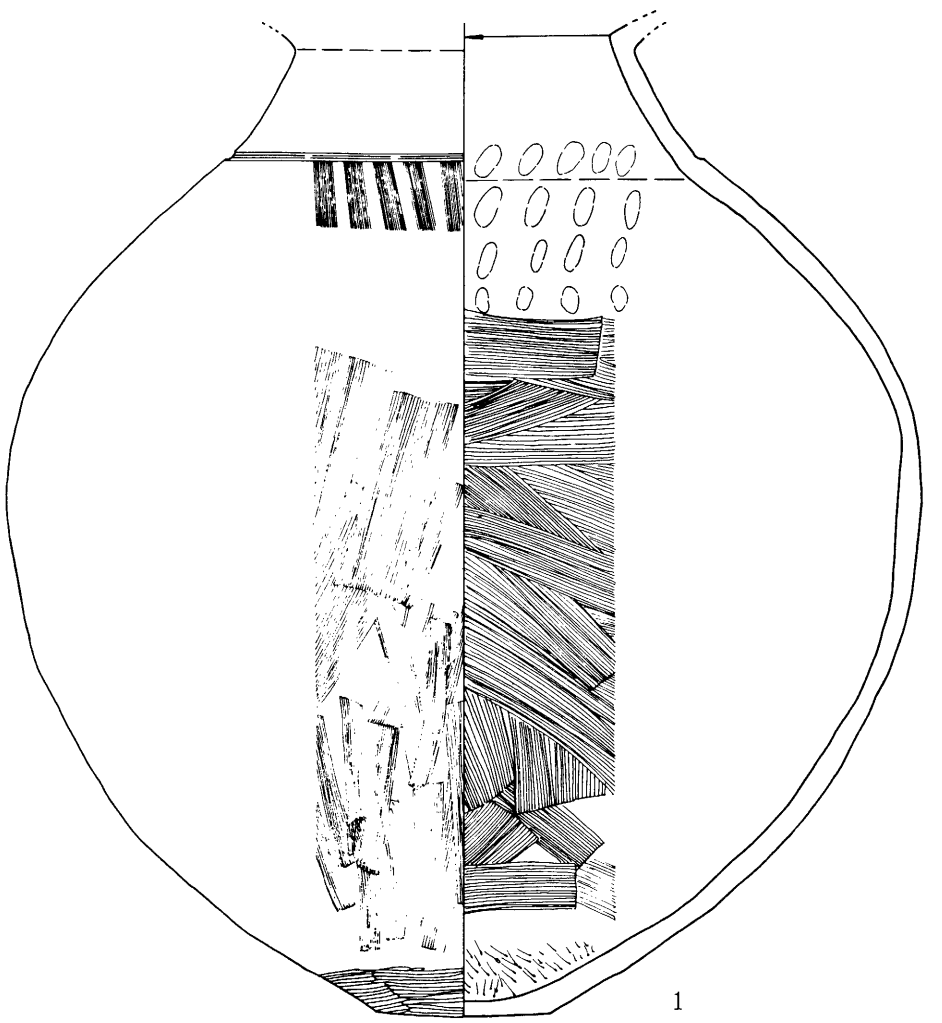
2)　遺構出土の土器

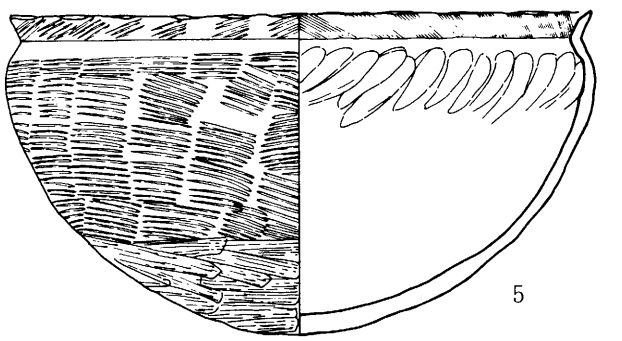
①　土器棺構成土器（第61図）

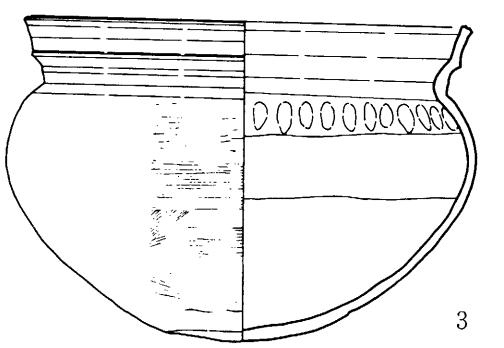
1の壺Dは口縁部を欠損している。先にも触れたように，頸胴部の境に一条の幅広い凹線を巡らしている。胴部内外面は刷毛目調整を施し，底部は外面をヘラ磨き，内面をヘラ削りしている。例示したヤケヤマ東麓地区出土のものに比べて頸部が内傾し短い。体部は肩の張りが弱くなり，球形化する傾向が伺える。底部は明瞭な平底を呈し，ヤケヤマ東麓地区出土のものがやや明瞭さを欠くことからみて，この点では先行する要素といえるが，器形の大きさを考慮した場合，この点だけでは評価できない。全体的にはヤケヤマ東麓地区出土のものより，後出する器形と考えられる。

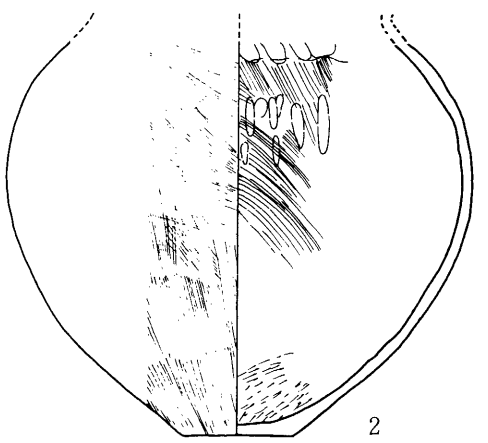
2の壺（予備調査では甕に分類されている。）は，口縁部が欠損しているため器種不明である。胴部最大径は肩部にあるが，全体的に丸みを持っている。しかし，底部は明瞭な平底を呈する。調整は内外面とも刷毛目調整で，底部内面のみヘラ削りが施されている。

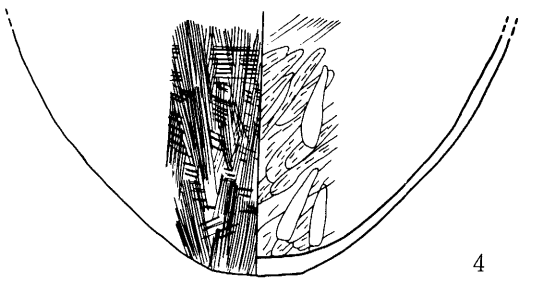
3の甕も胴部下半のみ出土しており器種不明である。外面はタタキの後刷毛目調整を行い，内面はヘラ削りを施している。底部はやや丸味を持つ平底である。

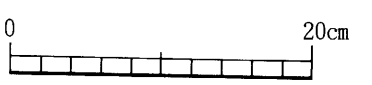












第61図　土器棺構成土器実測図

4の鉢E_1は半球状の体部が頸部でくびれ，外上方に短く直線的に延びる口縁部を有する。外面は上部から2／3をタタキ調整，下半をヘラ削り調整しており，底部は丸底を呈する。口縁部外面にもタタキが見られ，体部の端を折りまげて成形していると考えられる。

5は分類表の中に加えていない。体部は扁平な半球状を呈し，肩部が顕著に張る。底部は丸底を呈する。口縁部は所謂複合口縁を呈し，外面を強くナデている。他地域からの搬入と考えられる。

② 土器群

土器群については先にその出土状況について触れたが，出土状態図に表示していない資料については，土層確認トレンチ部分で出土しており，その出土位置から同一群と考えられたものを含んでおり，一部混入も考えられるが，同一群として扱う。

i 第1土器群構成土器（「実」第163図）

壺E（1）・G_2（14）・甕A_1（2·4·5）・B_1（3·7）・B_6（8）・高坏B_3（15）・C_2（16）・C_{4a}（9）・鉢D_2（11）・小形丸底壺D_1（12）・製塩土器Ⅱ－2類（13）で構成される。

この内，1·4·6は第7土器群に伴出する可能性が高く，ここでの検討からは除外する。この他では，5が外面にタタキを施すこと，11がやや尖底になる等古い様相が見られる。2·3では底部の形状が不明のため定かではないが，肩が張り気味になる点，古い様相とも考えられる。

ii 第2土器群構成土器（「実」第164図）

甕A_1（17）・鉢D_1（18・19）で構成される。

iii 第3土器群構成土器（「実」第164図）

壺B_3（21）・甕B_4（20）・B_5（22）・高杯脚B_1（23～25）で構成される。

iv 第4土器群構成土器（「実」第165図）

高杯B_2（42・44）・C_1（38・39）・C_2（41・43）・C_{4b}（40）・鉢E_2（45）・小形丸底壺C_2（46）で構成される。

高杯主体で構成されるが，脚部の形状にあまりバラツキが見られないため，同一時期で矛盾はない。ただ鉢については，不明瞭ながら平底を呈することから，やや古相であると考えられる。

v 第5土器群構成土器（「実」第167図）

壺B_2（69）・G_1（47）・甕A_1（48）・A_3（72）・I_1（49）・I_3（75）・I_4（76）・高杯A_3（57）・B_1（55）・B_3（53）・B_4（54・73）・C_2（56）・C_{4a}（51）・C_{4c}（50）・D_1（52）・高杯脚B_1（59～62・65・74）・B_3（63・64）・鉢A_2（66）・C_1（67）・D_1（68）・小形丸底壺E（71）で構成される。

この内高杯以外の器種については，口縁部に内湾傾向及び肥厚が認められず，高杯は杯部の形状が外反傾向にあるもの，脚部の屈曲部に明瞭な稜線を持たないものなど比較的古相を呈するものが多い。ただ70・71を小形丸底壺と考えれば，この2点のみ先の年代観からは離れた資料となる。

vi 第6土器群構成土器（「実」第164図）

壺G_4（32）・甕A_1（33）・B_1（27）・B_2（26）・E（34）・高杯A_1（28）・A_2（37）・C_{4a}（30・36）・C_{4b}（29）で構成される。

この内32～37まではトレンチ部分で検出されているので，共伴関係は不明である。26～31はほぼ一列に並んで検出されており，同一時期の所産であることは疑いない。これからすれば，33・

34の甕は平底を呈し，器形からみても格段に古い様相を呈するものであり，第6群より古い土器群が存在したことを想定させる。

vii　第7土器群構成土器（「実」第166図）

壺G_2（78）・甕A_3（79）・C_1（80）・高杯C_{4a}（81）・高杯脚B_1（77）・鉢C_2（82）で構成される。

土器群として認識され取り上げが行われたのは，77の一点のみである。このため，同一時期の所産として認識すべきかどうかは不明であるが，79・82の土器のみやや古相を留め，他の土器については同一時期としても現在の認識では問題ない。

viii　第8土器群構成土器（「実」第168図）

壺A_2（93）・F（94）・甕C_1（95）・I_2（97）・高杯A_1（98）・B_2（100）・C_2（99）・高杯脚B_3（101）・鉢C_2（103・104）・E_1（105）・製塩土器Ⅱ－1類（106）で構成される。

97は，平底を呈し外面調整にタタキを残していることから古相といえるが，小形であり実用品ではないとも考えられ，一概に混入とは判断できない。93は，胴部最大径が肩部にあり，底部も尖底気味の丸底を呈することから，この一群中では古式の部類に入る。出土状況からみても，一点だけ離れて出土しており，これを裏付けるものとも言える。

ix　第9土器群構成土器（「実」第166図）

甕A_1（83）・高杯脚D（84）・鉢E_2（85）・ミニチュア土器で構成される。

83～85は同一時期として理解し得る。86～92には，鉢・台付鉢・甕の各器種が見られる。

x　第10土器群構成土器

破片のみの出土で，図化し得る資料はない。

xi　第11土器群構成土器（「実」第171図・「実」第169図）

壺A_1（119・121・125）・甕A_1（123・124）・B_3（122）・高杯B_1（132）・B_4（128・129・131）・C_1（127）・C_2（126・130）高杯脚B_3（134・135・137）・C_1（138・139）・鉢E_3（148）・小形丸底壺B_2（142）・C_1（140・141）・D_1（144～147）・D_5（143）・製塩土器Ⅰ－8類（150～152）・Ⅱ－2類（153～155）・Ⅱ－3類（156）・ミニチュア土器（149）で構成される。

壺A_1に分類している119・121・125はそれぞれ細部にわたって異なる要素が多い。119は，口縁部が標準的なものに比べて長く，外反の度合いも大きい。121は，体部が球形化しており，頸部の径が小さい。125が標準的なものである。

第11群土器群は，遺構の部分でも述べたように2時期に分かれるものと考えている。新相と考えられるのは，119・125・126・127・130・131・132・133・134・136・137・144・146・147・149・153～156である。ただ，この他にも，143・145等は新相に区分されよう。新相を構成する土器群は，高杯では杯部の下半に段を持つ，小形丸底壺Dタイプを伴う，製塩土器Ⅱ類のものが共伴するといった特徴が上げられる。

これ以外の土器は，基本的に脚台の付く製塩土器Ⅰ－8類に位置付けられよう。

xii　第12土器群構成土器（「実」第170図）

壺C_1（109・110）・G_3（107）・甕B_1（108）・B_4（111・117）・高杯A_1（118）・B_1（112）・小形丸底壺B_1（113～115）・製塩土器Ⅰ－9類（116）で構成される。

壺C_1タイプは，長胴化した甕の可能性もある。110では，布留式土器の特徴の一つである口縁端部内側に，段面三角形を呈する肥厚が見られる。

xiii　第13土器群構成土器（「実」第172図）

甕A_4（157）・H（159）・I_3（160）高杯A_3（164）・B_3（162）・高杯脚A_3（163）・鉢C_2（166）・D_1（165）・小形丸底壺C_1（168）・ミニチュア土器（169）で構成される。

この一群は他の土器群と比較した場合，明らかに古相を呈している。ただ，168はこの一群の他の土器よりも新しい様相を持っており，混入の可能性が高い。

xiv　第14土器群構成土器（「実」第172図）

甕A_1（170）・高杯B_2（172・173）・B_3（171）・高杯脚B_3（174）・ミニチュア土器（175～182）で構成される。

xv　第15土器群構成土器（「実」第173図）

甕A_2（186）・G（188・189）・高杯D_1（190）・D_2（192）・高杯脚D（191・193）・鉢C_1（195）・C_2（197）・C_3（194）・C_4（198）・E_2（196）で構成される。

183～187の甕は，器種不明のものも含めて体部が球形化しておらず，丸みを持つ平底を呈する。鉢についても，底部の形態がわかる195・198は平底を呈していることから，古い様相を呈するものと考える。甕Gは，吉備系の甕である。

③　土器溜り

i　G・H－11区土器溜り（「実」第174図）

壺A_1（199）・B_6（201）・甕B_1（200・202・203）・高杯B_1（206）・B_4（204・205）・C_{4a}（208）・C_{4d}（209）・脚A_2（207）・小形丸底壺C_1（210）・D_5（211・212）で構成される。

壺・甕は底部が丸底で，甕外面にはタタキが残る。口縁部が内湾傾向を示すのは202だけで，他は強く外反するものが多い。高杯は，屈曲部に稜線を持つものと，凸帯を持つものの二者にわかれる。小形丸底壺にはCとDタイプが見られるが，Dタイプは比較的口縁部が長く古相を示すものと考えられる。

ii　H－10・11区土器溜り（「実」第175図）

甕B_3（213）・高杯C_{3a}（215・216）・C_{4a}（214）で構成される。

土器溜りとはいえ，僅か4点の土器が集中していたのみで遺構等検出されていない。

iii　F－19区土器集中（「実」第175図）

甕B_1（217）・高杯C_1（218）・C_2（219）・C_{3a}（220）・小形丸底壺C_1（221）・製塩土器Ⅱ－1類で構成される。なお，222は上層の出土である。

220は，段が明瞭で杯部も比較的深く作られている。やや特異な形態と考えられる。222は，明らかに廻を意識して製作されたものと考えられ，須恵器出現以後の年代に比定される。

④　土坑

i　D－14区SK01（「実」第175図）

甕底部及びミニチュア土器で構成される。甕は平底を呈し，外面はタタキ調整，内面は板ナデもしくはナデ調整が施されている。ミニチュア土器は，片口の鉢を意図しているものと考えられる。

ii　F－14区SK01（「実」第175図）

ミニチュア土器2点の出土である。それぞれ甕・壺をモデルとしていると考えられる。

iii　E－10区SK01（「実」第176図）

甕A_2（234・235）・製塩土器Ⅰ－8類で構成される。

甕は同一タイプとしているが，プロポーション及び調整に違いが見られる。234はやや長めの体部を有し，外面全面にタタキ目が観察される。底部にも同様の痕跡を観察することができるのが特徴である。235は外面を刷毛目調整しており，内面はヘラ削りを用いている。両者とも明瞭な平底を呈している。

iv　G－15区SK01（「実」第176図）

甕A_1（238）・A_2（237）・鉢C_1（239・240・242）・D_2（241）・製塩土器Ⅰ－8類で構成される。

237は丸底気味の平底を呈している。鉢には242のように外面にタタキ目が顕著に見られ，明瞭な平底を呈するものや，239・240のように底部をヘラ削りして丸底化を指向する形態のものも見られる。

v　H－19区SP01（「実」第176図）

小形の鉢2点で構成される。247は平底を呈し直線的に外上方に延び，248は平底を呈し半球状の体部を有している。

vi　F－20区SP01（「実」第176図）

甕B_1（249）・製塩土器（？）で構成される。

甕は外面を刷毛目調整しており，内面は頸部までヘラ削りが見られる。口縁部は外反しているが，端部内面にやや肥厚が認められる。製塩土器は小形のコップ状を呈し，外面にはタタキ目が見られる。

vii　ヤケヤマ東麓B－2区SK01（「実」第176図）

鉢C_2（251・252）・高杯脚で構成される。

鉢は251がやや丸底気味の底部を有し，252は明瞭な平底を呈する。高杯は口縁端部・脚端部を欠損しているが，脚D_2タイプであろうと思われる。

3）包含層出土の土器

包含層資料は，出土の状況から一括性の高いものと混在が顕著に認められるものがある。ここでは，一括性の高いものから説明を加え，次に図化し得た土器について器種ごとにその概略を述べる。

i　F－5・6区第4層（古式土師器層）（「実」第177図）

甕（254）・高杯D_2（255・256）・高杯脚D（257）で構成される。

甕はやや口縁部外面が膨らむが，形態的には外上方に直線的に延びる。外面調整は刷毛目である。高杯は3点とも同一形態を有するが，脚端部が直線的に終わるもの（255）と，丸味を持つもの（256・257）に分けることができる。後者は，口縁部の形態が不明である。

ii　F－4区第5（上）層（「実」第177図）

高杯脚E（258）・鉢E_1（259）で構成される。

高杯は化粧土を用いており，外面を丁寧に研磨している。

iii　Ⅰ－20区第2（下）層（「実」第177図）

壺B_1（260）・C_1（264）・甕B_1（261・263）・B_3（262）・高杯C_{3a}（265）・小形丸底壺C_1（267）で構成される。

260は，口縁部がやや内湾しながら立ち上がり，口縁部内面が若干肥厚する。264は口縁部が外反気味に立ち上がり，外面にタタキ目を施す。262・263は，口唇部を若干下側に拡張し，端面をヨコナデするため，一見凹線文に見える。

iv　B～H－31～47区

この地区は，大浦浜遺跡全体のなかでも比較的安定した土層が観察されており，包含層資料のなかでは良好な資料とすることができる。中でも第4・5層出土資料は時期的な区分はできないまでも，まとまりがあると考えて取り上げた。その上層にあたる第1～3層には古墳時代後期の製塩土器等が出土していることから良好とは言いがたいが，第4・5層との比較のため資料を掲載しておく。

・第1～3層（「実」第178図）

268は，やや内湾気味に外上方に延びたのち端部が外反する口縁部を有する。271は，やや内湾気味に立ち上がる口縁部を有する。高杯には274のように浅い椀形のものから，272のように比較的古い様相を持つものまで出土している。

・第4層（「実」第178・第179図）

壺には$B_{1\cdot2\cdot4}$　$G_{1\cdot5}$が見られる。G_5は小形で他では見られない器形を呈しており，ミニチュア土器とも考えられる。甕にはA_1・$B_{1\cdot5}$・$C_{1\cdot2}$・Fが見られる。中でも284が，外反する口縁部・尖底を有していることから最も古く位置付けられる。294も同時期と考えられるが，体部下半が欠損しているため不明である。285は，球形の体部を持ち丸底を呈することから284に後続するタイプと考えられる。高杯には$C_{1\cdot2}$・D_3・G_4がある。296・297は一般的に見られるタイプであるが，299・300はその形態から高杯と推定しているにすぎない。305のミニチュア土器は，小形丸底壺を意識して製作しているものと考えられる。

・第5層（「実」第179図）

壺B_4・甕I_6・C_{3a}・鉢C_2・小形丸底壺$C_{1\cdot2}$が見られる。311・312は壺に分類されるが，あまり例のない器種と言える。319・320は小形丸底壺に分類しているが，通常の形態とは若干異なる。特に，319は第4層の305のモデルとも考えられる特徴的な器形を呈する。

v　A・B－50・51区

A・B－50・51区では，第3層②で良好な資料を得た。第3層②以外の層でも若干の資料を得ているので，これについても触れておく。

・第3層②以外（「実」第180図）

壺$B_{4\cdot7}$・G_6・甕$A_{1\cdot3\cdot4}$・I_3・G・高坏A_2・B_2・C_1・高杯脚A_1・C_2・D・鉢$C_{1\cdot2}$が見られる。

・第3層②（「実」第181・第182図）

壺A_1・甕$A_{1\cdot2}$・G・H・高杯A_2・B_4・C_{4a}・D_1・高杯脚D・ミニチュア土器・鉢$C_{1\cdot2\cdot3}$・$D_{2\cdot3}$が見られる。また，これ以外に図示できなかったが小形器台が出土している。甕は肩部に最大径を持ち，口縁部は単純「く」の字，底部は尖底もしくは平底を呈する。体部外面はタタキを施し，一部その上から刷毛目調整を加えているものがある。吉備系の甕も，肩部に最大径を持つものが多い。高杯は，杯部屈曲部に稜線が見られるものが主流である。鉢はその多くが尖底気味の丸底である。

vi　ヤケヤマ東麓地区（「実」第183・第184図）

壺D・G_5・甕B_1・C_2・G・I_3・高杯B_1・高杯脚D・鉢A_2・$C_{1\cdot2\cdot4}$・E_2・手焙り形土器・ミニチュ

ア土器・製塩土器Ⅰ－7～8類が見られる。

382は，所謂「鶴尾形」[3]の壺で，口縁部に退化凹線が見られ，肩部が著しく張っている。底部は平底を呈し，外面のヘラ磨き，内面のヘラ削りによって，上半部の形状からは考えられないくらい薄手に仕上げられている。384もやや長手であるが，同様の器形になると考えられる。ただ，頸部と口縁部の境の屈曲は明瞭ではない。外面調整は刷毛目にも見えるが，条痕と表現したほうが妥当な調整である。鉢は突出した平底を呈するものが多く，一部尖底気味のものが見られる。

vii　その他の包含層（「実」第185図～第190図）

上記以外の各土層中から，色々なタイプの土器が出土している。個別に年代等について触れないが，参考までに図示しておく。

4)　製塩土器（「実」第209図～第211図）

製塩土器の分類・編年については第6章第1節に譲るとして，ここではその概要を記すにとどめたい。

大浦浜遺跡から出土した製塩土器のうち，もっとも古く位置付けられる資料が1である。図化出来なかったが，出土点数は2点である。後述するが，これに伴う土器は見い出せなかった。

2～16は，ほぼ同一地点からの出土であり，いくつかのバリエーションが見られるが，同一時期と考えられる。また，使用年代がごく短期間であったことが伺われる。

17以降の資料は，前階段の外面ヘラ削り調整からタタキ調整に変化したものである。特徴の一つとして安定した脚部を持つことが上げられる。

37はほぼ完形に近い形で出土したが，全体的に小形であり通常使用していたものではなく，ミニチュアと考えられる。

38～57は後述する「タタキⅡ」に位置付けたもので，体部に丸みを持ち脚部がやや薄く低脚になるのが特徴である。

61～72は同上の傾向がよりいっそう進んだもので，残存率の高い61から見て体部の容量増および安定性が指向されているものと考えられる。

79～106は脚部の小形化が進んだもので，この背景には体部の小形化と器壁の薄形化という二つの表裏をなす技術の進化があるものと考えている。

この次の段階には，この項目では図示しなかったが，薄手のコップ状を呈するものが出現する。

5)　ミニチュア土器（「実」第229図）

ミニチュア土器には，その大きさ及び器形にバリエーションが見られる。ここではその大きさから大形・中形・小形の三形態に分けて考える。1～11は小形に属する。器形は1～5が口縁部の内湾する椀形を呈する。6～11が短い口縁部の外反する甕形を呈する。

12～20は中形である。12～15は鉢形土器と考えられる。16～20も口縁部を有する鉢形土器と捉えることができよう。

21～29は大形といえる。21～27は口縁部を有する鉢形土器，28・29は壺形土器と考えられる。

ミニチュア土器は本来手捏土器であり，その大きさ・器形にどれほどの意味が付加されている

かは疑問であるが，一応の器種を意識して製作されており，製作段階での意図を感じさせる資料といえる。

(3) 小　結

以上，大浦浜遺跡の弥生時代後期末から古墳時代前期の遺構・遺物について述べた。このことから，弥生時代後期末に比定される遺構・遺物は大浦浜では北端に位置するヤケヤマ東麓地区に集中する傾向が見られる。遺構としては，第15土器群・土器棺が検出されている。また土層模式図でも見られるように，この時期を前後する土器包含層も形成されている。このことは，集落域が近いことを裏付ける可能性がある。

しかし古墳時代前期になると，大浦浜に形成された浜堤の南部に土器群もしくはこれに類する土器溜まりや土器集中・土坑が集中する傾向にある。時間的にヤケヤマ東麓地区出土土器とこの一群の中間に位置付けられる資料がA～C－50・51区付近に集中する傾向を見せることも興味深く感じられるのである。このことは，時代と共に遺構が大浦浜の北から南に移動する様子が遺構として把握されるのである。

ただし，ヤケヤマ東麓地区で確認された遺構が生活址であるのにたいして，南部で確認されるものが祭祀としてとらえられる状況にあることが一つの問題として取り上げられよう。

大浦浜遺跡の調査で，大浦浜のおおよそ全体が調査されているが，古墳時代前期に伴う集落の存在を感じさせる資料はない。ヤケヤマ東麓地区でも遺物として確認されておらず，このことが，古墳時代前期の集落形成がなかったのではないかという疑問を提議するものである。

大浦浜遺跡は，次節で触れるようにこの時期から土器製塩を本格的に開始している可能性が高く，集落もこれに伴うように形成される可能性がある。しかし古墳時代前期になると，集落を他に求めるか，集落を形成しないで土器製塩を行っていたかなど，今後に問題を残している。

注

(1)　『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財予備調査報告(1)』香川県教育委員会　1977　p107－p115

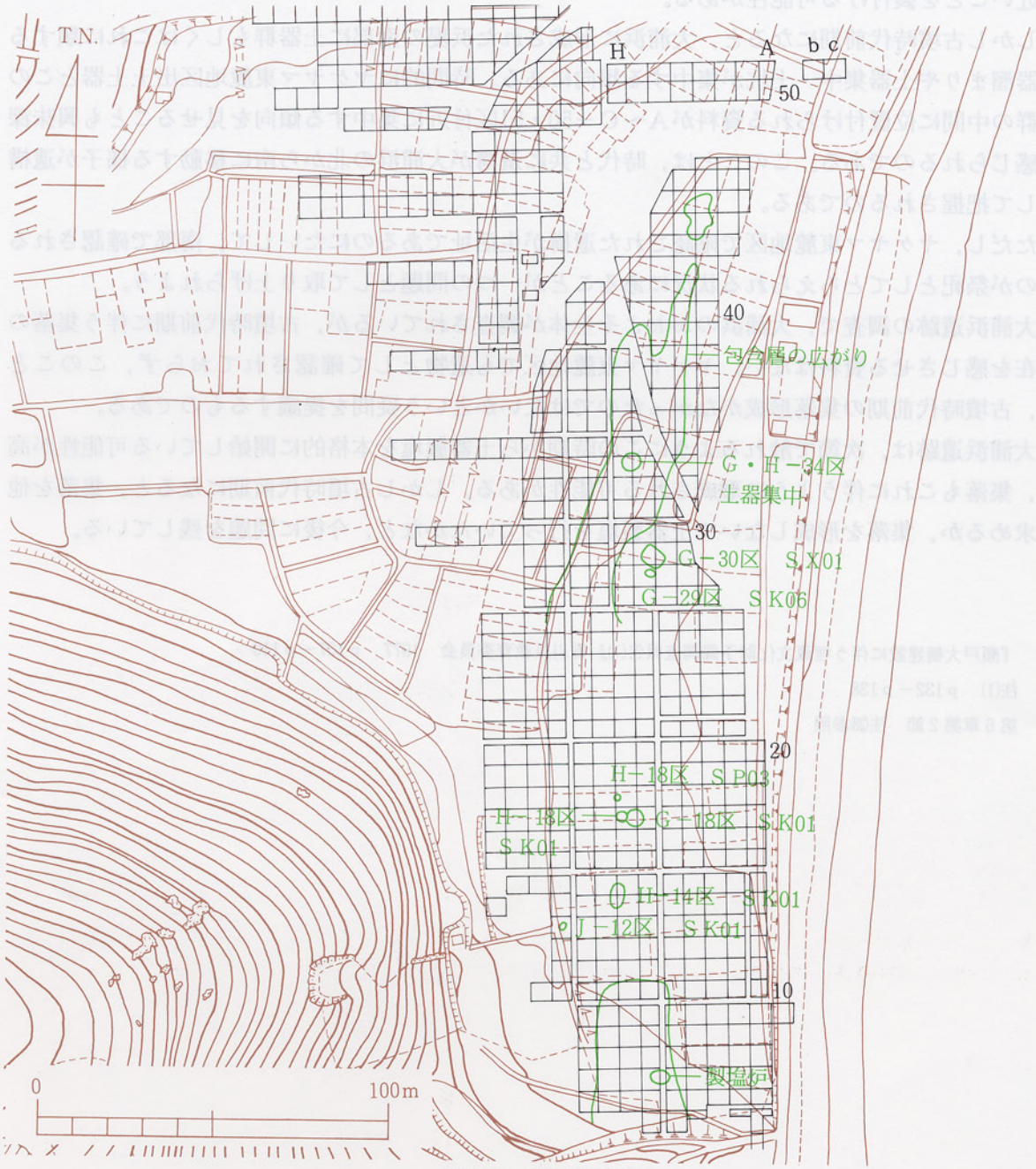
(2)　注(1)　p132－p138

(3)　第6章第2節　注(28)参照

第４節　古墳時代後期の遺構・遺物

(1)　遺　　構

古墳時代後期に位置付けられる遺構もしくはこれに準ずるものとして，土坑・ピット・製塩炉・土器集中・包含層がある。細部の時期については，これを明確にすることが出来なかったものもあるが，遺構の性格としてはその多くが土器製塩にともなって形成されたことは明白である。この項では，遺構の種類ごとにその概要を記しておく。



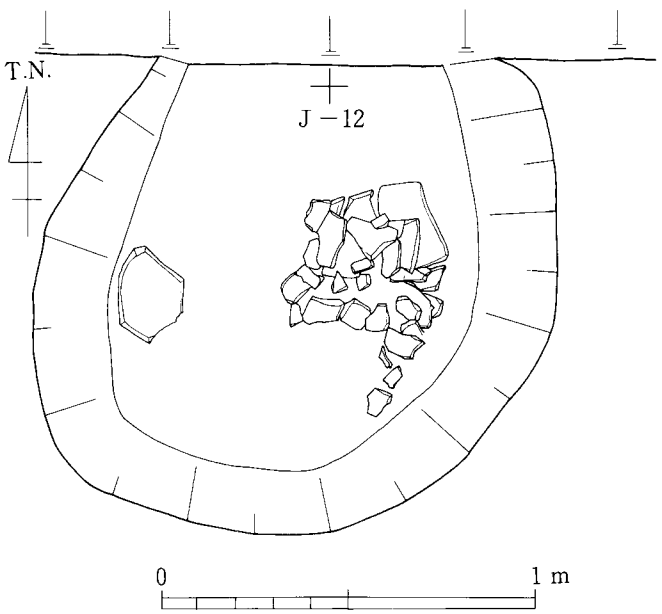
第62図　遺構配置図

① 土坑

i J－12区SK01（第63図）

径1.4m，深さ0.4mを測る不正円形を呈する。埋土はやや黒味がかった砂で形成されている。土坑底から製塩土器の半載状態の破片と須恵器片が検出されている。製塩土器は後述するⅢ類に属するもので，須恵器は壺体部の破片で時期は不明である。

製塩土器の埋置状態から，何らかの意図を持った土坑であることが伺われるが，現状ではその性格は不明としておく。



第63図 J－12区SK01実測図

ii H－14区SK01（第64図）

長辺6.0m，短辺3.2m，深さ約0.5mを測る隅丸の長方形を呈する。断面は逆台形を呈し，埋土は3層に区分することが出来る。最下層のⅤ層は東側からの流入土によって形成されており，Ⅳ層はこの上部に上面が平坦になるように溜っている。Ⅲ層はその上部にほぼ均一に覆いかぶさり，土坑の肩部を一部越えて堆積しているところも見られる。土坑形成時には，やや盛り上がった形状を呈していたものと考えられる。製塩土器を包含していた上記3層中，やや希薄な包含状況を呈していたⅢ層を上層，黒色の粘質土中に密に製塩土器が見られたⅣ・Ⅴ層を下層として取り扱っている。

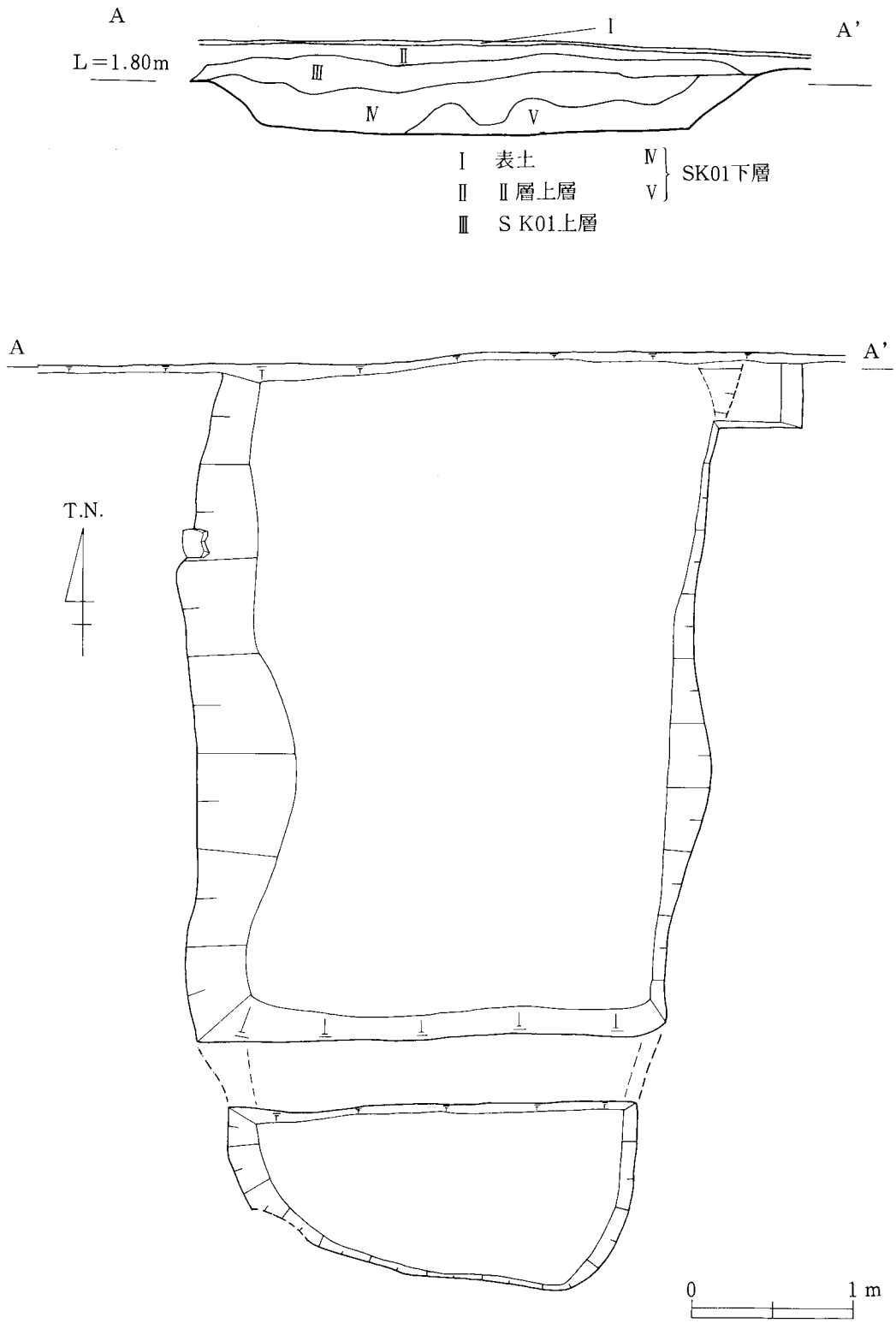
iii G－18区SK01（第65図）

径2.3m，深さ約0.3mを測る不正円形を呈する。埋土は黒色の中砂である。埋土中で検出した遺物には，須恵器杯蓋・杯身・高杯・製塩土器がある。須恵器は各1点であるが，製塩土器は同一タイプの完形品をモデル（重量約0.7kg）として換算すると，約40～50個体分に相当すると推定される。年代は，出土した須恵器から6世紀後半に比定される。

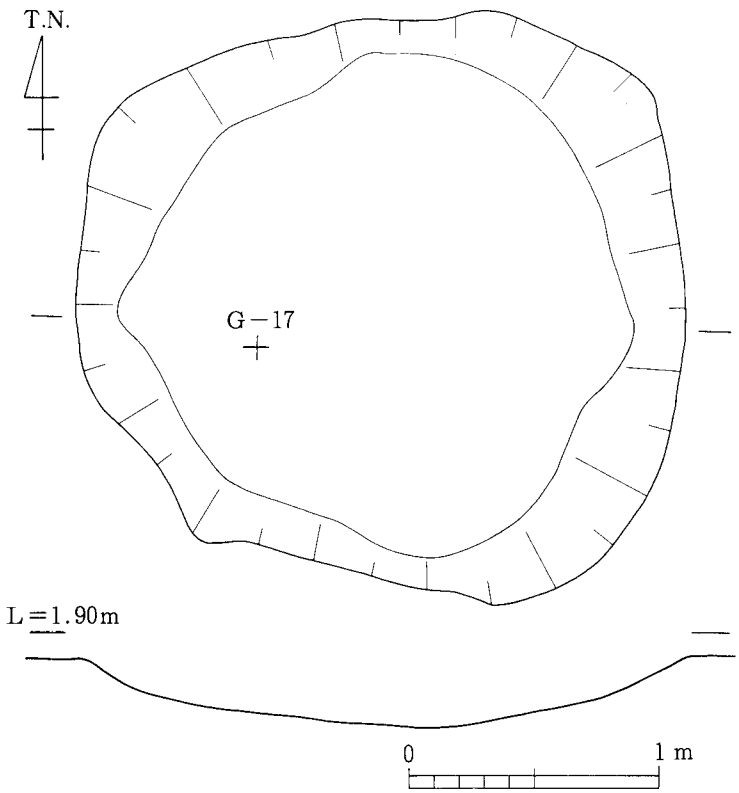
iv H－18区SK01（第66図）

長径1.1m，短径0.7m，深さ0.1～0.15mを測る楕円形を呈する。埋土は黒褐色の中砂である。出土した遺物は，後述する「B」タイプの製塩土器と土師器である。

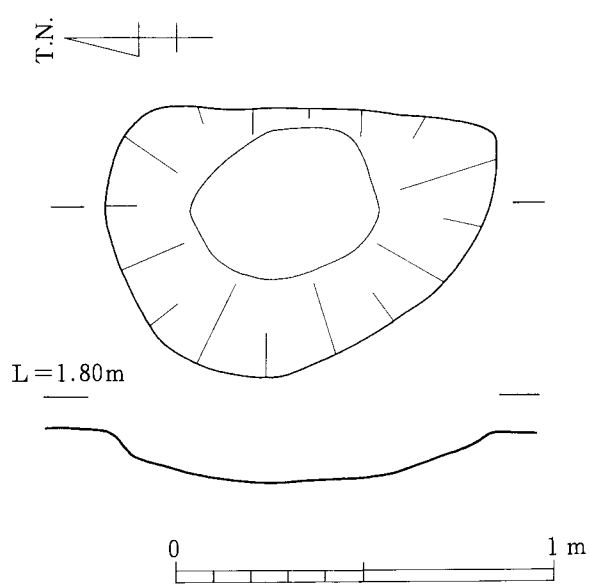
G－18区SK01と近接した位置で検出されているが，切り合いは確認されていない。



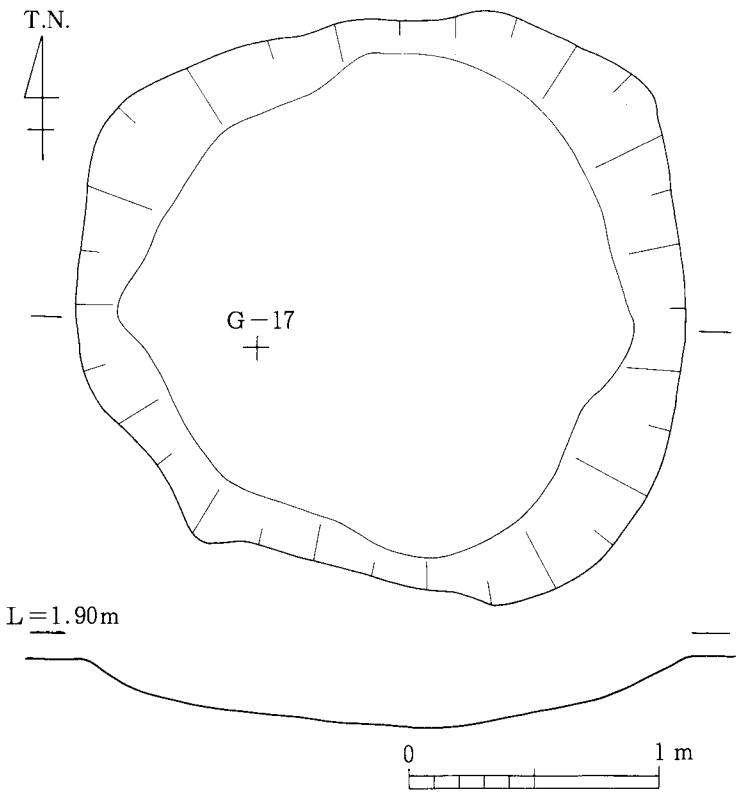
第64図　H－14区SK01実測図



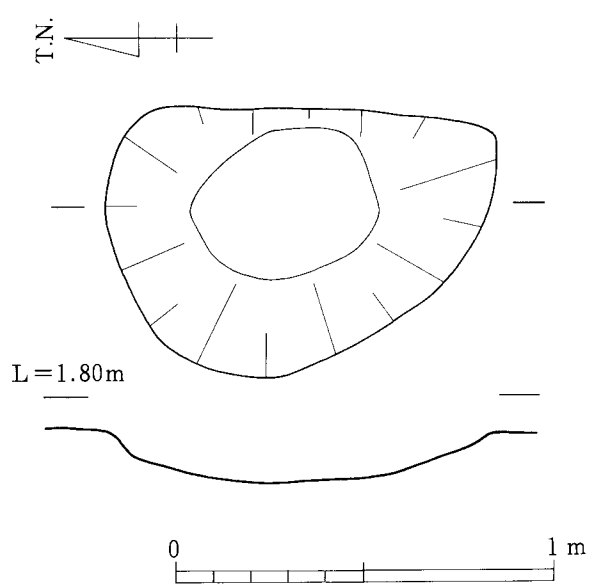
第65図　G－18区SK01実測図



第66図　H－18区SK01実測図



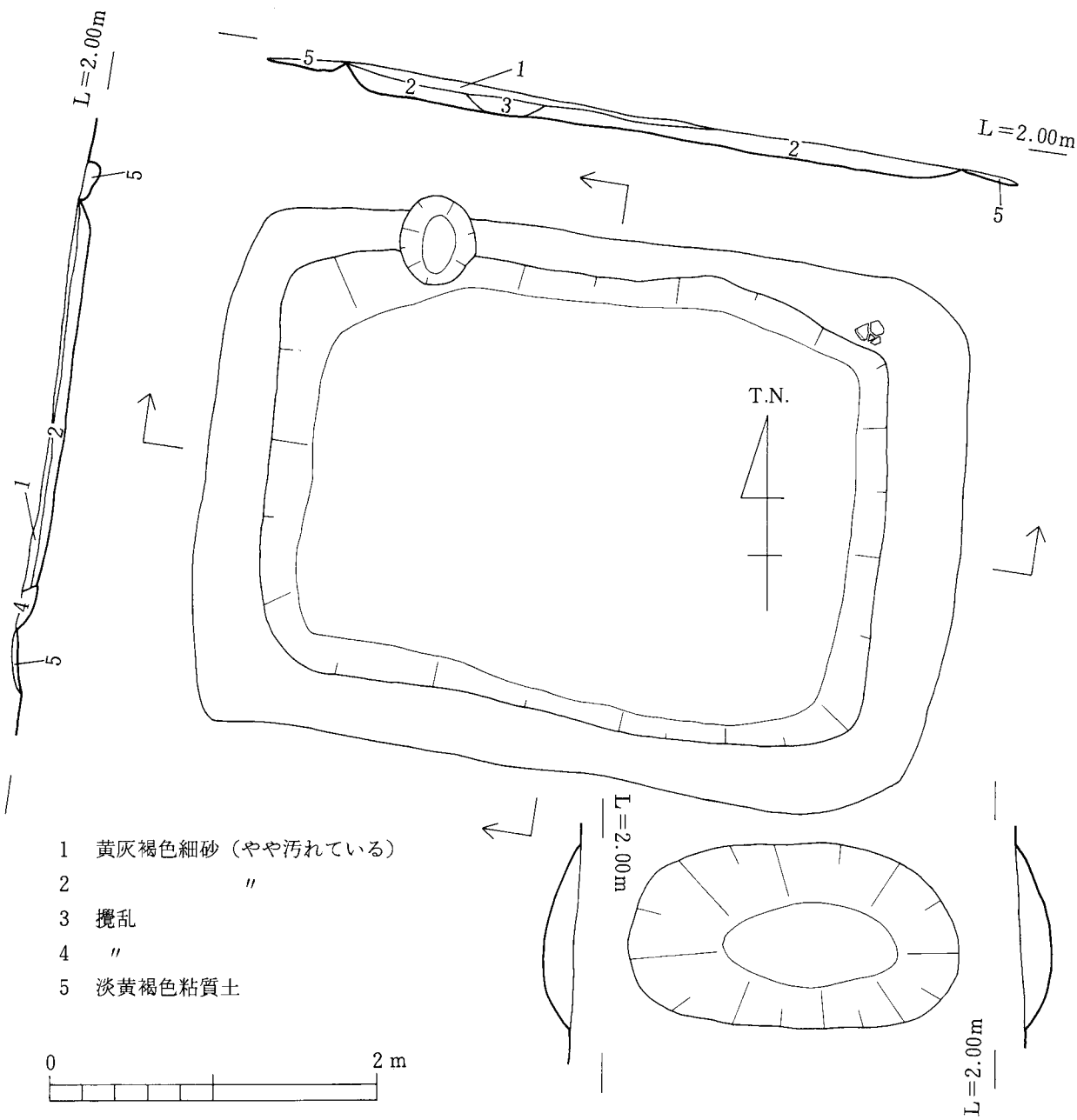
第65図　G－18区SK01実測図



第66図　H－18区SK01実測図

v　G－30区SX01（第67図）

長辺4.6m，短辺3.2m，深さ0.1～0.15mを測る隅丸方形を呈する。土坑は，周囲を0.2～0.3mの幅で厚さ２～５cmの淡黄褐色土が縁どりをしている。埋土は黄灰褐色細砂で形成されており，埋土中から脚台付製塩土器片・厚手丸底製塩土器片・土師器・須恵器・巻貝・砥石等が出土している。出土遺物の年代は５世紀中葉から６世紀後半までの長期間に比定されるが，どの時代に伴う遺構かは定かではない。



第67図　G－30区SX01実測図

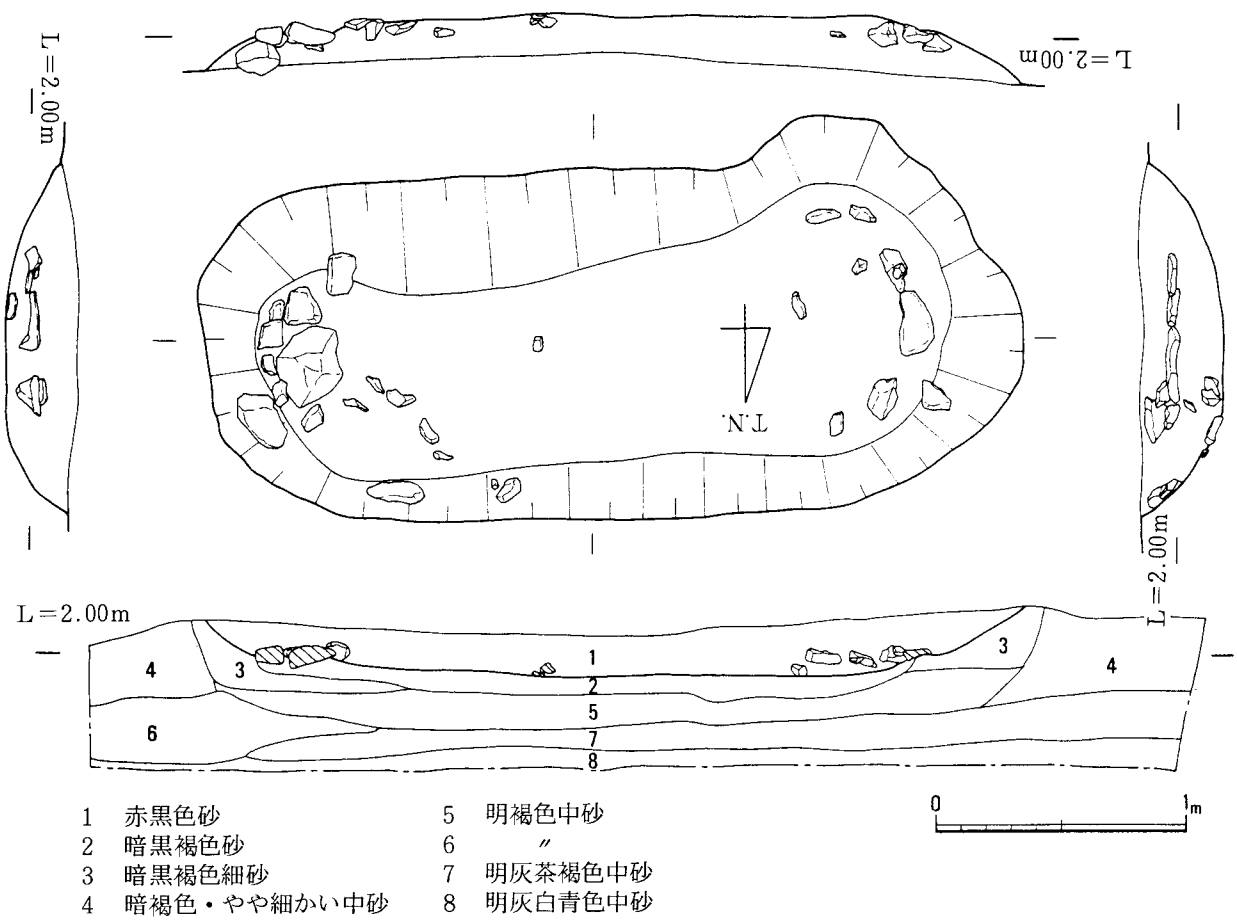
②　製塩炉（第68図）

土坑はＦ－５・６区で検出し，長径3.2m，短径1.5m，深さ0.2～0.3mを測る楕円形を呈する。土坑の周囲は約５cm程度の高さを持つ堤状に盛り上がっており，土坑内底の両端には人頭大～拳

大の石が「人為的」に配置されていた。石材は，その多くが花崗岩であるが，一部にセンリョク岩・ギョウカイ岩・石英ハン岩等も見られる。石の形状は一定せず，その大半が火を受けたように赤変し，一部に製塩土器の吹きこぼれと考えられているのと同様の灰褐色の膜状付着物が認められた。

埋土は赤黒色の有機質土からなり，灰を多く含むものと推定された。この埋土中からは後述するⅢ類の製塩土器のみ検出されている。また土坑上面及び周囲には濃密な製塩土器の包含層が形成されていた。

以上の状況から，検出された土坑は製塩炉と考えられる。



1　赤黒色砂
2　暗黒褐色砂
3　暗黒褐色細砂
4　暗褐色・やや細かい中砂
5　明褐色中砂
6　〃
7　明灰茶褐色中砂
8　明灰白青色中砂

第68図　製塩炉平・断面図

③　G・H－34区土器集中（第69図）

東西3.5m，南北４mの範囲に，破片の状態ではあるが須恵器・土師器・製塩土器が集中して検出された。しかし，掘り込み等は検出されていない。

検出位置は，標高1.4～1.6mを測る，当時の砂洲の先端付近である。

出土した土器は，南西部のものが廃棄状況をとどめると思われるのに対して，北部のものは小片化しているものが多いことから後世の耕作などに伴う若干の移動も推定される。

また出土遺物中に須恵器器台等を含むことから，遺構の性格付けとしては祭祀遺構等と推定される。

④　包含層

古墳時代後期に形成される包含層は，ほとんどが製塩土器で形成されている。今回の調査で検出された製塩土器の包含層は，大浦浜の地形に規制されるように，砂洲の上面から西側の傾斜面にかけて堆積・形成されている。包含層は，大きくは南北２箇所に分布しており，南側が土器だけで構成されるほど濃密な堆積状況を示すのに対して，北側は砂混じりで小破片が多い状態で検出されている。これは後世の耕作に伴う結果とも考えられる。また，北側の包含層の北端には後述する製塩土器Ⅲ段階Ｂ類のみで構成される包含層も検出されているが，Ａ類が大半を占める包含層との間に土層的な区分は出来ていない。

(2)　遺　　物

1)　遺構出土の遺物

①　土坑

ⅰ　Ｈ－14区SK01（「実」第212～第216図）

・下層の遺物（「実」第214～第216図）

製塩土器の器形は，後述（第６章第１節）するように各種のものが出土している。外面に残されるタタキ目は平行タタキが最も多いが，「綾杉」のものも見られる。また一部に無文のものがある。ここでの特筆すべき点としては，Ｂ類中にも綾杉文が認められることである。全体の傾向とも合致してＢ類の出土率は低い。土坑形成年代は土坑底から出土した須恵器杯蓋が，Ⅱ型式第１～２段階[1]に比定されることから，６世紀前半と考えられる。

・上層の遺物（「実」第212～第213図）

上層と下層の年代差を考える上で，製塩土器の器形に注目したが，下層の遺物と比較して，大きく変わる点は認められない。文様構成は下層同様である。ただここで出土しているＢ類は無文である。また120は，その器形から製塩土器に近いものの特異な器形とすることが出来る。上層・下層の土器比較については後述する。

ⅱ　Ｇ－18区SK01（「実」第201図・第219図）

典型的なA$_1$類は出土していない。文様構成は平行タタキ・綾杉文に限られている。246は唯一出土したＢ類である。

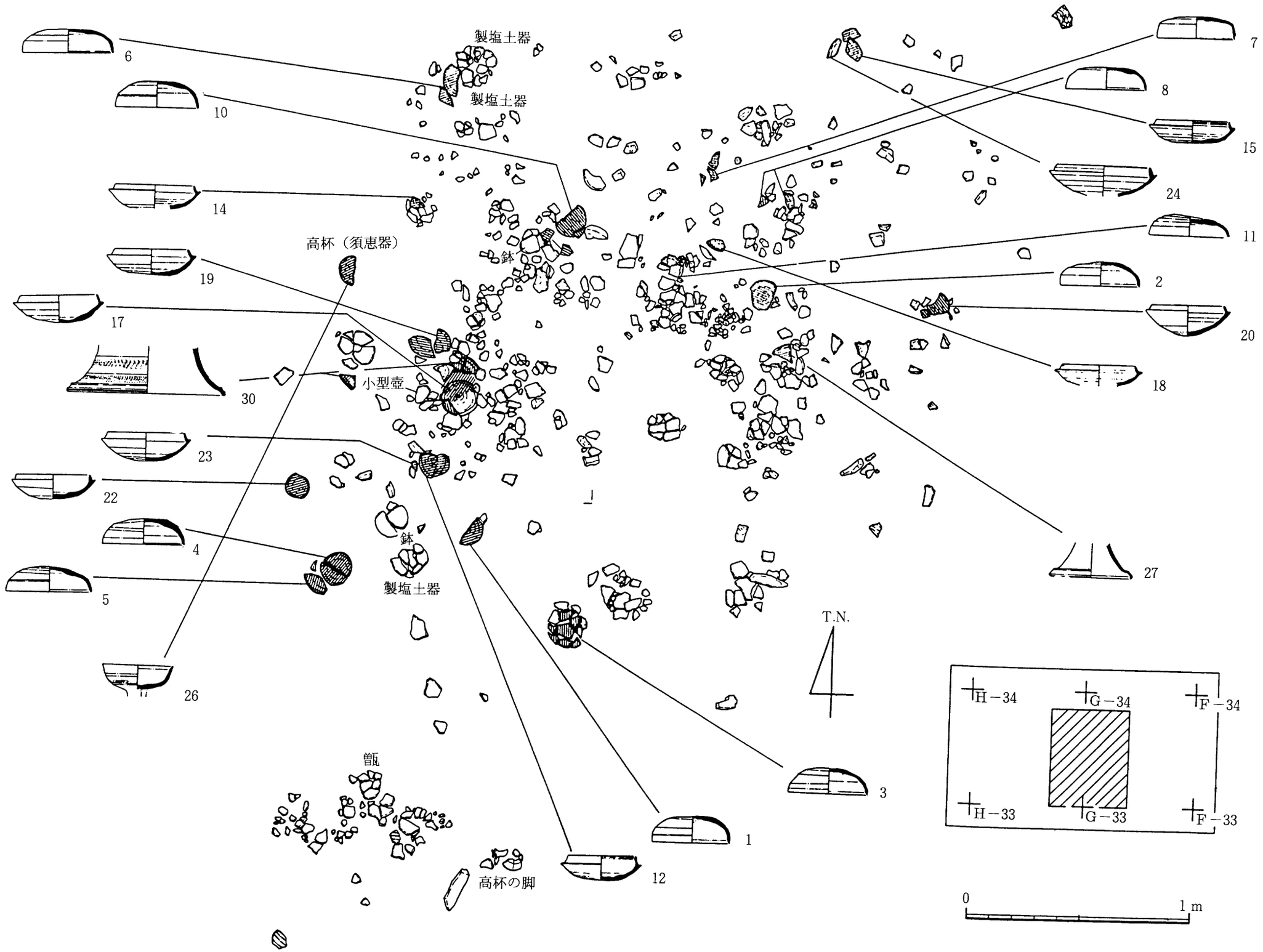
須恵器は，杯蓋・杯身・高杯共にⅡ型式第４～５段階に比定でき，土坑の年代を６世紀後半～末に置くことができる。

ⅲ　Ｈ－18区SK01（「実」第217図）

出土した製塩土器はＢ類のみで構成される。その多くは口縁部が内湾する傾向を示すが，中には220のように端部が外反するものも認められる。217は，土師器の椀である。平底を呈し，口縁部が外反する小形のものである。用途は不明であるが，土器製塩の工程の一部を構成する土器の可能性が高い。

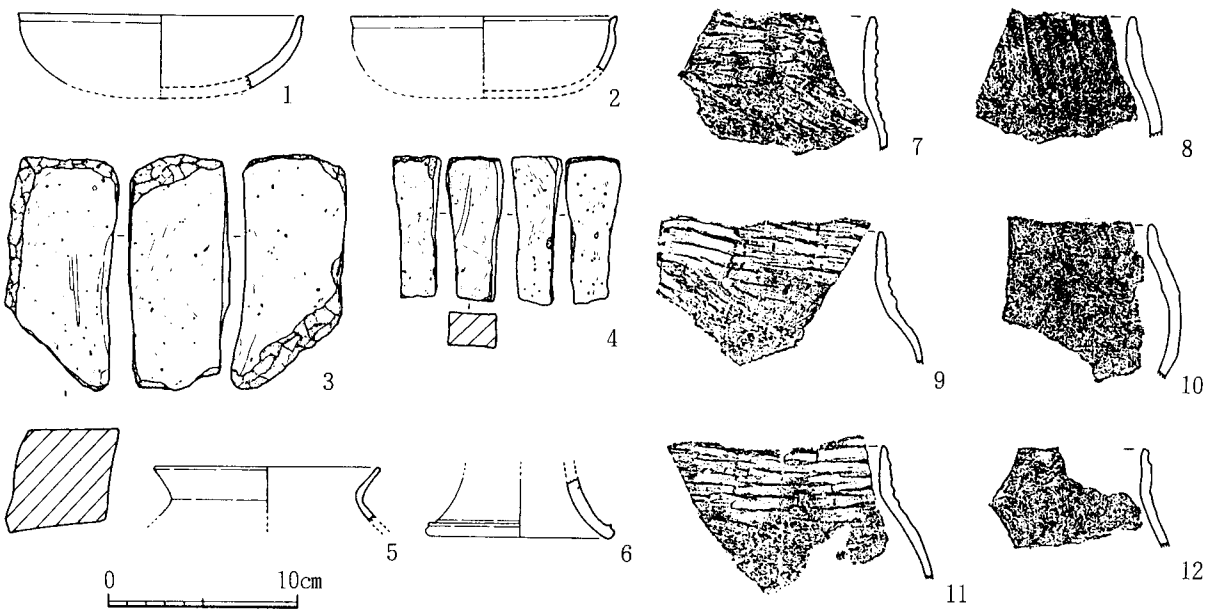
ⅳ　Ｇ－30区SX01（第70図）

遺構の項でも触れたように，時間的に複数の時期の遺物が混入する状況で検出されている。1・2・5・6は，古墳時代前期から中期にかけての遺物と推定されるが，3・4の砥石は時期不明である。



第69図　G・H－34区土器集中箇所実測図

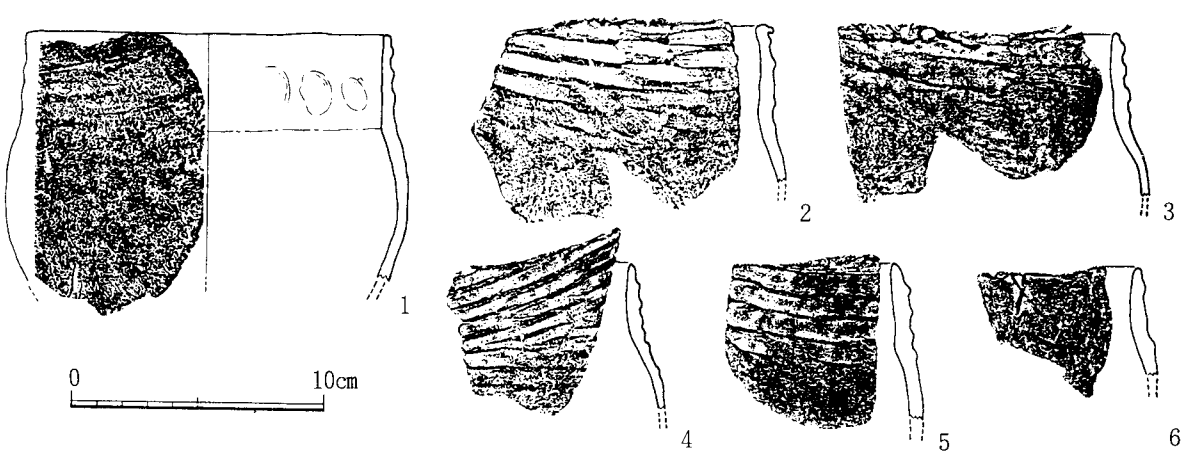
3は黄白色に淡茶褐色の縞が入る石材で，小さな気泡状の孔を有する。現在確認できる3面ともに研磨痕が確認される。4も同質の石材であり，小形の部類に属する。研磨痕は4面ともに確認することができる。7～12は後期の製塩土器である。10のみB類に属する。タタキの文様は平行・綾杉の両者が見られる。



第70図　G－30区SX01出土遺物実測図

v　製塩炉（第71図）

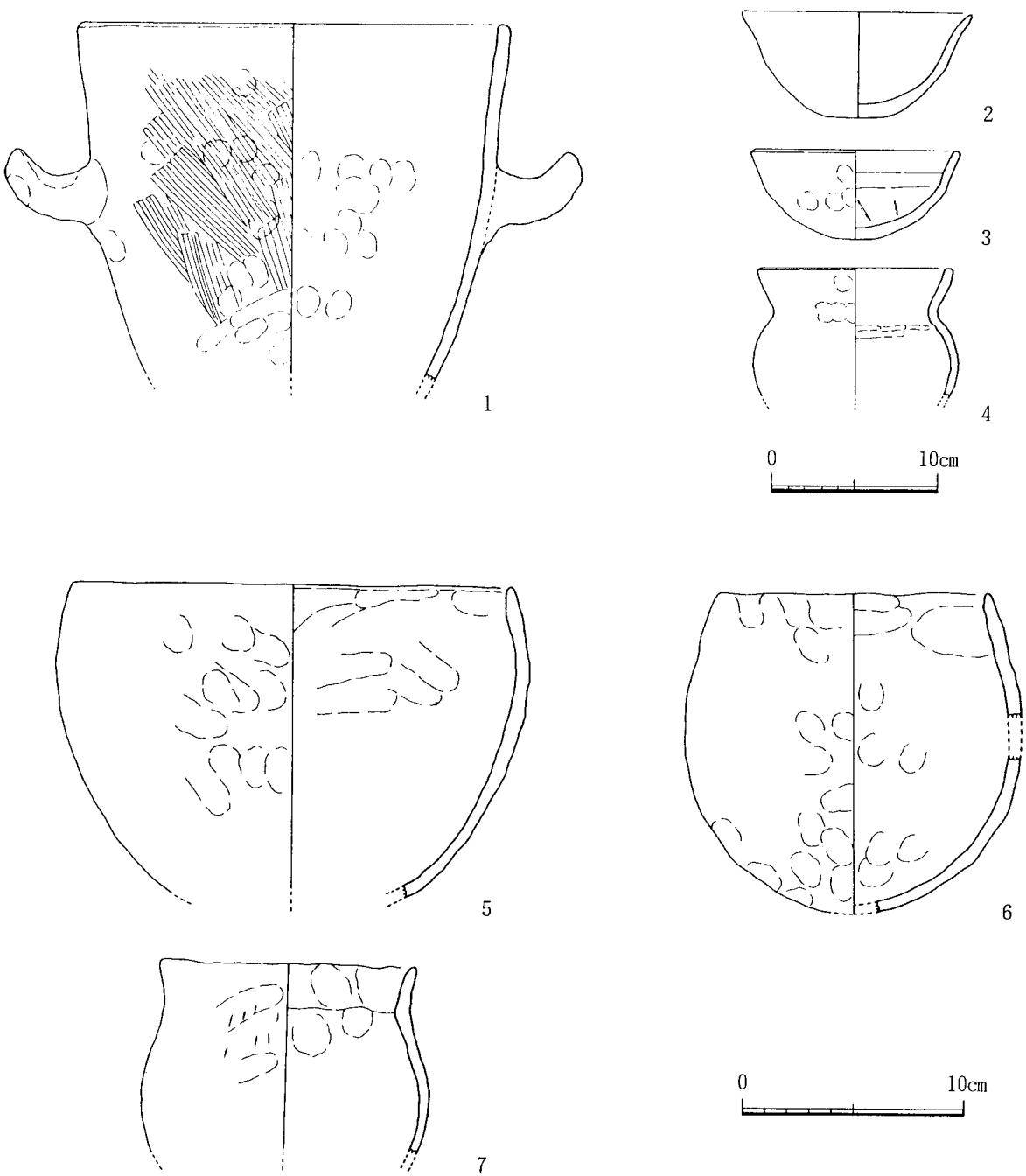
「製塩炉」から出土している土器は，すべてA類に属するものである。文様構成は平行タタキのものが約90%を占め，残りは斜格子文等で構成される。出土遺物の大半に外面の変色・剥落が認められており，二次焼成の痕跡と考えられる。また外面に吹きこぼれと考えている白色の付着物も認められた。1～6は，このうち残存率の高いものを掲載した。全体的にこの時期としては小形の部類に属するものと考えられる。



第71図　製塩炉出土遺物実測図

vi　G・H－34区土器集中（「実」第208図，第72図）

土器集中から出土している須恵器には，杯蓋・杯身・高杯・壺・器台の各器種が見られる。いずれも杯蓋・身が示すⅡ型式第３～４段階に比定される。この中で特筆される事柄として器台の出土がある。器台は完形に復元できたものはないが，脚台の端部片が２点出土していることから，本来２個体分が廃棄されたことが伺われる。また器台は，通常の遺構から出土した例が見当たらず，このことと，土器集中という状況から当該遺構が「祭祀」関連の遺構である可能性が高いと考えている。



第72図　G・H－34区土器集中箇所出土遺物実測図

次に土師器であるが，甑・鉢・壺が出土している。1の甑は外面に粗い刷毛目を施している。底部は欠損している。2･3は鉢である。2は平底ぎみで外反する口縁部を有する。3は丸底で口縁部は外傾する直線的な端部を有する。4は小形丸底壺の形状を有する。口縁部は短く内湾ぎみに立ち上がる。出土している器種からは時期判定は困難である。

製塩土器は，A・B類ともに無文である。通常の製塩土器とはやや趣が異なるが，用いられ方による形態差とも考えられる。これらを製塩土器と捉えた理由として，色調・胎土が製塩土器に共通すること，二次焼成が認められること，調整が指ナデであることなど，製塩土器に共通する部分が多いことが上げられる。

2) 包含層出土の遺物

① 須恵器（「実」第193図～第200図，同第202～第207図）

包含層から出土している須恵器には，杯蓋を初めとして各種のものが認められる。

杯蓋には第Ⅰ型式に属するものが数点あるが，その他の多くは6世紀後半から7世紀前半に属するものである。他の器種も概ねこれと同時期と考えられる。

杯身のうち，55・56は第Ⅰ型式第2段階頃に比定される資料である。55の底部には不定方向のヘラ削りが認められ，第1段階に見られる手法とすることもできるが，器形から第2段階としておく。

「実」第198図に掲載した器台は，脚部の形状が先に触れたG・H－34区土器集中で出土した資料と異なり，半球状に膨らんでいる。これらの資料の出土は，同様の祭祀関連遺構が他にも存在した可能性を示唆するものである。

図化した以外に，第Ⅰ型式第1段階に属する甕の口縁部片も出土している。他の同一時期の資料共々前節で取り上げた時期の後半に重複する可能性が高いものである。

② 製塩土器（「実」第218図，同第220図～第228図）

古墳時代後期の製塩土器については，第6章第1節で年代等について検討するため，ここでは資料の提示のみにとどめたい。

③ 師楽的土師器（「実」第191図・第192図）

師楽的土師器については，「作り，土質こそ，師楽式土器と同一でありながら，一般生活に用いられる土師器類の出土状況と同じ状況で存在[2]」するとの指摘がある。ここでも，通常の土師器に近い形態を持ちながら，その胎土・製作方法が製塩土器と同じであることに留意し，「師楽的土師器」の名称を用いた。

甕形土器については，「実」第191図－1・第192図－1･2･3の4点がある。第191図－1は，口縁部径が体部最大径より大きく，外上方に直線的に延びる口縁部を有する。第192図－1は，口縁部径が体部最大径より小さく，前者より口縁部が上方に延びるものである。第192図－2は，口縁部が内湾ぎみに上方に延びる。第192図－3は，口縁部が短く外上方に延びるものである。このように，出土した甕形土器はすべて形態差が認められ，類型化することが出来なかった。

次に高杯についてであるが，6類に分類することができる。

A類　小形の脚部を有し，「八」の字形に裾が広がるものである。

B類　A類よりさらに低脚で「ハ」の字形に裾が広がるものである。

C類　通常の脚部を有し，「八」の字形に裾が広がるものである。

D類　やや長脚の部類に属し，他のものに比べて明瞭に器壁が薄く，脚部中位下で裾が大きく屈曲するものである。

E類　長脚であるが，筒部が中実であり器壁も厚いため重量がある。

F類　E類に近いが，脚端が広がらない。

形態的には古式土師器等に近似した物も見受けられるが，胎土・調整から歴然とした差が認められる。

「実」第191図－10の鉢形土器は，「実」第217図－217と同一形態を有し，この点からは「師楽的土師器」とするよりも，土器製塩に係わる土器として位置付けるのが妥当であろう。

以上「師楽的土師器」について概略を記したが，県内でこれと同様の土器の出土はあまり確認されておらず，今後の資料の増加を待って，当時の専業集団の生活を解明する方向で検討したい。

④　船形土製品（「実」第230図）

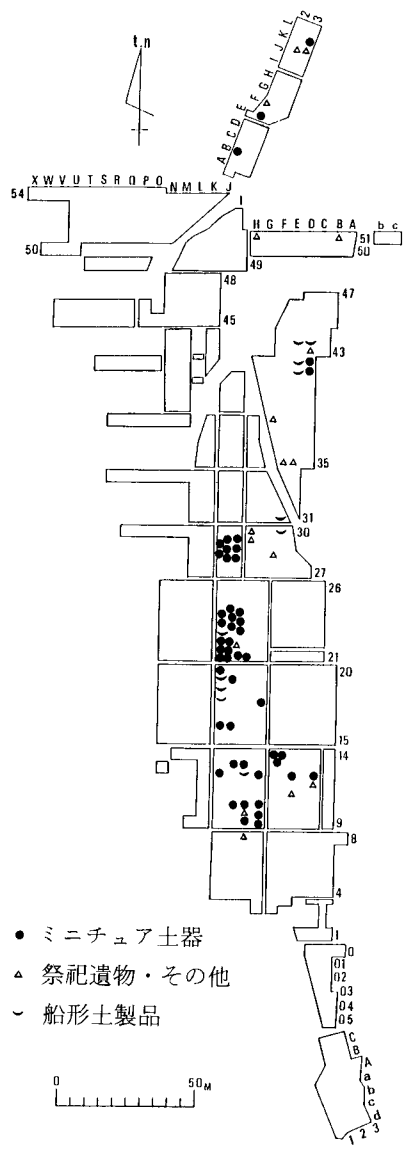
船形土製品は13点出土した。いずれも素焼きの土師質のもので，各遺物の計測値は観察表にまとめている。形態から見ると，船首のみが立ち上がるものと，船首，船尾ともに立ち上がる所謂ゴンドラ型との2種類に区分でき，前者のものは第230図の3･4で，後者は1･2である。他の9点は破片のため区分できない。立ち上がり部分に穿孔のあるものが5点ある。この孔は懸垂用と推定される。8にはヘラによるものと思われる沈線によって文様が描かれている。

包含層出土のものばかりで，時期を特定できるものは少ないが，1･2は布留式土器併行期の土器と供伴しているため，この時期とみなしてよいだろう。3は攪乱を受けているが古墳時代後期の製塩土器包含層から出土しており，他のものも後期の遺物の多い地区から出土しているため，ほぼ同時期と考えて良かろう。

⑤　有孔円板・石製模造品ほか（「実」第231図）

ミニチュア土器，船形土製品の他，祭祀関係と思われる遺物が出土した。石製の鏡の模造品3点，有孔円板4点，土玉2点，勾玉4点，管玉1点，耳環1点，竈形1点，不明土製品3点等である。

このほかに砥石2点と滑石製紡錘車が2点出土している。



第73図　祭祀関係遺物出土分布図

(3) 小　結

古墳時代後期の遺構は，大浦浜の浜堤部を中心に形成されている。浜堤部上では土器製塩に係わる土坑等の遺構が検出され，これより西側には明瞭な製塩土器の包含層が形成されている。この包含層は，本来廃棄された状況をとどめている

ものと推定されるが，これが南北に明瞭に分離されることが，時間差として捉えられるものか，集団差として捉えるべきものかは結論が出ていない。土坑についても，単に土器の廃棄として捉えられず，意味を持ったものかもしくは工程差による廃棄状況の差として捉え得るかは，今後の課題となる。

検出された遺構が，大きくは生産の痕跡及び祭祀に関連するものと考えられることは前述した通りであるが，この痕跡を残した集団の生活を物語る遺構を今回の調査では明確にすることが出来なかった。ただ，大浦浜の西南に位置する通称「タテハ」丘陵上には2基の横穴式石室を主体部に持つ古墳が所在し，位置からしても土器製塩を行っていた集団の墓であることはまず異論の無いところである。著名な「喜兵衛島遺跡」においても，同様に集団の生活跡が明瞭にはなり得ていないことを考えると，土器製塩を行った集団そのものの性格の一端を示すものとも理解し得る。これについては，今後の検討課題としたい。

この節で取り扱った時期が，大浦浜遺跡における土器製塩のピークであることは，出土している土器量からも明らかであるが，全体の工程を明確にできるほどの遺構も検出されておらず，問題点の提示のみで終わった。今後の類例調査の中で残されている多くの問題について検討を重ねたい。

注

(1) 中村　浩「大野池，光明池地区の須恵器編年に関する諸問題」『陶邑Ⅰ』大阪府教育委員会　1976
以下同様

(2) 間壁忠彦ほか「広江・浜遺跡」『倉敷考古館研究集報　第14号』倉敷考古館　1979

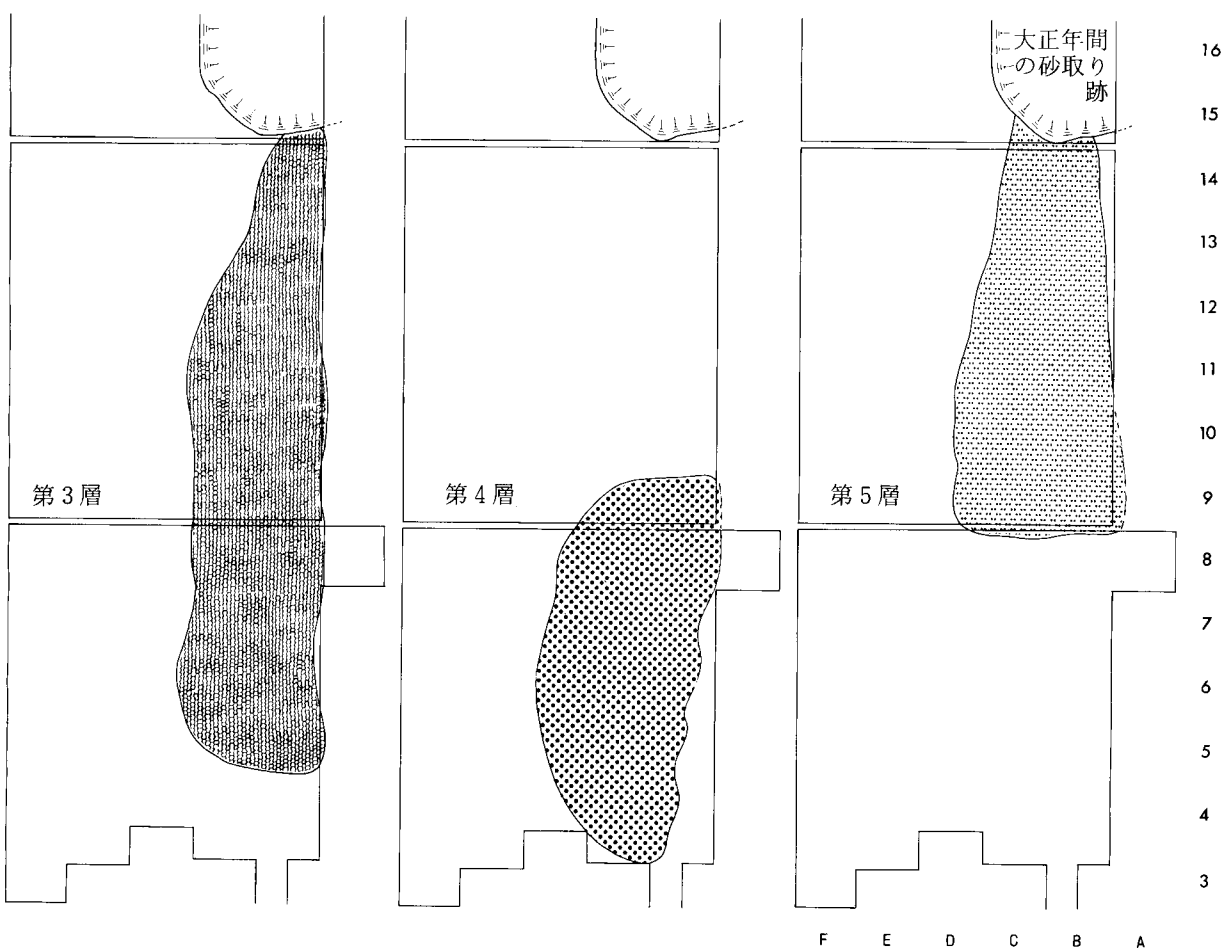
(3) a 喜兵衛島調査団「謎の師楽式」『歴史評論』1956．1月号
b 近藤義郎編『日本塩業体系　史料編考古』　日本専売公社　1978

第５節　奈良時代～平安時代前半の遺構・遺物

本節では奈良～平安時代前半の遺構，遺物について報告する。ここで言う奈良～平安時代前半とは考古学的な年代観では７世紀から10世紀までを指している。このような時代区分をとる理由は，本遺跡が形成された主要因である製塩活動が７世紀を境に変化し，９～10世紀には弥生時代以来の土器製塩が終焉すると考えられるためである。

具体的に遺構等の状況を見ると，６世紀代の製塩土器廃棄場所（包含層）は砂洲の西側であるのに対し，７世紀に入ると廃棄場所は砂洲の東側に移り，廃棄量もかなり減少する。遺物の面から見ると，製塩土器は器壁が薄くなり，容量が約４分の１に減っており，製塩法に何らかの変化があったことが推定できるのである。また，遺物包含層の内容にも変化が見られ，製塩土器だけの堆積層と呼ぶよりは，土師器，須恵器の量が増えた一般的な包含層と呼んだ方がよい状況になる。さらに土錘や蛸壺等の漁具の出土が目立つようになるのも特徴である。以上のような遺跡の変化から１つの時代設定を行った。

この時代の遺構は浜の南部で集中して検出された。これはこの地域が遺構の残存状態が良かったことが第１に上げられるが，他地区の包含層にはこの時代の遺物があまり包含されていなかっ



第74図　奈良～平安時代前半の遺物包含層範囲図

たことを考えると，この時代の遺跡はこの地区にほぼ限定されて営まれていたと考えて良かろう。遺跡南西側はこの時代の生活面の地盤が古墳時代の製塩土器堆積層となっており，遺構は土器層を掘り込んで作られていた可能性が強く，地山におよばない深さの遺構は検出出来ていない可能性が強い。

遺跡南東側はこの時代の包含層が約600㎡に亙り厚く形成されていた。第３章で説明したように，包含層は３層に区分できる。各層の範囲を示したものが第74図である。第３層は最も広く南北50m，東西10mの範囲で，遺物量も最も多い。奈良時代後半～平安時代の形成である。上部が中世の遺構によって相当攪乱を受けていたため，上下２層に分けて遺物取り上げを行った。遺構は下層上面で検出した。

第４層は南北30m，東西20mの範囲に広がり，厚さ20～30cmの締まった土で形成されており，炭酸カルシュウム塊の散布が多く認められた。上面において遺構を検出した。この層の形成はほぼ８世紀代とみてよかろう。

第５層は南北30m，東西20mの範囲に広がり，砂層に製塩土器が多く包含されていた。遺構状のものは層上面や層除去後に検出されたが，明確に遺構と認めうるものは無かった。

(1) 遺　構

検出された遺構は土坑，柱穴，溝状遺構，焼土などで，発掘面積の割りには遺構数は少ない。遺構配置図では上面，下面に分けて図化しているが，これは主に検出面の相対的な上下関係を示しているにすぎない。以下に，各遺構の説明をする。

① SM01（「実」第245図・第249図・第250図）

Ｃ－８区北部で検出した長方形の浅い土坑である。遺構北端は土層観察用の畔にかかっており，調査最終段階に畔を除去し残りの遺構輪郭の検出に努めたが明確なラインは検出し得なかった。第３層下層を掘り込んでいるが，正確な掘り込み面は確認できなかった。規模は長辺3.7～4.2m，短辺は2.8～3.0mの南北に長い長方形で，深さは20～30cmある。埋土は３層に区分できる。上層は炭酸カルシュウムの凝固したもので黄灰色を呈す。中層も同様に炭酸カルシュウムが凝固したもので灰白色を呈す。この炭酸カルシュウム層は約20cmの厚さがあり，土坑の中央部分で厚く検出された。下層は暗黄土色砂層で，炭酸カルシュウムと砂が混じった層である。これは約10cmの厚さがある。出土遺物はいずれの層にも製塩土器の破片が多量に包含されており，中層からは炭が検出された。下層からは完形の須恵器杯身（「実」第249図２），須恵器甕（「実」第249図19）や完形に復元できる製塩土器（「実」第250図１）が出土した。他に土師器甕・皿（「実」第249図1･3）も出土した。遺構の時期は須恵器杯身からみて９世紀前半とみてよいだろう。性格は下層からは完形品が多いことや，第４層のように炭酸カルシウムが面ではなく，土坑に捨てられていることから見て，この遺構は製塩作業に伴う特殊な土坑であったと考えてよいと思われる。

② SM02（「実」第238図）

Ｄ－７区北側で検出した不定形な炭酸カルシュウム混じりの暗茶褐色を呈す砂の広がりである。南北の長さは約2.2m，東西幅は60～90cmあり，厚さは約15cmある。時期，性格は不明である。この砂の西側には径約１m，厚さ約20cmの焼けた粘土の固まりがある。これはSM02の上に乗っていることや粘土である点から見て中世のものであろう。

③　SX18（「実」第236図）

Ｃ－７区第３層上面で検出した土坑状の遺構である。上面プランは径1.2ｍの円形で中央はやや窪み，約15㎝の幅をもつ縁が巡るような形状である。この縁状の部分は薄い緑白色を呈し砂が固まったものである。断面を観察すると緑白色の砂が固まった部分は深さ約30㎝下まで広がっており，底部には固まりはなかった。周囲壁面の厚みは５～10㎝である。窪んだ部分には第３層と同一の土層が堆積しており，製塩土器の破片が多く出土した。

④　Ｂ－６区SK01（「実」第234図・第249図・第259図）

Ｂ－６区で検出した細長い不定形な土坑である。長軸約3.6ｍ，短軸約1.8ｍで，深さは約35㎝ある。埋土は２層に分かれ，上層は茶褐色砂質土で，下層は黒白褐色砂質土である。出土遺物は製塩土器の破片や土師器真蛸壺（「実」第249図5･6），土師器杯（同図７），土師器甕（同図８），土師器羽釜（同図９）等の破片の他，神功開宝１点（「実」第259図４）が出土した。

⑤　SX20（「実」第239図）

Ｂ－６区で検出した円形の土坑である。径は約1.4ｍで，上面形は二重に粘土が巡るものである。外側は淡黄白色の粘土が使われ，粘土幅は30㎝前後あったと思われる。内側は濃黄色の粘土が使われており，粘土幅は10～25㎝ある。断面形を見ると，外側の粘土は上部のみに巡っており，厚みは約25㎝ある。内側の粘土は下部にまで続き，土坑の壁を構成している。土坑の深さは65㎝あり，内部は淡黄色・白色・黄褐色・黄色の粘土が互層の状態で堆積していた。出土遺物はない。本遺跡で奈良・平安時代の遺構で粘土を多量に使用している遺構はなく，次節で報告するように中世に多いが，それらとも構造が違い過ぎ，時代，性格とも全く不明である。

⑥　Ｂ－３区SK01（「実」第241図）

Ｂ－３区北西で検出した土坑状の遺構である。径約1.5ｍ，深さ55㎝の円形土坑で，土坑の上面の周囲には白色を呈する砂の凝固物が広がっている。土坑内は褐色の砂が堆積しており，中には花崗岩や粘土状のブロックがはいっていた。

⑦　Ｂ－４区SD01（「実」第237図）

Ｂ－４区中央で検出した溝状遺構である。検出した長さは約４ｍで，幅は広いところで約1.5ｍである。深さは約20㎝である。出土遺物は製塩土器片など少量である。遺構の東肩付近からは，長年大宝（「実」第259図９）が１点出土した。性格については不明である。

⑧　Ｃ－４区SK11（「実」第240図・第249図）

Ｃ－４区北西端で第３層下層除去後検出された，浅いほぼ円形の土坑である。大きさは長軸2.7ｍ，短軸2.3ｍで，深さは20～30㎝ある。埋土は南北で異なり，北側は３層に分かれ，南は１層のみである。北側の上層は炭酸カルシウムを含む黒褐色砂層で，中層は茶褐色砂層，下層は暗褐色砂層である。南側は明白茶色砂の単一層である。出土遺物は北側の上・中層を中心に製塩土器（「実」第251図１～27）が多く出土した。また，土師器杯・椀・甕（「実」第249図10～12）や巻き貝等が出土した。出土遺物からみてこの土坑は製塩土器等の廃棄土坑と見て良かろう。

⑨　Ｃ－５区SK13（「実」第251図）

Ｃ－５区東側，第４層上面で検出した。東西90㎝，南北70㎝，深さ10㎝の浅い楕円形の土坑である。埋土は第３層と同じで，炭酸カルシウムが多く付着した製塩土器（「実」第251図28～33）が多数出土した。

⑩　D－6区SM05（「実」第242図・第249図）

D－6区南部で検出した土坑である。上面プラン検出時は不定形な広がりであったが発掘の結果2つの土坑が切りあっていることが判明した。大きい土坑は長軸約3m，短軸1.8mあり，小さい土坑は長軸約2m，短軸1.2mあり，深さは共に20～30cmある。埋土は砂混じりの炭酸カルシュウム塊である。出土遺物は製塩土器片のほか土師器甕や須恵器杯蓋片（「実」第249図14・17・18）が出土した。

⑪　SX21（「実」第243図）

C－6区で，第4層を掘り込んで作られた円形の土坑である。径1.5m，深さ30～40cmで，摺鉢状を呈す。土坑の壁面は炭酸カルシュウムによって砂が厚さ5～8cmに固化していた。埋土にも炭酸カルシュウムによって固まった砂が入っていた。遺物は製塩土器等の細片が出土した。SX18とよく似ている。

⑫　SX26（「実」第235図・第249図）

C－6区南端の第5層上面で確認された焼土面である。西側の一部は後世の攪乱を受けているが，大きさを復元すると長軸1m，短軸0.7mの楕円形になる。火が及んでいる深さは約12cmで砂が赤褐色を呈している。周囲に灰，炭等は検出されなかったが，焼土上面から土師器甕（「実」第249図16）の破片が出土した。

⑬　C－8区SK01（「実」第244図・第249図）

C－8区からB－8区にかけて検出した楕円形の土坑である。長軸は3.15m，短軸は3.0mで，深さは50cmある。底部から土師器椀（「実」第249図15）や土師器片，多数の貝殻，炭酸カルシュウム塊などが多数出土した。

⑭　鯨骨出土状態（「実」第246図）

B－8～9区の第5層上面で検出された。約6×4mの範囲に下顎骨，第1頸椎，肩甲骨，肋骨や骨片数点が散在していた。

第1頸椎は最も南に位置し据え置かれたような状態で検出された。大きさは幅32cmで厚みは最大23cmである。

この北側に下顎骨が南北に長く位置する。大きさは長さ2.36m，幅36cmで，歯はない。

下顎骨の北東約1mの位置に，肋骨2本と肩甲骨がある。肋骨は長いほうが80cm・幅24cmあり，短いほうが68cm・幅12cmある。

肩甲骨は長さ1.04m，幅68cmあり，幅広いものである。

以上が骨の概要であるが，下顎骨には歯が無いことや肩甲骨が幅広いことなどは，ヒゲ鯨類の特徴とされているため，これらの骨もこの類に属するものとみてよいだろう。骨は全骨格はなく，骨の近くから長さ20cmばかりの楔状鉄器が出土していることなどから，この場で解体されたものと推定される。

⑮　柱穴群・SB01（「実」第247図・第248図）

H～J－5～8区の地山の砂層上面で検出した。地山の上には古墳時代後期の製塩土器が厚く堆積しており，この堆積層の上面からの掘り込みと考えられる。

検出できた柱穴は34穴で，出土遺物は土師器，黒色土器等の細片が少量入っていた。

柱穴群は，東側に南北方向に3列柱穴列があり，仮に東からA，B，C列と呼ぶ。A列は7穴からなり，北から5穴までは柱間が2.2mとほぼ均一であるが，南の2穴は柱間が揃わない。B列

は6穴からなり，北から3穴までの柱間は2.2mで，3穴目から6穴目までは柱間がほぼ同じで約2.9mある。C列はB列の柱穴西側に接するように位置し，4穴からなる。B列の4穴目までと対になるとみてよいと思われる。これらの西側に1間×2間の建物を復元した。桁行4.2m，梁行1.8mである。

柱穴列や掘立柱建物跡は遺跡の南西隅に位置し，南と西は丘陵が迫っている。柱穴列を建物に復元できるとすると，南北に細長い建物で，桁が海岸線と平行し，建物の前は広い砂浜が広がっていることになり，倉庫のような性格を想定してよいのかも知れない。

(2) 遺　物

この時代の遺物は須恵器，土師器，黒色土器，製塩土器，奈良三彩，緑釉陶器，土錘，蛸壺，銅製品，皇朝十二銭，鉄製品，動物遺存体等が出土した。出土位置は遺跡南東部の包含層からのものが大半を占め，遺構出土のものは少ない。量的には製塩土器が圧倒的に多く，次いで土錘，蛸壺，須恵器，土師器の順になる。製塩土器，土錘，飯蛸壺を除けば図化できるものはほとんど図化した。

① 須恵器（「実」第252図）

この時期の須恵器はB～D－4～15区の第3～5層と南端地区から主に出土した。出土量は整理用コンテナ2箱分ぐらいである。器種は杯・皿・高杯・甕などで、杯蓋・杯身は、破片から図上復元したものが多い。

ここでは、おおむね7世紀以降のものを集めて図化している。1～6は、古墳時代以来の杯蓋・杯身で、3はD－13区第5層から出土したもので、製塩土器Ⅳ類の年代観の根拠となるものである。7～29は、つまみ付きの杯蓋である。30～53・59は高台付杯身である。51・59の高台は糸切り底で、この種のものは、この2点のみである。67～71は皿で、杯に比べると皿は量的に少ない。

② 土師器（「実」第254図・第255図、「写」図版303・304）

この時代の土師器で杯・皿等の供膳形態のものは、整理用コンテナに1箱と壺・甕類が整理用コンテナ2箱分位出土した。前者は細片が多く、図上復元して図化可能なものはほとんど第254図に示した。1～13は皿で、14～25は杯である。26～28は椀で、29～38は底部高台部を集めたものである。器種にかかわらず色調は赤褐色を呈し、胎土は良選されており、焼成も良好である。

壺・甕類は第255図1～15に示した。供膳形態のものに比べると概して雑なつくりで、胎土は砂粒が多く、体部外面は粗いハケ調整で、色調は白っぽい黄褐色を呈するものが多い。

③ 黒色土器（「実」第253図、「写」図版303・305）

黒色土器の出土量は整理用コンテナ1箱に満たない量で、完形品に復元できるものはなく、細片の出土が多い。器種的には椀、皿が多く、杯は僅かである。何れも内面が黒くいぶされたA類ばかりで、外面は赤褐色を呈し、胎土は木目細かく良選されたものである。また外面の色調が灰茶色の古代末～中世の黒色土器の出土は僅かしかない。「実」第253図に図上復元した実測図を掲げている。1は高台付の皿である。3は杯で、内面は細いヘラミガキがなされている。この2点が全体を復元できたもので、他のものは破片で全体がわからない。8は高台が他のものに比べ小さい。12は焼成不良で白黄色を呈す。

④　製塩土器（第75図～第77図，「実」第250図・第251図・第260図～第268図）

浜南東部の奈良・平安時代の包含層から多量の製塩土器が出土した。これを層位別，タタキ目の有無，形態等で模式的に分類すると次のようになる。

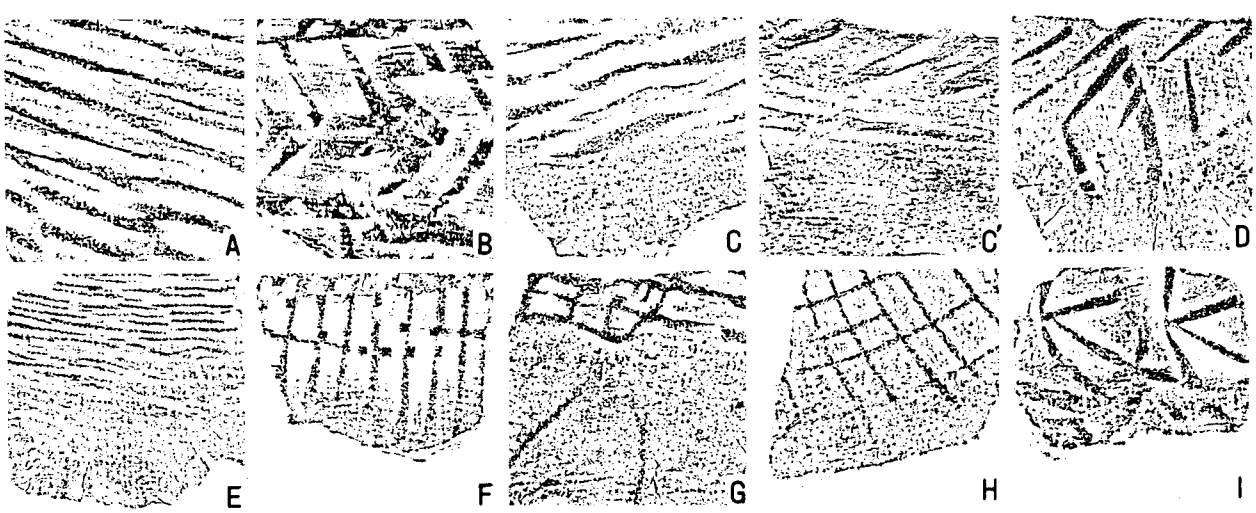
出　土　層　位	タタキ，無文	器形	器厚	底部	型　　式
第５層出土土器	タタキ目	大形	厚手	丸底	Ⅳ－１類
		小形	薄手		Ⅳ－２類
	無　　文				Ⅳ－３類
第４層出土土器	タタキ目 無　　文			尖底	Ⅳ・Ⅴ類
第３層出土土器	無　　文				Ⅴ　　類

ａ．第５層出土製塩土器

第５層出土の製塩土器は，整理用コンテナで15箱前後出土した。口縁部のタタキ目の有無で大きく２つに分類出来る。タタキ目のあるものはタタキ目文様により，さらに第75図に示したとおりＡ～Ｉの10種類に細分できる。

約３㎝程度の破片を抽出して出土量の割合を見たものが，第76図の円グラフである。量的には無文が多く，タタキ目のあるものでは，Ａ・Ｃ・Ｃ′・Ｄ・Ｇがほぼ同量で，次いでＥ・Ｂの順になる。まず，タタキ目の土器から説明しよう。

Ａ――平行線のタタキ目で，凸部の間隔が１㎝前後で，凹凸が大きい。古墳時代後期のものに近似しているが，それに比べ器壁が薄く，よく二次焼成をうけている。概報では平行軸を繋ぐ縦方向の軸の有無でさらに二分したが，本報告では同一に扱った。「実」第263図１～19がこれである。



第75図　第５層出土製塩土器タタキ目分類図

B――矢羽根状のタタキ目である。凹凸が大きく，器壁は厚く，よく二次焼成を受けている。同図20～40がこれである。

C――Aに似た平行線タタキであるが，Aに比べ凸部の間隔が７㎜前後と短く，凹凸が少なく，器壁が薄い。同図41～50がこれである。

C'――平行線タタキに似ているが，凸線がA，C類のように長く伸びず短く，途切れ途切れになっている。同図51～60がこれである。

D――「く」の字形のタタキ目で，凸部の幅は２～３㎜で，盛り上がりも１㎜程度で低い。同図61～69がこれである。

E――ハケ目状のタタキで，細い条線状のタタキが口縁に平行もしくは右上がりに施されている。同図70～80がこれである。

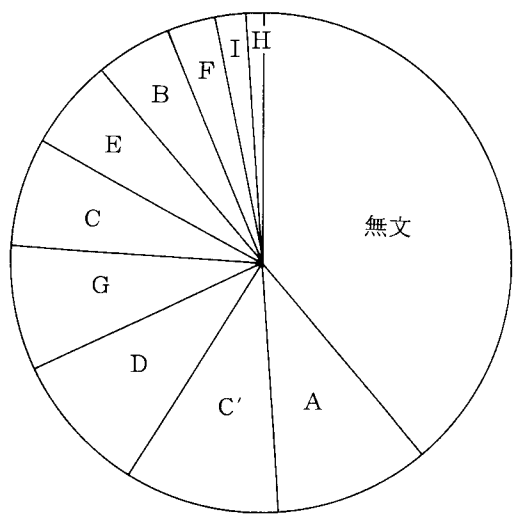
F――方形区画状のタタキ目である。同図81～96がこれであるが，81～91は正方形が連なるものであるが，その他は長方形のものである。

G――F類に似ているが，方形区画のタタキが連続せず不整形なものを集めた。同図97～107がこれである。

H――格子目状のタタキである。同図108～119がこれである。

I――A～H類に含まれないタタキを集めた。同図120～129がこれであるが，121はG類，123はC類，125はF類，128はH類に似ている。

以上が，タタキ目文様による分類であるが，色調は赤褐色～灰褐色で，各類で差はない。胎土は砂粒が多いのは製塩土器通有であり，これも各類に差はない。調整は外面には指頭痕が残り粗雑な感じであるが，内面は指頭による圧痕やナデにより平滑になっており，概して丁寧な調整である。



第76図　第５層製塩土器出土量比率グラフ

器厚は先述したように，A，B類はC～I類のものに比べると厚くA・B類は平均3.7㎜の厚さがあるのに対し，C～I類のものが平均３㎜の厚さである。

また器形を復元するとA・B類は口径15㎝前後，器高13㎝前後と推定されるのに対し，C～I類は口径11㎝前後，器高10㎝前後と推定できる。口縁部はタタキが施されているため，本来内湾するものが叩きの強さによって直立したり，外反したりしている。体部は丸く，底部は恐らく丸底であろう。

次に，第５層出土の無文製塩土器について説明する。まず，一般的な特徴を述べると，胎土は良選されており，砂粒はあまり目立たない。色調は薄黒い赤褐色のものが多い。調整は内外面に指頭圧痕が多く残るが，内面は指頭で丁寧にナデ調整されており，平滑になっている。器形は椀形で，口縁部は内湾し，底部は丸底であろう。復元口径は10～11㎝で，器厚は３㎜前後である。器高は10㎝ぐらいであろう。

口縁部の内湾度によって，２つに細分できる。「実」第266図・第267図－１～50が内湾度が強く，球形に近い器形を推定できるものである。第267図－51～75は内湾度が弱く，口縁部が僅かに

内傾したり，直立に近いものもある。この内湾度の弱いものは，第５層出土の中からタタキ目のあるものと内湾度の強いものを除去した残りのもので，土器の特徴からの型式設定ではなく，後述する第４層，第３層出土の製塩土器と差が無いため，これらと区分することは難しい。

ｂ．第４層出土製塩土器

第４層から出土した製塩土器は整理用コンテナにして10箱位である。この中にはタタキ目を持つものから，次に述べる第３層出土の尖底製塩土器まで含まれており，この層だけに見られる製塩土器はない。このため，「実」第262図の実測図と遺物観察表だけ掲げ，土器の説明は省略する。

ｃ．第３層出土製塩土器

最後に第３層出土について説明しよう。全出土量は整理用コンテナにして約20箱分で，この時代の製塩土器では最も出土量が多い。大きさは復元口径は10～13cm，器高は14～16cmで，器厚２～４㎜である。体部最大径は口縁部下２～４cmにあり，これより下は体部の幅が徐々に狭ばっていき，底部は尖底となる。調整は内面は指頭による下から上方向へのナデ上げである。外面は指頭圧痕が多く，また器壁が剝落しているところが多い。胎土は１～２㎜の砂粒を含んでおり，第５層のものに比べると粗雑である。色調は外面茶褐色，内面赤褐色のものが多く，部分的に二次焼成を強く受け，ピンク色に変色しているところもある。

口縁部は内湾するが規則性はないようで，口縁端部が波打つものもあり，第５層の無文土器に比べるとかなり粗雑な作りである。

底部は先端が尖るもので，第４・５層からも数十点ずつ出土したものも含めると，個体数は1836点抽出し得た。大半が第３層からの出土である。体部の傾斜角や最先端部分の形態によって細分を試みたが，明確な型式分類は出来なかった。「実」第261図－37～67は先端部分が比較的丸いもので，量的にはこれが最も多い。68～74は先端が尖るものであるが，丸いものとの差は明瞭とは言い難い。75～83は先端が乳頭状に突出するもので，量的には最も少ない。これは前二者と比べると形態を明確に区分できるが，胎土，色調，調整，出土位置等に差異は認められず，個体差とみてよいだろう。

ｄ．穿孔製塩土器

この時代の製塩土器に小孔を穿っているものが出土した。整理で抽出し得た個体数は147点である。このうち５点は口縁部近くにあり，焼成後に穿孔されたとみえ器壁が剝落しており，他の大多数のものとは異質なため，ここではこれを一応除外して説明する。

孔の特徴は次のとおりである。

ⅰ．円孔の径は４～５㎜で，同一規格の工具であけられている。

ⅱ．土器の外面から内面に向かってあけられている。

ⅲ．孔は器壁に対して斜行している。

ⅳ．孔の無いものと比較しても，胎土，焼成，二次焼成等に差異は認められない。

さらに尖底部が残っている30点について観察すると次のような点を指摘できる。

ⅴ．底部先端から１～３cm上の部位に穿孔されている。

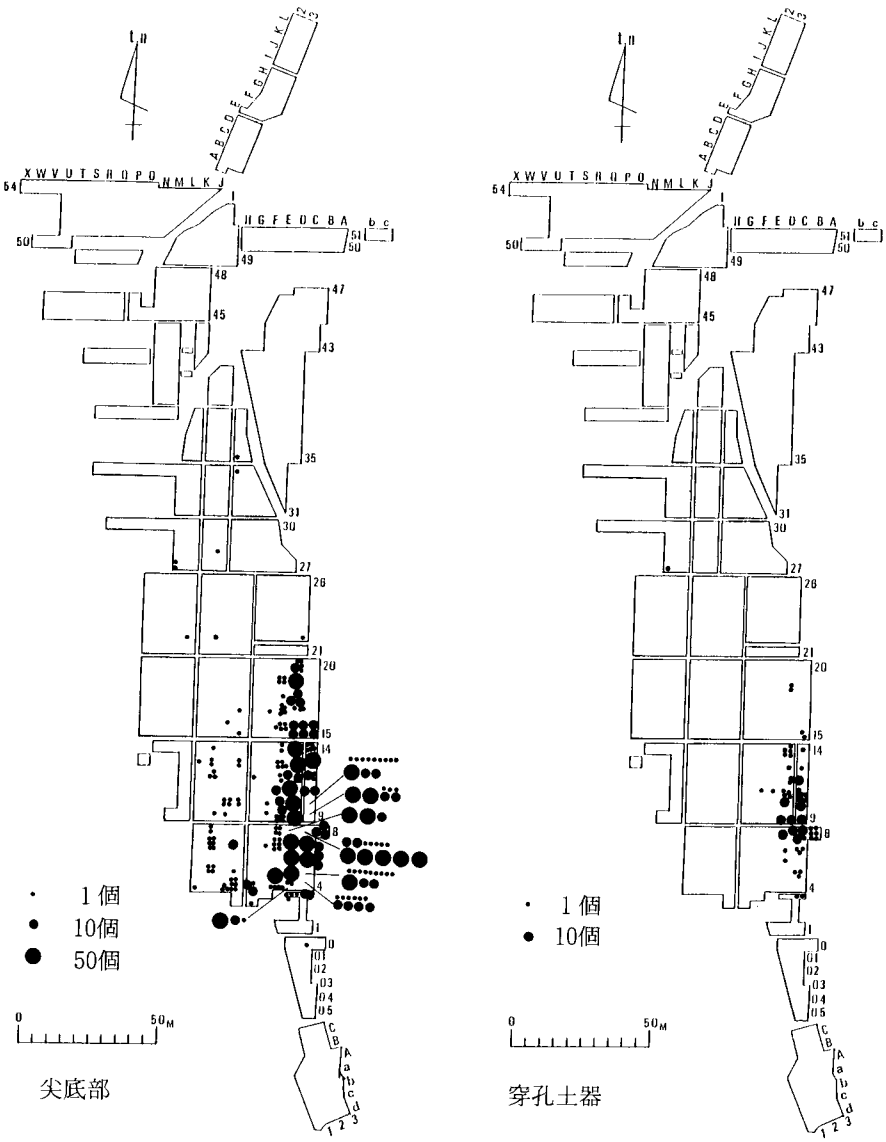
ⅵ．孔は１個体１箇所である。

ⅶ．製塩土器を上下逆さにして伏せて，粘土が生乾きの段階でほぼ真上の方向から工具を刺したものと思われる。

この穿孔土器の出土状態は特定の場所に集中したり，ブロックで出土することはなく，穿孔の

ないものとは差はない。出土地区は第77図に示した通り，B・C－8～10区に多いがこの傾向は製塩土器全体の出土傾向と同じで，出土位置の偏りは認められないことから，この時期の通常の製塩工程に使用され，廃棄されたものと推定できる。

ちなみに，製塩土器尖底部は1836点抽出しえたため，全体に占める穿孔土器の割合は単純計算すると，7％ということになる。グリットごとに尖底数と穿孔土器数とを比率計算すると，B・C－8～11区で占める割合が高く，10～20％の占有率をもつ。つまり，5～15個に1つの割合で穿孔土器が使われていた可能性が考えられるのである。



第77図　V類製塩土器尖底部・穿孔土器分布図

この穿孔土器の存在は，この時期の製塩土器の特徴である，器壁が薄くなる，底部が尖るという２点に加え，製塩工程を復元する有力な手掛かりと言えるであろう。

⑤　奈良三彩・緑釉陶器（第78図　「実」第256図・第257図）

奈良三彩１点，奈良二彩２点，緑釉陶器片76点が出土した。

三彩（「実」第256図１）は壺の底部と体部の破片である。底径4.5cm，残高3.7cmである。体部最大径は中央よりやや上部で丸味を以て張り出す。体部下半には段がある。高台は約５mmの高さで，八の字にふんばっている。胎土は黄白色で，外面には緑・白・橙色の釉薬がかかる。橙色の釉薬が最後にかけられている。内面には見込み部分に白色の釉薬がかかり，斑点状に緑釉がある。

二彩は壺の蓋と底部が出土した。蓋（同図２）は５分の１程の破片で，宝珠つまみが付く。身部は径5.1cm，高さ0.7cmで口縁部が僅かに開く。天井部に浅い沈線が１本回る。つまみは径1.2cm，高さ0.5cmあり。釉薬は白緑色のものが内外全面に施された後，外面の一部に濃緑色のものが一部にかけられている。

二彩底部（同図３）は，小さな破片で高台は欠損している。復元底径約５cmで，白と緑の釉薬が残る。

緑釉陶器片は76点出土した。その大半は椀・皿類と思われ，内訳は底部26点，体部17点，口縁部30点である。特殊品と思われるものが３点出土している。

椀・皿類を高台の形態によって分類すると，貼り付け高台６・切り高台１・蛇の目高台９・輪高台４・不明６となる。

胎土の質から分類すると，白黄色の軟陶は65点，灰色の須恵質の硬陶は11点で，軟陶のほうが多い。

「実」第256図－４～19はこれらを実測したものである。第257図は特殊なもの３点の実測図である。１は３cm程の破片で，図上部の山形の外郭線が生きている。僅かに湾曲し凸面には沈線によって唐草文が描かれている。濃緑色の釉薬が内外面にかかる。２は中世の円板状土製品に転用されていたもので，径約２cmの円形の破片となっており，これも湾曲し凸面に唐草文が描かれている。釉薬は濃緑色で内外面にかかる。３も２cmほどの破片で，湾曲するがこれは凹面に沈線によって文様が描かれている。釉薬は濃緑色で内外面にかかる。

⑥　銅製品（「実」第258図）

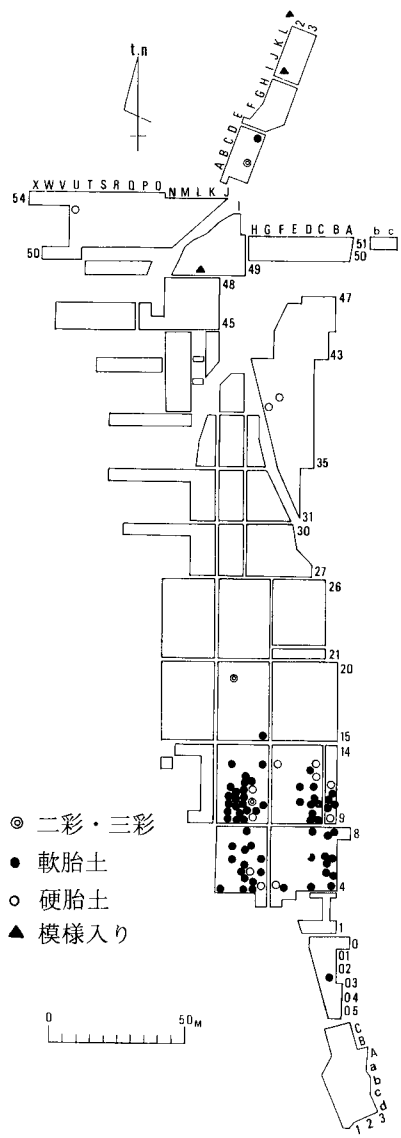
銅製品は15点出土した。内訳は帯金具３点，座金６点，鈴１点，釘３点，責金具１点，不明銅板１点である。１は丸鞆で，長さ2.4cm，幅1.5cmあり，裏に留釘が３本残るが，裏金はない。鍍金は認められない。２も丸鞆である。長さ３cm，幅２cmあり，これは裏金がのこる。鍍金は認められない。３は鉸具の片面で，長さ3.3cm，幅2.3cmあり，薄い板状で片方に２つ突起があり，屈曲部のこの部分で折れている。中央部に僅かに鍍金が残る。４は小さく薄い青銅の座金で中央に２ヶ所穿孔があり，そこに細い銅線を撚り合わせた止め金が残っている。５も４と同様の座金であるが，穿孔は中央１ヶ所だけである。６・７も薄い青銅の座金であるが，表面に細い線刻が沢山描かれている。８は花模様の座金で，ハート形の透かし文様が作られている。中央に方形の穿孔がある。９も座金の一種と思われるが，円周部が折り曲げられ厚くなっている。中央の穿孔は後に開けられたものである。10は刀の鞘に付く責め金具である。

⑦　皇朝十二銭（第79図，第６表，「実」第259図）

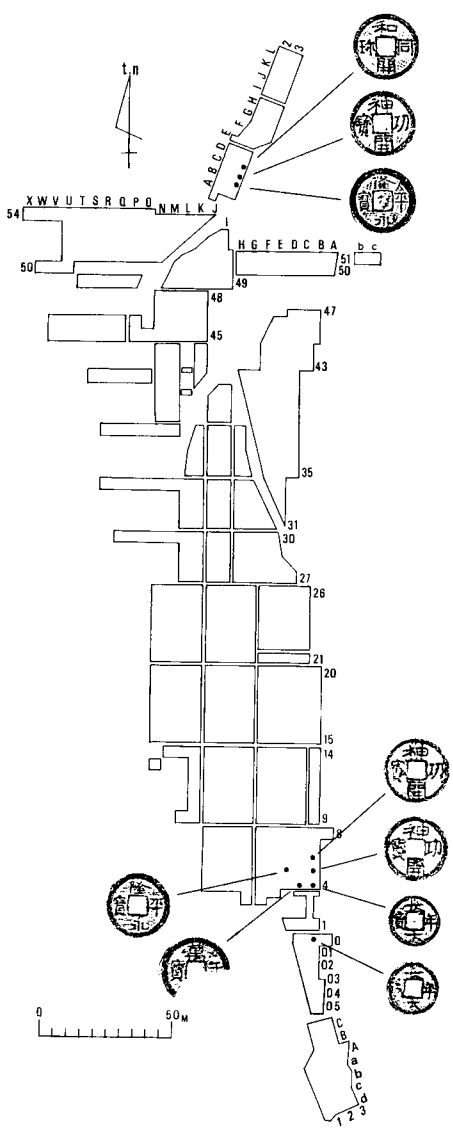
本遺跡からは第６表のとおり９枚の皇朝十二銭が出土した。内訳は和同開珎１，万年通宝１，

神功開宝３，隆平永宝２，長年大宝２である。和同開珎の「開」は「開」に作る。万年通宝の「萬」は「内」につくる。３の神功開宝の「功」の旁は「力」につくり，「開」は「開」につくる。４・５の神功開宝の「功」の旁は「刀」につくり，「開」は「開」につくる。６の隆平永宝は「平」の末画が長く，「永」の文字が小さい。７の隆平永宝は「平」の末画が短く，「永」「宝」の文字が小さい。

各銭の出土位置は第79図に示したとおり，大きく見て２ヶ所に分かれて出土している。北部のヤケヤマ東麓地区からは和同開珎，神功開宝，隆平永宝の３種類で８世紀代のものである。これに対し，南部は最も古い和同開珎が無く，９世紀中葉の長年大宝が加わるという特徴が認められる。



第78図　三彩・緑釉陶器出土分布図



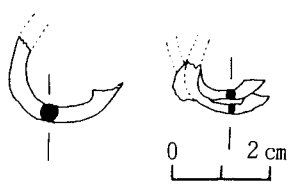
第79図　皇朝銭出土分布図

番号	出土地区	層　位	銭　　種	初鋳年
1	ヤケヤマ C－2	第4層 上　面	和同開珎	708年
2	C－4	第3層	万年通宝	760年
3	B－5	第3層	神功開宝	765年
4	B－6	SK01	〃	〃
5	ヤケヤマ B－2	第4層 上　面	〃	〃
6	ヤケヤマ B－2	第3層	隆平永宝	796年
7	E－5	第3層	〃	〃
8	B－0	第5層	長年大宝	848年
9	B－4	第3層	〃	〃

第6表　皇朝銭一覧表

⑧　鉄製品（第80図）

この時代の鉄製品は釣針，刀子，楔状鉄器，不明品などが数点出土したにとどまる。第80図は釣針を図化したものである。C－7区第3層から出土したもので，ともに基部が欠損している。左は断面径3㎜でかえりが付く。右は2本の針が錆び付いており，断面径は約2㎜で，これも共にかえりが付く。



第80図　鉄製釣針実測図

⑨　土錘（第81図～第84図，第7表～第13表，「実」第269図・第270図）

本遺跡から出土した弥生時代以降の錘は土錘ばかりで石錘・金属錘はない。土錘の総出土点数は約2000点であるが，時期決定が難しいため，弥生時代前期のものを除いてここですべて報告し，年代観についても少し触れてみたい。

まず，形態によって大きく4つに分類した。出土点数の内訳は管状土錘1,031点，棒状土錘248点，有溝土錘590点，管状片溝土錘29点である。

a．管状土錘

この種のものは，細長い円筒状の外形を持ち，中央に管状の孔を持っているものである。1031点出土したが，このうちの3分の1に当たる340点を任意に抽出して長さと幅の関係を見たものが第7表である。この表からは幾つかの集中箇所が認められ，これに形状の差異を加味して，A～I型の9型式に細分した。

A型――長さ3.8～6.4cm，中央幅0.7～1.8cmで，両端が細くなるもの。これが最も出土量が多く，全体の79.1％を占める。「実」第270図－1～46がこれである。

B型――長さ6.0～7.5cm，中央幅1.8～2.5cmで，両端が細くなるもの。A型に比べ長さもしくは幅が大きいもの。全体の7.6％を占める。「実」第270図－57～63がこれである。

C型――長さ3.5～6.0cm，中央幅1.5～2.5cmで，両端がA・B型のように細くならず円筒形を呈するもの。全体の約3.7％を占める。「実」第270図－83～106がこれである。

D型――長さ3.0～4.5cm，中央幅2.0～3.0cmで，両端が細くならずC型より長さが短いため，寸胴形である。全体の約2.6％を占める。「実」第270図－64～82がこれである。

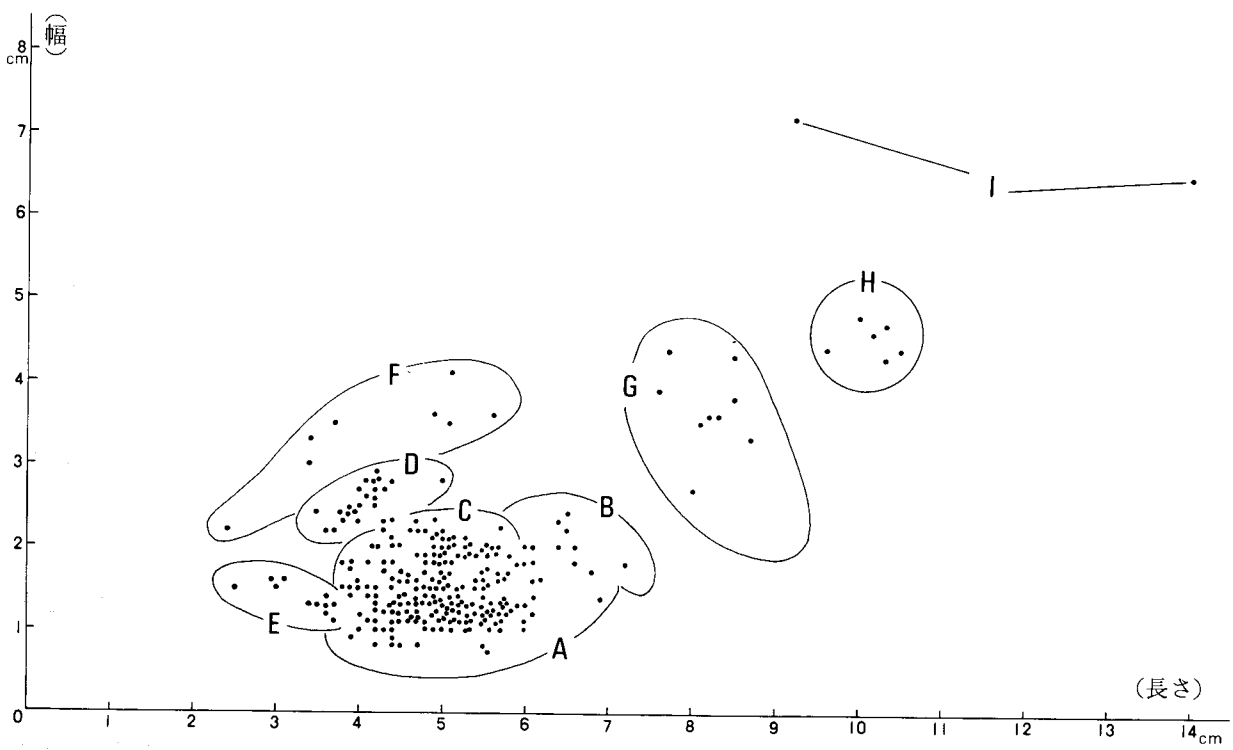
E型――長さ3.3cm以下，幅1.5cm前後のもので，A型の小型品である。全体の2.5%を占める。「実」第270図－47～56がこれである。

F型――長さ2.0～6.0cm，幅2.0～4.5cmのもので，長さと幅の差が小さいもので，球形に近いものである。全体の1.1%を占める。これは弥生時代前期のもので，第4章第2節で報告している。

G型――長さ7.5～9.0cm，幅2.5～4.5cmのものである。全体の1.8%を占める。「実」第270図－107～109がこれである。

H型――長さ9.0～10.5cm，幅4．0～5.0cmのものである。全体の1.1%を占める。「実」第270図－110・111がこれである。

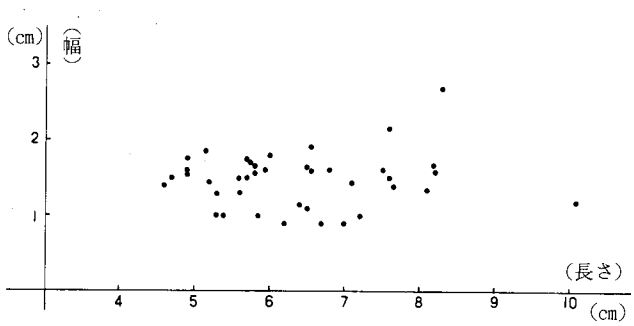
I型――長さ10cm以上，もしくは幅5cm以上のもので，完形品が2点出土しているため1形式を設定した。全体の0.5%を占める。「実」第270図－112～114がこれである。



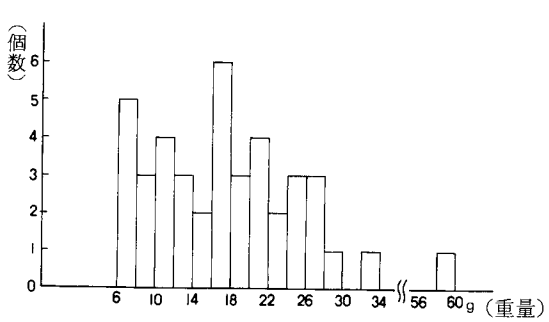
第7表　管状土錘長幅計測表

b．棒状土錘

この種類の土錘は，径1～2cmの棒状の粘土紐を長さ4～8cmに切断し，両端を扁平にしたう



第8表　棒状土錘長幅計測表



第9表　棒状土錘重量計測表

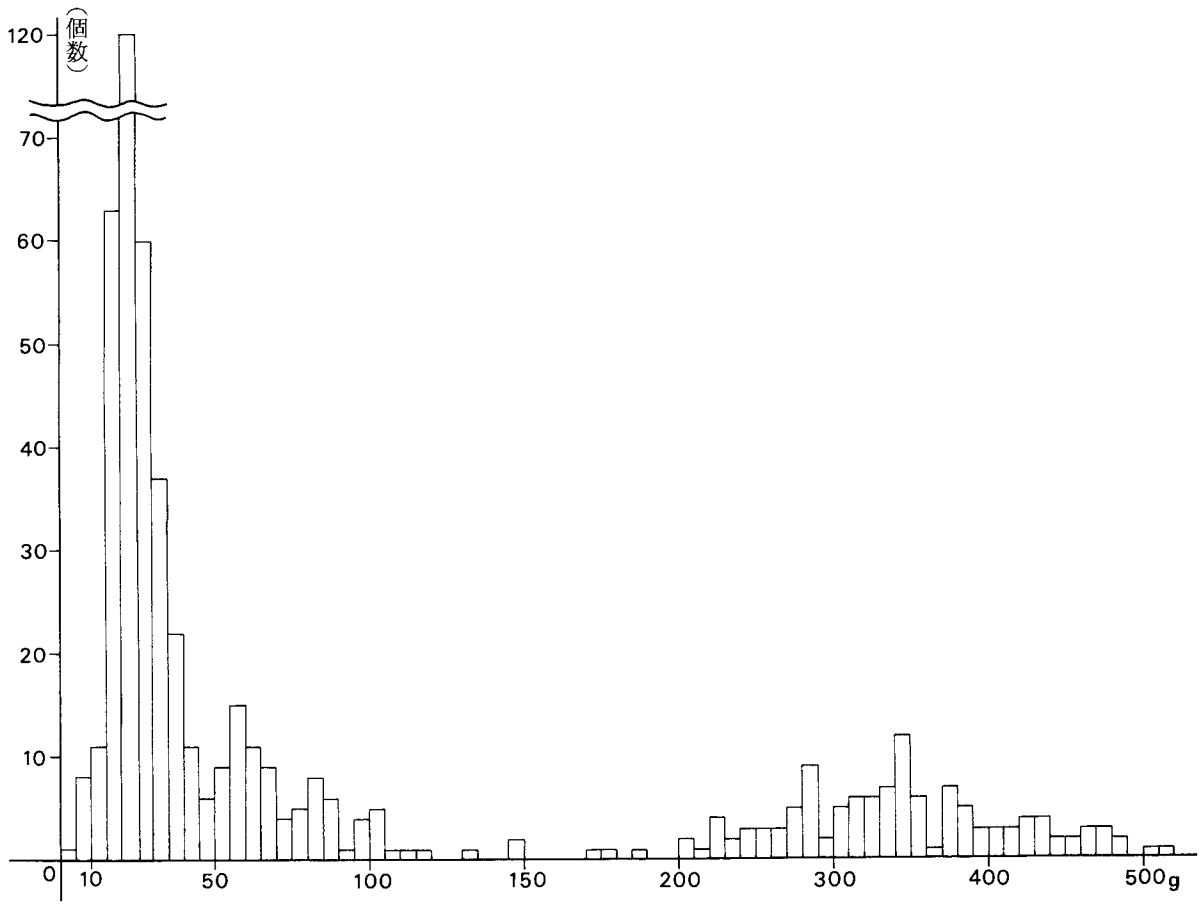
えで，穿孔したものである。

破片も含めると247点出土したが，このうち完形品は40点で，これを図化したものが「実」第270図－115～153である。完形品を資料にして長さと幅の関係を見たものが第８表である。幅は最小が0.9cm，最大が2.6cmで，1.5cm前後のものが多い。長さは最小4.5cm，最大10.1cmであるが，４～８cmの中でばらつきが多い。次に重量は第９表に示したとおり６～34ｇの範囲でまちまちで，特に量的に多いものはない。例外的に59.2ｇのものが１点ある。

出土位置で注目できる点は，Ｉ～Ｋ－15から比較的多く出土していることで，これは管状土錘や有溝土錘とは異なった点である。

ｃ．有溝土錘

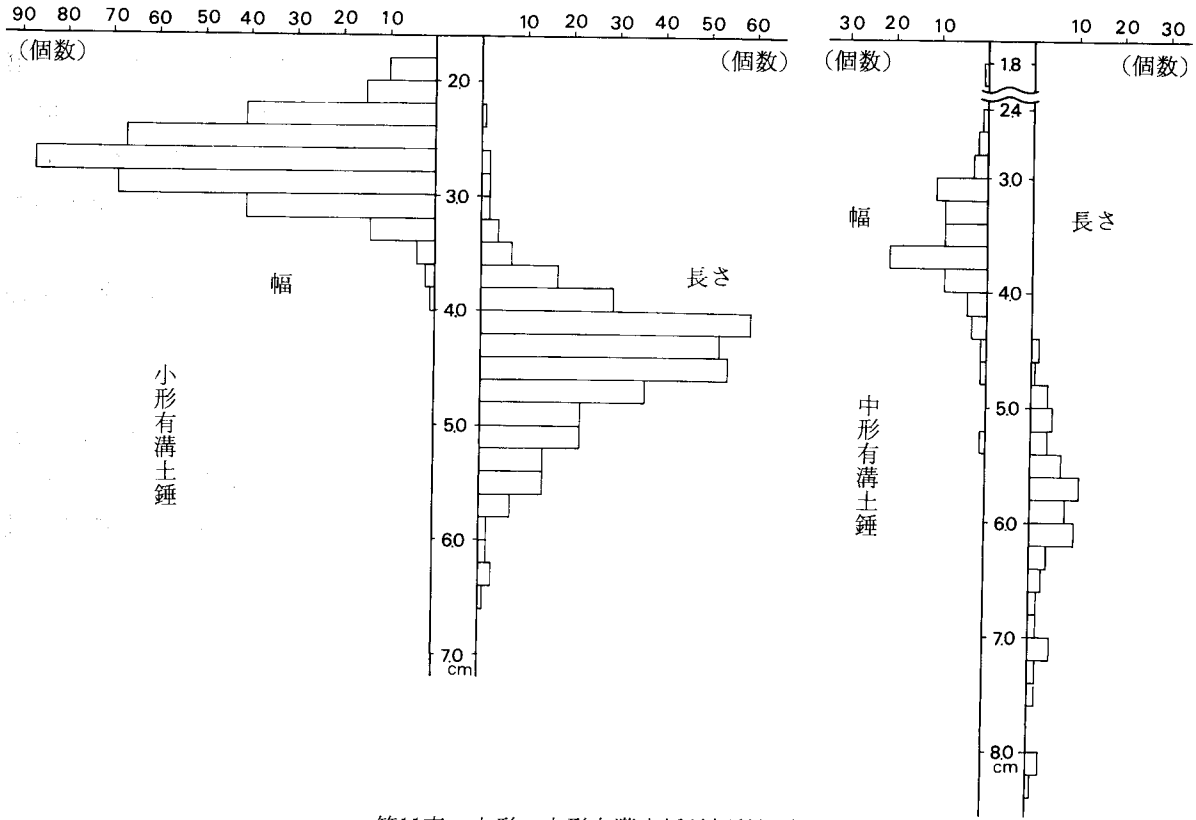
この種の土錘は，扁平な楕円形を呈し，両側の長側辺に溝を巡らしたもので，大きさは大小様々であるが，形態上の差異はない。破片も含めると約590点出土したが，完形品及び復元可能なものを重量別に集計したものが第10表である。25ｇ，60ｇ，350ｇに集中箇所が見られ，この重量を標式に，５～44ｇを小形，45～150ｇを中形，180～520ｇを大形と区分することにする。



第10表　有溝土錘重量計測表

ｉ．小形有溝土錘

この種の土錘は破片も含めると374点出土した。第11表は長さと幅を計測したものであるが，長さは最小2.2cm，最大6.6cmで４～4.5cmがもっとも多い。幅は1.8～4.0cmで，2.6cm前後がもっとも多い。小形の大きいものと中形の小さいものとは判然とは区別し難い。「実」第269図－１～35がこれである。



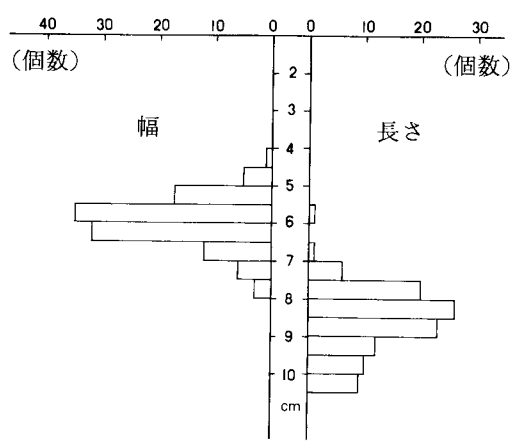
第11表　小形・中形有溝土錘長幅計測表

ii．中形有溝土錘

この種の土錘は破片も含めると86点出土した。第11表は長さと幅を計測したものであるが，長さは5.5～８cmで5.5～6.0cmが最も多い。幅は1.8～5.2cmで，３～４cmが最も多い。小形に比べると長さ，幅とも若干大きくなっている。「実」第269図－36～54がこれである。

iii．大形有溝土錘

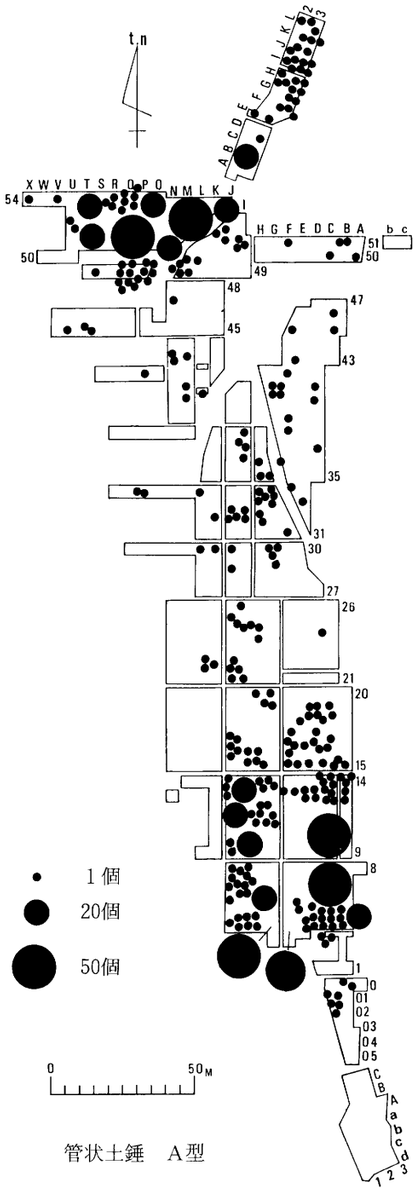
この種の土錘は破片を含めると約140点出土したが，このうち完形品は75点である。原形復元可能な108点を選び，長さと幅を計測したものが第12表である。長さは７～10.5cmで，８cm前後のものが多い。一方，幅は４～８cmで，６cm前後のものが多い。長さ，幅ともに中形よりも大きくなっている。「実」第269図－55～61がこれである。62は大形の種類には入らないが，長さは10cm前後，幅は６cm前後に復元でき，厚みは約３cmの扁平な土錘である。溝は大形土錘のように側面ではなく幅広の両面に作られており，さらに溝の横に径1.5cmの円孔が２ヵ所設けられている。類例は櫃石島ガンド遺跡や広島県草戸千軒遺跡から出土しており，中世のものである。



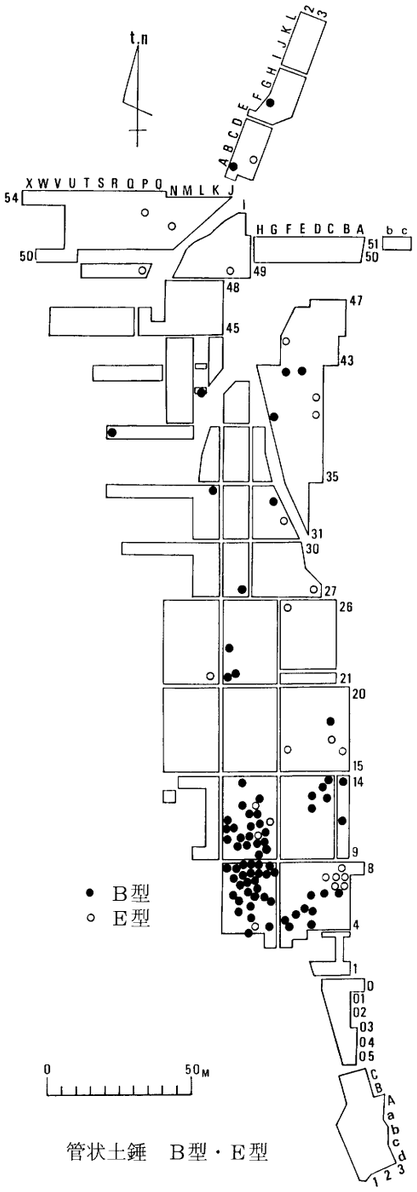
第12表　大形有溝土錘長幅計測表

d．管状片溝土錘

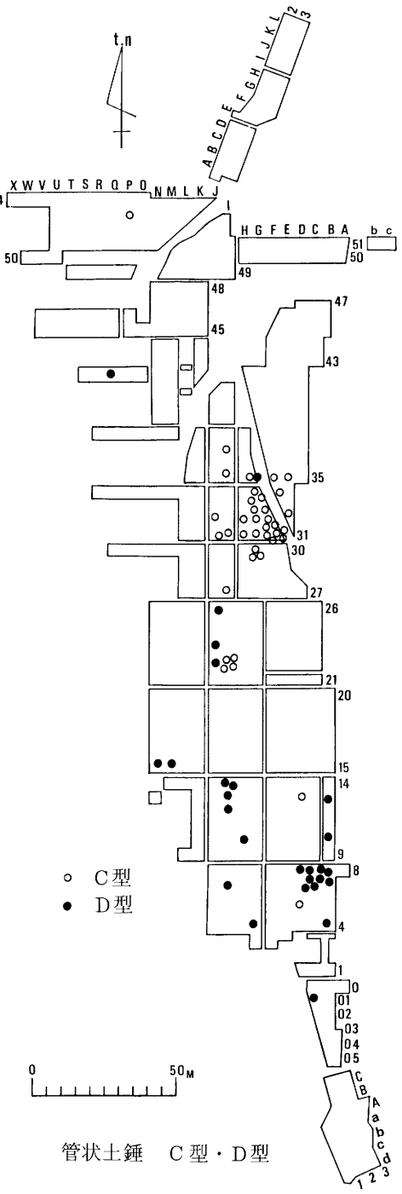
この種類の土錘は29点出土した。外形は小形有溝土錘と同じであるが，溝は片側のみに作られており，中央には管状土錘のように穿孔がなされている。完形品22点について計測を行った。第13表は重量を計測した



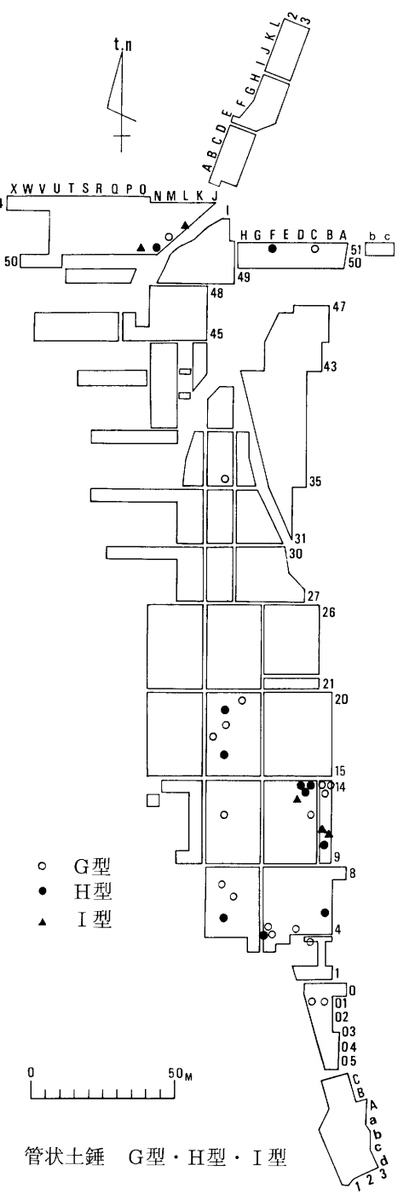
管状土錘　A型



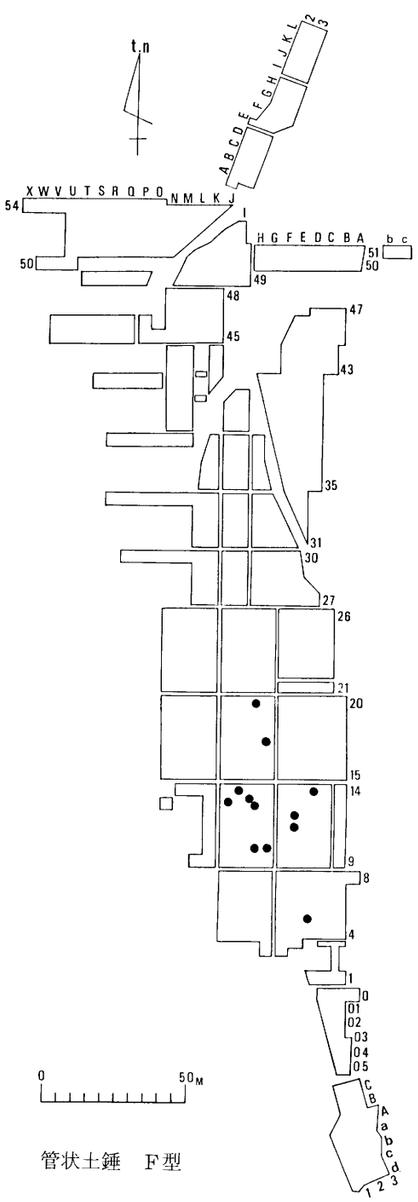
管状土錘　B型・E型



管状土錘　C型・D型

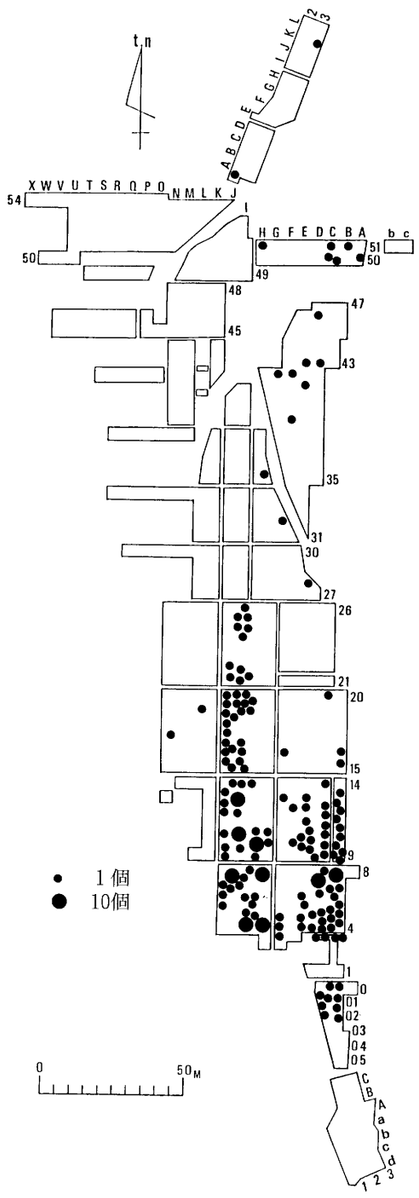


管状土錘　G型・H型・I型

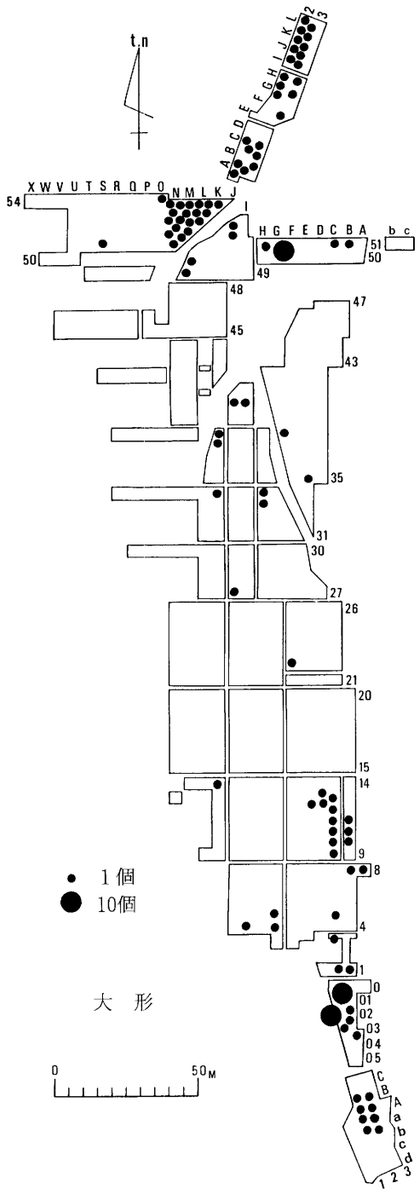


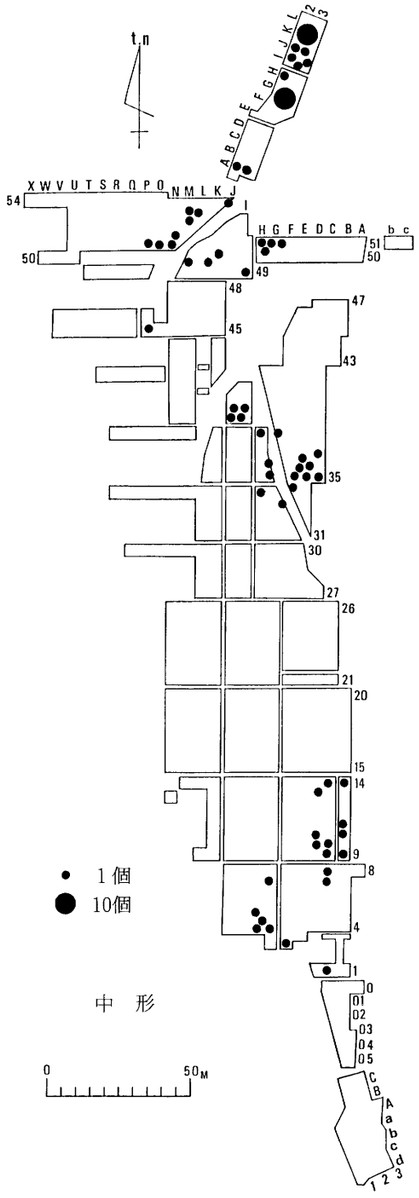
管状土錘　F型

第81図　管状土錘出土分布図

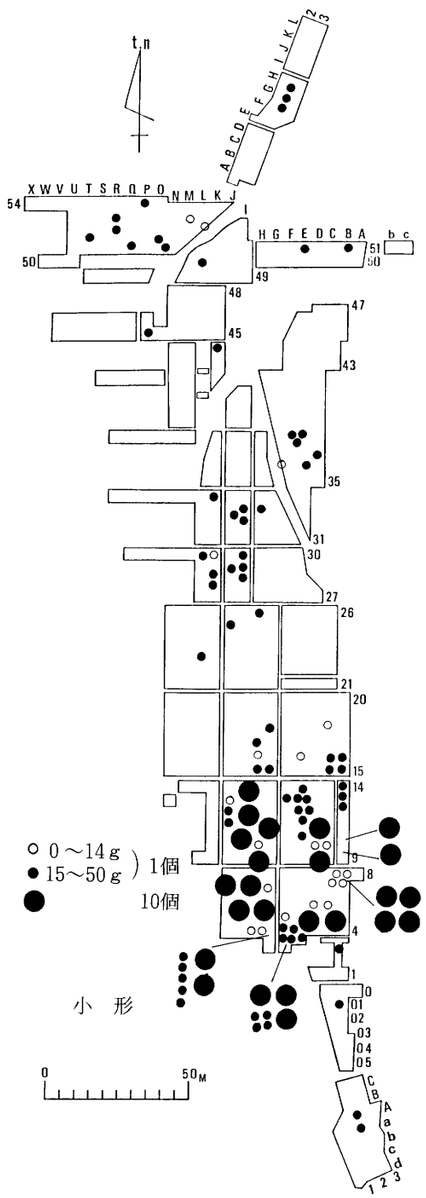


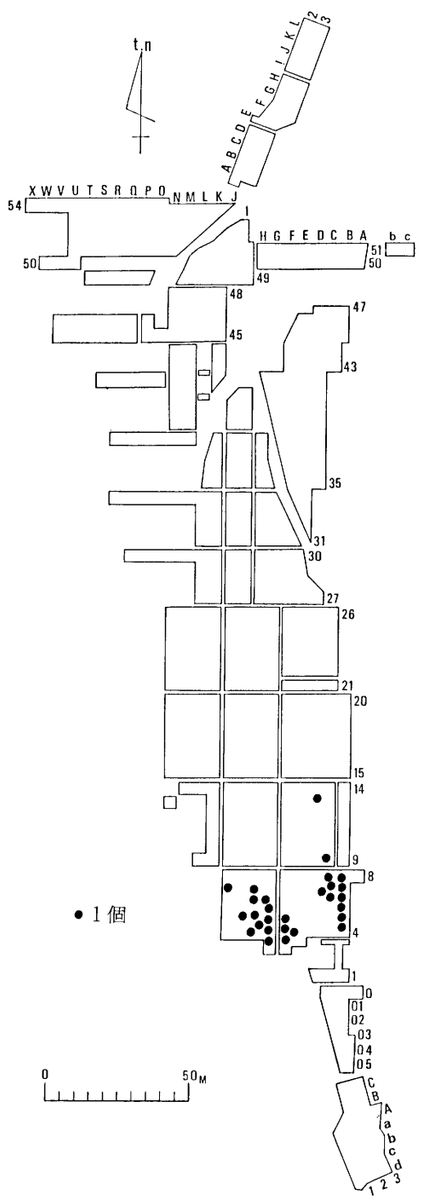
第82図　棒状土錘出土分布図



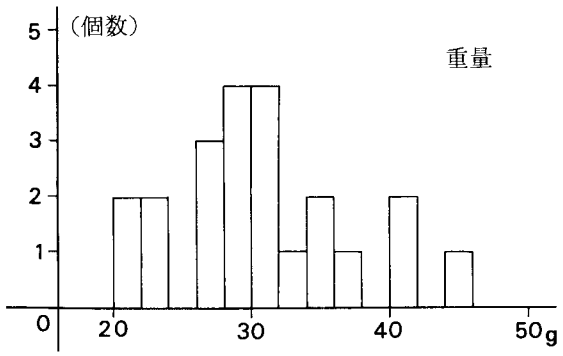


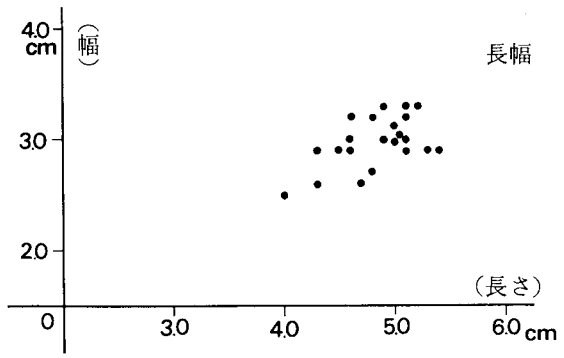
第83図　有溝土錘出土分布図





第84図　管状片溝土錘出土分布図





第13表　管状片溝土錘重量・長幅計測表

ものであるが，最小は22ｇ，最大は45ｇで，30ｇ前後が標準的なものである。同じく第13表は長さと幅との関係を見たものであるが，長さは４～5.5cmで，幅は３cm前後でほぼ均一な形状である。

⑩　蛸壺（第85図，「実」第255図・第271図）

本遺跡から出土した蛸壺は，小形の釣鐘状の土師器と大形の土師器甕形のものの２種類がある。前者を飯蛸壺と呼び，後者を真蛸壺と呼ぶことにする。

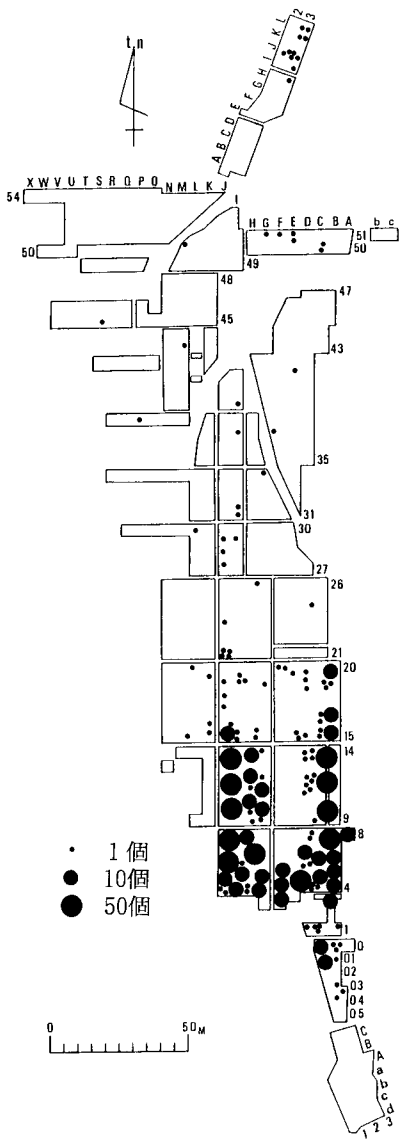
飯蛸壺は約1000点出土した。土師質のものばかりで須恵質のものはない。形態はいずれも釣鐘形のもので，コップ状のものは出土していない。高さは９～10cmで，口径は４～５cm，鈕の孔径８～12mm，重量130ｇが平均的なものである。大きさ，形状等により細分を試みたが明瞭な差異は見い出せなかった。出土位置は遺跡南部に集中している。

一方，真蛸壺は７点ほど出土した。量的には極めて少ない。特徴は口径12cm前後，器高20～30cm，の甕形土器で，口縁部は短く外反し，頸部は面取りされているものがあり，この部分に紐が取り付けられるようになっている。

体部は多少膨らみ，底部は尖りぎみの丸底である。色調は黄褐色で，胎土には砂粒を多く含み堅く焼成されている。内面の調整は指ナデで，丁寧であるが，外面は指頭痕調整の後粗い縦方向のハケ調整が成されている。「実」第249図－5･6，「実」第255図－16～20がこれを図化したものである。通常の土師器に比べ，胎土の色調が黄色系統で明るく，砂粒が多くザラついた感じで，外面の調整が粗雑な点に特徴がある。

⑪　動物遺存体

この時代と思われる動物遺存体は，獣骨，魚骨，貝殻が整理用コンテナ５箱前後出土した。獣骨の一部と貝については鑑定を依頼した。詳しくは第５章を参照されたい。



第85図　飯蛸壺出土分布図

(3) 小　結

この時代の遺構は(1)で説明したとおり土坑や焼土などが検出されたが，性格が明らかなものは少なく，製塩工程等の復元には至らなかった。ただ，海に近い浜の東側には製塩土器の包含層，炭酸カルシウムの堆積層や焼土が検出され，ここが製塩の作業場と考えて良かろう。一方浜の西側では柱穴群が検出され建物に復元できたため，この付近を居住区とみなして良いものと思われる。

遺物については製塩土器が多数得られ，土器製塩は平安時代前期まで存続することが明らかになった。製塩土器編年は第6章に述べている。

この時代の製塩に関しては，福岡県海の中道遺跡[1]や大阪府田山遺跡[2]で2種類の製塩土器，すなわち，煎熬用の甕形土器と焼き塩用の土器が存在することが明らかにされているが，本遺跡では1種類の製塩土器しか抽出し得なかった。ただ，底部付近に穿孔をもつものが数%の割合であり，この穿孔製塩土器と焼き塩との関係を今後検討する必要が在るだろう。

次に，この時代の遺物では土錘や蛸壺が多いのが特徴的である。古墳時代後期と比べると出土量に大きな差が認められ，7世紀以降，本遺跡での生産活動に変化があったことを示している。つまり，全生産活動に占める製塩の割合が徐々に低下し，漁業の占める割合が増加したと考えられるのである。漁業の活発化と言う点では真蛸漁もこの時期から専用の真蛸壺が出現してくるようである。この真蛸壺については別稿に譲ることにする。鯨骨については，所謂「寄り鯨」を捕獲し，浜で解体したものであろう。瀬戸内海における鯨については進藤直作氏の著作[3]に詳しい。

奈良三彩や銅製品等の祭祀関係の遺物が多く出土したのも，この時代の特徴であるが，これについては既に別稿[4]で述べたので参照されたい。

注

(1) 福岡市教育委員会『海の中道遺跡』　1982

(2) ㈶大阪文化財センター『田山遺跡』　1982

(3) 進藤直作『瀬戸内のクジラの話』進藤直作『鯨の文化史』　青谷書房　1979

(4) 大山真充「香川・大浦浜遺跡の国家的祭祀について」『考古学と古代史』　同志社大学考古学シリーズⅠ　1982
大山真充「古代讃岐と海の祭り」『歴史手帖』　14巻5号　1986

第6節　平安時代後半～鎌倉時代の遺構・遺物

本節で扱う平安時代後半～鎌倉時代とはおおむね11～14世紀を指している。この時代の遺構・遺物は量の多寡はありながらも浜全域からまんべんなく検出された。

遺構のうち，特に素掘りの遺構は後世の堆積土の多い地形の所－南端地区，ヤケヤマ東・南麓地区－からは比較的多く検出できたが，浜中央部の砂洲上からは粘土や曲物を用いた遺構以外はほとんど検出し得なかった。これは，この時代の遺構面が現在の表土とほぼ同じ高さにあり，耕作や自然の風雨によって破壊されたり，本来余り同時代の遺物が伴わない遺構に各時代の製塩土器等が混入し，時期を特定出来なかった遺構も多かったせいにもよる。遺物は土師質土器（椀・皿・鍋等），瓦器（椀・皿），瓦質土器，輸入陶磁器，陶器，製塩土器，石鍋，銅銭，鉄製品，鞴口，円板状土・石製品，土錘，飯蛸壺等が出土した。出土状態は遺構出土は少なく，包含層出土が多く，地域的には南端地区，ヤケヤマ南・東麓地区出土が多い。

以下にそれぞれについて説明するが，遺構は地区ごとに説明することにした。遺物の土錘と飯蛸壺については大形有溝土錘以外は時期区分が難しいため，前節の土錘，飯蛸壺の項で一括して報告している。

(1)　浜中央部の遺構

浜の中央部から南部にかけて分布する粘土遺構28基と，土坑3基について説明する。

① SX 2（「実」第277図）

C－46区第2層で検出した楕円形の浅い皿状の土坑である。上面精査のみ行った。長軸2.6m，短軸1.7mの大きさで，完掘していないが深さは20cm前後と思われる。埋土は耕作土で，底には約180個の花崗岩や川原石が入っており，このうちの約60％の石が二次的に火をうけ赤変していた。青灰色の粘土が使われている。出土遺物は土師質土器，土釜脚部，瓦器椀などの破片である。この東にSX 5が位置している。

② SX 3（「実」第278図）

D－45・46区の第2層で検出した。上面精査のみである。平面形はやや幅広の楕円形を呈し，長軸2.8m，短軸1.6mであり，深さは完掘していないが30cm前後と推定できる。青灰色の粘土が使われている。埋土は耕作土で，底には石が約300個乱雑に入っていた。このうち大半のものは二次的に火をうけたとみえ，赤変している。石材は拳大の川原石や花崗岩が多い。出土遺物は，青磁，土師質土器，巻貝などの破片である。

③ SX 4（「実」第279図）

D－46区で検出した。ここも上面精査のみである。古墳時代後期の製塩土器包含層を掘り込んでつくられる。平面形は丸に近い楕円形を呈し，長軸2.1m，短軸1.8mである。深さは，20cm程度と推定できる。ここにも約130個の石があり，ここの石は規則的に配置されているようで，半数強が赤変している。青灰色の粘土が使われている。出土遺物は埋土から製塩土器，土師器等の細片が少量出土した。

この遺構の東にSX 6があり，SX 4はこれを破壊して作られている。

④　SX５（「東」第277図）

B·C－45，46区第２層で検出した，楕円形と推定できる土坑である。長軸1.3m，短軸90cm程度に復元でき，深さは約20cmである。埋土は現代の耕作土で，遺物は製塩土器の細片が少量あった。粘土は黄色のものが使われている。土坑西側はSX２の築造によって壊されたものであろう。

⑤　SX６（「実」第279図）

D－46区で検出した。SX４によって西側が破壊されているが，残存部から推定すると，長軸２m，短軸1.5m，深さは20cmぐらいの浅い円形土坑に復元できる。灰黒色の粘土が使われており，内部には粘土塊が数個と赤変した石が10個あまりあった。

⑥　SX７（「実」第280図）

D－47区で検出した粘土の塊である。ある目的や用途を意図してつくられたものとは思われないが，慎重をきして遺構扱いとした。粘土色調は淡緑灰色を呈するが，この色調をもつ粘土は，この付近の粘土土坑には使われておらず，SX11の粘土に近い。出土遺物はなかった。

⑦　SX８（「実」第282図）

E－39区で検出した長楕円形のやや深めの土坑で，長軸4.4m，短軸1.75mの大きさで，深さは60cm前後と推定できる。ここも上面精査のみである。本遺構の特徴は２色の粘土が構築に使われている点にある。北側４分の３の粘土は淡青灰色の粘土で，残り４分の１は黄色粘土である。深さは，未確認であるが，40～60cm程度はあるものと思われる。内部に石はなく，粘土ブロックが多く落ちこんでいた。遺物は大形有溝土錘が出土した。

⑧　SX９（「実」第281図）

D－40区で検出した円に近い楕円形の土坑で，長軸1.65m，短軸1.33mの大きさがあり，底部に粘土は残っていないが深さは40cm程度と推定できる。暗青灰色の粘土が使われている。埋土は耕作上と同様の土で，大形有溝土錘が出土した。

⑨　SX10（「実」第283図）

G－14区第２層で検出した半円形の粘土塊である。SX７と同一の性格をもったものと思われる。粘土ブロックの中から土師質土器椀（「実」第321図27）が１点出土した。

⑩　SX11（「実」第284図）

E－24区，第３層上面で検出した。検出時点では，楕円形の粘土盤状であったが，精査の結果，深さ30～37cmの土坑になった。埋土は上下２層に分けることができる。上層は暗灰黒褐色砂質土で，下層は灰黒色土で，下層には木灰や壁体と同一のブロックが混入している。出土遺物は埋土上下層から土器破片が10数点出土した。

石は下層中や底部に付着した状態で，84個検出したが，そのほとんどは花崗岩で，他は，砂岩，川原石や緑泥片岩である。この石の半数は赤変している。

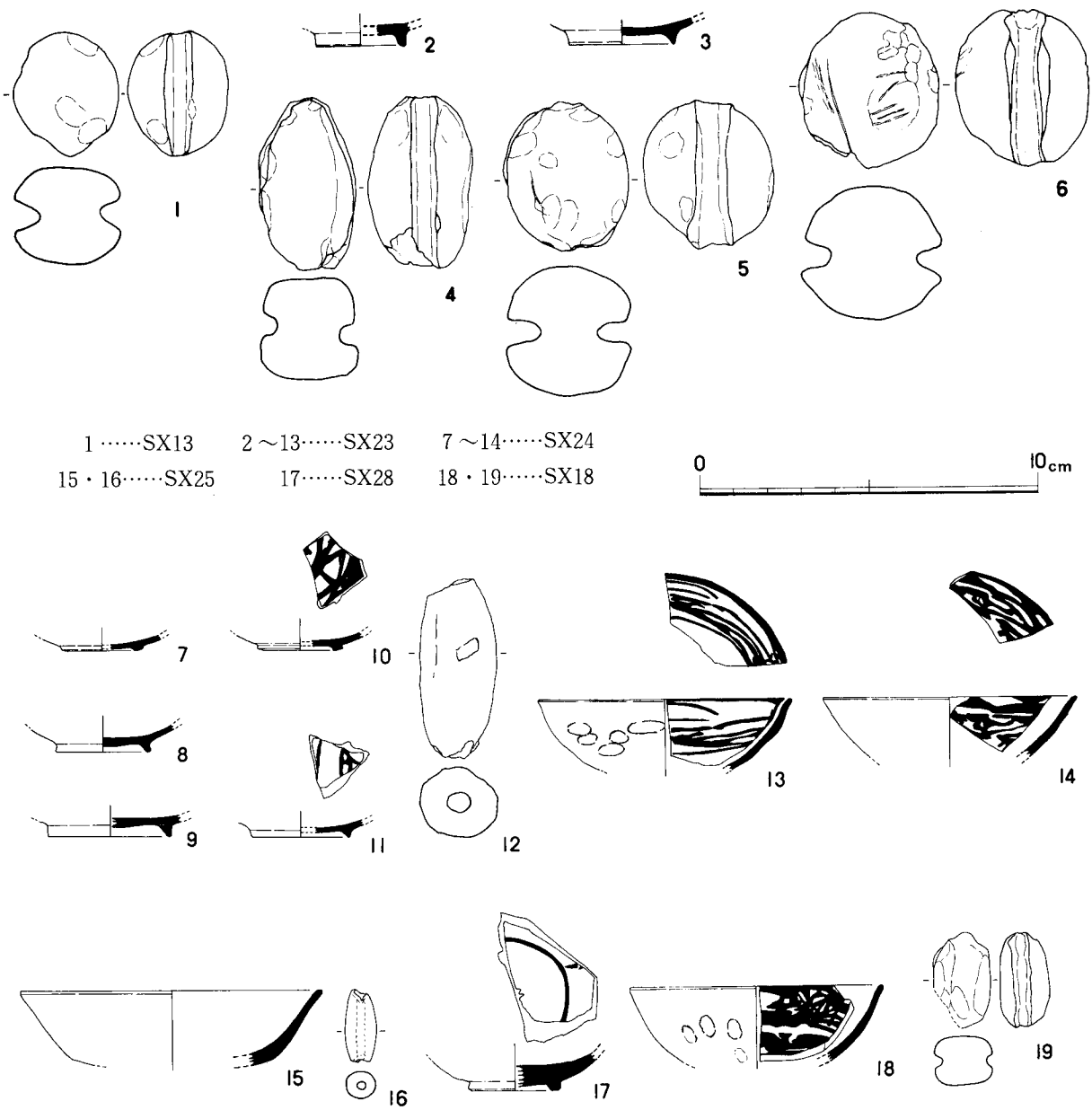
⑪　SX12（「実」第285図）

F－22区第２層で検出した径2.8m，深さ40cmの円形土坑である。埋土は４層に分かれ，最下層の灰黒色砂質粘土及び底部の粘土に接して137個の石が検出された。灰黒色の粘土が使われている。出土遺物は第１層から須恵器片，製塩土器片，第３層から土器細片が数点出土した。

⑫　SX13（「実」第286図）

F－22区第２層で検出した。円形に近い楕円形の土坑で，長軸2.4m，短軸2.1m，深さ60cmである。灰黒色の粘土が使われている。埋土は３層に分かれ，上層は付近の第２層と同じで，中層

は上層より黒味を増す暗褐色砂層で，下層は明灰色粘土に茶褐色の砂が混ざったものである。下層からは大形有溝土錘（第86図１）が１点出土した。石は底部に付着して35点検出したが，半数以上は緑泥片岩である。



1 ……SX13　2～13……SX23　7～14……SX24
15・16……SX25　17……SX28　18・19……SX18

第86図　中世粘土遺構出土遺物実測図

⑬　SX14（「実」第287図）

G－20区第２層で検出した。平面形は楕円を呈する小形の土坑である。長軸83cm，短軸60cm，深さ30cmの大きさである。埋土は茶色の砂が堆積していた。使用されている粘土は汚黄色で粘性が弱く，他の土坑に使用されている黄色系統の粘土とは趣を異にしている。底部の粘土は一部欠落しており，出土遺物は土器細片と木灰が底部付近から出土した。

⑭　SX15（「実」第288図）

Ｆ－13区第２層で検出した。細長い楕円形の土坑で，長軸3.8m，短軸1.2m，深さ40cmあり，粘土は黄色のものが使われている。埋土は２層に分かれるが，堆積状況にやや特徴がある。上層は黒色有機質土で土坑内全域に広がっているが，下層は北半分では濁黄褐色粘質土が堆積しており，この層は南には広がっておらず，これに代わり灰黒色砂質土が堆積している。石は南側の灰黒色砂質土に人頭大の塊石が数個あった。恐らく投げ込まれたものであろう。粘土は黄色粘土が使われていた。遺物は古墳時代の製塩土器や土師質土器，瓦器，土錘などが出土した。

底部の粘土下には約10cmの厚さの灰褐色砂層があり，古墳時代後期の製塩土器が多く含まれていた。

⑮　SX16（「実」第289図）

Ｅ－14区第２層で検出した。楕円形の浅い土坑である。長軸2.15m，短軸1.2m，深さ15cmの大きさで，灰青色の粘土が使われている。埋土は灰黒色粘質土で，埋土中に底に接して人頭大から拳大の花崗岩が10個あった。出土遺物はない。この土坑はSX21の廃棄後作られている。

⑯　SX17（「実」第291図）

Ｅ－13区第２層で検出した楕円形の土坑である。長軸2.9m，短軸1.75m，深さ43cmの大きさで，黄色粘土が使われている。埋土は灰褐色砂質土単層で，製塩土器，須恵器，土師器，土師質土器（「実」第303図24），瓦器等の遺物が出土した。石は埋土下部に20数点あったが，これは埋土に包含されていたものである。

この土坑の特徴は底部の粘土の厚さが側壁に比べ５cmと薄く，粘土の下に古墳時代後期の製塩土器を多く含む灰黒色土が約20cmあり，意図的に製塩土器を多く入れ底を二重構造にしたものであろう。この手法はSX15に共通するものである。

この土坑の北東隅に径60cmの土坑があり，なかには製塩土器の破片が詰まっていた。恐らく粘土下の地形の為に集めた製塩土器の残りであろう。

⑰　SX18（「実」第292図）

Ｄ－13区第２層で検出した長楕円形の土坑である。長軸3.6m，短軸1.25m，深さ37cmで，黄色粘土が使われている。形態・深さ・粘土ともSX15と近似している。埋土は灰黒色土の単層で，製塩土器，土師器，土師質土器（「実」第303図１～５），瓦器（第86図18），飯蛸壺，土錘（第86図19・「実」第303図33）などの遺物が出土した。

底は粘土が薄く，粘土の下に黒褐色，暗茶褐色の砂層があるが，製塩土器は入れられていなかった。

⑱　SX19（「実」第293図）

Ｅ－12区第２層で検出した隅丸方形の土坑である。長軸2.88m，短軸2.15m，深さ37cmの大きさで，黄色粘土が使われている。埋土は３層に区分でき，周辺の包含層が徐々に入り込み埋没したと思われる。出土遺物は製塩土器，土師質土器（「実」第303図25），瓦器，輸入磁器など少量である。底の粘土の厚さは20cmで側壁よりも薄く，粘土の下に焦茶色砂層があるが，これには製塩土器は入れられていなかった。石は埋土中から数十点出土したが，底部に付着した状態のものは１点のみであった。

⑲　SX20（「実」第297図）

Ｆ－14区第２層で検出した円形の小さい土坑である。径80cm，深さ13cmの大きさで，黄色粘土

が使われている。埋土は褐色砂質土で製塩土器片が包含されていた。粘土の下は黒色土があったが，これは古墳時代の遺構の埋土である。

⑳　SX21（「実」第289・290図）

E－14区第２層で検出した楕円形の土坑である。西側の一部はSX16によって破壊されていた。検出時は全体を暗茶褐色土が覆い，粘土土坑とは分からなかったが，精査の結果土坑となった。残存部分から復元すると，長軸2.15m，短軸1.05m，深さ20cmと推定でき，粘土は黄色のものが使われている。埋土は濁黄土色土の単層で，遺物は製塩土器，土師器，土錘など周辺の包含層と同じものが出土した。石は約50個程出土したがこれらの石は粘土の底に接したものはなく，埋土中に包含されていたもので，この土坑を埋める目的で投げ込まれたものと思われる。石は南側に多い傾向にあり，これはSX15と共通しており，土坑の本来の姿に起因しているものかも知れない。

㉑　SX22（「実」第294図）

D－12区第２層で検出した楕円形の浅い土坑である。長軸2.7m，短軸1.05m，深さ25cmの大きさで，黒色粘土が使用されている。この遺構は他の遺構と違った点が幾つかある。１つは主軸方向で，他のものがほぼ南北方向かこれに直交するのに対し，この遺構は真北方向に斜行している。もう１つは埋土状況である。他の遺構の埋土は上下堆積が多いのに対し本遺構では黒褐色の砂と土が入り混じった状態であった。粘土は鑑定の結果熱風化を受けていることが分かった。遺物は製塩土器や須恵器片など周辺の包含層遺物のほか，土師質土器，瓦器等が出土した。粘土は黒色のものが使われている。

㉒　SX23（「実」第295図）

C－11区第２層で検出した楕円形の深い土坑である。長軸3.15m，短軸1.95m，深さ70cmの大きさで，黄色粘土が使われている。埋土は３層に区分でき，上層は黒色土，中層は黒褐色砂質土で，黄色粘土ブロックが多く入っていた。下層は灰黒色粘質土で，下層は側壁から底部にかけて堆積していた。

石は約200個出土したが，約半数は遺構上面に密集していた。河原石と花崗岩との割合はほぼ半数づつで，熱により赤変しているものが多い。土坑上部の粘土片の科学分析を行ったところ，熱変化を受けていることが判明した。

出土遺物は周辺の奈良～平安時代の包含層の遺物や，土師質土器（第86図２・３・（「実」第303図12～15・17），瓦器，輸入磁器（「実」第303図16），有溝土錘（第86図４～６・「実」第303図35）が出土した。

㉓　SX24（「実」第300図）

C－12区第２層で検出した円形に近い楕円形の深い土坑である。長軸2.15m，短軸1.70m，深さ75cmの大きさで，黒色粘土が使われている。埋土は２層に区分でき，上層は赤褐色中砂で，下層は側壁から底部にかけて黒褐色粘質土が堆積しており，この層は側壁に近づくと堅くなり，ブロック状を呈していた。又土坑底部の北東部には大きめの黒色粘土ブロックがあった。底部粘土下には暗黒褐色土が約５～15cmあり、土器片が含まれていた。

石は約250個出土したが，半数は土坑上面に集中しており，残り半数は土坑中の特定の位置や深さに集中することなく，埋土中からまんべんなく出土した。石の種類は河原石が約110個，花崗岩が約110個で，残りは緑泥片岩，安山岩，その他である。出土遺物は周辺の包含層の遺物を初

め，土師質土器（第86図７～９・「実」第303図６・７・10・11），瓦器（第86図10・11・13・14・「実」第303図９），輸入磁器（第86図12・「実」第303図８），大形管状土錘（「実」第303図36）などが出土した。

㉔　SX25（「実」第301図）

Ｃ－13区第２層で検出した長楕円形の土坑である。長軸4.55m，短軸1.8m，深さ58cmの大きさで，29基のなかで最も長いものであるが，構造が他の土坑と異なり，多少複雑な構造をもつ。南１m内側のところで粘土壁が巡り，土坑が２つに仕切られているような構造であるが，縦断面を観察すると南側の粘土壁は暗黄色なのに対し，北側の壁は黒色粘土が使われており，一見すると，南側にあった暗黄色粘土土坑を破壊し北側に新たに黄色粘土土坑を築いたように思われる。しかし黄色粘土土坑の掘り方は北側（第７層）にはあるが南側にはなく，暗黄色粘土土坑の粘土下の第16層が黄色粘土土坑の下まで広がっており，このような現象は２つの土坑の切り合い関係ではなく，元来このような構造の土坑であったか，黄色土坑の南側に新たに暗黄色粘土壁を巡らし拡張したものと解釈できる。北側の黄色粘土土坑の底部は黄色粘土の下にさらに黒色粘土が張られており，その下にはさらに厚さ約５cmの灰色砂層がある。埋土は３層に区分できいずれも砂質土である。石は上・中層から約100個出土した。花崗岩と河原石との比率は半々である。下層からも約50個の石が出土し，比率は同じく半々である。

一方，南側の暗黄色粘土壁の方は底部粘土下には暗灰黒色砂質土があり，奈良時代の製塩土器が少し包含されていた。埋土は大きく上下２層に区分でき，上層は灰色を呈し極めて堅くなっていた。石は上層から散在した状況で約50個出土したが，大半は河原石である。下層からは75個の石が出土したが，河原石は30個で残りは花崗岩である。

出土遺物は周辺の包含層遺物と同じである製塩土器・須恵器や土師質土器（第86図15・「実」第303図18～22），瓦器，管状土錘（第86図16），飯蛸壺である。

㉕　SX26（「実」第298図）

Ｃ－14区第２層で検出した円形土坑である。径84～86cm，深さ20cmの大きさで，黄色粘土が使われている。上面は円周状に粘土はあるが底部には粘土はなく，黒褐色土があった。崩壊した土坑の一部と考えられる。埋土は灰黄色砂質土で，塊石が１ヶ有り，石の下に土師質土器椀があった。

㉖　SX27（「実」第296図）

Ｃ－13区第２層で検出した不整形な粘土盤の広がりである。粘土は厚さ10～20cmで，１m四方の範囲に広がっていたが，粘土の広がり状況や粘土上の石の散布状況からみて元来は径1.1～1.2mの粘土盤であったと推定できる。石は粘土上に人頭大から拳大のものが約50個散乱していた。石は赤変しており，粘土も熱を受けていた。出土遺物は土師質土器椀（「実」第303図32），輸入磁器（「実」第303図30・31）である。

㉗　SX28（「実」第302図）

Ｃ－11区第２層で検出した，楕円形と推定される深めの土坑である。南部が破壊されていたため，本来の規模は不明であるが，短軸2.2m，深さ65cmで，長軸は3.8m程度と推定される。外周の粘土は暗青灰色粘土が使われているが，底部は内側に更に黄色粘土が張られていた。埋土は３層に区分でき上層は赤褐色砂質土，中層は灰黄色砂，下層は茶褐色砂で黄色粘土が混入していた。石は中・下層を中心に約230個出土した。

出土遺物は土坑周辺の奈良～平安時代の包含層遺物の他，土師質土器椀・土鍋，瓦器（第86図17），輸入磁器等が出土した。

㉘　SX29（「実」第299図）

C－9区第2層で検出した円形の小さい土坑である。径1.1m，深さ25cmの大きさで，黄色粘土が使われているが，部分的には黄色粘土の下に青灰色粘土が使われている。埋土は黒茶色砂質土の単層で，製塩土器片，飯蛸壺，貝等が少量入っていた。石はない。

㉙　曲物土坑（「実」第317図）

K－28区南端中央で検出した円形土坑である。径50cmの掘り方で，曲げ物が埋置されていた。曲げ物は内径45cm，高さ17cmの大きさで，灰白青褐色砂が堆積し，上部には花崗岩塊石3個があ

名　称	地区・層位	旧遺構番号	大　き　さ			粘土色調	粘土厚 cm	石の有無	底構造	上面の標高 m	出　土　遺　物
			長軸cm	短軸cm	深さcm						
SX1	ヤケヤマJ－3	ヤケヤマ粘土遺構	290	100	15	黄　色	8	なし	単一	2.8	なし
2	C－46　第2層	SX8301	260	170	(推)20	青灰色	—	180	不明	1.6	土師質土器，瓦器杭，土釜
3	C-45·46第2層	SX8302	280	160	(推)30	〃	—	300	〃	1.5	土師質土器，青磁，巻貝
4	D－46　第2層	SX8303	210	180	(推)20	〃	—	130	〃	1.5	製塩土器，土師器細片
5	B·C-45·46第2層	SX8304	(推)130	(推)90	25	黄　色	—	なし	〃	1.5	製塩土器細片
6	D－46　第2層	SX8305	(推)200	155	(推)20	黒灰色	—	13	〃	1.5	なし
7	D－47　第2層	SX8306	105	45	0	淡緑灰色	15	0 なし	—	1.4	なし
8	E－39　第2層	SX8307	440	175	(推)40～60	淡黄色 淡青灰色	—	0 なし	不明	1.7	大形有溝土錘
9	D－40　第2層	SX8308	165	133	(推)40	暗青灰色	—	0 なし	〃	1.6	〃
10	G－14　第2層	G-14粘土塊	75	—	—	黄　色	12	0 なし	—	1.8	土師質椀
11	E-24第3層上面	SX8001	205	130	30～37	黄灰色	8～14	84	単一	1.5	土器細片
12	F－22　第2層	SX8002	280	280	40	灰黒色	10～13	137	〃	1.7	土器細片
13	F－22　第2層	SX8003	240	210	60	灰黒色	10～30	35	二重？	1.8	大形有溝土錘1点，土器細片
14	G－20　第2層	SX8008	83	60	20	汚黄色	5～10	0 なし	／	1.9	土器細片，木炭粒
15	F－13　第2層	SX8004	380	120	40	黄　色	12～16	10	二　重	2.1	土師質土器，瓦器，土錘
16	E－14　第2層	SX8005	215	120	15	灰青色	7	17	／	2.1	なし
17	E－13　第2層	SX8006	290	175	43	黄　色	5～10	(20)	二　重	2.1	土師質椀·土鍋，土錘，瓦器，磁器，輸入陶器
18	D－13　第2層	SX8007	360	125	37	黄　色	5～10	0 なし	単一	2.0	製塩土器，土師器，土師質土器，瓦器 飯蛸壺，土錘
19	E－12　第2層	SX8009	288	215	37	黄　色	16～20	(数10)	／	2.1	製塩土器，土師質土器，瓦器，輸入磁器
20	F－14　第2層	SX8010	80	80	13	黄　色	7～10	なし	／	2.0	製塩土器片
21	E－14　第2層	SX8011	215	105	20	黄　色	10～12	(約50)	／	2.0	製塩土器，土師器，土錘
22	D－12　第2層	SX8012	270	105	25	黒　色	7～20	約　20	／	2.1	製塩土器，須恵器，土師質土器，瓦器
23	C－11　第2層	SX8013	315	195	70	黄　色	6～7	約 200	／	2.0	製塩土器，土師質土器，瓦器，輸入磁器， 有溝土錘
24	C－12　第2層	SX8014	215	170	75	黒　色	5～14	約 250	二　重	1.9	製塩土器，土師質土器，瓦器，輸入磁器， 大形管状土錘
25	C－13　第2層	SX8015	(推)455	180	58	黄色（黒）	10～20	約 100	三　重	1.9	製塩土器，須恵器，土師質土器，瓦器， 管状土錘，飯蛸壺
26	C－14　第2層	SX8031	86	84	20	〃	4	1	／	1.9	土師質土器椀
27	C－13　第2層	SX8032	120	110	／	黒　色	10～16	約　50	／	1.7	土師質土器椀，輸入磁器
28	C－11　第2層	SX8033	(推) 380	220	65	黒色（黄）	10～20	230	三　重	1.9	製塩土器，土師質土器椀·土鍋，瓦器，輸入磁器
29	C－9　第2層	SX8034	110	100	25	黄色（灰青）	7～10	なし	／	1.7	製塩土器片，飯蛸壺，貝

第14表　粘土遺構一覧表

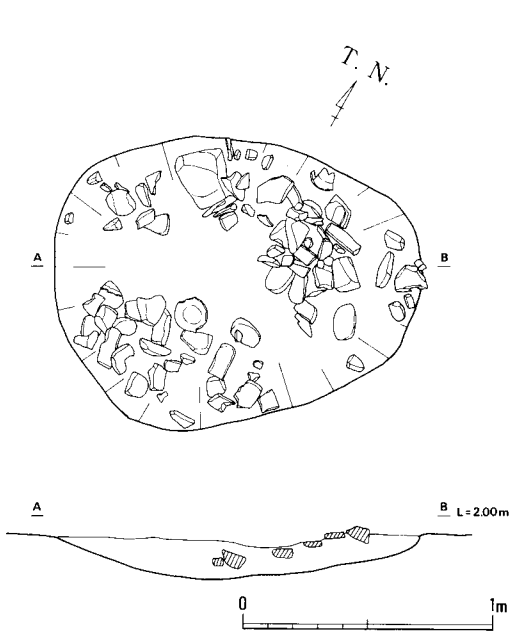
り，中から瓦器椀２点の他，自然木片，マツボックリが出土した。上部が削平されていたため全体構造は不明であるが，井戸ではなかろうかとおもわれる。

㉚　Ｄ－13区SK01（第87図）

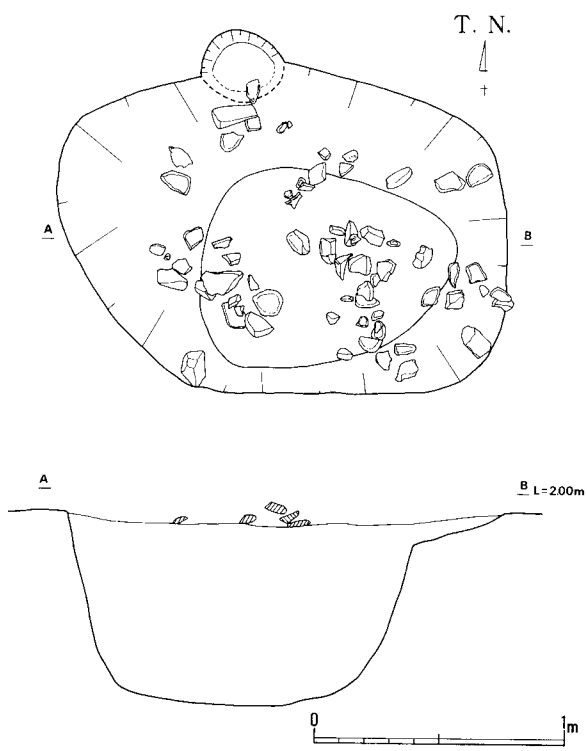
Ｄ－13区中央付近で検出した集石土坑である。長軸140cm，短軸110cm，深さ15cmあり，埋土は黒色砂質土である。埋土中に石が約100個あり，人頭大の花崗岩数個の他は拳大の河原石で，ほとんどが火を受け赤変していた。遺物は石に混じった状態でほぼ完形品の土師質土器椀２点，土師質土器杯１点，瓦器椀１点，大形管状土錘１点が出土した。性格は炉跡ではないかと思われる。

㉛　Ｃ－12区SK01（第88図）

C-12区南西部で検出した素掘りの土坑である。長軸175cm，短軸130cm，深さ70cmの大きさで，黒灰色砂質土が堆積していた。埋土中には周辺の包含層の遺物である製塩土器の他，土師質土器片，瓦器片等が出土した。石も多く，土坑上面に約70個散乱しており，埋土中からも多く出土した。このように深い土坑は本遺構のみで，性格は不明であるが，粘土遺構が集中する地区にあったり，深さがSX23・24に近い点などからみて，粘土遺構に関係した用途をもつ土坑であったと思われる。



第87図　Ｄ－13区　SK01　実測図



第88図　Ｃ－12区　SK01　実測図

⑵　南端地区の遺構（「実」第304～311図）

本遺跡の最も南部にあたる南端地区で，この時代の遺構が比較的まとまって検出された。「実」第309図上段の遺構配置図は第３層から第４層上半で検出した遺構で，SZ１～４やSK１・４，Ｐ２・７・８等が主な遺構である。時期は13世紀初め頃で，遺構，遺物の在り方からみて，住居区域と考えて良いだろう。

下段の配置図は第４層下半から第５層上面にかけて検出した遺構で，SK５～７は12世紀後半

頃と考えられ，上層の性格と大差無いと思われるが，第５層上半で検出されたSK９・10は９～11世紀頃と考えられる。

① SZ01

方形に組まれた石積み遺構である。幅約50cm，高さ30～40cmの規模で口の字状に石組みがなされ，内側と外側に面を持つ。規模は外側で南北284cm，東西244cm，内側で南北168cm，東西134cmである。石の組方は基底部の内側と外側に平行して石を並べ，其の上に２～４段に石を積上げている。上面は凹凸のため，本来はもう少し上に石が積上げられていた可能性がある。使われている石は幼児の頭程度の安山岩塊石が多い。

この石組が中央部分の構造で，東・北・西の３辺には外側にはさらにコの字状に張りだしの石組が付く。張り出しは東辺の物が遺存状態が良く，辺の中央に付き，長さ133cm，幅60cmの大きさである。石は２段程度に積み上げている。検出時には中央石組内部に多量の石が散乱していたが，意図的に配した状態ではなく，上部の石組が崩壊落下したものであろう。遺物は石組中から，土師質土器小皿（「実」第306図３・４），有溝土錘（同図６）が出土した。

② SZ02

SZ01の南約７ｍに位置する。Ｌ字状の石列である。長さは南北方向が196cm，東西方向が143cm有る。石列は両方向とも２列平行しており幅は約40cmであるが，東西方向のものは残りがよくない。この石列はSZ01の状態からみるとSZ01と同様な石積みの基底部と思われる。東辺内側の石列に接して拳大の粘板岩系の石の集積があった。

遺物は石組中から土師質土器椀（「実」第306図１），石組上面から白磁椀（「実」同図５）が出土した。

③ SZ03

SZ01とSZ02の間に位置する，１列のみの石列である。方向は東西方向で長さは240cm有る。一部分に二段目の石が残っていたが，他は崩壊していた。石列の北側にはSZ02と同様に粘板岩系の石の集積があった。この石列も方形石組の基底部の一部であろう。遺物は石組中から土師質土器椀（「実」第306図２）が出土した。

④ SZ04

Ｂ－04区を中心に第４層上面において検出した大形の土坑で，概報において「湧水溜遺構」として報告したものである。大きさは南北10.5ｍ，東西7.4ｍで不整形な平面形をしている。側壁の北側は長さ約５ｍあり，西端は長さ1.8ｍに渡り石が並べられている。他の部分は壁面に沿って黒色粘土が貼られている。東側の側面は長さ約10ｍあり，配石は見られない。南側は検出しただけで長さ約４ｍで，石が並べられている。更に１ｍは西側に広がるようである。西側の北隅は北側の配石の続きを長さ約３ｍ検出したがこれより南側は自然石の露頭があり，これを側壁に利用しているようである。深さは50～70cmあり，埋土は概ね４層に区分できた。第１層は淡灰色粘質土，第２層は暗灰色粘質土，第３層は淡灰色粘土，第４層は赤褐色土である。

出土遺物は「実」第311図に示したとおり土師質土器椀・皿，瓦器，輸入磁器，飯蛸壺，管状土錘，有溝土錘の他，鉄釘，常滑焼甕，製塩土器片等が出土した。

この遺構の性格は，住居区域と思われる地区にあること，此の付近からは丘陵からの湧き水が得られること，遺構内部の粘土は漏水防止と考えられることから，集水施設と思われる。

⑤ SK４

Ｂ－02区で検出した，長軸294cm，短軸112cm，深さ約30cmの土坑である。埋土は黒褐色砂で，中世製塩土器（「実」第335図１～37）が多量に出土したのが特徴である。此のほか，須恵器片，土師質土器片，瓦器片，飯蛸壺等が出土した。

⑥　Ｐ２

Ｃ－０区で検出した径62cm，深さ23cmのピットである。埋土は黒色砂に炭化物を多く含んでいた。底部付近に花崗岩礫３個と大型有溝土錘が円形に並べられており，上面は火を受けたらしく赤褐色に変色しており，炉跡と考えられる。遺物は大型有溝土錘12点の他，土師質土器，鉄釘，中世製塩土器，瓦質土器等が出土した。

⑦　Ｐ７

Ｃ－02区で検出した径77cm，深さ15cmのピットである。埋土は黒色砂で，中世製塩土器が比較的多く包含されていた。この他に土師質土器，黒色土器，管状土錘，須恵器片，瓦器片等が出土した。

⑧　Ｐ８

Ｃ－02区で検出した径70cm，深さ17cmのピットである。埋土は黒色砂で細かい炭化物を多く含んでいる。遺物は鞴の羽口２点(「実」第333図25・26）鉄滓２点，鉄釘１点の他，土師質土器片，中世製塩土器片等が出土した。出土遺物から見て，小鍛冶に関係した遺構であろう。

⑨　SK１

Ｂ－01区で検出した長軸266cm，短軸84cm，深さ５cmの浅い土坑である。埋土は黒褐色の砂で，中世製塩土器が多く包含されており，他に土師質土器，須恵器，黒色土器，鉄滓，飯蛸壺，管状土錘等が出土した。

⑩　円板状土・石製品集中箇所

Ｂ－１区第３層，Ｃ－１区第３層，Ｃ－１区第４層に円板状土・石製品が集中している箇所が４ヶ所あった。遺構の輪郭は検出し得なかった。

Ｂ－１区第３層のNo.19地点として取り上げた箇所は226点が集中しており，Ｃ－１区第３層のNo.21地点として取り上げた箇所は185点が集中していた。

⑪　SK５

Ｂ－01区で検出した長軸142cm，短軸68cm，深さ10cmの土坑である。埋土は黒褐色砂で，中世製塩土器（1.2kg）が比較的多く包含されており，他に土師質土器片，飯蛸壺，土錘等が出土した。

⑫　SK６

Ｂ－01区で検出した長軸110cm，短軸60cm，深さ13cmの不定形な土坑である。埋土は黒褐色砂で，中世製塩土器（1.7kg）と土師質土器片が出土した。

⑬　SK７

Ｂ－02区で検出した長軸210cm，短軸46cm，深さ15cmの不定形な土坑である。埋土は黒灰色の砂で，土師質土器片，中世製塩土器片が出土した。

⑭　SK９

Ｃ－１区で検出した長軸182cm，短軸64cm，深さ32cmの土坑である。埋土は黒灰色砂で，土師質土器片，中世製塩土器片が出土した。

(3)　ヤケヤマ南・東麓の遺構（「実」第276図・第313図～第320図）

ヤケヤマ南麓のＪ～Ｌ－50～54区やヤケヤマ東麓地区からこの時期の遺構を多く検出した。南麓では約70のピットと土器の集中箇所を検出した。

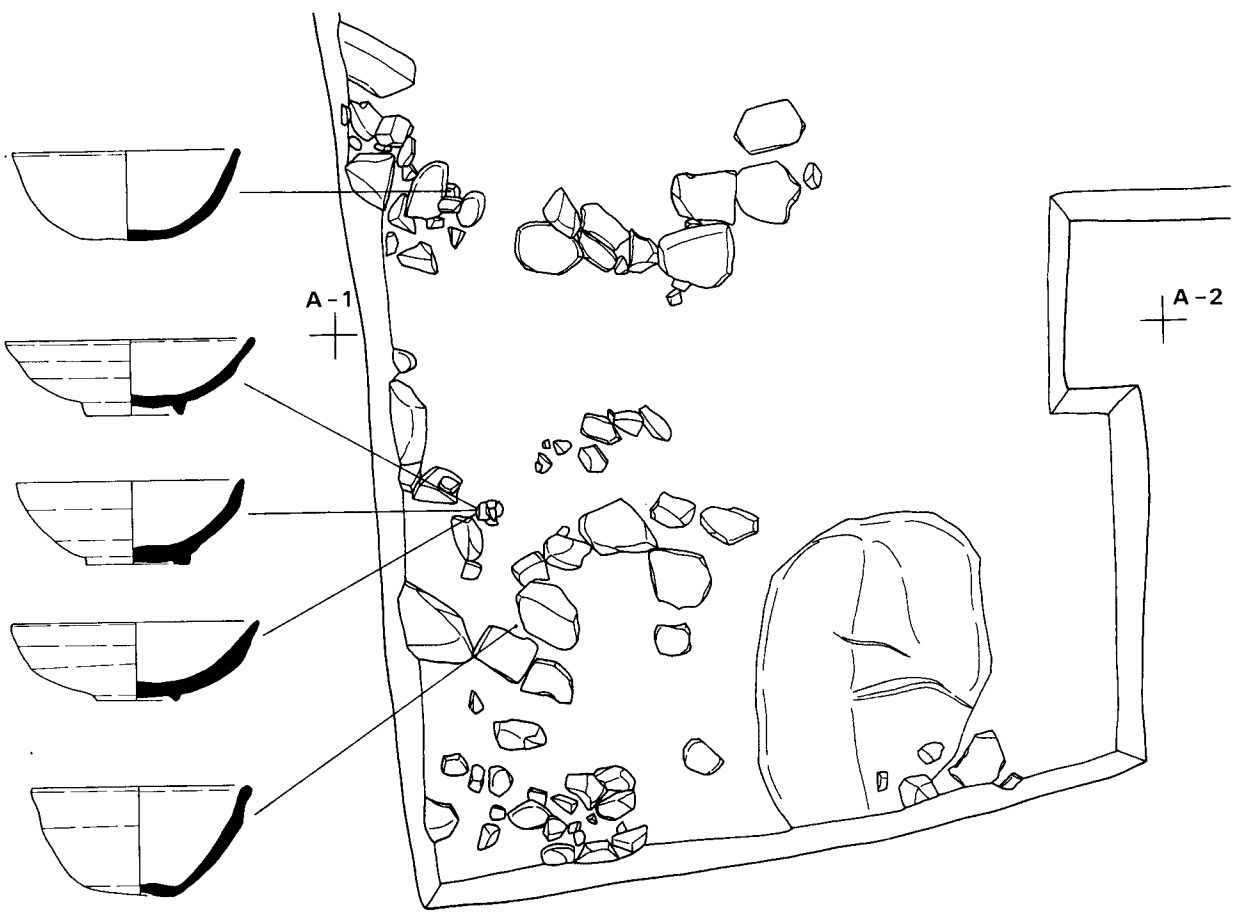
東麓地区では第４層上面においてこの時代の遺構面を検出した。注目できるものは粘土遺構とこれに関係すると思われる焼土面である。その他の遺構については概報でＥ～Ｈ区において２棟の建物と１列の柵列を報告したが，整理の結果，当該時期のものとは決定し得なかったので，本報告では報告していない。

①　SX１

ヤケヤマ東麓Ｊ－３区の古式土師器包含層を掘りこんでつくられていた。楕円形の浅い皿状の土坑である。長軸2.9m，短軸1.0mの大きさで，深さは15cmと浅いのが特徴である。埋土は粘土で，淡黄褐色，淡灰色，灰色，黒色の粘土が小さい塊となっており，無造作に投げこまれた後，叩き締められた感じであった。粘土の中には石は無く，出土遺物も皆無であった.

この遺構の西隣（地形的には標高の高い方向）には，南北４m，東西2.6mの範囲に焼土面が広がっており，粘土遺構と焼土面とは何らかの関係があると思われる。

この遺構が29基検出した粘土遺構のうちで最も北に位置し，丘陵裾に位置する点で他のものと区別できる。



第89図　ヤケヤマ東麓地区Ａ－０区土師質土器出土状態図

② ヤケヤマ東麓Ａ－０区（第89図）

Ａ－０区の南西隅の花崗岩塊石の間から完形の土師質土器椀が集中して５点出土した。このような出土状態は本遺跡では特異なもので，祭祀か墳墓に関係したものであろう。

③ Ｌ－３区SB03

Ｌ－３区南西部で掘立柱建物跡を検出した。桁行2.6m，梁間1.4mの規模である。

④ Ｎ－54区土器集中箇所

Ｎ－54区南東隅の第３層で，東西約２m，南北約１mの範囲に，土師質土器椀（「実」第315図３・４），土師質土器小皿（同図２），瓦器椀（同図１），白磁椀（同図５）土師質土器土鍋脚部，土師質土器竈等が集中していた。

⑤ Ｋ－51区Ｐ１・Ｐ２

Ｋ－51区で６穴のピットを検出した。このうち，２穴から破片の大きい遺物が出土した。Ｐ１からは瓦器小皿（「実」第313図１）と白磁椀（「実」同図３）が出土した。Ｐ２からは土師質小皿（「実」第313図２）が出土した。

⑷ 遺　物

この時代の遺物は，土師質土器，瓦器，瓦質土器，輸入陶磁器，石鍋，製塩土器，銅銭，鉄製品，鞴口，円板状土・石製品，土錘，飯蛸壺等が出土した。このうち土錘，飯蛸壺は前節で一括して報告している。

① 土師質土器（「実」第321図～第324図）

土師質土器は整理用コンテナ15箱程度出土した。器種としては椀，杯，小皿，土鍋，土釜などである。量的には椀，小皿が圧倒的に多い。

椀の平均的な大きさは口径14cm，器高５cmで，貼り付け高台のものである。色調は黄白色で，「早島式土器」と呼ばれているものが大半である。地区別に出土状況を見たのが第90図である。ヤケヤマ東・南麓とＢ～Ｄ－９～14区に出土量が多いのが目立つ。

杯の出土は少なく，ほとんどを図化した。

小皿の平均的な大きさは口径７cm，器高1.5cmで出土したほとんどが底部のヘラ切り技法のものである。「実」第323図31は回転糸切りである。

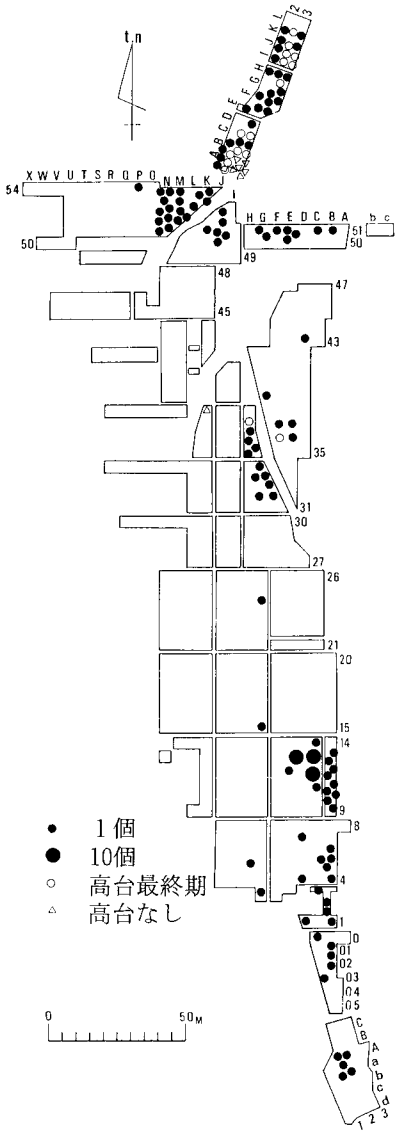
② 瓦器・瓦質土器

瓦器は整理用コンテナ１箱程度出土した。地区別の出土状態は第91図に示した。ヤケヤマ東・南麓地区が最も多く，次で浜南部が多い。

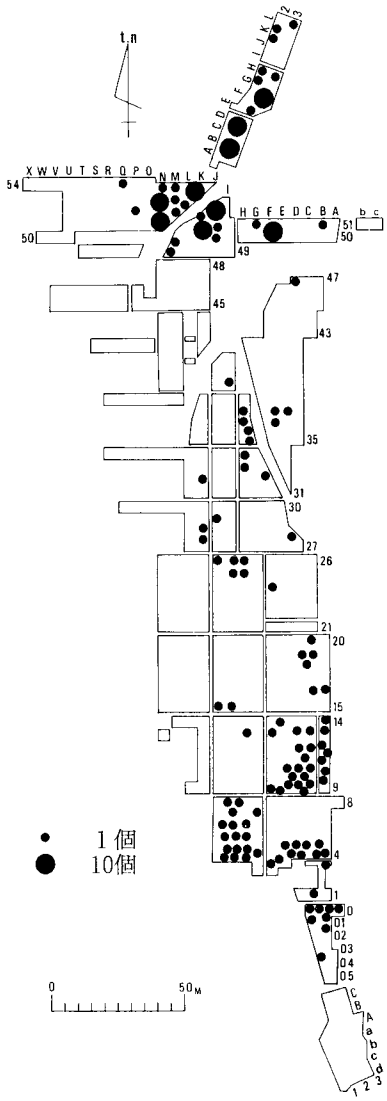
器種は椀と小皿で，量的には椀のほうが圧倒的に多い。細片の出土が多く，図化出来るものはほとんど「実」第327図・第328図に示した。

椀の平均的な大きさは口径15.0cm，器高4.6cmで，断面三角形の高台が貼り付くもので，ヘラ磨きは外面に数本程度しか無いものが多く，内面も散漫で，見込み部分は粗雑な格子目と成っているものが多い。大半は和泉型で13世紀前半のものが多いが，「実」第328図17～19は楠葉型で12世紀後半のものである。

瓦質土器は椀，土鍋等が出土した。出土量は極めて少なく，椀は10個体程度の出土である。



第90図　土師質土器椀出土分布図

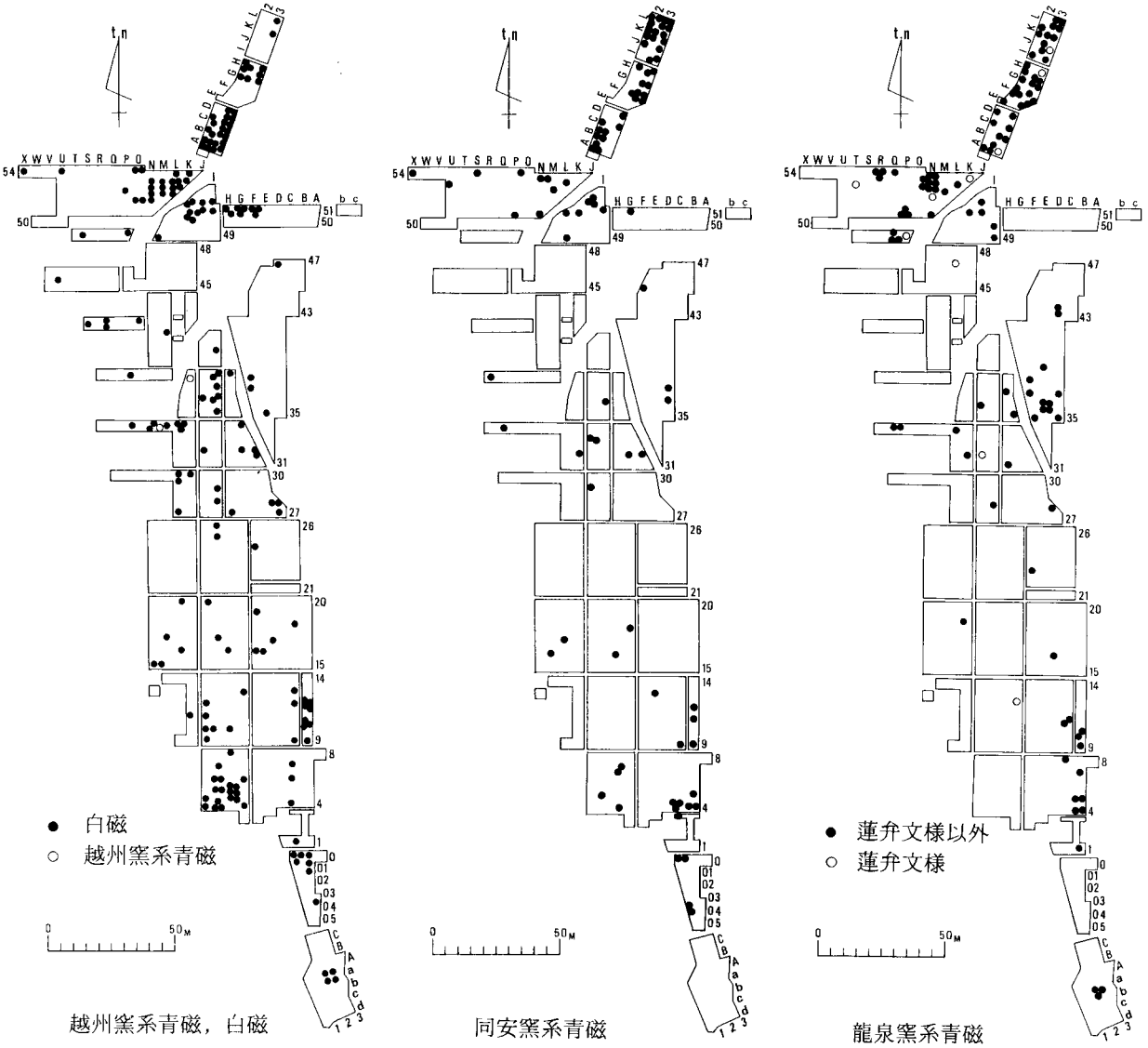


第91図　瓦器出土分布図

③　輸入陶磁器（「実」第329図～第331図）

輸入陶磁器は量にして整理用コンテナ約３箱分出土した。陶器は「実」第329図に図化した６点が全てである。１は四耳壺で，体部上半以上は完形である。２は破片数点から図上復元したもので，水注と思われる。３～５は壺の口縁部と底部である。６は黄釉褐彩絵洗で，破片からの図上復元である。

磁器は白磁がコンテナ約１箱，青磁が約２箱程度出土した。「実」第330図は白磁をそれぞれ図化したものである。「実」第331図１・２は越州窯系の青磁底部の破片で，３～16は龍泉窯系青磁で，17～33は同安窯系の青磁である。



第92図　輸入陶磁器出土分布図

④　石鍋・陶器（「実」第326図）

滑石製の石鍋は３点出土した。いずれも小破片の出土で，図上復元したものである。１は口径10.5cmで，口縁部はやや内湾し，やや尖りぎみの鍔が付く。２は口径12.3cmのもので口縁端部はやや丸みを持ち，鍔はない。３は口径11.2cmで，転磨を受けており鍔や口縁端部が丸みを持つ。

陶器は東播系須恵器，亀山焼，常滑焼等が出土した。量的には少ない。「実」第326図１は東播系の片口鉢である。口径13.5cm，推定器高９cmで，口縁部は肥厚し玉縁状になっている。

⑤　製塩土器（「実」第335図）

南端地区第４層の遺構や包含層から整理用コンテナ約２箱分の製塩土器が出土した。遺構からの出土が多く，古墳時代後期～平安時代のように土器堆積層をなさないのが特徴である。完形品の出土はなく破片での出土であるが，図上復元すると口径８～12cm，器高11～15cm，器厚は２～６㎜である。器形はおおむね砲弾型で底部は尖る。口縁部は大きく３種類あり，内彎するもの，直立するもの，外反するものに分けられる。

口縁部が外反するもの以外は平安時代の製塩土器に器形は良く似ているが，胎土や焼成が大きく異なる。

胎土は柔らかく，砂粒が多く金雲母を含むものと含まないものとがある。色調は赤褐色を呈するものが多く，焼成は脆弱である。調整は指頭によるもので，内面はナデ，外面は指押さえである。

穿孔のある土器片が約20点出土した。穴は円形で，径４～５㎜のものが多い。底部付近にあけられたと分かるものが数点ある。

「実」第335図はSK４から出土したものを中心に図化したものである。１～５は口縁部が内彎するもの，７～15は直立するもの，16～28は外反するものである。29・30は穿孔土器で，31～37は尖底部の実測図である。

第15表は口縁部の形態と胎土の金雲母の有無を層位ごとに集計したものである。これによると，口縁部の形態は内彎するものから外反するものに変化していったことがわかり，胎土の選択も新しい時代になって変化したことが分かる。

項目 / 層位	内彎（%）	直立（%）	外反（%）	金雲母・有（%）	金雲母・無（%）
第４層上層 第１遺構面	25	32	43	63	37
第４層中層 第２遺構面	61	26	13	0	100
第５層（平安前半）	73	26	1	0	100

第15表　中世製塩土器集計表

⑥　円板状土・石製品

土器，陶磁器・石等の破片の周囲を打欠き，円板に仕上げたものである。総数1306点出土した。出土位置は第93図に示した通りで，南端地区に多くが集中し，全体の約８割に当たる1069点が出土した。

南端地区以外の地区では，ヤケヤマ南麓でやや多めの出土を見るが，これ以外の地区では，500～600㎡の広がりから10点前後出土している。また，本遺跡北西約300ｍに位置する旧石器時代の遺跡である大浦遺跡の表土層からも25点の円板状土製品が出土している。このような出土状態を見ると，この遺物は散在的に出土する場合と，１ヶ所から集中して出土する場合の，二つのあり方があることがわかる。後者の場合，南端地区第３層では200個前後が集中する所が２ヶ所と数十個集中する箇所とがあった。

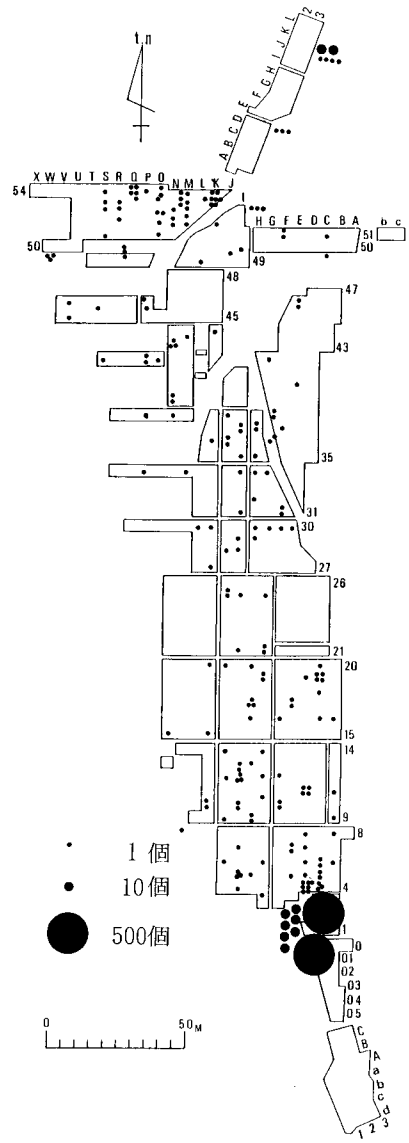
この製品に使われている材料は，製塩土器，土師器，土師質土器，須恵器，陶磁器，瓦器，瓦質土器，石，瓦，サヌカイト等である。材料別の比率を円グラフで表したものが，第17表である。製塩土器が最も多く，全体の約70％を占め，次いで土師器（土師質土器），須恵器の順になる。この傾向は本遺跡から出土した全遺物の量的割合に一致していると解釈でき，浜で手近に入手出来る物を用いて作ったのであろう。

製作の方法は土器片の周囲を幅３～10㎜づつ細かく打ち欠いて作っており，大半の物は周囲を研磨することなく，打ち欠いたままにしている。表裏面の平らな面を研磨したものもない。

第16表は直径の５㎜ごとの比率表である。径62㎜が最大で，最小は径10㎜で，径21～40㎜が全体の８割以上を占める。

⑦　銅銭（第18表，「実」第332図）

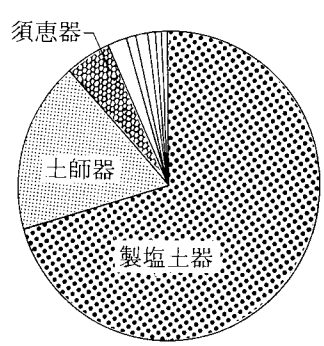
銅銭は９枚出土した。銭種が判読できるのは７枚で，北宋銭が多く，明銭は含まれていない。内容は一覧表でまとめているが，ヤケヤマ地区と南端地区からの出土が多く，粘土遺構が検出さ



第93図　円板状土・石製品出土分布図

直径（㎜）	個数	比率(%)
5～10	1	0.1
11～15	3	0.3
16～20	43	3.3
21～25	283	21.6
26～30	506	38.7
31～35	309	23.6
36～40	109	8.3
41～45	32	2.5
46～50	13	1.0
51～55	5	0.4
56～60	1	0.1
61～65	1	0.1
合　計	1306	100

第16表　円板状土・石製品集計表



第17表　円板状土・石製品材料別比率グラフ

	出土地区	層　位	銭　種	初鋳年	備　考
1	ヤケヤマ J－3	第3層	開元通宝	621年	概報Ⅴ掲載
2	ヤケヤマ A－1	〃	元豊通宝	1078年	〃
3	ヤケヤマ H－3	〃	景祐元宝	1034年	〃
4	ヤケヤマ J－2	〃	天聖元宝	1023年	〃
5	ヤケヤマ F－3	〃	元豊通宝？	1078年	〃
6	B－02	第4層	嘉祐通宝	1056年	〃
7	B－02	〃	元祐通宝	1086年	〃
8	ヤケヤマ E－1	第3層	不　明	—	〃
9	G－3	〃	〃	—	未報告

第18表　銅銭一覧表

れた地区からの出土はない。

⑧　鉄製品（「実」第333図１～22）

南端地区第３層～第４層上層から鉄製品が多く出土した。内容は釘73点，鎌１点，釣針２点である。

釘は破片も含めると73点出土した。断面は全て方形のもので，頂部は折り曲げ式が大半を占める。20点を図化したが，８は完成品と思われる最も小さいもので，長さ2.7cm，重量1.30ｇを測る。20は最も大きいもので，先端が欠損しているが長さ7.6cm，重量15.55ｇある。21は第４層中層から出土した鉄鎌である。残存長9.4cm，最大幅3.1cm，最大厚0.5cmである。22は第５層より出土したため，時期的には平安時代前半に遡る可能性がある。残存長３cm，径0.4～0.6cmで，両端部は欠損しているが，先端部のかえりは残っている。

⑨　鞴口（「実」第333図23～26）

鞴口は南端地区第３層～４層から，約８個体出土した。形態は裾広がりの円筒形で，先端部は丸みをもつ。基部内面は抉り取られており，断面三角形になっている。大きさは長さ10～13cm，底径は10cm前後である。中央部には通風用の穴があり，径は３cm前後である。砂粒の多い胎土で，外面には指頭痕が多く残る。先端部には鉄滓が付着している。25・26はＰ８からの出土である。

この鞴に関連した遺物は，第４層を中心に鉄滓や製品としては釘，鎌，釣針が多く包含されており，南端地区で小鍛冶が行われていたものであろう。

(5)　小　　結

この時代の遺構で注目できるものは粘土遺構で，本遺跡で検出されて以降，瀬戸内地域で類例が増加し始めた。時代は12～13世紀で，性格は第６章で考察しているとおり製塩遺構とみなしてよいだろう。この製塩遺構とは別に平安時代以来の尖底製塩土器が存続していることが明らかになった。この製塩土器は出土位置から見て粘土遺構と直接関係しないと思われ，また土器の胎土が脆弱で，二次焼成を受けた痕跡が無いことから，煎熬用に用いられた物とは考えづらく，祭祀的に用いられたものではないだろうか。

大形有溝土錘はこの時期のものであるが，多く出土していることから，製塩と合わせて漁業の行われていたことが推察できる。

遺物は平野部の通常の集落遺跡と大差無い。但し，輸入陶磁器がやや目立ち，今後その意味について考える必要があろう。円板状土・石製品が多く出土したが，冥銭，玩具等の性格については今後の課題としたい。

第5章　遺構・遺物の自然科学分析

第1節　大浦浜遺跡採集標本と花粉分析結果

元　香川大学教授　故　坂　東　祐　司

櫃石島大浦浜遺跡地の下地区トレンチにおいて地表より深度約1.8mまでの堆積層標本をほぼ10cm間隔において採集した。その結果，各標本についての堆積土の性質と花粉化石分析の詳細は次の通りである。

以下地表より下部にむかって順に記す。

〔F－30－1〕　黄白土（砂）　中～細粒砂

1～2㎜径の石英粒を含む。その他，長石と雲母片を含む。有機物はほとんど含まれない。全体として，海浜の砂丘砂と似た性質の砂で，淘汰はかなり良い。砂中には磁鉄鉱の細片が認められる。粒土分はほとんどなし。花粉化石は分析処理するも，ほとんど含まれていない。現世堆積層と認められる。

〔F－30－2〕　黄白土（砂）　中～細粒砂

1～2㎜径の石英，長石粒を含む。雲母のフレークが多い。粒土分はほとんど含まれず淘汰はかなり良い。堆積物の性質はF－30－1とほぼ同一である。有機物はほとんど含まれていない。全体として，海浜砂の砂と類似している。花粉化石は有機質粘土のほとんど含まれないこともあって，処理したが皆無に近い。現世堆積層と認められる。

〔F－30－3〕　黄白土（砂）　中～細粒砂

1～2㎜径の石英，長石，及び雲母の細片が含まれている。粒土分はほとんど含まれずまた，有機物も含まれない。淘汰はかなり良く，海浜砂の性質を示している。花粉化石は上記2ケのサンプルと同じく，有機質粘土を含まないためほとんど含まれず処理するも検出されない。現世堆積物と認められる。

〔F－30－4〕　黄白土（砂）　中～細粒砂

1～2㎜の石英，長石粒を含む。雲母のフレークを含む。石英，及び長石粒には黒雲母片が付着しているのが認められる。有機物，粘土分はほとんど認められない。淘汰は良い。花粉化石は皆無である。現世堆積物と認められる。

〔F－30－5〕　黄白土（砂）　中～細粒砂

1～4㎜径の石英，長石の粒子を含む。雲母片のフレーク多し。有機物，粘土はほとんど含まれていない。淘汰はおおむね良好。全体として，海浜砂の特徴を示す。採集地点の本標本の含まれる地層はクロスバッドを示し海成の有機物を含まないことから風成砂と考えられる。現世堆積物と認められる。花粉化石は処理する粘土，又はシルト分をほとんど含まず，検出されない。

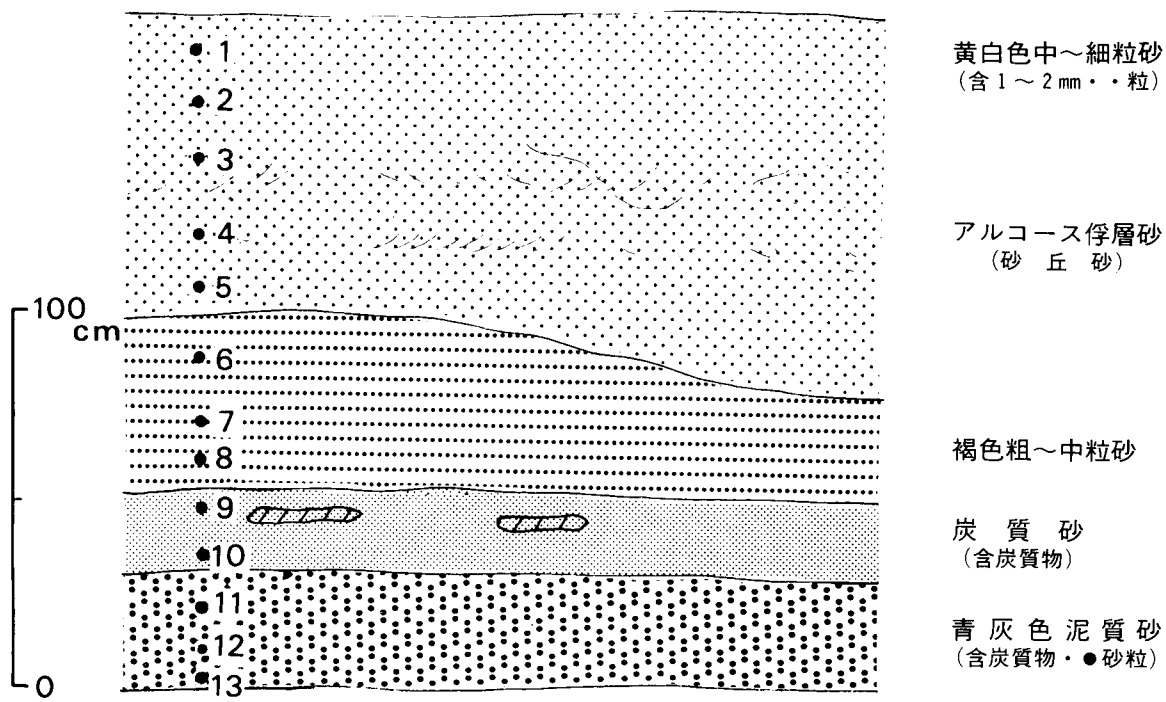
〔F－30－6〕　褐色　粗～中粒砂

石英，長石，及び雲母のフレークよりなる砂で粗粒砂を構成する砂粒は花崗岩の砕屑物が大部分である。また，前記1～5のサンプルの砂とくらべて，褐色を帯ていて，淘汰がやや悪い点で

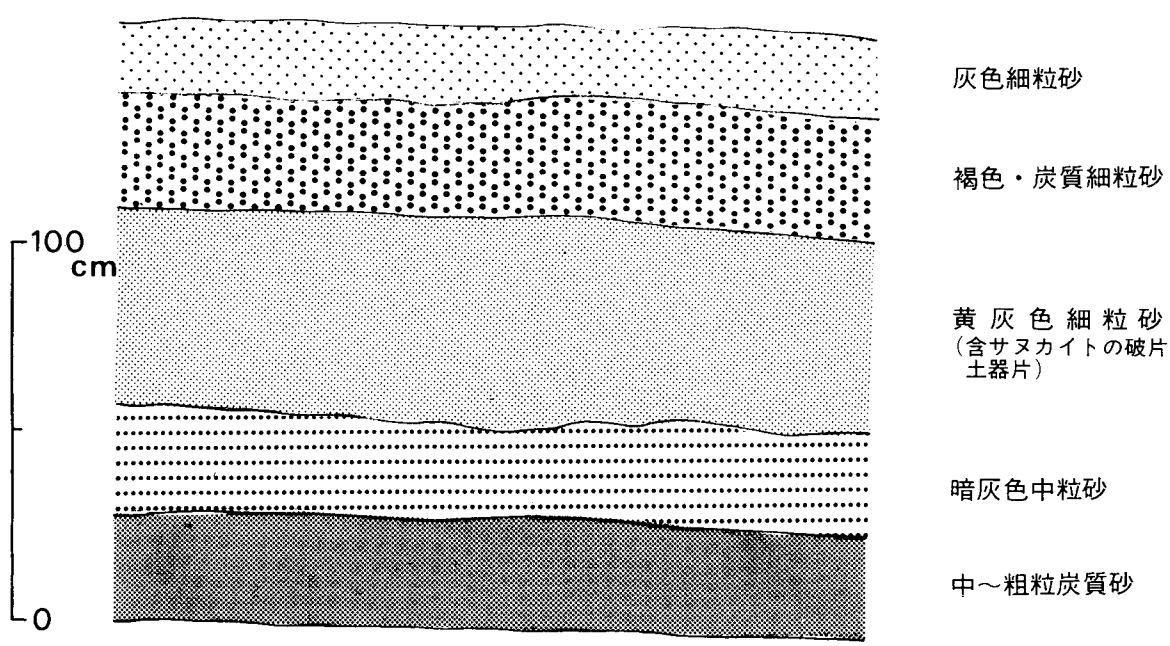
異なっている。有機物，粘土，シルト等はほとんど含まれていない。花粉分析処理を行ったが化石は検出されなかった。縄文後期堆積物の可能性があろう。

〔F－30－7〕　褐色　粗～中粒砂

石英，長石，雲母（黒雲母）のフレークよりなる砂，磁鉄鉱の小鉱物を含む。特に，雲母のフレークは多い。有機物，粘土，シルトはほとんど含まれていない。淘汰はやや良。石英粒は2～3㎜径のものが最大である。花粉化石は検出されない。



第 1 図　櫃石F－30トレンチプロファイル



第2図　櫃石M－38トレンチプロファイル

〔F－30－8〕　褐色　細粒砂

石英，長石，黒雲母の細片よりなる淘汰の非常に良い褐色砂である。砂を構成する鉱物は石英がもっとも多く，雲母のフレークは少い。現地では滞水しており，地下水の滞水層となっている。有機物，粘土，シルトなどは皆無に近い。これらは，地下水の流れにより失われたものと思われる。花粉化石は検出されない。

〔F－30－9〕　灰褐色　中～細粒砂

石英，長石，雲母細片よりなる砂，淘汰はやや良好。有機物，粘土はほとんど含まれない。本砂層は地下水の滞水層となっており，水を多く含んでいる。花粉化石は処理するもほとんど皆無に近い。これは有機質な泥がほとんどなく，仮りに残存していても，地下水流により流失したものと思われる。

〔F－30－10〕　灰黒色　粘土混り砂

石英，長石，黒雲母，粘土により構成されている。石英，黒雲母，長石の鉱物粒は粘土により充塡されている。上記1～9までのサンプル中にはほとんど粘土が含まれていなかったが，本標本より粘土を含むことに大きな相異が認められる。鉱物粒は1～2㎜径のものが多く，中～細粒である。粘土は灰黒色であるが有機物はほとんど含まれていない。鉱物粒と粘土の比は約7：3である。花粉化石はほとんど含まれていない。

〔F－30－11〕　灰黒色　粘土混り砂

石英，長石，雲母（黒雲母），粘土により構成されている。前者三鉱物粒は，灰黒色粘土により粒子間，充塡されている。全体としてF－30－10のサンプルと類似している。粘土の量はF－30－10のサンプルよりやや少く，鉱物と粘土の量比は7：3～8：2程度である。また，鉱物粒に混じて有機物（材木片）の破片が認められる。しかし，花粉化石は非常に少なく，鑑定に耐えるものは認められない。

〔F－30－12〕　灰黒色　粘土混り砂

石英，長石，雲母（黒雲母），及び粘土からなる。前者の鉱物粒は粘土により充塡されているが，粘土中には炭質物を比較的多く含んでいる。鉱物と粘土物の比は約6：4である。有機物は炭質物と材木片の化石からなり球果の化石も多く含まれている。（付図参照）又，珪藻化石も認められる。

化石内容

材化石：長さ30㎝，径5～10㎝のやや炭化した材化石で，薄片で検鏡した結果，二葉松に属するものと思われる。

球果化石：やや炭火し，変形している。化石は二葉松（多分アサマツ）に属するもので，他は含まれていない。

花粉化石：数は少いが，次の花粉化石pinus, Quercus, Pferidium, Hystricho-sphaeridium, Monosulcate type pollen, sporesが含まれている。

動物化石：小型　Gastropods（淡水性）

珪藻化石：Diatom Fragments.

〔F－30－13〕　灰黒色　粘土混り砂

石英，長石，雲母，及び粘土からなる。鉱物粒は中～細粒。粘土はこれから鉱物粒間を充塡している。粘土中には有機物（炭質物）を含んでいる。鉱物と粘土の量比は，約6：4である。化

石は珪藻化石片や花粉化石，材化石片を含んでいる。

化石内容

材化石：やや炭化した材化石で，二葉松に属するものと思われる。

花粉化石：全体として量は極めて少く，pteridium, Elaeagnus等が認められた。

珪藻化石：Diatom Fragments, coscidodiscus類の珪藻と思われるFragmentが認められる。

含有化石についての考察

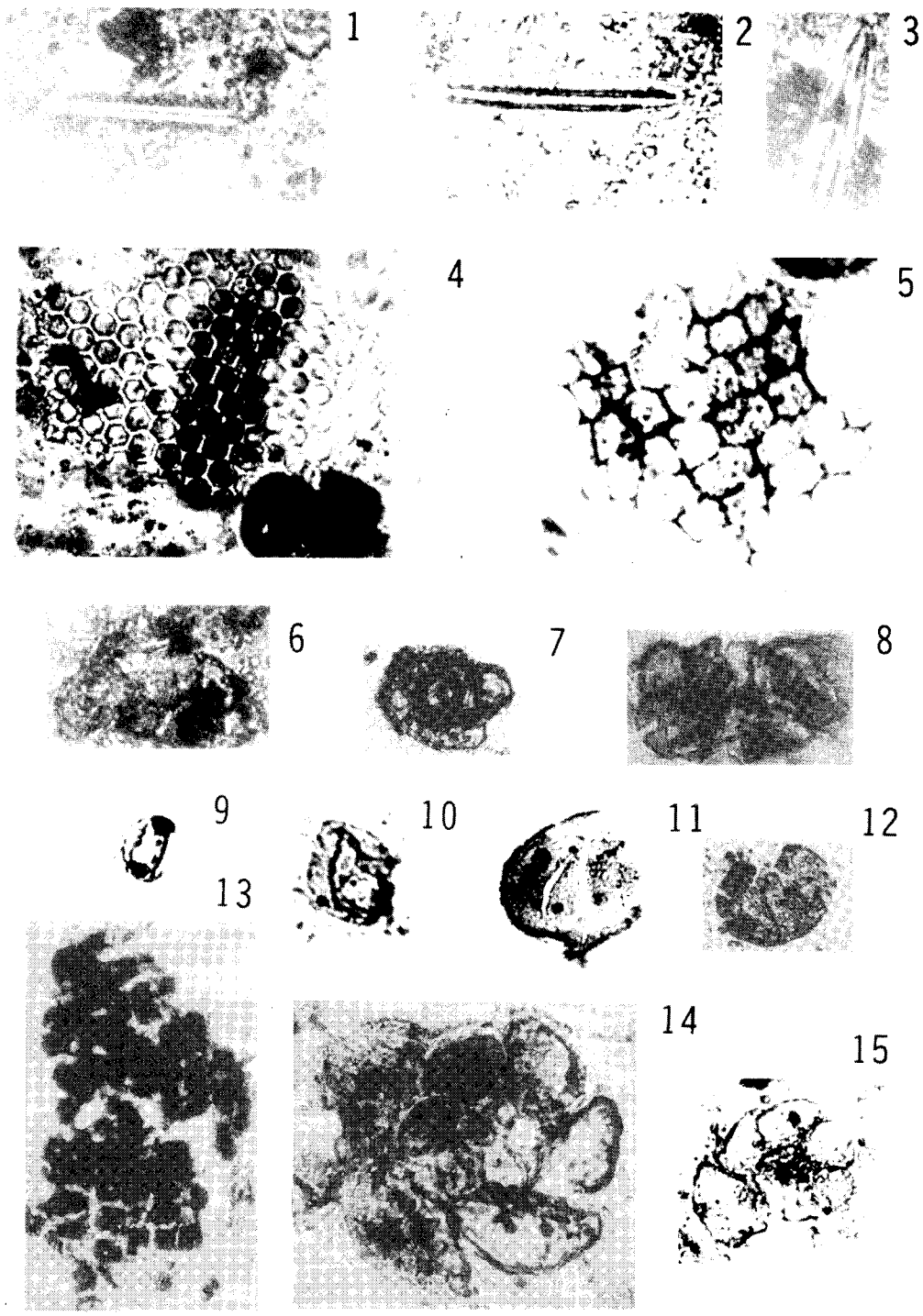
F－30－12，F－30－13の両サンプル中に含まれている化石について考察すれば，次の通りである。

1) 材化石はほとんど二葉松に属するものであり，気候環境の面では，現在とほぼ類似したものであろう。

2) 花粉化石は非常に少いが，マツ，コナラなどが含まれている。

3) 珪藻化石片が含まれているが，完全なものは認められない。特にcoscinodiscus類の網目模様の細胞壁をもった化石片が認められる。淡水性のものと思われる。

（本稿は『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報（V）』に掲載したものを一部改変して，再録したものである。）



1－3：珪藻化石片	F－30－12	8：Spore	F－30－12
4：珪藻化石 (Coscidodiscus)	F－30－12	9－10：スギ類 (Cryptomeria)	F－30－13
5：藻類化石	F－30－13	11, 13, 14, 15：Spore	F－30－12
6－7：松類(Pinus)花粉化石	F－30－13	12：Taxodiacea?	F－30－13

櫃石島・大浦浜地区沖積層花粉，および珪藻化石写真，×300。

第2節　大浦浜遺跡粘土成分分析結果

元　香川大学教授　故　坂　東　祐　司

まえがき

櫃石島の大浦浜に分布する遺跡は今日，砂丘砂により埋没していたが，南端において発見された製塩場の釜跡と思われる遺跡から粘土を採集し，X線分析，ならびに顕微鏡観察を行った。これらのサンプルは塩水の貯水用の釜と，燃焼用の釜の二種があり，それぞれ2点づつ，計4点採集されたものである。

貯水用の釜は，濃縮された塩水を一時貯留するために用いられたものと思われ，釜の表面は約10cmの壁土で被われ，その下は5～10cmの厚さの黒色粘土に供された釜は深さ約0.5m，直径約3mのタコツボ状で，釜の表面は厚さ約10mの黒色焼土となっている。前者の貯水用のものは形状が楕円形であるのに対して，後者のものはほぼ円形である。

標本と分析結果

サンプルは貯水釜の内壁の2層から各1ケと燃焼釜の内壁より2ケ採集した。すなわち，付図の通りである。

サンプルの顕微鏡観察結果

(1)　SX－19：黄灰色土

造岩鉱物：石英，長石，黒雲母のフレーク

その他の鉱物：ザクロ石

粘土鉱物：ベントナイト質粘土

粘土は上記鉱物粒間をマトリックスとして充填している。粘土と鉱物の比は6：4である。長石は風化しているが，鉱物粒として残存している。固結度の高いマサ土風化土に属する。

(2)　SX－22：黒灰色土

造岩鉱物：石英，長石

その他の鉱物：腐植土様粘土

鉱物粒子間の粘土は二次的に溶解し去られた形跡があり，孔隙として残されている。また，鉱物粒子に岩塩？の小結晶が多数付着している。この結晶は二次的に付着，充填したものと思われる。

(3)　SX－23：黒褐色土

造岩鉱物：石英，長石，雲母

その他の鉱物：なし

粘土鉱物：腐植土性粘土

鉱物：粘土の割合は6：4，粘土は鉱物粒子間を充填しているが，二次的な溶解作用を受けており，空隙がみられる。又，岩塩の微晶も見られる。

(4)　SX－24：黒灰色土

造岩鉱物：石英，長石，雲母の小片

その他の鉱物：なし

粘土鉱物：腐植性粘土，ベントナイト質粘土

鉱物：粘土比は約５：５，二次的溶解により鉱物間の粘土は溶解し，空隙として残されている。岩塩の微晶が見られる。全体として非常にコンパクトである。

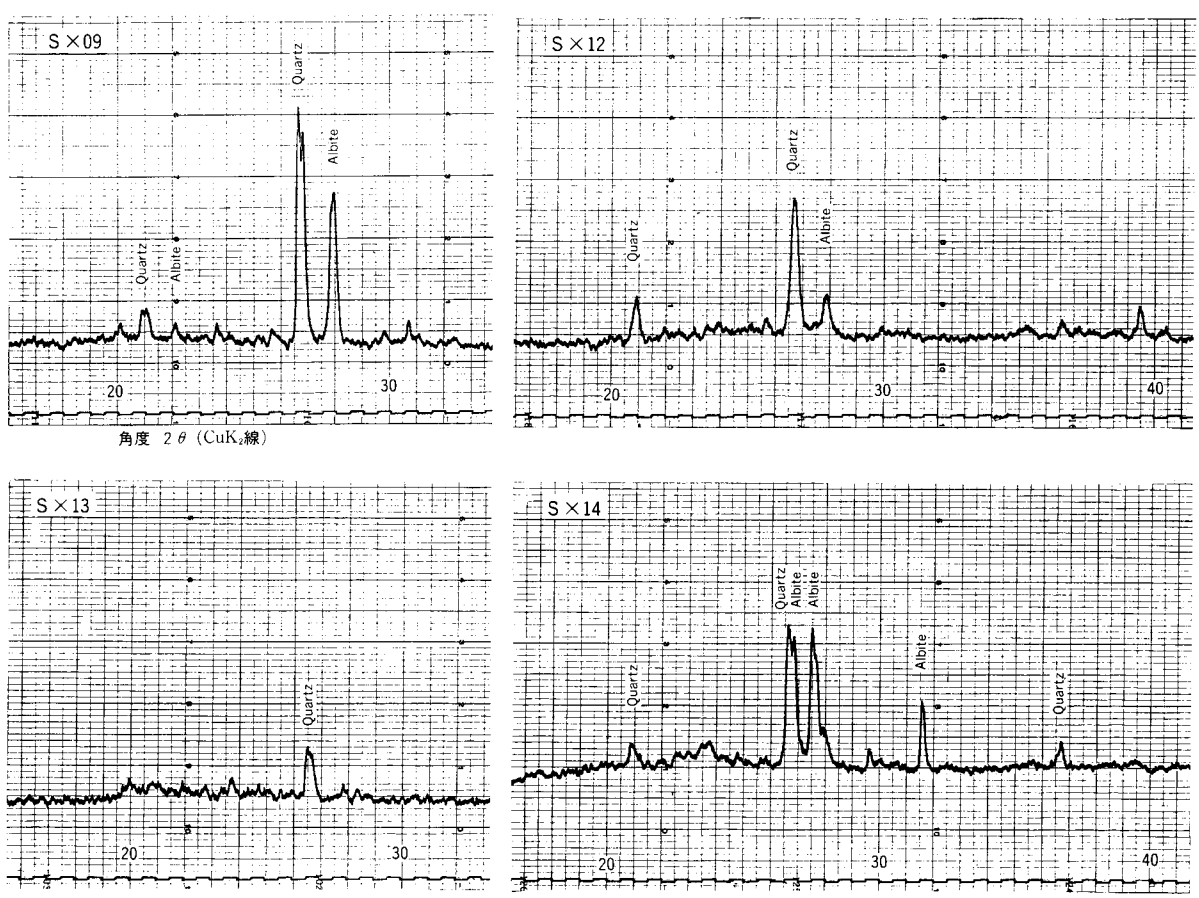
造岩物の中で長石は多少熱による風化作用を受けた形跡が見られる。

X線分析結果

X線による分析結果を付図１図に示したが，結論として次のような事項を挙げることが出来る。

1. ４ケの粘土のサンプル共に原料はマサ土粘土である。
2. 残存鉱物は石英，曹長石である。
3. SX－19のサンプルは普通のマサ土に近い成分を示すが，他の３ケのサンプル（SX－22，SX－23，SX－24）は熱，あるいは熱水による風化を受けている可能性がある。

（本稿は『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報（Ⅴ）に掲載したものを再録したものである。）



第１図　X線分析グラフ

第3節　大浦浜遺跡出土貝の鑑定と考察

香川県立坂出高校　矢　野　重　文

1. はじめに

瀬戸大橋架橋に伴う塩飽諸島の考古学的調査が，昭和51年～昭和58年に実施されたが，その中で最北に位置する櫃石島において最も大規模に発掘調査されたのは，大浦浜遺跡である。大浦浜遺跡は，弥生中後期の空白部はあるが，縄文時代後期から中世まで，ほぼ継続して使用され，各時代の地層からは，貝殻が少なからず出土した。ここでは，出土した貝殻の個体数を種類別に比較して，種々の考察を加えてみたい。

2. 分　　析

第1表は，大浦浜遺跡より出土した貝殻を，その包含層の時代別に分類し，次に種分類して種毎の個体数を数え，それを一覧表にしたものである。まず，巻貝と二枚貝の比率に注目すると，9009：456＝19.8：1で圧倒的に巻貝の方が多いことがわかる。巻貝の中で特に多いのはホソウミニナで，なんと巻貝全体の56%も占めている。以下，ウミニナ（15.7%）・スガイ（10.5%）・イシダタミガイ（5.2%）・イボウミニナ（4.6%）と続いている。さて，これらの貝類は，大きく2つのグループに大別される。それは，干潟の表面を這って生活しているウミニナ科の貝類（ホソウミニナ・ウミニナ・イボウミニナ）と岩礁に付着している貝類（スガイ・イシダタミガイ）である。どちらも中型の貝類で，肉量はそんなに多くないが，潮が引けば誰でも容易に採集できるため，好んで採集されたのであろう。二枚貝では，カキ類が好まれたようで，チリ・ボタンガイ（これはカキではないが，カキと同様に，岩礁に付着している）・カキ・ゲガキ・マガキを合わせると，二枚貝全体の43.2%を占めている。次に時代別にみると，弥生時代の個体数が極端に少ないことと，縄文時代及び奈良時代以降の巻貝の個体数が極端に多いことがわかる。弥生時代の個体数が少ないことは，大浦浜において，弥生時代の遺跡が少ない（特に中後期の遺跡は全く見られない）ことに起因している。縄文後期と奈良時代以降の巻貝の個体数が多くなった原因は，縄文後期の貝殻廃棄土坑2ヶ所と平安時代の貝殻廃棄土坑より大量の巻貝を中心とした貝類が出土したことである。大浦浜遺跡より出土した貝殻のうち，大量にまとまって出土したのはこの3ヶ所の土坑だけであり，その他の土坑から出土した貝殻を除いた一覧表（第2表）を作成してみると巻貝において大きな変化が現われた。

第2表において，巻貝の中で一番個体数の多いのは，サザエ（38.3%）であり，次に多いのは，アカニシ（23.3%）である。ここで注目すべきことは，サザエ・アカニシ共に肉量の多い大型の貝であるということである。二枚貝においては，巻貝ほどの顕著な変化は見られなかった。

3. 考　　察

この現象は，いかに考察すべきであろうか。まず最初に，3ヶ所の貝殻廃棄土坑の性格について考えてみたい。そのためには，土坑周辺の貝殻以外の遺物との関連において把握する必要があるが，資料不足なので，ここでは貝殻より推論しよう。3ヶ所の土坑より出土した貝類の共通点は，干潟を這うウミニナ科貝類の比率が高いということである。縄文時代の土坑では59.7%，平安時代の土坑に至っては94.9%も占めている。ウミニナ科貝類は採集が容易であるという長所を持つ反面，肉量が少ないという短所を持っている。一番大きなイボウミニナにしても，1個体か

第1表

	種名	縄文	弥生	古墳	奈良以降	計	割合(%)
干潟の巻貝	ツボミガイ				1	1	0.0
	ウミニナ	1263		11	144	1418	15.7
	ホソウミニナ	453		6	4582	5041	56.0
	イボウミニナ	350		14	52	416	4.6
	ヘナタリ	18		1	17	36	0.4
	フトヘナタリ	96		3	3	102	1.1
	ツメタガイ			1	1	2	0.0
	ハナツメタガイ	1			2	3	0.0
	ウチヤマタマツバキ				2	2	0.0
	アカニシ			62	55	117	1.3
	テングニシ			4	2	6	0.1
	アラムシロガイ				1	1	0.0
	コロモガイ			1		1	0.0
磯の巻貝	ヨメガカサ			4	9	13	0.2
	ウノアシガイ				2	2	0.0
	クマノコガイ	1		3	6	10	0.1
	コシタカガンガラ	62		3	7	72	0.8
	イシダタミガイ	267		5	193	465	5.2
	サザエ		2	107	84	193	2.2
	スガイ	920		5	19	944	10.5
	アマガイ	1				1	0.0
	オオヘビガイ	15		18	13	46	0.5
	キクスズメガイ			1		1	0.0
	レイシガイ	35		16	13	64	0.7
	イボニシ	12		2	27	41	0.5
	オガイ			4	7	11	0.1
	計	3494	2	271	5242	9009	100

	種名	縄文	弥生	古墳	奈良以降	計	割合(%)
干潟の二枚貝	ハイガイ			9	8	17	3.8
	サルボウガイ	2		3		5	1.1
	タイラギ			3	1	4	0.9
	イタヤガイ			3	3	6	1.3
	アワジチヒロ				1	1	0.2
	アサリ	6		11	27	44	9.6
	オニアサリ	6		1		7	1.5
	ハマグリ	10		10	5	25	5.5
	アケガイ			1	3	4	0.9
	ウチムラサキガイ	1		7	5	13	2.9
	カガミガイ	7		5	1	13	2.9
	シラオガイ				1	1	0.2
	オキシジミガイ	4		5		9	2.0
	シオフキ			1		1	0.2
	オオトリガイ	1			1	2	0.4
	ミルクイガイ	20		3	3	26	5.7
	オオノガイ	30		15	5	50	11.0
	マテガイ	5				5	1.1
	アカマテガイ			1		1	0.2
磯の二枚貝	イガイ			8	2	10	2.2
	ナミマガシワガイ			1	4	5	1.1
	チリボタンガイ	12		5	5	22	4.8
	イタボガキ	7		22	40	69	15.1
	コケゴロモガキ	5		34	17	56	12.3
	ケガキ	4		4	1	9	2.0
	マガキ		2	22	17	41	9.0
	キクザルガイ			5	3	8	1.7
	サルノカシラガイ			1	1	2	0.4
	計	120	2	180	154	456	100

第2表

	種名	縄文	弥生	古墳	奈良以降	計	割合(%)
干潟の巻貝	ツボミガイ				1	1	0.2
	ウミニナ			11	13	24	4.8
	ホソウミニナ			6	6	12	2.4
	イボウミニナ			14	8	22	4.4
	ヘナタリ			1		1	0.2
	フトヘナタリ			3	3	6	1.2
	ツメタガイ			1	1	2	0.4
	ハナツメタガイ				2	2	0.4
	ウチヤマタマツバキ				2	2	0.4
	アカニシ			62	55	117	23.3
	テングニシ			4	2	6	1.2
	アラムシロガイ				1	1	0.2
	コロモガイ			1		1	0.2
磯の巻貝	ヨメガカサ			4	9	13	2.6
	ウノアシガイ				1	1	0.2
	クマノコガイ			3	2	5	1.0
	コシタカガンガラ			3	7	10	2.0
	イシダタミガイ			5		5	1.0
	サザエ		2	107	83	192	38.3
	スガイ			5	5	10	2.0
	アマガイ					0	0.0
	オオヘビガイ			18	11	29	5.8
	キクスズメガイ			1		1	0.2
	レイシガイ			16	12	28	5.6
	イボニシ			2	1	3	0.6
	オガイ			4	3	7	1.4
	計	0	2	271	228	501	100

	種名	縄文	弥生	古墳	奈良以降	計	割合(%)
干潟の二枚貝	ハイガイ			9	8	17	5.2
	サルボウガイ			3		3	0.9
	タイラギ			3	1	4	1.2
	イタヤガイ			3	3	6	1.9
	アワジチヒロ				1	1	0.3
	アサリ			11	23	34	10.5
	オニアサリ			1		1	0.3
	ハマグリ			10	4	14	4.3
	アケガイ			1	2	3	0.9
	ウチムラサキガイ			7	5	12	3.7
	カガミガイ			5	1	6	1.9
	シラオガイ				1	1	0.3
	オキシジミガイ				1	1	0.3
	シオフキ			1		1	0.3
	オオトリガイ				1	1	0.3
	ミルクイガイ			3	3	6	1.9
	オオノガイ			15	5	20	6.2
	マテガイ					0	0.0
	アカマテガイ			1		1	0.3
磯の二枚貝	イガイ			8	2	10	3.1
	ナミマガシワガイ			1	4	5	1.6
	チリボタンガイ			5	5	10	3.1
	イタボガキ			22	40	62	19.1
	コケゴロモガキ			34	17	51	15.7
	ケガキ			4	1	5	1.6
	マガキ		2	22	15	39	12.0
	キクザルガイ			5	3	8	2.5
	サルノカシラガイ			1	1	2	0.6
	計	0	2	175	147	324	100

ら得られる肉量はわずかであり，たとえ100個体の肉を集めたとしても茶碗に一杯程度である。従って，ウミニナ科貝類では，とうてい，食事のメインにはなり得ず，食事のつき出し的存在でしかなかったのではないだろうか。そう考えると，この３ヶ所の土坑より出土した貝殻は，ウミニナ科貝類を特に好む家族により捨てられたのではないかということが予想される。

一方，３ヶ所の貝殻廃棄土坑以外から出土した貝類の主流をなすサザエ・アカニシは肉量が多く，数個体でも十分食事になり得る。ところが，サザエ・アカニシ共に潮間帯下部または，潮下帯の貝であり，採集しにくいという欠点を持つ。そのためか，出土した個体数は，それ程多くなく，古墳時代以降の各地層より，十数個体ずつ均等に出土している。それでは，食事のメインになり得る貝は，一体何であるかというと，普通それは，アサリやハマグリなどの二枚貝である。大浦浜遺跡から出土した貝殻の中にも，わずかながらアサリやハマグリが含まれているので，当時においても，これらの貝類は生息していたはずである。もし，生息したとすれば，群生するので，とろうと思えば大量にとれたはずである。ところが，出土した個体数はそれ程多くない。以上のことから考えて，かつての大浦浜においては，貝類以外に，食事のメインになり得る何かの食物が存在したのではないだろうか。

4. 結　論

大浦浜遺跡より出土した貝類の種類及び個体数から考えて，大浦浜において，貝類は当時の食事のメインではなかったことがわかった。

第4節・師楽式土器の使用法に関する化学的考察

——瀬戸内海櫃石島出上のものをもとに——

香川大学教育学部化学教室　佐々木　信　行

1. はじめに

瀬戸大橋架橋工事に際し，架橋建設区域および周辺地域の遺跡調査が香川県教育委員会によって行われている。その一端として表題の櫃石島大浦浜遺跡出土の師楽式土器の使用法に関する化学的検討を香川県教育委員会文化行政課より依頼され研究を行なった。調査した師楽式土器は古墳～奈良時代のもので，これまでも岡山県邑久郡牛窓付近，同児島半島沿岸，香川県香川郡直島町喜兵衛島，あるいは石川県能登半島などでも同種の土器が見いだされている。この師楽式土器の用途については，近藤義郎[1]による製塩説がよく知られているが，最近になって中山裕[2]により貝殻石灰説が唱えられており必ずしも明らかではない。いずれの説も純考古学の立場からのものであるので両説の考古学的妥当性，信憑性については筆者は判断できないが，論文中の化学分析値の解釈など化学的考察については，元素の分配に対する考え方など両説ともまだまだ不備な点が数多く見受けられる。このたび櫃石島大浦浜遺跡出土の同土器についてその付着物の化学組成，鉱物組成を実験的に明らかにすることによって同土器の使用法について化学的・鉱物学的立場から考察し，一応の結論を得たので，ここに報告する次第である。

2. 分析方法

分析にあたってはまず付着物の物質構成をおおよそ見当をつけるためにX線粉末回析法により構成物質の同定を行なった。次に構成物質の化学分析を行った。分析方法は次の通りである。

X線回析

測定装置：理学電機ガイガーフレックスRAD－ＩＩＩ
測定条件：50kV，100mA
slit：DS　1，RS　0.3
scan speed　3　deg/min.

化学分析

Ca^{2+}，Mg^{2+}，Fe^{2+}，Mn^{2+}	原子吸光分析（日立180－50型）
Na^{+}	炎光分析（日立180－50型）
Cl^{-}	イオンメータ（電気化学DC－10）

3. 結果および考察

X線回析による結果は図1に示される通りである。試料1，2，3において，いずれもcalciteの回析図形が顕著に認められる。炭酸カルシウムについてはcalcite，aragoniteなどの多形が存在することが知られているが，従来この師楽式土器に関する論文ではcalcite，aragoniteの区別がな

されていない。今回の測定によって本試料においては付着物中の炭酸カルシウムの大部分がcalciteであることが明らかとなった。

次に付着物の化学分析の結果を表1に示す。これより付着物中の$CaCO_3$（calcite）の割合は試料1，2，3でそれぞれ13.7%，28.3%，54.2%であることになる。またMgはそれぞれ5.5%，8.5%，5.4%で高い含有量を示している。Mgについては近藤論文では認められないと記されており，中山論文においても触れられていない。しかしながら海水中に非常に高い濃度（1.27 g/ℓ）含まれているMgは海底堆積物であれ貝殻であれ固体相に取りこまれることは一般的によく知られている。本試料においてはすでに記したような比較的高いMg^{2+}が検出された。このMg^{2+}は大部分が$MgCO_3$としてcalciteと共沈したものと考えられる。

いま海水から$MgCO_3$が$CaCO_3$と共沈した場合の固相（calcite）中のMg：Ca比はcalciteと海水間のMg^{2+}の分配係数より次のように計算できる。（Katz，1973[3]）

$1.27/0.40\times0.057$（25℃）$=0.181$

$\times0.068$（35℃）$=0.216$

$\times0.078$（50℃）$=0.248$

$\times0.097$（70℃）$=0.308$

$\times0.120$（90℃）$=0.381$

試料中のMg：Caは

試料1　5.5/13.7=0.40

試料2　8.5/28.3=0.30

試料3　5.4/54.2=0.10

Sample No. / Chemical Species	1	2	3
Ca	13.7	28.3	54.2
Mg	5.5	8.5	5.4
Fe	0.45	0.94	0.50
Mn	0.33	0.34	0.21
Na	0.18	0.28	0.44

表1　土器付着物の化学分析値

であるから，海水からcalciteとして共沈した場合の予想値とほぼ一致しており，しかもかなり高い温度で共沈した場合の値に近い。したがって本試料の付着物としての炭酸カルシウムは海水から高温度で沈殿したものと推定できる。天然において海水より石灰石が沈殿する場合，マグネシウムを多く含む石灰石はそれ程安定ではなく，固溶限界は約2%であり，それ以上のマグネシウムが入ると新たに$CaMg(CO_3)_2$（dolomite）の相が出現する。しかし本土器付着物にはdolomiteの相は見られない。近藤の論文にはMgイオンが入っていないとあるが，逆に海水濃縮の際に何故$CaCO_3$にMgが取り込まれないかの説明はないようである。中山の文献にはMg^{2+}のことは出ていないのでMgが入っているのかいないのか不明である。中山の唱える貝殻石灰説にしてもMg^{2+}は重要なカギとなるはずである。中山の挙げるカキの貝殻の分析値を用いれば（$MgCO_3$）/（$CaCO_3$）は0.01以下であるから本土器付着物が貝殻起源とは考えにくいことになる。固相，液相間の元素の分配については陽イオンの分配に関する研究が従来より数多く行われてきたが，最近では陰イオンの分配についても研究が行われている（Takano，1984[4]）。土器付着物の炭酸カルシウムについては中山論文では陽イオンよりも陰イオンのCO_3^{2-}とSO_4^{2-}が問題にされているようであるが，分配論的取り扱いは全くなされていない。中山氏は海水中のCO_3^{-2}：SO_4^{2-}比がそのまま固相中の比になると考えて話を進めているが，そのようなことはふつうは起らない。高野によればcalciteと水溶液間のSO_4^{2-}の分配係数はおよそ0.01，0.07で平均値をとると0.04である。

この値を用いるとcalcite中のSO_4^{2-}イオンは

$2.65/0.14\times0.040=0.757$

となり，モル比では

$(2.65/96)/(0.14/61)\times0.040=0.481$

となり$CaCO_3$に比べて$CaSO_4$の割合は固相では小さくなる。X線回析の結果（図1）によれば固相の炭酸塩（主として$CaCO_3$）の回析ピークに対して硫酸塩の$CaSO_4$のピークはほとんど見られないことから$CaSO_4$はほとんど存在しないことがわかる。これについては既に近藤は空気中のCO_2による硫酸塩の炭酸塩化反応および溶解度の違いによる$CaSO_4$の優先的溶解をあげているが，いずれの反応も非常に遅い反応速度ではあるが長い風食時間に$CaSO_4$が溶出したものと考えれば説明はつく。この点に対する中山の批判は化学平衡や反応速度に関する理解不足に基づくもので誤りである。

以上のように櫃石島出土の師楽式土器の付着物質をX線回析および化学分析により検討した結果，付着物の主要構成物質はcalciteであり，calcite中のMg：Ca比よりこのcalciteは海水起源であることが明らかとなった。このことは本地域の師楽式土器が製塩用に用いられたものであることを示唆している。

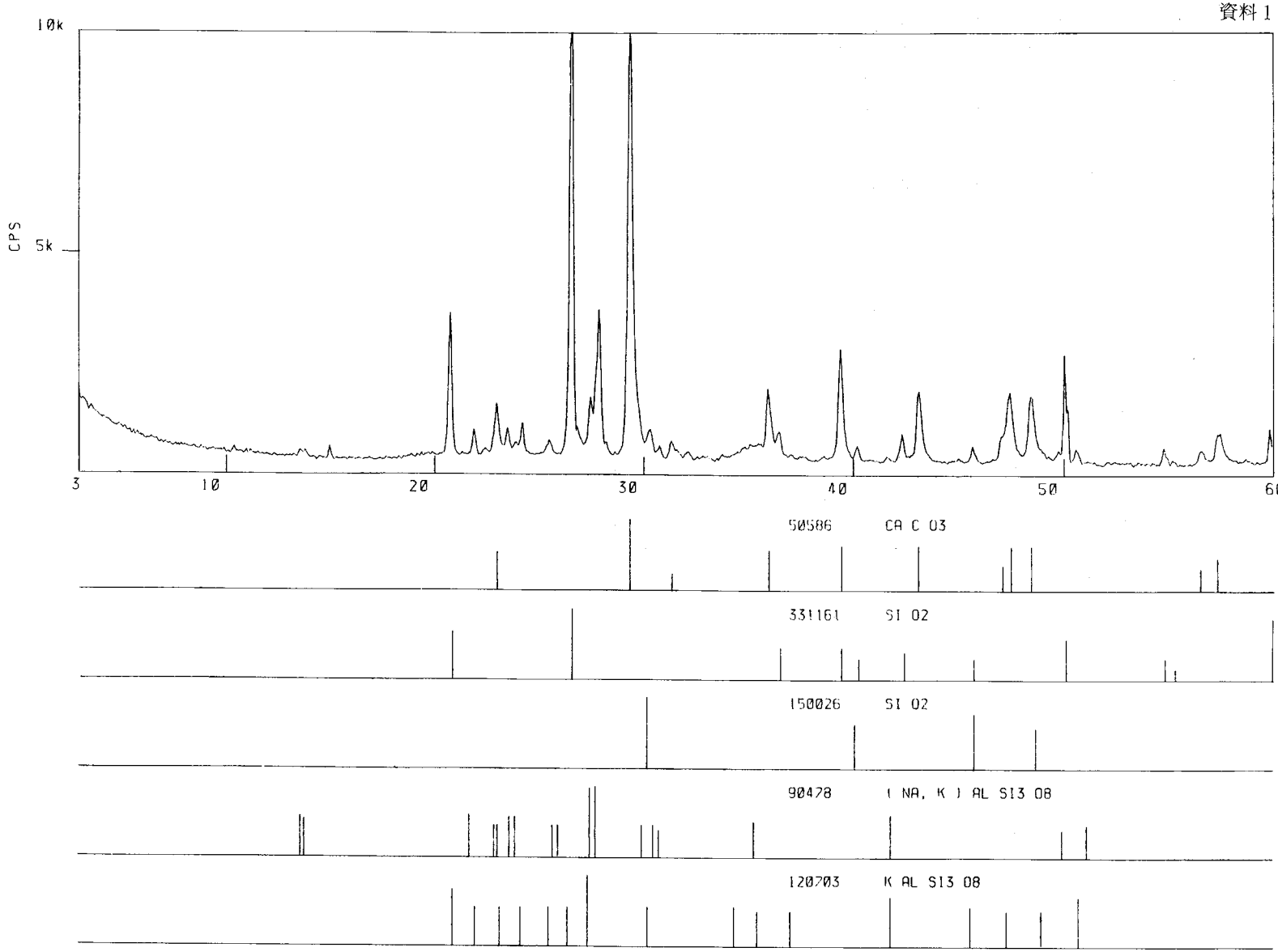
引用文献

近藤義郎（1958）：歴史学研究　9，223，1－12.

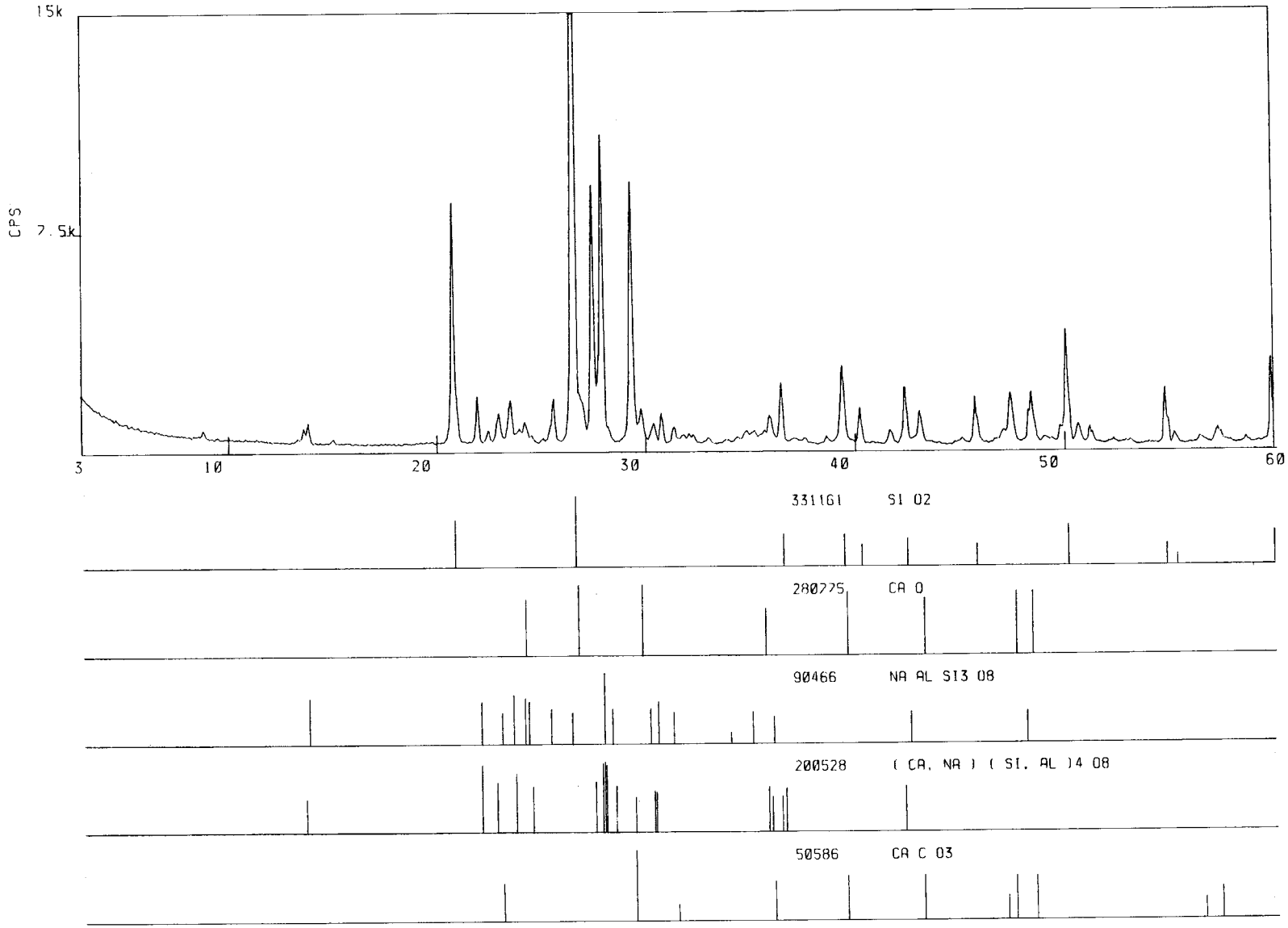
中山　裕（1982）：『実験考古学』　雄山閣，175－19.

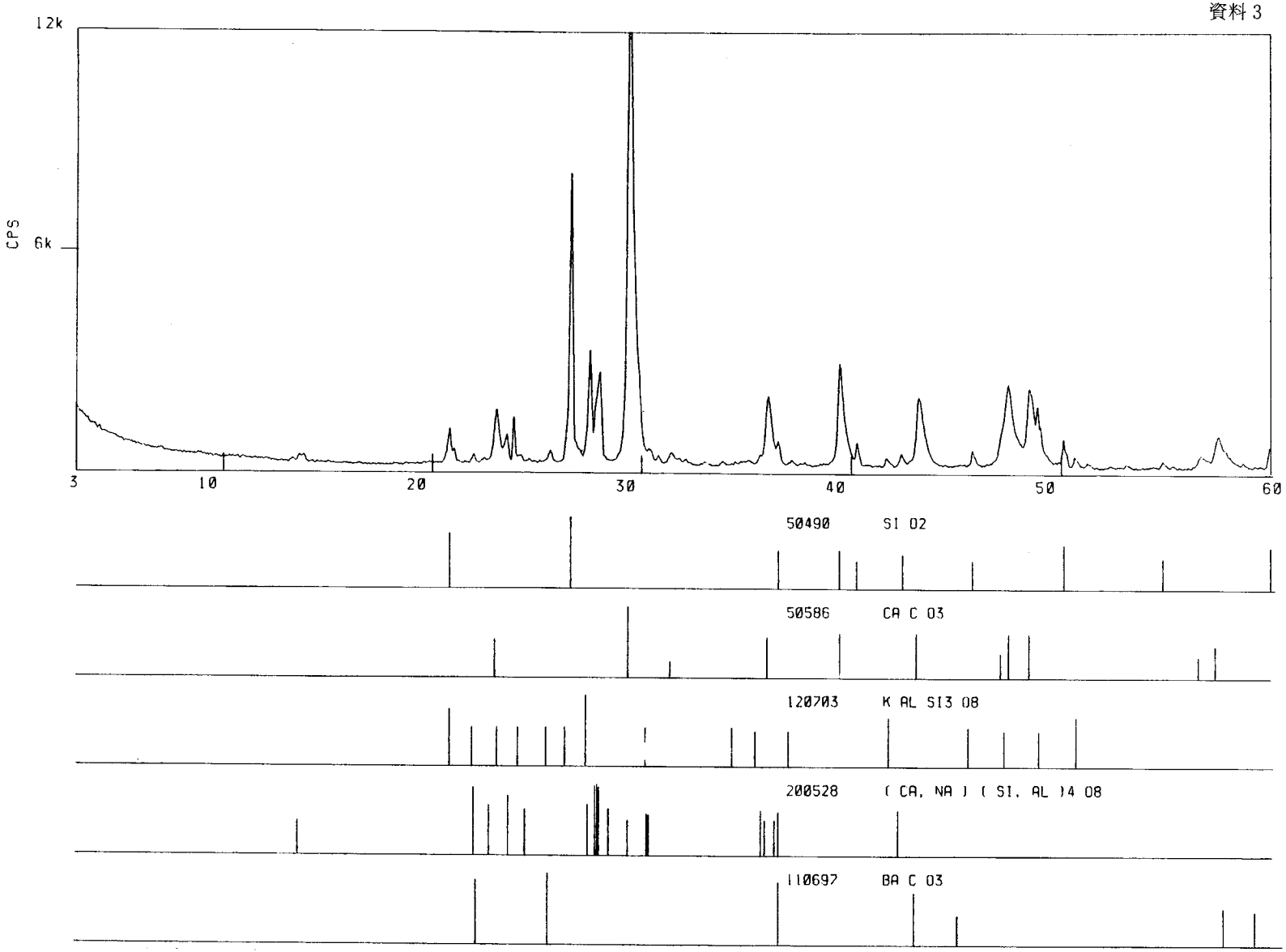
KATZ. A.（1973）：Geochim. Cosmochim. Acta, 35, 509－515.

TAKANO. B.（1985）：Chem. Geol,.49, 393－403.


10k
5k
CPS
3
10
20
30
40
50
60
50586 CA C O3
331161 SI O2
150026 SI O2
90478 (NA, K) AL SI3 O8
120703 K AL SI3 O8

第1図　X線回析図形


15k
7.5k
CPS
3
10
20
30
40
50
60
331161 SI O2
280775 CA O
90466 NA AL SI3 O8
200528 (CA, NA) (SI, AL)4 O8
50586 CA C O3


12k
CPS
6k
3
10
20
30
40
50
60
50490 SI O2
50586 CA C O3
120703 K AL SI3 O8
200528 (CA, NA) (SI, AL)4 O8
110697 BA C O3

第5節 大浦浜遺跡出土脊椎動物遺体分析結果

樽野博幸（大阪市立自然史博物館）

表1に大浦浜遺跡出土の，脊椎動物遺体を示した。この表の中で，時代が縄文時代後期初頭とされる資料は，すべてヤケヤマ東麓地区より産出したものであり，他は南部の，砂丘上から発掘されたものである。

表にもあらわれているように，縄文時代および弥生時代の地層からは魚骨が多く出土している。遺跡が島に立地していることから，当然とも言えるだろう。しかし，破片が多く種名を決定できるものは少なかった。哺乳類は同時代の地層からはあまり出土していないが，ヤケヤマ東麓地区のJ－2区SK－1からはタヌキの骨が，比較的まとまって出土しており，注目される。現在，檳石島ではタヌキが生息するという確かな証拠は得られていない（香川県，1978）。しかしタヌキは比較的小面積の島にも住むことが可能な種であるので，当時生息していた可能性はある。

時代	縄文時代 後期初頭			弥生時代前期	古墳時代 前期		古墳時代 後期				奈良時代			平安時代			
地区	J—2	J—3	K—3	E—12	F—4	G—9	C—26	E—5	F—4	H—14	H—14	D—11	B—5	C—11	C—10・11	B—12	C—11・12	D—11
遺構・土層 ＼ 種類	SK—02J	畦畔・赤褐色砂層⑤	黒色縄文層④	包含層	第3層下・第4層上	第4層	第3層	第3層上面	第3層	第2層下層相当（黒色土）	第2層下部上面	第5層	第3層下層（下部）	粘土土坑下	素掘土坑上層	第3層上層（石集中）	SX25	第3層上層（黒色包含層）
タヌキ	○																	
イヌ					○			○										○
イノシシ			○			○												○
シカ				○					○?						○			
ウシ																		
ウマ							○					○		○		○		
哺乳類（種類不明）										○	○		○					
鳥類（種類不明）	○																	
サメ類	○							○										
マダイ		○		○	○?								○?					
マフグ科	○																	
魚類（種類不明）	○			○				○				○					○	

表1　大浦浜遺跡出土脊椎動物種名表

古墳時代以降になると魚骨の出土量は減少し，哺乳類の骨の出土量が増える。とくにウシおよびウマは，古墳時代後期以降の地層のみから出土する。

以下に，個々の資料について記述する。

1. 軟骨魚綱

a．サメ目の一種

時　　代	出土層位又は遺構	地　区	標　　本
縄文時代後期初頭	SK－02J	J－2	椎　体　横径24.0mm，高径25.2mm
古墳時代後期	第3層上面	E－5	椎　体　径8.3mm

椎体のみの出土で種類は不明である。大型の標本には人為的加工のあとは見られない。小型の標本は穴があいているが破損しているため人工によるものかどうかは不明である。

2. 硬骨魚綱

a．マダイ

時　　代	出土層位又は遺構	地　区	標　　本
縄文時代後期初頭	赤褐色砂層⑤	J－3	前頭骨破片
弥生時代前期	包含層	E－12	左前上顎骨　　2個 左上顎骨 左歯骨
平安時代	粘土土坑下	C－11	右上顎骨　　（全長39.6mm）

種類を明らかにできた魚骨の大部分はマダイであった。E－12地区の弥生時代包含層からは，上記の他にも多数の魚骨片が得られており，その中にはマダイの骨も多く含まれると考えられる。平安時代の標本を除き，すべて体長30cm以下と推定する。

b．マフグ科の一種

時　　代	出土層位又は遺構	地　区	標　　本
縄文時代後期初頭	SK－02J	J－2	左歯骨

上記1点のみ出土した。

上記の他に，スズキに近い種と考えられる資料が出土している（E－12地区，弥生時代包含層）が，確定できなかった。

3. 鳥綱

ヤケヤマ東麓地区のJ－2区，SK－01より，左脛骨の遠位端が出土しているが種類は不明である。確実に鳥骨と認められるものは，この1点のみであった。

4. 哺乳綱

a．タヌキ

時　　代	出土層位又は遺構	地　区	標　　本
縄文時代後期初頭	SK－02J	J－2	右下顎骨*($P_{\bar{4}}$,$M_{\bar{2}}$付き) 左下顎骨*($_{\bar{1}}C$,$_{\bar{1}}P$,$_{\bar{1}}M$,$_{\bar{2}}M$付き) 右上顎骨（$M^{\underline{1}}$,$M^{\underline{2}}$,$M^{\underline{3}}$付き） 左上顎骨 右下顎骨（下顎枝のみ） 右上顎骨 左上顎骨－前顎骨 頭蓋骨破片　9個 右上腕骨　2個 左上腕骨 右尺骨 胸椎

同一個体

同一個体

表に示したように，同じ部位の骨が2個出土しているので，2頭以上の遺体が含まれていることは明らかである。3点の下顎骨は，すべて下顎枝が折られており，関節突起および角突起は保存されているが，筋突起の部分は，1点も発掘されていない。これは解体の際，人為的に破壊されたものであろう。すなわち，頭蓋から下顎骨をはずすために，咬筋・翼突筋などの咀嚼筋を切断する時に，たたき折られたと考えられる。その他の頭蓋骨もたたきこわされていたのであろう。右上腕骨の内1点と，胸椎は焼かれたあとがみられる。*印の下顎骨の全長は，右84.4㎜，左84.5㎜である。

b．イヌ

時　　代	出土層位又は遺構	地　区	標　　本
古墳時代前期	第3層下　第4層上	F－4	左寛骨（腸骨片，坐骨片）
古墳時代後期	第3層上面	E－5	下顎骨($C_{\bar{1}}$, $_{\bar{2}}P_{\bar{2}}$, $_{\bar{3}}P_{\bar{3}}$, $_{\bar{4}}P_{\bar{4}}$, $_{\bar{1}}M_{\bar{1}}$, $_{\bar{2}}M_{\bar{2}}$付) 第2・3・4頸椎 胸椎　4個 腰椎　3個 左，右橈骨 左，右尺骨 左，右上腕骨 右大腿骨 肋骨　左2，右1，破片7 左，右第2～第4中手骨 左第5中手骨 基節骨　4個 陰茎骨

E－5区第3層上面より出土した資料は，その保存状態が互いに類似していることから，おそらく同一個体に属するものであろう。体の前半部分の骨が比較的多い。骨端はすべて癒合しており，歯がかなり咬耗しているので，老獣と考えられる。下顎歯の内，左右の第1小臼歯は，ともにぬけており，その歯槽はすでに骨組織で，埋められている。また右犬歯は，生存時に折れており，すでにぬけかかっている。左犬歯は保存されていないが，その歯槽の大きさから，右犬歯より完全なものであったと考えられる。左右の犬歯がアンバランスであることと関連して，下顎結合は，正中よりやや右側にずれている。陰茎骨が出土しているので，雄であることは明らかである。主な骨の計測値を以下に示す。

〈下顎骨〉

全長　右125.0±mm，左125.4mm（Condylion medialeからInfradentale）

〈歯〉

	$P_{\bar{2}}$	$P_{\bar{3}}$	$P_{\bar{4}}$	$M_{\bar{1}}$	$M_{\bar{2}}$	$_{\bar{2}}P$	$_{\bar{3}}P$	$_{\bar{4}}P$	$_{\bar{1}}M$	$_{\bar{2}}M$
歯冠長	7.7mm	9.4mm	10.8mm	19.8mm	8.2mm	7.5mm	9.4mm	10.9mm	20.3mm	8.2mm
歯冠幅	3.7mm	4.3mm	5.1mm	7.4mm	5.7mm	3.7mm	4.3mm	5.1mm	7.3mm	6.0mm

咬耗しているため歯冠高は計測せず

〈橈骨〉

全長　右138.2mm，左136.7mm；上端最大幅　右15.9mm，左16.0mm；上端最大前後径　右10.9mm，左10.5mm；下端最大幅　右20.0mm，左20.1mm；下端最大前後径　右12.2mm，左12.4mm

c．イノシシ

時　　代	出土層位又は遺構	地　区	標　　本
縄文時代後期初頭	黒色縄文層④	K－3	$I_{\bar{1}}$，$_{\bar{1}}I$ $_{\bar{2}}M$（歯冠長22.9mm，歯冠幅15.2mm）
古墳時代前期	第4層	G－9	右脛骨下端部
平安時代末期	第3層上層 （黒色包含層）	D－11	$_{\bar{3}}M$

一般に西日本の縄文～弥生時代の遺跡からは，イノシシの遺骨が出土することが多いが，当遺跡では，ごく断片的な資料しか得られなかった。島に立地していることが主因であろう。

d．シ　カ

時　　代	出土層位又は遺構	地　区	標　　本
弥生時代前期	包含層	E－12	胸椎　2個，右肋骨頭
平安時代末期	第3層上層 （黒色包含層）	D－11	角片

シカもイノシシ同様出土はまれである。E－12地区の胸椎は互いに関節するものであり，肋骨もおそらくこれらの胸椎に関節していたものと思われる。

e．ウ　シ

時　　代	出土層位又は遺構	地　区	標　　本
平安時代前期	素掘土坑上層	C－10・11	左上腕骨，左橈骨，左中手骨，左舟状骨，左第３・４基節骨，左第４中節骨

ウシの左前肢骨の内，肩甲骨・尺骨と手根骨の大部分および指骨の半分以外をのぞいてそろっており，すべて同一個体に属する。骨端は癒合しておらず，幼獣の骨である。生存時の肩高は80～85cm程度であろう。同じ土坑からはこの個体の骨以外の遺体は出土していない。

〈左橈骨〉

全長　198.8mm，上端最大幅　62.3mm，上端前後径　32.3mm，下端最大幅　54.2mm，下端最大径　35.6mm，体最小幅　25.5mm，体最小前後径　13.4mm

〈左中手骨〉

全長　161.8mm，上端最大幅　46.0mm，上端前後径　24.2mm，体最小幅　21.5mm＋，体最小前後径　16.0mm

〈左第３基節骨〉

全長　45.3mm

ｆ．ウ　マ

時　　代	出土層位又は遺構	地　区	標　　本
古墳時代後期	第３層	C－26	左踵骨
奈良時代前半	第５層	D－11	$\bar{1}\underline{I}$
平安時代	粘土土坑下	C－11	$\underline{2}\underline{I}$
平安時代末	第３層上層（石集中）	B－12	$\bar{2}$M(歯冠長24.7mm，歯冠幅16.1mm)

大阪およびその周辺地域においても，ウマが出土するのは古墳時代以降である。後期に入っているとはいえ，櫃石島のような小島においても遺骨が出土することは，いかに急速にウマの飼育が広まったかを示すものと言えるだろう。

第6章　考察

第1節　大浦浜遺跡における製塩土器編年

備讃瀬戸地域における製塩土器編年は，岩本正二[1]，近藤義郎[2]，間壁葭子[3]らの業績によって体系化されてきた。しかしながら倒杯形の脚台を持ち，外面に叩き目を施すタイプについては，山田原遺跡[4]。王泊遺跡[5]第3層出土の資料が断片的に知られているのみであった。また，薄手で尖底タイプのものは漠然と奈良時代という年代が与えられているだけで細かな検討はなされていなかった。

大浦浜遺跡出土の製塩土器は，倒杯形脚台をもち，外面叩き目のものが多く得られ，古墳後期～奈良平安時代のものも大量に出土した。さらに鎌倉時代のものと推定される製塩土器も出土した。そのため，従来の編年をふまえつつ，再度変化をたどり，大浦浜での製塩活動の変遷を明らかにすることを目的に，編年を試みた。

土器量は多く，短期間の整理作業の結果であるため，今後検討を進めて行くべき箇所はたくさんある。その意味では今回のものは第1次案にすぎない。

さて，今回は弥生中期から鎌倉時代までを6類に大区分した。脚台をもつ段階をⅠ類，薄手コップ状の段階をⅡ類，古墳後期に通有の厚手で叩き目が施される段階をⅢ類，薄手で叩き目が消え，尖底になるまでの段階をⅣ類，薄手無文で口縁が内彎し尖底の段階をⅤ類，鎌倉時代と推定される一群をⅥ類とし，さらに細分を試みた段階もある。

以下期各類について説明を加える。

Ⅰ　類

脚台部を有するものを一括した。しかしその内容を細かく見れば，脚台部の変化として脚台から倒杯形脚部の成立・消滅が見受けられ，外面調整も同時にヘラ削りから平行タタキへと変化する。各々を一類として同列に位置付けうるかどうかは今後の課題としておく。

Ⅰ－1類

大浦浜遺跡では検出されていないが，備讃瀬戸での製塩土器の系譜を明らかにするため検討を加える。

岡山県倉敷市城遺跡[6]出土の資料を標式とする。城遺跡では，この地域で弥生時代中期後半～末に位置付けられる前山Ⅱ式～仁伍式土器が混在して出土しており，これらの土器群に混じって製塩土器も見られた。報告書によれば製塩土器を口縁部の形態で分類し，U_L・U・V_L・Vの4類を抽出している。全体形状は，いわゆる「台付き鉢」形を呈し，鉢部の形態が緩やかに内湾しながら上方に伸びるものをUタイプとし，やや直線的に内湾するものをVタイプとした。また口径の大小で細分し，大きなものをLで表現している。Lタイプの口径は，約36cm前後のものが多い。調整は，外面の全面にヘラ削りが施されている。ここで抽出されたU・Vタイプは，製塩土器の系譜を考える上で重要な要素になる。

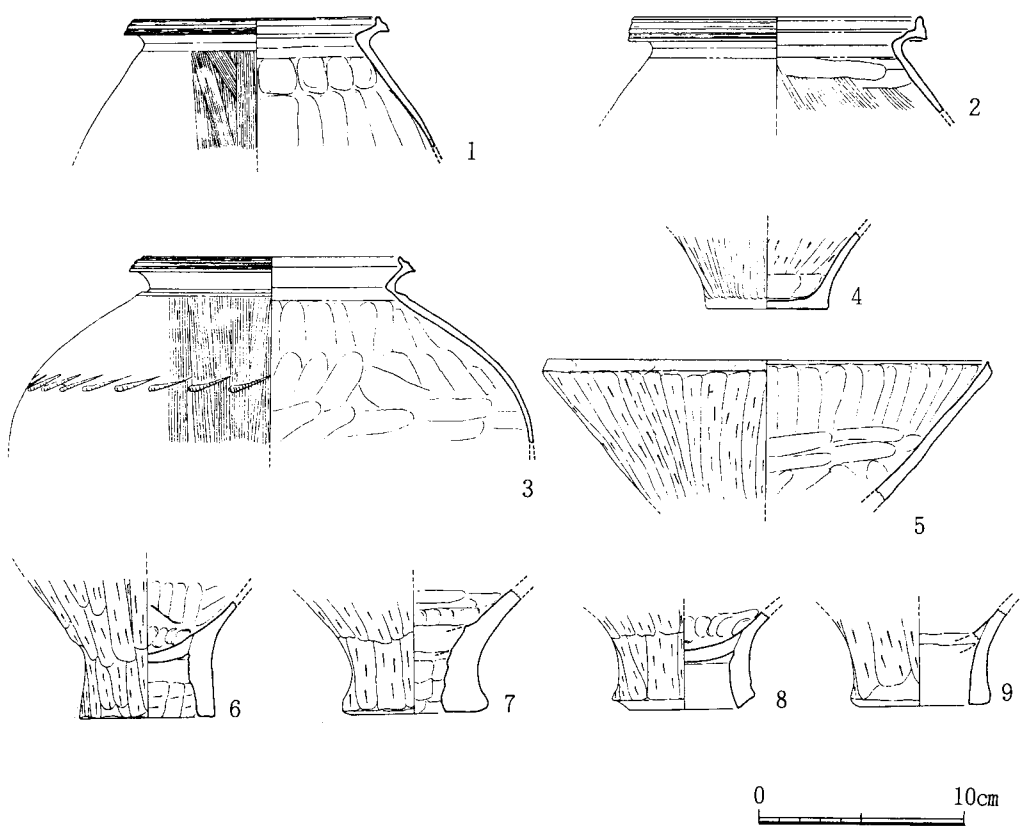
次に仁伍遺跡[7]の状況であるが，出土している製塩土器の多くがU・Vタイプであり，典型的なU$_L$・V$_L$タイプが出土していないことを考えると，Lタイプを年代的な分類の対象として考え得るのかもしれない。このことは，製塩土器の形態の縮小傾向を考える上で示唆に富んでいる。但し，Ⅰ－1類が製塩土器の素形的な役割を担っていることと，実際上製塩に使用されていたかどうかは別に論ずるべきであると考える。

Ⅰ－2類

岡山県倉敷市仁伍遺跡出土の資料を標式にする。形態・調整ともにⅠ－1類と同様であり，先にも述べたように器形の大小を基準として後出するものと考えている。口径は20cm前後のものが多く，1類に比べて小形化する。U・Vタイプが引き続き出土している。

県内資料では，大川郡志度町天野遺跡[8]出土のものがこれに相当する。天野遺跡は丘陵上に位置し，城遺跡・仁伍遺跡と同一の立地条件を備える。出土した土器はすべて表採資料ではあるが，口縁部の破片はVタイプのみ見られ，他の時代と考えられる資料が出土していないことから一括資料と考えて大過ない。

大浦浜遺跡では，この段階から一部で土器製塩が始まった可能性が高い。出土しているのは脚台部のみであるが，2点出土している。口縁部は検出されておらず，タイプは明らかに出来ていない。



第94図　大川郡志度町天野遺跡出土土器実測図

Ⅰ－3類

香川県高松市大空遺跡[9]出土の資料を標式にする。Ⅰ－2類と比べてより小形化し，体部の立ち上がり角度が水平を基準とした場合に大きくなり，結果として体部形状はスマートになる。U

・V両タイプともに見られるが，特にUタイプでは口縁部が内湾する傾向が見られる。外面調整は前段階と同様ヘラ削りであるが，内面の刷毛目調整が顕著になる。

現段階では県下にも同類の出土例はなく，過渡期的な状況にあるものとも考えられる。

Ⅰ－4類

岡山県倉敷市上東遺跡[1]出土の資料を標式にする。Ⅰ－3類との相違点として，脚部が台状のものから倒杯形に近い形状を持つものに変化していること，新たにU・V両タイプの中間的な位置を占める器形が出現すること，外面調整にヘラ削り以外に刷毛目調整が加わることが上げられる。

Uタイプは，口縁端部の内湾傾向がより進むが，脚部以外では大きな変化は認められない。

Vタイプは，器高に比べて口径が小さくなり，より細長い感じを与える。上東遺跡出土の資料は外面調整を含めて，Ⅰ－3類に近似している。

中間タイプとしたものはU・V両方の要素を持ち，これ以降の器形に続く資料と言える。

以上Ⅰ－1類からⅠ－4類までは，備讃瀬戸地域でもまだまだ資料が不足している段階であり，口縁部から脚部まで観察できる資料は少ない。そうした意味で，概報作成段階から長い時間が経過したものの，概報作成時とあまり考え方に差はない。

次に概報作成時に分類したⅠ－5類からⅠ－12類までの，いわゆる「倒杯形」の脚部を持つ製塩土器について述べる。

この段階に属する資料は，脚部のみの資料が圧倒的に多く，大浦浜遺跡の資料では全体形状が不明確なものが多い。概報作成時には，周辺遺跡を含めて体部形状の一部判明しているものを，主として立ち上がりの角度を用いて分類した。この場合，古から新への移行は体部の立ち上がりがより水平方向に近づく事であると考えられた。しかし脚部のみの資料では，編年案との対比が困難であることは明白であった。

本報告の整理においてはこの点に留意し，脚部のみでの分類を試みた。この作業は，当時嘱託として勤務していた安藤　一（現丸亀地方裁判所勤務）によって実施された。次にその報告を掲げ，概報作成時の編年案との相違について述べたい。

脚台付製塩土器の統計処理について

〔Ⅰ〕　統計処理の目的

(1)　統計的に分類が可能かどうかを検討する。

(2)　分類が可能であるならば，それに基づいてタイプ別の出土量や分布状況を把握する。

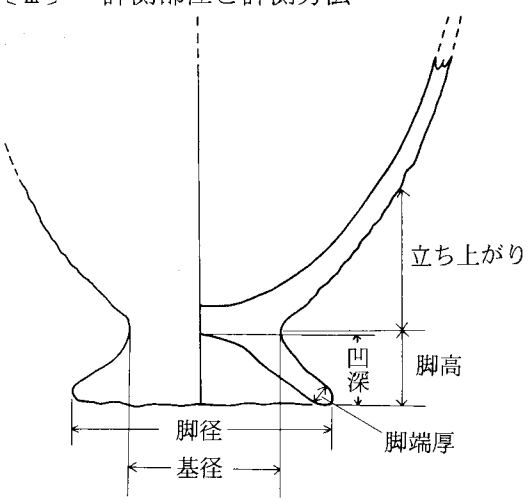
〔Ⅱ〕　対象遺物の概要

(1)　出土した脚台付製塩土器のほとんどが脚部から少し上のところまでしか残存せず，全体の形をうかがい知れるものは極く僅かである。

(2)　粗雑な作りの為，個体間はもとより同一個体内においても脚径や脚端厚等に違いがみられる。

(3)　分類の基準設定（タイプの抽出）に用いた資料は出土位置・器形・残存状況などを考慮して選出し，その点数は総出土量の約1/4に及ぶ。尚，後に細分類の検証に役立つようこれら資料は全て実測図を作成した。

〔Ⅲ〕　計測部位と計測方法



第95図　計測部位名称模式図

脚径……長軸径と短軸径をものさしで計測し，その平均値を算出した。長軸・短軸の判断は直感による。

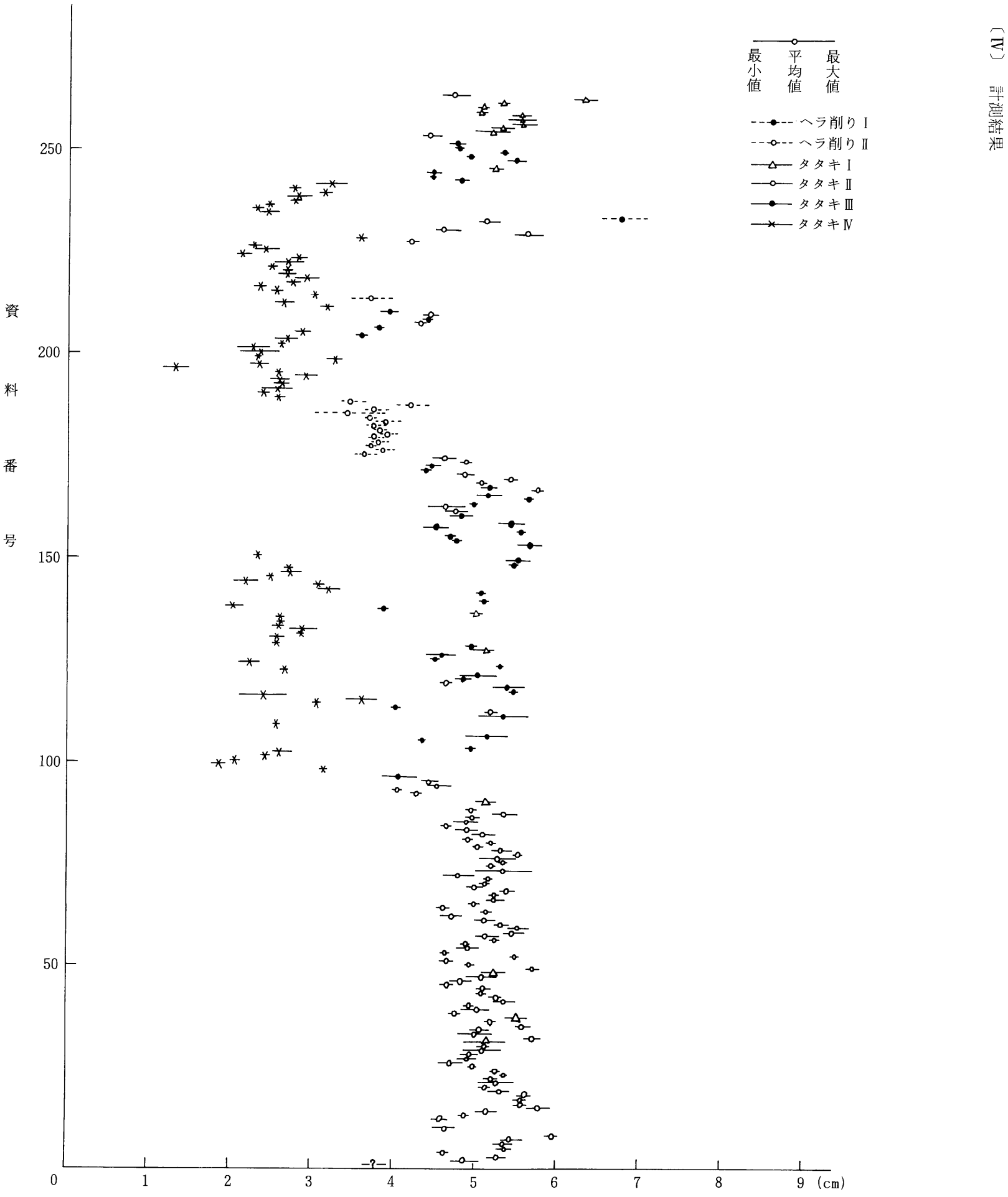
脚高……実測図より左右の脚高を読み取り，その平均値を算出した。

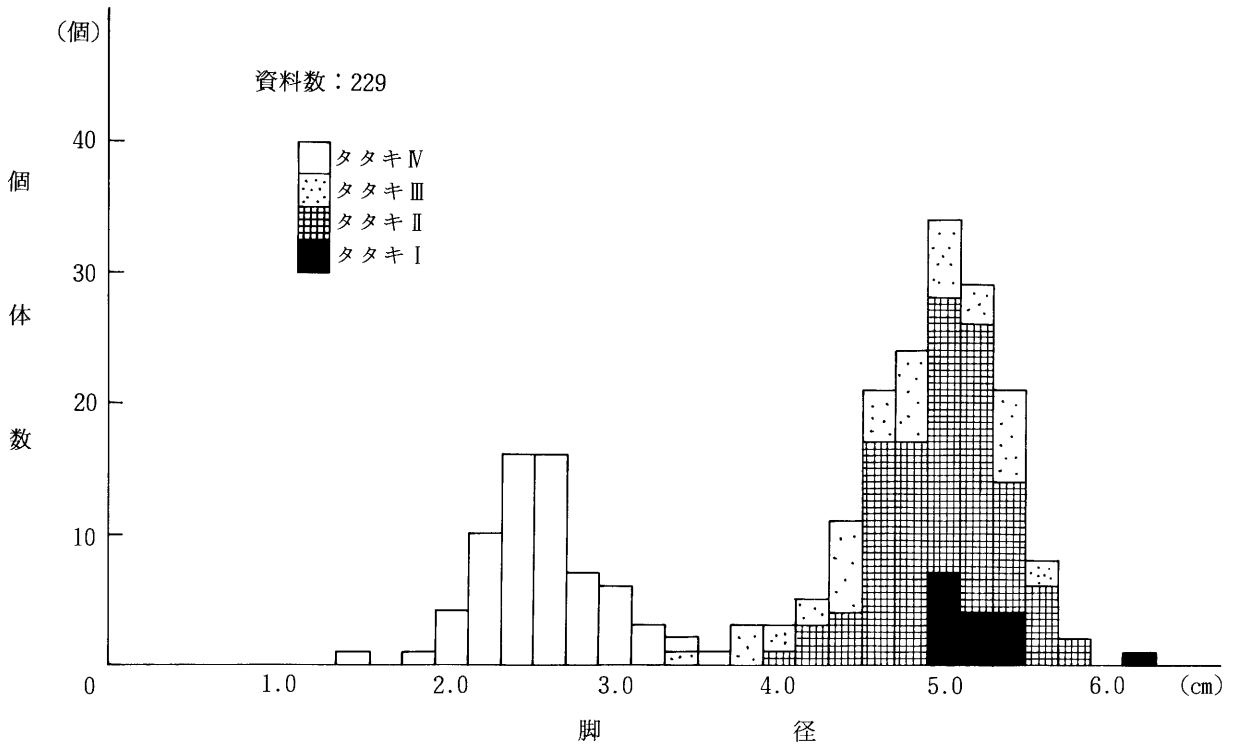
脚端厚……ダイヤルキャリパーによる６ヶ所計測を原則とし，その平均値を算出した。計測点の６ヶ所は，厚薄（指頭痕のあるところ・ないところ）３ヶ所ずつをとるよう留意した。

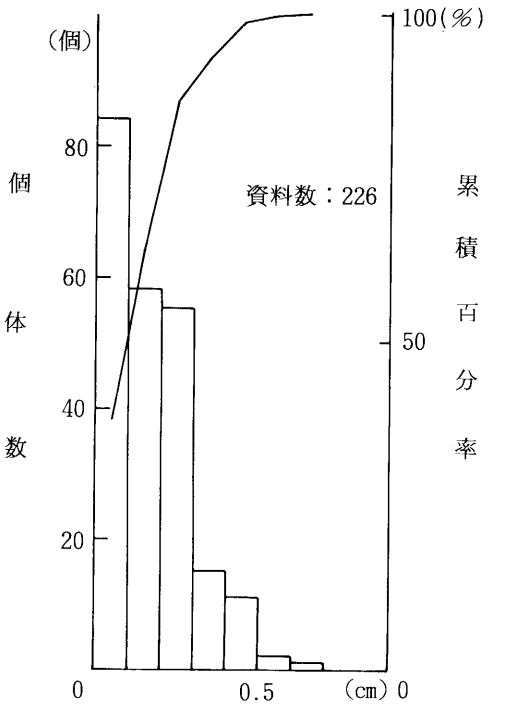
基径……実測図より読み取る。

凹深……向かい合う脚端をまたぐようにものさしを当て，そこから最も凹深の大なる部分に垂直にものさしをあて，計測。どの部分の脚端をまたぐかは任意とした。

立ち上がり……実測図より水平距離５㎜ごとの立ち上がりを読み取る。

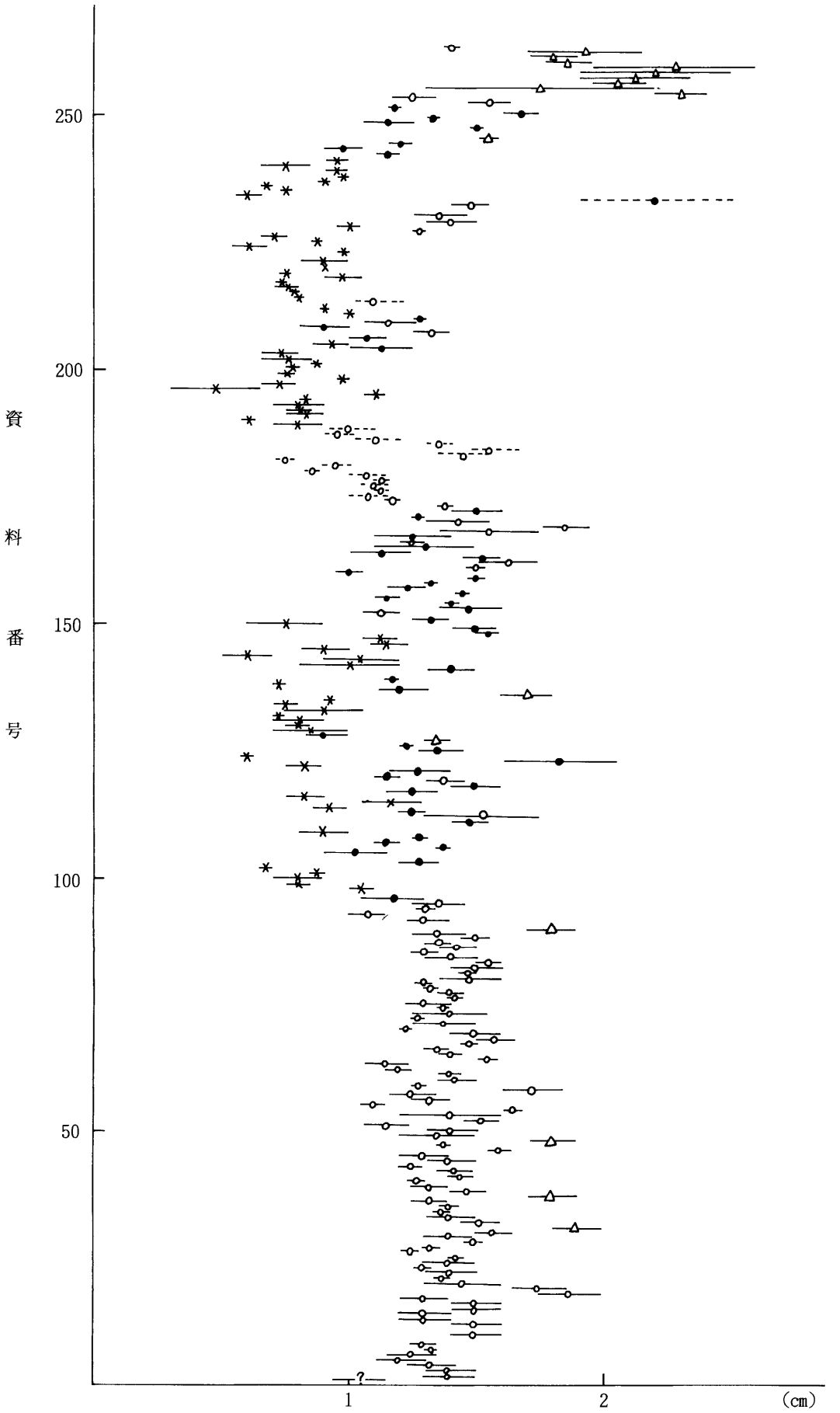




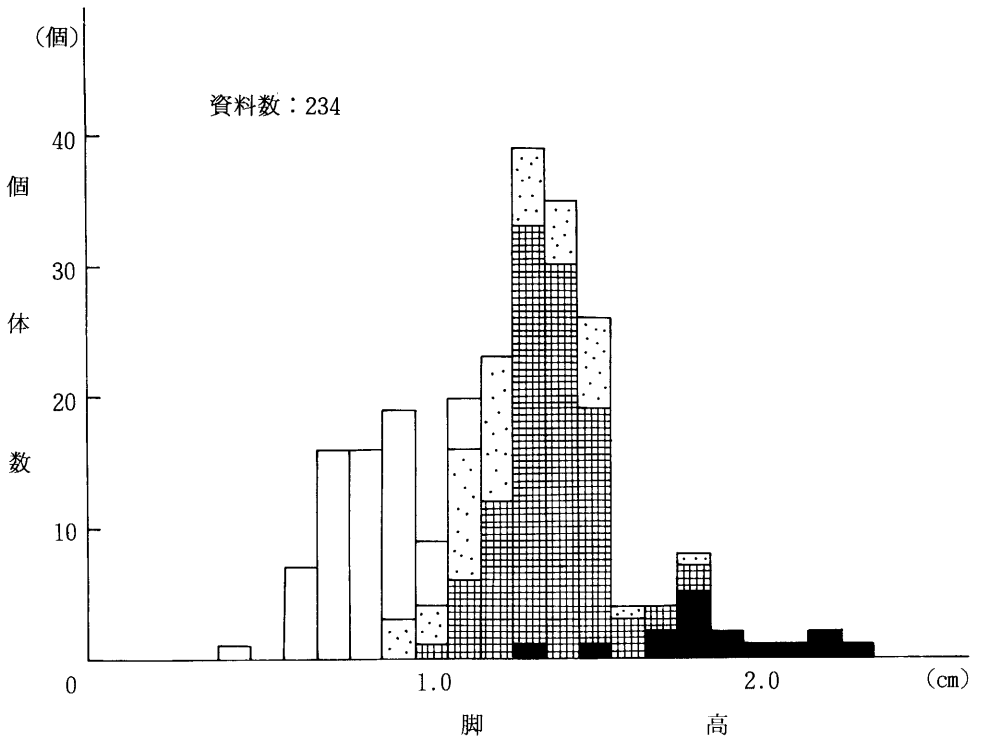


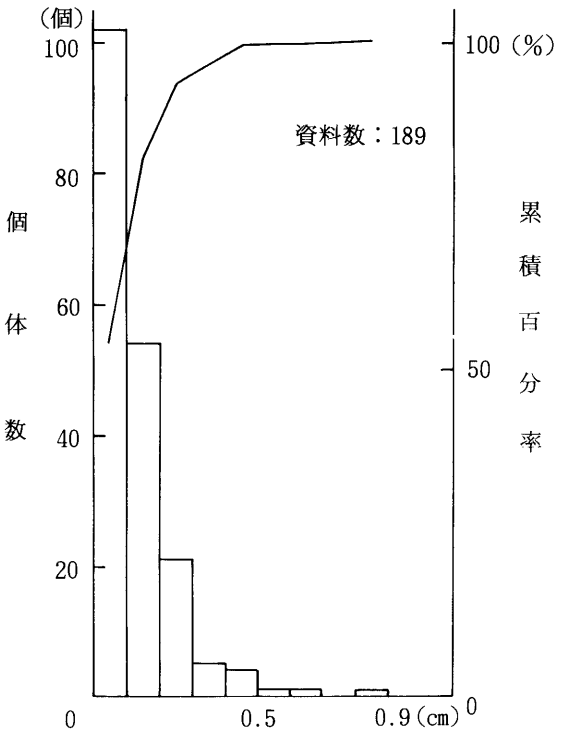
同一個体内に含まれる脚径の誤差

第19表　脚台付製塩土器脚径計測表



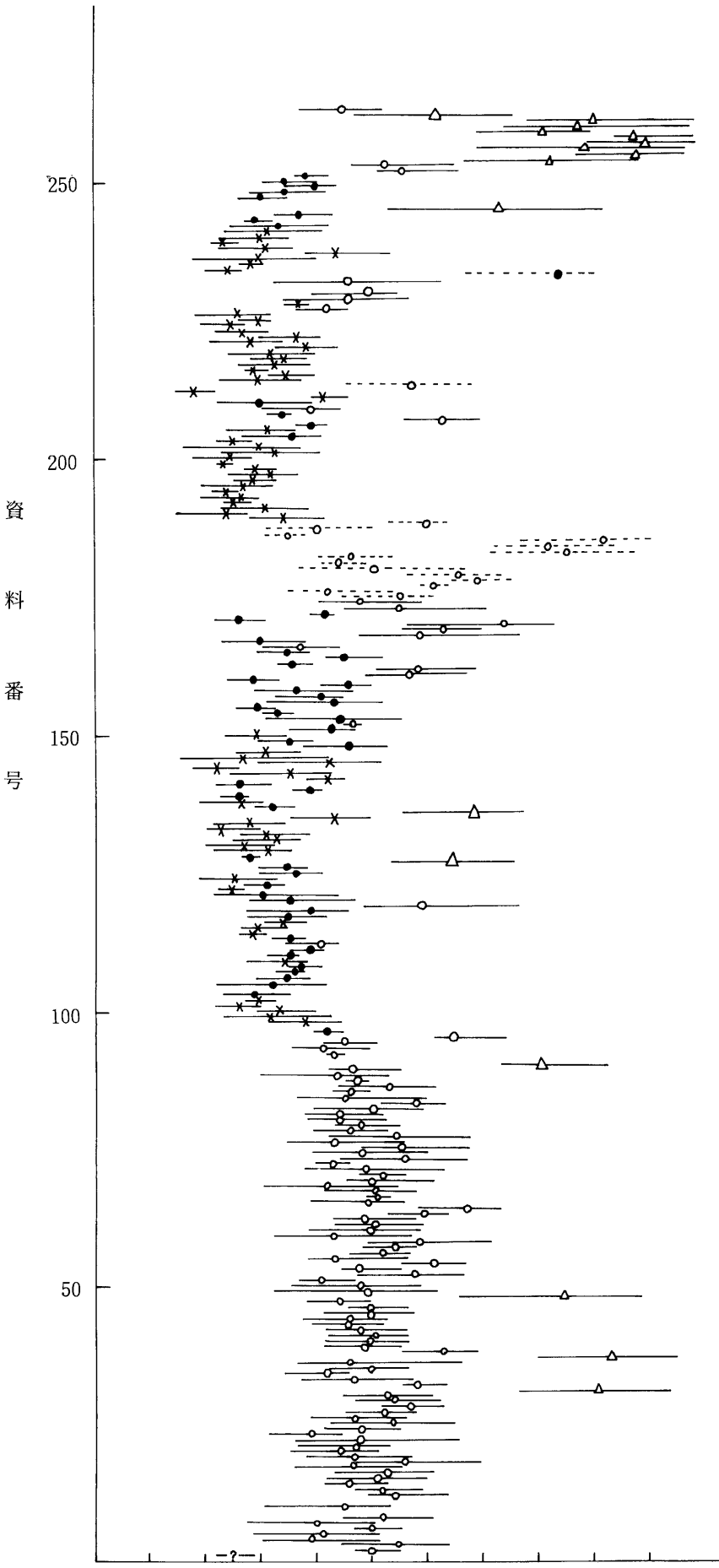
脚　　高

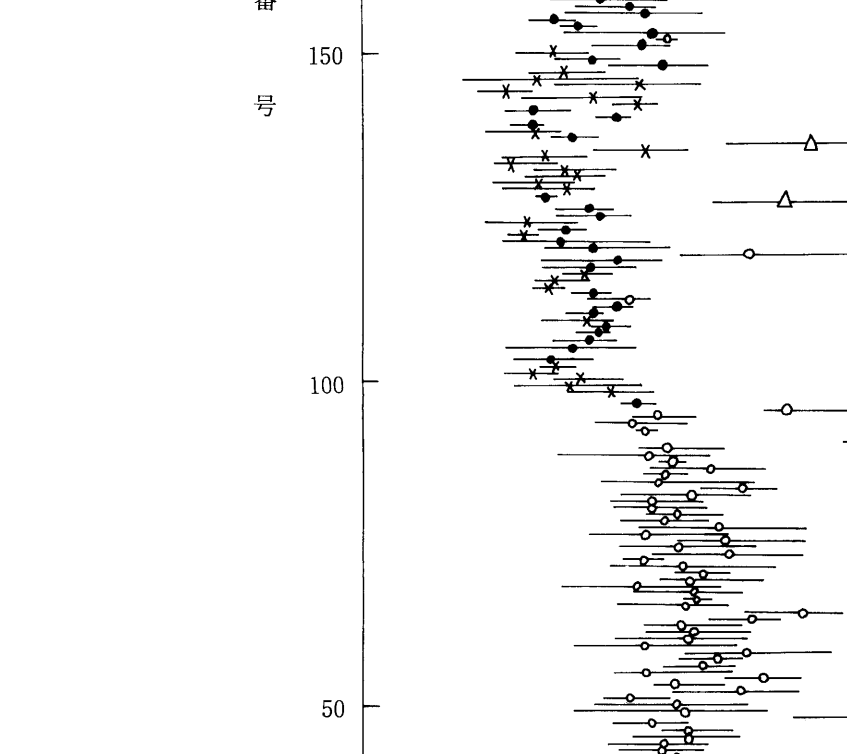




同一個体内に含まれる脚高の誤差

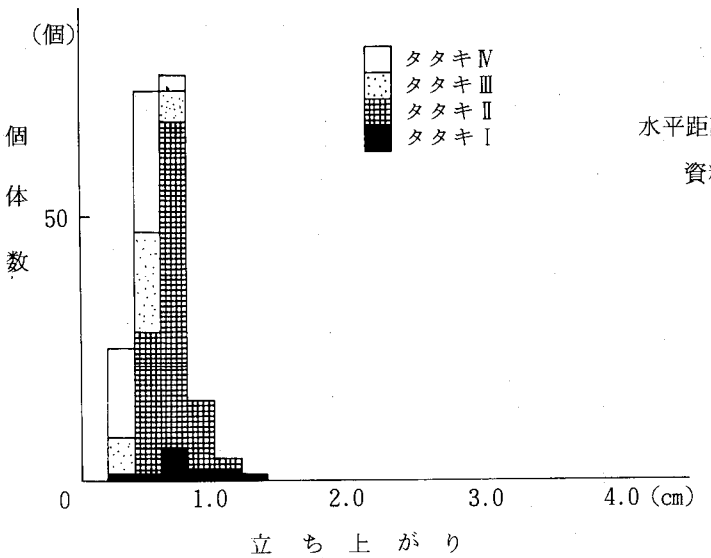
第20表　脚台付製塩土器脚高計測表





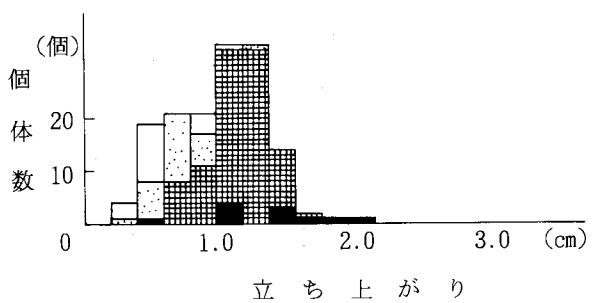
同一個体内に含まれる脚端厚の誤差

第21表　脚台付製塩土器脚端厚計測表



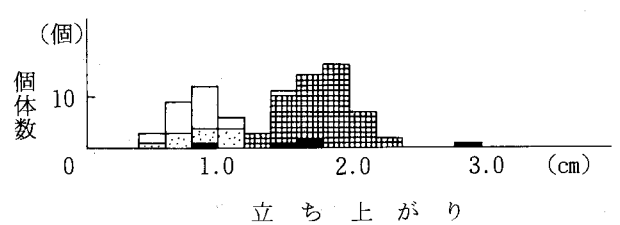
水平距離0.5cmの場合

資料数：196



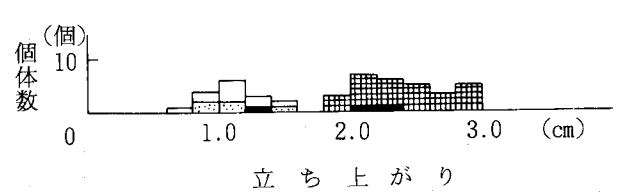
水平距離1.0cmの場合

資料数：151



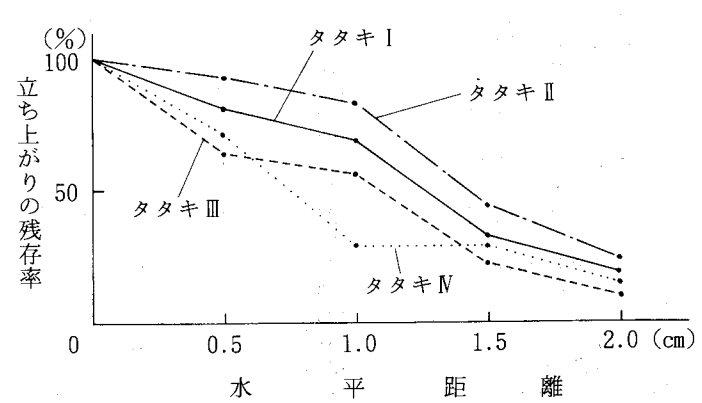
水平距離1.5cmの場合

資料数：84



水平距離2.0cmの場合

資料数：45



第22表　脚台付製塩土器立ち上がり計測表

資料番号	出土地点	土層
No. 1	大浦浜 R－50	3 層 ①
2	〃 B－50	〃
3	〃 〃	〃
4	〃 A－51	3 層 ③
5	〃 〃	〃
6	〃 A－50	3 層 ②
7	〃 A－51	3 層
8	〃 〃	〃
9	〃 〃	2 層
10	ヤケヤマ東麓 K－3	5 層
11	〃 B－2	（台付鉢）
12	〃 K－3	5 層
13	大浦浜 B－50	3 層 ③
14	〃 A－51	畦
15	〃 A－50	3 層 ②
16	〃 〃	3 層 ①
17	ヤケヤマ東麓 C－1・2	3～4層
18	〃 C－2	古式土師層
19	〃 〃	〃
20	大浦浜 E－3	〃
21	ヤケヤマ東麓 C－2	〃
22	〃 I－3	黒色包含層
23	〃 C－2	古式土師集中
24	〃 G－3	落ち込み②
25	〃 I－2	黒色土師層
26	〃 F－2	古式土師層上面
27	〃 G－3	落ち込み②
28	〃 E－3	古式土師器層
29	〃 B－2	古式土師層
30	〃 G－3	落ち込み②
31	〃 C－2	
32	〃 〃	5 層
33	〃 〃	古式土師層
34	〃 〃	〃
35	〃 B－2	
36	〃 C－2	古式土師集中
37	〃 B－1	
38	〃 K－3	古式土師器層
39	〃 E－3	〃
40	〃 B－2	
41	〃 C－2	5 層
42	〃 〃	〃古式土師層
43	〃 〃	4 層
44	〃 K・L－3	3～5層
45	〃 C－2	古式土師集中
46	〃 〃	古式土師層
47	〃 I－3	黒色包含層
48	〃 C－2	5 層
49	〃 〃	〃
50	〃 I－3	〃
51	〃 H－3	落ち込み②
52	〃 C－2	5層 古式土師層
53	〃 E－3	古式土師層直上層
54	〃 C－2	古式土師層
55	〃 E－2	シマ上層
56	〃 C－2	5層 古式土師層
57	〃 D－2	4 層
58	〃 C－2	5層 古式土師層
59	〃 G－3	落ち込み②
60	〃 C－2	5層 古式土師層
61	〃 〃	シマ上層
62	〃 K－3	古式土師器層
63	〃 B－2	〃
64	〃 〃	
65	〃 C－2	5 層
66	〃 E－2	古式土師層

資料番号	出土地点	土層
67	ヤケヤマ東麓 E－2	古式土師層
68	〃 〃	〃
69	〃 〃	〃
70	〃 〃	〃
71	〃 〃	〃
72	〃 〃	〃
73	〃 〃	〃
74	〃 〃	〃
75	〃 〃	〃
76	〃 G－3	落ち込み①
77	〃 〃	〃
78	〃 〃	〃
79	〃 〃	〃
80	〃 〃	〃
81	〃 〃	〃
82	〃 C－2	古式土師層
83	〃 〃	〃
84	〃 〃	4 層
85	〃 A－2	5 層
86	〃 〃	〃
87	〃 B－2	古式土師層
88	大浦浜 J 19・20	第5土器群
89	〃 〃	〃
90	〃 〃	〃
91	〃 〃	〃
92	〃 J－14	第 8 群
93	〃 〃	〃
94	〃 〃	〃
95	〃 J－17	第 3 群
96	ヤケヤマ東麓 A－1	3 層 ③
97	〃 C－2	古式土師層
98	大浦浜 G－6	（7）①
99	〃 D－27	砂取り内
100	〃 G－30 H－30	3 層 下
101	〃 G－35	包含層
102	〃 J－28	3 層 下
103	〃 G－13	3 層
104	〃 A－51	東落ち込み
105	〃 E－28	耕作土下
106	〃 F－29	耕作土
107	〃 H－29	包含層
108	〃 F・G－30	3 層 下
109	〃 F・G－29	
110	〃 F－29	耕作土
111	〃 〃	〃
112	〃 E－28	耕作土下
113	〃 E－29	耕作土
114	〃 E－30	〃
115	〃 E－29	〃 （下）
116	〃 E－30	〃
117	〃 E－28	〃 下
118	〃 E－29	耕作土
119	〃 〃	〃 下
120	〃 〃	（下）
121	〃 H－29	2 層
122	〃 G－28	2 層 ⓓ
123	〃 〃	〃
124	〃 E－30	耕作土
125	〃 F・G－30	畦間耕作土
126	〃 E－29	耕作土下
127	〃 〃	〃
128	〃 G－28	2 層
129	〃 F－29	耕作土
130	〃 H－30	包含層㊀
131	〃 G－29	2 層
132	〃 D－28	トレンチ内

第23表　分析資料一覧表(1)

資料番号	出土地点	土層
133	大浦浜 D－28	トレンチ内
134	〃 D－27	耕作土
135	〃 I－32	2層
136	〃 D－39	1～2層
137	〃 A地区	3層
138	〃 E－28	Ⓓ
139	〃 H－29	包含層
140	〃 〃	〃
141	〃 〃	第3層包含層
142	〃 E－29	D
143	〃 〃	〃
144	〃 H－29	〃
145	〃 〃	
146	〃 〃	〃
147	〃 〃	〃
148	〃 〃	3層 包含層
149	〃 H－28	第3層 包含層
150	〃 H－33	第 4 層
151	〃 H－27	第3層 包含層
152	〃 A－50	3 層 ②
153	〃 H－29	包含層
154	〃 H－28	第3層 包含層
155	〃 H－29	〃
156	〃 〃	包含層
157	〃 〃	第3層 包含層
158	〃 〃	包含層
159	〃 〃	第3層 包含層
160	〃 H－27	〃
161	〃 A－51	鉄分沈着層
162	〃 〃	第3層 ③
163	〃 H－29	包含層
164	〃 〃	〃
165	〃 〃	〃
166	〃 H－51	3層
167	〃 H－29	包含層
168	〃 A－51	鉄分沈着層
169	〃 〃	3層
170	〃 〃	〃
171	〃 H－29	〃
172	〃 〃	〃 包含層
173	〃 H－14	第 11 群
174	〃 〃	〃
175	〃 B－51	3 層 ③
176	〃 B－50	〃 ②
177	〃 〃	〃 ③
178	〃 〃	〃 ②
179	〃 A－50	〃
180	〃 〃	〃
181	〃 〃	3層（鉄分沈）
182	〃 〃	〃 〃
183	〃 〃	〃 〃
184	〃 〃	〃 〃
185	〃 〃	〃 ②
186	〃 〃	〃 〃
187	〃 B－50	3層2群
188	〃 A－50	3 層 ②
189	〃 H－31	包含層
190	〃 H－30	第 3 層
191	〃 〃	包含層
192	〃 H－29	第3層上面
193	〃 H－28	包含層
194	〃 H－30	30列第3層
195	〃 東原担当区	第4層（上）
196	〃 E－28	黒色砂層
197	〃 〃	〃
198	〃 H－29	第3層包含層

資料番号	出土地点	土層
199	大浦浜 H－30	第3層包含層
200	〃 E－28	黒色砂層
201	〃 〃	〃
202	〃 〃	〃
203	〃 〃	Ⓓ
204	〃 A－50	3 層 ①
205	〃 F－35	第 3 層
206	〃 A－51	3 層 ③
207	〃 E－8	第 4 層
208	〃 H－28	第3層 包含層
209	〃 A－50	3 層 ②
210	〃 E－41	第3A層
211	〃 E－28	耕作土（下層）
212	〃 〃	〃 （〃）
213	〃 A－51	3層
214	〃 H－29	〃 包含層
215	〃 G－28	耕作土
216	〃 E－36	第 3 層
217	〃 E－42	土坑
218	〃 F－30	耕作土
219	〃 〃	〃
220	〃 〃	〃
221	〃 E－29	〃 （下）
222	〃 F－34	第 3 層
223	〃 E－28	耕作土（下層）
224	〃 〃	〃
225	〃 D－28	耕作土
226	〃 〃	〃
227	〃 F－14	2層
228	〃 〃	〃
229	〃 B－50	3層
230	〃 〃	〃
231	〃 A－51	鉄分沈着層
232	ヤケヤマ東麓 G－3	落ち込み①
233	大浦浜 F－5	第4層上面
234	〃 I－28	第 4 層
235	〃 〃	〃
236	〃 F－30	〃 （上）
237	〃 E－30	〃 〃
238	〃 F－30	〃 〃
239	〃 H－34	第 4 層
240	〃 I－30	〃
241	〃 H－32	〃 直上
242	〃 I－28	第 4 層
243	〃 I－29	〃
244	〃 F－30	〃 上
245	〃 E－28	耕作土
246	〃 H－31	第3層 包含層
247	〃 I－29	第 4 層
248	〃 E－30	〃 （上）
249	〃 I－29	第 4 層
250	〃 〃	〃
251	〃 F－30	〃 （上）
252	〃 E－30	〃 〃
253	〃 G－15	土坑
254	〃 H－18	一括
255	〃 〃	〃
256	〃 〃	2 層 下
257	〃 〃	一括
258	〃 〃	〃
259	〃 〃	〃
260	〃 〃	〃
261	〃 〃	2 層 下
262	〃 〃	一括
263	〃 〃	〃

第24表　分析資料一覧表(2)

〔Ⅴ〕　分類（タイプの抽出）

(1)　分類の大前提

ある人がある形のイメージのもとに土器を作ろうとする場合，粗雑な作りの為に同一個体内や個体間にバラつきが出たとしても，そのバラつきは正規分布をなすはずである。

(2)　分類の留意点

①　測定不可能な誤差をどのように考えるか。

測定不可能な誤差として

・計測技術上
・実測図作成上
・実測図からの読み取り上

} の誤差等が考えられる。

↓

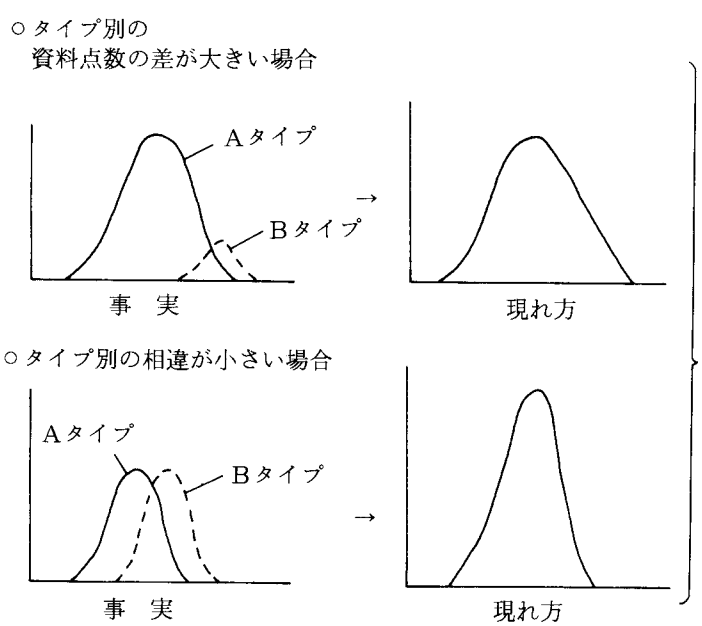
計測や実測図作成等をほとんど一人の人間が行っているので誤差があっても一つの傾向のもとにあると思われる。

②　ヒストグラム作成に際し，階層区分をどのようにするか？

一般的にはHuntsbergerの式によりいくつの階層に区分すればよいか求められるが，今回は同一個体内に含まれるバラつき（誤差）との関係上図化したような階層区分とした。一応の目安として累積百分率が50％を超える値を階層の幅とした。但し，脚端厚はバラつきを考慮してもタイプによる差異が有効と考えられたので，それを表現し得る階層区分を採用した。

$k = 1 + 3.3 \log n$　但し，kは階層数，nは資料数

③　仮に，いくつかのタイプが存在したとしても，タイプごとの資料点数の差の為に分類が困難になる場合が考えられるが，それにどう対処するか。また，タイプの間の相違が小さい為に分類が困難になる場合が考えられるがそれにどう対処するか？



①　イメージとしてもっている分類を参考までに合わせ図化する。

②　他の指標（脚高等）との関係を考える。

③　遺物自体が実測図に反復して考える。

④ いくつかの指標の総合的判断をどうするか。

――類型化の方法としていかなる方法が一番適当か。――

タイプの抽出にあたって一番考慮を要するところである。できる限り主観を排除し統計的に処理する為に，コンピューターを使ったクラスター分析が適当かと思われるが，実際に可能かどうか検討中である。

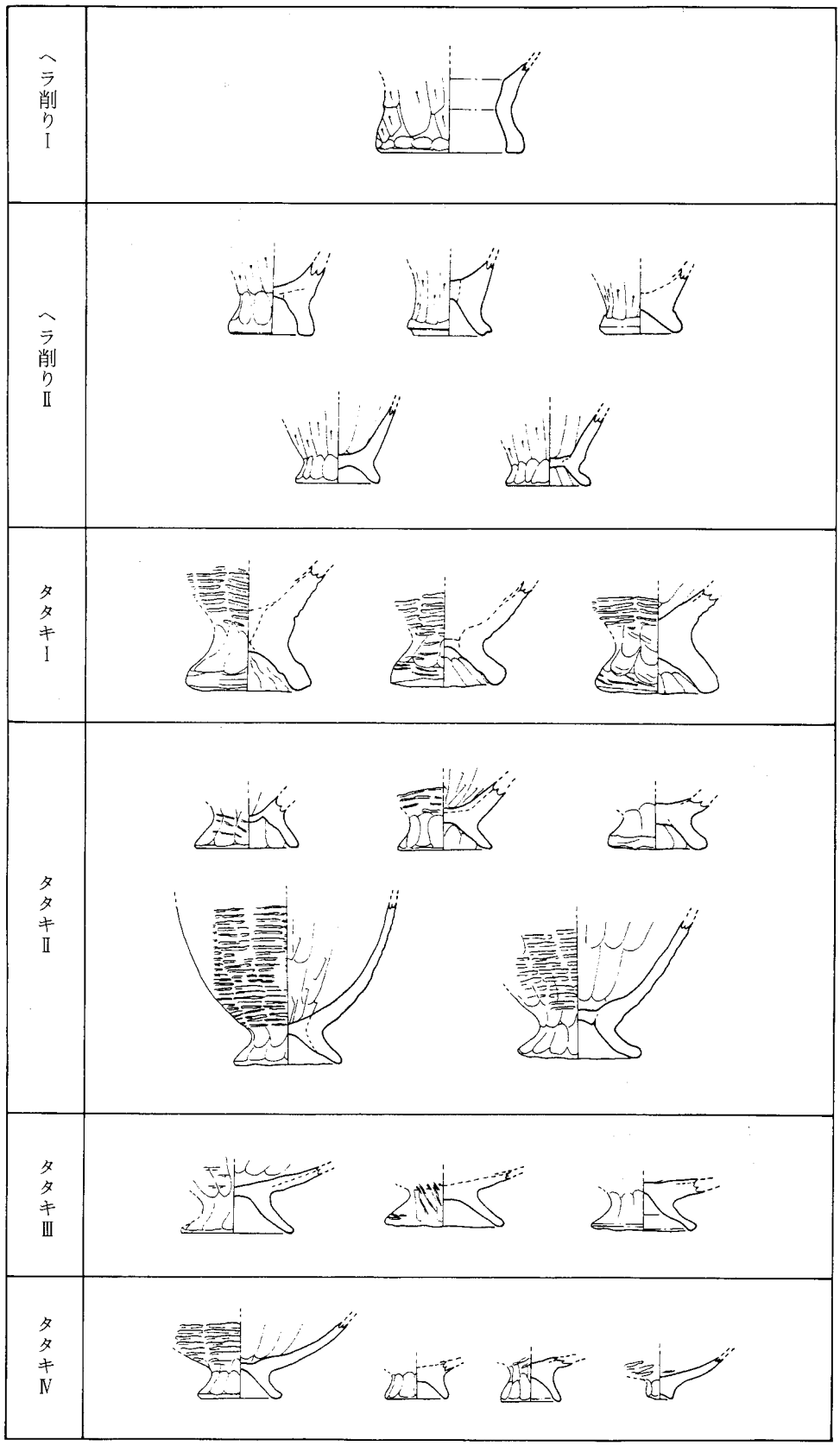
(3) 各タイプの特徴

タイプの抽出については統計的にまだ多々処理すべき問題を残しているが，これまでの計測結果から，今のところ，ヘラ削り2タイプ，タタキ4タイプを想定している。

	脚径	脚高	脚端厚	水平距離 1.5 cm の立ち上がり	特徴	分類の難易
	cm	cm	mm	cm		
ヘラ削りⅠ	6.5～7.0	2.0～2.4	7.0～9.0	不明	・ヘラ削り ・脚径 特大	容易
ヘラ削りⅡ	3.5～4.0	0.8～1.6	3.5～9.0	3.0～3.5	・ヘラ削り ・脚径 中	容易
タタキⅠ	5.0～5.5	1.6～2.4	6.0～10.0	1.4～3.0	・タタキ ・脚高2cm ・脚径 大 ・脚端厚 極厚い	割と容易 （タタキⅡとまぎらわしいのがある）
タタキⅡ	4.0～6.0	1.2～1.6	4.0～6.0	1.2～2.4	・タタキ ・立ち上がる ・脚径 大 ・脚端厚 厚い	タタキⅢとまぎらわしい （脚端厚と立ち上がりで分類）
タタキⅢ	3.5～5.5	1.0～1.6	2.5～4.5	0.4～1.2	・タタキ ・ねる ・脚径 大 ・脚端厚 薄い	タタキⅡとまぎらわしい （タタキⅣとの境あたりの脚径のものもある）
タタキⅣ	2.0～3.5	0.6～1.2	2.0～4.0	0.4～1.2	・タタキ ・ねる ・脚径 小 ・脚端厚 薄い	割と容易 （タタキⅢとまぎらわしいものもある）

(4) タイプ内におけるバラつきと細分の可能性

指標の少なさや処理上のまずさの為に細分できるものを見落としている可能性があるが、後に述べる分布のありようから，現在のところ細分しても根拠に乏しくなるので，敢えて細分しなかった。唯，ヘラ削りⅡについては統計的にも細分できそうであり（概報(V)で触れている)。また後に述べる編年との絡みからヘラ削りⅢ，Ⅳとしていくか，ヘラ削りⅡa，Ⅱbとしていくか，今後の検討課題としたい。



第96図　脚台付製塩土器分類試案

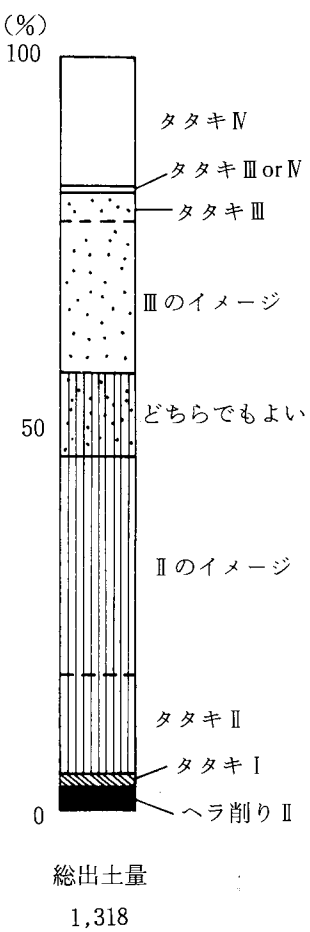
〔Ⅵ〕　個体数の算出方法と分布

個体数の算出方法

① 個体数は脚部で数える。

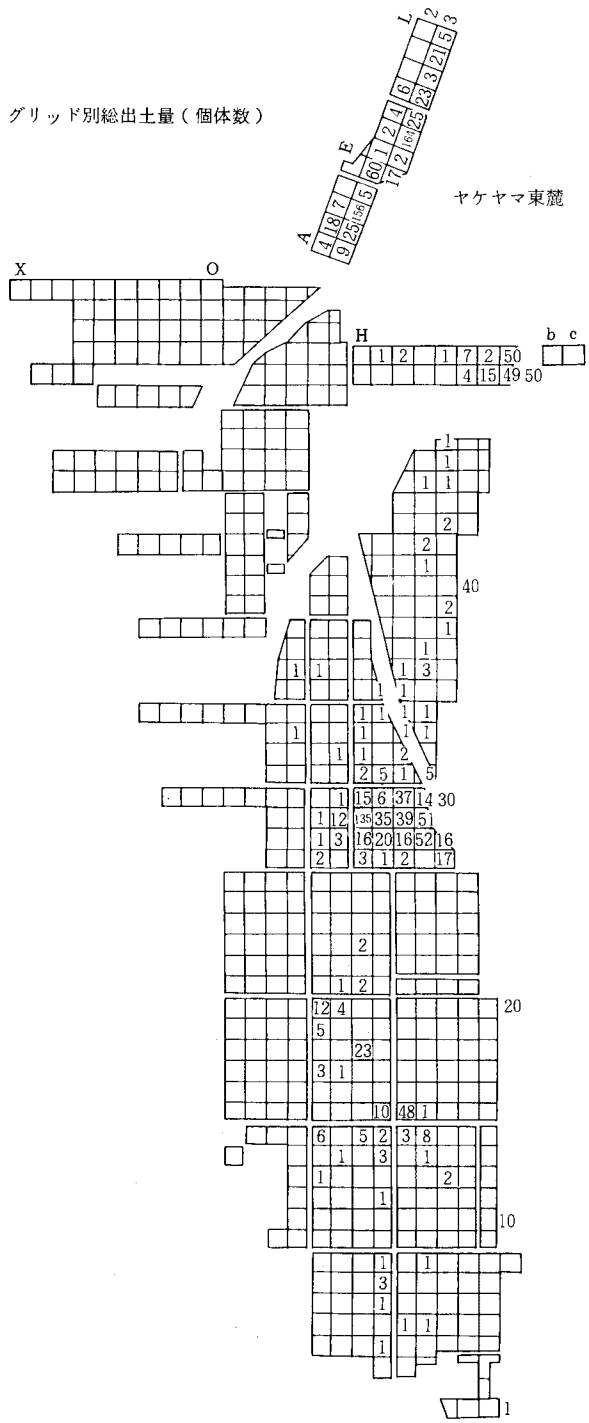
② 残存状況1/4を基本に数える。

・ 1/8は1/4に，3/8は2/4にというふうに数えているので，総個体数やグリッド別個体数



タイプ			個体数	%
ヘラ削り	Ⅰ		1	0.1
	Ⅱ		34	2.6
タタキ	Ⅰ		27	2.0
	Ⅰ or Ⅱ		4	0.3
	Ⅱ		174	13.2
	Ⅱ or Ⅲ	Ⅱのイメージ	384	29.1
		どちらでもよい	146	11.1
		Ⅲのイメージ	265	20.1
	Ⅲ		50	3.8
	Ⅲ or Ⅳ		12	0.9
	Ⅳ		221	16.8
計			1,318	100.0

第25表　タイプ別出土量

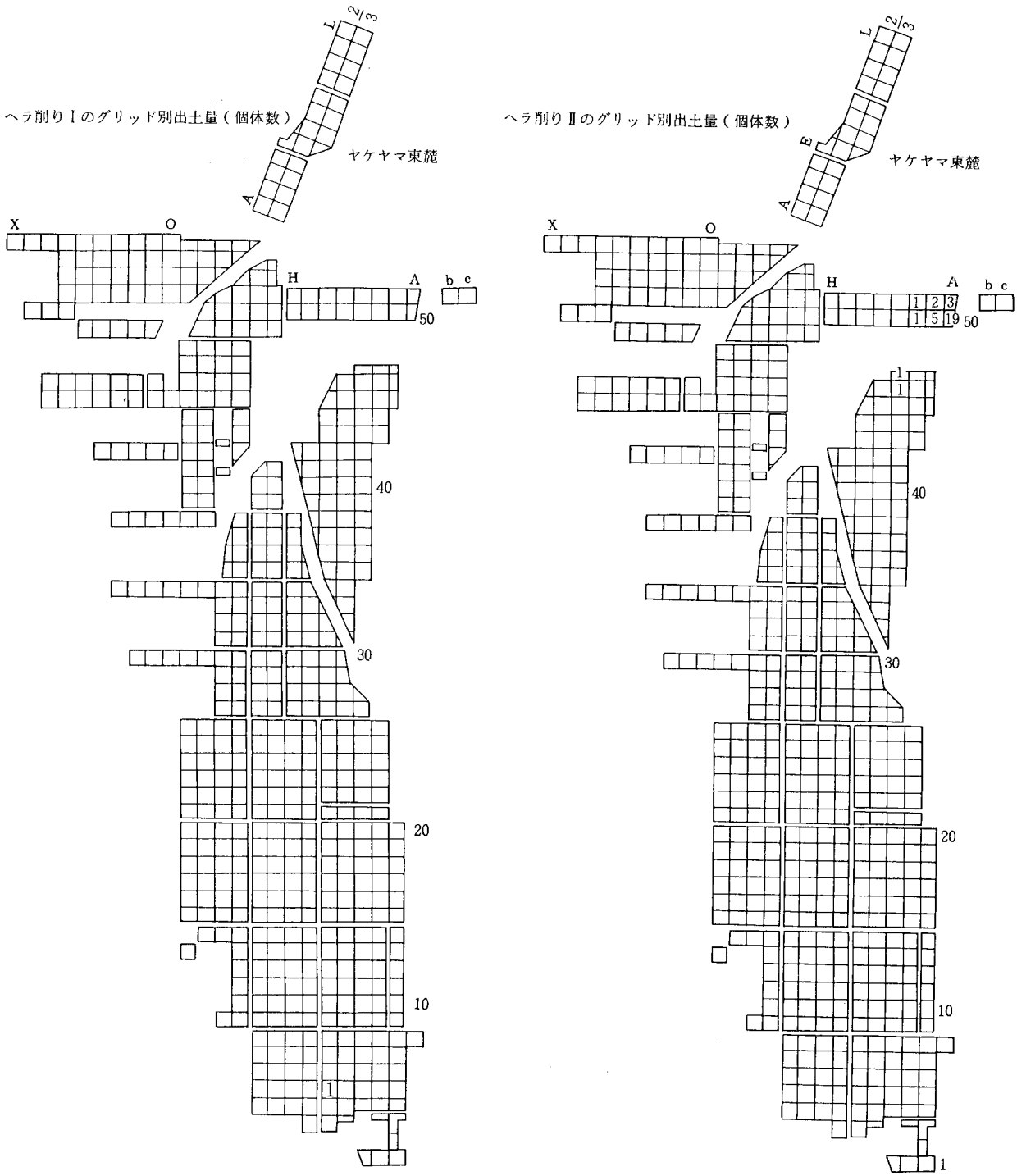


第97図　脚台付製塩土器の分布(1)

は若干多めに算出されている可能性が高い。

・　グリッド別やタイプ別に集計して1/2，1/4のように端数が出た場合は全て切上げて整数に直した。

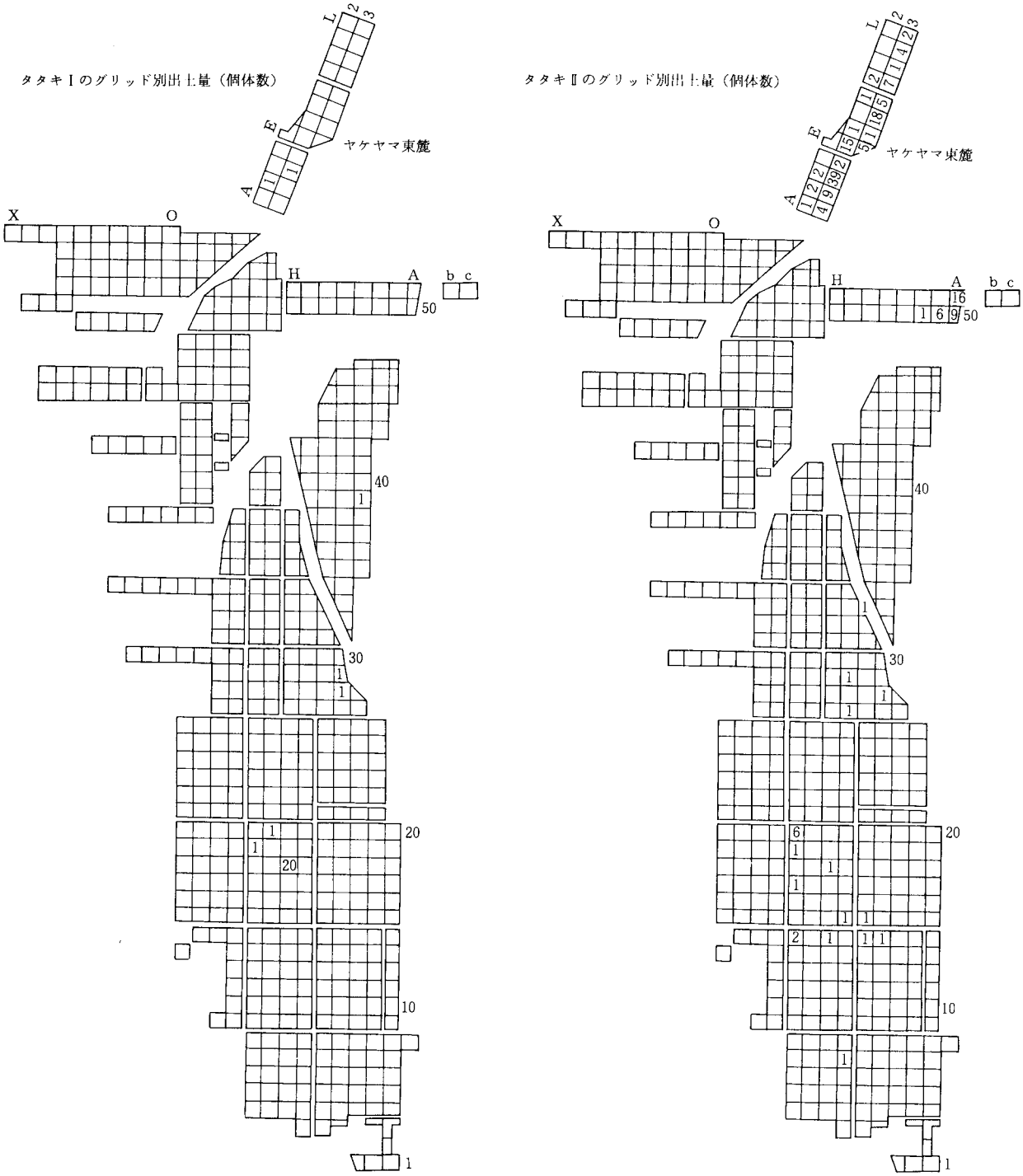
③　タイプ別の個体数を数える際，どのタイプに属するか不明瞭な場合は，タタキⅠorⅡ，タタキⅡorⅢ，タタキⅢorⅣとした。



第98図　脚台付製塩土器の分布(2)

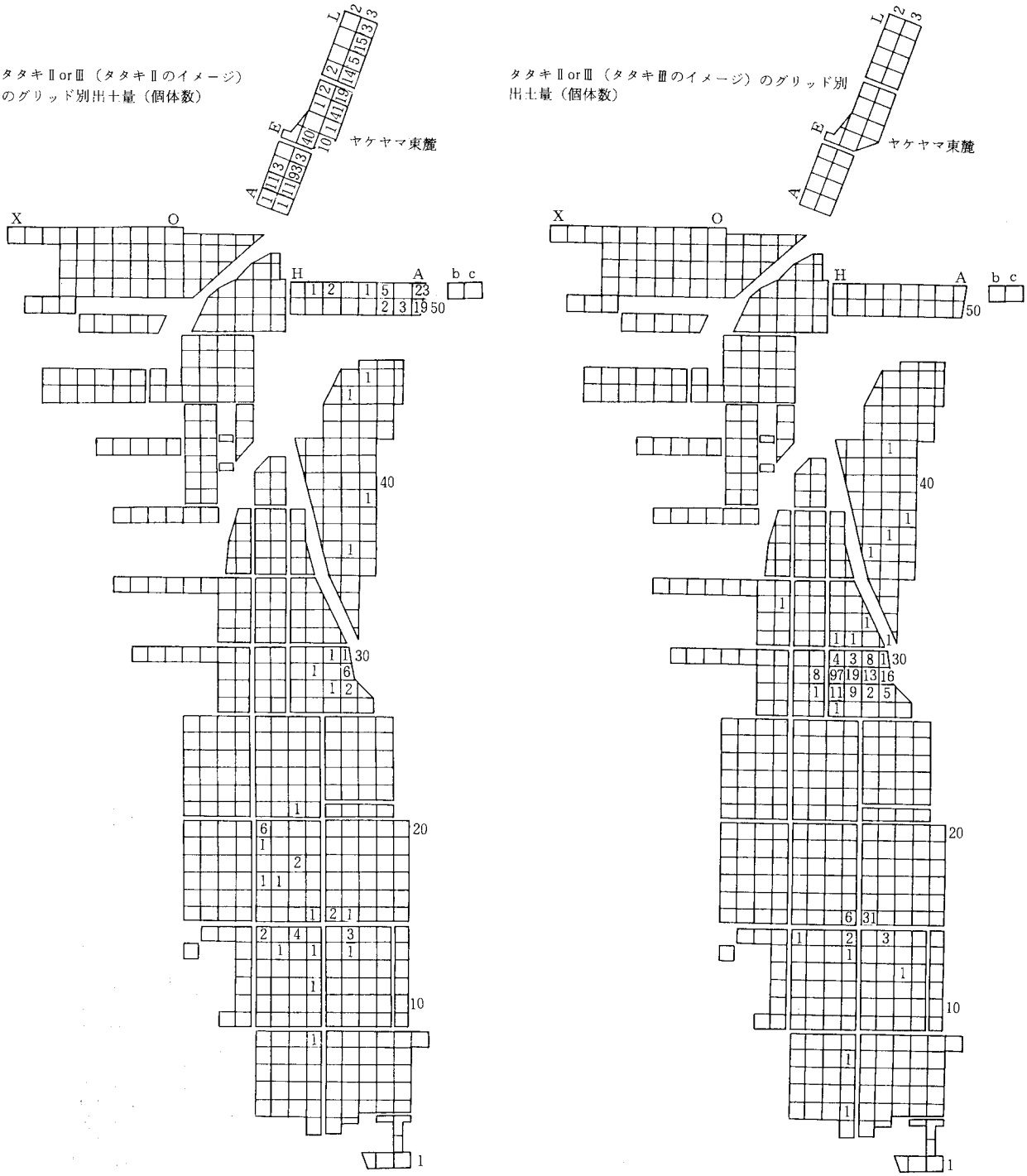
唯，タタキⅡorⅢについてはその数が余りにも多くなるので，さらに，“タタキⅡのイメージ”・“タタキⅢのイメージ”・“どちらでもよい”の3つに分けた。主観的ではあるが，“タタキⅡのイメージ”はそのままタタキⅡへ，“タタキⅢのイメージ”はそのままタタキⅢへ含めてもほとんどまちがっていないと確信している。

尚，書き遅れたが，タタキⅡやタタキⅢに含めるかタタキⅡorⅢに含めるかの判断は立ち



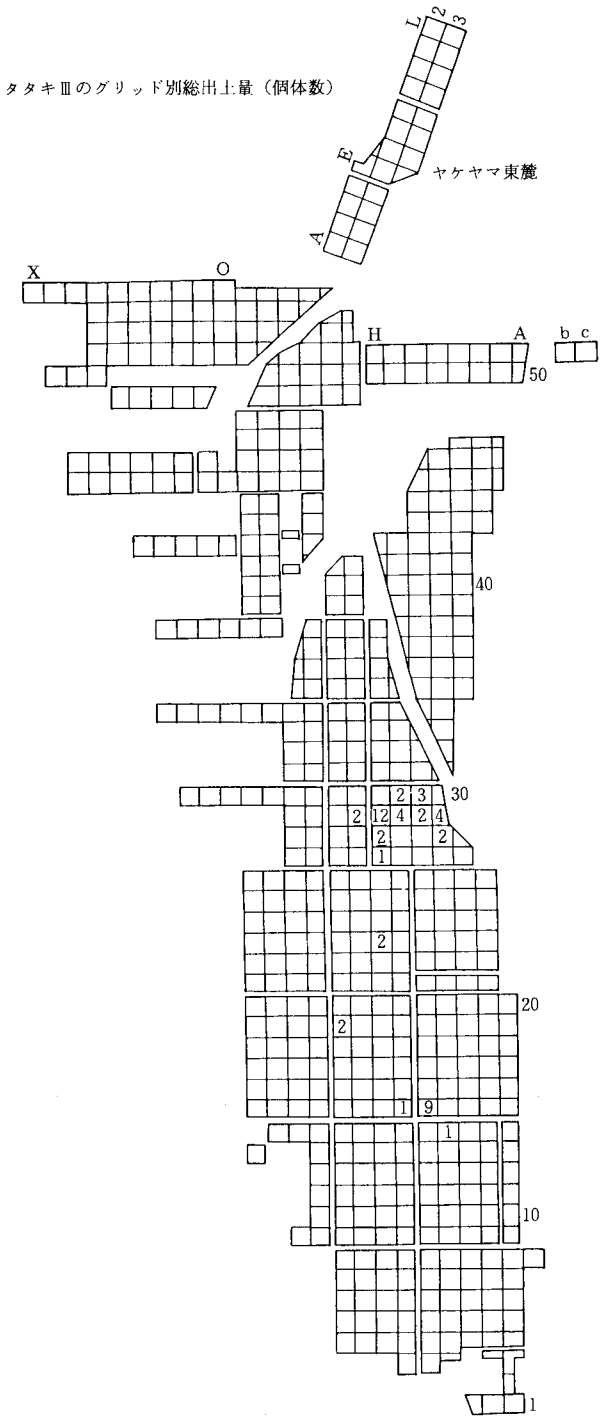
第99図　脚台付製塩土器の分布(3)

上がりが水平距離で1.5cm以上残存しているかどうかによった。1.5cm以上残存していればタタキⅡかタタキⅢのどちらかに確定し，それ以下だとタタキⅡorⅢに含めた。

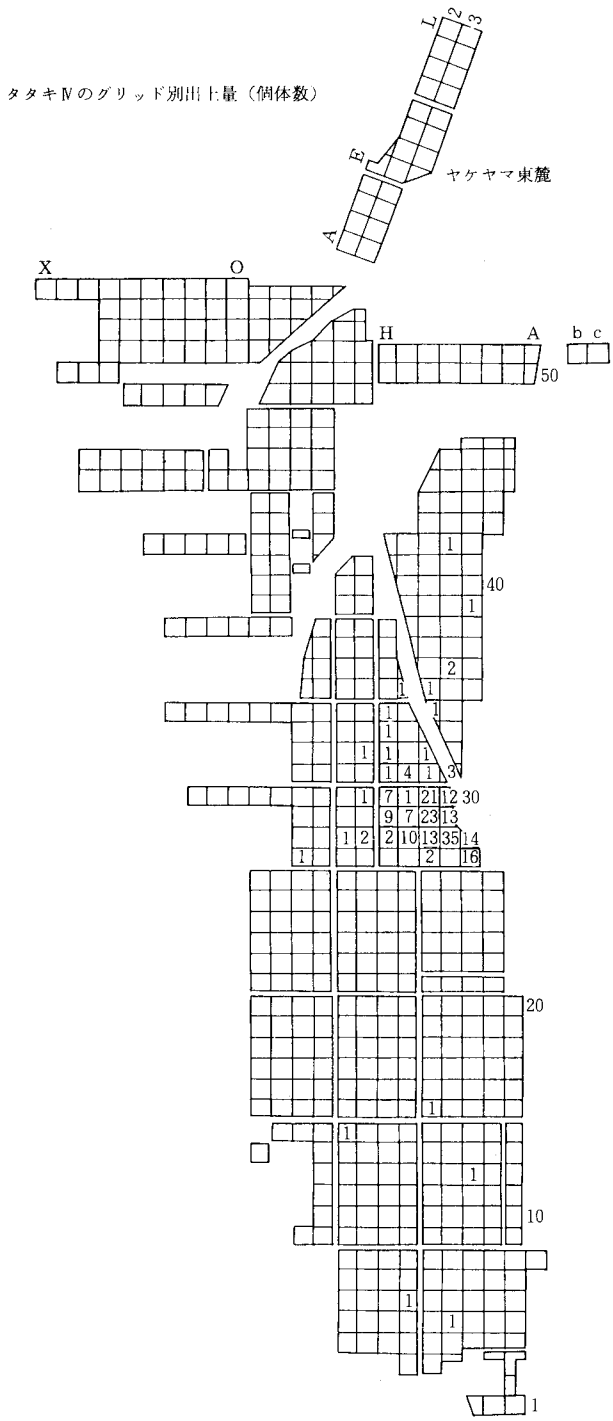


第100図　脚台付製塩土器の分布(4)

タタキⅢのグリッド別総出土量（個体数）



タタキⅣのグリッド別出土量（個体数）



第101図　脚台付製塩土器の分布(5)

〔Ⅶ〕　編年上におけるタタキⅠの位置付けと問題点

タタキⅡ→タタキⅢ→タタキⅣへという流れは，計測結果からも一つの流れとしてとらえて問題がなく，異論の出にくいところと思われるので，ここでは最も問題を含んでいると考えられるタタキⅠを中心に検討する。

(1)　タタキⅠ→タタキⅡという流れを考えた理由

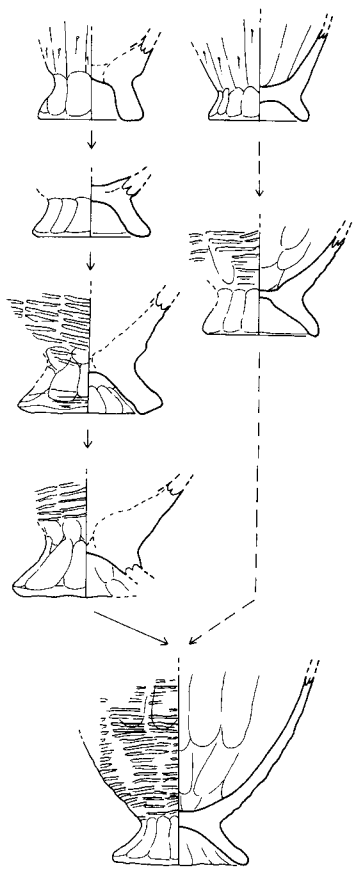
①　タタキⅡ→タタキⅢ・Ⅳという流れの1つとして，脚端厚が薄くなるという傾向があり，その傾向の中で考えると，タタキⅠはタタキⅡの前にもってくるのが自然であること。

②　ヘラ削りⅡの中の脚端厚の厚いものと同様に，タタキⅠは脚端に面を意識的に残していること。

③　タタキⅠに見られる脚端の面をつぶすような形で両側から指でつまむとタタキⅡのように脚端まで指頭痕が及んでいる形になること。

ついでに記すと，その指頭痕を消すようにていねいに内側を横ナデするという手法はタタキⅡの途中からみられるようになると思われ，タタキⅢでは脚端に明瞭な指頭痕はほとんどみられなくなるようである。このことについてはまだ検証していないので明確な断定は避けたい。

④　統計的にはうまく現れなかったが，イメージとしてタタキⅡよりタタキⅠの方が直線的に立ち上がる感じを受け，立ち上がりの傾向の中で，タタキⅡの前にタタキⅠをもってくる方が自然のように思われること。



第102図　ヘラ削りⅡからタタキⅡまでの系譜案

(2)　タタキⅠ→タタキⅡという流れを想定した場合の問題点

1つの流れの中でヘラ削りⅡの厚手→タタキⅠ→タタキⅡととらえようとすると，ヘラ削りⅡの薄手（脚端厚が）のものは，ヘラ削りⅡの厚手の前にもってこざるを得なくなり，そうした流れの想定は，さらにその前のヘラ削りの流れの中では，現時点において，無理がある。

そこで，ヘラ削りⅡの厚手と薄手を平行関係にあると想定するのが現状では妥当なように思われる。

ヘラ削りⅡの厚手→タタキⅠ→タタキⅡ→タタキⅢ

ヘラ削りⅡの薄手→（？タイプ）→タタキⅡ

このように考えた場合，？タイプは今回の統計処理では見い出せず，結果的にタタキⅡに含めている可能性が高いし，今後も分離が困難であろうと思われる。

そうすると，単純にタタキⅠ→タタキⅡと言えなくなり，タタキⅠの出土量が少なく，時間的幅をどのくらい考えるかということと相まって，

ヘラ削りⅡ→（タタキⅠ）→タタキⅡ→タタキⅢ→タタキⅣというあたりが，現在言える限界のように思われる。

〔Ⅷ〕　今後の課題

(1)　指標の総合化の方法を検討し，主観的分類からできる限り脱却すること。

(2)　共伴関係の高いと考えられる古式土師器の編年を検討し，脚台付製塩土器の編年との整合性を考慮すること。

(3)　他遺跡における脚台付製塩土器の資料を集め，大浦浜資料との比較検討を行い，このような統計処理方法及び分類の検証に努めると共に，地域性の問題にせまること。

以上のように脚台の変遷について安藤の所見を掲載したが，次に概報作成時の（案）との比較を行う。

ヘラ削りⅠは，先に述べたⅠ－2類に相当する。

ヘラ削りⅡは，（概）Ⅰ－5類である。

タタキⅠは，今回新たに設定されたもので，その位置付けについては後述する。

タタキⅡは，（概）Ⅰ－8・9類に相当する。

タタキⅢは，（概）Ⅰ－10・11類に相当する。

タタキⅣは，（概）Ⅰ－12類に相当する。

まず，（概）Ⅰ－6類が今回の編年では設定されていない。これは，大浦浜遺跡での出土が無いにもかかわらず，形式的に位置付けたものであるが，体部の立ち上がり角度が大きく，やや丸みを持つもののヘラ削りⅡに近い形態であり，脚部がほぼ完全に倒杯形を呈することから見て，この段階に位置付けることの妥当性を見いだしている。

（概）Ⅰ－7類については，資料点数が1点であること，前後の器形（主として大きさ）から見て実用的でないこと等から製塩土器のミニチュアである可能性を考え，今回の編年から除外する。

タタキⅠの位置付けについては，安藤の指摘にも見られるように系譜上問題点が無いわけではない。しかし，立ち上がり角度の大きさという一視点から見て，この段階に位置付けることがもっとも妥当である。

タタキⅡについては，細分の可能性を保留しているので，一応従来の考え方を踏襲する。

タタキⅢについては，（概）Ⅰ－11類の位置付けが問題となる。山田・原遺跡[11]出土の資料と大浦浜遺跡出土資料の単純な比較作業から見れば分離しておくべきであるが，大浦浜遺跡で出土していないことから細分の可能性を残しつつも同一類としておく。

タタキⅣに変更は無い。

以上の検討を踏まえて，修正案を示す。

Ⅰ－5類（ヘラ削りⅡ）

良好な資料は不足しているが，大浦浜遺跡A・B－50・51区第3層出土の資料に基づいて設定した。

口縁部まで残存している例がなく，体部全体の形状は不明である。残存率の高いものから見れ

ばⅠ－4類のVタイプおよび中間タイプに続くものと推定される。

脚部は3タイプに分かれる。Aタイプは脚高が低いもの，Bタイプは倒杯形に近いもの，Cタイプは脚高が低く見えるが上げ底状を呈するものである。

次に調整であるが，Ⅰ－4類までは体部・脚部共にヘラ削りが施されていたが，この段階では体部にヘラ削りを残すものの，脚部は指頭圧痕・指ナデ調整が施される。倒杯形脚台の成立にとっては大きな画期と言える。

Ⅰ－6類

岩本正二編年[12]C類の百田遺跡出土資料がこの段階に相当する。百田資料はⅠ－4類以降の中間タイプの系譜で考えられる。また，同一類と考えられるものに坂出市高屋遺跡[13]の資料がある。これはVタイプの系譜で考えられるもので，百田資料同様外面の調整はナデを基調としている。体部の形状は，高屋資料の方がスマートで古い形態を残していると考えられる。脚部は両資料ともに倒杯形を呈し，この段階で脚部形態が整ったといえる。

Ⅰ－7類（タタキⅠ）

脚台のみ出土しており，全体の形状は不明である。体部の立ち上がりは，残存部分から見て前段階のものに近く，外上方に直線的に延びるものと推定される。脚部は「ハ」の字形に開き，脚高も高い。また，器壁が厚く重厚な感じを与える。出土量はあまり多くなく，ヘラ削りⅡ・Ⅰ－6類との間に形式的な隔絶（不連続性）も感じられる。

Ⅰ－8類（タタキⅡ）

従来の分類案にそって細分する。

a）E－14区SK01及びG－15区SK01出土の資料を基準にした。体部は内湾ぎみに外上方に延びるため，前段階に比べて丸みを持った体部になる。また器壁は少々薄くなり，脚部の高さが低くなること，開きも「ハ」の字形から「八」の字形にやや開き気味になるのが特徴である。

b）大泊遺跡第3層[14]出土資料を基準とする。a類よりも立ち上がり角度が鋭角で，砲弾形の体部を有する。脚部の径も大きくなり，次の段階につながる要素が多い。

Ⅰ－9類（タタキⅢ）

山田・原遺跡[15]出土の資料を標式にした。前段階よりも立ち上がり角度が小さくなり，器壁も薄くなる傾向にある。脚部は扁平で，脚径が大きくなる。概報作成時には2類に区分したが，1タイプ内でのバリエーションと考えておく。

Ⅰ－10類（タタキⅣ）

大浦浜遺跡では，Ⅰ－9類と同一の層から多数出土している。体部は，次の段階に想定している無脚のものと同様の器形であると考えられる。脚部は図に示したように，前段階に比べて脚径が小さくなりながら続いている「八」の字形に開くものや，脚部がほぼ垂直に下がるもの，円柱の突起状を呈するもの等があるが，体部に変化が認められないことから同類内のバリエーションと考えておく。

Ⅱ類

Ⅱ類は前段階（Ⅰ－10類）から脚台が消滅した段階で，器壁が薄くなることが特徴になる。体部の形状は前段階と変わらず，丸底コップ状を呈する。但しこの中でも若干の変化が見られることから，3類に分類することが可能である。

Ⅱ－1類

F－19区土器集中（予備調査Ⅲ－10－X・Y区）出土の資料を基準にした。底部はやや平底風で，口縁部は内傾するものも多い。器厚は1～3㎜と薄手で，外面には叩きの痕跡が見られる。

Ⅱ－2類

Ⅱ－1類とほぼ同形態・同調整であるが，器高が低くなり，全体的にやや丸みを持つ。底部は丸底・尖底風になる。大浦浜遺跡では，第1・11土器群に伴出したものがこの類に属する。喜兵衛島南東浜Ⅰ[16]に類例がある。

Ⅱ－3類

第11土器群で，Ⅱ－2類と共伴して出土している。

口縁部は直立し，体部はやや扁平な球状を呈する。底部は平底で安定感がある。器壁の厚さは底部を除けばⅡ－1・2類と同様である。

1点しか出土していないが，次のⅢ類に先行する形態を持った資料として設定した。

Ⅲ類

大浦浜遺跡で出土している製塩土器の大半がこの類に該当する。しかし，その中に占める遺構から出土している資料点数が少ないことが問題点の一つに上げられる。そうした点では包含層資料の活用も考えられたが，包含層資料については層位的な区分が出来なかったこともあり，比較検討することが難しいと判断された。

次に製塩土器を資料分析する場合の問題点として，個体中（特に口縁部）に歪みが見られることから形態分類を実施した場合，分類者の主観が入る可能性が高いことが上げられる。

以上のことを前提に，資料点数が確保されているH－14区SK01上層（以下「上層」と略す）・下層（以下「下層」と略す），G－18区SK01（以下「G18」と略す）の3資料について比較検討を実施した。

① タタキの分類・出土率

タタキについては，Ⅰ～XⅦ類に分類した。（第103図）

分類に際しては，各類の中に多くの要素が含まれる事を前提に，この中から共通する部分を抽出して大分類している。例えば，Ⅰ類中に含まれる平行タタキには，その単位が細かいものから太いものまで各種含まれるが，あえて細目を設定していない。これは，細目の基準が曖昧になること及び主観を考慮したためである。

X類の「不明」は，器壁外面の磨滅によって文様が限定できなかったものを含んでおり，この類は除外して考える。

上層・下層・G18のタタキ比率は，第26－1表に見られるような結果を得た。

上層の特徴としてはⅠ類が89％を占めることにある。他の6種類が1～3％に留まることを考えると群を抜いて多い。

下層は8種類のタタキが確認され，このうちⅠ類の占める割合が最も多いものの40％に留まる。次に大きな位置を占めるのが34％のⅨ類（無文）である。このように上層との比較では，明らかにⅠ類の占める比率に大きな差が見いだされた。

G18は上層に近く，Ⅰ類が87％を占め，他の7類が1～3％の範囲に収まる。このように，タタキ比率に関しては上層とG18がほぼ同様の内容を示す。

② 形態の分類・出土率

形態については，次の５タイプに分類した。（第104図）

A_1 口縁部が直立し，体部上半肩部に最大径を持つもの。

A_2 肩部から直線的に内傾する口縁部を有する。最大径は肩部にあるもの。

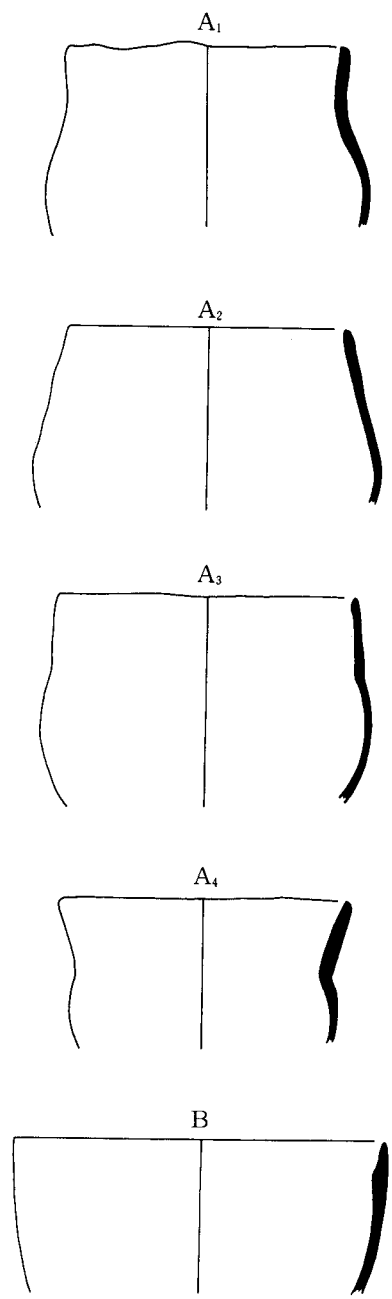
A_3 A_1タイプに類似するが，口縁部が直立せず内傾するもの。

A_4 口縁部が直線的に外傾するタイプで，口径が体部最大径を上回るもの。

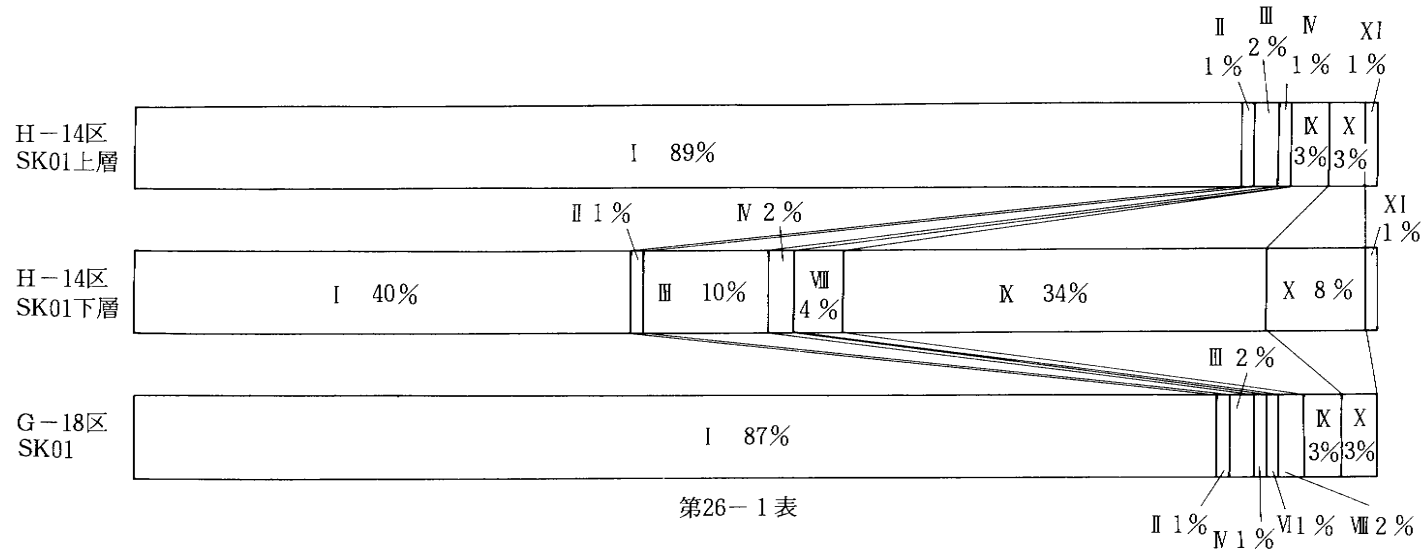
B 半球状の体部を有し，口縁部と体部の差が無いものである。口縁端部が内湾するものが多い。

分類	模式図
Ⅰ	方向は問わず
Ⅱ	
Ⅲ	
Ⅳ	
Ⅴ	
Ⅵ	
Ⅶ	
Ⅷ	
Ⅸ	無　文
Ⅹ	不　明
Ⅺ	
Ⅻ	
ⅩⅢ	
ⅩⅣ	
ⅩⅤ	
ⅩⅥ	

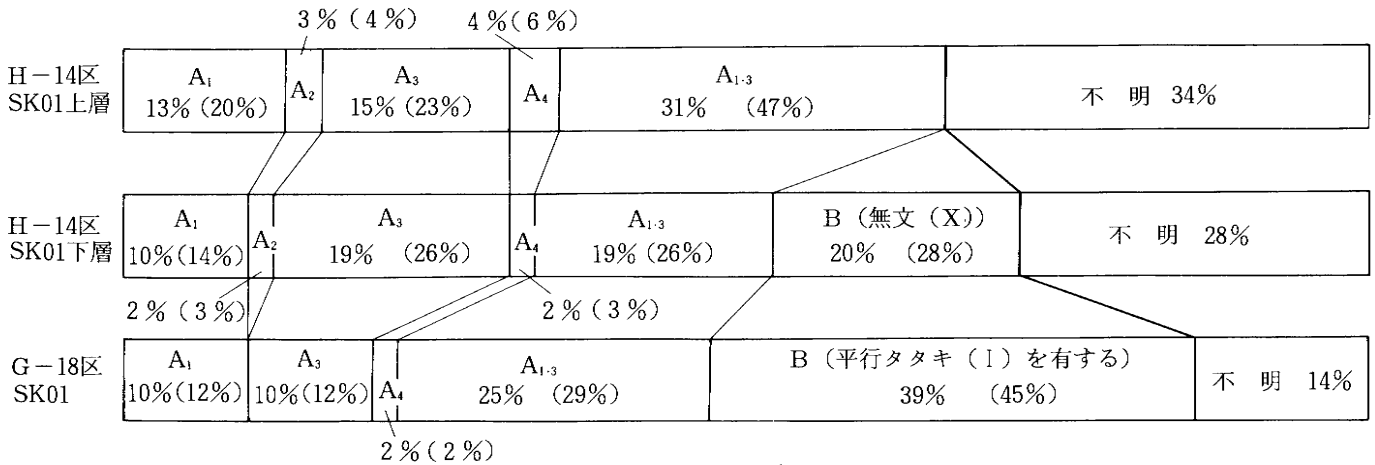
第103図　タタキ目分類模式図



第104図　Ⅲ類製塩土器タイプ図



第26－1表



第26－2表

第26表　土坑を基準とする数量統計

形態分類については先にも述べた通り，個体内で差が認められ，明確に分類することが出来なかったものも多い。例えばA_1とA_3を区分することが出来なかったものが多く，$A_{1\text{-}3}$として処理した。

上層・下層・G18の形態比率は，第26－２表に見られるような結果を得た。

上層は不明が1/3あるが，これを除いても$A_{1\text{-}3}$が1/3を占めるのが特徴としてあげられる。（　）内の数字は，不明部分を除いた百分率である。この結果も$A_{1\text{-}3}$の占める割合が多く，器形の曖昧化が進んだものとして理解しうる。

下層は各形式のバランスが取れている。上層と比較すると，Ｂタイプが２割りを占めることが大きな要素として取り上げられよう。上層では見られなかったＢタイプの出現を，どのように位置付けるかが今後の課題と言える。ここで出土しているＢタイプはＸ類（無文）のものである。

G18にはA_2が見当たらず，Ｂタイプが主流になる。ここで出土したＢタイプは，下層とは異なりＩ類のタタキを有するものである。

Ｂタイプのタタキの有無を問わなければ，G18－下層－上層の序列が考えられる。しかし，タタキの有無を無視することは出来ず，同じＢタイプとして捉えることをしなければ，下層－上層－G18の序列も考えられる。

③　出土遺構による年代観

下層・G18共に須恵器が出土しており，これによる比較を行う必要がある。

下層出土の須恵器杯蓋（「実」第216図212）は，天井部と口縁部の境に段が見られること，口縁部内側に段が見られることなどから考えると，第Ⅱ型式第１～２段階に比定される資料である。G18出土の須恵器（「実」第201図）には，杯蓋・身，高杯がある。杯蓋は，天井部と口縁部の境の区分が不明瞭であること。杯身は，立ち上がりが内傾する事から第Ⅱ型式第４～５段階に比定される。高杯も同一時期と考えられる。

出土須恵器から見た場合，先の後者の序列のほうがより妥当性が高い事になる。

④　Ⅲ類の細分について

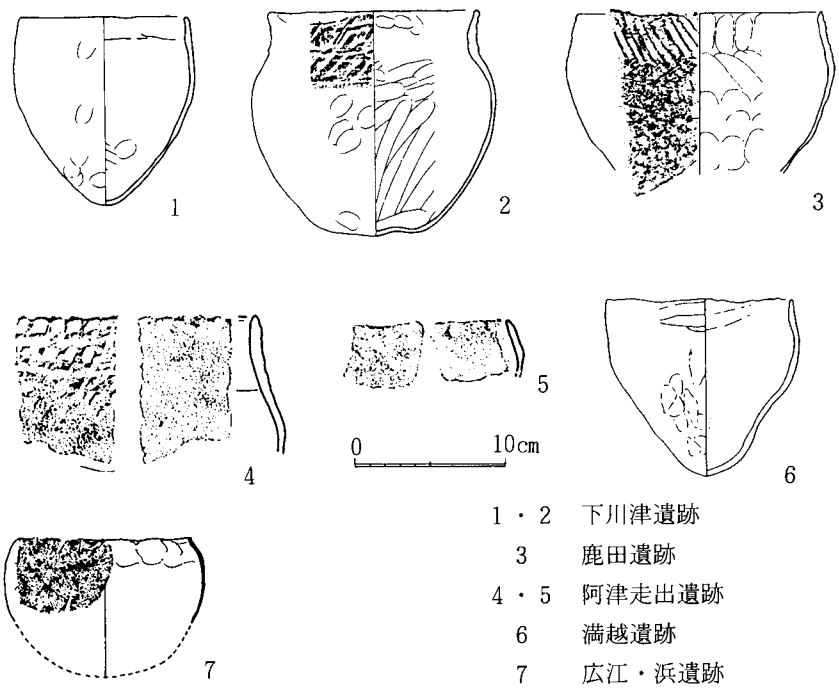
Ⅲ類の細分にあたっては，「概報」作成段階からこの形態の初源を喜兵衛島第13号墳[17]出土資料に位置付けている。共伴する須恵器も実測図から第Ⅱ型式第１段階と推定しており，このためⅡ－３類との間に時間的な空白は避けられない。今回の大浦浜遺跡土坑資料によってもこの間が埋まらないと同時に，Ｈ－14区SK01下層資料と喜兵衛島第13号墳出土資料との形態差が問題として残されることになる。また，共伴する須恵器による時間差を基準としても，製塩土器の形態差は明瞭にはならず，形態およびタタキの傾向差が若干明らかになったにすぎない。このことは，Ⅲ類製塩土器が凡そ６世紀の段階では器形変化に乏しいと考えていいのかどうかは今後の課題としてなお検討を重ねる必要がある。

Ⅳ類

Ⅳ類がⅢ類に比べ器厚が薄くなり，タタキ目があるものから無いものに変化し，丸底だった底部が尖底に近づく段階のものである。

概報ではタタキ目の有無，器形，厚さ等からタタキの有るものを２型式に細分，タタキの無いものを２型式に細分したが，本報告では後者を細分せず１型式とした。

遺構出土の資料はなく，Ｂ～Ｄ－３～15区第５層の包含層出土資料を標式とする。



1・2　下川津遺跡
3　鹿田遺跡
4・5　阿津走出遺跡
6　満越遺跡
7　広江・浜遺跡

第105図　7世紀代の製塩土器

Ⅳ－1類

破片からの図上復元であるが，器形は口縁部は内傾もしくは直立ぎみでタタキが施されており，丸底の体部が付く。大きさは口径15cm，器高13cm前後に復元でき，器厚は3.7mm平均で，Ⅲ類の厚さが平均5mm前後であるのに対して薄くなっているのが特徴である。

タタキはA類（平行線タタキ），B類（矢羽根状タタキ）のもので，これはⅢ類に共通するタタキ目である。

Ⅳ－2類

口径11cm，器高10cmで，器厚は3mm前後に図上復元でき，1類に比べると薄手小形になる。タタキ目はC～Ⅰ類でⅢ類には見られないもので，叩く度合いが弱いためか，口縁部が直立するものは少なく内彎するものが大半で，全体の器形は椀型に近く，底部は丸底であろう。

Ⅳ－3類

口径10cm，器高10cmに復元でき，器厚は3mm前後である。タタキ目はなく，口縁外面をナデ調整を行うため，内彎している。底部は尖底に近い丸底であろう。

以上がⅣ類の3型式の説明であるが，概報ではⅣ類を4細分し，3類の後に4類を設定したが，概報でも述べたとおり4類はそれ自体では他の類と区分できる特徴を持たず，今回の整理で再検討を行ったが，口縁部の内彎度など明瞭な特徴を見いだし得ず，さらに後述するように，他遺跡の出土資料によるとタタキ目を持つ段階で既に底部が尖底に成りつつあることから，タタキが無くなった段階で尖底に近づくとは考えづらくなったため，今回の編年では4類は設定しなかった。

実年代は第5層の最下部から『実』第252図－1・3が出土したため，Ⅳ－1類は7世紀第2四半世紀頃[18]とみられる。

この段階の類例は下川津遺跡[19]，広江・浜遺跡[20]，鹿田遺跡[21]，阿津走出遺跡[22]，満越遺跡[23]等があり，鹿田遺跡土壙410出土資料から見ると，3類は7世紀第3四半紀[24]頃には出現している可能性が考えられる。

V類

V類は底部が尖底となった段階のもので，C－8区SM01出土資料を標式とするが，これ以外にもB～D－3～14区第3層の包含層から大量に出土した。

SM01出土資料は口径約10cm，器高約14cm，器厚3～4㎜の大きさで，形態は口縁部が内彎しタタキ目はない。体部は幅を狭めながら直線的に下がり底部となる。底部は尖底である。

この資料は須恵器杯身（『実』第249図2）と共伴している。この須恵器は平城宮編年Ⅵ[25]に比定でき，実年代は800年前後と推定されている。

SM01は第3層を掘り込んで作られている遺構であるため，この類は9世紀代まで存続することは明らかであるが，終焉については明らかでない。包含層中の須恵器を見ると10世紀代のものが少ないため，概ね9世紀代で終わると推定しておきたい。

Ⅵ類

この類は南端地区第4層の遺構，包含層から出土した資料を標式とする。大きさは口径8～12cm，器高11～15cm，器厚2～6㎜で，器形は砲弾型で底部は尖る。口縁部の形態から3型式に細分できる。

Ⅵ－1類は口縁部が内彎するものである。

Ⅵ－2類は口縁部が直立するものである。

Ⅵ－3類は口縁部が外反するものである。

この3類については第4章第6節で述べたとおり層位的に見て，内彎から直立へ，直立から外反へと変化している。

これらの実年代は第4層包含層の出土遺物からみて12～13世紀であるが，V類と3世紀の隔たりがあり，またこの時代まで瀬戸内海沿岸で土器製塩が存続していたという報告もないため，以下にこのことを検討してみよう。

Ⅵ－1類の土器は通常の中世遺跡からは出土しない土器で，器形がV類と近似していることから，この土器を製塩土器の系譜を引く土器と見成すことに何ら問題はなかろう。

ただ，胎土は脆弱で製塩土器特有の砂粒が殆ど無く，二次焼成の痕跡もないことから，果たして煎熬に使用されたかどうかは疑問である。

製塩土器が出土した地区はこの時期の住居域と推定できる場所で，出土量がV類に比べ極端に少なく，V類のように土器製塩がある程度の規模で行われていたとは考えられない。このことはV類と比べ，器形変化がほとんど認められないことからも類推できる。つまり，V類以降，継続して土器製塩が行われていたとすると，何らかの器形変化が認められるはずであるがこれがないことで，この間土器製塩は停滞していたことを意味するであろう。

Ⅵ－1類が出現すると1世紀未満のうちにⅥ－3類まで器形変化していることを考えると，この時期に再びこの土器が何らかの目的で使用される契機が現れたと考えられるのである。

この時代の製塩は第6章第4節で考察しているように，粘土で作られた土坑等を用いた生産が

行われていたと考えるほうがよく，この粘土遺構による塩生産とⅥ類の土器は製塩という点で共通点があり何らかの関係が推定できるが，それは煎熬と言うような製塩の中心的な工程でなかったことは確かであろう。

注

(1) 岩本正二「弥生時代の土器製塩」『考古学研究』89 考古学研究会 1976

(2) 近藤義郎編『日本塩業大糸史料編考古』日本専売公社 1978

(3) 間壁葭子「広江・浜遺跡」『倉敷考古館研究集報』第14号 倉敷考古館 1979

(4) 間壁忠彦「岡山県笠岡市走出の祭祀遺跡」『倉敷考古館研究集報』第２号 倉敷考古館 1966

(5) 坪井清足『岡山県笠岡市高島遺跡調査報告』岡山県高島遺跡調査委員会 1956

(6) 伊藤 晃・山磨康平ほか『倉敷市（児島）城遺跡発掘調査報告』岡山県教育委員会 1977

(7) 山本慶一「倉敷市児島仁伍遺跡」『倉敷考古館研究集報 第８号』 倉敷考古館 1973

(8) 伊沢肇一「志度町天野出土の弥生式土器について」『文化財協会報昭和56年度特別号』 香川県文化財保護協会 1982

(9) 鎌木義昌・六車恵一「香川県高松市高松町大空遺跡の土器」『弥生式土器集成 資料編』 日本考古学協会 1961

(10) ａ伊藤 晃ほか「上東遺跡の調査」『山陽新幹線建設に伴う調査Ⅱ』 岡山県教育委員会 1974
ｂ柳瀬昭彦ほか『川入・上東』 岡山県教育委員会 1977

(11) 注(4)に同じ

(12) 注(1)に同じ

(13) 斎藤賢一「高屋遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報 昭和54年度』 香川県教育委員会 1980

(14) 注(5)に同じ

(15) 注(11)に同じ

(16) 注(2)に同じ

(17) 喜兵衛島調査団「謎の師楽式」『歴史評論 1956．１月号』

(18) 白石太一郎「畿内における古墳の終末」『国立歴史民俗博物館研究報告』第１集 第一法規出版株式会社 1982．６．30

(19) 香川県教育委員会「下川津遺跡の調査」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報（Ⅶ）』 1986．３．31

(20) 注(3)に同じ

(21) 大久保徹也「鹿田遺跡の製塩土器」『鹿田遺跡Ⅰ，岡山大学構内遺跡発掘調査報告第３冊』 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1988．３．31

(22) 下澤公明「製塩土器について」『本州四国連絡橋陸上ルート建設に伴う発掘調査Ⅱ』 岡山県教育委員会 1988．12．28

(23) 尾道市教育委員会『満越遺跡 1984』 1985．３．31

(24) 注(18)に同じ

(25) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅶ』 1976

第2節　大浦浜遺跡出土の所謂「古式土師器」について

(1)　はじめに

大浦浜遺跡からは第4章第3節で述べたように，所謂「古式土師器」が土器群・包含層等の形で多量に出土している。ここで取り上げた所謂「古式土師器」の中には，弥生時代後期後半から古墳時代前期に属する資料が含まれていることは先に述べた通りである。本節では「所謂」を取り外し，「古式土師器」の位置付けを明確にすることが主目的である。これについては，不十分ではあったが『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報（Ⅴ）―大浦浜遺跡―』[1]（以下「概報」と略す）の中で「弥生後期末～古墳前期土器編年について」として概観した。しかし，「概報」作成段階での認識とその後の整理作業に伴う再検討の結果，やや訂正すべき必要が生じたため今回若干の変更を試み再度提示することにした。また，「概報」の中でも述べたように「地域色が顕著であることから，必ずしも備讃瀬戸地域内に適応しうる編年観ではないと考える」ことから，本報告では島しょ部の土器との対比の意味で中讃地域（高松市～善通寺市）出土の土器をモデルとした土器編年の概要を提示しておくことにする。（以下の文中で島しょ部以外の陸地部の資料を県内資料と表記する。）

以下の文中で扱う「弥生時代後期の土器」とは，「布留式土器」が出現する直前の段階までとした。このことは，土器の連続性を重視したためで，古墳の出現をもって「古墳時代」とする考え方からすると，土器の連続性を云々する次元からかけ離れるため，敢えて「弥生土器」に続けて「古式土師器」の段階とした。こうした名称の学史的位置付けについての整理は，今後の課題としておく。

(2)　弥生時代後期～古墳時代前期の土器について

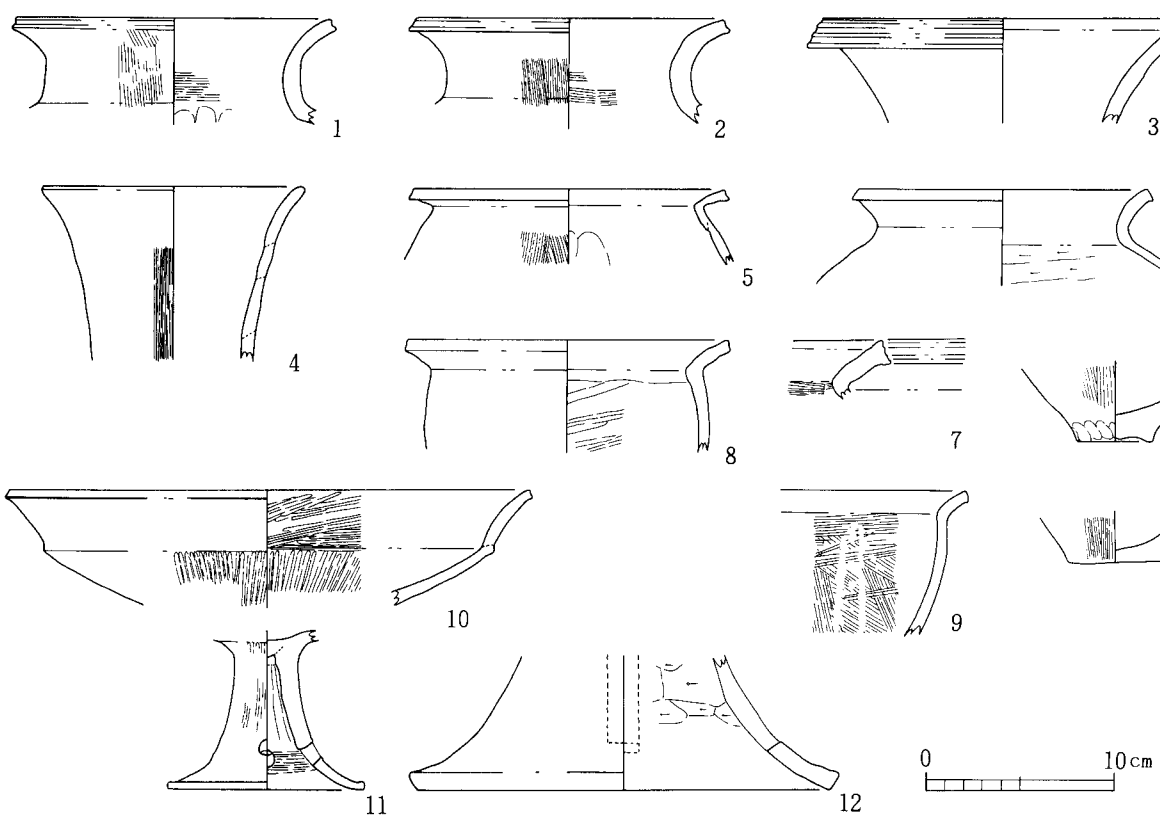
県内における弥生時代後期の土器編年は，『弥生式土器集成―資料編―』[2]の段階で「大空式―原式」の二型式が設定されて以来今日まで一つの基準になってきた。しかし，今日の状況とはかけ離れつつありこれを補正することが検討されながら，現在に至るまでこれが成されなかったのは，ひとえに発掘資料の不足によるところが大きい。こうした意味で近年，瀬戸大橋建設に伴う発掘調査において，下川津遺跡から当該時期を考える上で重要な大量の遺物が出土したことは評価に値する。今回は，下川津遺跡で出土した資料を基本とした上で周辺の遺跡から出土している資料を追加して，編年の基礎的な部分について考えた。ただ，今回の編年（案）については時期区分と，これに該当する遺跡・遺構出土の一括と考えられる資料を並べたにすぎない。各器種の消長等については今後の検討を待たなければならないが，大筋での理解として提示しておく。また，基本として多く用いた下川津遺跡出土資料は，現在報告書作成に向けて整理が開始された状況にあり，今回用いた資料も「概報」[3]に掲載されているものにかぎって使用している。本報告刊行時には今回とは異なった結果がでることも予想されるが，現段階での認識として理解されたい。

概報等で資料が公表されているもの以外で一括性が高い資料として，未報告ではあるが寒川町加藤遺跡溝Ⅰ[4]・坂出市高屋遺跡[5]・寒川町森広遺跡ⅢSH01[6]の資料を掲載した。加藤・森広の両

遺跡は東讃地域に所在するため，今回取り扱う地域とは異なるが，参考資料として提示しておく。

加藤遺跡は，県道の新設に伴い昭和52年度に県教育委員会が調査し，竪穴住居跡14棟をはじめとする多くの遺構を検出した。ここで報告する資料は，遺跡の最東端で検出された溝状遺構から出土しており，竪穴住居よりも古く位置付けられている。土器点数も少ないが，出土状態から一括性が高いものと考えられている。出土資料中には，第106図に示したように壺・甕・鉢・高杯・器台が見られる。1・2は壺の口縁部で頸部から直立したのち外上方に開き，口唇部には一条の凹線文が見られる。3は外反する口縁部に，上下に拡張された口唇部を有する広口壺である。口唇部の端面には3条の凹線文が認められる。4は長頸壺である。口縁端部は丸く終わる。5～7は甕である。口縁部は頸部から「く」の字に外反するが，口縁端部にそれぞれ特徴が認められる。5は口唇部に1条の凹線文が認められ，結果として上下にやや拡張するように見られる。6は口唇部下にやや拡張が見られるが端面は丸みをもって終わる。体部内面には頸部直下までヘラ削りが認められる。7は上下に拡張が見られ，端面に3条の凹線文が施文される。形態としては最も古い様相をとどめるものである。鉢も甕同様であるが体部最大径が口縁部にあること，口唇部に拡張が認められない事が特徴に上げられる。高杯は10・11が同一個体の可能性が高い。杯部は脚部との接合点から丸みをもって内湾ぎみに膨らんだ後明瞭な屈曲点をもって短く外反する。脚部は，接合点から「八」の字形に開き，脚端部は丸く終わる。12は器台の脚端部片である。内面にはヘラ削りが見られ，長方形の透かしが施されている。13・14は壺・甕の底部である。両者とも平底を呈する。

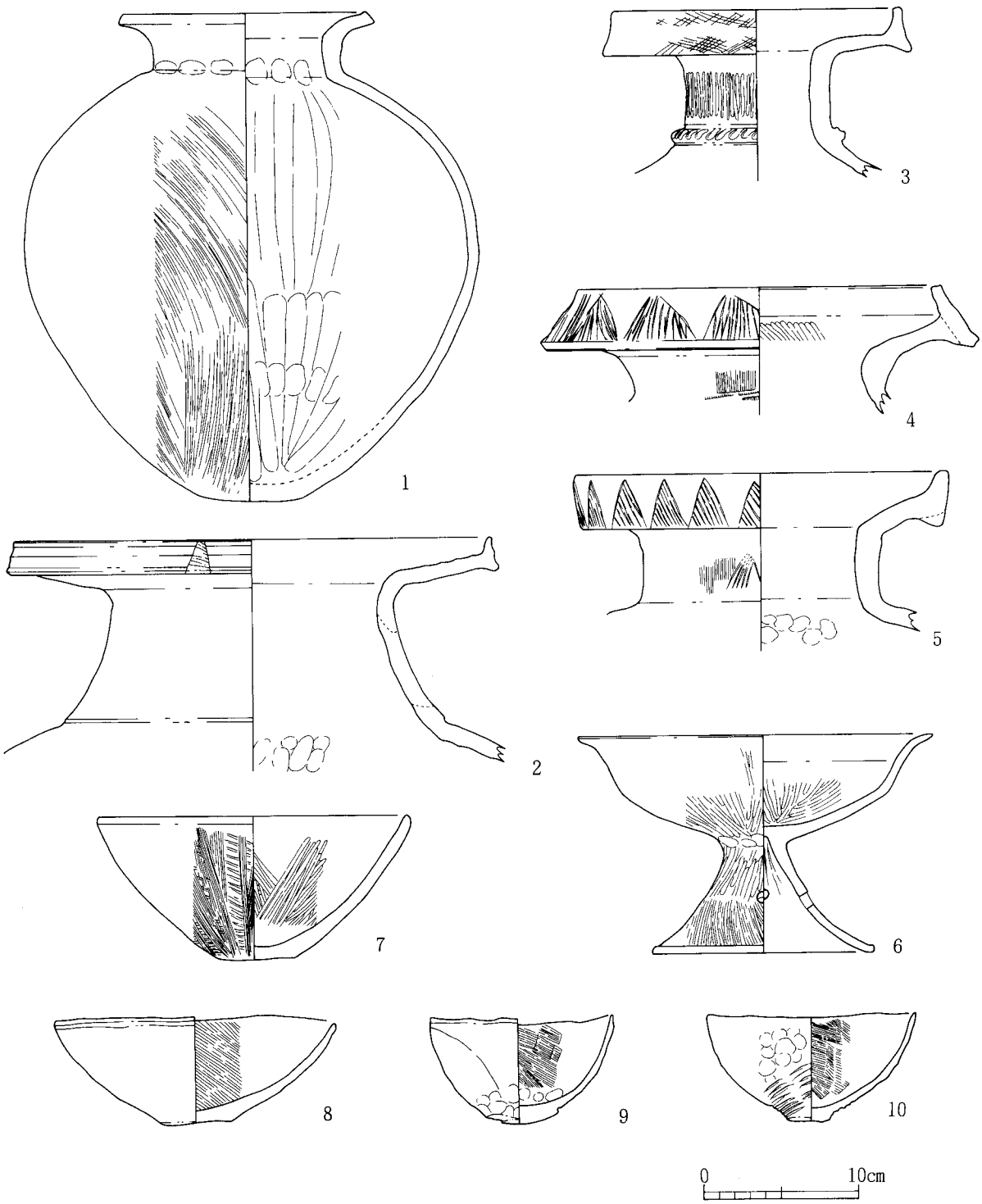
高屋遺跡は昭和54年度に調査されている。土器は土坑もしくは自然河川の溜りの中から出土し



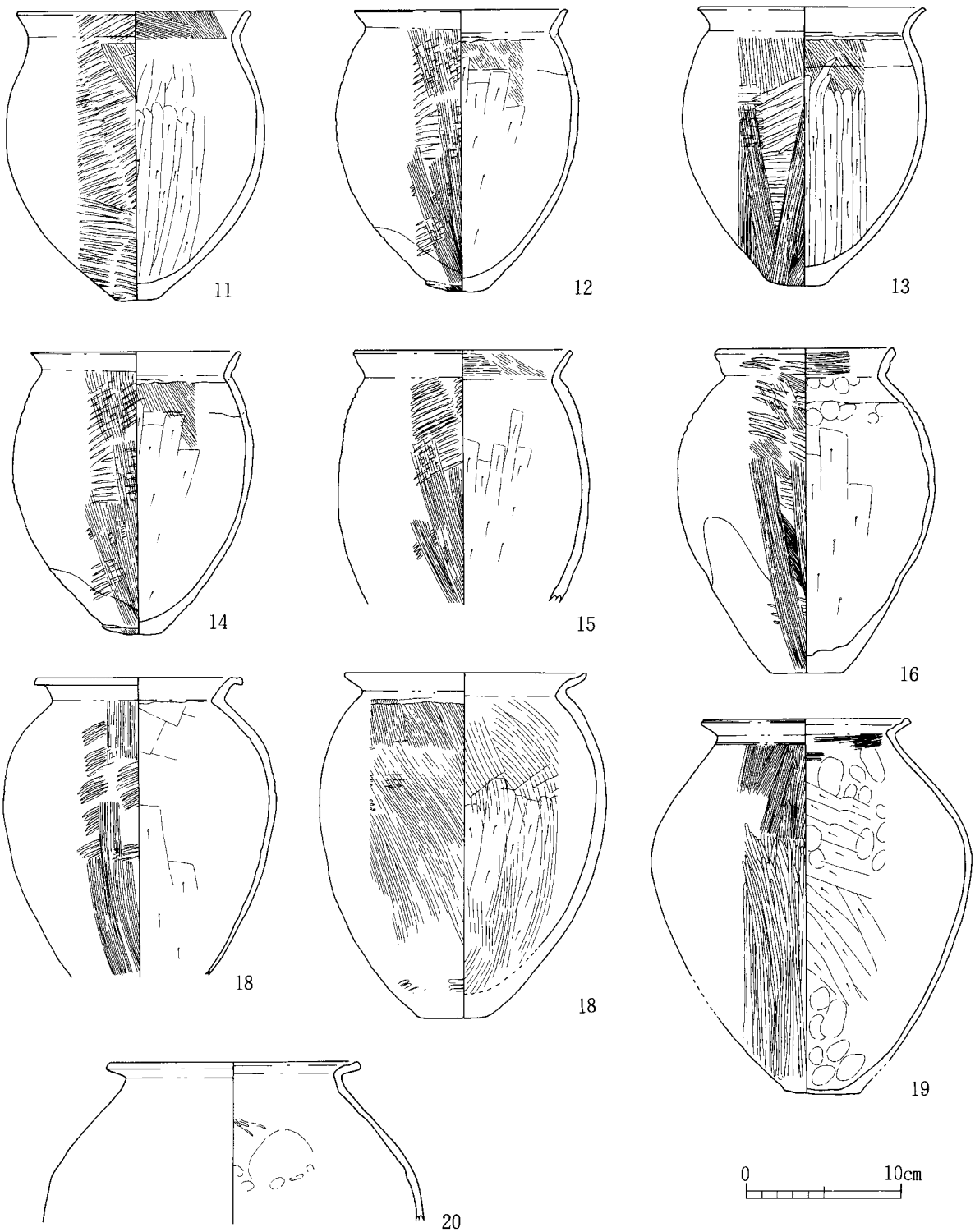
第106図　加藤遺跡溝Ⅰ出土土器実測図

ているため一括性については疑問の余地がある。しかし，複数の時期にまたがる遺物の存在を確認していないため一応提示しておく。第107図・第108図１～５は壺である。１は最大径が胴部中央にあり，口縁部は頸部との境から直立したのち外反する。口縁端部には平坦な面を残す。２～５は口唇部を拡張して文様を描くタイプである。２は体部との境から内傾したのち屈曲してほぼ水平に伸びる頸部・口縁部を有する。口唇部は垂直に上方に拡張し，鋸歯文が描かれている。３は頸部が垂直に伸び，水平な口縁部の端部を拡張する。端部には斜格子文が見られる。胴部と口頸部の境には刻み目を有する貼り付けの凸帯を巡らしている。４は下端が頸胴部の境か口頸部の境かが定かではない。口唇部の拡張は，端面が内傾するように配慮し，上面は平坦な面を残している。端面には鋸歯文が見られる。５は垂直な頸部に外上方に伸びる口縁部を有する。口縁端部は外傾し，鋸歯文が描かれている。高杯は１点のみ出土している。杯部の屈曲は明瞭ではなく外反の度合いが強い。脚部の広がりは「ハ」の字に近くなる。鉢は種々の形態のものが見られる。７・８は平底の底部からやや内湾ぎみに外上方に伸びる体部を有し，７の外面にはタタキの後刷毛目が観察される。９・10は突出する平底に半球状の体部を有する，やや小形の鉢である。甕はやや丸みを持つが平底を有するものが多い。11～16・18は肩部に最大径があり，口縁部は体部を折り曲げて整形している可能性が高い。調整は外面がタタキ後刷毛目，内面はヘラ削りを行っているものが多い。ヘラ削りは頸部まで達せず，最大径部のやや上でとどめているものが多い。17は口縁部が「く」の字に曲がり口縁端部は内面に強いヨコナデが施されるため，やや凹みが認められる。19・20は「讃岐系」[7]と呼ばれる甕で，肩部の張り・短く「く」の字に外反した口縁端部を摘み上げる手法・内面の肩部から上に見られる指頭圧痕等が特徴である。この甕は外面にタタキが観察されず，器壁が薄く作られていること，胎土など在地の土器との間に相違が認められる。

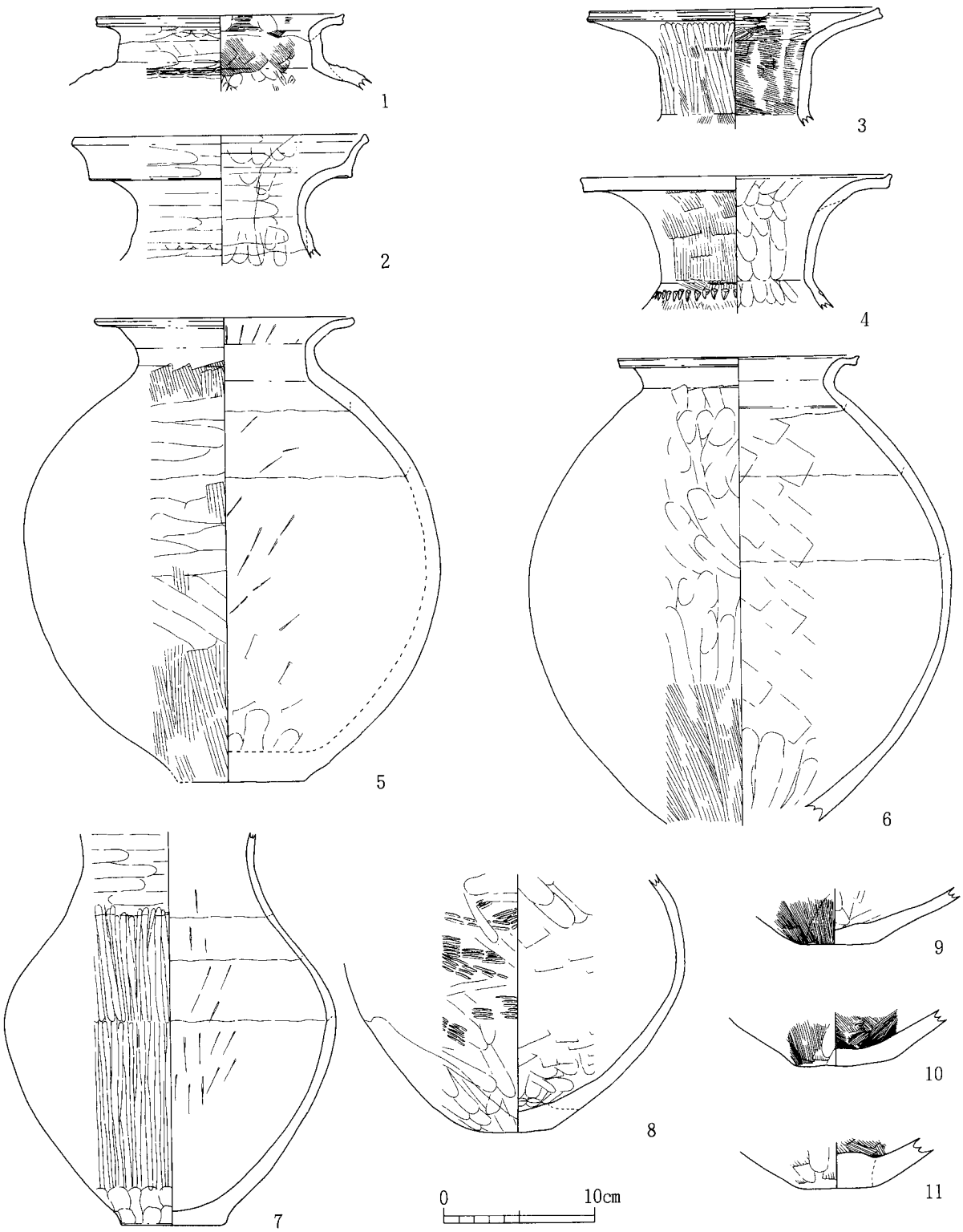
森広遺跡は，加藤遺跡の西に位置し，大きくは「森広遺跡群」として一連の遺跡として捉えられている。検出遺構は竪穴住居跡２棟他である。この内SH01からは図示した土器が出土している。土器片については一部混入も考えられるが，ここではこの住居跡に伴うとされているものをそのまま提示しておく。第109図は壺である。１は頸胴部の境から垂直に立ち上がった後，水平に近い形で広がる口縁部を有している。口唇部には凹線文が見られるなど，先行する形態と考えられることから，混入の可能性が高いと考えている。２は二重口縁を有する壺である。３は頸胴部の境から外傾ぎみに伸びた後屈曲して外上方に伸びる口縁部を有する。口唇部には凹線文が見られる。４は頸胴部の境から大きく外反する口縁部を有する。口唇部は上方に拡張されて端面を有する。頸胴部の境直下には刺突文が認められる。５は球形の体部に明瞭な平底を持つ。口縁部は一端上方に短く伸びた後外反する広口壺である。６は最大径が胴部中央にあり，全体としてやや縦長の卵形を呈する。口縁部は胴部から短く外傾した後水平に近い形で屈曲し，端部を上方に拡張して終わる。７は長頸壺の様相を呈するが口縁部が欠損しており全体形状は不明である。８も７同様の器形と考えられる。最大径は胴部中位もしくはやや上部にあり，底部は平底もしくはやや丸みを持った平底である。９～11は壺の底部片であるが，３点とも丸みを持った平底である。甕は単純「く」の字の口縁部を有するものが殆どである。12は胴部中位に最大径があり，やや胴長の形態を取る。外面調整は刷毛目であるが底部から胴部下半の約１／４程はヘラ削りが施されている。この結果底部はやや丸底ぎみの尖底を呈する。13は胴部が球形化しており，調整もやや粗い刷毛目が施されるなど他の土器と比較した場合やや異質な土器と言える。14はやや小形であるが12と同様の形態を示すものと考えられる。15は胴部が球形を呈し，口唇部が凹線状に調整さ



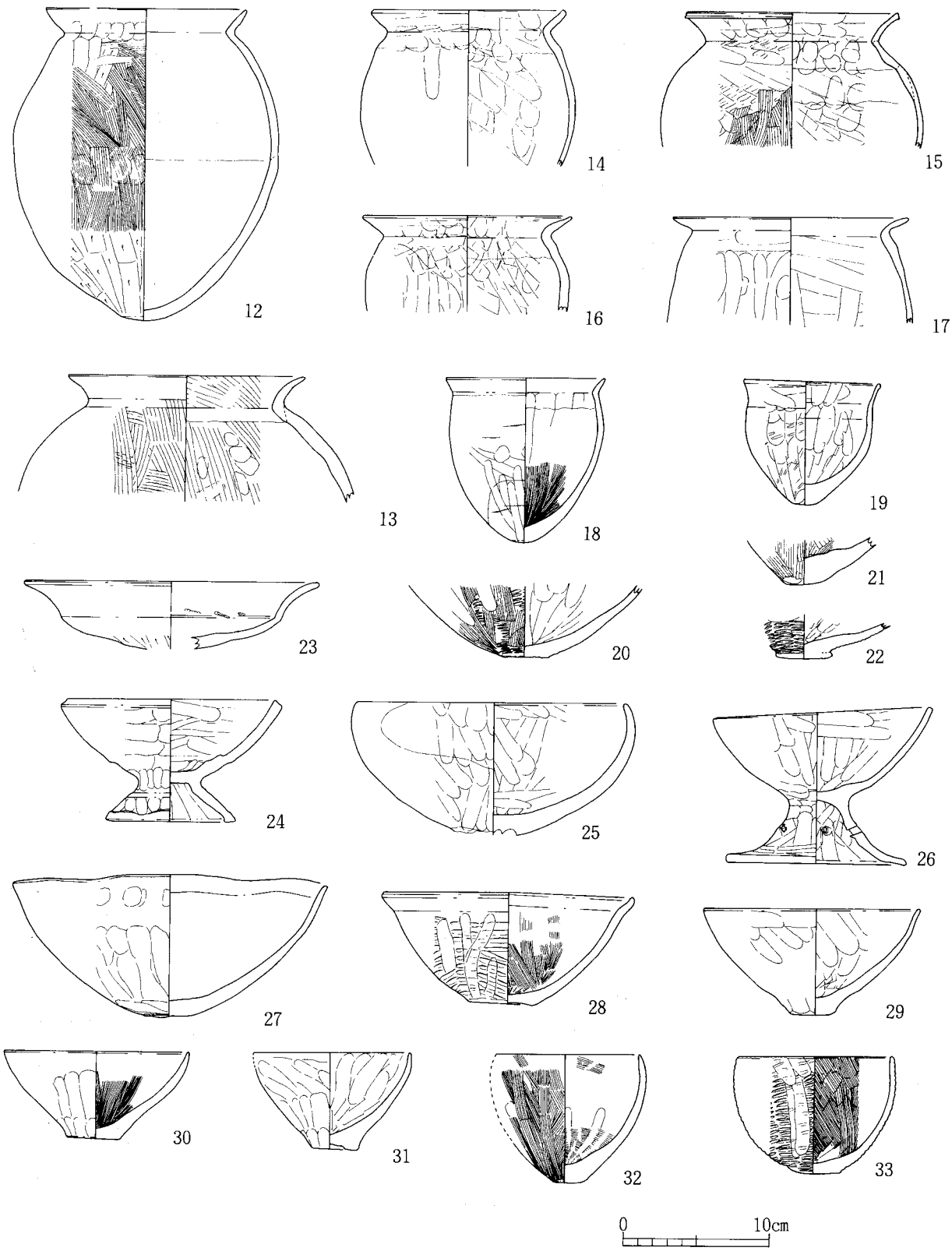
第107図　高屋遺跡出土土器実測図(1)



第108図　高屋遺跡出土土器実測図(2)

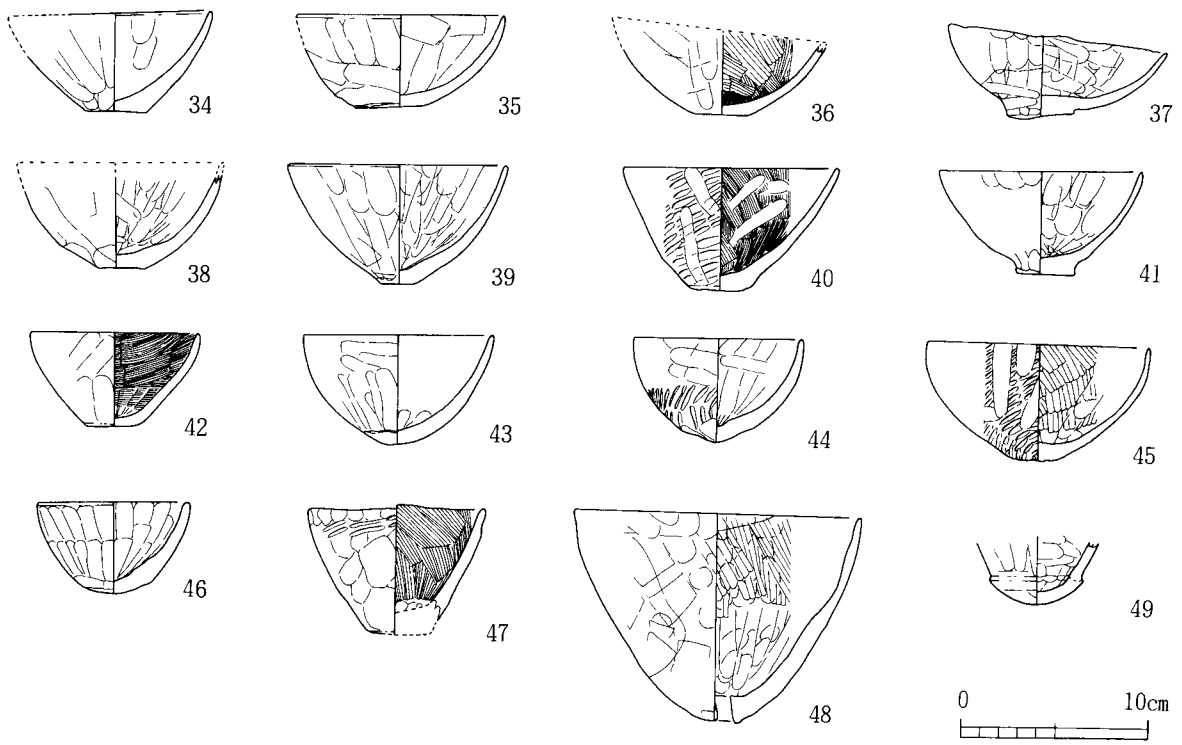


第109図　森広遺跡(Ⅲ)SH01出土土器実測図(1)



第110図　森広遺跡(Ⅲ)SH01出土土器実測図(2)

れている。16・17は口縁部がやや水平ぎみになってはいるが，胴部の形態は12に近いものを考えている。18・19は小形の甕である。形態上鉢形土器に近い形と言える。20～22は甕の底部片である。22はやや突出した平底で，通常見られない形態と言える。23～26は高杯で，それぞれ形態に差が見られる。23はこの時期に通有の形態であるが，杯部の屈曲部が中位より上にあり，古相をとどめている可能性が高い。24は鉢形土器と同様のものを杯部とするタイプで，台付き鉢と考えたほうが妥当かもしれない。25も鉢部の形態が異なるものの24と同様である。26も杯部については同様であるが，脚部が「八」の字に開くなど通有の形態を持つ。27～47は鉢である。形態には種々有り，多様化する時期と言える。底部の形状は，明瞭な平底を呈するものからやや丸みを持つものまで認められ，底部形態だけでは年代の根拠とはならない。また形態差による使用法の差も考えうるが，これについては今後の検討課題としておく。48は底部に穿孔が見られ甑としての使用法が考えられる。49は小型坩である。



第111図　森広遺跡(Ⅲ)SH01出土土器実測図(3)

以上，今回使用した土器の一部について概略を述べた。これ以外のものについてはそれぞれの報告によられたい[8]。

次に本論に入る。香川県においては，中期土器と後期土器の区分をどのように考えるかについては，あまり議論がなされていない。これについては別稿で述べる機会もあると考え，ここでは一応大空遺跡出土土器を後期の第1段階に置く従来の考え方[9]を踏襲しておく。また，古式土師器の認識については「概報」でも若干述べたが，布留式土器の波及をもって古式土師器とする。このように，大きくは「弥生時代後期土器」「古式土師器」に二分し，この中を「段階」として細分しておく。また，各々の段階内における遺跡出土資料の序列は特別に断らないかぎり，段階内での年代的細分を意図するものではない。

先にも述べたように，今回は器種の消長を敢えて取り上げず，遺構一括資料を提示する方法を用いている。各器種については，必要な遺構について随時説明を加えることにする。そのため「壺A」等の名称も付していない。

次に各段階の特徴について概述する。なお，土器形式の連続性を考える意味で，中期Ⅴ（中期末）段階から記述を始める。

〈中期第Ⅴ段階〉

中期土器については，最近矢ノ塚遺跡の報告[10]において編年案が提示されている。ここではこのうち「矢ノ塚Ⅴ」として設定されている土器群及び末則古墳の確認調査[11]時に検出された「墳裾南西部のPit」から出土した資料をこれに当てている。

矢ノ塚遺跡の壺は，基本的に口唇部に上下の拡張が認められ，これによって出来た端面に凹線文を施すものが多い。胴部は球形を呈するもの，最大径部で屈曲し算盤玉を呈するもの，肩部が張るものなど多様である。この中には無頸壺も見られるが，これについても口縁部の直下に凹線文を施している。末則古墳の例では，拡張が上方にのみ認められる点が異なる。このことは，単に地域色として理解しうるか年代的な差であるのかは現段階では明らかではない。また，長頸壺にも形骸化した凹線文が認められる。

次に甕は，体部から鋭角的に短く屈曲する口縁部を有し，壺同様に口縁端部が上下もしくは上方に拡張されて端面に凹線文を施すものが多い。胴部最大径は肩部にあるが，一部を除いては丸みを持つ撫で肩である。末則古墳の例では口唇部に凹線文を持たないものも多く見られ，この点からも壺同様の問題が残る。

鉢は，壺の器高を圧縮したタイプのものからすり鉢形を呈するものまで見られる。壺に近い形態を持つものは，口縁部が壺同様に明瞭に屈曲し，胴部最大径が中位にある。他の鉢は器形に大小の差は認められるが，概ね底部から外上方に丸みをもって伸び，口縁部が屈曲して内上方に短く伸びるものが多い。また端面は左右に拡張し，端面及び口縁部直下に凹線文が施されている。末則古墳の例ではあまり内上方に屈曲していない。

高杯には基本的に鉢と同様の杯部を有するもの，口縁部が水平に屈曲して伸びるものが認められる。前者には口縁端部が丸く終り拡張しないものも認められる。後者には屈曲部で垂直に立ち上がるものもあり，口縁部が鍔のような形状を示す。脚部は基本的に「八」の字形に伸び，脚端でつま先上がりの形状を持つものが多い。内面にはヘラ削りが認められる。

このほかの器形として末則古墳では器台が出土している。器台は上半部のみ検出されており，全体形状は不明であるが，上下がほぼ対称の鼓形を呈するものと考えている。外面には凹線文が全面で認められる。

〈後期第Ⅰ段階〉

この段階に位置付けられる資料として，同じく末則古墳の確認調査時に検出された「中世墳墓北端Pit」・「大空遺跡」[12]出土資料及び「上天神遺跡SK19」[13]をこれに当てることができる。

壺は，口縁部の拡張が上方か下方かのどちらかになるものが多く，凹線文も退化するか形骸化したものが多い。長頸壺は前段階に見られた外面の凹線文が退化し，無文もしくは一・二条が残るにすぎない。この他大空遺跡の資料中には細頸壺も認められる。この胴部は算盤玉形を呈し最大径部に凸帯を巡らしている。

甕は胴部最大径が上位の肩部にあるが，屈曲が著しく下半はスマートな形態を有する。口縁端

部は拡張と言うよりも断面三角形状に粘土紐を付加する形態となり，凹線文を施すものもしくは無文のものが見られる。末則古墳例及び上天神遺跡例では口縁の屈曲部があまり鋭角的ではなくなる。また末則古墳の例では外面にタタキの痕跡が認められる。上天神遺跡の例では口縁部の作りが曖昧になっており，このグループの中ではやや後出するものと思われる。

鉢は末則古墳で破片が出土しているのみで，この資料がこの時期を代表するものかどうかは現状では判断できない。前段階と比べて変化している点として，口縁端部が内上方に屈曲せず，内湾して口縁部に至る点があげられる。口唇部は左右に拡張して水平な端面を形成する。

高杯は，杯部の形態で幾つかの種類に分けることが出来る。大空遺跡例では杯の口縁部が屈曲して上方に伸びるもの，外上方に伸びるもの，鉢同様に内湾するものなどがある。脚部との接合は，原則的に円盤充填である。形態変化の点からは，内湾気味に屈曲するものが最も後出する資料と考えられる。

器台は，基本的には鼓形を呈し，口縁部で僅かに拡張が行われ端面に凹線文を巡らしている。脚端部の形状はさまざまで，単純に丸く終わるものからつま先上がりになるものまで認められる。一部には外面に凹線文を巡らしているものもある。

〈後期第Ⅱ段階〉

現時点ではこの段階に比定しうる一括資料を見い出せていない。包含層資料であるが高松市葛谷遺跡出土土器[14]の一部がこれに相当すると考えているが，出土土器を形式的に分離・抽出することができなかった。

〈後期第Ⅲ段階〉

この段階に位置付けられる資料として「下川津遺跡（Ⅱ）SR03[15]・加藤遺跡溝Ⅰ」がこれに相当する。

壺は，口縁端部の拡張が小さくなり，結果として口唇部が狭くなるものの相変わらず端面には凹線文が施されるものが多い。下川津遺跡の例では頸部がやや開き気味に上方に伸び，屈曲して外上方もしくは水平に伸びるものが見られる。この他に頸部が明瞭に屈曲しないタイプも認められる。加藤遺跡の例ではこの後者のタイプが主流を占めるものと考えている。また加藤遺跡では長頸壺も認められるが，長頸壺はこの段階を最後に消えるものと考えている。

甕は壺の一部に見られるように，頸部が丸みをもって外反するタイプが多くなり，胴部の形状も最大径部が大きくなく砲弾形を呈するものが主流となる。中には肩部に最大径部があり他の甕と比較して肩部が顕著に張るものも認められる。この甕の特徴は，他の甕に比べて器壁が若干薄く内面上部に指頭圧痕が顕著に見られること等が上げられる。また底部もやや突出した平底を持つ。甕全体としては口唇部が壺同様やや拡張して凹線文が認められるものが多い。

鉢は短く外反する口縁部を有する甕に近い形状を持つもの，底部から外上方に単純に伸びるものなどが見られる。前者には胴部最大径が口径よりも大きくなるものと，小さくなるものの二者がある。しかし両者とも底部は明瞭な平底もしくは突出する平底である。

高杯は後期第Ⅰ段階からの連続性を感じさせる器形に変わる。杯部は接合点からやや内湾気味に外上方に伸び屈曲して外反する口縁部を持つ。口縁部の形態には外上方に外反するものや，ほぼ垂直に伸びるものがある。脚部は「八」の字形に広がるものが多い。これは前段階に比較すると開きが大きくなっている。接合は観察される限り円盤充填によるものが多い。

器台は点数が少なく普遍化できないが，他の器形に比べて逆行するように，口縁端部を上方に

拡張して端面に鋸歯文を配しているものが出土している。脚端部は四角く終わる。

〈後期第Ⅳ段階〉

この段階に位置付けられる資料として「下川津遺跡（Ⅲ）SD8702」[16]がこれに相当する。

壺の器形は前段階と比べて大差無い。口縁部は僅かに拡張するが凹線文は施されず，ヨコナデのみとなる。最大径は胴部中央にある。このため球形化するもの，卵形を呈するもの等が多くなる。この段階に新しい器種として細頸壺が出現する。口縁部は胴部の境から外上方に直線的に伸びる。胴部は中央部が極端に張り丸底を呈する。この器形は大空遺跡出土の胴部が算盤玉形を呈する器種の系譜上にあるとも考えられる。

甕も器形は前段階のものとあまり大差無いが，口縁部の拡張が見られなくなることが特徴の一つと言える。底部の平底は明瞭である。また底部中には穿孔のある甑も見られる。

鉢は胴膨れの甕形を呈するものも認められるが，通常の鉢形を呈するものが主流になる。この中には小形のものも認められ，この段階以降盛行する。また小形の鉢の底部はやや突出する平底を持つものが多い。

高杯は杯部の屈曲位置が中位に移行し外反部の長さが前段階と比べてやや長くなる。脚部の形状は接合点から垂直に筒状を呈して垂下した後，横に広く広がる。ただ，この脚部が主流かどうかは資料点数が少ないため現状では判断できない。

〈後期第Ⅴ段階〉

この段階に位置付けられる資料として「下川津遺跡（Ⅱ）SD8614[17]・SH8615[18]」がこれに相当する。

壺は前段階のやや角張った体部に比べてやや丸みが強くなる。口縁部は前段階同様端部をやや拡張するものが多い。この段階には後に出現する小形丸底壺に極めて近い器種が見られる。この壺は，肩部が鋭角的に張り，尖底気味の底部を有する。口縁部はやや内湾気味に外上方に長く伸びる。この他に短く外上方に伸びる口縁部を有する器種も見られる。

甕は前段階と比べてあまり顕著には変化せず，内面調整のヘラ削りの範囲が胴部最大径部より下半にあることが特徴の一つに数えられる。

鉢は，口縁部が短く外反するもの，大形で同様の形態をもつものが前段階から残る。底部は丸底化するものも見られるが，明瞭な平底を持つものも多い。外面調整は刷毛目調整が顕著に認められる。前後の段階と比較してもあまり顕著な差が認められない。

高杯は良好な資料が無く杯部の形態が明らかではないが，杯部の外反部の長さが前段階より長くなることが想定される。脚部は再び「八」の字形を呈するが，接合部が中実で内面には絞り目が観察される等この段階から成形技法に変化があったことが想定される。

〈後期第Ⅵ段階〉

この段階に位置付けられる資料として「高屋遺跡・下川津遺跡（Ⅱ）SH8607[19]・SH8619[20]」がこれに相当する。

壺は出土している器種が少なく相対的な位置付けは困難である。高屋遺跡出土例では口縁端部を拡張して鋸歯文で飾るものが多い。これらの資料については先にも述べた通りこの段階の資料として積極的に使用するには問題が残されている。

甕は肩部に最大径がある器形を呈し，口縁部も単純に「く」の字に外反するものが多い。ヘラ削りも前段階同様最大径部まで行われているものが多い。また外面のタタキ目が顕著になるこ

と，平底ではあるが前段階と比べてやや明瞭さに欠けることなどが特徴としてあげられる。

鉢は，口縁部が僅かに外反する器形も残るが，主流は椀形を呈するものになる。底部は平底を呈するが，明瞭さに欠ける点は甕と同様である。小形の鉢では突出した平底をもつものの比率が高くなる。

高杯は杯部が深くなり，外反部の長さが杯部の二分の一を超えるものが確認できる。脚部は再び「八」の字形に開くものが見受けられる。しかし，資料点数が乏しいことから普遍的に扱えるかどうかは今後の検討課題である。

その他の器種として手焙り形土器が出土している。上半の覆いの部分が欠落している。調整として全面に指頭圧痕が確認され手捏であることが確認される。

〈後期第Ⅶ段階〉

この段階に位置付けられる資料として「森広遺跡SH01・下川津遺跡（Ⅰ）SBNa02[21]・下川津遺跡（Ⅱ）SH8602[22]」がこれに相当する。

壺は再び口頸部でやや角張ったものになり，胴部の最大径も中位よりやや上にその位置を変えている。出土している基本的な形態としては，前段階から見られる頸部が上方に立ち上がり外上方に直線的に伸びて終わるもの，頸部が直線的に外上方に伸びた後屈曲して水平に伸びて終わるものがある。他には短く垂直に伸びる頸部が水平に屈曲し，上方に拡張されるもの，球形の体部に外上方に直線的に伸びる口縁部を有するものなどがある。

甕はあまり大きな変化は無く，特徴の一つとして内面のヘラ削りが頸部直下まで及ぶことが上げられる。このため頸部内面の屈曲部の稜線が明瞭になっている。

鉢は，まだ平底の形態を残すが，底部から上方に向かってヘラ削りが施される。このためやや丸みを持つ不明瞭な平底の底部になる。小形の鉢は前段階と比べてさしたる変化はない。

高杯は資料が不足しており普遍化できるかどうかは定かでないが，基本的には大筋の変化に添ったものとして理解できる。図示した脚部は脚端が明らかではないが，中位に段が見られるなどやや特異な形態と言える。

〈後期第Ⅷ段階〉

この段階に位置付けられる資料として「彼ノ宗遺跡ST12[23]・下川津遺跡（Ⅲ）SD8701[24]」がこれに相当する。

壺は口縁部が広く外反するものや，外傾した後やや水平方向に開いて終わるものなどがある。体部は再び球形化し，底部は尖底気味の丸底を呈する。また，二重口縁壺の出現も見られる。これ以外に「小形坩」と呼んでいるものが出土している。これは，体部が極端に小さく，肩部が角張り，底部は尖底を呈する。口縁部は内湾気味に外上方に長く伸びる。この器形については突然に出現するように考えられていたが，先に述べた「小形丸底壺」状の器形から変化するものと考えられる。今回の資料ではこの段階でしか取り上げていないが，単発的に出土しており，今後の検討を経て連続性のある器種になる可能性が高い。

甕は，口縁部が単純「く」の字に外反することは前段階と同様である。しかし，底部の形状が平底を残しつつも限りなく丸底に近くなっていること等の特徴がある。内面のヘラ削りも前段階同様頸部直下まで及んでいる。外面はタタキが顕著であるが，その上から刷毛目調整を加えたものが大半を占める。

鉢は全体形状が定かではないが，口縁部が短く折れ曲がるやや大形のものが見られる。ただこ

れがこの時期に普遍的に残るかどうかは，不明である底部の形状を含めて今後検討する必要がある。

高杯は鉢同様の形態を持つ杯部を持つものが出土しているが，他の器種が出土しておらず資料不足のため今後の課題としておく。

〈後期第Ⅳ段階〉

この段階に位置付けられる資料として「彼ノ宗遺跡ST15[25]・下川津遺跡（Ⅱ）SH8622[26]」がこれに相当する。

壺は前段階から引き続き見られるものである。二重口縁壺は屈曲部がより顕著になり屈曲部がやや突出した形態を持つ。

甕は全体的に丸みを持ち，底部はやや尖り気味の丸底を呈する。外面にはやや細目の刷毛目もしくはタタキが見られる。ヘラ削りは再び最大径の部分まで下がっているものも見られる。内面に指頭圧痕が顕著に認められるものも見られる。この甕に特徴的な口縁端部の摘み上げ等を残しつつも体部の形状は他の甕と同様の変化が認められる。

鉢も一部小形器種で平底を残すものも見られるが，多くは丸底化しつつある状況にある。外面調整には刷毛目が多く用いられている。

高杯は，杯部における屈曲部の長さが外反する部分のほうが長くなる。

その他の器形として，浅い椀及びこれに台が付いたものが認められる。これは他地域からの搬入品と考えられる。

〈古式土師器第Ⅰ段階〉

現時点ではこの段階に相当する一括資料を見い出せていない。指標として「小形丸底壺Bタイプ」が共伴する土器群が想定される。

〈古式土師器第Ⅱ段階〉

この段階に位置付けられる資料として「布施遺跡Ⅳ A区SP7401[27]」がこれに相当する。

壺の器種も多様化せず，検出しているのはやや外反気味に短く延びる口縁部を有する壺だけである。これ以外に小形丸底壺が見られる。

壺は口縁部が「く」の字に外反せず，やや内湾気味に伸び，口唇部内面に段が認められる。

高杯は前段階同様杯部の屈曲点から上方が長くなり直線的に伸びるものに変わる。脚部も単純な「八」の字が無くなり，脚部中位下で屈曲して横に開くものが多く見られる。このタイプがこの段階での主流器種と考えられる。

〈古式土師器第Ⅲ段階〉

現時点ではこの段階に相当する一括資料を見い出せていない。指標として「小形丸底壺Dタイプ」が共伴する土器群が想定される。

以上のように，現時点では「布留式土器」に限定した古式土師器の良好な資料に恵まれていない。しかし，今後の調査によって今回提示できなかった古式土師器を含めて古式須恵器が共伴する時期の土器組成までが明瞭になるまでそう遠いことではない。その時点で再度この問題に取り組みたい。

弥生後期土器から古式土師器の一部についての編年（案）を概観したが，資料不足もあり未だ（案）の域を出ない。特に壺・高杯についての資料が断片的であり，形式的にも完成したものとは程遠い。今後の資料の増加及び土器の検討を待たなければならない。

(3) 大浦浜遺跡出土の所謂「古式土師器」編年試案

大浦浜遺跡から出土している所謂「古式土師器」については，先述したようにその編年的概略を「概報」で報告した。しかし，その後本文中でも触れたように，土器群の捉え方等に若干の変更があり，ここでは前回の報告とは異なる結果になった部分もある。また，前項で述べた中濱地域の土器編年（案）との係わりについても述べ，島しょ部の土器の特質についても触れてみたい。

「概報」でも述べたように，本報告の整理によって従来のⅠからⅥの区分では収まらなくなり，今回古い段階から順に再度Ⅰから Ⅶに区分した。また，表記は前項と同様の考え方で表している。なおこれは，前項同様単なる年代的序列であり，「概報」段階とは内容に差が生じたことをお断りしておく。

〈大浦浜Ⅰ〉

A・B－50・51区第３層②，第15土器群，ヤケヤマ東麓地区古式土師器包含層出土の土器を基準とした。

壺はやや卵形を呈する胴部から大きく外反する口縁部を有するものや，所謂「鶴尾形[28]」と呼称している壺がある。これは肩部に胴部最大径を有し，頸胴部の境から直線的に内傾して伸びる頸部，その頸部からほぼ直角に屈曲して外上方に伸びる口縁部を有するものである。口縁端部は上方に少し拡張し，端面に疑似凹線が認められる。また，底部は丸底気味の平底を呈し，底部の厚みが他の器壁に比べて極端に薄いのが特徴である。

甕は単純「く」の字の口縁部を有し，やや丸底気味の平底を持つ。胴部最大径は肩部にあるが，明瞭な張りはない。外面調整はタタキを基調としている。内面のヘラ削りは頸部まで達するものが多い。「吉備系」の甕が共伴している。

鉢は大形のものが見られる。通常の形態を持つものは平底気味ではあるが丸底に近い底部を持つものが多い。小形の鉢の中には突出した平底を持つものが見られる。調整は内外面ともに刷毛目調整である。

高杯は大きく３タイプに分けることが出来る。この時期の主たる器種と考えられる資料は，脚部との接合点から水平よりもやや上方に直線的に伸びた後，外上方にやや外反気味に屈曲するものである。この場合，屈曲部に明瞭な稜線が認められるものとそうでないものがある。このほかに接合点から外上方に伸び，外反度も大きいものがある。このタイプは前者よりも明らかに深い杯部を有する。また，杯部が椀（鉢）状を呈するものも見られる。

これ以外に，手焙り形土器が出土している。上半は欠損しており，指頭圧痕が明瞭である。

〈大浦浜Ⅱ〉

第５土器群・第13土器群・G－15区土坑１出土の土器を基準とした。

壺は典型的なものが無く，小形で外上方に直線的に伸びる口縁部を有するもの，二重口縁壺に類似するもの，「小形丸底壺的土器」及び「二重口縁の小形丸底壺」が見られる。

甕も前段階からあまり変化しておらず丸みを持つ平底を呈するものが多い。この点だけ見れば第15土器群がこの段階の中ではやや古相を呈するものと考えられる。外面調整はタタキを施すもの，刷毛目を施すもの，両者が混在するものが認められる。

鉢は小形のものほど平底を残す傾向があると考えられ，中形器種では底部から体部下半をヘラ削りで仕上げるものが見られる。また，前段階から少し見られたが，口縁下に強いヨコナデを施し屈曲・外反させ，明瞭な稜線が認められるものが多く見られる。

高杯は前段階のタイプに加えてより深い杯部を有するものが出現する。主流と考えられるものは杯部の明瞭な稜線に代わって軽い段に変化するのが特徴の一つである。脚部は「ハ」の字形に開いた後中位下で屈曲してより広く開くものが多い。

〈大浦浜Ⅲ〉

D・E－44区第4層出土の土器を基準とした。

壺は前段階から続くと考えられる，口縁部が外上方に直線的に開くものが見られる。このタイプの大形のものは口縁端部内面に僅かな肥厚が認められる。これ以外にやや直立気味に口縁部が伸びるタイプもある。また変形した二重口縁の壺も見られる。これは肩部がほぼ直角に近く屈曲するように張り，頸胴部から直線的に内傾する頸部を有し，口縁部が水平気味に外上方に屈曲した後，やや受け口状に再度上方に伸びて終わる。

甕は前段階同様の単純「く」の字の口縁部を有し，外面に明瞭なタタキを残すものが続いている。しかし，外面にタタキを持たず口唇部上面を平坦に造るものや，やや尖り底気味の底部を有する等新しいタイプの甕も出現する。調整もタタキ以外に刷毛目，ヘラ磨きを有するものの比率が大きくなる。

鉢も半球状の体部に外面タタキ調整を施す前段階的な器形が残る。底部も限りなく丸底気味になるが，前段階の特徴の一つであったヘラ削りは見当たらない。

高杯は，杯部が椀状を呈するものや，杯部中位下で屈曲するものが見られる。前者は屈曲部に段が形成される。

〈大浦浜Ⅳ〉

第12土器群出土の土器を基準とした。

壺の資料が不足している。出土している二重口縁の壺のうち一つの口縁部は垂直に立ち上がり，もう一つは外反する。口縁の屈曲部は両者とも少し突出するのが特徴である。この段階から通常の小形丸底壺が新たに加わる。形態的にはB類に属するものである。

甕は球形の胴部に「く」の字に外反する口縁部を有するものが多くなる。中にはやや長胴の体部を有するものも見られる。この場合，口縁部はやや内湾気味になり口縁端部内面に肥厚が認められる。

高杯は前段階同様椀形の杯部を有するものと杯部中位下で屈曲するものが見られる。高杯の形状だけでは前段階と区別することは現状ではできない。

〈大浦浜Ⅴ〉

第11土器群（古）出土の土器を基準とした。

壺の資料が不足しており，小形丸底壺のみ出土している。小形丸底壺はB・Cタイプのものが出土している。

甕は弥生後期に位置付けられるようなもののほか，胴部の張りが著しく口径の小さなもの，球形の胴部に外反する口縁部を持つものなど，新旧のタイプが混在する形で出土している。この時期の特徴かどうかは今後検討する必要がある。

高杯は杯部中位下で屈曲するものだけが出土している。ただし，大きくラッパ状に開く脚部の

みの資料も出土しており，杯部形態にも前者のようなもの以外のバリエーションも想定しておく必要がある。

〈大浦浜Ⅵ〉

G－11区土器溜り，F－19区土器集中，I－20区第2層～第2層（下）出土の土器を基準とした。

壺は，球形もしくはやや縦長の球形を呈する胴部に，外反もしくはやや内湾気味に外上方に伸びる口縁部を有する。外面調整はナデもしくは刷毛目調整である。内面にはほぼ頸部までヘラ削りが施されている。小形丸底壺にはCタイプのほかDタイプが新たに加わる。

甕は殆どが球形の胴部を有し，一部にタタキを残すものの外面調整の大半が刷毛目になる。口縁部は単純「く」の字のものも多く見られるが，この場合も口縁部全体が肥厚するか端部外面に肥厚が見られるものが多くなる。内面調整はヘラ削りもしくはナデ調整である。

高杯は前段階にみられた2タイプが引き続き主流を占めるが，屈曲部に凸帯及び沈線が施されるものが多い。この段階を設定する上での最大の特徴とすることが出来る。

〈大浦浜Ⅶ〉

壺はやや長めの球形胴に，外上方に外反して伸びる口縁部を有する。小形丸底壺はDタイプのものに限られる。

高杯は杯部に段をもつものが多い。

以上のように，大浦浜遺跡の土器は出土状態にやや難があり，器種もこの段階を網羅しているとは考えられないという状況にあるが，大きくは以上のような時期・段階を含んでいるものと理解している。

次に前項で設定した県内資料による段階と大浦浜Ⅰ～Ⅶの相対的な関係について考える。

小形丸底壺を基準としてみた場合，大浦浜ⅣはBタイプを含むことから「古式土師器第Ⅰ段階」に対比することが出来る。設定した段階が同一時間幅で捉えられることを前提とすれば，大浦浜Ⅰは「後期第Ⅶ段階」に併行する。両者の内容を対比した場合，甕の内面ヘラ削りの範囲が共通すること，鉢の底部形状が近似すること等が上げられる。

このように県内資料との対比においては，小形丸底壺・高杯・鉢の形態を比較した結果に基づき，その妥当性を考えた。

ただし，このようにその多くの器種においては，かならずしもダイレクトな比較が成り立たず，全く異なる土器相を持つといっても過言ではない。このことが逆に島しょ部の土器の特質とも言える。

布留式土器の波及についても，布留式傾向と考えられる要素が大浦浜遺跡では部分的に見られるのみで，資料不足ではあるが県内の状況に比べて受入が遅れる傾向を指摘することが出来る。このことが，児島を中心とする備讃瀬戸島しょ部の特徴なのか，大浦浜遺跡の特質かは今後明らかにしていく必要がある。

(4) 小　結

以上の通り，大浦浜遺跡で出土した所謂「古式土師器」についてその序列と年代観について述べた。

弥生土器と古式土師器の区分については少しふれたように従来から多くの議論がある。今回は，土器の連続性とその変化という観点から県内の資料では布留式土器の出現を一つの画期と考えた。しかし，当地域において布留式土器の影響を強く受け始める時期は，畿内においては小形丸底壺Bタイプが出現する時期に相当し，畿内とは一時期（もしくは二時期）ずれるという現象が考えられる。これを地域性として捉えられるかどうかは今後の課題である。

次に大浦浜遺跡出土の土器についてであるが，前述のことを前提とした場合やや趣が異なる。島しょ部における土器の変化は，前述したように県内資料とは異なる独自の状況にあることが想定される。このことは，今回検出した土器だけを見て比較した場合，県内平野部で生活を営む集団との間であまり活発な交流が行われていなかった裏付けと考えられるのである。

今回の編年が断片的資料に基づくものであるため，今後の資料によって補強していくと共に，県内資料と他県の資料との平行関係についても今後の検討課題としたい。

注

(1) 大山真充ほか「大浦浜遺跡の調査」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報（Ⅴ）』　香川県教育委員会　1982

(2) a 鎌木義昌・六車恵一「香川県高松市高松町大空遺跡の土器」『弥生式土器集成資料編』　日本考古学協会　1961

b 六車恵一「香川県木田郡牟礼村原遺跡の土器」　同上

(3) a 藤田任亮ほか「下川津遺跡の調査」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報（Ⅶ）』　香川県教育委員会　1986

b 大山真充ほか「下川津遺跡発掘調査概要報告（Ⅱ）」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報（Ⅷ）』　香川県教育委員会　1987

c 藤田任亮ほか「下川津遺跡発掘調査概要報告（Ⅲ）」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報（Ⅸ）』　香川県教育委員会　1988

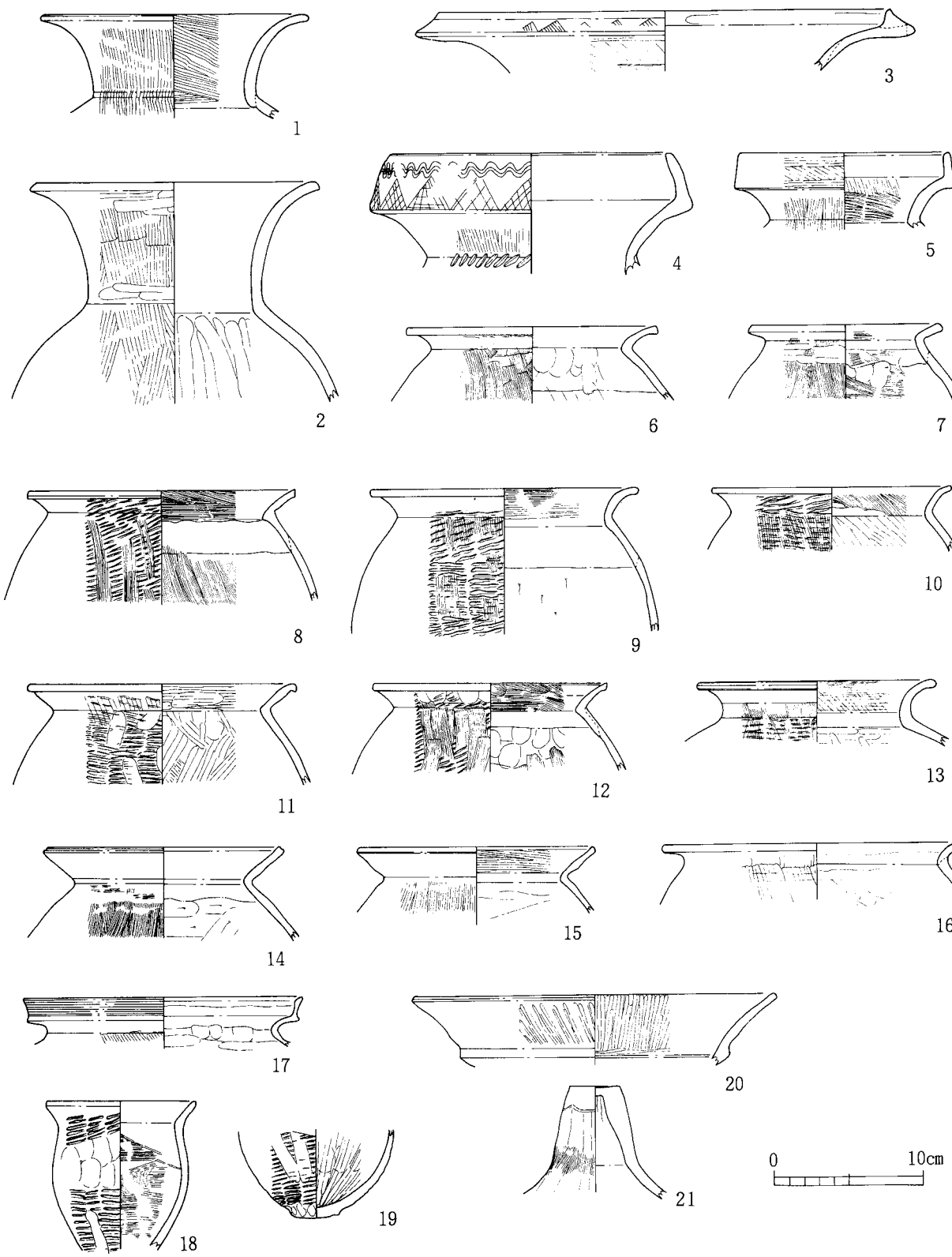
(4) 下記文献では森広遺跡として取り扱われ，当該土器実測図が掲載されている。
香川県教育委員会編『新編香川叢書考古篇』　新編香川叢書刊行企画委員会　1983

(5) 斉藤賢一「高屋遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報　昭和54年度』　香川県教育委員会　1980
なお第107図・第108図は，出土土器の中から真鍋が残存率の高い土器を任意に抽出したものである。

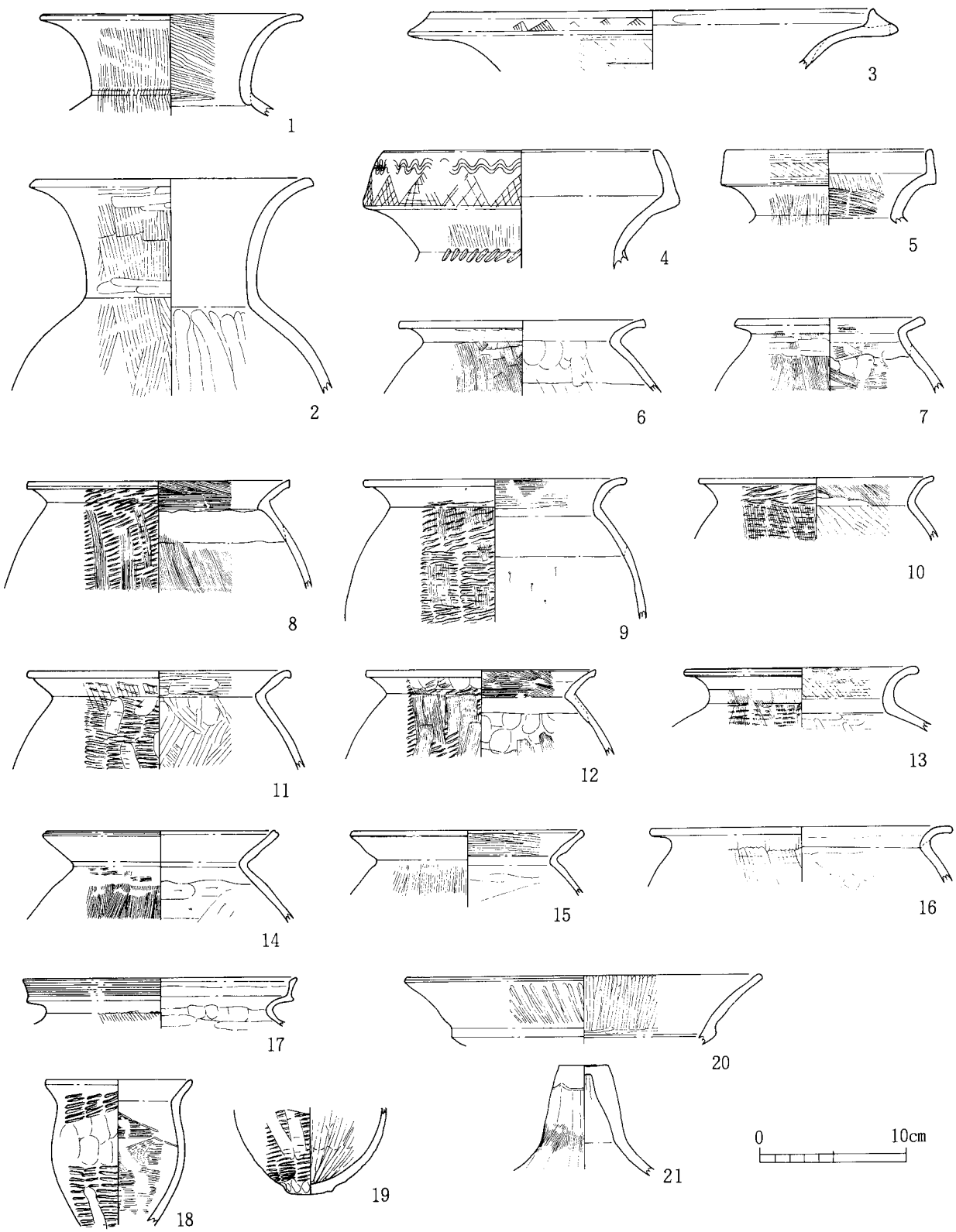
(6) 六車　功「森広遺跡Ⅲ」『香川県埋蔵文化財調査年報　昭和53年度』　香川県教育委員会　1979

(7) 松下　勝ほか『播磨・長越遺跡』　兵庫県教育委員会　1978
「概報」中では「搬入を考えている」と述べたが，下川津遺跡においては土器組成に占める割合が高くなる傾向が見られる。しかし，胎土・調整・連続性から，やはり在地産とは区別して取り扱う必要がある。

(8) 本文中では使用していないが，西讃地域での既存資料として観音寺市石の経遺跡の資料をここで紹介する。
石の経遺跡は昭和36年に当時県立観音寺第一高校に在職していた石川巌氏によって調査され，資料の一部が現在同校に保管されている。調査の内容については次の文献に詳しいので省略する。
石川巌「石の経遺跡に関する報告」『地歴の窓第７号』1968　県立観音寺第一高校地歴部
今回紹介する資料は，先にもふれたように観音寺第一高校に保管されている資料の中から任意に抽出したものである。また，実見した範囲では資料に一括性はなく，数段階の資料を含んでいる可能性が高い。
１～５は壺である。１・２は口縁部が広く外反するもので，端部は丸く終わる。外面には粗い刷毛目が施される。３は，口縁端部に三角形の貼り付け拡張を行い，端面に鋸歯文を施す。４・５は所謂袋状口縁を有するもので，西瀬戸内地域の影響を受けている可能性が高い。４の口縁部外面には波状文・鋸歯文が施され，頸部には刺突文を施す。体部の形状は不明であるが，頸部は体部から明瞭に屈曲して外反し，再び屈曲して口縁部を形成する。
６～17は甕である。６～12は単純「く」の字の口縁部を有し，外面はタタキ調整の後刷毛目を施すものが多い。13・16は丸みをもって外反するものである。14・15はやや丸みをもって内湾気味に立ち上がる口縁部を有し「布留式土器」の影響を受けていることが考えられる。17は所謂「吉備系」甕で，口縁部が明瞭に立ち上がり，明瞭な櫛目が認められる。
18～19は小形の甕もしくは鉢である。両者とも外面にタタキが認められる。



第112図　石の経遺跡出土土器実測図



第112図　石の経遺跡出土土器実測図

20～21は高杯である。20は杯部の破片で中位に段が認められる。外面調整はヘラ磨きが顕著に認められる。21の杯部については脚端等が見られず，明瞭ではない。

以上のように，土器形態には少なくとも2段階が認められる。これらの土器を形式的に分離することは現実的ではないためここでは資料の提示のみに止めておく。

(9) 注(2)a　他

(10) 鷹田耕作「弥生時代中期土器の編年」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第三冊　矢ノ塚遺跡』香川県教育委員会　1987

鷹田の中期土器編年については，稿を改めて検討することにする。

(11) 渡部明夫『末則古墳調査概報』　香川県教育委員会　1977

(12) 注(9)

(13) 大久保徹也「上天神遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報　昭和59～62年度』　香川県教育委員会　1988

(14) 西岡達哉「葛谷遺跡出土の弥生土器」『香川県埋蔵文化財調査年報　昭和58年度』　香川県教育委員会　1984

紹介されている土器には，形式的には3型式認められると考えているが，この土器群から「後期第Ⅰ・Ⅲ段階」を差し引いたものを「後期第Ⅱ段階」とするか，過渡期としてこの時期の様相を示すものと考えるかによって大きな差がある。これについては今後検討する。

(15) 注(3)b　p.92－p.97

(16) 注(3)c　p.42－p.44

(17) 注(3)b　p.38－p.40

(18) 注(3)b　p.29－p.32

(19) 注(3)b　p.20－p.24

(20) 注(3)b'　p.30－p.32

(21) 注(3)a　p.16－p.24

(22) 注(3)b　p.16－p.23

(23) 笹川龍一『彼ノ宗遺跡』　善通寺市教育委員会　1985

(24) 注(3)c　p.37－p.42

(25) 注(23)

(26) 注(3)b　p.30－p.34

(27) 昭和52年度　香川県教育委員会調査　土器実測図は注(1)文献に掲載

(28) 鶴尾神社4号墳から出土した土器のうち，本文中で記述している形態のものを「鶴尾型」と仮称している。このタイプの壺は，鶴尾神社4号墳から出土した土器のうち，最も日常土器に近い形態を有すること，大浦浜遺跡でも2～3例が検出されていることから，土器による古墳の年代決定に大きくかかわる可能性が高いため，敢えて仮称するものである。

渡部明夫・藤井雄三ほか『鶴尾神社四号墳発掘調査報告書』　高松市教育委員会　1983

第3節　弥生時代前期の土器について

大浦浜遺跡から出土している弥生時代前期の土器は，第4章第2節でも述べたように包含層から出土しているものがその大半を占める。土器内容についても，従来の編年観[1]からすれば複数の時期の土器が混在して出土している状況にある。しかし，県下の当該の内容を持つ遺跡を見てみると，必ずしも従来の編年に即した出土状況にはない。この点を重視して大浦浜遺跡出土の前期土器の編年的位置付けについて考えてみたい。

ただし，「概報」[2]作成時から長い月日が過ぎたにもかかわらず，この間参考とすべき香川県下での弥生時代前期に属する遺跡の調査は僅か数列であることから，以下の内容も概報段階から特に大きな進展はないが，他の遺跡の資料を踏まえて現在の状況を概述することにする。

香川県における弥生時代前期の土器編年は，六車恵一[3]・松本豊胤[4]らの研究に代表される。中でも松本は，畿内地域における弥生前期土器（第Ⅰ様式）の三細分（古・中・新）が香川県でも適用しうるとして，「室本式」－「三井Ⅰ式」－「五条Ⅱ式」の三型式に細分した。これは，特に壺に見られる「段」－「削り出し凸帯」－「貼り付け凸帯」に注目した分類（型式設定）と言える。これ以降新たな細分案は見られなかったが，「概報」刊行後に藤田憲司の論考[5]が発表され，大浦浜遺跡の中部瀬戸内での編年的位置付けが行われた。

しかし，これら型式細分の前提となる各要素が単純な形で検出されている例に乏しく，本来的に混在する状態が通常形態である可能性を考慮し，以下このことについて検討を加えることにする。

① 形態素による分類

壺　Ⅰ類　口縁部・頸部・胴部の境が以下の施文により明瞭なもの

1　段　が認められるもの

2　削り出し凸帯　が認められるもの

3　貼り付け凸帯　が認められるもの

4　沈線　が認められるもの

Ⅱ類　口縁部・頸部・胴部の境に施文が行われず不明瞭なもの（但し，部位を変えて以下の施文が行われる）

1　削り出し凸帯　が認められるもの

2　貼り付け凸帯　が認められるもの

3　沈線　が認められるもの

4　無文のもの

このⅡ－4類型の中には口縁部・頸部・胴部の境が不明瞭ではあるが，形態的にはⅠ類型の内容を有するものが含まれる。

甕　Ⅰ類　口縁部が　如意状を呈するもの

Ⅱ類　口縁部が　逆L字状を呈するもの

Ⅰ・Ⅱ類型共に以下の施文が行われる。

1　段　が認められるもの

2　沈線　が認められるもの（この中には，以下の2類が見られる。）

①平行沈線のみ

②平行沈線間に刺突文を配するもの

3　無文　のもの

壺・甕については以上の形態素に分類することが出来る。他の器種については数量的な面から現状では分類に適しないと考えている。

形態素という考え方以外に，土器形態の差という観点も当然あるが，現状では主観的な部分を排することが出来ないため今回は一応除外しておく。

以上の観点で大浦浜遺跡出土の土器について考える。ここでは，安藤　一の「櫃石島・大浦浜遺跡の遺物整理報告[6]」での記述を踏まえる。

大浦浜遺跡出土の弥生前期土器は個体数にして約215個体分に相当する量がある。このうち約3割が壺で，残り約7割が甕である。他の器種は先にも述べたようにごく少量である。

壺はⅠ類型が多く占める。段は，口縁部外面に粘土を貼り付けることで頸部との間に段差を設けるもの，粘土の継ぎ目によって形成されるもの，頸部外面をヘラ磨きすることで段差を設けるものなどが認められる。これを時間差として認識するには断面観察が十分にできておらず資料内容が不明確であった。

削り出し凸帯は，通常の形態である上下の削りもしくは磨きによって形成されるものに限定すべきであると考えている。一部に見られる段の上下に沈線を施すものも形態的には削り出し凸帯に近い形状を呈するものもあるが，施文位置及び視覚的な観点からここでは段として取り扱ったものが多い。このような段から削り出し凸帯への一連の変化は技術的な側面にすぎず，型式的な位置付けはこれと異なるのではないかと考えている。このことからすればⅠ類中にはごく少量ではあるが削り出し凸帯が含まれることになる。この僅かな例は断面蒲鉾状の形態を有するものであり，このタイプの土器の位置付けは現状では不明である。

貼り付け凸帯も，原則的には削り出し凸帯と同様の位置付けが行われる。但し，あくまでも型式的には後出するものと考えている。

沈線は，特に頸胴部の境に複数施される例が多い。

次に数量的には壺の口頸部の施文からすると，段を有するものが49.8%，沈線を有するものが25.6%，削り出し凸帯を有するものが15.2%，無文が8.1%を占める。貼り付け凸帯を有するものは僅かに数点である。

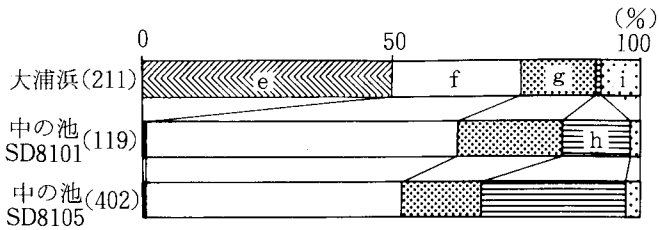
以上のように，その施文形態から段が施される例が多いものの，その他の施文も「同時期」に存在している可能性を指摘しておく。

甕は，1例を除いてⅠ類で占められる。Ⅰ類の中に段を持つものが多いことが特徴の一つとして上げられる。これは全体の26.2%を占める。沈線は1～4条のものが圧倒的に多く，それ以上に多条化するものは僅か1点のみである。この4条沈線の中には沈線間に刺突文を有するものが認められる。この施文形態は，新しい要素として認識していたが，Ⅰ類の中で位置付けるべきものとしたい。沈線の占める割合は全体で31.7%である。この他無文を呈するものの比率が42.1%と高率を占めることが特徴の一つとして上げられる。

以上のように形態素から見た場合，壺はⅠ－1類が多く，甕はⅠ－3類が圧倒的な出土量を持つ。

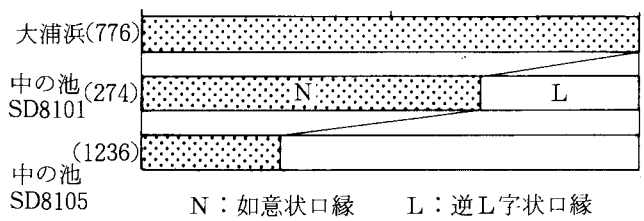
② 基本的文様による分類

壺の文様は口頸部・頸胴部及び胴部上半に多く施され，平行沈線・連弧文・木葉文・羽状文・斜格子文・山形文・縦線文が基本形になる。この他，竹管文・刺突文・刻み目等の多様性を持っている。また，これらの文様が組み合わさる形で施文が行われている。第113図は大浦浜遺跡で確認された壺の文様を模式図化したものである。破片資料を元にしているため文様の全体構成が明らかではないものが多いが，全体的には頸胴部の境の上下に集中する傾向が認められる。この他，頸部にも文様が施されているが，縦線文・連弧文等比較的簡単な文様が多いと考えられる。また段に伴う平行沈線は，文様を構成する一要素と考えることで，後出する「平行沈線文」とは区分して取り扱う必要性を考えるべきである。次に「木葉文」について少し述べておく。「木葉文」には藤田の分類[7]で言うＩＣ，ＩＤ，ⅡＤ，及びⅡＢの可能性があるものが含まれる。このことからすれば，「木葉文」における有軸・無軸は年代差を示すものとは断定できない。また，大浦浜資料の特徴として，弧線が多く空間が埋められていることが指摘できる。このように，大浦浜遺跡出土の前期土器は文様の多様性が最大の特徴として上げられる。



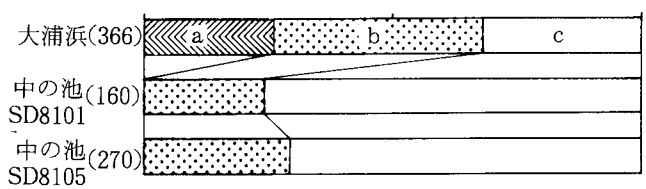
e：段　f：沈線　g：削り出し凸帯
h：貼り付け凸帯　i：無文

第27表　壺の口頸部における段・沈線・凸帯の構成比



N：如意状口縁　L：逆Ｌ字状口縁

第28表　甕の口縁形態の構成比



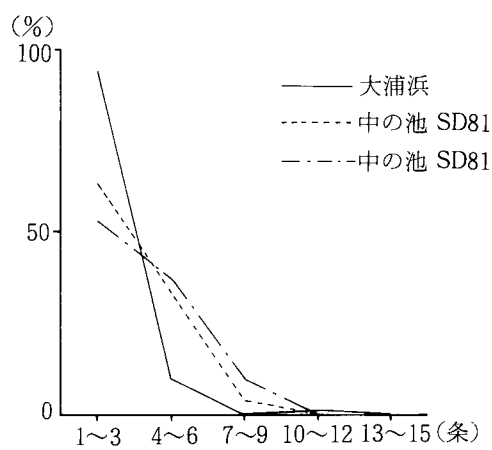
a：段　b：無文　c：沈線

第29表　甕における段・無文・沈線の構成比
（如意状口縁の甕のみ対象とする）

※第27表～第29表　（　）内の数字は破片数を示す

③ 中の池遺跡出土土器との比較

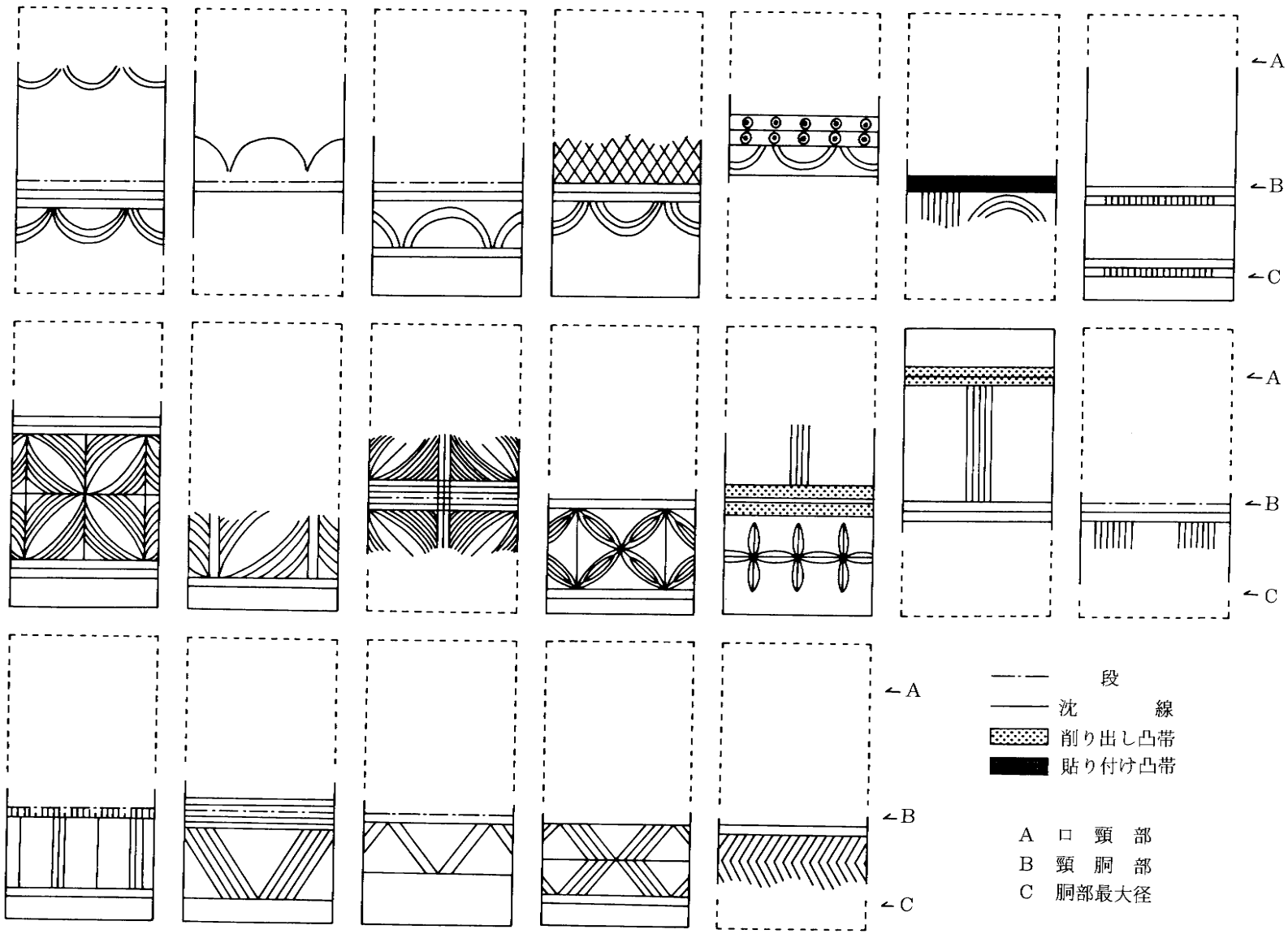
次に他の遺跡出土土器との比較検討を行う。数量統計を基準にする場合，丸亀市中の池遺跡[8]が最も良好な比較資料になる。



第30表　甕の沈線条数の構成比
（如意状口縁の甕のみ対象とする）

中の池遺跡では，土器量の多い二本の溝（SD8101・SD8105）を統計の対象にしている。ただし，溝の性格的な面から混入の可能性を否定するものではない。大浦浜遺跡との比較については第27表～第30表に表した。

まず第27表，壺の口頸部における施文についてであるが，SD8101（以下SD01と略す）では「段」を有するものが僅か１％に減り，かわって「沈線」が62％に増加する。この他「削り出し凸帯」「貼り付け凸帯」が各々20％，14％に増加する。この傾向は，SD8105（以下SD05と略す）



第113図　壺の文様（大浦浜遺跡）

でより顕著になり，それぞれ１％，51％，16％，29％の比率で現れる。このことは，壺の口頸部の形態素を基準とした場合，全体に占める「段」の割合と「貼り付け凸帯」の割合が一つの目安となることが分かる。このことは，「段」の比率が高い土器群が古いことを表す。

次に甕の形態についてである。甕の口縁部には前述したように「如意状口縁」と「逆Ｌ字状口縁」が見られる。第28表を見ても分かるように大浦浜遺跡では如意状口縁がほぼ100％を占めるのに対して，SD01，SD05ではそれぞれ68％，28％と割合が少なくなる。このことは，如意状口縁の比率が高い土器群が古く位置付けられることを示し，甕形土器を一つの基準とする場合の有効な目安と言える。

甕の施文については第29表で表した。この場合，同一基準を用いるため如意状口縁に限って取り扱う。大浦浜遺跡では，段・無文・沈線が同一比率ではないがバランスよく出土している。これに対してSD01・05では段を持つものがほぼ無くなり，全体の３／４を沈線を施すものが占めるようになる。また，この如意状口縁を持つ甕の沈線条数を比較したのが第30表である。沈線条数も大浦浜遺跡と中の池遺跡では後者のほうが条数が多くなる傾向が指摘できるものの，中の池遺跡の中での差はあまり見られない。

以上のように，大浦浜遺跡と中の池遺跡の二遺構を比較した結果，大浦浜遺跡－中の池遺跡SD8101－中の池遺跡SD8105の年代的な序列を考えることができる。

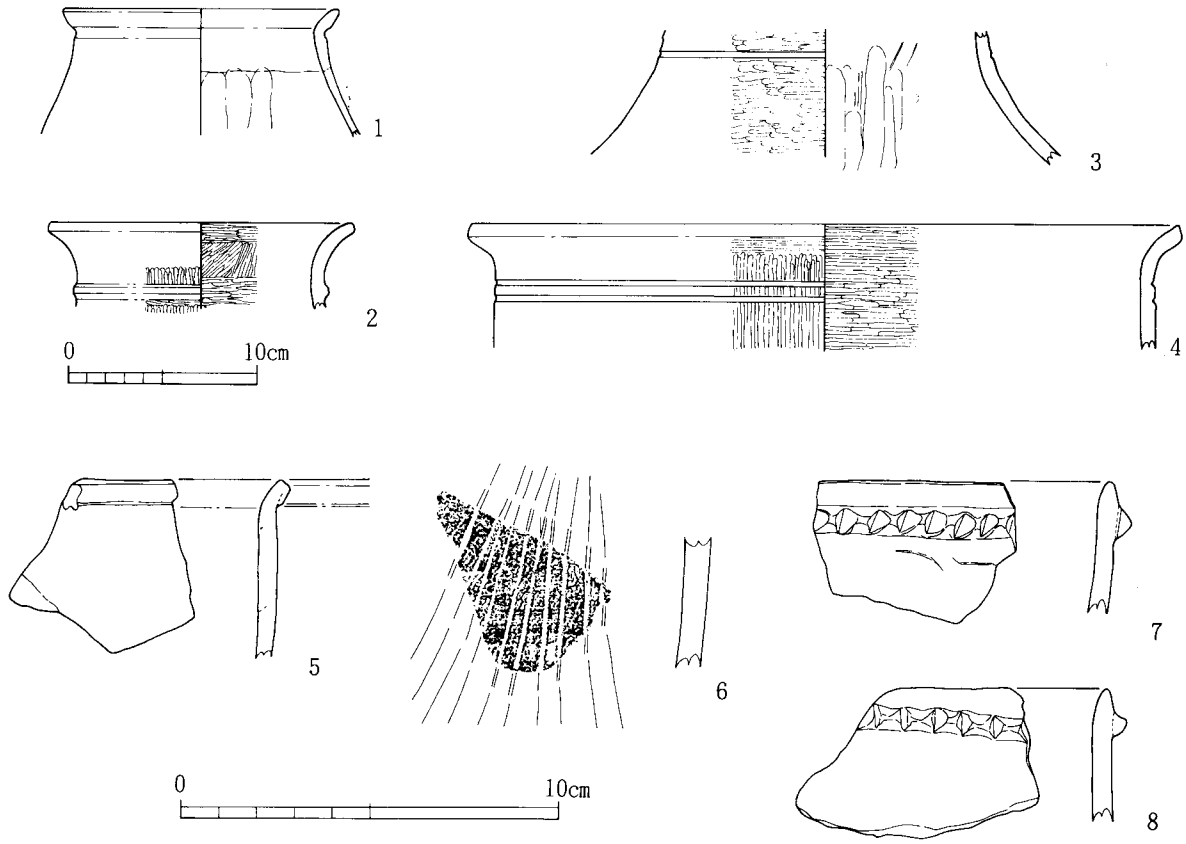
しかし，この序列では大浦浜遺跡と中の池遺跡の間に大きな格差があることも事実であり，この間を一つの画期と考えうるか，この間に一型式存在するとするかの二つの考え方がある。これについて，県内の他の資料を若干用いて検討する。

④　県内の他の資料について

大浦浜遺跡以外の県内資料として大浦浜遺跡の調査後，坂出市下川津遺跡等の調査が行われた。次にこれらの出土資料について概述する。

坂出市下川津遺跡[9]では，竪穴住居跡（SH8601）及び自然河川（SR05）からまとまった資料が検出されている。出土遺物の詳細については本報告書を待たなければならないが，ここでは概報で報告されている資料（第118図・第119図）について考える。これを見れば壺は口頸部・頸胴部に段及び沈線が認められ，それぞれの部位の区分は明瞭である。ただ口頸部に比べて頸胴部に見られる段は沈線状を呈するものが多い傾向にある。文様は大浦浜遺跡で「縦線文」と呼んでいるものや木葉文・山形文・連弧文等が認められる。次に甕は基本的に如意状口縁を呈するものだけで構成されている。胴部の文様は沈線が一条認められるものが見られるだけで，大半は無文である。これ以外に，縄文土器・縄文系土器が出土している。縄文土器は，晩期に属する凸帯文がその多くを占める。縄文系土器は前期土器通有の形態を持たず縄文土器の影響を受けたと考えられるものを一括している。この傾向は大浦浜遺跡と同様である。以上のように壺・甕の比較では，SR05出土土器に比べてSH8601出土土器のほうが形態的にやや先行する可能性があるが，縄文土器等の伴出などの面から両者を含めて大浦浜遺跡とほぼ同時期に比定することができよう。

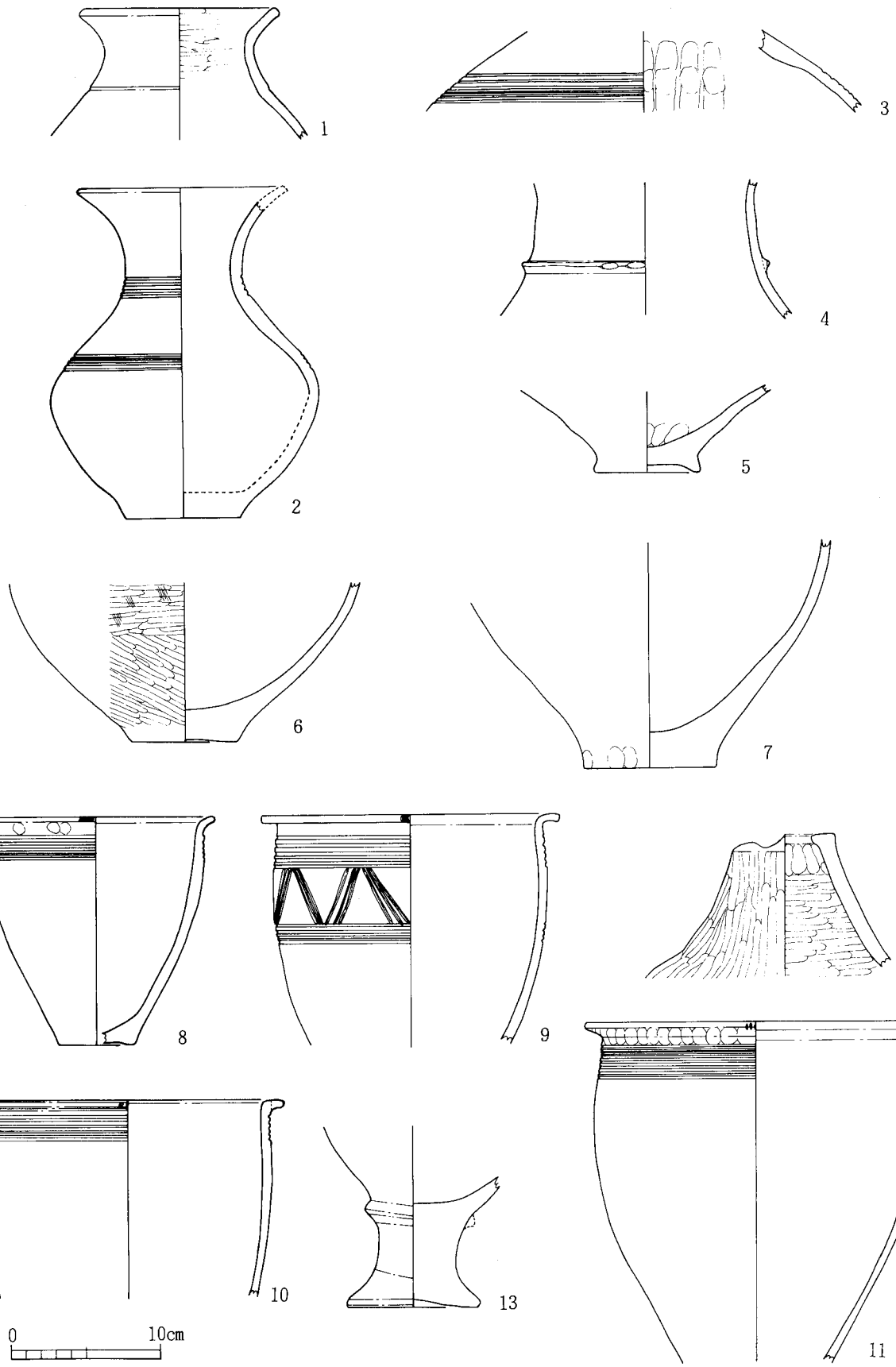
大川郡寒川町森広遺跡[10]は昭和53年度に第３次調査が実施され，弥生時代後期以降の遺構が検出されている。今回紹介する資料は，これらの遺構が形成されているベース中に含まれていた資料で，原位置を止めていない。しかし，資料の磨滅状態の観察から周辺にこの時期の遺跡・遺構が存在することが予想される。資料点数は少ないが，第114図に示すように壺・甕・縄文晩期凸帯文土器が出土している。壺は１のように口頸部の境に沈線を施し，口縁部と頸部を明瞭に区分



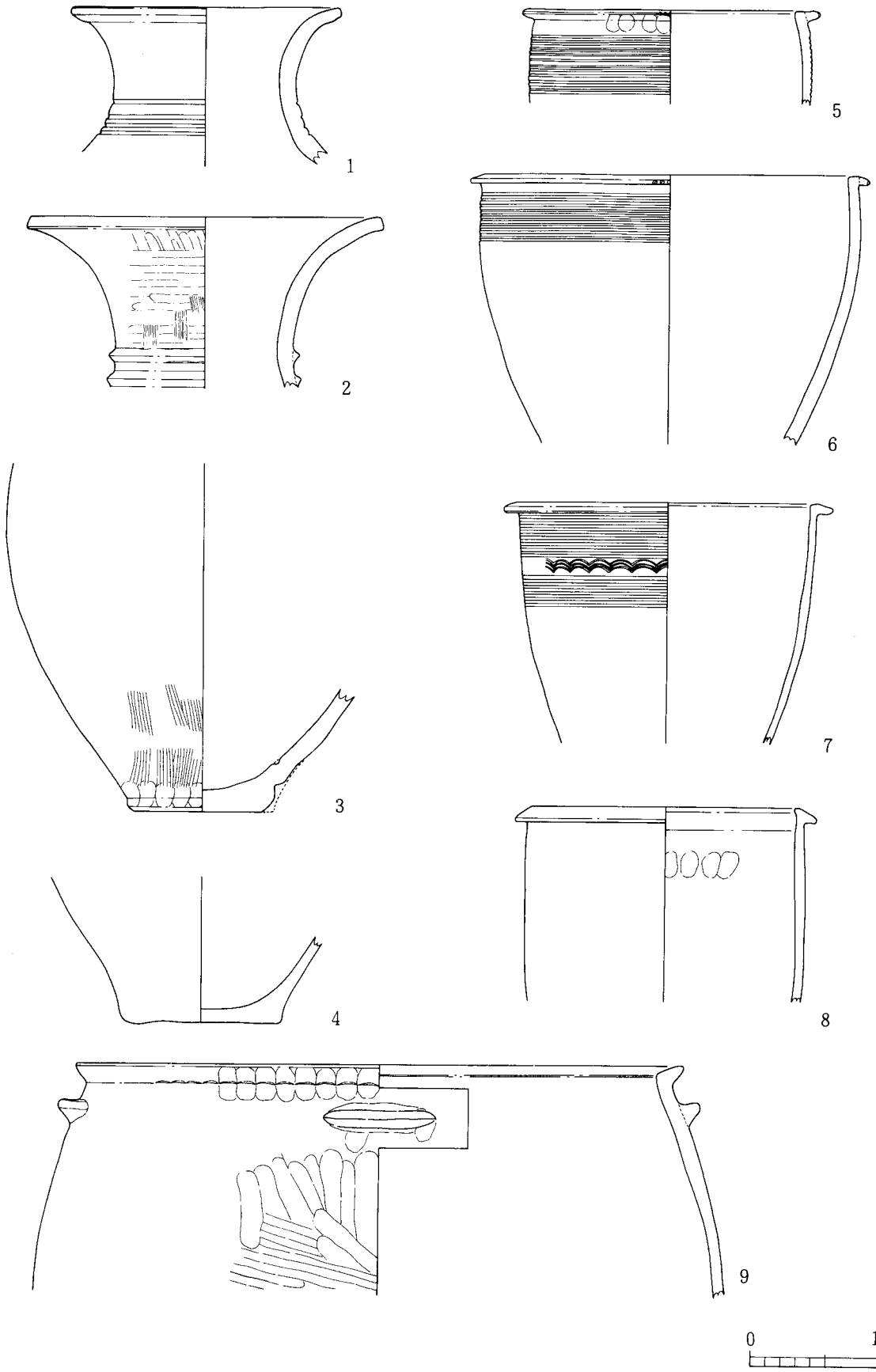
第114図　森広遺跡（Ⅲ）出土土器実測図

しているもの，２のように口頸部の境より下に断面蒲鉾状の削り出し凸帯を持つもの，３のように頸部の中位に一条の沈線を施すものなどが見られる。また６も壺の体部片と考えられるが，末広がりに複数の沈線文を施しているものも見られる。甕は，４の一点だけしか出土しておらず全体の傾向は明確ではないが，如意状口縁を有し，体部に二条の沈線文を施している。次に５は通常では見られない形態を有しており，鉢の可能性を考えている。この他に縄文土器片が２点出土している。２点とも晩期凸帯文土器であり，口縁部の少し下に貼り付け凸帯を持ち，凸帯上に刻み目が認められる。以上のように，壺の資料中には従来の観点では新しい様相と考えられるものも含まれるが，晩期凸帯文土器との共伴といったことを考え合わせると，大浦浜遺跡と同様の時期の所産と考えられる。

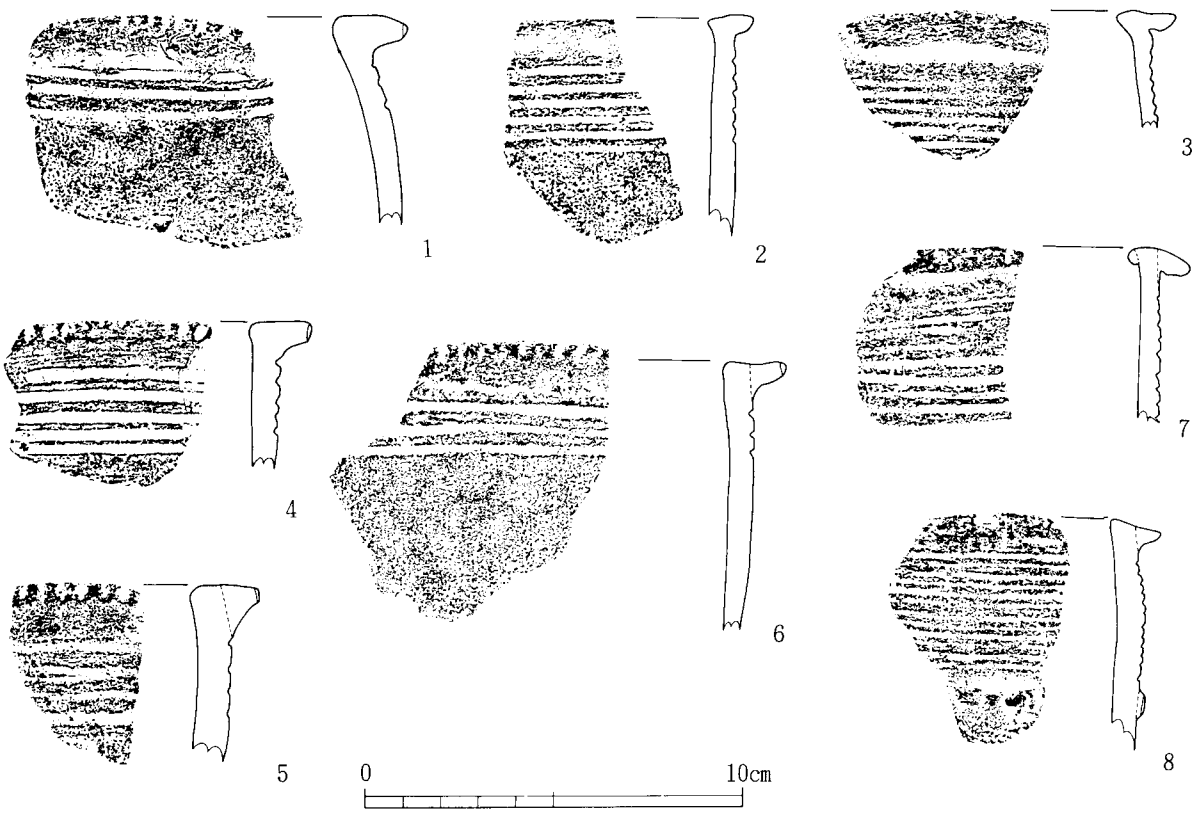
仲多度郡多度津町三井遺跡[11]は，学史的にも著名な遺跡であり従来地点別の資料を基準として「三井Ⅰ式」「三井Ⅱ式」が設定された。このうち資料不足であった「三井Ⅱ式」段階については善通寺市五条遺跡出土資料[12]で設定された「五条Ⅱ式」が標式となっている。今回紹介する資料は同町に在住する金崎好松氏所有地で耕作時に採集された資料[13]である。第115図１～７は壺である。１は頸部の中位に段状の沈線を施す例である。２は頸部中位及び頸胴部の境に沈線を施す。両部位ともに４条の沈線が施されている。３も２と同様に頸胴部の境に沈線を施す例である。４は頸部の中位に貼り付け凸帯を施す例で，凸帯上に強い指押さえの痕跡を残す。５～７は底部片である。５は蓋の可能性もあり上げ底状を呈する。甕は，第115図８～11が如意状口縁を有し，第117図１～４が逆Ｌ字状口縁を有する。第115図８～11は沈線の条数が５～８条で如意状口縁を有する甕としてはやや多条な傾向が認められる。中には９のように沈線間に山形文を配置する例も



第115図　三井遺跡出土土器実測図



第116図　光専寺山遺跡出土土器実測図



第117図　三井遺跡・光専寺山遺跡出土土器実測図

ある。第117図１～４の逆Ｌ字状口縁を有する資料では，沈線条数が３～７条と先の例よりも少ない。このことは沈線条数の多条化と口縁部形態とは一概に同一傾向を示すものとは言えないことが分かる。第115図12は蓋である。13は高杯の脚部であるが杯部形態は不明である。杯部と脚部の境には貼り付け凸帯を施している。以上のように今回紹介した三井遺跡の資料の特徴としては口縁部が外反して広がること，口頸部の境が不明瞭になるものの頸胴部の境は未だに明瞭であること等が上げられる。

高松市光専寺山遺跡は，従来から遺物が採集されていたが，遺跡の性格・範囲は不明であった。今回紹介する資料は昭和56年に高松市教育委員会が実施した確認調査によって出土した資料[14]である。第116図１～４は壺である。口頸部の境の破片が出土しておらず，この部分の形状は不明である。出土資料中には頸部の中位に文様が施されているものがある。１は沈線文が見られ，２では断面三角形の貼り付け凸帯が施されている。３～４は底部片である。第116図５～９及び第117図５～８は甕である。出土している甕の口縁部は全て逆Ｌ字状を呈している。甕の沈線条数も３～12条と幅が広いものの多条化の傾向が伺われる。また７のように櫛描きによる施文も出現する。第117図８は沈線の下位に貼り付け凸帯を持ち凸帯上に刻み目を施す例である。以上のように甕の傾向からすれば三井遺跡の資料よりも後出することが伺われる。櫛描文の出現から，一部の土器は中期の所産と考えることもできるが，土器形態に変化が認められず，これに伴う壺も明確ではないことから現時点では前期土器の範疇で考えておく。

観音寺市樋ノ口遺跡[15]は昭和62年度に調査され，木棺墓・土坑等が検出され弥生時代前期の墓地群であることが確認された。母体となる集落跡は同遺跡の南に位置する一の谷遺跡群[16]（四国

横断自動車道建設に伴って昭和60～61年度に調査）でその一部が確認されている。第120図は樋ノ口遺跡から出土した土器の一部である。甕の出土量が少なく出土している壺の多くは墓に伴う供献土器の可能性が高い。甕の口縁部は逆Ｌ字状を呈し，体部に５条の沈線を施している。壺は口縁部が外反して広がるものが多く，頸部中位と胴部最大径部付近に沈線もしくは貼り付け凸帯を持つものが多い。このうちのいくつかには口縁部内面に貼り付けによる文様を持つものが見られ，東伊予地域の影響を受けていることが考えられる。このように樋ノ口遺跡出土の土器は，施文位置に同一性が見られ，各部位の境を明瞭にすることを意識しない状況を示すものと考えることができる。甕は前期の中では新しく位置付けることができる。

以上，大浦浜遺跡の調査後に県内で新たに加えることができた資料についてその概略を記した。このほかにもいく例かの資料が明らかになっているが，現時点では未報告のものも多く，これ以外の資料及び現在までに確認されている既存の資料についての総合的な検討は今後の課題としたい。

⑤　小結

以上述べてきたように各遺跡からは断片的な資料しか出土していないが，これをもとに大浦浜遺跡出土土器の県内での編年的位置付けについて考える。

前項までで述べたように，前期土器の区分を考える場合一つの指標として甕の口縁部形態が上げられる。基本的には如意状口縁から逆Ｌ字状口縁に移行することは周知の事実である。甕を指標とする段階設定では大浦浜遺跡等のように如意状口縁を有するものが大半を占める段階（第１段階）がまず設定され，次に如意状口縁＋逆Ｌ字状口縁が混在する段階（第２段階）が設定される。最後にほぼ逆Ｌ字状口縁のみの段階（第３段階）を設定する。但し，第２段階は各口縁形態の出土比率によって中の池遺跡SD8101・SD8105のような厳密ではないが幾つかの小段階が設定される可能性が高い。

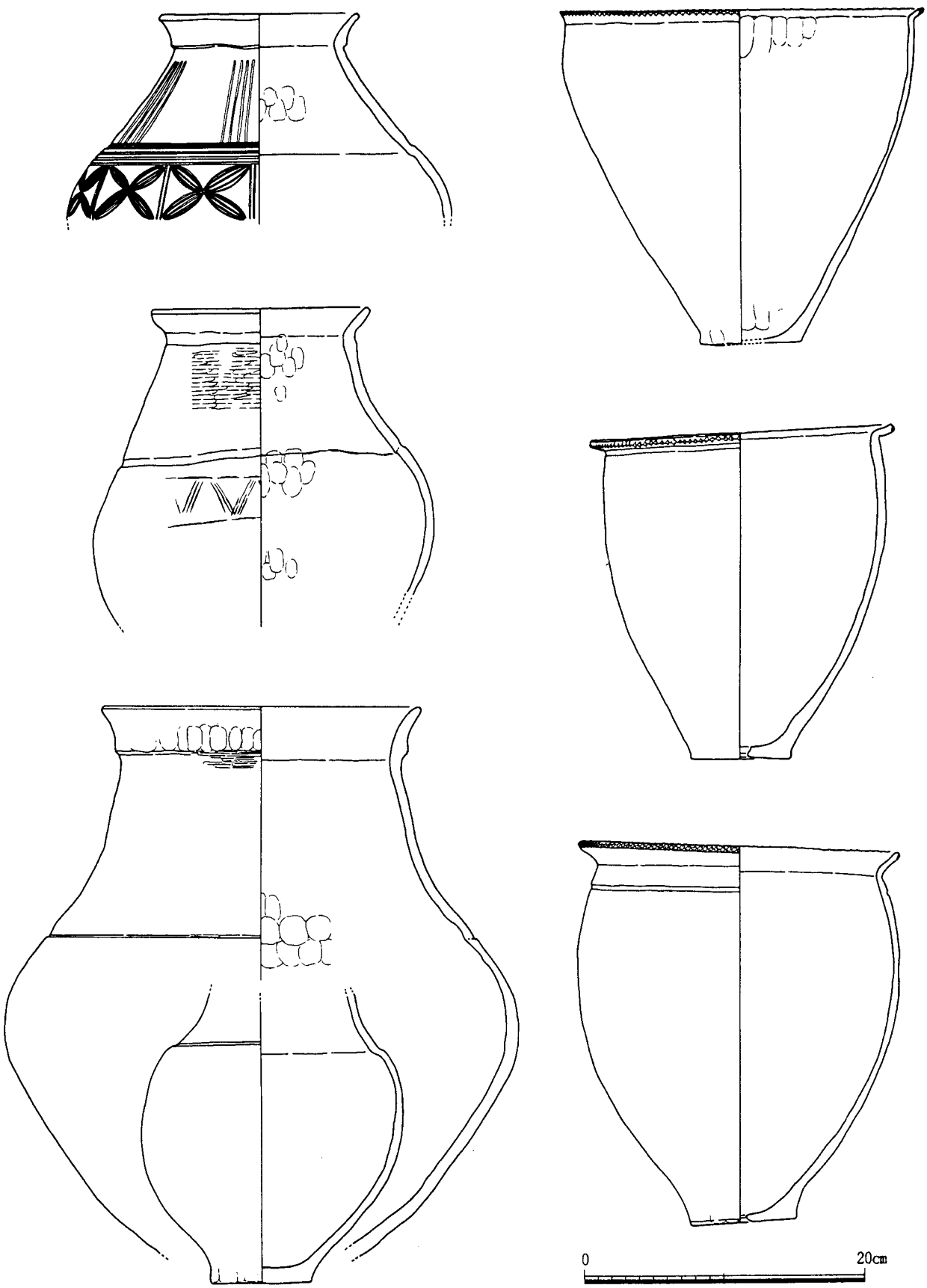
壺についても前項までで述べたように，口頸部＋頸胴部の境が段及び沈線等で明瞭に区分される段階（第１段階），口頸部の境は不明瞭にはなるが頸胴部の境が明瞭に区分される段階（第２段階），各部位の境が不明瞭になる段階（第３段階）の三段階に区分することができる。また段の占める割合，貼り付け凸帯の占める割合の増減も大きな要素になる。

このほか要素として，縄文晩期凸帯文土器・縄文系土器の共伴の有無が上げられる。現時点では，晩期凸帯文土器の形式的分類等の作業が進んでおらず，共伴するかどうかという観点のみで取り上げている。今後この点が明確になれば，逆に前期土器の細分の一助となろう。また縄文系土器についてはバリエーションが多く，その分類については今後の課題である。

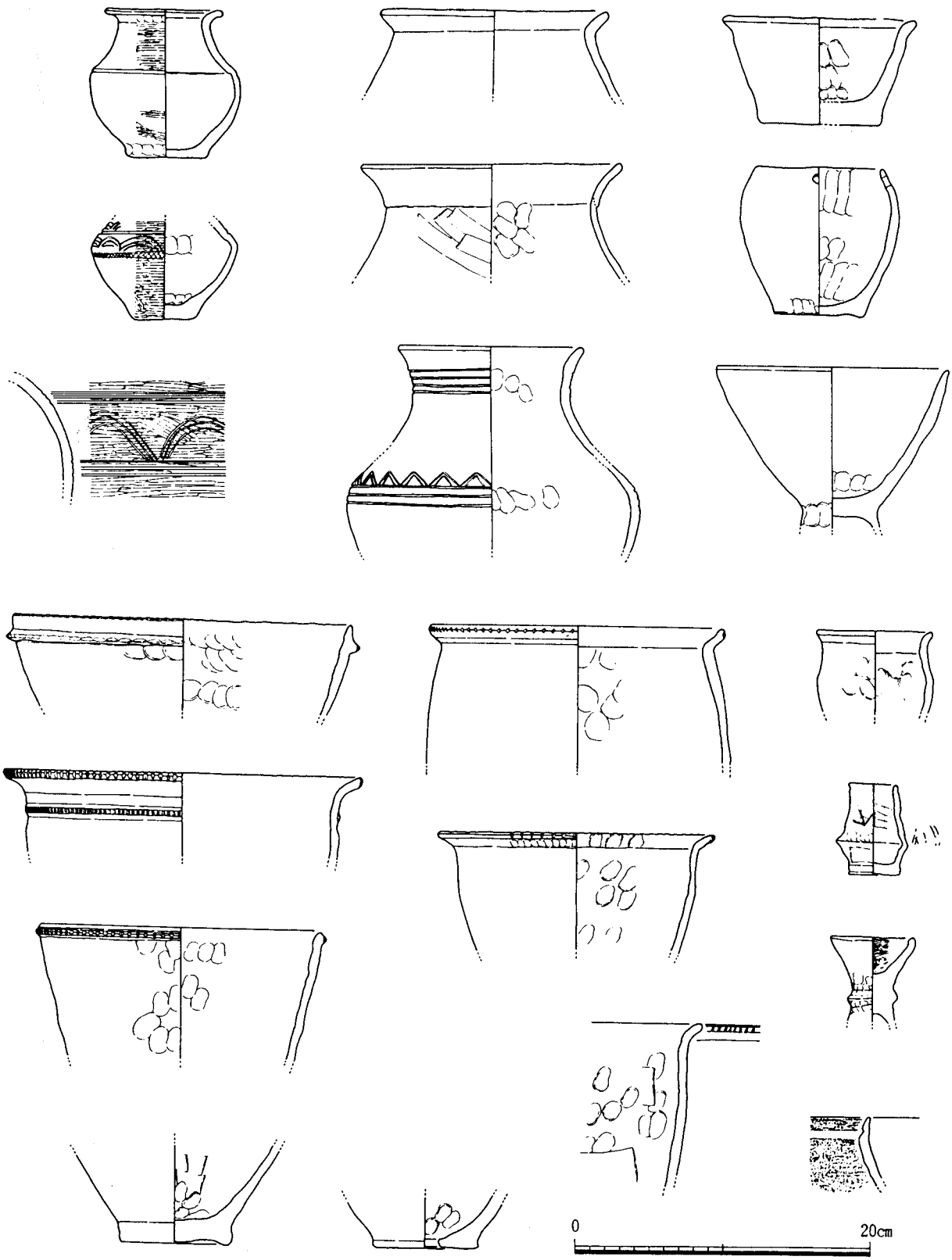
以上の要素を総合したものが第31表である。

第31表に示したように，Ⅰ段階には大浦浜遺跡等の資料が相当する。この段階の特徴として，壺の各部位の境に段を持ち明瞭な区分を示すと共に，多様な文様を持つものが多いことが上げられる。甕は如意状口縁を有する甕で構成され，縄文晩期凸帯文土器等が共伴する。

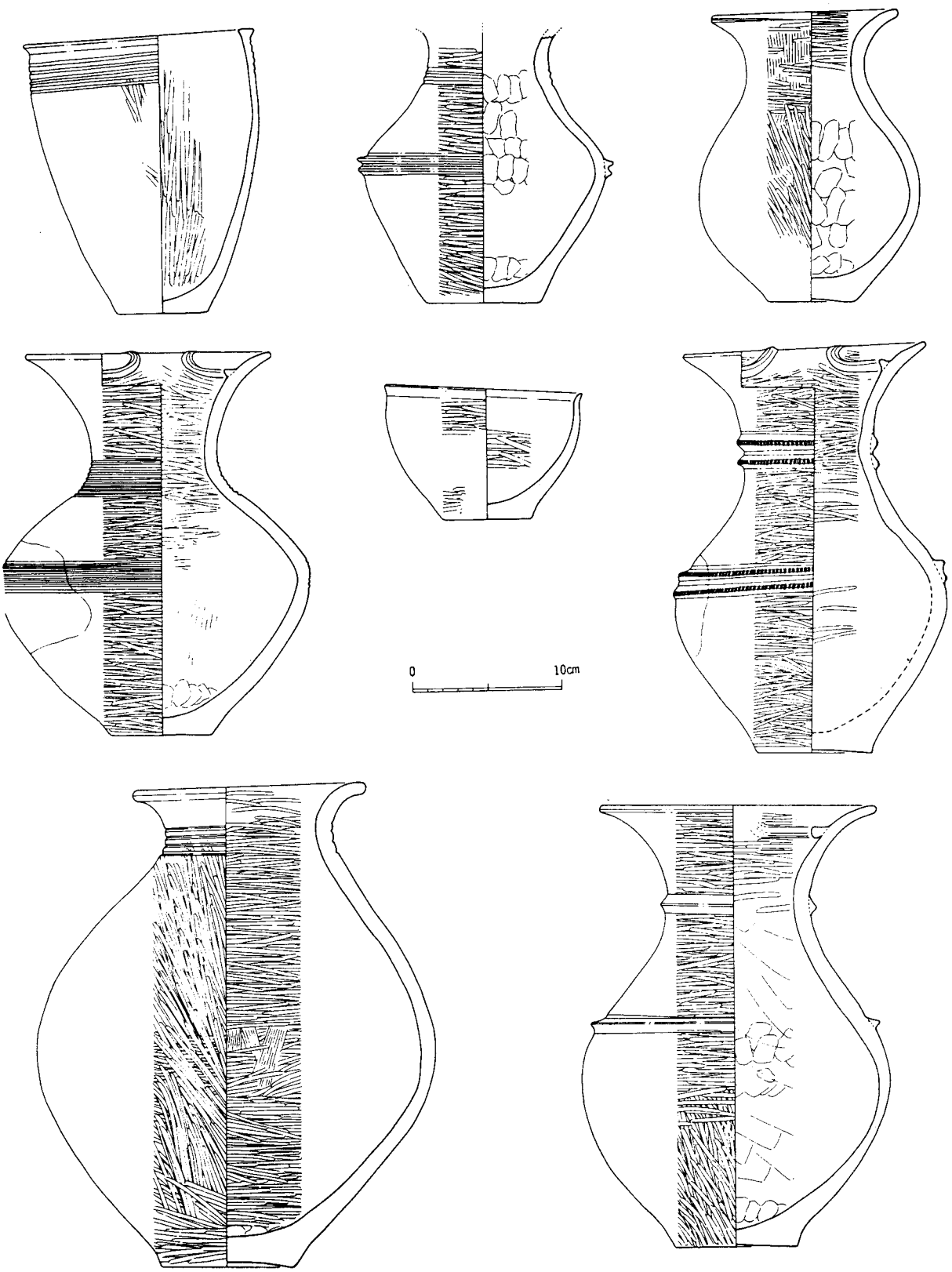
Ⅱ・Ⅲ段階は先にも述べたように，甕第２段階内での出土比率によって仮に設定したもので，今後再分類する必要があるが，統計に耐えうる出土量の確保が十分になされなければならない。Ⅱ・Ⅲ段階の特徴としては，壺の段がほぼ消滅し，徐々に貼り付け凸帯の比率が高くなる傾向にある。甕は如意状口縁と逆Ｌ字状口縁とが共伴するが，徐々に逆Ｌ字状口縁の比率が高くなる。



第118図　下川津遺跡SH8601出土土器実測図



第119図　下川津遺跡SR05出土土器実測図



第120図　樋ノ口遺跡出土土器実測図

<table>
<tr><th></th><th colspan="4">壺</th><th>甕</th><th>縄文晩期凸帯文土器
縄文系土器</th><th>県内の代表的な遺跡</th></tr>
<tr><td>（＋）</td><td rowspan="2">第一段階</td><td rowspan="4">段</td><td></td><td rowspan="2">第一段階</td><td rowspan="3">共伴</td><td></td></tr>
<tr><td>Ⅰ</td><td>文様の多様化</td><td>大浦浜遺跡
下川津遺跡
森広遺跡</td></tr>
<tr><td>（＋）</td><td rowspan="2">第2段階</td><td>文様の衰退化</td><td></td></tr>
<tr><td>Ⅱ</td><td rowspan="2">細分の可能性</td><td rowspan="3">貼り付け凸帯</td><td rowspan="2">第2段階</td><td>中の池遺跡
SD8101</td><td rowspan="2">三井遺跡</td></tr>
<tr><td>Ⅲ</td><td rowspan="2">第3段階</td><td>中の池遺跡
SD8105</td></tr>
<tr><td colspan="2">Ⅳ</td><td>第3段階</td><td></td><td>光専寺山遺跡
樋ノ口遺跡</td></tr>
</table>

第31表　弥生前期土器分類表

Ⅳ段階は，壺の施文が貼り付け凸帯・沈線文のみになり，甕は逆Ｌ字状口縁で占められる。この段階で一部櫛描直線文が出現するものと考えられる。櫛描直線文は沈線多条化の延長線上に位置付けられよう。

ここで従来重要視されてきた削り出し凸帯について考える。削り出し凸帯が段から変化し，貼り付け凸帯に移行していくことは形式的には十分説明しうるが，実際の廃棄状況の中で大浦浜遺跡のように古い様相が主体を占める場合に混在として除外しうるかどうかの検討がなされていない。凸帯の在り方として，古い段階では縄文晩期凸帯文の例を引くまでもなく，凸帯の存在が相互に影響を及ぼしあうことが想定されることから，削り出し凸帯が単に段の延長上で考えうるのかどうか，現時点で削り出し凸帯のみで構成された土器群を検出しえていないため，あえて要素として除外しておく。

次に近県の例から見て，Ⅰ段階の前に壺の文様が多様化していない段階を想定することができる。例えば岡山県津島遺跡[17]の資料がこれに相当する。又，Ⅰ段階とⅡ段階の間にも大きなギャップがあることから，壺では段を持つものの比率が低下し，文様の退化傾向を示す段階が想定されるのである。

以上のように，表面的な観察からは現状ではⅠ～Ⅳ段階，想定上は６段階程度が設定可能と考えうるが，従来のような形式分類のみでの編年の妥当性については今後の課題と考える。この点については県内の他の資料をも合わせて近い将来別稿でその責を果たしたい。

注

(1)　a 井藤暁子「入門講座弥生土器－近畿１」『考古学ジャーナルNo.195』　ニュー・サイエンス社　1981

b 藤田憲司「中部瀬戸内の前期弥生土器の様相」『倉敷考古館研究集報第17号』　倉敷考古館　1982

(2) 大山真充・真鍋昌宏ほか「大浦浜遺跡の調査」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報Ⅴ』 香川県教育委員会 1982

(3) 六車恵一「讃岐弥生式土器聚成図録－一九五六－」『香川県文化財協会報特別号一』 香川県文化財保護協会 1956

(4) 松本豊胤 a「讃岐室本町の弥生式土器」『上代文化27』 1957

b「北四国に於ける前期弥生式土器」『上代文化28』 1958

c「讃岐弥生式土器研究－前期－」『香川県考古学会報告1』 1961

d「香川県善通寺市出土の弥生式土器」『古代37』 早稲田大学考古学会 1961

(5) 注(1)bに同じ

(6) 安藤 一「櫃石島・大浦浜遺跡の遺物整理報告」『香川県埋蔵文化財調査年報－昭和58年度－」香川県教育委員会 1984

(7) 注(1)bに同じ

(8) 藤好史郎『中の池遺跡発掘調査概要』 丸亀市教育委員会 1982

(9) 大山真充・西村尋文ほか「下川津遺跡Ⅱ」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報Ⅷ』 香川県教育委員会 1987

(10) 六車 功「森広遺跡Ⅲ」『香川県埋蔵文化財調査年報－昭和53年度－』 香川県教育委員会 1978

(11) 注(3)・注(4)bに同じ

(12) 注(4)dに同じ

(13) 金崎好松氏のご好意により掲載した。記して謝意を表したい。

(14) 高松市教育委員会所蔵。

(15) 片桐孝浩「樋ノ口遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報－昭和59年度～昭和62年度』 香川県教育委員会 1988

(16) 岸上康久ほか「一の谷遺跡群」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査実績報告－昭和61年度－』 香川県教育委員会 1987

(17) 注(1)bに同じ

第４節　粘土遺構について――中世製塩の検討――

本遺跡から粘土を用いた遺構が多数検出されたことは，第４章第６節で報告したとおりである。

この遺構の時期は12～13世紀で，海浜部に作られており，火を併用していることから，この遺構は製塩に関係した遺構と推定されるが，このことについてここで改めて検討してみたい。

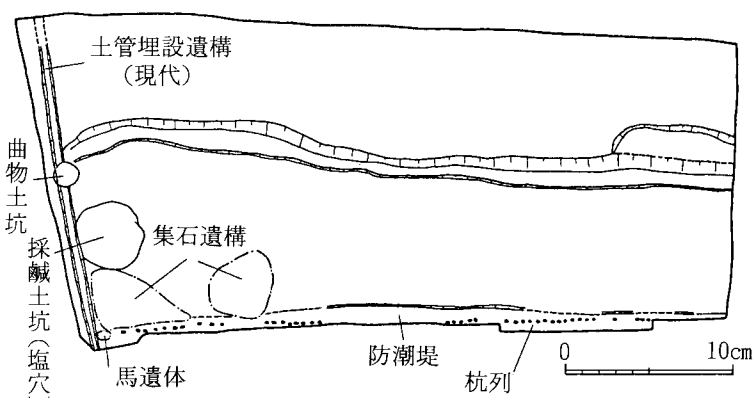
(1)　類例の検討

香川県内において，古代末～中世の遺跡はこの十数年来活発に発掘調査が進められており，集落をはじめ山城，寺院跡等の各種の遺跡が発掘されているが，土坑に粘土を張った遺構の検出は本遺跡以外にはない。

また，西日本においても類例の報告例は少なく，管見の限り次の４例にすぎず，現在のところ海浜部にのみ見られる特殊な遺構と評価しうる。

①　堂山遺跡[1]

兵庫県赤穂市塩屋堂山に所在する。昭和54年，兵庫県教育委員会によって発掘調査が実施された。遺跡は現在の海岸線より４km離れているが，かつては遺跡の近くまで湾が入り込んでいたと推定されている。



第121図　堂山遺跡塩田実測図

粘土を用いた遺構は採鹹土坑と曲物土坑の2つが検出された。採鹹土坑は径410cm，深さ60cmの円形土坑で，肩から底にかけて灰白色の粘土が張られている。土坑内部の東側は良質の黒色粘土と板・杭材が組み合わされていたが，具体的な構造は不明である。

曲物土坑は採鹹土坑の北２ｍの位置にあり，径210cm、深さ45cm（残高）の円形土坑である。土坑の肩から底にかけて灰白色粘土を張っており，土坑中央には径55cmの曲物が設置されている。

この２つの土坑は塩田と考えられる平坦面の隅に位置し，採鹹土坑は後世の沼井に相当する鹹水を採る装置で，曲物遺構は海水か鹹水を溜めておく土坑と想定されている。

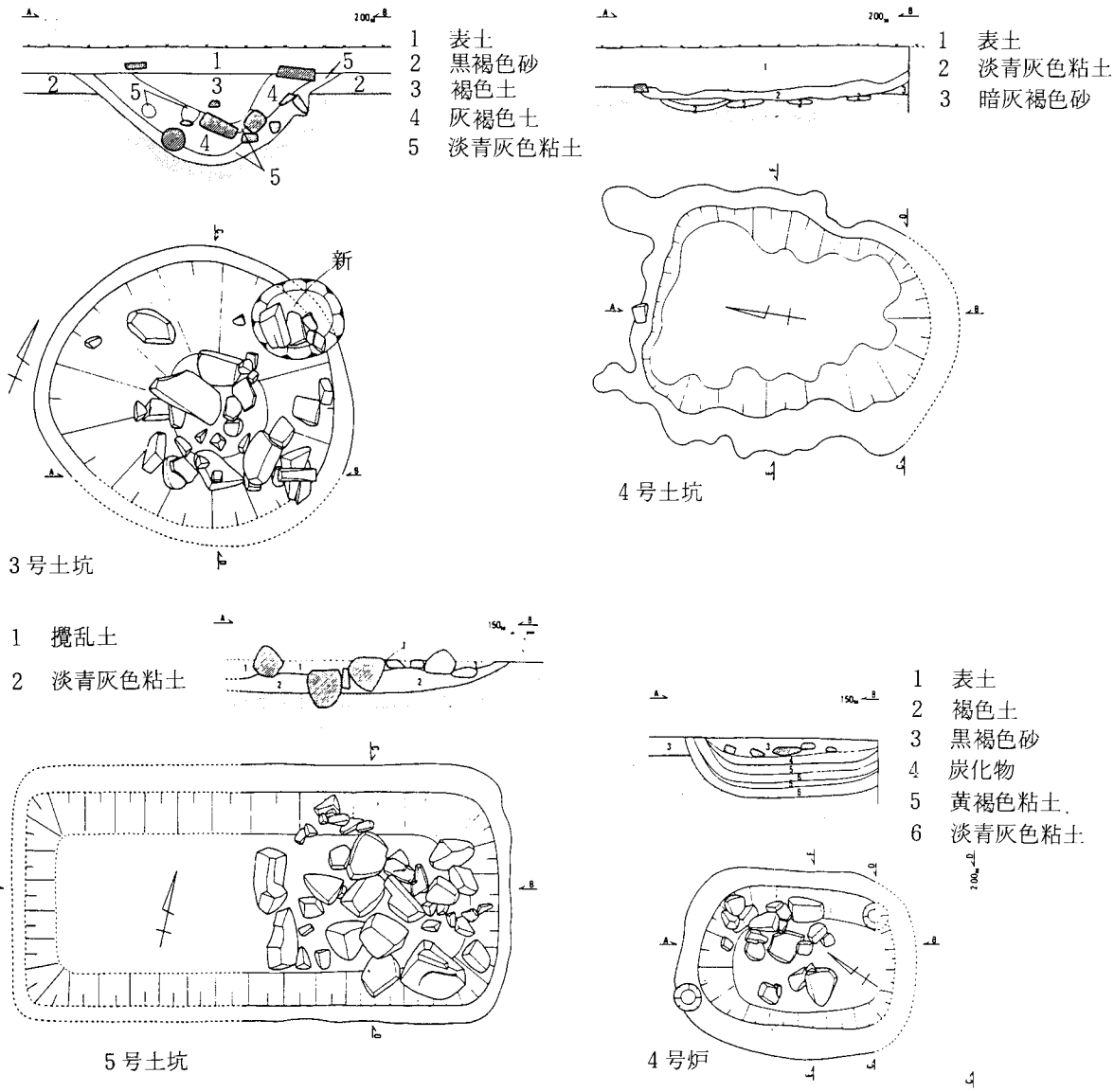
これらの遺構は平安時代後半（12世紀）に築造され，鎌倉時代前半まで使用されていたと考えられている。

②　沖須賀遺跡[2]

岡山県玉野市大字後閑に所在する。昭和55年，玉野市教育委員会によって発掘調査が実施された。遺跡は現在の海岸線に接する砂浜に立地する。粘土を用いた遺構は４基検出されている。

３号土坑は最大径240cm，深さ70cmの摺鉢状を呈する土坑で，土坑内からは焼け石，土器片，土錘が出土した。粘土は淡青灰色で，底部では７～10cmの厚さがある。

４号土坑は長軸250cm，短軸200cmの不整形な淡青灰色粘土の広がりで，表面は凸凹になってお



第122図　沖須賀遺跡検出遺構実測図（約1/56）

り最も深いところで約10cm窪む。石は1点で，出土遺物は土器片と土錘である。

5号土坑は隅丸長方形の土坑と思われるが，底部のみの検出で長軸380cm，短軸200cm，厚さ20cmの大きさで，上部構造は不明である。底中央部はやや窪み，ここに人頭大から拳大までの石が多くあり，いずれも火を受けて赤変しており，粘土の中に埋没しているものも多い。炭化物や焼土が認められないことから，ここで火が使われたのではなく，焼け石は他の場所から持って来られ投げ入れられたものと考えられている。遺物は土師質土器の小片が出土した。

4号炉は長径180cm，短径140cmの隅丸長方形の浅い土坑で，深さは10cmに満たない。底部は25cm～30cmの厚さで黄褐色と淡青灰色の粘土がそれぞれ数cmの厚さで交互に積み重ねられて叩き締められている。土坑内は焼けた角礫があり，焼け石周囲全体に炭化物が厚く堆積し，粘土壁面も火を受けて変色していた。土坑の端には対角線上に2つの柱穴があり，これは火を受ける器等を留める支柱の穴と考えられている。

これらの遺構は出土遺物から平安～鎌倉時代のもので，遺構の立地や残存状況、又堂山遺跡の

状況から勘案して，製塩に関係した遺構と考えられ，３・５号土坑は塩田の溶出土坑から採取した鹹水を溜める「鹹水溜め土坑」で，４号炉は鹹水を大型容器で煮詰めた炉跡と推定している。

③　沖浦遺跡[3]

広島県安芸郡蒲刈町大字沖浦に所在する。沖浦は呉市の南東15kmに位置する上蒲刈島の南東部で，海岸線に接する海浜に遺跡は営まれており，昭和58年広島県教育委員会・蒲刈町教育委員会によって発掘調査された。

粘土を使用した遺構は２基ある。粘土貼土坑は円ないし楕円形の土坑と推定でき，残長176cmで深さは約20cmある。底部は段をなしており，西寄りが深く約30cmの深さがある。底に石はなく，粘土は砂粒混じりの灰色粘土が使われている。出土遺物はなく，時期不明であるが，層位的に見て中世以降と推定されている。

粘土敷遺構は規模・形態は不明であるが，砂粒混じりの赤色粘土を厚さ５～６cmで皿状に作ったものである。時代，性格は不明である。

これらの遺構の性格は，立地から見て製塩に関係したものと考えられるが，類例を待ちたいとしている。この他に，近世の粘土を用いた窯状遺構も検出されている。

④　箱崎遺跡[4]

福岡県福岡市東区箱崎１丁目に所在する。遺跡は現在の海岸線より約１km離れた砂丘上に営まれている。昭和61年，福岡県教育委員会によって発掘調査され，粘土を使用した土坑が14基検出された。ほとんどが上部を削平され，底部のみの検出が多いため全体構造は不明であるが，形状は長方形が多く，規模は長さ２m前後，幅は１m前後である。粘土厚は数cmから15cm位までである。特徴のある遺構がいくつかある。１号粘土坑は底から角礫、河原石や茶臼片が検出されている。２号粘土坑は両小口に小さな角礫があり，坑内には炭や少量の焼土が混入していた。３号粘土坑は坑底に備前系の甕の破片を敷き詰めた上に粘土を敷いている。

これらの遺構は12～13世紀頃のものと思われ，性格については報告書では触れられていない。

以上が古代末～中世の粘土遺構の類例であるが，時代は異なるが製塩遺跡で粘土を用いた遺構としては，香川県香川郡直島町倉浦遺跡[5]の遺構と福井県大飯町浜禰遺跡[6]の製塩炉とがある。

前者は径2.4m，深さ１mの円形の穴で，底から側面にかけて粘土が貼られており，７・８世紀頃のものと推定されている。後者は径３～４m，深さ40cmの不整円形の炉跡で，平坦な底部全面に粘土が敷かれており，５世紀初め頃のものである。

また広島県満越遺跡[7]でも古墳時代初めの粘土を用いた製塩炉と推定される遺構が検出されている

古墳・奈良時代の２つの遺構と本稿で扱う粘土遺構との関連についても検討が必要と思われるが，これについては別の機会に譲ることにする。

(2)　遺構の性格

前項で概要を述べた５遺跡の立地は，いずれも海浜に営まれているという共通点がある。そして，これらの遺跡調査は開発に先立って実施されたもので，別の表現をするならば，無作為に抽出された遺跡であるということができるであろう。

この２つの共通点から導きだされることは，この種の遺構は瀬戸内海沿岸や玄界灘沿岸に広く

分布している可能性が強いということである。

海浜部の遺跡の特徴は，遺構がつくられている土壌が砂地であり，そこに掘り込まれる遺構は形が崩れ易く，透水性が強い。このため，遺構の形状を保ち，水分を多少なりとも防ぐのであれば，遺構の内面に粘土を張る行為はもっともなことである。

しかし，同一遺跡の同一時期の遺構で，粘土を張ったものと張らないものがあるということは，製作により労力が必要な粘土を用いた遺構は，日常生活ではない，ある特定の用途のために作られたと考えるほうが自然であろう。

遺構の多くは土坑という形態をとっているが，規模，構造はさまざまなことから，使いわけがあったことが想定できる。しかも近接して築造されていることを考えると，それぞれが相互に無関係に使われたと考えるよりは，一連の作業の各工程で使用されたと見たほうがいいだろう。

次に，この遺構からの出土遺物を見てみると，土師質椀・土鍋，瓦器椀・小皿，輸入磁器，土錘，焼石，灰，炭等がある。土器類は特定の器種や量に偏りはなく，同時期の通常の集落遺跡との差はなく，遺構と遺物が組み合って使用されたと考えられる状況は示していない。

土錘は特別な出土状況を示しておらず，量的にも多くなく，遺構と関連づけて考えるのは無理であろう。

石はほとんど含まない遺構もあれば，200～300個と多量に出土した遺構もあり，後者の場合は粘土遺構と石とが密接に関係していたことが推定できる。

石は焼けたものが多く，形状からすると，花崗岩等の塊石と河原石や緑泥片岩等の扁平な石とに分けられる。塊石は遺構の底に並べられたものが検出されており用途が分かる。一方扁平な石は焼けている以外に用途を推定する手掛かりは今のところない。

灰、炭の出土は火の使用を伺わせるもので，粘土壁が熱変化を被っている遺構もあるが，火の使用とは結び付かない遺構もある。

以上のように，遺跡の立地，遺構の規模，出土遺物等を検討すると，この遺構は海に関係し，火と石を用い，幾つかの工程を持った，日常生活とは異なる作業で使われた遺構という推論が成り立つ。

海に近いことから海水や魚貝類・海藻等の海産物を火と水を用いて加工したと推定できるが，遺跡のある土地や地域の歴史性（古代に製塩が行われ，近世以降も製塩地帯であったということ）からみて，この粘土遺構は製塩に使われた施設であると見成すのが最も妥当な解釈であろう。

(3) 遺構の類型化と分析

粘土遺構を検出した5遺跡のうち，遺構の種類と数がもっとも多いのは本遺跡であるため，本遺跡の29基を中心に類型化してみよう。平面形，長軸の長さ，深さ等について検討してみると，次表のように11型式に分類できる。

Aは不整形な粘土塊で，粘土遺構に使用した残りの粘土と推定できる。但し，SX27は長軸約2mに復元することも可能であり，深さはないがD型式に入れることも可能かもしれない。

Bは小型の浅い円形土坑で，石はなく，粘土の質からみるとSX14がやや異質である。立地から見ると，他型式の外側に位置しているのが特徴である。

Cは大型の円形土坑で，本遺跡の2つは並んで位置している。使われている粘土や埋土の堆積

型　式	直径・長軸の長さ	深　さ	大浦浜遺跡 遺構番号	他遺跡の遺構名称
A	———	———	7・10・27	
B	1m前後	20cm	5・14・20・26・29	
C	2.1～2.8m	40～60cm	12・13	沖須賀遺跡3号土坑 堂山遺跡曲物土坑
D	2m前後	20cm	4・6・16・21・(27)	沖須賀遺跡4号炉
E		40cm	9・11	
F	2.4m以上	20cm	2・3	沖須賀遺跡4号土坑
G		40cm	17・19	
H		60～75cm	23・24・28	
I	2.7m前後	20cm	1・22	
J	3.7m前後	40cm	15・18	沖須賀遺跡5号土坑
K	4.5m前後	60cm	8・25	堂山遺跡採鹹土坑

第32表　粘土遺構分類表

状況が他の20数基と異なる。石は埋土中に多く，沖須賀遺跡の3号土坑も焼けた塊石が入っていたが，埋土中のものが多く，本来石は伴わない土坑であろう。堂山遺跡の土坑は底部に曲げ物が据えられており，海水か鹹水溜めではないかと推定されている。

Dは楕円形の浅い土坑である。SX4は石が多く人為的に配置されており，石が伴う遺構とみてよいだろう。SX6がSX4に，SX21がSX16に作り替えられたものであろう。沖須賀遺跡4号炉は焼け石の周囲全体に炭化物が厚く堆積し，壁面も火を受けて変色しており，この型式は炉跡とみてまず間違いないだろう。

Eは楕円形のやや深めの土坑である。石は埋土中にあり，本来伴わない遺構であろう。性格は不明である。

Fはやや長めの楕円形の浅い土坑である。大浦浜遺跡の2基は底部に石が多いのが特徴で，長さの点を除けばD型式に近い。沖須賀遺跡の4号土坑は規模からするとこの型式に属すが石はない。D型式に近いことから炉跡とも考えられるが，さらに検討を要するだろう。

Gは隅丸長方形のやや深めの土坑である。石は埋土に少量入る程度で，本来石は伴わない土坑であったとみてよいだろう。粘土の残りが良く，SX17は単一層で埋まっており，粘土壁の破損度が少ない用途であったと推定できる。

Hは楕円形の深い土坑で，石が多く，粘土壁上部は熱変化を受けていることから，火を用いる

用途であったようである。内部に粘土が多く，内部や上部に粘土を用いた構造物を想定していいかも知れない。

Ｉは長楕円形の浅い土坑である。火を用いた痕跡を残すが，石は少ない。炉跡の一種と考えられるが，Ｄ型式の炉跡とは異なるものだろう。１基のみで所在するものや主軸が他と異なるものなど，他の遺構と多少の時期差を考えていいかも知れない。

Ｊは細長い楕円形の土坑である。この土坑の特徴は両端の埋まり方が違う点で，本来石は伴っていないと考えられる。長さの点を除けばＫ型式に類似する。沖須賀遺跡５号土坑は上部が削平されているが，大きさからみてこの型式に入るだろう。

Ｋは最も規模の大きい長楕円形の土坑である。この土坑の特徴は一方の短辺が特異な構造になっている点で，性格的にはＪに類似したものと考えられる。堂山遺跡の土坑は径410㎝の円形であるが，この土坑も片側が特異な構造となっており，採鹹に使われたのではないかと推定されている。

さて，以上が粘土遺構の分類であるが，推定した機能別にまとめ直すと次のようになる。なお，Ａ型式は施設とは考えられないので以下の考察では除外する。

火を用いたもの	Ｄ，Ｆ，Ｈ，Ｉ
石の多いもの	Ｆ，Ｈ
採鹹と推定される施設	Ｊ，Ｋ
補足的な施設か	Ｂ
水と無関係と推定される施設	Ｇ
性格不明	Ｃ，Ｅ

以上の施設が具体的にどのように組み合って使用されていたか，つまりこれらの遺構が製塩の施設ならば，具体的な製塩工程がどのように復元できるかが問題となるが，解答は用意できていない。ただ，火を用いたものが遺構の構造からみると２～３種類あることが推測され，石が併用されている点が注目できる。

また，内部構造が複雑なものがあり，後世の沼井のような採鹹の施設と推定されるため，採鹹と石の使用について次に検討してみたい。

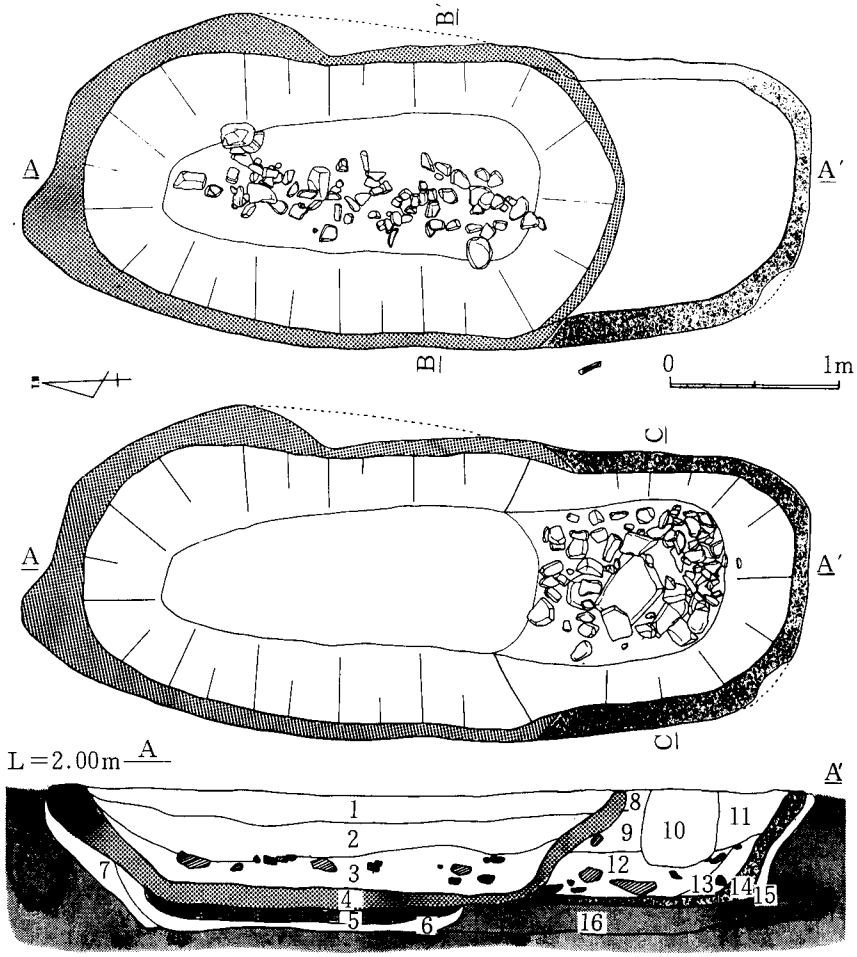
(4) 採鹹と焼石

古代末～中世の製塩における採鹹に関する考古学的資料は，堂山遺跡の塩田と土坑が唯一のものである。

塩田の面積は約320㎡（約96坪）で，自然浜を整形して作られている。築造は自然浜の細砂を除去し，粗砂の硬い面を出し，浜の先端部に40ｍおきに木杭を打ち込み，周りを粘質土で固め，高さ40㎝，幅150㎝の防波堤を作っている。防波堤内部は土器，木屑等を含んだ土砂で埋め立てて平坦にして上面は粘りのある黒色粘砂を敷き付けて，塩田面としている。塩田面の隅には集石が２ヶ所あり，満潮時に堤の外から集石のところに海水を汲み入れていたと推定されている。

この塩田の形態は揚浜系の塩田で，塩田内の塩分の付着した砂を採鹹土坑に集め海水を注ぎ，鹹水を土坑の中で析出し，鹹水は隣の鹹水溜めに集められたと考えられている。採鹹土坑の詳しい構造に付いては未報告であるが，内部が２つに分割されていた点に注意したい。本遺跡の粘土

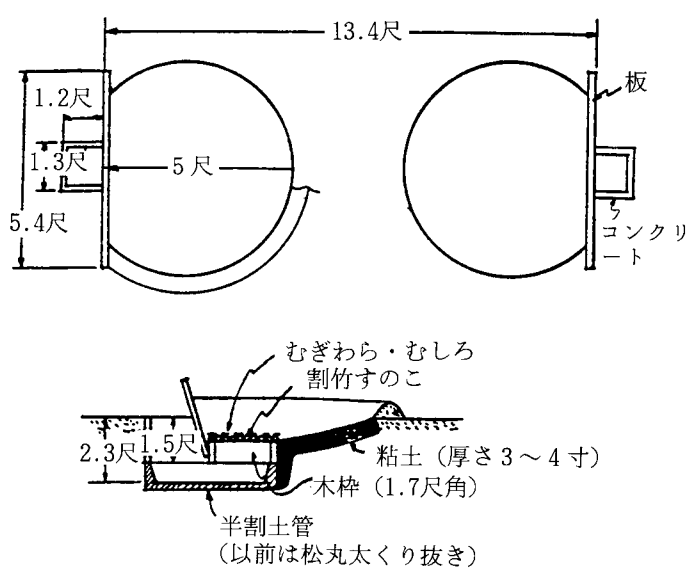
遺構のうちＪ・Ｋ型式と分類した遺構は，詳細な内部構造の復元は困難であるが，内部が分割されている点は注意してよかろう。



第123図　粘土遺構Ｋ類（大浦浜遺跡SX25）実測図

内部構造の復元は将来の資料の増加を待ちたいが，近世以降の採鹹装置について少し見てみたい。第124図は伊勢神宮の塩田採鹹装置（沼井）の断面図[8]である。伊勢神宮の製塩は神事として行われており，技術的にどこまで遡りうるか不明であるが，ある程度遺制を伝えているのではないかと考えられるものである。

この沼井で着目したいのは，左右２つに分かれた構造と，底部に粘土が使用されている点である。左が塩分の付着した砂が集められるところで，右が鹹水が溜る，所謂藻垂壺である。左右



第124図　伊勢神宮塩田の沼井
（注(8)の文献より転載）

の上部は分割されているが，底部は一連のものになっているが，藻垂れ壺の方の底は半裁の土管を使用している。

現時点では，この沼井に類した構造を想定しておきたい。

次に，焼け石について検討してみたい。

粘土遺構及びその周辺から出土した石は形状からみると花崗岩・安山岩の塊石と砂岩河原石・緑泥片岩等の扁平な石の２種類に分かれる。花崗岩は島で産するが，河原石や緑泥片岩は島内では産出せず，島外から持ち込まれたことは明らかである。

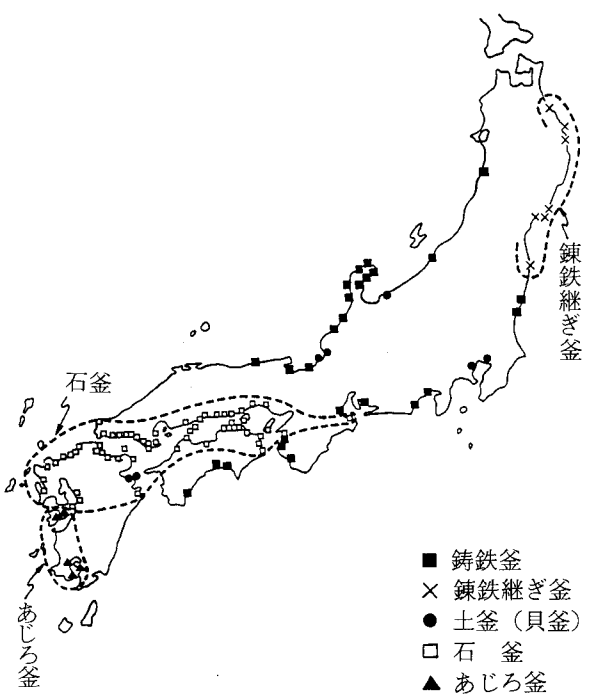
炉と考えられる遺構に置かれている石は塊石が多く，扁平な河原石等を敷き並べた遺構は検出されていない。

すると，河原石等は何に使われたかが問題になる。河原石の大きさは長軸10～20cmで，厚さ３cm前後で，扁平な面の両側が焼けており，表面が剝離しているものがある。先述したように，火を使う遺構は数種類あり，このうちの１種類に河原石が共伴している。

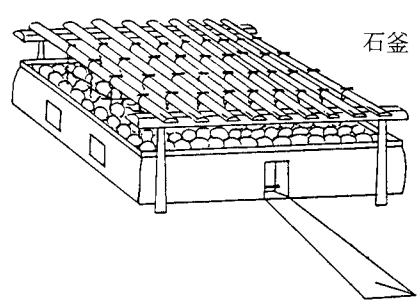
石の出土状態や石そのものの観察からこの石の用途を追究するのは難しく，将来用途復元可能な状態での検出例を期待したいが，近世以降の製塩に石が多く使われているので，これを見ていくことにしよう。

江戸時代から明治末まで瀬戸内地方では「石釜」と呼ばれるものが製塩に広く使われていた。この石釜については広山堯道[9]や村上正祥[10]の研究があり，前者の研究を要約する形で以下の記述を進めていきたい。

石釜の出現は時期不明であるが，元禄十年（1697）の刊行の『本朝食鑑』[10]には小石を灰で練り固めた「石盤」の記述が見られ，元禄年間には既に石釜は定型化しており，以後明治時代まで基本的に変わるところが無かった。



第125図　石釜分布図（注⑽の文献より転載）



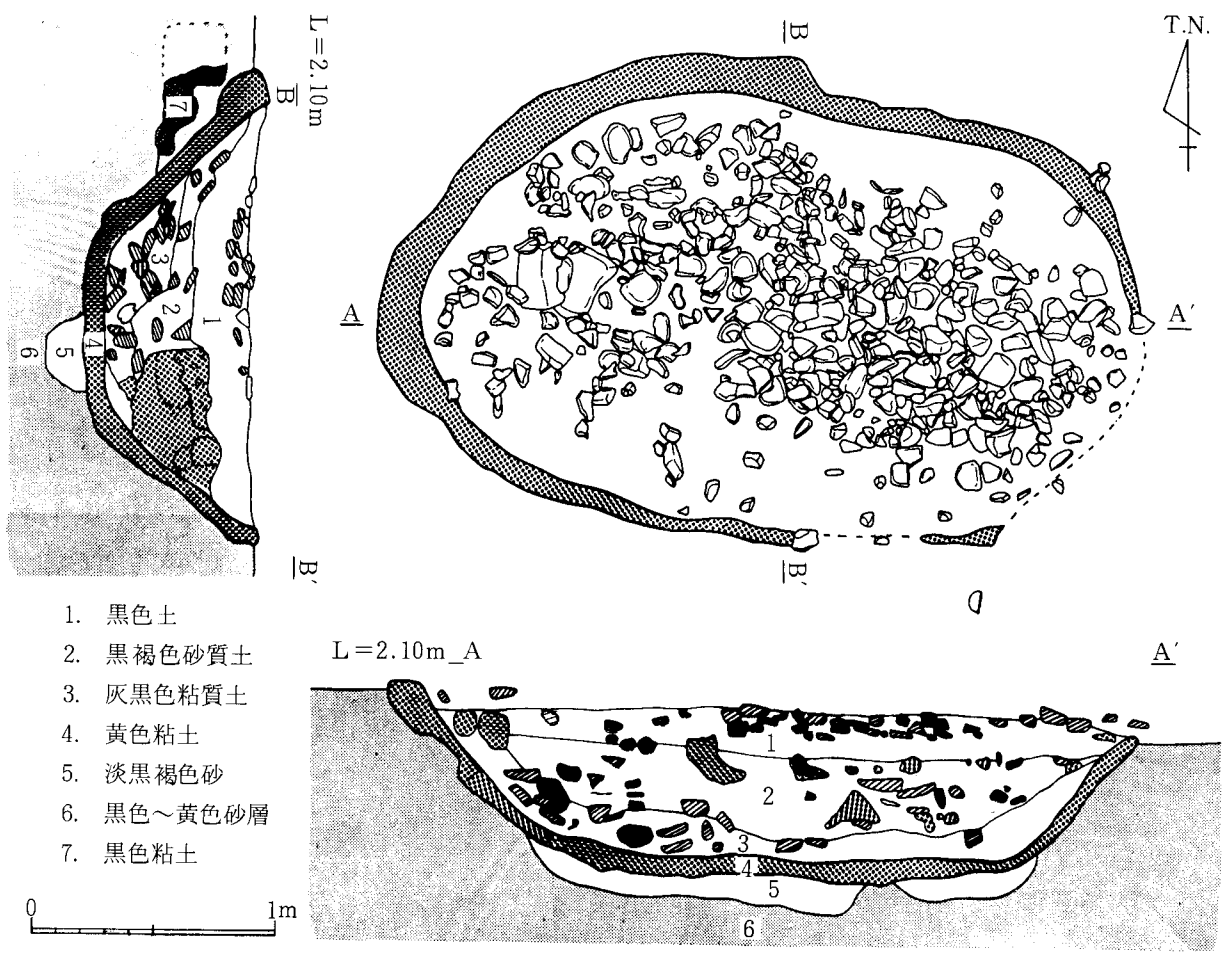
第126図　石釜模式図
（注⑽の文献より転載）

石釜の構造は大きく上下２つに分かれる。下は竈で，上が狭義の石釜である。石釜の築造方法は竈の上部を覆う形で板材を敷き並べ，その上に石を並べていく。石の上部や隙間には灰粘土を塗り固めていき，釣金を立て，表面を平らにする。周囲は約10cmの高さに縁を作る。釜の上部全面を上焼きにした後，釣金に縄を付け上部から懸垂し，板材を抜き取っていく要領である。

この石釜の大きさは地域や時代によって様々のようであるが，凡そ大きいもので一辺３m，小さいもので一辺1.8mの方形の物である。

石材は本来天然の河原石が用いられたが，形状が一様でなく，熱伝導が均一でなく，沸騰力が弱いなどの欠点があったため，近世後半から明治初期にかけて花崗岩の切り石に漸次変わっていった。使用される個数は300個前後のようである。

以上が近世～近代の石釜の概要であるが，粘土遺構及びその周辺から出土した焼けた河原石は，この石釜の石と同様な用途を想定するのが最も妥当と思われるが，灰粘土の類が検出されていない点が難点として残る。但し，石が多く出土したH類の遺構の内部には粘土が多くあったのは他類に見られない特徴で注目できるが，深い土坑の内部でどのように火を燃やしたかが大きな疑問として残る。



第127図　粘土遺構H類（大浦浜遺跡SX23）実測図

採鹹や煎熬をはじめ，中世製塩についての考古学的検討は諸に付いたばかりで，今後の研究の進展に期待したい。

注

(1) 山本三郎・大平　茂「兵庫県堂山遺跡－塩田遺構を中心に－」『日本考古学年報』32　1982年

(2) 玉野市教育委員会『沖須賀遺跡』　1981年

(3) 蒲刈町教育委員会『沖浦遺跡』　1984年

(4) 福岡県教育委員会『箱崎遺跡』　1987年

(5) 近藤義郎・岩本正二「塩の生産と流通」『日本考古学』3　岩波書店　1986年

(6) 岩狭考古学研究会「若狭における土器製塩の編年」『吉見浜遺跡』　1974年

(7) 尾道市教育委員会『満越遺跡』1983，1984年

(8) 村上正祥「伊勢神宮の御塩つくり」『日本塩業の研究』第19集　日本塩業研究会

(9) 広山堯道「煎塩石釜」『日本塩業の研究』第14集　日本塩業研究会　1973年

(10) 村上正祥「日本・朝鮮および中国における塩釜の変遷」『日本塩業の研究』第19集　日本塩業研究会

第7章　おわりに

1.　大浦浜遺跡は香川県坂出市櫃石島大浦浜に所在する，縄文時代から鎌倉時代までの複合遺跡である。

遺跡の性格は生産遺跡で，縄文・弥生時代は主に狩猟・漁労，古墳時代から鎌倉時代までは製塩・漁労が中心となる。

遺跡の範囲は海浜の平坦地を中心に約35,000㎡と推定されるが，今回の調査では全体の約70%にあたる24,400㎡を発掘調査した。

発掘調査は本州四国連絡橋公団から委託を受けて香川県教育委員会が実施した。

調査時期は昭和51・52年度に予備調査を行い，遺構・遺物の地区ごとの包蔵状況を確認のうえ，本調査計画を立案し，本調査は昭和55～57年までの3ヶ年で実施した。

2.　調査結果の概要を時代別に述べると以下のようになる。

縄文時代は中・後期が中心で，遺構・遺物は遺跡の北部で主に検出された。遺構は少なく，炉跡と考えられる集石遺構2ヶ所と貝殻が入った土坑4ヶ所を検出したに留まる。

遺物は土器・石器が包含層から多く出土し，土器については細分案を示すことができた。また，遺物の出土位置や埋没状況から海浜の形成過程の見通しを得ることができた。

弥生時代の遺構・遺物は各時代の中で最も少ない。前期は砂洲中央部を中心に展開しており，土坑1基と遺物包含層が検出された。遺物量は比較的多く古段階の土器の文様構成について多くの知見を得ることができ，第6章に考察を掲げている。

中期は土坑2基とこれに伴う土器が検出されたに留まった。後期は遺跡北部で土器群や土器棺が検出され，この地区に集落域が想定できた。

弥生時代は概して遺構・遺物は少ないのが今回の調査の特徴である。

古墳時代に入ると製塩が本格的に開始され，遺跡の南西部で製塩や祭祀に関係する遺構・遺物が多く検出された。遺構としては土器群，土坑，ピット，製塩炉，製塩土器堆積層等である。遺物は量的には製塩土器が圧倒的に多く，本遺跡における製塩土器編年を提示することができた。

弥生時代末から古墳時代前期にかけての土師器も多く出土し，古式土師器についての地域色や編年についての考察を第6章に掲げている。

奈良・平安時代の遺構・遺物は遺跡南東部で集中的に検出された。遺構は土坑，ピット焼土等，製塩に関係すると思われるものが多く検出されたが，製塩工程の復元までには至らなかった。

遺物は製塩土器が最も多く，土器製塩は平安時代前期頃まで存続することが明らかになった。その他の遺物としては，土錘，蛸壺等の漁具が古墳時代に比べると多いのが目立ち，帯金具，皇朝十二銭等の祭祀遺物の出土も注目できる。

鎌倉時代の遺構・遺物は遺跡南東部，南端部とヤケヤマ東麓地区から多く検出された。遺構は粘土遺構，石積遺構，土坑，ピット等である。このうち粘土遺構は29基検出され，中世の製塩遺構と考えられ，第6章に考察を掲げている。

遺物は通常の集落遺跡と同様の土師質土器や陶磁器等が出土した。注目できる遺物は土器片を円形に加工した製品である。

3.　備讃瀬戸には100ヶ所以上の海浜・製塩遺跡が所在し，各地で発掘調査が行われてきたが，

2万㎡以上の面積が発掘調査されたのは本遺跡が始めてではないだろうか。

広範囲に発掘調査したことで，海浜遺跡の構造や時代変遷を把握することができたことは貴重な成果であった。しかし，今回の調査により瀬戸内海の歴史を包含していた遺跡が1つ消滅したことも事実で，このことを思うとき，どれだけ的確な調査ができたか心もとない。

製塩については現地での発掘段階や概報作成時に議論，検討を進めたが，本遺跡の各時代に共通した生業である漁労については，魚骨等の動物遺存体の採集を十分に行わなかったことや，土錘等の遺物が包含層出土で時期区分が難しかったことなどから，ほとんどなしえなかったことは，大きな反省点の1つである。

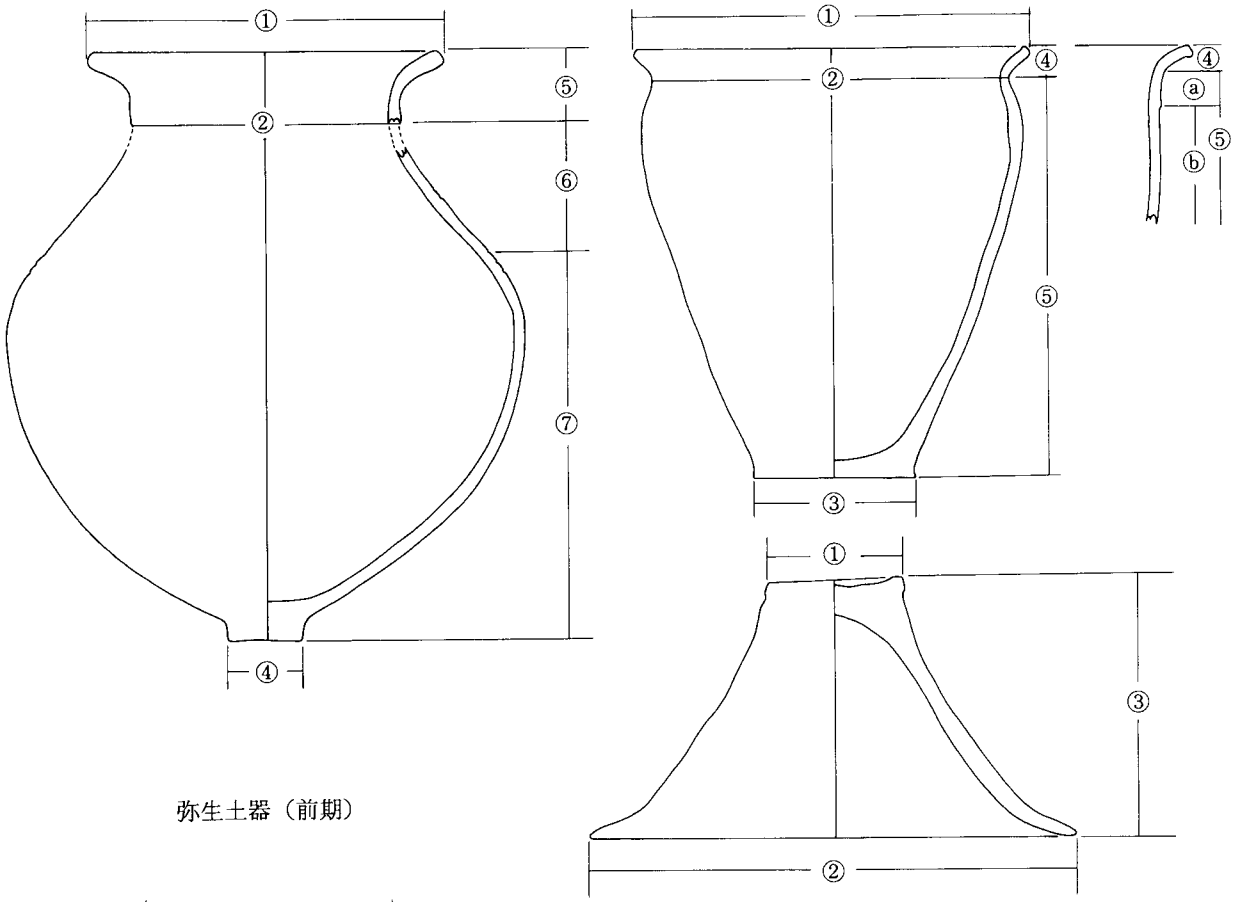
本報告書は，発掘調査概報の成果を基礎として，これに補足，訂正を加え，時代ごとにまとめ直したものである。考古学研究や埋蔵文化財保護行政の資料として活用されることを期待したい。

4. 発掘調査関係の実測図，写真は香川県埋蔵文化財センターで保管しており，依頼に応じ，随時貸し出しを行っている。

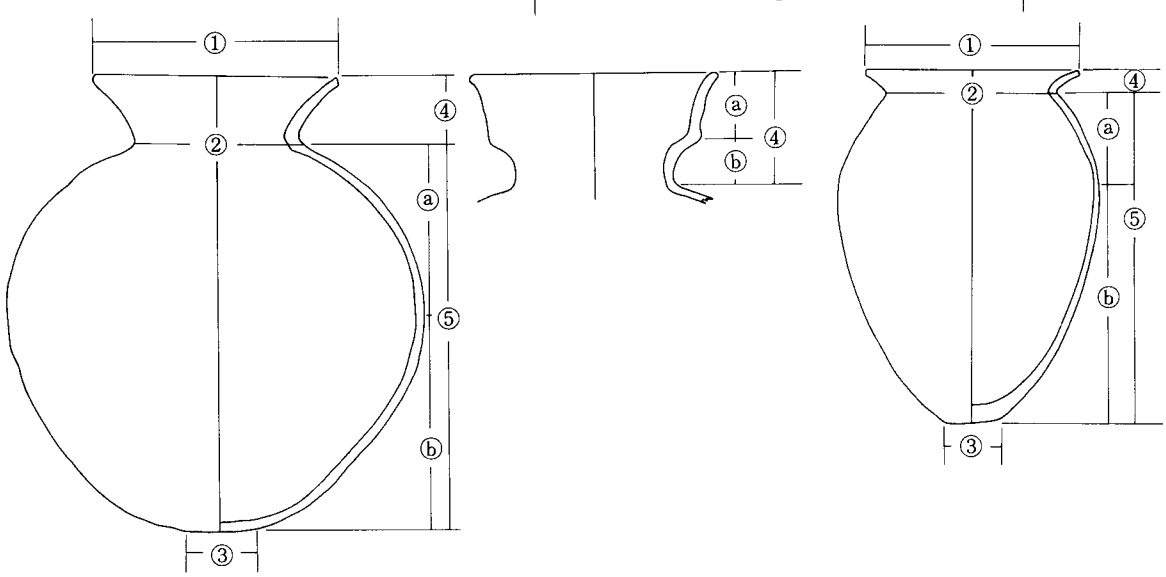
出土遺物は整理用コンテナで約2400箱で，香川県埋蔵文化財センターで収蔵保管し，これについても貸し出しを行っている。

遺物の積極的な公開，活用については，香川県埋蔵文化財センター展示室で，「瀬戸大橋と埋蔵文化財」というテーマで，昭和63年4月より展示を行っている。また，一部の遺物については坂出市や櫃石島住民の要望により，坂出市中央公民館櫃石分館展示室で展示を行っている。本報告書とともに活用いただければ幸いである。

観　察　表

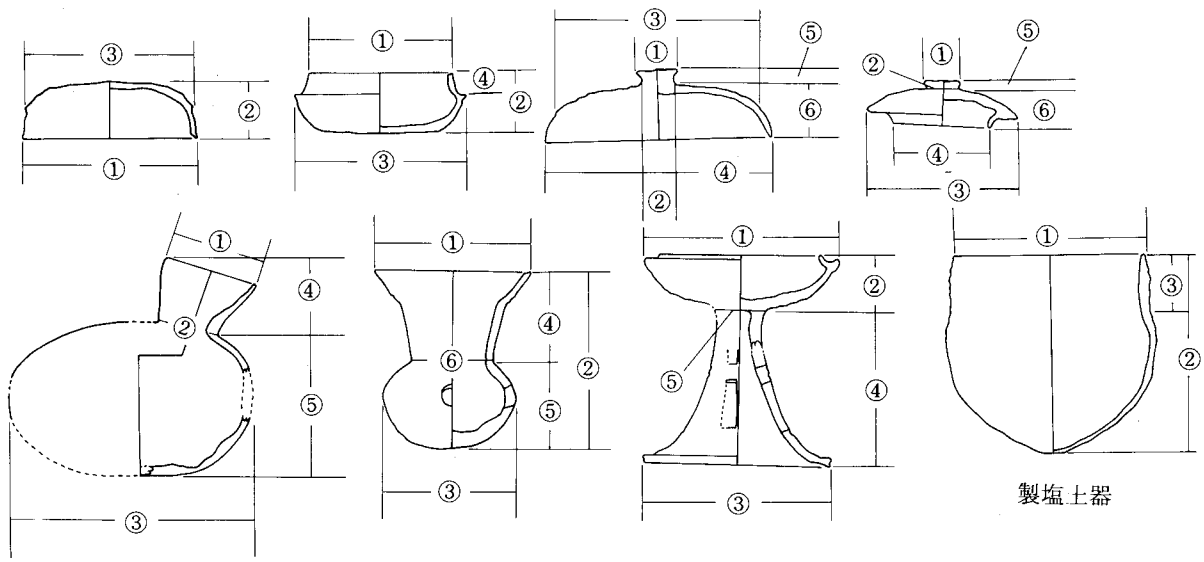


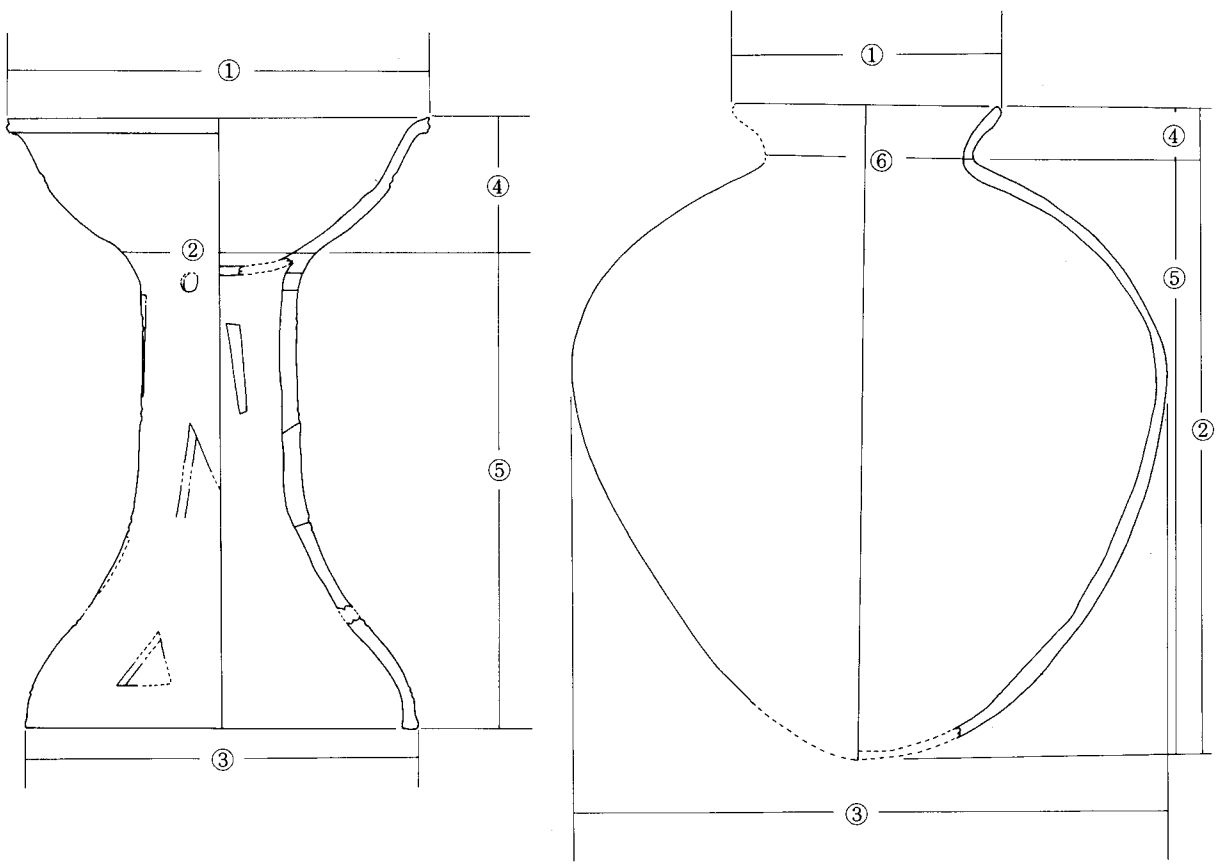
弥生土器（前期）



古式土師器

第128図　土器計測位置図(1)





古墳時代須恵器

第129図　土器計測位置図(2)

第1表　縄文土器観察表

挿図番号	図版番号	部位	地文			文様		備考	出土地点	遺物番号
			縄文	条痕	その他不明	外面	内面			
第14図1	121-(1)(2)	口		○		口唇部－縄文 3の字文			K－3　赤褐色砂層	33－3
2	121-(1)(2)	口		○		口唇部－刻目 3の字文			L－3　縄文④	ウ－32
3	121-(1)(2)	口		○		口唇部－縄文 3の字文			K－3　赤褐色砂層	34－4
4	－	口		○		口唇部－縄文 3の字文			K－3　赤褐色砂層	34－6
5	－	口		○		口唇部－縄文 3の字文			K－3　赤褐色砂層	33－5
6	－	口		○		3の字文			K－3　赤褐色砂層	35－6
7	－	口		○		3の字文			K－3　土坑1	P－94
8	121-(1)(2)	口		○		口唇部D爪帯 3の字文			M－38(1)	(V)－2
9	－	口		○		3の字文			I－3　赤褐色砂層	26－2
10	－	口		○		3の字文			K－3　赤褐色砂層	ウ－4
11	121-(1)(2)	体		○		3の字文			H－3　赤茶縄文層	ウ－3
12	－	口		○		3の字文			I－3　赤褐色砂層	24－3
13	121-(1)(2)	体		○		3の字文			K－3　赤褐色砂層	ウ－1
14	121-(1)(2)	体		○		3の字文			K－3　赤褐色砂層	36－3
15	－	体		○		3の字文			H・I－3　縄文下層	ウ－10
16	－	体		○		3の字文			H・I－3　縄文下層	ウ－8
17	121-(1)(2)	体		○		3の字文			K－3　赤褐色砂層	ウ－2
18	－	体		○		3の字文			K－3　赤褐色砂層	36－2
19	－	体		○		3の字文			H・I－3　縄文下層	ウ－5
20	－	体		○		3の字文			K－3　土坑1	ウ－15
21	－	体		○		3の字文			K－3　赤褐色砂層	36－1
22	－	体		○		3の字文			K－3　赤褐色砂層	ウ－16
23	－	体		○		3の字文			H・I－3　縄文下層	ウ－9
24	－	体		○		3の字文？			K－3　赤褐色砂層	ウ－19
25	－	体		○		3の字文			J－3　縄文③	ウ－12
26	－	体		○		3の字文			K－3　赤褐色砂層	37－1
27	－	体		○		3の字文			K－3　赤褐色砂層	34－5
28	－	体		○		3の字文			H・I－3　縄文下層	ウ－22
29	－	体		○		3の字文			H・I－3　縄文下層	ウ－20
30	－	体		○		3の字文			L－3　縄文④	ウ－26

挿図番号	図版番号	部位	地文			文様		備考	出土地点	遺物番号
			縄文	条痕	その他不明	外面	内面			
31	－	体		○		3の字文			K－3　縄文④	ウ－23
32	－	体		○		3の字文			K－3　赤褐色砂層	37－5
33	－	体		○		3の字文			K－3　赤褐色砂層	ウ－17
34	－	体		○		3の字文			L－3　赤褐色砂層	ウ－29
35	－	体		○		3の字文			K－3　赤褐色砂層	35－5
36	－	体		○		3の字文			H・I－3　縄文下層	ウ－6
37	121-(1)(2)	体		○		押し引き			K－3　縄文④	ウ－13
38	－	体		○		3の字文			K－3　赤褐色砂層	36－4
39	－	体		○		3の字文			K－3　赤褐色砂層	36－6
40	－	体		○		3の字文			K－3　赤褐色砂層	35－4
41	－	体		○		3の字文			K－3　赤褐色砂層	37－2
第15図42	122-(1)	体		○		D爪帯（5条）			I－2　赤褐色砂層	11－3
43	－	口		○		押し引き			P－38　黒色土上	41－4
44	－	体		○		押し引き帯（5条＋α）			J－2　縄文④	C－13
45	122-(1)	体		○		押し引き（10条以上）			J－3　赤褐色砂層	フ－1
46	122-(1)	体		○		押し引き（10条以上）			J－3　赤褐色砂層	フ－4
47	－	体		○		押し引き帯（4条＋α）			I－2　縄文②	X－8
48	－	口			不明	刺（4条以上）			A－2　④　第5層	ネ－11
49	－	口	○			凸帯上D爪帯	縄文帯		K－3　縄文②	F－22
50	－	口	○			凸帯上D爪帯	縄文帯		K－3　縄文②	F－18
51	－	口	○			凸帯上D爪帯	縄文帯		K－3　縄文④	F－23
52	－	口	○			凸帯上C爪帯	縄文帯		K－3　縄文②	F－10
53	－	体	○			凸帯上C爪帯			K－3　縄文④	F－8
54	－	体	○			凸帯上D爪帯			K－3　縄文②	F－39
55	－	体	○			凸帯上D爪帯			K－3　縄文②	F－20
56	－	体	○			押し引き			K－3　縄文④	オ－2
57	122-(1)	体	○			D爪帯	縄文帯		K－3　縄文②	J－1
58	122-(1)	体	○			D爪帯			K－3　縄文②	J－11
59	－	体		○		押し引き			L－42	(Ⅶ)－11
第17図60	123-(1)	口		○		凸帯＋D爪			タテワ北麓	お－3
61	122-(2)	口		○		凸帯＋D爪帯（3条）			タテワ北 1T　第9層	(V)－1

挿図番号	図版番号	部位	地文			文様		備考	出土地点	遺物番号
			縄文	条痕	その他不明	外面	内面			
62	—	口		○		凸帯＋D爪帯（4条）			————	—
63	122-(2)	口		○		凸帯＋押し引き			タテワ北 2T 第8層	(V)－4
64	—	口		○		口縁部－C爪帯			タテワ北麓	う－1
65	—	底		○				丸尖底	タテワ北麓	う－1
66	122-(2)	口		○		口縁部－刻 凸帯＋C爪帯			タテワ北 1T 第9層	(V)－3
第16図 67	124-(1)(2)	体		○		C爪帯			H・I－3 縄文下層	U－10
68	—	口			不明	C爪帯			H・I－3 縄文下層	6－5
69	124-(1)(2)	体		○		C爪帯			I－3 縄文①	U－11
70	124-(1)(2)	体		○		C爪帯			H・I－3 縄文下層	U－12
71	—	体		○		C爪帯			H・I 縄文層	U－13
72	124-(1)(2)	体		○		C爪帯			H・I 縄文層	U－14
73	—	体			不明	C爪帯			H・I－3 縄文下層	6－6
74	124-(1)(2)	体	○			C爪帯			N－38	(XI)－14
75	124-(1)(2)	口		○		口唇－刻目 刺突（裏面凸）			L－3 縄文③④	ウ－38
76	124-(1)(2)	口		○		口唇－刻目 刺突（裏面凸）			K－3 縄文④	ウ－36
77	—	口			不明	口縁下にC爪 体部押し引き			F－3 赤茶縄文層	イ－7
第18図 78	—	口	○			口唇－縄文 凸帯上押し引き			L－3 赤褐色砂層	ル
79	125-(1)	体	○			凸帯＋（D爪帯）			N－38	(XI)－20
80	125-(1)	体	○			同 上			H・I－3アゼ縄文層	セ－10
81	125-(1)	飾 口	○			凸帯（隆帯）			M－41（上）	(VII)－6
82	125-(1)	体	○			凸帯を挟んで 平行沈線			K－3 縄文④	オ－ 32～37
83	125-(1)	体	○			凸帯上C爪帯			M－43 暗灰色砂層	お－1
84	—	口		○		貼付突帯			F－3 赤茶縄文	(タ)－20
85	—	口		○		凸帯＋刺突	縄文帯		K－3 縄文④	オ－14
86	—	体		○		細竹管押し引き			N－40 淡灰色砂層	(XI)－22
87	—	体	○			凸帯上－ 刻目＋平行沈線	縄文帯		K－3 縄文④	オ－25
88	—	体	○			貼付凸帯上 C爪帯			K－3 縄文④	ウ－42
89	123-(2)	口	○			口唇－向い合せ C爪帯 凸帯上C爪帯	貼付縄文帯		O－39 粗砂土	お－1
90	125-(1)	口	○			口唇－向い合せ刻目 凸帯（隆帯）	縄文帯		N－38 No.3	42－1
第19図 91	163-(4)	口	○			凸帯上押し引き	縄文帯		M－39	い－1

挿図番号	図版番号	部位	地文			文様		備考	出土地点	遺物番号
			縄文	条痕	その他不明	外面	内面			
92	126-(1)(2)	口	○			凸帯＋刺突	縄文帯		K－3　縄文④	W－1
93	126-(1)(2)	口	○			指頭圧痕　凸帯上斜線　刺突(曲)	縄文帯		I－3　縄文①	チ－1
94	126-(1)(2)	口	○			口唇部－刻 凸帯上刻目帯	縄文帯		K－3　縄文④	F－34
95	126-(1)(2)	口	○			凸帯上刻目帯 刺突（曲）	縄文帯		K－3　縄文②	F－2
96	126-(1)(2)	体	○			口－指頭圧痕＋凸帯 上斜め沈線＋ 体部－刺突	縄文帯		K－3　縄文④	オ－22
97	－	体	○			口縁部－指頭圧痕 凸帯上刻目	縄文帯		J－3　赤褐色砂層	A－21
98	－	口	○			凸帯上刻目帯 刺突	縄文帯		K－3　縄文②	F－4
99	－	体	○			凸帯上刻目帯 刺突			K－3　縄文②	F－3
100	－	口	○			口唇部－刻目 凸帯上刻目帯	縄文帯		K－3　縄文②	F－13
101	－	口		○		凸帯上刻目			H・I　縄文層	ら－60
102	－	体	○			押し引き			K－36　第6層上	43－4
103	－	口	○			口唇部－縄文 C爪押し引き			I－3　縄文①	タ－4
104	126-(1)(2)	口	○			沈線			K－32　第6層	(N)－9
105	126-(1)(2)	体	○			凸帯＋D字帯			N－38	(N)－16・17
106	－	口	○			口縁－貝圧痕 押し引き			N－38　Ⓑ	い－2
第20図107	163-(5)	口	○			口唇－向い合せ刻目 凸帯上C爪帯	縄文帯			H－27・29
108	125-(2)	口	○			同　上	同　上			H－26
109	125-(2)	口	○			同　上	同　上	把手付		H－28
110	－	体	○			凸帯上C爪帯			I－3　縄文①	U－1
111	－	体	○			凸帯上C爪帯			H・I－2　地山直上	28－3
112	－	口	○			口唇－向い合せ刻目 凸帯上C爪帯	縄文帯			H－10
113	－	体	○			凸帯上C爪帯				H－11
114	－	体	○			凸帯上C爪帯			I－3　縄文①	U－2
115	－	体	○			凸帯上C爪帯			畦畔出土	サ－1
116	－	体	○			凸帯上C爪帯				H－21
117	－	体	○			凸帯上C爪帯			I－3　縄文①	U－4
118	－	口	○			凸帯上C爪帯				H－15
119	－	体	○			凸帯上C爪帯				H－22
120	－	体	○			凸帯上C爪帯			K－54　縄文層	ソ－11
121	－	体	○			C爪帯				H－23

挿図番号	図版番号	部位	地文			文様		備考	出土地点	遺物番号
			縄文	条痕	その他不明	外面	内面			
122	—	体	○			凸帯上C爪帯				H－4
123	—	体	○			凸帯上C爪帯				H－2
124	—	口	○			口唇－刻目 凸帯上C爪帯	縄文帯			H－5
第21図 125	—	口	○			C爪帯			畦畔出土	サ－11
126	125-(2)	口	○			C爪帯				H－8
127	—	口	○			口唇部－C爪刻 凸帯上C爪帯	縄文帯		J－3　赤褐色砂層	フ－15
128	—	口	○			C爪帯				H－16
129	—	口		○		C爪帯			K－3　縄文④	U－20
130	—	口	○			口唇－C爪刻 C爪帯	縄文帯			H－9
131	—	体	○			C爪帯				H－19
132	—	体	○			C爪帯 口頸部凸帯上C爪帯			H・I－3　第5層	エ－28
133	—	体	○			凸帯上C爪帯			I－3　縄文①	U－3
134	125-(2)	体	○			C爪帯				H－1
135	—	体	○			凸帯上C爪帯			畦畔出土	サ－18
136	—	体	○			C爪帯				H－12
137	—	体	○			C爪帯				H－3
138	—	体	○			C爪帯				H－18
139	—	体	○			C爪帯				H－24
140	—	体	○			凸帯上C爪帯			I－3　縄文①	U－8
141	—	体	○			C爪帯			K－3　縄文④	U－18
142	—	体	○			C爪帯				H－25
143	—	体	○			凸帯上C爪帯			I－3　縄文①	U－7
144	—	体	○			C爪帯				H－6
145	—	体	○			C爪帯				H－17
146	—	体	○			C爪帯				H－14
147	—	体		○		C爪帯			K－3　縄文④	U－21
148	—	体		○		C爪帯			K－3　縄文④	U－17
149	—	体		○		C爪帯			K－3　縄文④	U－22
150	—	体	○			凸帯上C爪帯 （細）			J－3　赤褐色砂層	フ－36
151	—	体	○			同　上				H－13
152	125-(2)	体		○		C爪帯		円孔	K－3　縄文④	U－19

挿図番号	図版番号	部位	地文			文様		備考	出土地点	遺物番号
			縄文	条痕	その他不明	外面	内面			
153	125-(2)	体		○		C爪帯		円孔	K－3　縄文④	U－16
第23図154	127-(1)(2)	口	○			口唇部－刻目 竹管平行線	貼付縄文帯		K－3　縄文④	エ－29・44
155	－	口	○			口唇部－刻目 口縁部－沈線	縄文帯		K－3　縄文②	T－40
156	127-(1)(2)	口	○			口唇部－刻目 口縁部－沈線	縄文帯		K－3　縄文④	T－37
157	－	口	○			口唇部－刻目 口縁部－沈線	縄文帯			コ－29
158	－	口	○			口唇部－刻目 沈線二条	貼付縄文帯		C－2　黄しま縄文層	ノ－8
159	－	口	○			口唇部－刻目 口縁部－沈線	縄文帯		K－3　縄文④	T－39
160	－	口	○			口唇部－刻目 平行沈線文	縄文帯		K－3　縄文④	オ－21
161	－	口	○			口唇部－刻目 沈線二条	縄文帯		J－3　赤褐色砂層	T－26
162	127-(1)(2)	口	○			口唇部－刻目 沈線二条	貼付縄文帯	円孔	I－3　赤茶縄文層	キ－39
163	－	口	○			口唇部－C爪帯 口縁部－沈線			I－3　縄文③	T－29
164	－	口	○			口唇部－刻目 沈線二条	縄文帯		K－3　縄文②	マ－36
165	－	口	○			口唇部－刻目 沈線二条	貼付縄文帯		L－3　バイラン縄文	メ－37
166	－	口	○			沈線三条	C爪帯		J－3　縄文②	E－72
167	－	口	○			口唇部－刻目 沈線（曲）			I－2　縄文③	V－5
168	－	口	○			口唇部－刻目 口縁部－沈線	縄文帯		K－3　縄文④	T－34
169	127-(1)(2)	口	○			口唇部－刻目 凸帯上刻目＋沈線			L－34 トレンチ2　第5層	40－3
170	127-(1)(2)	口	○			口唇部－C爪 凸帯上C爪帯 押し引き波状文	貼付縄文帯		K－3　縄文④	ム－42
171	127-(1)(2)	体	○			押し引き（曲）			K－3　縄文②	メ－17
172	－	体	○			刺突（連）			L－3　黒色縄文③	T－18
173	127-(1)(2)	体	○			半截竹管押し引き			F－3　赤茶縄文層	Q－43
174	127-(1)(2)	口	○			口唇部－C爪帯 凸帯上C爪帯	縄文帯		K－3　縄文②	M－27
第22図175	128-(1)(2)	口	○			口唇部－貝圧痕	縄文帯		I－2　縄文③	ム－7
176	128-(1)(2)	口	○			口唇部－刺突 及び指頭圧痕	貼付縄文帯		H－3　赤茶縄文層	エ－23
177	－	口	○			口唇部－貝圧痕	貼付縄文帯		J－3　縄文①	ロ－1
178	－	口	○			口唇部－指頭 圧痕	貼付縄文帯		J－3　縄文①	ミ－15
179	－	口	○			口縁部に貝圧痕			K－3　縄文④	イ－2
180	128-(1)(2)	口	○			凸帯＋貝圧痕	縄文帯		B－1　白シマ縄文層	ヨ－29
181	128-(1)(2)	口		○		口縁部に貝圧痕			L－3　赤褐色砂層	イ－6
182	－	口	○			貝圧痕		焼成前穿孔	H－3　赤茶縄文層	ヨ－70

挿図番号	図版番号	部位	地文			文様		備考	出土地点	遺物番号
			縄文	条痕	その他不明	外面	内面			
183	128-(1)(2)	口		○		口縁部－貝圧痕			F－51 粗砂(4)	(Ⅱ)－19
第24図 184	129-(1)(2)	口	○			口唇部－刻目	貼付縄文帯		Ⅰ－3 赤茶縄文層	キ－1
185	129-(1)(2)	口	○			口唇部－刻目	貼付縄文帯		K－3 縄文④	エ－20
186	－	口	○			口唇部－刻目	貼付縄文帯		K－3 縄文④	エ－25
187	－	口	○			口唇部－刻目	貼付縄文帯	円刺突	K－3 縄文②	エ－17
188	－	口	○			口唇部－刻目	縄文帯		Ⅰ－3 赤茶縄文層	キ－18
189	－	口	○			口唇部－刻目			Ⅰ－3 縄文①	ア－28
190	129-(1)(2)	口	○			口唇部－刻目	貼付縄文帯		D－34 T－2 第6層	あ－7
191	－	口	○			口唇部－刻目	貼付縄文帯		H・Ⅰ－3 縄文下層	エ－24
192	－	口	○			口唇部－刻目	貼付縄文帯			ア－7
193	－	口	○			口唇部－刻目	貼付縄文帯		Ⅰ－3 赤茶縄文層	キ－52
194	－	口	○			口唇部－刻目	貼付縄文帯		K－3 縄文② L－3 縄文③	エ－13
195	－	口	○			口唇部－刻目 貼付縄文帯	貼付縄文帯		N－40 淡灰色砂層	(Ⅺ)－12
196	129-(1)(2)	口	○			口唇部－刻目	貼付縄文帯		K－3 縄文②	ス－1
197	－	口	○			口唇部－刻目	貼付縄文帯		H・Ⅰ－3 第5層	エ－22
198	－	口	○			口唇部－刻目			K－3 縄文②	マ－7
199	－	口	○			口唇部－刻目	貼付縄文帯		L－3 バイラン縄文	エ－41
200	－	口	○			口唇部－刻目	貼付縄文帯		K－3 縄文④	オ－6
201	－	口	○			口唇部—刻目	貼付縄文帯		J－2 縄文③	ア－25
202	－	口	○			口唇部—刻目	貼付縄文帯		Ⅰ－3 赤茶縄文層	キ－22
203	－	口	○			口唇部—刻目	貼付縄文帯		H・Ⅰ－3 第5層	T－28
204	－	口		○		口唇部—刻目 口縁—貼付縄文帯			K－3 縄文④	W－31
205	－	口	○			口唇部—刻目	貼付縄文帯		H・Ⅰ－3 縄文下層	エ－30
第25図 206	－	口	○				貼付縄文帯		K－3 縄文④ K－3 縄文② K－3 赤褐色砂層 J－2 L－3 赤褐色砂層 縄文④	リ
207	－	口				口唇部—縄文	貼付縄文帯		J－3 赤褐色砂層	ミ－30
208	－	口	○			口唇部—縄文	貼付縄文帯		K－3 縄文④	ミ－19
209	－	口	○				貼付縄文帯		K－3 縄文②	T－31
210	－	口	○				縄文帯		H－3 赤茶縄文層	ア－12

挿図番号	図版番号	部位	地文			文様		備考	出土地点	遺物番号
			縄文	条痕	その他不明	外面	内面			
211	—	口	○			口唇部—貝圧痕	貼付縄文帯		不明	ムーイ
212	130-(1)	口	○			口唇部—縄文	貼付縄文帯		K－3　黒色縄文②	ア－4
213	130-(1)	口	○			口唇部—縄文	貼付縄文帯		K－3　黒色縄文②	ア－5
214	130-(1)	口	○			口唇部—縄文	貼付縄文帯		K－3　縄文②	ア－3
215	130-(1)	口	○			口唇部—C字帯	貼付縄文帯		N－40　淡灰色砂層	(XI)－11
216	—	口	○			口唇部—刻目	貼付縄文帯		K－3　赤褐色砂層	ミ－11
217	—	口	○			口唇部—縄文	貼付縄文帯		K－3　縄文②	マ－24
218	—	口	○				縄文帯		D－34　2T第6層	あ－9
219	—	口	○				縄文帯		J－3　縄文③	ア－18
220	—	口	○			口唇部—縄文 C爪押し引き			I－3　縄文①	タ－5
221	—	口	○			口唇部—縄文			K－3　縄文②	ア－14
第26図 222	163-(3)	口	○			口唇部－ 指頭圧痕			不明	お－16
223	130-(2)	口	○				肥厚		H－2　赤茶縄文層	レ
224	—	口	○						J－3　縄文②	ミ－23
225	130-(3)	口	○			口唇部－縄文		焼成前穿孔	J－3　縄文②	ミ－18
226	—	口	○			口唇部—縄文			H－2　赤茶縄文層No.7	ア－11
227	130-(3)	口	○						K－2　縄文①②	ア－10
228	130-(3)	口	○			刺突			K－3　縄文④	O－1
第28図 229	131-(1)(2)	口	○			口唇部－ 指頭圧痕	貼付縄文帯		M・N－39 淡灰色砂層No.1	お－5
230	132-(1)	口		○		口唇部—刻目			I－3　縄文①	あ－6
231	132-(1)	口	○			口唇部－刻目			K－3　縄文④	O－2
232	132-(1)	口	○			口唇部—縄文			K－3　縄文④	O－4
233	—	口		○		口唇部—刻目			I－2　縄文②	W－196
234	—	口			不明	口唇部—刻目			H－3　赤茶縄文層	V－28
235	—	口		○		口唇部—刻目			I－3　縄文③	V－30
236	—	口		○		口唇部—刻目			K－3　縄文③	T－38
237	—	口	○			口唇部—刻目 口縁—貼付縄文帯			K－3　縄文④	W－185
238	—	口		○		口唇部—刻目			H－3　赤茶縄文層	ト－6
239	—	口		○		口唇部－刻目			K－44　第3層（下）	(XI)－19
240	—	口	○			口唇部—刻目			I－3　縄文③	エ－12
241	—	口		○		口唇部—刻目			H・I－3　縄文層	V－61

挿図番号	図版番号	部位	地文			文様		備考	出土地点	遺物番号
			縄文	条痕	その他不明	外面	内面			
242	—	口	○			口縁下に刺突			J－3 東壁 第4層	ア－20
243	—	口		○		口唇部—刻目			I－2 縄文②	O－17
244	—	口		○		口唇部—刻目			J－3 赤褐色砂層	フ－16
245	—	口		○		口唇部—刻目			I－3 縄文①	コ－32
246	—	口		○		口唇部－指頭圧痕			J－3 第4層	モ－31
247	—	口		○		口唇部—刻目			L－3 赤褐色砂層	V－45
第29図248	133-(1)(2)	口	○			口唇部—刻目 口縁下に貼付＋D爪帯			I－3 縄文③	ア－1
249	—	口			不明	凸帯上C爪帯＋C爪帯	C爪帯		G－3 赤茶縄文層	23－1
250	—	口	○			凸帯上C爪帯	C爪帯		K－3 縄文④	M-10
251	133-(1)(2)	口	○			凸帯上C爪帯	C爪帯		J－3 畦縄文㊥	M－3
252	133-(1)(2)	口	○			凸帯上C爪帯	C爪帯		K－3 土坑1	M－8
253	133-(1)(2)	口	○			凸帯上C爪帯	C爪帯		K－3 縄文②	M－9
254	—	口	○			凸帯上C爪帯	C爪帯		K－3 縄文③	M－4
255	—	口	○			突帯上C爪帯＋C爪帯	C爪帯		I－3 赤茶縄文層	キ－8
256	—	口	○			凸帯上C爪帯	C爪帯		K－3 縄文④	M－10
257	—	口	○			凸帯上C爪帯	C爪帯		K－3 縄文④	M－16
258	—	口	○			凸帯上C爪帯	C爪帯		J－3 縄文①	M－30
259	—	口	○			凸帯上C爪帯	C爪帯		J－3 縄文①	M－7
260	—	口	○			凸帯上C爪帯	C爪帯		K－3 縄文③	M－47
261	—	口	○			凸帯上C爪帯	C爪帯		K－3 縄文③④	M－5
262	—	口	○			凸帯上C爪帯	C爪帯		K－3 縄文③	M－25
263	—	口	○			凸帯上C爪帯	C爪帯		J－3 縄文②	M－24
264	—	口	○			凸帯上C爪帯	C爪帯		G－3 落ち込み	30－1
265	—	口	○			凸帯上C爪帯	C爪帯		I－3 縄文③	M－33
266	133-(1)(2)	口	○			C爪帯	C爪帯		畦畔出土	サ－4
267	133-(1)(2)	体	○			凸帯上C爪帯			K－3 縄文②	M－4
268	—	口		○		凸帯上C爪帯			J－3 赤褐色砂層	フ－35
269	—	口	○			凸帯上C爪帯	C爪帯		I－3 赤茶縄文層	キ－45
270	—	口	○			凸帯上C爪帯＋刺突文			J－3 縄文①	5－2
271	—	口	○			凸帯上C爪帯＋C爪帯			G－3 落ち込み	24－4

挿図番号	図版番号	部位	地文			文様		備考	出土地点	遺物番号
			縄文	条痕	その他不明	外面	内面			
272	134-(1)(2)	口	○			凸帯上C爪帯			G－3 赤茶縄文層	17－4
273	－	口	○			凸帯上C爪帯			G－2 白シマ縄文層	28－5
274	134-(1)(2)	口	○			凸帯上C爪帯＋列点文			I－3 縄文①	コ－10
275	－	口	○			凸帯上C爪帯＋半截竹管刺突文			I－3 縄文①	T－43
276	－	口	○			凸帯上C爪帯			I－3 縄文①	コ－12
277	134-(1)(2)	口	○			凸帯上C爪帯		十字凸帯	E－2 シマ下層	A－27
278	－	体		○		C爪帯			H－3 赤茶縄文層	ト－11
279	－	口	○			凸帯上C爪帯			J－3 縄文③	ら－58
280	－	口	○			凸帯上C爪帯			K－3 縄文③	M－17
281	－	口	○			口唇部一合C爪凸帯上C爪帯			I－3 縄文①	27－3
282	－	口		○		刺突＋凸帯上刻目			J－2 SK01	へ－36
283	－	体	○			凸帯上C爪帯			K－3 縄文④	M－6
284	134-(1)(2)	口	○			刺突文			G－2 赤茶縄文層	F－33
285	－	体	○			刺突文			K－3 縄文②④	F－25
286	134-(1)(2)	口	○			凸帯＋刺突文			G－2 赤茶縄文層	F－26
287	－	口	○			凸帯＋刺突文			G－2 赤茶縄文層	F－31
第30図288	135-(1)	口	○			凸帯上C爪帯	C爪帯		K－3 縄文②	M－1
289	－	口	○			C爪帯	C爪帯		畦畔出土	サ－6
290	－	口	○			凸帯上C爪帯	C爪帯		J－3 縄文②	M－22
291	－	口	○			C爪帯	C爪帯		K－3 縄文②	マ－14
292	－	口	○			凸帯上C爪帯	C爪帯		J－3 赤褐色砂層	M－21
293	－	口	○			凸帯上C爪帯	C爪帯		K－3 縄文④	M－15
294	－	口	○			凸帯上C爪帯	C爪帯		F－3 赤茶縄文層	㋕－11
295	－	口	○			C爪帯	C爪帯		K－3 縄文③	M－20
296	135-(1)	口	○			口唇部一刻目口縁下に押し引き2条	縄文帯		K－3 縄文④	ア－2
297	－	口	○			C爪帯	C爪帯		I－3 縄文一括	T－3
298	135-(1)	口	○			口唇部—C爪帯C爪押し引き帯（2条）			H－2 縄文②	O－19
299	－	口	○			口唇部—C爪帯C爪押し引き帯（2条）			I－2 縄文① E－2 シマ下層	O－3

挿図番号	図版番号	部位	地文			文様		備考	出土地点	遺物番号
			縄文	条痕	その他不明	外面	内面			
300	—	口	○			口唇部—刻目 押し引き(曲線)			K－3　縄文②	T－2
301	—	体	○			押し引きC爪帯			I－3　赤茶縄文層	キ－44
302	—	口	○			口唇部—縄文 押し引き			I－3　縄文①	コ－3
303	135-(1)	口	○			C爪帯（曲線）	C爪帯		L－3　赤褐色砂層 K－3　土坑1	T－6
304	135-(1)	口	○			C爪帯（曲線）	C爪帯		J－3　畦縄文㊥	ヨ－36
305	—	口	○			口唇部—C爪帯 C爪帯（曲線）			G－2　白シマ縄文層	32－1
306	135-(1)	体	○			C爪帯（曲線）			K－2　縄文①②	A－35
307	—	口	○			刺突文	D爪帯		H－2　赤茶縄文層	Q－20
308	135-(1)	口	○			C爪帯	C爪帯		I・J－3　縄文下層	ヨ－20
309	—	口	○			C爪帯	D爪帯		I－3　縄文③	B－10
310	—	口	○				縄文帯		H－2　赤茶縄文層	ア－13
311	—	口		○		D爪帯			N－38	40－2
第27図 312	132-(2)	体		○		曲線凸帯文			F－3　赤茶縄文層	4－1
313	132-(2)	体		○		曲線凸帯文			I－2　縄文②	G－59
314	132-(2)	体			不明	沈線（太）			H－3　古式土師層	D－27
315	132-(2)	体		○		曲線凸帯文			I－3　縄文①	モ－67
316	132-(2)	体			不明	曲線凸帯文＋ 刺突文			F－3　赤茶縄文層	ら－63
317	136-(1)	口	○			凸帯＋沈線	縄文帯		I－3　縄文①	I－4
318	136-(1)	体		○		凸帯＋沈線			K－3　縄文②	K－9
319	136-(1)	体	○			凸帯＋沈線			J－3　縄文③	K－7
320	136-(1)	体	○			凸帯＋沈線			I・J－3　縄文下層	K－10
321	136-(1)	体		○		曲線凸帯＋沈線			K－3　縄文②	マ－13
322	136-(1)	口		○		凸帯＋沈線＋ 刺突			A－2　④第5層	ネ－12
323	136-(1)	体		○		凸帯＋沈線			K－3　縄文④	オ－20
324	136-(1)	体	○			凸帯＋平行沈線			J－2　赤褐色砂層	N－33
325	136-(1)	体	○			凸帯＋沈線			J－3　縄文③	K－8
第31図 326	136-(2)	口	○			口唇部－縄文 直線＋弧線			L－3　アゼ縄文上層	シ-1～3
327	136-(2)	口	○			口唇部—縄文 直線＋弧線			F－3　シマ下層	L－14
328	136-(2)	口	○			口唇部—縄文 直線＋弧線			I・J－3　縄文下層	L－11
329	—	口	○			直線＋弧線			F－2　白シマ縄文層	ツ－2
330	—	口	○			直線＋弧線			F－2　白シマ縄文層 E－2　赤茶縄文層	L－31

挿図番号	図版番号	部位	地文			文様		備考	出土地点	遺物番号
			縄文	条痕	その他不明	外面	内面			
331	—	口	○			直線＋弧線			G－3　青縄文層	L－49
332	—	口	○			直線＋弧線			H・I－3　第3層	L－44
333	136-(2)	体	○			直線＋弧線			E－2　白シマ縄文層シマ下層	L－2
334	137-(1)	体	○			直線＋弧線			D－2　第5層②③	16－4
335	—	体	○			直線＋弧線			E－2　白シマ縄文層	L－39
336	—	体	○			直線＋弧線			F－3　赤茶縄文層	L－7
337	—	体	○			直線＋弧線			H－3　古式土師層	L－5
338	137-(1)	体	○			直線＋弧線			E－2　白シマ縄文層	28－2
339	—	体	○			直線＋弧線			J－3　縄文㊥㊦	L－41
340	—	体	○			直線＋弧線			E－2　白シマ縄文層	34－3
341	137-(1)	体	○			直線＋弧線			E－2　白シマ縄文層	30－4
342	—	体	○			直線＋弧線			不明	43－8
343	—	体	○			直線＋弧線			E－2　白シマ縄文層	34－2
344	—	体	○			直線＋弧線			E－2　白シマ縄文層	L－35
345	—	体	○			直線＋弧線			F－2　赤茶縄文層	L－45
346	137-(1)	体	○			直線＋弧線			M－40　暗灰色砂層	43－1
347	—	口	○			口唇部―縄文 直線＋弧線			H・I－2　縄文層	L－25
348	—	口	○			口唇部―刻目 直線＋弧線			I－3　縄文①	コ－28
349	—	口	○			直線	縄文帯		J－3　縄文②	L－12
350	—	口	○			口唇部―縄文 直線			H－3　赤茶縄文層	ト－4
351	—	体	○			直線			J－2　縄文②	3－2
352	—	体	○			直線			J－2　縄文②	3－1
353	—	体	○			直線			H・I－3　縄文下層	L－9
354	—	体	○			直線			G－3　青縄文層	L－38
355	—	体	○			直線			J－2　赤褐色砂層	L－48
第32図 356	137-(2)	口	○			直線＋弧線			E－2　白シマ縄文層	33－1
357	137-(2)	口	○			直線＋弧線			不明	39－4
358	—	口	○			口唇部―刻目 直線＋弧線			I－3　縄文①	L－8
359	—	口	○			弧線			I－3　赤褐色砂層	25－4
360	—	口	○			直線＋弧線			E－2　第4層	34－1
361	137-(2)	体	○			直線＋弧線			G－3　落ち込み	L－4

挿図番号	図版番号	部位	地文			文様		備考	出土地点	遺物番号
			縄文	条痕	その他不明	外面	内面			
362	137-(2)	体	○			直線＋弧線			K－3　縄文②	J－7
363	－	体	○			直線＋弧線			G－2　白シマ縄文層	27－2
364	－	体	○			直線＋弧線			E－2　白シマ縄文層	28－1
365	－	体	○			直線＋弧線			E－2　白シマ縄文層	30－6
366	－	体	○			直線＋弧線			E－2　白シマ縄文層	29－3
367	－	体	○			直線＋弧線			G－3　落ち込み	L－6
368	－	体	○			直線＋弧線			J－3　縄文層 L－3　赤褐色砂層	L－29
369	－	体	○			直線＋弧線			E－2　白シマ縄文層	27－5
370	－	体	○			直線＋弧線			E－2　白シマ縄文層	27－4
371	－	体	○			直線＋弧線			I－3　赤茶縄文層	7－2
372	－	体	○			直線＋弧線			E－2　白シマ縄文層	29－2
373	138-(1)	体	○			直線＋弧線			H－3　古式土師層	L－16
374	－	体	○			直線＋弧線			C－2　第5層	9－6
375	－	体	○			直線＋弧線			I－3　赤茶縄文層	8－2
376	－	体	○			直線＋弧線			I－3　赤茶縄文層	8－3
377	138-(1)	体	○			直線＋弧線			E－2　白シマ縄文層	L－1
第33図 378	138-(2)	口	○			口縁部－ 指頭圧痕 弧線	指頭圧痕		I－3　縄文①③	N－84
379	－	口	○			口縁部－ 指頭圧痕 弧線			H－2　縄文② I－2　縄文③ I－3　縄文①	N－83
380	－	口	○			口唇部－ 指頭圧痕 弧線			I－3　縄文③	N－85
381	－	体	○			直線＋弧線			I－3　縄文①	タ－2
382	－	体	○			直線＋弧線			I－3　縄文①	タ－3
383	－	体	○			弧線			H・I－2　縄文下層	G－44
384	－	体	○			弧線			I－3　縄文①	ウ－39
385	－	体	○			直線＋弧線			J－3　縄文㊥	N－3
386	－	体	○			弧線			K－3　縄文③	N－2
387	－	体		○		弧線			G－2　白シマ縄文層	N－5
388	－	体	○			直線			J－3　縄文㊥	K－3
389	－	体	○			弧線			J－3　赤褐色砂層	フ－5

挿図番号	図版番号	部位	地文			文様		備考	出土地点	遺物番号
			縄文	条痕	その他不明	外面	内面			
390	—	体	○			直線			J－3 赤褐色砂層	N－4
391	—	体	○			弧線			I－3 赤茶縄文層	キ－3
392	—	体	○			弧線			H・I－2 縄文下層	J－10
393	—	体	○			C爪帯（？）			K－3 縄文	T－20
394	—	体	○			弧線			I－3 縄文①	N－34
395	—	体	○			弧線			I－3 縄文①	N－43
396	—	体	○			弧線			I－3 SK01	N－9
397	—	口	○			弧線			I・J－3 縄文層	J－5
398	138-(2)	口	○			口唇部—縄文 弧線			F－3 赤茶縄文層	㋕－9
399	138-(2)	口	○			弧線			J－2 縄文③	J－2
400	—	口	○			口唇部—縄文 弧線			G－3 落ち込み	I－16
401	138-(2)	体	○			直線＋弧線			K－3 縄文④	J－3
402	138-(2)	体	○			弧線			K－3 縄文④	J－6
403	139-(1)	体	○			弧線			J－2 縄文③	J－9
404	139-(1)	体	○			直線＋弧線			K－3 縄文④	J－8
405	—	体	○			直線＋弧線			H・I－2 縄文下層	G－42
406	—	体	○			直線＋弧線			H－2 赤茶縄文層	ヨ－67
407	—	体	○			直線＋弧線			G－2 白シマ縄文層	29－4
408	139-(1)	体		○		弧線			C－2 第5層	9－2
409	—	体	○			直線			F－3 赤茶縄文層	L－52
410	—	体	○			直線＋弧線			H－2 赤茶縄文層	G－37
411	139-(1)	体	○			直線＋弧線			K－3 縄文④	J－4
412	—	体	○			直線＋弧線			L－3 赤褐色砂層	L－50
第34図 413	143-(2)	口	○			直線＋弧線			C－2 黄シマ縄文層	ナ－1
414	—	口		○		口唇部－刻目 直線＋弧線	縄文帯		I－3 縄文③	L－40
415	—	口	○			直線＋弧線			H・I－3アゼ縄文層	セ－3
416	—	口	○			直線＋弧線	縄文帯		I－3 縄文①	チ－9
417	—	口	○			直線＋弧線			I－2 縄文③	16－3
418	—	口	○			直線＋弧線			K－3 縄文④	N－76
419	—	口	○			口唇部－刻目 直線文			L－3 赤褐色砂層	L－27
420	139-(2)	飾口			不明	口唇部－刻目			L－3 バイラン縄文	ム－15

挿図番号	図版番号	部位	地文			文様		備考	出土地点	遺物番号
			縄文	条痕	その他不明	外面	内面			
421	139-(2)	口		○		口唇部－刻目 縦沈線			L－3　バイラン縄文	ム－9
422	139-(2)	口		○		口唇部－刻目 縦沈線			L－3　バイラン縄文	ム－14
423	139-(2)	口		○		口唇部－刻目 縦沈線			L－3　バイラン縄文	ム－11
424	－	口	○			縦沈線	斜沈線帯		L－3　縄文③	ム－19
425	－	口		○		口唇部－刻目 縦沈線			L－3　バイラン縄文	ム－27
426	－	口		○		縦沈線			L－3　バイラン縄文	ム－41
427	－	口	○			口縁部－刻目	縄文帯		K－3　縄文④	E－59
428	－	体	○			C爪帯（？）			F－3　赤茶縄文層	㋕－4
429	139-(2)	体		○		縦沈線			K－3　赤褐色砂層	35－1
430	139-(2)	体		○		縦沈線			K－3　赤褐色砂層	35－2
431	－	体		○		縦沈線＋凸帯			J－3　赤褐色砂層	フ－31
432	－	体		○		縦沈線			K－3　縄文②	F－1
433	－	体		○		縦沈線＋凸帯			J－3　赤茶縄文層	G－21
434	－	体		○		縦沈線			L－3　バイラン縄文	ム－30
435	－	体		○		縦沈線			K－38　第6層上	44－6
436	－	体		○		縦沈線			I－3　縄文一括	K－2
437	－	体		○		縦沈線			不明	9－4
438	－	体		○		縦沈線			K－35～38　第6層	43－7
第35図 439	140-(1)	口	○			沈線＋刺突文			F－3　シマ下層	ヨ－19
440	－	口			不明	沈線＋刺突文			F－2　赤褐色砂層	7－5
441	140-(1)	口	○			沈線＋刺突文			I－2　縄文②	I－3
442	140-(1)	体	○			沈線＋刺突文			E－3　シマ縄文	7－1
443	－	体	○			沈線＋刺突文			F－2　赤茶縄文層	Q－55
444	140-(1)	体 口	○	○		沈線＋刺突文 沈線＋刺突文			A－2　④　第5層 A－2　④　第5層	ネ－ 17・18
445	－	口	○			沈線＋凸帯			K－3　縄文③	A－8
446	－	口	○			沈線＋波状文			F－2　赤茶縄文層	Y－9
447	－	口	○			沈線＋波状文			F－2　赤茶縄文層	Y－8
448	140-(1)	体	○			沈線文			E－51　第4層	(Ⅱ)－17
449	140-(1)	体	○			沈線文			D－2　第5層②③	10－1
450	140-(1)	体	○			沈線文			K－54　縄文層	ソ－15
451	140-(1)	口	○			沈線文			K－3　縄文④	オ－12

挿図番号	図版番号	部位	地文			文様		備考	出土地点	遺物番号
			縄文	条痕	その他不明	外面	内面			
452	－	口	○			縦沈線	縦沈線		J－3　第4層	N－7
453	－	体	○			刺突文			K－3　縄文④	オ－16
454	－	口	○			口唇部－貝圧痕 口縁部－沈線文			I－3　縄文①	ら－27
第36図 455	140-(2)	口	○			沈線＋刺突文			K・L－53・54 第3層	お－10
456	140-(2)	口		○		沈線			H・I－2　縄文下層	ヨ－7
457	140-(2)	口		○		沈線＋刺突文			F－3　赤茶縄文層	㋕－18
458	140-(2)	口		○		沈線＋刺突文			A－1　白シマ縄文層	A－10
459	－	口		○		沈線＋刺突文			H・I－3　縄文下層	G－54
460	140-(2)	体		○		凸帯＋沈線文			不　明	38－5
461	140-(2)	口		○		沈線＋刺突文			G－2　白シマ縄文層	29－1
462	140-(2)	口		○		沈線＋刺突文			A－1　白シマ縄文層	Q－7
463	－	口		○		口唇部－刻目 沈線＋刺突文			F－2　白シマ縄文層	Q－14
464	－	体		○		沈線文			I－3　縄文①	コ－37
465	－	口			不　明	沈線＋刺突文			H－3　古式土師層	D－49
466	－	口		○		沈線＋刺突文			K－3　縄文②	マ－1 ・12
467	－	体		○		沈線＋刺突文			F－3　赤茶縄文層	㋕－10
468	－	体		○		沈線＋刺突文			I－3　赤茶縄文層	I－9
469	－	口		○		沈線＋刺突文			K－3　縄文④	A－13
470	－	口			不　明	口唇部－刺突文 沈線＋刺突文			J－2　縄文③	ア－24
471	－	体			不　明	沈線＋刺突文			I－3　赤茶縄文層	キ－7
472	140-(2)	体		○		沈線			K－3　縄文②	F－30
473	－	体		○		沈線			H・I－3　第5層	Y－37
474	140-(2)	口		○		沈線＋刺線＋ 波状文			A－1　白シマ縄文層	Q－26
475	141-(1)	体		○		波状文			I－2　縄文②	A－25
476	－	口		○		沈線＋波状文			F－2　白シマ縄文層	Y－3
477	－	口		○		沈線＋刺突＋ 波状文			E－2　白シマ縄文層	A－14
478	－	口		○		沈線			H－2　赤茶縄文層	Y－12
479	－	体		○		沈線			F－2　白シマ縄文層	ツ－1
480	141-(1)	口		○		沈線			G－2　白シマ縄文層	Y－35
481	141-(1)	飾　口		○		刺突文			L－3　赤褐色砂層	A－11
482	－	体		○		沈線			H－2　赤茶縄文層	Y－1

挿図番号	図版番号	部位	地文			文様		備考	出土地点	遺物番号
			縄文	条痕	その他不明	外面	内面			
483	—	口		○		沈線			L－3 縄文③	Q－19
484	141-(1)	体		○		沈線＋刺突			K－3 縄文④	F－41
485	141-(1)	体		○		沈線			C－2 黄シマ縄文層	ノ－9
486	—	体		○		沈線			I－2 バイラン縄文	Z－12
487	—	体		○		沈線			J－3 縄文㊤	ら－33
488	—	体			不明	沈線			G－2 赤茶縄文層	Y－31
489	—	口		○		沈線			F－2 赤茶縄文層	ヨ－9
490	141-(1)	体		○		沈線			H・I－3 縄文層	I－6
491	—	体		○		沈線			I－3 縄文①	タ－8
492	—	体		○		沈線			J－3 赤褐色砂層	S－4
493	—	体		○		沈線			L－3 縄文③	I－23
494	—	体		○		沈線			I－3 赤茶縄文層	I－9
495	—	体		○		沈線			J－3 縄文②	I－14
第37図 496	141-(2)	口		○		沈線（曲線）			J－3 縄文㊥	I－18
497	141-(2)	口		○		沈線（曲線）			K－2 縄文①②	I－1
498	141-(2)	口		○		沈線（曲線）			K－3 縄文④	I－2
499	—	口		○		沈線（曲線）			J－3 縄文㊥	I－19
500	—	口		○		沈線（曲線）			K－2 縄文①②	I－7
501	—	口		○		沈線（曲線）			K－2 縄文①②	I－27
502	—	口		○		沈線（曲線）			K－3 縄文④	I－15
503	—	口		○		沈線（曲線）			L－3 赤褐色砂層	I－26
504	—	口		○		沈線（曲線）			J－3 縄文②	I－5
505	—	口		○		沈線（曲線）			K－3 縄文④	I－8
506	—	体		○		沈線			C－2 黄しま縄文層	ノ－7
507	—	口		○		沈線（曲線）			F－3 シマ下層	Y－27
508	141-(2)	口		○		沈線＋刺突文	刺突文		J－3 縄文㊥	F－15
509	141-(2)	口		○		沈線＋刺突文	刺突文		K－3 縄文①②	F－24
510	141-(2)	口		○		沈線＋刺突文	刺突文		J－3 赤褐色砂層	F－38
511	—	口		○		沈線＋刺突文	刺突文		J－3 縄文層	F－11
512	—	口		○		沈線＋刺突文	刺突文		J－3 縄文㊥	F－29
513	—	口		○		沈線＋刺突文	刺突文		K－3 縄文②	F－37

挿図番号	図版番号	部位	地文			文様		備考	出土地点	遺物番号
			縄文	条痕	その他不明	外面	内面			
514	－	口	○			沈線＋刺突文	刺突文		Ⅰ－3　赤褐色砂層	24－2
515	141-(2)	口		○		縦沈線			K－2　バイラン縄文	S－10
516	141-(2)	口		○		縦沈線			K－2　バイラン縄文	カ－7
517	142-(1)	体		○		縦沈線			K－2　バイラン縄文	S－16
518	142-(1)	口		○		縦沈線			K－2　バイラン縄文	S－11
519	142-(1)	口		○		縦沈線			J－3　縄文①	S－5
520	142-(1)	口		○		縦沈線			K－2　縄文①②	S－1
521	－	体		○		縦沈線			Ⅰ－2　縄文①	S－14
522	－	体		○		縦沈線			Ⅰ－3　縄文①	S－15
523	－	口		○		縦沈線			E－2　白シマ縄文層	17－3
524	－	口		○		縦沈線			E－2　白シマ縄文層	17－2
525	－	口		○		縦沈線			湖畔出土	サ－17
526	－	口		○		縦沈線			Ⅰ・J－3　縄文③	S－20
527	－	体		○		縦沈線			L－3　赤褐色砂層	S－24
528	－	口		○		縦沈線			K－3　縄文②	マ－55
529	－	口		○		縦沈線			K－3　縄文③	S－7
第38図 530	142-(2)	口		○		口唇部－刻目 縦沈線			L－3　バイラン縄文	S－13
531	－	口		○		口唇部－刻目 縦沈線			L－3　バイラン縄文	S－18
532	－	口		○		口唇部－刻目 縦沈線			L－3　バイラン縄文	S－12
533	－	口		○		縦沈線	縦沈線		J－3　赤褐色砂層	フ－9
534	－	体		○		縦沈線＋凸帯			J－3　縄文②	A－23
535	－	体		○		縦沈線			L－3　バイラン縄文	S－17
536	142-(2)	口		○		口唇部－刻目 縦沈線			K－3　縄文③	S－3
537	－	口		○		口唇部－刻目 縦沈線			K－3　縄文③	S－19
538	－	口		○		縦沈線			H－3　赤茶縄文層	ト－1
539	－	体		○		縦沈線			H・Ⅰ－3　第5層	S－25
540	－	口		○		縦沈線			C－2　黄シマ縄文層	ノ－4
541	－	体		○		縦沈線			K－2　バイラン縄文	S－23
542	－	体		○		縦沈線			K－3　縄文④	S－21
543	－	体		○		縦沈線			J－3　縄文②	Y－24
544	142-(2)	口		○		口唇部－刻目 沈線			N－46	(W)－12

挿図番号	図版番号	部位	地文			文様		備考	出土地点	遺物番号
			縄文	条痕	その他不明	外面	内面			
545	142-(2)	口		○		沈線			K－3 縄文③	W－5
546	142-(2)	体		○		沈線			G－2 白シマ縄文層	R－61
547	－	体		○		沈線			I－2 縄文②	Q－16
548	142-(2)	口		○		口唇部－沈線 沈線		口縁部大形の刻目	I－3 縄文③	O－7
549	－	体		○		沈線			L－3 赤褐色砂層	ユ－17
550	－	体		○		沈線＋凸帯			G－2 白シマ縄文層	Y－7
551	－	口		○		沈線			H・I－2 縄文層	ヨ－8
552	－	口		○		沈線			I－3 縄文①	コ－1
553	－	体		○		刺突文		焼成前穿孔	I－2 縄文①	Y－18
554	－	体		○		刺突文			B－1 白シマ縄文層	Y－34
第39図555	143-(1)	口	無節○			凸帯＋波状文				ホ-1・2
556	－	口	無節○			凸帯＋波状文			I－2 縄文③	16－2
557	－	口	無節○			凸帯＋波状文			J－3 縄文④	ム－6
558	－	体	無節○			凸帯＋沈線＋波状文			K列トレンチ	18－6
559	－	体			○	凸帯＋波状文			J－3 縄文④	ム－2
560	－	体	無節○			波状文			J－3 縄文②	ム－4
561	－	体	○			波状文（7条以上）			G－3 落ち込み	ム－40
562	－	体	無節○			波状文			K－3 縄文②	ム－1
563	144-(1)	口		○		凸帯＋沈線			H－2 赤茶縄文層	あ－5
564	144-(1)	口		○		沈線＋刺突文			E－2 白シマ縄文層	あ－8
第40図565	144-(2)	口	○			口唇部－刻目 刺突文列			ヤケヤマ集石	あ－18
566	144-(2)	口		○		刺突文			B－2 古式土師層	19－4
567	－	体		?		刺突文			B－2 黄シマ縄文層	A－7
568	144-(2)	口	○			波状文			L－3 縄文③	11－4
569	－	体	○			スタンプ			G－30 第5層（下）	44－9
570	－	口	○			波状文			L－3 縄文㊤	P-132
571	－	口		○		口縁－縄文帯 凸帯上－圧痕			J－3 縄文㊥	ヨ－35
572	－	口	○			口唇部－刻目 押し引き（曲線）			H・I－2 縄文下層	エ－3
573	－	口	○			押し引き（曲線文）			N－39 黒褐色上層	お－23
574	－	口		○		縦沈線			E－2 シマ下層	ヨ－27

挿図番号	図版番号	部位	地文			文様		備考	出土地点	遺物番号
			縄文	条痕	その他不明	外面	内面			
575	144-(2)	体	○			円形圧痕			M－48(1)	(Ⅵ)－17
576	144-(2)	口	○			円形圧痕			A－1　第3層	(Ⅰ)－4
577	－	体	○			円形圧痕			A－1　第3層③	(Ⅱ)－3
578	－	体	○			円形圧痕			A－1　第3層③	(Ⅲ)－29
579	－	体	○			円形圧痕			A－1　第3層③	(Ⅲ)－13
580	－	体	○			円形圧痕			A－1　第5層③	(Ⅲ)－12
581	－	体	○			円形圧痕			A－1　第3層	(Ⅰ)－5
582	－	体	○			円形圧痕			A－1　第3層③	(Ⅲ)－21
583	144-(2)	体		○		刺突文			J－3　縄文②	Q－29
584	144-(2)	体	○			刺突文			L－3　縄文③	P-126
585	144-(2)	体	○			刺突文			L－3　縄文③	F－5
586	－	体	○			刺突文			K－3　縄文④	U－30
587	－	体	○			刺突文			K－3　縄文④	U－34
588	－	体	○			凸帯上D爪帯			K－3　縄文②	F－19
第41図 589	145-(1)	口	○			爪形文	縄文帯		H－3　赤茶縄文層	ヨ－42
590	145-(1)	口	○			爪形文	縄文帯		H－3　赤茶縄文層	ヨ－38
591	146-(1)	口	○			刺突－押し引き			I－3　縄文一括	イ－14
592	146-(1)	口	○			刺突－押し引き			H・I－3 第5層縄文層	イ－11
593	146-(1)	口	○			刺突－押し引き			I－2　赤褐色砂層	12－1
594	－	口	○			刺突－押し引き			I－3　縄文③	イ－12
595	－	口	○			刺突－押し引き			H・I－2　縄文下層	イ－13
596	－	口	○			刺突－押し引き			K－3　縄文②	イ－18
597	－	体	○			刺突－押し引き			L－3　縄文③	F－36
598	－	口	○			刺突－押し引き			L－3　縄文④	P-138
599	－	口	○			刺突－押し引き			I－3　縄文③	イ－20
600	－	口		○		C爪帯			I－3　赤褐色砂層	26－3
600	－	口		○		刺突－押し引き			I－3　赤褐色砂層	26－3
601	－	口	○			刺突－押し引き			K－3　縄文②	イ－8
602	－	体	○			刺突－押し引き			I－3　縄文③	T－25
603	－	口	○			刺突－押し引き			E－2　シマ下層	イ－16
604	－	口	○			刺突文			K－3　縄文③④	イ－17

挿図番号	図版番号	部位	地文			文様		備考	出土地点	遺物番号
			縄文	条痕	その他不明	外面	内面			
605	—	口	○			刺突文			D－2　黄シマ縄文層	Q－54
606	—	口	○			刺突文			K－3　縄文④	イ－22
607	—	口		○		刺突文			G－3　落ち込み	30－5
608	—	口			○	刺突文			K－3　土壙1	イ－21
609	—	口				○	刺突文			イ－23
610	146-(2)	口		○		沈線			N－43第2層下面一括	え－1
611	146-(2)	口		○		沈線			N－43第2層下面一括	え－3
612	146-(2)	口		○		沈線			N－43第2層下面一括	え－2
第42図 613	145-(2)	体		○		凸帯上刻目＋沈線			I－3　縄文③	B－1
614	145-(2)	体		○		凸帯上刻目＋沈線			I－3　縄文③	B－6
615	145-(2)	体		○		凸帯上刻目＋沈線			I－3　縄文③	B－5
616	145-(2)	体		○		凸帯上刻目＋沈線			I－3　縄文③	B－8
617	147-(1)(2)	底			○			多孔底	E－51　(3)	お－5
618	147-(1)(2)	底			○			多孔底	N－48　①	お－4
619	147-(1)(2)	底			○			多孔底	A－2　黄シマ縄文層	お－12
620	147-(1)(2)	底			○			多孔底	L－3　アゼ縄文上層	シ－5
621	147-(1)(2)	底			○			多孔底	L－52～54　第3層	お－31
622	—	底			○			多孔底	A－2　④　第5層	ネ－4
623	—	底			○			多孔底	L－3　アゼ縄文上層	シ－4
第43図 624	148-(1)	口		○		磨消縄文（貝）			G－2　赤茶縄文層	ヨ－66
625	—	口		○		磨消縄文			L－3　バイラン縄文	R－30
626	—	口		○		磨消縄文			J－3　縄文②	P－106
627	—	口		○		磨消縄文			I－3　縄文③	D－7
628	—	口		○		磨消縄文			K－3　縄文②	D－52
629	—	口		○		磨消縄文			K－3　縄文②	ス－18
630	—	口		○		磨消縄文			I－3　赤茶縄文層	キ－26
631	—	口		○		磨消縄文			K－2　バイラン縄文	カ－2
632	—	口		○		磨消縄文			K－54　縄文層	ソ－16
633	—	口		○		磨消縄文（貝）			K－3　縄文③	D－8
634	—	口		○		磨消縄文			K－3　縄文②	R－15
635	—	口		○		磨消縄文			K－3　縄文②	マ－38

挿図番号	図版番号	部位	地文			文様		備考	出土地点	遺物番号
			縄文	条痕	その他不明	外面	内面			
636	—	口				磨消縄文（貝）			Ⅰ－3　縄文①	タ－11
637	—	口		○		磨消縄文			K－3　縄文②	ス－2
638	—	口		○		磨消縄文			J－3　縄文①	G－83
639	—	口		○		磨消縄文			J－3　縄文㊦	V－53
640	—	口		○		磨消縄文			E－2　シマ下層	ユ－41
641	—	口		○		磨消縄文			H・Ⅰ－3アゼ縄文層	セ－6
642	148-(1)	口		○		磨消縄文		焼成前穿孔	K－3　縄文②	マ－33 52
643	—	口		○		磨消縄文			G－51　粗砂最下　(4)	(Ⅵ)－23
644	148-(1)	口		○		磨消縄文（貝）			E－3　シマ縄文	6－1
645	148-(1)	口		○		磨消縄文			A－2　東T　第5層	19－1
646	—	口		○		磨消縄文			Ⅰ－3　縄文①	お－2
647	148-(1)	口		○		磨消縄文			K－3　縄文④	D－6
648	148-(1)	口		○		磨消縄文			Ⅰ－3　縄文①	21－2
649	—	口		○		磨消縄文			K－3　縄文③	P－148
650	149-(1)	口		○		磨消縄文			L－50　灰色砂層	19－2
651	149-(1)	口		○		磨消縄文			M－39　暗灰色砂層	(Ⅻ)－18
652	—	口		○		磨消縄文			K－3　縄文①	ウ－57
653	149-(1)	口		○		磨消縄文			M－50　灰色砂層	あ－13
654	—	体		○		磨消縄文			J－2　縄文②	13－4
655	—	口		○		磨消縄文			J－3　第4層	エ－6
656	149-(1)	口		○		磨消縄文			J－3　古式土師層（黒色層）	お－22
657	—	口		○		磨消縄文			K－3　古式土師層	9－5
658	—	口		○		磨消縄文			C－2　黄シマ縄文層	ノ－6
659	149-(1)	口		○		磨消縄文			J－2　縄文②	13－1
第44図660	—	口		○		磨消縄文			Ⅰ－40　第6層	41－1
661	—	飾口		○		磨消縄文			J－3　縄文上層	Q－62
662	—	口		○		磨消縄文			J－33　第6層	(X)－28
663	149-(2)	体		○		磨消縄文			G－2　赤茶縄文層	ユ－20
664	—	口		○		磨消縄文			J－3　縄文①	3－5
665	—	口		○		磨消縄文（貝）			C－2　黄しま縄文層	ナ－4
666	—	体		○		磨消縄文			K－3　古式土師層	17－6

挿図番号	図版番号	部位	地文			文様		備考	出土地点	遺物番号
			縄文	条痕	その他不明	外面	内面			
667	—	口		○		磨消縄文			Ⅰ－3　縄文一括	Ⅴ－20
668	149-(2)	口		○		磨消縄文			Ｆ－3　赤茶縄文層	㋕－1
669	149-(2)	口		○		磨消縄文			Ａ－1　白シマ縄文層	Ｙ－17
670	149-(2)	口		○		磨消縄文			Ｊ－3　縄文①	Ｙ－20
671	149-(2)	口		○		磨消縄文			Ｍ－48　①	(Ⅲ)－23
672	—	口		○		口唇部－縄文＋刻目 磨消縄文			Ｋ－3　縄文③	Ａ－4
673	—	口		○		磨消縄文			Ⅰ－2　バイラン縄文	Ｃ-131
674	149-(2)	口		○		磨消縄文			Ｅ－2　白シマ縄文層	21－1
675	—	口		○		磨消縄文			Ｋ－3　縄文①	Ｐ－144
676	—	口		○		磨消縄文			Ｌ－3　赤褐色砂層	Ａ－20
677	150-(1)	口		○		磨消縄文			Ｄ－1　第5層	8－6
678	150-(1)	口		○		磨消縄文			集石遺構　そのⅡ	ケ－1
679	—	体		○		磨消縄文			Ｊ－3　縄文　㊥	Ｑ－46
680	—	口		○		磨消縄文			Ｊ－3　縄文　㊦	Ｐ－119
681	—	口		○		磨消縄文（貝）			Ｇ－51　第4層　(1)	(Ⅲ)－18
682	—	口		○		磨消縄文			Ｊ－3　赤褐色砂層	フ－2
683	150-(1)	口		○		磨消縄文			Ｋ－3　縄文①	Ｔ－44
684	—	口		○		磨消縄文			Ｌ－3　縄文③	ら－39
685	150-(1)	口		○		磨消縄文			Ⅰ－3　縄文③	Ｂ－7
686	150-(1)	口		○		磨消縄文			Ｋ－3　縄文③	Ｗ－3 174・206
687	—	口		○		磨消縄文（貝）			Ⅰ－3　赤茶縄文層	キ－10
688	150-(1)	口		○		磨消縄文			Ⅰ－3　縄文③	Ｂ－11
689	150-(1)	口		○		磨消縄文			Ｂ－1　白シマ縄文層	ユ－4
690	—	口		○		磨消縄文			Ｇ－2　赤茶縄文層	ユ－1
691	—	口		○		磨消縄文（貝）			Ⅰ－3　縄文①	タ－9
第45図 692	150-(2)	口		○		磨消縄文			Ｆ－3　シマ下層	Ｑ－15
693	150-(2)	口		○		磨消縄文			Ｋ－3　縄文③	Ｄ－1
694	—	口		○		磨消縄文			Ｋ－3　縄文①	Ｔ－33
695	—	口		○		磨消縄文			Ｋ－3　縄文④	Ｄ－29
696	—	体		○		磨消縄文			Ｋ－3　縄文③	Ｐ－113
697	—	体		○		磨消縄文			Ｋ－3　縄文①	Ｐ－158

挿図番号	図版番号	部位	地文			文様		備考	出土地点	遺物番号
			縄文	条痕	その他不明	外面	内面			
698	150-(2)	体		○		磨消縄文			H－3　古式土師層	Q－67
699	－	口		○		口唇部－刻目 磨消縄文			畦畔出土	サ－14
700	150-(2)	口		○		口唇部－刻目 磨消縄文			F－2　赤茶縄文層	ヨ－2
701	－	口		○		磨消縄文			H・I－2　縄文層 G－2　赤茶縄文層	P－140
702	150-(2)	口		○		磨消縄文			G－2　白シマ縄文層	33－2
703	150-(2)	口		○		磨消縄文			K－3　縄文④	D－39
704	－	口		○		磨消縄文			F－51　粗砂	(Ⅱ)－12
705	－	口		○		磨消縄文			J－3　縄文③	D－12
706	150-(2)	口		○		磨消縄文			J－2　SK01	ヘ－15 23・55
707	151-(1)	体		○		磨消縄文			G－2　白シマ縄文層	ユ－12
708	151-(1)	口		○		磨消縄文			K－3　縄文②	C－72
709	－	口		○		磨消縄文（貝）			E－51　第4層	(Ⅲ)－2
710	151-(1)	口		○		磨消縄文			K－3　縄文①	D－5
711	151-(1)	口		○		磨消縄文			J－3　縄文③	D－4
712	151-(1)	口		○		磨消縄文			K－3　縄文④	オ－5
713	151-(1)	口		○		磨消縄文			K－3　縄文④	オ－1
714	151-(1)	口		○		磨消縄文			A－1　白シマ縄文層	Y－25
715	－	口	○			磨消縄文			C－2　黄シマ縄文層	ナ－6
716	－	口		○		磨消縄文			J－3　赤褐色砂層	P－152
717	151-(1)	口		○		口底部－刻目 磨消縄文			L－50　縄文包含層	お－25
718	－	口		○		磨消縄文			L－50　灰色砂層	18－5
719	151-(1)	口		○		口唇部－刻目 磨消縄文			M－48	(Ⅱ)－9
第46図 720	151-(2)	口		○		磨消縄文			L－50　灰色砂層	20－1
721	－	口		○		磨消縄文			M－49　第2層（耕）	お－26
722	151-(2)	口		○		磨消縄文			J－3　縄文③	Q－10
723	151-(2)	口		○		磨消縄文			C－51　(2)	(Ⅳ)－10
724	－	口		○		磨消縄文			C－51　(2)	(Ⅱ)－8
725	－	口		○		磨消縄文			不明	5－5
726	－	口		○		磨消縄文			J－3　縄文②	G－22
727	－	口		○		磨消縄文			K－3　縄文④	C－15
728	－	口		○		磨消縄文			E－3　シマ縄文	5－6

挿図番号	図版番号	部位	地文			文様		備考	出土地点	遺物番号
			縄文	条痕	その他不明	外面	内面			
729	—	口		○		磨消縄文			Ⅰ－2　縄文①	P－114
730	—	口		○		磨消縄文			G－2　赤茶縄文層	ヨ－3
731	—	口		○		磨消縄文（貝）			Ⅰ－3　縄文①	21－4
732	—	口		○		磨消縄文			J－2　縄文④	C－3
733	151-(2)	口		○		磨消縄文			Ⅰ・J－3　縄文層	C－12
734	151-(2)	口		○		磨消縄文			K－2　縄文①②	C－26
735	—	体		○		磨消縄文			K－3　縄文③	D－51
736	—	体		○		磨消縄文			L－3　縄文③	A－5
737	—	口		○		磨消縄文			K－2　バイラン縄文	E－24
738	—	口		○		磨消縄文			H・Ⅰ－3　縄文下層	P－101
739	151-(2)	口		○		磨消縄文			J－2　バイラン縄文	18－1
740	—	口		○		磨消縄文			G－3　青縄文層	ヨ－26
741	—	口		○		磨消縄文			H－3　赤茶縄文層	P－116
第47図 742	152-(1)	口		○		磨消縄文			M－48	(Ⅱ)－18
743	152-(1)	口		○		磨消縄文			K－33　第6層	(Ⅺ)－1
744	152-(2)	口		○		磨消縄文（貝）			K－2　バイラン縄文	カ－1
745	152-(2)	口		○		磨消縄文			F－2　白シマ縄文層	ク－1
746	152-(1)	口		○		磨消縄文			Ⅰ－2　縄文②	Q－22
747	152-(1)	口		○		磨消縄文			Ⅰ－2　縄文①	ヨ－5
748	—	口		○		磨消縄文			J－2　縄文②	2－6
749	—	口		○		磨消縄文			H・Ⅰ－3　縄文層	D－20
750	152-(1)	口		○		磨消縄文			Ⅰ－2　バイラン縄文	ヨ－1
751	—	口		○		磨消縄文			Ⅰ－3　赤茶縄文層	キ－53
752	—	口		○		磨消縄文			J－3　縄文③	D－17
753	—	口		○		磨消縄文			J－3　縄文①	G－23
754	152-(1)	口		○		磨消縄文			K－3　縄文④	D－38
755	—	口		○		磨消縄文			Ⅰ－2　縄文③	C－56
756	153-(1)	体		○		磨消縄文（貝）			H・Ⅰ　縄文層	Q－9
757	153-(1)	口		○		磨消縄文			K－3　縄文③	D－44
758	153-(1)	口		○		磨消縄文			K－3　縄文③	D－47
759	153-(1)	口		○		磨消縄文			Ⅰ－3　縄文③	B－2

挿図番号	図版番号	部位	地文			文様		備考	出土地点	遺物番号
			縄文	条痕	その他不明	外面	内面			
第48図 760	153-(2)	口		○		磨消縄文			F－3 縄文層	12－2
761	153-(2)	口		○		磨消縄文			J－2 縄文②	15－2
762	153-(2)	口		○		磨消縄文（貝）			H・I畦内縄文包含層	イ－37
763	153-(2)	体		○		磨消縄文			I－3 縄文①	タ－1
764	153-(2)	口		○		磨消縄文			G－51 第4層 (1)	(Ⅱ)－16
765	155-(1)	飾 口		○		磨消縄文			K－54 縄文層	ソ－1
766	－	口		○		磨消縄文			A－1 東トレ第5層	31－3
767	－	口		○		磨消縄文			E－51(4) 粗砂最下層	(Ⅵ)－1
768	－	口		○		磨消縄文（貝）			集石遺構 そのⅡ	ケ－3
769	－	口		○		磨消縄文			F－2 シマ下層	ユ－8
770	－	口		○		磨消縄文			F－3 赤茶縄文層	㋕－3
771	153-(2)	体		○		磨消縄文			G－51 粗砂	(Ⅲ)－25
772	154-(1)	口		○		磨消縄文			P－38 黒色土上	38－2
773	154-(1)	体		○		磨消縄文			M－48	(Ⅲ)－24
774	154-(1)	口		○		磨消縄文（貝）			L－3 アゼ縄文上層	シ－6
775	154-(1)	体		○		磨消縄文			K－3 土壙1	P－111
776	－	口		○		磨消縄文			P－38 黒色土上	40－4
777	154-(1)	口		○		口唇部－刻目 磨消縄文			F－3 赤茶縄文層	㋕－8
778	154-(1)	口		○		口唇部－刻目 磨消縄文			J－3 縄文②	Q－41
779	154-(1)	口		○		磨消縄文			H・I 縄文層	C－4
780	－	口		○		磨消縄文			H－3 赤茶縄文層	ト－5
781	154-(1)	口		○		磨消縄文			E－3 シマ縄文層	7－6
782	154-(1)	体		○		磨消縄文			A－2④ 第5層	ネ－6
783	－	口		○		磨消縄文			N－43 第2層下面	40－1
784	－	口		○		磨消縄文			L－3 縄文上層	18－2
785	－	口		○		磨消縄文			F－3 赤茶縄文層	4－2
第49図 786	154-(2)	飾 口				磨消縄文			N－44 第2・3層	(Ⅺ)－10
787	154-(2)	口		○		磨消縄文			L－3 縄文③	ヨ－63
788	－	口		○		磨消縄文			D－2 黄シマ縄文層	8－5
789	－	口		○		磨消縄文			M－49	あ－14
790	－	口		○		磨消縄文			I－3 縄文①	タ－10

挿図番号	図版番号	部位	地文			文様		備考	出土地点	遺物番号
			縄文	条痕	その他不明	外面	内面			
791	—	口		○		磨消縄文			J－3　縄文③	D－11
792	—	口		○		磨消縄文			K－3　縄文②	ス－4
793	—	口		○		磨消縄文			M－49	あ－16
794	—	口		○		磨消縄文			J－3　赤褐色砂層	Y－13
795	154-(2)	口		○		磨消縄文			H・I－3　縄文下層	B－17
796	154-(2)	口		○		磨消縄文			I－2　バイラン縄文	31－1
797	—	口		○		磨消縄文			M－49	あ－17
798	—	口		○		磨消縄文			N－48①	あ－12
799	—	口		○		磨消縄文			M－49	あ－15
800	—	口		○		磨消縄文			N－48①	あ－11
801	154-(2)	体		○		磨消縄文			K－3　縄文②	K－1
802	154-(2)	飾　口		○		磨消縄文			M－48	(Ⅷ)－2
803	154-(2)	口		○		磨消縄文			J－2　縄文①	11－1
804	—	口		○		磨消縄文			K－3　古式土師層	9－1
805	—	口		○		磨消縄文			I－2　縄文①	G－24
806	—	口		○		磨消縄文			J－3　縄文②	B－12
807	—	口		○		口唇部－沈線2条			N－46	(Ⅲ)－26
808	—	口		○		磨消縄文			N－46	(Ⅱ)－2
809	—	口		○		口唇部－縄文			M－48①	(Ⅱ)－20
810	—	口		○		磨消縄文			K－3黒色古式土師層	お－8
811	—	口		○		———			H－3　赤茶縄文層	お－17
812	—	口		○		磨消縄文			J－3　赤褐色砂層	ヨ－52
第50図 813	155-(2)	口		○		磨消縄文			E－51　粗砂土(2)	(1)－1
814	155-(2)	口		○		磨消縄文			D－51　青灰色砂層(1)	(Ⅲ)－32
815	—	口		○		磨消縄文			F－42　第8層	お－4
816	—	口		○		———			N－47	お－19
817	—	口		○		磨消縄文			M－48	あ－10
818	—	口		○		磨消縄文			M－48・49	41－3
819	—	口		○		磨消縄文			E－51(2)　粗砂土	(Ⅲ)－1
820	—	口		○		磨消縄文			E－44　第8層	お－6
821	157-(1)(2)	口		○		磨消縄文			N－48	(V)－5

挿図番号	図版番号	部位	地文			文様		備考	出土地点	遺物番号
			縄文	条痕	その他不明	外面	内面			
822	—	口			不明	磨消縄文			A－0　縄文層	ら－7
823	—	口		○		磨消縄文			E－51　第4層	(Ⅲ)－17
824	—	口		○		磨消縄文			M－48	(Ⅲ)－22
第51図 825	—	口		○		磨消縄文			M－47・48	(Ⅲ)－33
826	—	口		○		磨消縄文			F－23　第3層	お－14
827	—	体		○		磨消縄文			F－51　第3層	17－1
828	158-(1)	飾　口		○		磨消縄文			J－3　縄文㊤	ヨ－68
829	158-(1)	飾　口		○		磨消縄文			K－3　縄文②	ヨ－69
830	—	飾　口		○		磨消縄文			I－2　縄文②	ヨ－76
831	—	飾　口		○		磨消縄文			J－3　縄文㊥	ヨ－47
832	158-(1)	口		○		磨消縄文			I－2　縄文②	ヨ－44
833	—	口		○		磨消縄文			A－0　縄文層	ヨ－71
834	—	飾　口		○		磨消縄文			M－47①	(Ⅱ)－11
835	158-(1)	飾　口	○			————			A－2　黄シマ縄文層	お－18
836	—	飾　口		○		磨消縄文？			L－3　縄文③ H－2　縄文②	G－39
837	158-(1)	飾　口	○			磨消縄文			A－1　縄文層	お－24
838	—	飾　口		○		磨消縄文？			H－2　赤茶縄文層	ヨ－81
839	—	飾　口		○		磨消縄文			H・I－3　アゼ縄文層	セ－5
840	158-(1)	飾　口		○		磨消縄文			I－3　縄文層	お－20
841	158-(1)	飾　口		○		磨消縄文			K－3　縄文③	D－21
842	158-(1)	飾　口		○		————			N－48①	お－3
843	158-(1)	飾　口		○		————		不明		お－27
第52図 844	—	口		○		磨消縄文			M－49　(縄文含)	お－15
845	—	口 (釣手)		○		磨消縄文			J－2　縄文①	イ－3
846	158-(2)	口		○		磨消縄文？			M－49　(縄含)	お－29
847	—	飾　口		○		磨消縄文？			I－3　縄文①	ヨ－78
848	158-(2)	口		○		円形刺突文			N－49　包含層	お－21
849	158-(2)	口		○		磨消縄文			I－3　縄文③	イ－1
850	160-(1)	口		○		磨消縄文			不明	お－28
851	—	口		○		磨消縄文			A－0　縄文層	ヨ－62
852	—	口		○		磨消縄文			A－1　縄文層	お－7

挿図番号	図版番号	部位	地文			文様		備考	出土地点	遺物番号
			縄文	条痕	その他不明	外面	内面			
853	160-(2)	口		○		磨消縄文			D－2　第5層	ヨ－79
854	－	飾　口		○		磨消縄文			Ⅰ－2　バイラン縄文	ヨ－80
第53図 855	160-(3)	口		○		磨消縄文			G－2　白シマ縄文層	26－4
856	160-(3)	口		○		磨消縄文			Ⅰ－3　縄文①	24－1
857	160-(3)	口		○		磨消縄文			E－51(1)	(Ⅱ)－14
858	－	口		○		磨消縄文			M－48	(Ⅱ)－15
859	－	口		○		磨消縄文			M－47	(Ⅲ)－3
860	－	口		○		磨消縄文			F－51　第4層	(Ⅳ)－3
861	160-(3)	口		○		磨消縄文			畦畔出土	サ－2・3
862	160-(3)	口		○		磨消縄文			L－3　縄文③	ユ－7
863	－	体		○		磨消縄文			H・Ⅰ－3　縄文層	C－29
864	－	体		○		磨消縄文			A－2　黄シマ縄文層	ヨ－64
865	－	体		○		磨消縄文			不明	25－1
866	－	口		○		磨消縄文			A－0　縄文層	ユ－23
867	－	体		○		磨消縄文			L－3　縄文④	D－13
868	－	体		○		磨消縄文			M－48	(Ⅲ)－4
869	－	体		○		磨消縄文			E－51(1)	(Ⅲ)－31
第54図 870	159-(1)	口		○		沈線			J－2　SK01	ヘ-4・25・28
871	－	口		○		沈線			J－3　赤褐色砂層	G－1 ヘ－10・41
872	－	口		○		沈線			J－2　SK01	ヘ－18
873	－	口		○		沈線			J－2　SK01	ヘ-8・12・52
874	－	口		○		沈線			J－3　赤褐色砂層	B－3 ヘ－29
875	－	口		○		沈線			J－2　SK01	ヘ－32～2
876	－	口		○		沈線			J－2　SK01	ヘ－9.16･19･32～1
877	－	口		○		沈線			J－2　SK01	ヘ－3
第55図 878	161-(1)	口		○		口唇－刺突文 沈線			K－3　縄文④	W－40
879	－	口		○		沈線			H・Ⅰ－2　縄文層	P-136
880	－	口		○		沈線			H－3　赤茶縄文層	G－2
881	－	口		○		沈線			Ⅰ－2　バイラン縄文	Q－1

挿図番号	図版番号	部位	地文			文様		備考	出土地点	遺物番号
			縄文	条痕	その他不明	外面	内面			
882	—	口		○		沈線			Ⅰ－2　縄文②	Q－59
883	—	口		○		沈線			K－3　縄文②	マ－4
884	—	口			不明	沈線			Ⅰ－2　バイラン縄文	Q－4
885	159-(2)	口		○		沈線			K－3　縄文③	C－1
886	—	口		○		沈線			E－2　シマ下層	E－32
887	161-(1)	体		○		沈線			K－3　縄文③	C－10
888	—	口			不明	沈線			K－3　縄文④	W－8
889	159-(2)	口		○		沈㊦(磨)			B－1　白シマ縄文層	ヨ－4
890	—	口		○		沈線			F－51　粗砂最下5	(Ⅱ)－1
891	—	口		○		沈線			F－2　白シマ縄文層	C－54
892	—	体		○		沈㊦(磨)			K－3　縄文③	E－34
893	—	口		○		沈線			Ⅰ－3　縄文一括	B－28
894	—	体		○		沈線			H・Ⅰ－2　縄文層	Q－64
895	—	口		○		沈線			J－2　赤褐色砂層	E－50
896	—	体		○		沈線			K－3　縄文②	R－2
第56図897	159-(3)	口		○		沈線			F－2　シマ下層	23－2
898	159-(3)	口		○		沈線			F－3　SK01	ヒ－4
899	—	口		○		沈線			J－2　縄文②	15－1
900	—	口		○		沈線			L－3　縄文④	ユ－9
901	—	口		○		沈線			H－2　白シマ縄文層	Q－8
902	—	口		○		口唇部－指頭圧痕沈線			L－3　縄文④	Z－6
903	—	口			不明	沈線			K－3　縄文④	E－48
904	—	口		○		沈線			J－3　縄文③	Q－51
905	—	口		○		沈線			H・Ⅰ－2　縄文下層	C－32
906	—	口		○		沈線			Ⅰ－2　縄文①	T－45
907	161-(2)	口		○		沈㊦(磨)			Ⅰ－2　縄文①	Q－49
908	—	体		○		沈線			Ⅰ－3　縄文①	コ－11
909	161-(2)	口		○		沈線			Ⅰ・J－3　縄文下層	Q－5
910	—	口		○		沈線			畦畔出土	サ－13
911	—	口	○			沈線			K－3　縄文④	O－6
912	—	口		○		沈線			Ⅰ－3　縄文③	B－8

挿図番号	図版番号	部位	地文			文様		備考	出土地点	遺物番号
			縄文	条痕	その他不明	外面	内面			
913	—	口		○		沈線			M－47①	(Ⅱ)－4
914	—	口		○		沈線			M－48	(Ⅱ)－10
915	—	口		○		沈線			J－3　赤褐色砂層	フ－3
916	—	口		○		沈線			B－1　白シマ縄文層	E－5
917	—	口		○		沈線			J－2　縄文②	13－2
918	—	口		○		沈線			J－3　縄文㊦	P-128
第57図 919	162-(2)	口		○		沈線			K－3　縄文③	イ－4
920	162-(2)	口		○		沈線			C－1　白シマ縄文層	ヨ－45
921	—	口		○		沈線			A－1　白シマ縄文層	ヨ－43
922	162-(2)	口		○		沈線			L－3　縄文③	2－3
923	163-(1)	口		○		沈線	沈線		K－3　縄文①	D－2
924	162-(2)	体		○		沈線			J－3　赤褐色砂層	Y－29
925	—	口		○		口唇部－刻目 沈線			H・I－3　縄文下層	G－56
926	162-(2)	口		○		沈線			B－1　白シマ縄文層	P-105
927	—	口		○		沈線			C－51　青灰色砂(2)	(Ⅲ)－27
928	162-(2)	口		○		沈線			G－2　赤茶縄文層	5－4
929	162-(2)	口		○		沈線			I－3　縄文①	タ－7
930	—	口		○		沈線			J－3　縄文②	C－21
931	—	口		○		沈線			J－2　SK01	ヘ－30
第58図 932	—	口		○		———			N－46(1)	(Ⅵ)－16
933	—	口		○		———			G－51　第4層(1)	(Ⅳ)－1
934	—	口		○		———			I－3　縄文①	ワ－18
935	—	口		○		———			I－3　縄文③	ワ－6
936	—	口		○		———			K－3　縄文④	ワ－8
937	—	口		○					E－2　シマ下層	ワ－13
第59図 938	—	口		○		———			G－51　第4層(1)	(Ⅳ)－3
939	—	口		○		———			H・I－3　縄文層	ワ－5
940	—	口		○		———			A－0　縄文層	ワ－10
941	—	口		○		———			I－3　縄文①	ワ－17
942	—	口		○		———			H－3　赤茶縄文層	お－13
943	—	口		○		———			F－3　赤茶縄文層	モ－46

挿図番号	図版番号	部位	地文			文様		備考	出土地点	遺物番号
			縄文	条痕	その他不明	外面	内面			
第60図 944	—	口		○		———			Ⅰ－3 縄文③	ワ－1
945	—	口		○		———			Ⅰ－3 縄文一括	ワ－4
946	—	口		○		———			K－3 縄文①	ワ－29
947	—	口		○		———			C－1 白シマ縄文層	ワ－9
948	—	口		○		———			K－3 赤褐色砂層	ワ－11
949	—	口		○		口唇部－刻目			E－51 粗砂	あ－4
第61図 950	—	口		○		———			J－2 縄文①	ワ－19
951	—	口		○		———			H・Ⅰ－2 縄文(下)	ワ－16
952	—	口		○		———			H－30 縄文層	あ－3
953	—	口		○		———			Ⅰ－3 縄文③	ワ－3
954	—	口		○		———			D－2 黄シマ縄文層	ワ－12
955	—	口		○		———			K－3 縄文③ Ⅰ－3 縄文①	ワ－2
956	—	口		○		———			Ⅰ－2 縄文②	ワ－15
957	—	口		○		———			N－48 ①	あ－19
958	—	口		○		———			M－48・49縄文集中層	あ－20
第62図 959	—	口		○		———			J－38 第6層	あ－1
960	—	口		○		———			K－39 第6層(上)	あ－2
961	—	口		○		———			N－49 包含層	お－11
962	—	口		○		———			C－51 青灰色砂(2)	(Ⅷ)－13
963	—	口		○		口唇部－刻目			H－3 赤茶縄文層	お－9
964	—	口		○		口唇部－刻目			K－3 縄文①	エ－9
965	—	口		○		口唇部－刻目			Ⅰ－2 縄文②	ム－ヘ
966	—	口		○		口唇部－刻目			Ⅰ－3 赤茶縄文層	キ－29
967	—	口		○		口唇部－刻目			Ⅰ－3 縄文①	ム－ホ
968	—	口		○		口唇部－刻目			G－51 第4層(1)	(Ⅳ)－2
第63図 969	—	口		○		口唇部－指頭圧痕			C－2 黄シマ縄文層	ノ－1
970	—	口		○		口唇部－指頭圧痕			C－2 黄シマ縄文層	ノ－5
971	—	口		○		口唇部－刻目			M－38 A	38－3
972	—	口		○		口唇部－刻目			J－2 SK01	ヘ－5
973	—	口		○		口唇部－竹管文			P－38 黒色土上	38－4
974	—	口		○		口唇部－竹管文			M－48 ①	(Ⅲ)－16

挿図番号	図版番号	部位	地文			文様		備考	出土地点	遺物番号
			縄文	条痕	その他不明	外面	内面			
975	－	口		○		口唇部－刻目＋刺突文			Ⅰ－3　縄文層	D－63
976	－	口		○		口唇部－刻目			J－3　縄文②	D－54
977	－	口		○		口唇部－刻目			L－3　縄文③	D－79
978	－	口		○		―――		焼成前穿孔	K－37　第6層(上)	(N)－6
第64図979	－	－		○		刺突文			F－30　第6層	お－6
980	163-(2)	－		○		沈線		把手？	不明	お－30
981	163-(2)	－	○			沈線			K－44　第3層下	お－2
982	163-(2)	土錘			○	―――			Ⅰ－11第2層下部下層	

第２表　縄文時代石鏃観察表

挿図番号	図版番号	計測値 A 長さ(cm)	B 幅(cm)	C 厚さ(cm)	えぐりD 長さ(cm)	えぐりE 幅(cm)	重さ(g)	残存度	備考	出土地点	遺物番号
第65図1	164-(1)	1.53	1.21	0.30			0.5	完		ヤケヤマ東 K－3　縄文層④	87
2	〃	1.80	1.60	0.31			0.7	完		ヤケヤマ東 H－3　赤茶縄文層	84
3	〃	1.30	1.85	0.27			0.6	中　基		ヤケヤマ東 K－3　縄文④	81
4	〃	2.45	2.03	0.50			2.2	先・中		ヤケヤマ東 L－3　黒褐色縄文③	72
5	〃	2.20	2.00	0.29			1.5	完		F－33　3層	250
6	〃	2.30	1.70	0.20			0.8	先・中		J－30　第6層	270
7	〃	1.85	1.50	0.30			0.7	先・中		ヤケヤマ東 K－3　赤褐色砂層	86
8	〃	2.10	1.60	0.20			0.7	先・中		不明	248
9	〃	1.92	1.60	0.25			0.7	完		ヤケヤマ東 G－3　赤褐色砂層	77
10	〃	2.00	1.70	0.31			1.1	中		ヤケヤマ東 H－3　赤茶縄文層	165
11	〃	2.41	1.50	0.30			0.8	先・中		ヤケヤマ東 E－2　白しま縄文層	66
12	〃	2.90	2.10	0.65			3.6	完		ヤケヤマ東アゼ H・I－3　縄文層	134
13	〃	2.85	1.90	0.40			1.8	完		ヤケヤマ東 F－3　赤茶縄文層	142
14	〃	1.90	2.20	0.50			1.8	中・基		ヤケヤマ東 F－3　赤茶縄文層	138
15	〃	1.60	2.20	0.25			1.1	中・基		ヤケヤマ東 K－3　縄文④	3
16	〃	2.20	1.50	0.20			0.7	完		ヤケヤマ東 F－2　赤茶縄文層	111
17	〃	2.20	1.50	0.32			0.8	中・基		ヤケヤマ東 H－2　赤茶縄文層	185
18	〃	2.10	1.40	0.25			0.7	中・基		ヤケヤマ東 H－3　赤茶縄文層	178
19	〃	2.25	1.60	0.35			1.4	中・基		ヤケヤマ東 K－3　縄文③	97
20	〃	2.32	1.45	0.40			1.1	完		ヤケヤマ東 G－2　白しま縄文層	85
21	〃	1.80	1.20	0.30			0.5	中・基		ヤケヤマ東 G－3　赤茶縄文層	141
22	〃	2.70	2.10	0.35			1.9	完		ヤケヤマ東 I－3　黒色縄文①	61
23	〃	1.90	1.65	0.42			1.2	完		ヤケヤマ東 黒縄文層	76
24	〃	1.82	1.40	0.32			1.0	完		ヤケヤマ東 G－2　白しま縄文層	108
25	164-(1)	2.40	1.55	0.30			1.1	先・中		ヤケヤマ東 H－3　赤茶縄文層	132
26	〃	2.60	2.0	0.4			1.6	完		ヤケヤマ東 F－3　赤茶縄文層	13
27	〃	2.25	1.35	0.31			0.7	中・基		ヤケヤマ東 K－3　縄文④	49
28	〃	2.20	1.40	0.35			0.9	完		ヤケヤマ東アゼ H・I－3　縄文層	41
29	〃	1.40	1.60	0.30			0.5	中・基		ヤケヤマ東 K－3　赤褐色砂層	124
30	〃	2.30	1.70	0.4			1.2	完		ヤケヤマ東 E－2　白しま縄文層	9

挿図番号	図版番号	計測値 A 長さ(cm)	B 幅(cm)	C 厚さ(cm)	えぐりD 長さ(cm)	えぐりE 幅(cm)	重さ(g)	残存度	備考	出土地点	遺物番号
31	〃	2.25	1.70	0.25			0.9	完		ヤケヤマ東 K－3　縄文④	65
32	〃	1.60	1.60	0.32			0.7	中・基		ヤケヤマ東アゼ H・I－3　縄文層	148
第66図 33	164-(2)	2.30	1.45	0.38			1.2	中・基		ヤケヤマ東H・I－2 畦間第3層	118
34	〃	2.30	1.70	0.25			1.2	中・基		ヤケヤマ東 L－3　赤褐色砂層	4
35	〃	2.00	1.75	0.20			0.8	先・中		K－32　4層	243
36	〃	2.15	1.70	0.30			1.5	完		ヤケヤマ東 H－3　第1－3層	64
37	〃	2.30	1.65	0.20			1.0	先・中		ヤケヤマ東 淡赤褐色砂層	60
38	〃	2.20	1.60	0.30			1.3	中・基		ヤケヤマ東 E－3（しま縄文？）	36
39	〃	1.90	1.25	0.35			0.7	中		ヤケヤマ東 H－2・3　第9層	12
40	〃	2.80	2.00	0.50			2.0	完		ヤケヤマ東 E－3　しま縄文層	98
41	〃	2.60	1.80	0.30			1.3	完		K－29　灰白黄褐色	242
42	〃	2.55	1.90	0.41			2.2	完		ヤケヤマ東 K－3　黒色縄文②	94
43	〃	2.50	1.90	0.40			1.5	完	弥生？	B－10 第3層上（下部）	275
44	〃	2.85	1.5	0.3			1.7	完		ヤケヤマ東 L－3　赤褐色砂層	10
45	〃	3.2	1.8	0.35			2.2	完		ヤケヤマ東 E－2　しま下層	25
46	〃	3.85	1.8	0.30			2.2	完		ヤケヤマ東 K－3　4層	284
47	〃	1.75	2.15	0.42			1.6	基		ヤケヤマ東 L－3　赤褐色砂層	149
48	〃	4.10	2.30	0.60			4.1	先・中		ヤケヤマ東 L－3　アゼ　縄文㊦	187
49	〃	3.0	2.50	0.55			3.5	完		ヤケヤマ東 B－1　白しま縄文層	135
50	〃	2.85	1.80	0.20			1.2	先・中		ヤケヤマ東 G－2　赤茶縄文層	48
51	〃	2.80	2.35	0.35			1.5	先・中		ヤケヤマ東 C－2　黄しま縄文層	56
52	〃	2.20	1.80	0.2			0.7	先・中		ヤケヤマ東 H－2　赤茶縄文	16
53	〃	2.75	2.05	0.3			1.3	先・中		ヤケヤマ東 K－3　黒色縄文②	11
54	〃	3.10	1.90	2.80			1.5	先・中		K－31　第6層	271
55	〃	2.45	1.6	0.3			1.0	先・中		ヤケヤマ東 H－3　赤茶縄文層	15
56	〃	2.95	1.6	0.31			1.0	先・中		ヤケヤマ東H・I－3 ベルト内PitNo.2	57
57	〃	2.0	1.5	0.35			0.9	先・中		ヤケヤマ東 G－2　赤茶縄文層	19
58	〃	2.0	1.6	0.24			0.7	先・中		ヤケヤマ東 K－3　縄文③	53
59	〃	1.98	2.05	0.30			1.2	先・中		ヤケヤマ東 K－3　縄文層④	58
60	〃	1.90	1.35	0.20			0.6	中・基		ヤケヤマ東 K－3　縄文③	104
61	〃	2.45	1.65	0.25			1.0	先・中		ヤケヤマ東 K－2　縄文層①，②	110

挿図番号	図版番号	計測値 A 長さ(cm)	B 幅(cm)	C 厚さ(cm)	えぐりD 長さ(cm)	えぐりE 幅(cm)	重さ(g)	残存度	備考	出土地点	遺物番号
第67図 62	165-(1)	1.15	1.20	0.2	0.1	0.7	0.2	完		ヤケヤマ東 K－3 赤褐色砂層	47
63	〃	2.0	1.65	0.3	0.2	1.3	0.7	完		J－53 第2層明茶褐色砂層	256
64	〃	2.20	1.90	0.3	0.15	1.3	1.1	先・中		ヤケヤマ東 K－3 黒色古式土師層	100
65	〃	1.70	1.75	0.32			0.6	中・基		H－30 包含層	253
66	〃	1.40	1.0	0.25	0.15	0.8	0.6	完		ヤケヤマ東 K－3 淡赤褐色砂層	176
67	〃	1.70	1.20	0.31	0.25	0.9	0.4	先・中		ヤケヤマ東 J－3 アゼ 縄文④	174
68	〃	21.0	1.46	0.31	0.3	1.1	0.4	中・基		ヤケヤマ東 K－3 縄文④	92
69	〃	1.75	1.55	0.29	0.2	1.1	0.6	中・基		ヤケヤマ東 L－2 赤褐色砂層	54
70	〃	2.20	1.6	0.25	0.35	1.35	0.7	完		ヤケヤマ東 L－3 赤褐色砂層	27
71	〃	2.50	1.6	0.4	0.35	1.0	1.0	先・中		K－38 第6層	269
72	〃	2.70	1.75	0.4	0.4	1.5	1.5	先・中		ヤケヤマ東 L－3 赤褐色砂層	156
73		2.30	1.7	0.3	0.2	1.45	0.8	完		ヤケヤマ東 H－2・3 アゼ 第5層縄文層	34
74	165－(1)	1.95	1.85	0.28	0.15	1.0	0.9	中・基		ヤケヤマ東 L－3 縄文④	154
75	〃	2.60	1.6	0.3	0.3	1.3	0.9	先・中		ヤケヤマ東 アゼ H・I－3 縄文層	26
76	〃	2.34	1.65	0.3	0.5	1.5	0.7	完		ヤケヤマ東H・I－2 アゼ 縄文(下)	70
77	〃	2.25	1.7	0.3	0.5	1.6	1.0	中・基		ヤケヤマ東H・I－3 アゼ 第5層縄文層	7
78		2.45	1.75	0.3	0.3	1.3	1.0	完		ヤケヤマ東 K－3 赤褐色砂層	46
79	165－(1)	2.20	1.50	0.41	0.45	1.4	0.9	完		ヤケヤマ東 J－3 PitNo.8	71
80	〃	1.60	1.75	0.3	0.3	1.5	0.6	中・基		ヤケヤマ東3アゼ H・I－3 縄文層	112
81	〃	2.0	1.6	0.42	0.3	1.4	0.9	中・基		ヤケヤマ東 E－3 しま縄文層	123
82	〃	2.6	1.5	0.3	0.55	1.1	0.8	完		I－53 明茶褐色砂層	255
83	〃	2.0	1.4	0.3	0.45	1.1	0.6	中・基		ヤケヤマ東 L－3 黒色縄文③	169
84	〃	2.45	1.5	0.3	0.4	1.5	0.8	中		ヤケヤマ東 アゼ H・I－3 縄文層	160
85	〃	1.7	1.45	0.25	0.2	1.15	0.7	中・基		J－52 第2層A	244
86	〃	2.0	1.3	0.2	0.3	1.2	0.5	完		ヤケヤマ東 J－3 赤褐色砂層	43
87	〃	2.0	1.4	0.3	0.3	1.2	0.5	中		ヤケヤマ東 C－1 第5層③	261
88	〃	2.65	1.6	0.35	0.25	1.4	1.2	中		ヤケヤマ東 K－3 縄文層④	31
89	〃	3.05	1.55	0.3	0.4	1.3	1.0	先・中		Q－38 第3層	273
90		2.5	1.6	0.4	0.5	1.4	0.8	完		ヤケヤマ東 G－3 赤茶縄文層	32
91	165-(1)	2.55	1.35	0.31	0.3	1.0	0.7	先・中		ヤケヤマ東 G－2 赤茶縄文層	51
92	〃	2.5	1.5	0.25	0.65	1.35	0.7	完		K－54 縄文層	191

挿図番号	図版番号	計測値 A 長さ(cm)	B 幅 (cm)	C 厚さ(cm)	えぐりD 長さ(cm)	えぐりE 幅 (cm)	重さ(g)	残存度	備考	出土地点	遺物番号
93	〃	2.8	1.7	0.32	0.4	1.55	0.9	完		ヤケヤマ東 H－3　赤茶縄文層	131
94		2.5	1.5	0.3	0.3	1.3	0.6	完		ヤケヤマ東 H－3　赤茶縄文層	42
95	165－(1)	2.15	1.3	0.22	0.45	1.2	0.3	先・中		ヤケヤマ東 K－3　赤褐色砂層	99
96	〃	2.30	1.4	0.3	0.55	1.3	0.5	先・中		ヤケヤマ東　アゼ H・I－3　縄文層	122
97	〃	2.13	1.25	0.21	0.4	1.2	0.4	完		ヤケヤマ東 K－3　縄文④	88
第68図98	165-(2)	2.7	1.2	0.5	0.3	0.75	1.0	中		ヤケヤマ東 I－3　黒色縄文①	126
99	〃	2.1	1.15	0.2	0.4	1.0	0.4	中		ヤケヤマ東 K－3　縄文④	173
100	〃	3.0	1.65	0.4	0.5	1.0	1.1	先・中		ヤケヤマ東 E－3　赤茶縄文層	125
101	〃	2.4	1.4	0.25	0.3	1.2	0.7	中		K－34　第6層	268
102	〃	2.1	1.25	0.22	0.4	0.9	0.4	中		ヤケヤマ東 I－3　南端土器集中	172
103	〃	3.1	2.15	0.4	0.4	2.0	1.6	完		L－48　縄文層	283
104	〃	1.15	1.4	0.2	0.35	0.85	0.3	完		ヤケヤマ東 J－3　アゼ縄文㊦	120
105	〃	1.4	1.3	0.19	0.5	1.0	0.3	完		K－31　2A層（中世）	68
106	〃	1.5	1.45	0.3	0.35	1.25	0.4	完		ヤケヤマ東 G－3　赤茶縄文層	180
107	〃	1.7	1.65	0.45	0.35	1.6	0.8	完		ヤケヤマ東 G－26　しま縄文層	115
108	〃	1.65	1.9	0.3	0.35	1.75	0.6	完		ヤケヤマ東 H－3　赤茶縄文層	137
109	〃	1.9	1.8	0.35	0.45	1.3	1.2	完		ヤケヤマ東 L－3　赤褐色砂層	37
110	〃	1.7	1.9	0.45	0.3	1.8	0.7	完		ヤケヤマ東H・I－3 アゼ　第5層　縄文層	193
111	〃	1.9	1.8	0.35	0.35	1.55	0.7	完		ヤケヤマ東H・I－3 アゼ　第5層　縄文層	38
112	〃	2.0	1.7	0.3	0.3	1.6	0.9	中・基		ヤケヤマ東 H－3　赤茶縄文層	30
113	〃	1.7	1.6	0.3	0.3	1.3	0.6	完		ヤケヤマ東 F－3　赤茶縄文層	127
114	〃	2.0	1.6	0.4	0.3	1.1	0.9	完		ヤケヤマ東 G－2　白しま縄文層	33
115	〃	1.65	1.65	0.15	0.5	1.4	0.5	中・基		ヤケヤマ東 K－3　縄文④	114
116	〃	1.75	1.6	0.3	0.2	1.35	0.6	完		ヤケヤマ東　アゼ H・I－3　縄文層	130
117	〃	1.9	0.9	0.1	0.25	0.75	0.2	完		ヤケヤマ東 K－3　縄文層④	162
118	〃	2.1	1.0	0.32	0.3	0.9	0.4	完		ヤケヤマ東 I－3　黒縄文層①	196
119	〃	2.1	1.15	0.2	0.4	0.8	0.4	完		ヤケヤマ東 L－3　赤褐色砂層	8
120	〃	1.65	1.25	0.25	0.4	1.1	0.3	中・基		S－46　第3層	195
121	〃	1.9	1.2	0.3	0.3	1.1	0.5	完		ヤケヤマ東 E－3　しま縄文層	168
122	〃	1.55	1.35	0.22	0.35	1.1	0.4	中・基		ヤケヤマ東 K－3　縄文④	95
123	〃	1.8	1.3	0.3	0.3	1.2	0.5	中	弥生？	H－26 土器集中上層　N－3	279

挿図番号	図版番号	計測値 A 長さ(cm)	B 幅(cm)	C 厚さ(cm)	えぐりD 長さ(cm)	えぐりE 幅(cm)	重さ(g)	残存度	備考	出土地点	遺物番号
124	〃	2.0	1.15	0.2	0.35	0.6	0.4	先・中		ヤケヤマ東H・I－3 アゼ 第5層 縄文層	179
125	〃	1.90	1.05	0.20	0.45	0.65	0.3	完		ヤケヤマ東 K－3 縄文③	158
126	〃	2.4	1.10	0.26	0.3	0.7	0.5	完		K－49	82
127	〃	1.5	1.3	0.3	0.15	1.0	0.4	中・基		ヤケヤマ東 H－2 赤茶縄文層	198
128	〃	1.7	1.4	0.25	0.3	1.35	0.4	完		ヤケヤマ東 K－3 黄色砂層	89
129	〃	2.0	1.6	0.3	0.35	1.45	0.7	完		ヤケヤマ東 L－3 黒色縄文③	170
130	〃	1.25	1.7	0.25			0.7	中		ヤケヤマ東 L－3 赤褐色砂層	17
131	〃	1.9	1.4	0.3			0.7	中		不明	251
132	〃	2.05	1.55	0.3	0.2	1.0	0.9	完		ヤケヤマ東 K－3 黒色古式土師層	23
133	〃	2.0	1.35	0.32	0.4	0.9	0.7	中		ヤケヤマ東 G－3 赤茶縄文層	186
134	〃	2.0	1.45	0.45	0.2	1.0	0.9	完		ヤケヤマ東 L－3 黒色縄文③	133
135	〃	1.98	1.4	0.25	0.2	0.5	0.5	先・中		ヤケヤマ東 I－2 縄文②	59
136	〃	1.9	1.25	0.4	0.3	1.15	0.8	中・基		N－51 第4層	249
137	〃	2.1	1.45	0.3	0.3	1.0	0.7	完		ヤケヤマ東 K－3 ④	147
138	〃	1.8	1.3	0.2	0.25	1.1	0.4	完		ヤケヤマ東 F－3 赤茶縄文層	83
第69図 139	166-(1)	2.4	2.35	0.4	0.4	2.2	2.0	完	弥生？	F－24 第2層	233
140	〃	3.4	2.3	0.53	0.45	1.45	4.1	完		ヤケヤマ東 H－2 古式土師層	274
141	〃	2.0	2.2	0.35	0.45	1.45	1.3	中		ヤケヤマ東 アゼ H・I－3 縄文層	106
142	〃	2.7	1.6	0.4	0.4	1.35	1.4	完	弥生？	L－27	245
143	〃	3.4	2.2	0.7	0.2	1.65	4.5	完		ヤケヤマ東 L－3 黒色縄文③	40
144	〃	2.5	1.92	0.5	0.4	1.4	2.2	完		ヤケヤマ東 K－3 第5層（古式土師層）	282
145	〃	2.2	1.4	0.2	0.4	1.2	0.6	完	弥生？	F－30 耕作土(下)	247
146	〃	2.0	1.6	0.4	0.5	1.05	0.8	中・基		ヤケヤマ東 F－2 白しま縄文層	164
147	〃	2.7	1.95	0.35	0.6	1.5	1.4	完		ヤケヤマ東 I－3 南端土器集中	93
148	〃	2.45	1.85	0.4	0.2	1.5	1.5	完		ヤケヤマ東 F－3 赤茶縄文層	67
149	〃	2.3	1.8	0.4	0.25	1.15	1.5	完		ヤケヤマ東 I－3 縄文②	96
150	〃	1.6	1.8	0.3	0.2	1.3	0.9	中・基		ヤケヤマ東 I－3 黒縄文層①	29
151	〃	2.7	1.8	0.4	0.35	1.45	1.2	先・中		ヤケヤマ東 I－3 南端土器集中	79
152	〃	2.3	1.6	0.22	0.45	1.0	0.8	完		ヤケヤマ東 K－3 縄文③	157
153	〃	1.8	1.4	0.2	0.45	1.0	0.5	先・中		ヤケヤマ東 アゼ H・I－3 縄文層	1
154	〃	2.2	1.75	0.3	0.4	1.2	1.3	完		ヤケヤマ東 F－2 しま下層	2

挿図番号	図版番号	計測値 A 長さ(cm)	B 幅(cm)	C 厚さ(cm)	えぐりD 長さ(cm)	えぐりE 幅(cm)	重さ(g)	残存度	備考	出土地点	遺物番号
155	〃	2.29	1.7	0.21	0.5	1.3	0.6	先・中		D－49 東壁 褐色沈でん層下	62
156	〃	1.75	1.55	0.3	0.6	1.3	0.5	中・基		ヤケヤマ東 I－3 南端土器集中	116
157	〃	1.9	1.25	0.4	0.4	0.95	0.4	完		ヤケヤマ東 I－3 南端土器集中	194
158	〃	1.6	1.5	0.25	0.4	1.2	0.4	中		ヤケヤマ東 H－3 黄色しま縄文層	103
159	〃	2.8	1.5	0.2	0.2	1.1	0.8	完		ヤケヤマ東 J－2 古式土師層	258
160	〃	3.1	1.4	0.3	0.4	0.9	1.1	先・中		ヤケヤマ東 L－3 赤褐色砂層	259
161	〃	3.0	1.9	0.3	0.6	1.05	0.7	中		ヤケヤマ東 F－2 白しま縄文層	35
162	〃	2.1	1.3	0.2	0.35	1.0	0.4	先・中		ヤケヤマ東 I－2 縄文②	44
163	〃	3.0	1.85	0.4	0.3	1.7	1.7	完		ヤケヤマ東 H－3 赤茶縄文層	113
164	〃	2.25	1.7	0.4	0.45	1.4	0.9	中		ヤケヤマ東 アゼ H・I－3 縄文層	140
165	〃	2.0	1.4	0.2	0.3	1.3	0.4	完	弥生？	F－29 Pit	254
166	〃	2.6	1.1	0.4	0.35	1.0	0.7	完		ヤケヤマ東 D－2 黄しま縄文層	183
167	〃	2.45	1.2	0.2	0.35	0.9	0.6	中		ヤケヤマ東 C－2 黄しま縄文層	192
168	〃	1.9	1.45	0.3	0.5	1.0	0.5	中・基		ヤケヤマ東 K－3 赤褐色砂層	121
169	〃	1.85	1.1	0.3	0.5	0.9	0.3	先・中		ヤケヤマ東 I－3 南端土器集中	197
170	〃	2.2	1.15	0.3	0.4	1.1	0.6	中・基		ヤケヤマ東 J－3 アゼ 縄文㊤	119
第70図 171	166-(2)	2.0	1.7	0.25	0.3	1.65	0.8	完		ヤケヤマ東 J－3 南端土坑	117
172	〃	2.1	1.5	0.2	0.7	1.15	0.5	中・基		ヤケヤマ東 E－3 しま縄文層	73
173	〃	2.5	1.9	0.3	0.4	1.6	1.1	中・基		ヤケヤマ東 H－2 赤茶縄文層	28
174	〃	2.0	1.55	0.35			0.9	完		ヤケヤマ東H・I－3 アゼ第5層 縄文層	150
175	〃	1.5	1.0	0.3	0.3	0.7	0.4	完		ヤケヤマ東 K－3 赤褐色砂層	129
176	〃	1.5	1.1	0.4	0.25	0.9	0.5	完		ヤケヤマ東 G－2 白しま縄文層	136
177	〃	2.17	1.45	0.4	0.45	1.3	1.0	完		ヤケヤマ東 K－3 縄文④	101
178	〃	2.1	1.6	0.3	0.45	1.4	0.9	完		ヤケヤマ東 アゼ H・I－3 縄文層	128
179	〃	2.5	1.4	0.45			1.4	完		ヤケヤマ東H・I－3 アゼ 第5層 縄文層	14
180	〃	1.5	1.7	0.3	0.35	1.2	0.7	中・基		ヤケヤマ東 アゼ H・I－3 縄文層	167
181	〃	2.8	1.9	0.25	0.35	1.6	2.1	完		ヤケヤマ東 F－3 SK－02	18
182	〃	2.55	2.0	0.35			2.3	中・基		ヤケヤマ東 G－3 赤茶縄文層	153
183	〃	5.8	2.5	0.4	0.4	2.4	6.3	完	弥生？	J－28 第5層上	272
184	〃	4.5	2.65	0.55	0.3	1.8	7.3	完		ヤケヤマ東 L－3 アゼ 縄文 ㊤	78
185	〃	3.85	2.8	0.5			6.1	中		ヤケヤマ東 H－3 赤茶縄文層	152

挿図番号	図版番号	計測値 A 長さ(cm)	B 幅(cm)	C 厚さ(cm)	えぐりD 長さ(cm)	えぐりE 幅(cm)	重さ(g)	残存度	備考	出土地点	遺物番号
第71図 186	〃	2.95	1.55	0.55			2.6	完		ヤケヤマ東 J－2 縄文④ 赤褐色砂層	139
187	〃	2.72	1.55	0.35			1.5	完		ヤケヤマ東 F－3 赤茶縄文層（集石周辺）	151
188	〃	2.5	1.25	0.4			1.2	完		ヤケヤマ東 L－3 赤褐色砂層	90
189	〃	3.7	1.1	0.4			1.6	完		ヤケヤマ東 L－3 淡赤褐色砂層	184
190	〃	2.9	1.1	0.6			2.0	完		ヤケヤマ東 アゼ H・I－3 縄文層	163
191	〃	2.9	1.15	0.37			1.7	先・中		ヤケヤマ東 G－3 落ち込み下（古土～縄文）	74
192	〃	2.5	0.9	0.4			0.8	中		ヤケヤマ東 K－3 縄文④	181
193	〃	2.3	0.8	0.2			0.6	完		ヤケヤマ東H・I－3 アゼ 縄文層 (下)	277
194	〃	1.1	2.5	0.5			1.6	完		ヤケヤマ東H・I－3 アゼ 縄文下層	175
195	〃	4.2	1.25	0.42			2.5	先・中		ヤケヤマ東 L－3 黒色縄文③	161
196	〃	4.75	1.85	0.55			5.1	先・中		ヤケヤマ東 K－3 縄文層④	75
197	〃	4.1	1.7	0.4			3.4	先・中		ヤケヤマ東 L－3 赤褐色砂層	146
198	〃	4.2	2.0	0.6			4.3	先・中		N－54 第3層	80
199	〃	4.25	1.85	0.37			3.1	完		R－53 第1～2層	257
200	〃	1.5	1.8	0.36			1.8	完		ヤケヤマ東 G－3 赤茶縄文層	166
201	〃	2.85	1.9	0.4			2.1	完		ヤケヤマ東 K－3 縄文④	6

第3表　縄文時代石槍・尖頭器観察表

挿図番号	図版番号	形態	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	出土地点	遺物番号
第72図 1	188-(1)	石槍	17.05	3.5	1.2	75.0		ヤケヤマ東Ⅰ－2 バイラン縄文層	1
2	〃	尖頭器	5.0	1.5	0.7	4.8		ヤケヤマ東 K－3古式土師層	2
3	〃	〃	4.2	2.1	0.6	4.3	有舌	ヤケヤマ東 H－3第4層	3

第4表　縄文時代矢柄研磨器観察表

挿図番号	図版番号	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(cm)	備考	出土地点	遺物番号
第73図 1	344	10.7	4.9	2.65	270.0	片面一条	T－51 SK－1 (木桶)	1
2	344	8.2	4.2	2.6	120.0	片面数条	K－35～38	2

第５表　縄文時代スクレイパー観察表

挿図番号	図版番号	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	出土地点	遺物番号
第74図 1	170-(1)	7.3	10.5	1.2	97.5	自然面を残す 弥生の可能性あり	Ⅰ－16　第２層	72
2	〃	6.0	9.2	1.1	48.0	弥生の可能性あり	Ｃ－12　弥生層	71
3	〃	5.0	8.25	0.7	38.4	弥生の可能性あり	Ｄ－15　第４層	60
4	〃	4.15	8.1	1.0	45.7	弥生の可能性あり	Ｅ－９　弥生上層	64
5	〃	4.3	8.1	0.75	31.5	自然面を残す 弥生の可能性あり	Ⅰ－18　第２層	65
第75図 6	170-(2)	4.8	9.0	0.8	37.6	自然面を残す 弥生の可能性あり	Ⅰ－18　第１層	68
7	〃	4.3	8.8	0.6	29.8	弥生の可能性あり	Ｄ－12　弥生上層	70
8	〃	3.0	3.45	0.8	11.5	自然面を残す 弥生の可能性あり	Ｄ－10　黄褐色砂層	66
9	〃	4.4	7.25	0.7	28.0	弥生の可能性あり	Ｅ－８　第５層　土面	69
10	〃	5.1	4.8	0.4	13.5	弥生の可能性あり	Ⅰ－16　第２層	61
11	〃	6.55	8.9	1.6	120.0	自然面を残す 弥生の可能性あり	Ｄ－12　弥生上層 赤褐色砂層－鉄分沈着層	74
12	171-(1)	5.1	残 8.3	1.2	58.9	自然面を残す 弥生の可能性あり	Ｆ－15 サヌカイト集中12	73
13	〃	6.1	7.75	1.0	53.8	弥生の可能性あり	Ｅ－11　弥生上層	62
第76図 14	〃	7.4	7.2	0.45	31.6	弥生の可能性あり	Ｄ－15　第４層	93
15	〃	4.1	8.1	1.0	22.5	弥生の可能性あり	Ｆ－16　混入土	92
16	〃	4.9	7.05	1.2	47.5	弥生の可能性あり	Ⅰ－18　第２層	67
17	〃	3.75	7.2	1.45	34.2	弥生の可能性あり	Ｇ－３　第２層下部	90
18	171-(2)	3.85	5.65	0.7	22.2	弥生の可能性あり	Ⅰ－15　第２層	63
19	〃	4.0	7.0	0.85	31.5	弥生の可能性あり	Ｄ－13　弥生層	86
20	〃	3.3	4.6	0.5	8.6	弥生の可能性あり	Ｅ－11　弥生下層	87
21	171-(2)	4.6	6.9	0.75	24.2	自然面を残す 弥生の可能性あり	Ｅ－17　第１層	89
第77図 22	〃	6.2	15.0	0.9	60.8		ヤケヤマ東 Ｊ－２　縄文①	110
23	172-(1)	8.3	10.25	1.1	97.0		ヤケヤマ東Ｈ・Ⅰ－２ アゼ　縄文（下）	111
24	〃	6.5	10.5	1.7	100.0		ヤケヤマ東 Ｋ－３　縄文④	112
25	〃	5.4	8.2	1.2	67.7	自然面を残す	ヤケヤマ東 Ｇ－２　白しま縄文層	113
26	〃	6.4	7.7	1.0	52.4	自然面を残す	ヤケヤマ東 Ｋ－３　縄文④	114
第78図 27	172-(2)	4.85	7.75	0.85	32.2		ヤケヤマ東Ｌ－３ 赤褐色砂層	115
28	〃	6.0	6.9	1.2	65.4	自然面を残す	ヤケヤマ東Ｇ－２ 白しま縄文層	116
29	〃	3.75	4.4	0.55	10.2		ヤケヤマ東Ａ－１ 黄しま縄文層	98
30	〃	5.4	6.5	1.4	60.0	自然面を残す	ヤケヤマ東Ｌ－３ 赤褐色砂層	117